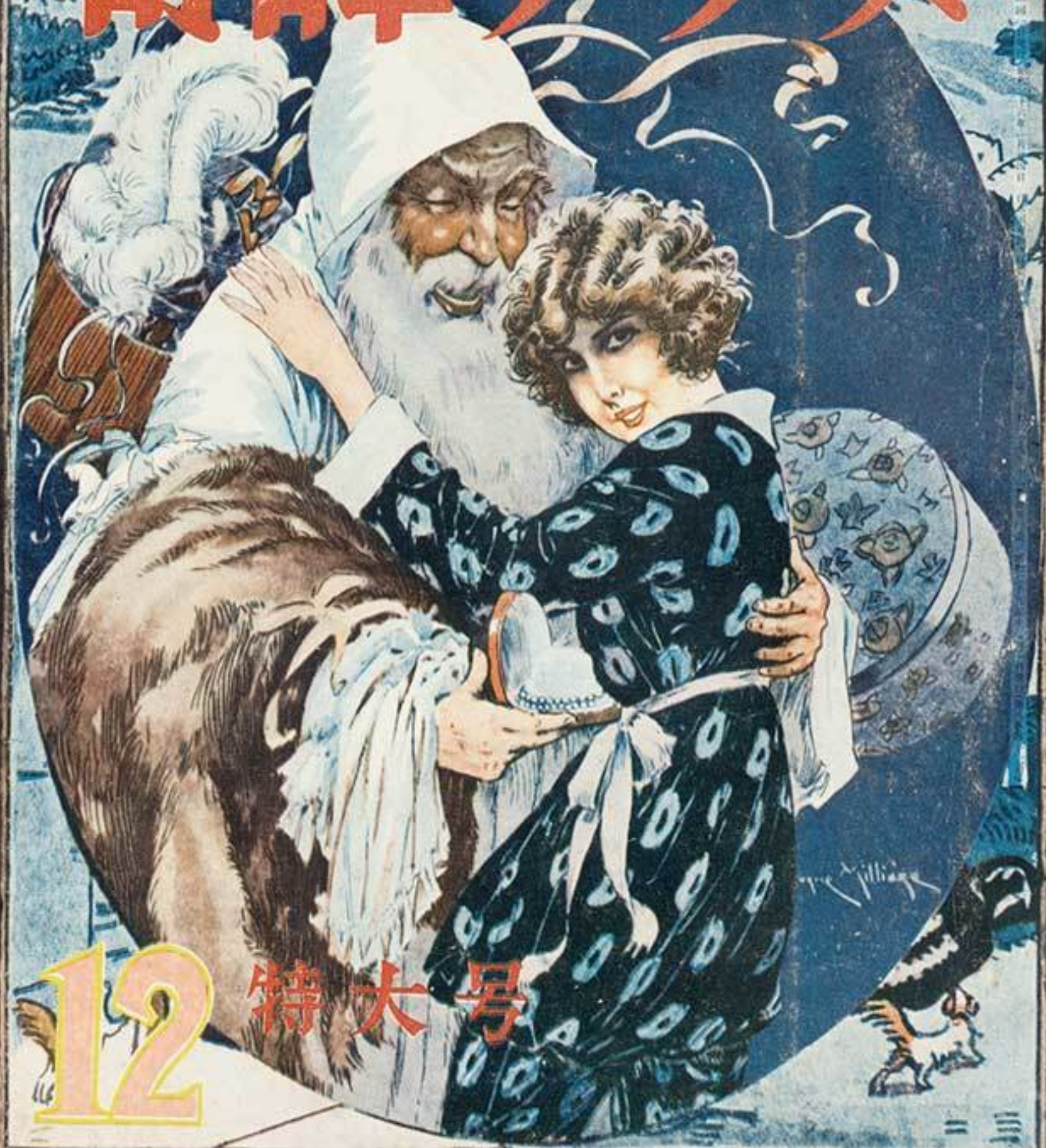


奇譚クラヌ



12 特大号

Pendant la Chasse

奇譚クラヌ

定價 百四拾円



●女体緊縛寫真優秀作●

各キヤビネ版 3枚1組 300円(送料共)

縋帯縛りの特選

アメリカ某社の注文によりそのアイデアを活かしたエキゾチックな緊縛のポーズ清新と奇抜を兼ね備えた野心作。

中富綾子嬢 股間縛り 3態

可憐純情の乙女、中富綾子嬢の柔肌に喰い込んだ荒縄の縄目、これぞ垂涎の股しぱり。

ローソク責め 3態

責め手の厳しい手は、情容赦なく燃える蠟燭が柔肌をやく、マゾ女の苦悶の表情と被虐の美しいポーズ。

後手高手小手 2面体

伊吹真佐子嬢
大鏡を利用して、高手小手の緊縛と胸にかゝった縄目とを同時に一枚の画面におさめたフォトマニア待望の珍品。

浅野末乃嬢 さるぐつわ 3態

ニューフェイス浅野末乃嬢の豊満な姿態にかゝった縄とさるぐつわ。

萩 千恵子嬢 海老責め 3態

ヤセ型の柔軟な姿態の千恵子嬢を二つ折りに曲げたエビ責めのポーズ、二本の足だけが宙に躍っている。

萩 千恵子嬢 猪吊り 3態

両手と両足を一つに括って吊り上げた猪吊り、こうして吊られていると、だんだんマゾ的な気持ちになつてくるわ、という萩千恵子嬢。

萩 千恵子嬢 レインコート 3態

レインコートを纏って後手に縛り上げられた美貌の萩嬢の美しい被虐の姿態。

萩 千恵子嬢 腰巻 3態

腰巻マニアの方々には是非この3態を味つて下さい、屈曲の多い優美な純日本的なポーズを取り揃えました。

萩 千恵子嬢 縋帯 3態

白い肌にまといつく縋帯の白さは妖しい倒錯美をかもし出している。縋帯による緊縛感と姿態美。

犬の折檻 三態
A、芸を仕込まれて
いるワン公
B、女王様を背にし
たワン公
C、さア、歩くのヨ
(首環とくさりで仕
込まれる)

足 舐 三態
A、椅子に腰掛けた
ルミ嬢が男の口へ足
を入れて
B、クローズ、アッ
プ、男が足を持つて
舐めようとして
C、男が足を舐めて

足 蹴 三態
A、ハイヒールで頭
を、蹴られていると
ころ
B、蹴り倒される男
C、後手に縛られた
男が、思うままに頭
をけられる

人間馬 三態
A、乗馬ズボンに乗
馬靴の女王を背に拍
車をかけられるとこ
ろ
B、鞭を加えられる
C、馬を走らせる

人間椅子 三態
A、胸の上へ灰皿を
置いて女王様の休息
の椅子となつて
B、人間ソファ
C、うずくまつて、
女王様に背中をかし
ているドレイ

新作 マゾ・フォト
春日ルミ嬢・構成
各キヤビネ版 三枚一組 三百円

鞭打ち 3態 (杉 美美嬢)
制服の女学生 (雲井久子嬢)
野外全裸の縛 (村田那美子嬢)
ナイロンの女体 (杉 美美嬢)
女が女を責める { 第一集
第二集

女体…緊縛

◎傑作写真集◎

本誌写真部特写
(全部送料共です)

【キヤビネ版 3枚1組 各200円】

灸責め 3態 (杉 美美嬢)
蒼盤責め 3態 (雲井久子嬢)
溪流の飛魚 (村田那美子嬢)
高手小手 3態 (木田雅子嬢)

坂口利子嬢 股間縛り 5態

キヤビネ版 5枚1組 500円
問題の股間縛り十数態の中
から、最も強烈で美しさの
ある五態を選び出しました

急襲 手札型15枚 1組 500円

連続十五枚続きで、女が縛
られて、さるぐつわをされ
るまでの過程を描いた優秀
作。

川端多奈子嬢 悦虐姿態集

第一集 [手札型] 300円
第二集 [七枚一組]
定評のあるマゾ女性多奈子
嬢の悦虐のポーズ

村田那美子嬢 悦虐姿態集

手札型 5枚1組 200円
さるぐつわ 3態
キヤビネ版 3枚1組 300円

中富綾子・並川トミ二嬢 二女連縛集

手札型 6枚1組 300円
自分から縛りのモデルを志
願してきた二人の乙女の連
縛ポーズ

伊吹真佐子嬢 椅子責め 5態

キヤビネ版 5枚1組 500円
十四貫三百の豊満な女体を
縦横に椅子上に縛りつけた

伊吹真佐子嬢 梯子責め 3態

キヤビネ版 3枚1組 200円
梯子に縛りつけて宙にうか
す女体に喰い込む縄目、サ
デイストの見果てぬ夢の一
つ。

三嬢連縛棒吊り (杉・坂口・村田の三嬢)

キヤビネ版 3枚1組 300円
これは誠に珍妙なフォトで
ある。企んで出来るもので
なく、偶然のチャンスが得
た面白い作品。

村田那美子 二嬢 坂口利子 半吊り 2態

キヤビネ版 2枚1組 200円
優美にして変化のある半吊
り

磔 (大好評傑作!)

第一組、キヤビネ 2枚1組 200円
台上の殉教者
キヤビネ版 2枚1組 200円

吊り 3態特集

(川端多奈子嬢)
キヤビネ版 3枚1組 500円
第一組 第二組
第三組 第四組

男性被縛写真

第三集 手札 5枚1組 300円
第四集 型 5枚1組 300円
男性マゾ写真
第一集キヤ 3枚1組 300円
第二集ビネ 3枚1組 300円

女性切腹擬態

写真シリーズ 8枚
キヤビネ版 8枚1組 600円

血紅使用の 切腹擬態写真

(第一集) (第二集)
各集手札型 6枚1組 300円

真刀を用いた 切腹擬態写真

手札型 6枚1組 300円
女性切腹姿態 (第二集)
手札型 6枚1組 300円

縛られた女ばかりの豪華アルバム

頒価 一部 五百円 (送料六十円)

各葉解説文句入、コロタイプ印刷

美しき縛しめ 第一集

全部未発表の緊縛女体十六態

容... 猿ぐつわ 紅と白 蠟燭責
雁字搦目 観念 芋虫
犠牲台 床の置物 鞭打
内... 目の綾 滑車吊 高小手
荒縄 くさり エビ責

縛られた女体の三十二ポーズ

(九人のモデルを駆使した未発表の秘作)

緊縛三十二態の豪華アルバム

辻村隆構成、塚本鉄三撮影

美しき縛しめ 第二集

◇責めの写真はほしいが、印画紙に焼付けたのは高くて困る、とおっしゃる方は、印画紙と変らぬ極鮮明コロタイプ印刷の、アルバムを是非お求め下さい。

頒価 一冊 五百円 (送料五十円)

晴雨『美人乱舞』

伊藤晴雨先生著並画菊版和装
美本 定価 四〇〇円 千二四

図版目次

▲人体時計 ▲天国の女 ▲美人燈 ▲島田髷のこわれる迄 ▲丸髷のこわれる迄 ▲美女のなやみ ▲崩れたる女 ▲鉄砲責にされる女 ▲火葬場異聞 ▲狒々に抱かれた美女 ▲死神につかれた女 ▲特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別読物として先人未発の貴重な春画文献五章十九項に互って詳説す。晴雨ファンに薦む。

◎沅腸フオート三態 第一集 第二集 第三集

キヤビネ判 各三枚一組 三百円

ペテランの方々の御意向を綜合して完成した、あつと驚く新趣向の沅腸フオート、三〇C、五〇C、C沅腸器、イルリガートル、いちじく沅腸等を用いて、施術者と被施術者との同一画面に入れた真に迫るマニア待望の品、

◎沅腸責め三態 第一集 第二集 第三集

キヤビネ判 各三枚一組 三百円

沅腸と縛りを併用したフオート、手又は足の自由を奪って身動き出来ない姿態のまゝ無理に沅腸されようとする被施術者に、施術者の持つ沅腸器は情容赦なく迫ってゆく。沅腸責めのかもし出す甘美な雰囲気は、皆さんを妖しい感激のルツボへ誘ってゆく。

容 一、山法師と静御 五、八百屋お七の
二、女スリと岡引き六、新撰組と芸妓
三、淀君と千姫 七、腰元 十郎左エ門と
四、犬公方と侍女 八、小紫と悪旗本

色刷画帖

時代物責繪卷 XXX

三条春彦・画

各葉説明文句入、横トジ和装美本

特価 三百円 (送料五十円)

御申込みは、曙書房、代理部へ！
図版重荷造の上急送申し上げます

奇譚クラブ臨時増刊号

サディブラッケイズ著、吾妻新譯

アリスの人生学校

定価 百円 (送料共)

美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く、サディズム文学の決定版！

第一部 純潔教育 第二部 貞操教育



奇譚クラブ十二月特大号目次

百合子の冒険	村崎 明・作
続・沅陽マニヤの手記	花村恵美子
妓楼の女	杜 純之助
『縄のプレイ』への誘導	辻村 隆
川柳に見るお隣の功罪	須藤 律夫
夜 光 島	吾妻 新
蓑虫男の教訓	栗原 伸一
続・女性切腹断想	中谷 冷一
消えたホーゼ	田谷 敬生
	白金紅次

縛 恋 草薙久人 (154)

脱走囚(続・半公刑) 篠原咲恵 (110)

悲壮美女性切腹への幻想 兵頭 庫一

現代マゾヒズム芸術時評 原 忠正

幽囚十ヶ月 春田 一朗

非小説性 液 伊藤 晴雨

沅陽遊戯について 羽村 京子

悪の広場 角 皓子

軟義先生性愛相談 西条 武生

女の難感より 中川 房夫

私闘美考現 土俵 四股平

極端と矛盾への倒錯 北島利根吉 (214)

お灸を据える女達、就寝前の灸療 岩 瀬 祥一

草双紙に見る女性達 川合伊都子

残虐なる女性達 森本愛造・沢

気違いにされた令嬢 飛田 良二

マゾヒスト 栄吉の半生 日文世古六

集團心理に現れる倒錯の考察に反駁する 滋 賀 雄二

四つの美しい女性の鼻について 北谷 英二

女人磔零花 中川 房夫 (142)

伊吹真佐子さまへ 佐田 生一

縛られた女優達 升岡 金吉

女性美としての「脱」について 森 卓志

あるマゾヒストの手帖から 沼 正三

倒錯の英雄 織田信長 笠置俊郎・作

愛恋の日に 古川裕子

「女の首」狂楽 加佐和天恩

脱衣症患者 青葉 慎一

赤い腋窩の女(私の腋窩通歴) 佐次 浩介

私のマゾ・スクラップ帖より 春木 俊野

腹帯への加虐 大島 一

レスポスの記 花村恵美子

変装写真マニア(女装マニアの告白) 鈴木 二三夫

変マニア回想 保田 徹

脱陽の回想(私の少年時代の告白) 赤井 茂

洗面とアブ・プレイ、お仕置 森 太一

洗面とアブ・プレイ、お仕置 森 太一

洗面とアブ・プレイ、お仕置 森 太一

洗面とアブ・プレイ、お仕置 森 太一



絢爛豪華なあぶの一まる・ふおと・せくしよん

目次 縛り方教室「責十態」 滝 麗子・画
十二月月 十二月の賞給 寒牡丹 伊 藤 晴 雨
新妻遊戯冬姿、「沅陽」 「接温」
新妻遊戯 旭利台 (依田 晴二)
新人賞給 旭利台 (依田 晴二)
フニシスト ワイヤー縛りローソク責め(尾崎 實)
のページ 縛をした少年、脱がされる、
春日・伊吹・名コンビ写真
打撃(ちゅうげき) ひき倒す、竿でこじる
ゴムマリアを用いた野外縛りの出来上りまで、春日・ルミ
地獄変相図(地獄地獄) (破瑠 鏡) 杉 原 紅 児
川崎多摩子 川崎多摩子
萩 千恵子 萩 千恵子
「腰巻二題」

当世異色責十態

瀧麗子



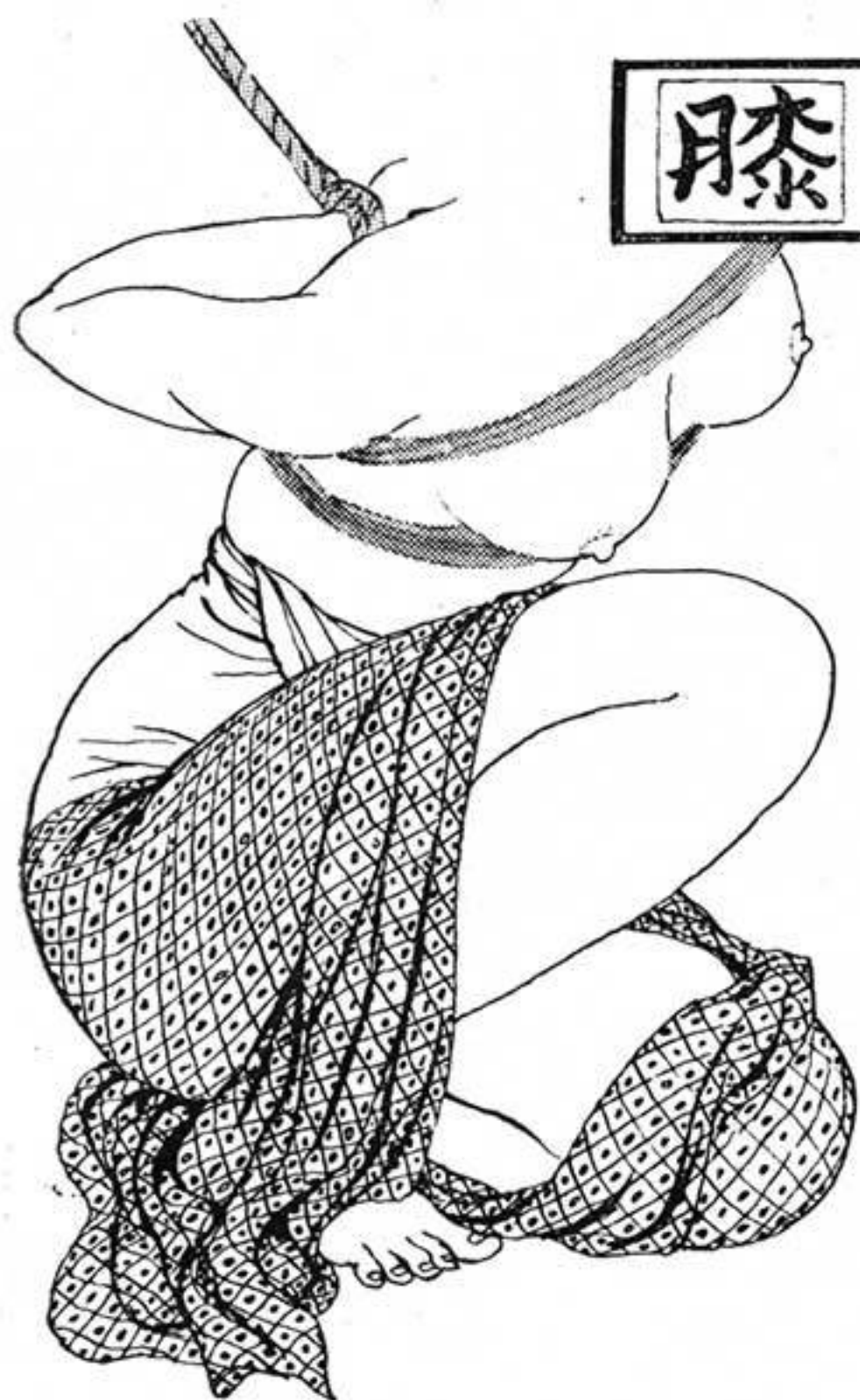
責十二カ月 十二月の責絵 寒 牡丹

人身売買が公然許され、主人を傷けたものは引廻しの上死罪という法律があった頃の江戸新吉原では、遊女を責殺しても主人に咎は無いというので、こんな責場もあったそうである。雪責でなく火責、寒い時に暖かくして責めてやるから有難く思えとやりてがいう。

〔伊 藤 晴 雨〕



僧 小 膝

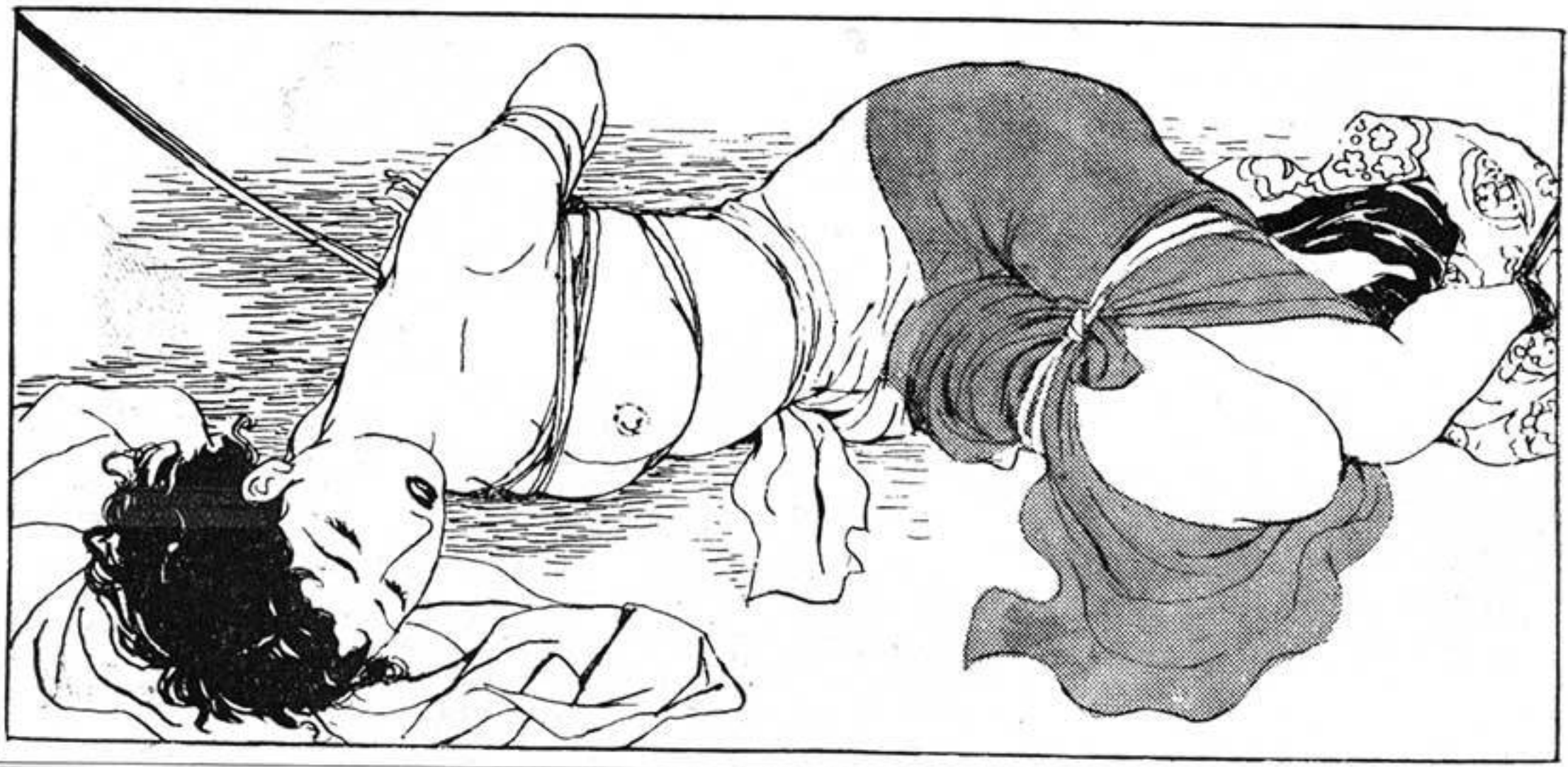


画 子 峯 築 都



くの字模様

都築峯子画



戯文戯画

くすぐり責め

畔亭 数久

文・画

麻埋がアルバムを見えています。ソツと
うしろから鉛筆でいたずらをしてやりま
した。すると、くるりとこちらを向
いて「ちつともくすぐったくない。
あたしお妾の子だから。」と挑戦し



て来ました。「じゃ、これは」と咽喉を
くすぐつてやると、今にも笑い出しそ
うな顔をこらえています。「よしッ」と
ばかり本格的くすぐり責め、「わあッ」と
今更らあわてゝもう駄目、羽根、箒、
パン切りナイフから孫の、まで総動員。
笑つて笑つて転がり廻つてもがいてとう
とう泣き出してしまいました。ほうり出
されてフーッと青息といき、「どうだ。

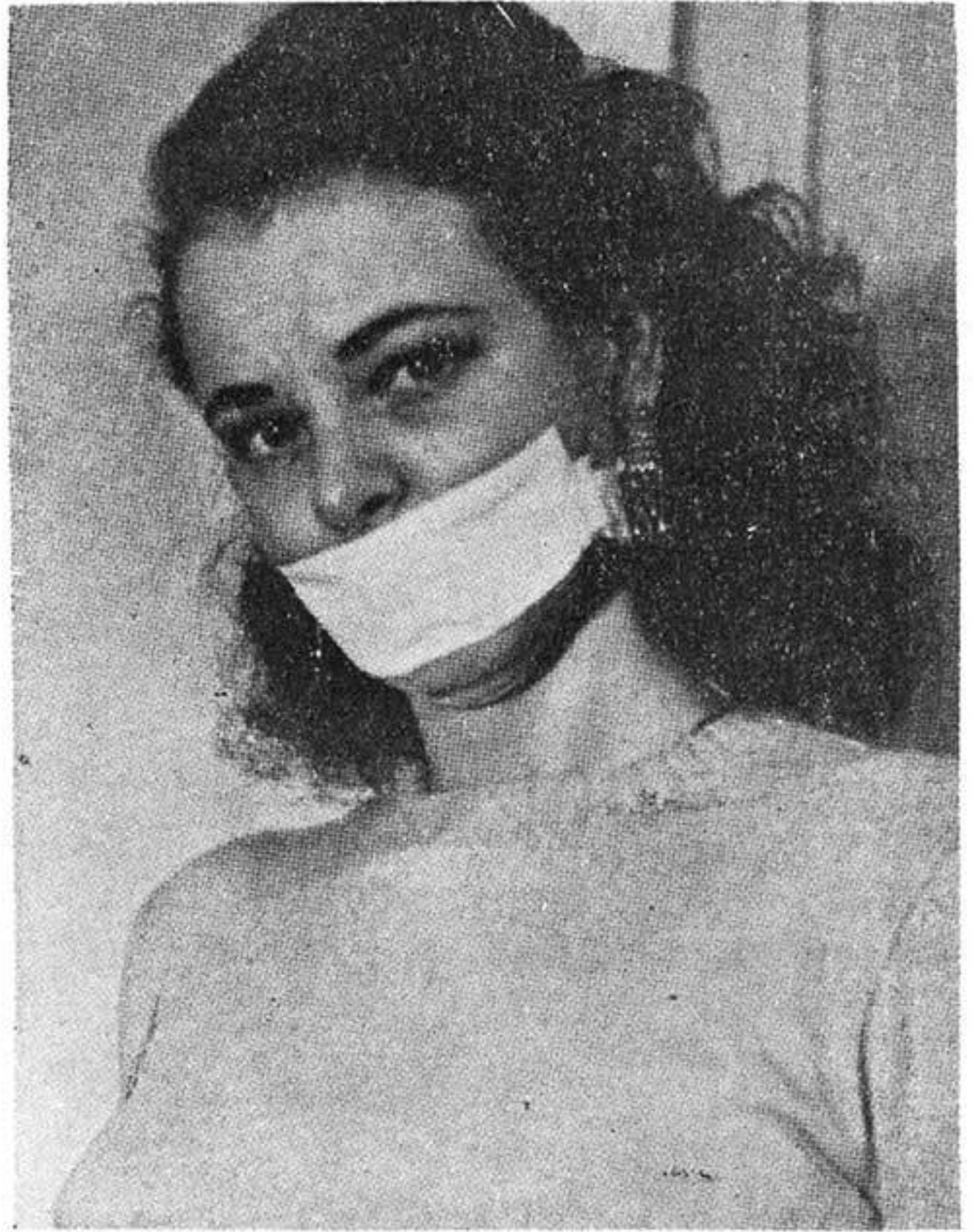


Suk.

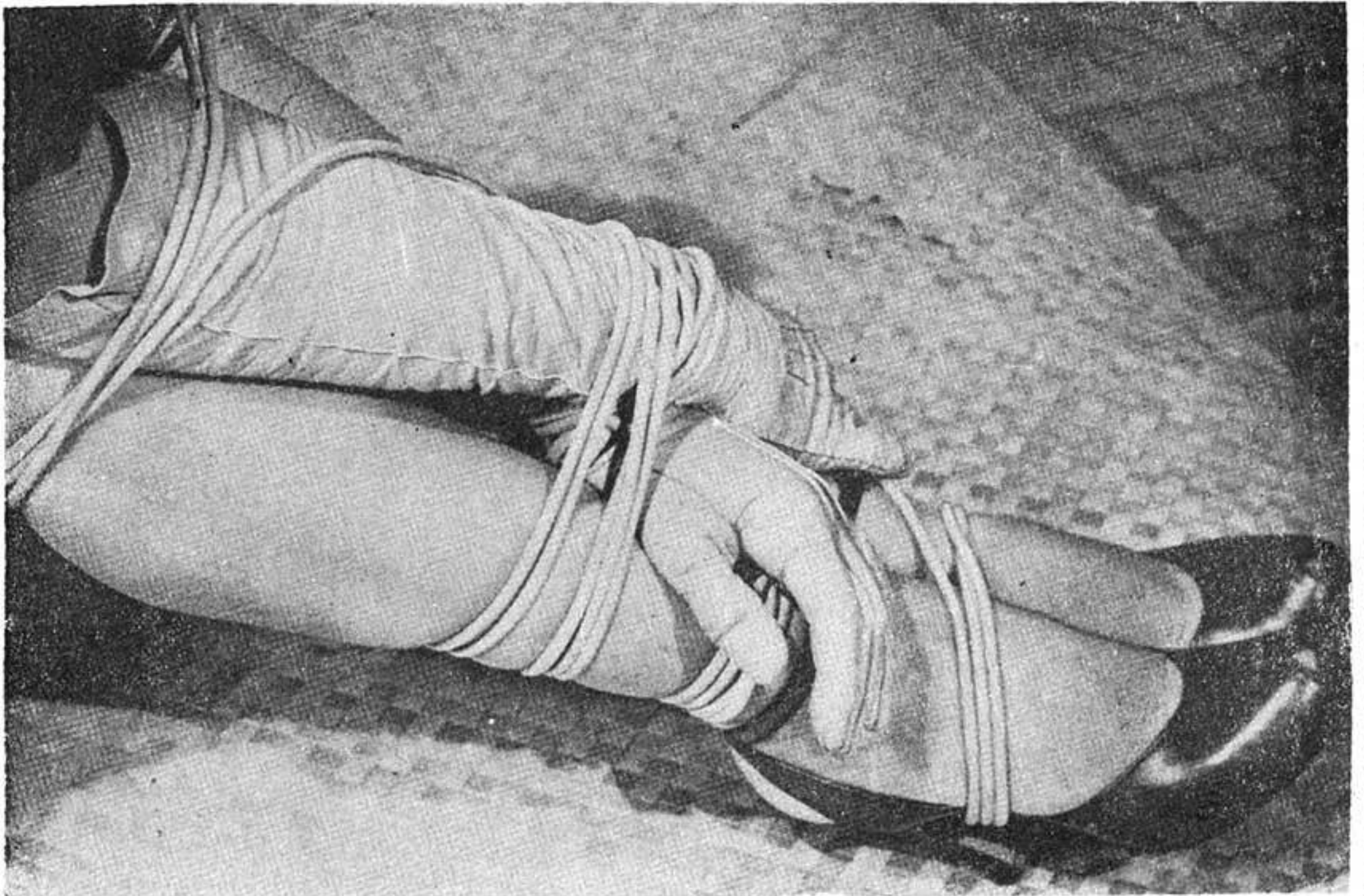


降参か」といってももう伸びてしまつて
声も出ません。肩で息をしながら畳をパ
タパタパタと三つ、手首だけ動かして叩
きました。

マ
ス
ク

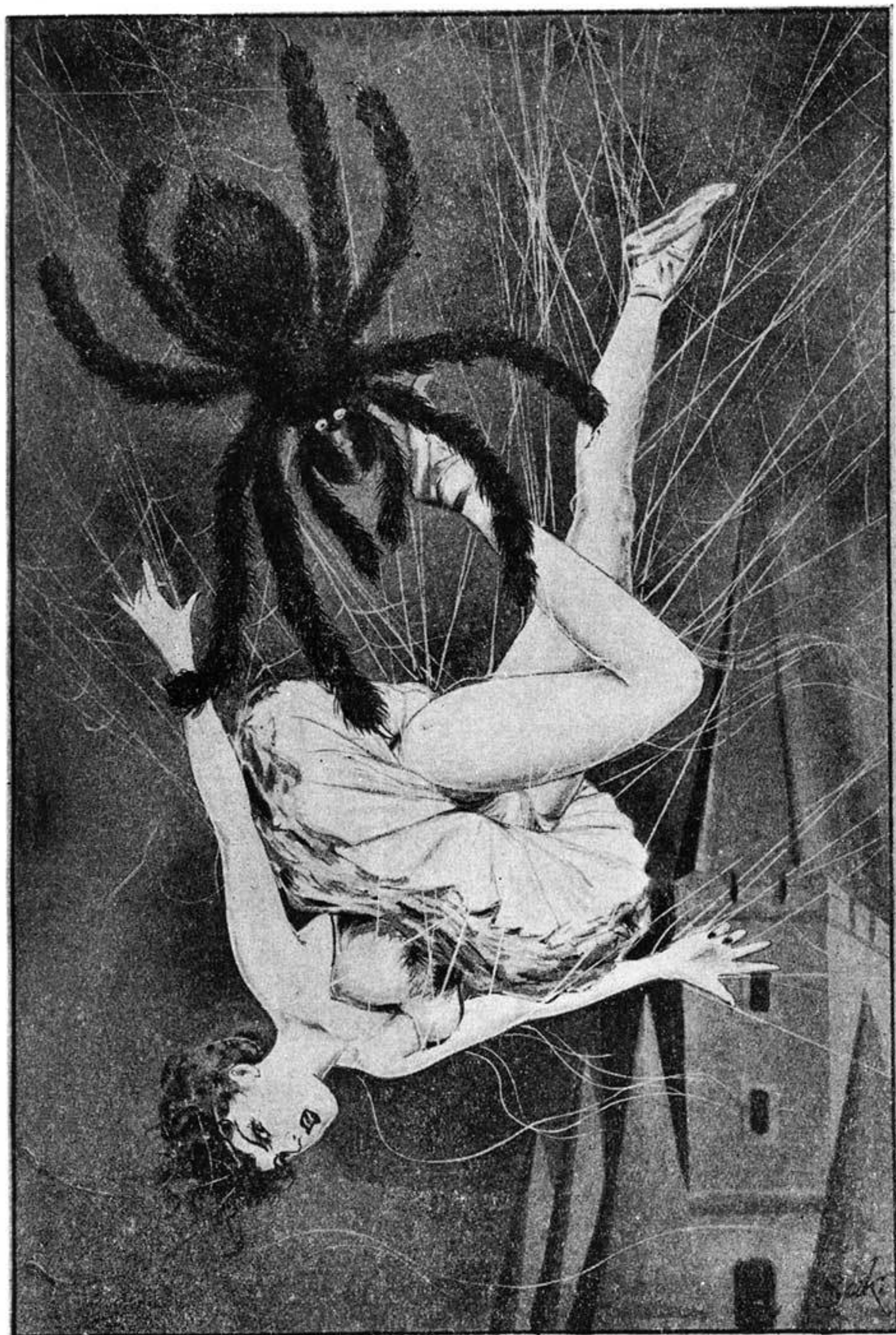


手と足の緊縛





編上半長靴 (白人少女の足)



蜘蛛

河童
かっぱ



残虐なる女性達画集

森 本 愛 造 提 解 供 説



(一)

今回此処に御紹介するのは、例の GRAUSAME WEIB の中のもではない。これはアルフレッド・キントの編集に成る「女性の支配」WEIBER HERRSCHAFT の第三巻よりのものである。此の本は稀観中の稀観と云われる珍書であつて、就中、第三、第四巻の如きは絶無に近いと考えられる。

第一「調教」と題するアルニム・ホロヴィッツの画、原画は四色刷原色版、アイデアが全く現実的で面白い。画としては左程のものとは思えないが、近い方の女の明るいコミイクな味に比して奥の方の一組は悲壮感が漂つて興味深い。

„Kohe Dressur“—Arnim Horowitz.

第二 同じ作者の同種の絵であるが、画としても、漫画としても面白い。原画は同じく強烈な四色刷で、迫力がある。殊にマゾヒス

ティクな遊びの幾つもの形式が含まれている点、及び女の表情に中心がある。

„Die gelohlichen Pudel.“—Arnim Horowitz.

第三「ドミナ」(女支配者)というパウル・カムのモンタージュ写真。こうした写真と絵との合作



(二)



(三)

(四)

は、ルドルフ・シュリヒテル、オットオ、ディックス、等の人々が
 夙に試みたが、これは成功した一例。パウルカムの絵は既に屢々奇
 ク誌上に紹介されているが、特有の強い病的な表情と、洗練された
 感覚がみずくしい。原画は多く赤と黒の二色で書かれているが、
 こゝに載せたものは、写真版で黒白版である。

„Domina.“ Photo-Montage-Paul Kamm.

第四 「人間馬」とでも訳すべきか、前出のパウル・カムの画で
 ある。彼の画では、この様な男が代表的である。只、この女は、い
 つもより明朗で、且つ若い。革の長手袋、犬に使う様な鞭、股にま
 で達する長靴、ハイヒール、美しい女の肢体、尻の鞭痕、これらは
 カムの愛する要件らし
 く、いつでも登場する。
 カムとしては、セコン
 ド・クラスの作ではあ
 るが、すつきりして黒
 白の絵柄が美しい。

„Reitner.“

Paul Kamm.



第五 「奴僕」、R
 ・ハーゲマンの作、こ
 の作者は、烈しい筆致
 と、正鵠を射た感覚に
 よって、印象的である。
 ハーゲマンの画は今後
 数多く紹介して行く心
 算である。二種類の鞭



(五)



(七)

(六)

答、長靴は彼の特長であるし、女の峻厳にして冷酷な表情も他に比類がない。

„Demütige Sklave.“ — R. Hegemann.

第六 「紫色の夢」エルンスト、ヴァリッツの画、絵としては最上のものではないが、粗野な中に要点は尽している。男の重い足枷、壁に懸っている拷問具、懲戒鞭、足なめ、拍車、長編上靴、黒いマントオ、豪華な敷物等は特有のものである。 „Purpurne Schmerzen.“ — Ernst Walitz.

第七 「女騎手と人間馬」とでも訳しておこう。ハンス・マルクスの画である。男と女との表情の対比、厳格な女騎手の有様は、これだけの画の中から、生きくくとよみがえる。原版は白黒のペン画らしい。今回の紹介の中でも、抽象的な絵作、一、二位に迫る逸品というべきであろう。作者については、他の作もなく、一切不明。 „Ferrin und Reitknecht.“ — Hans Marx.

第八 「人気女優」という妙な題の絵であるが、これこそ、一世に天折を悼まれた顔唐と変態性慾と、島貴な理想とを畢ひてレドレフ・シュリヒテルの作である。彼の

の画は、一流に属するだけでなくその異様な雰囲気は、オットオ、ディツクスや、ゲオルク、グロツスの間に在つても、光彩を放っている。



(八)

洗面

タオルを入れた洗面器と背中に置いた
生きた物置台、女王様がこれからお化
粧する間、じっと台としての使命を忠
実に守らねばならない。



蹴倒されて、仰向けになった男の顔を
力まかせに踏みつけている。男は悦に
いつているのか、反抗しようとさえし
ない。



スリッパで頭の脳天を踏みつけられる。
女王様が手を拭いている間の一寸した気
まぐれの遊びの一つである。

「今度は女王様のお御足だから、うれしいかい？」
べつとりと汗ばんだ脂足の裏が額に
へばりつく。



「どうだい、このきたないスリッ
パの裏をなめてみるかい」
男は女王様のおいゝつけに易々
として従っている。



お
仕
置
(一)

肩
車

女王様がお飽きになって「よし、」と云われるまで、いつまでもこの姿勢で支えていなければならぬ。



お仕置 (二)

海老



子・画

新妻遊戯冬姿……検 温……

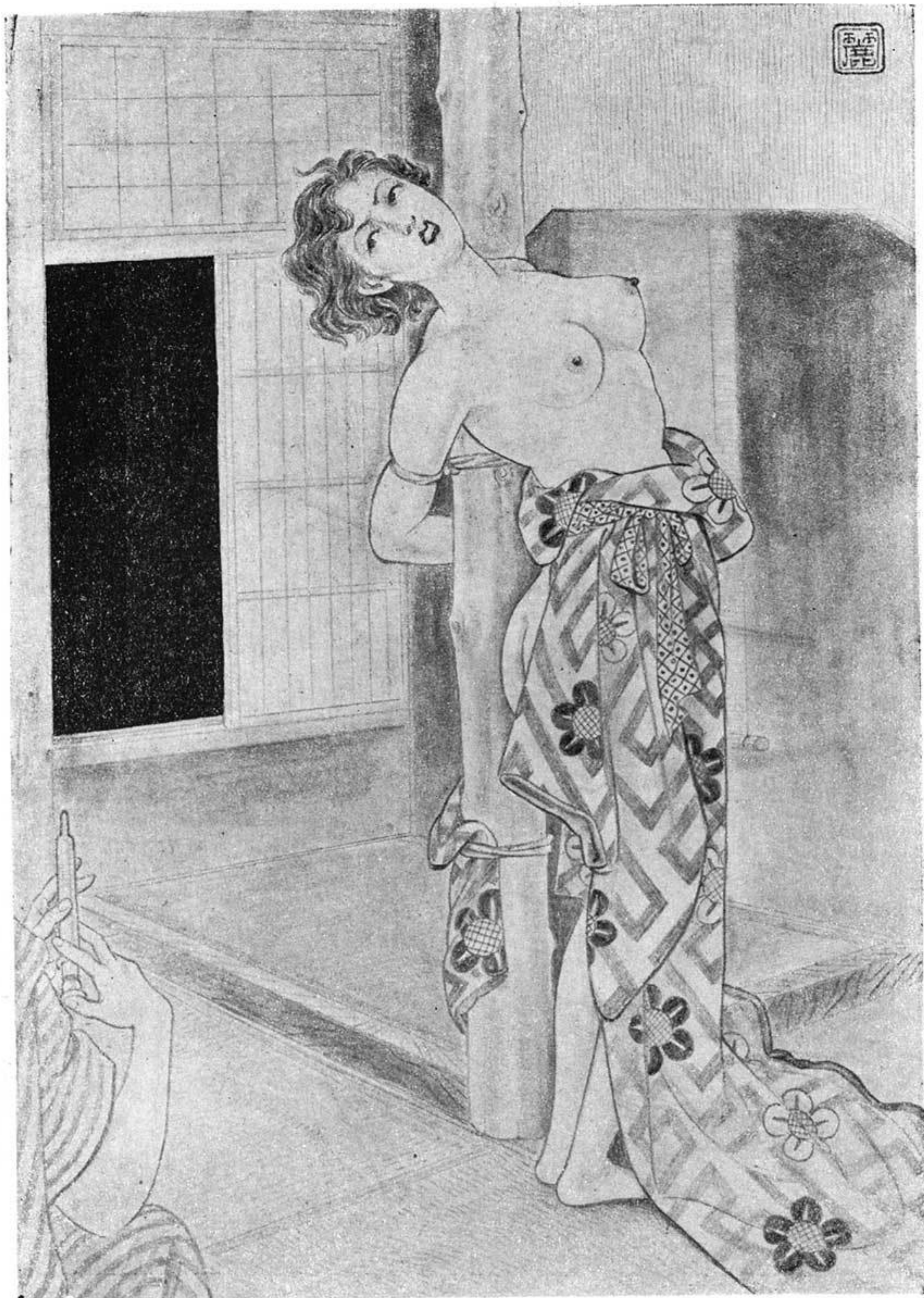
「さ、検温してあげよう、おとなしくするんだヨ」「あなたの検温はへんな処ですからイヤなの」夫はそれに耳をかさず、体温計をとりあげた。



新妻姿遊戯冬姿……浣腸……

「あゝいや、いや」 叫んでも、夫は手にした浣腸器にグリセリンを吸入して、近づいてくるのであった。

瀧 麗



四シ馬マ孝画集

新しい装い

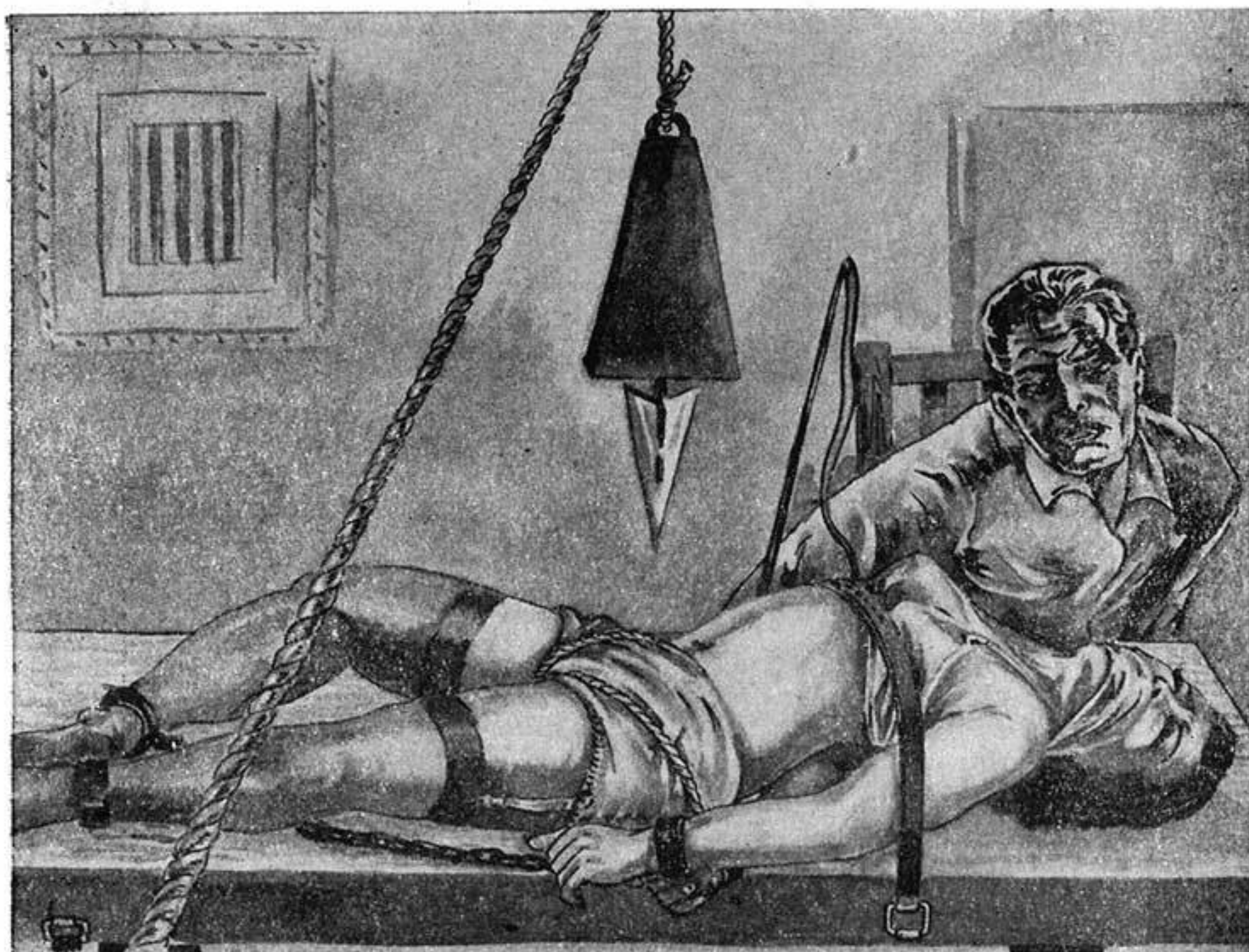




密室の遊戯

依田精二画

処刑台

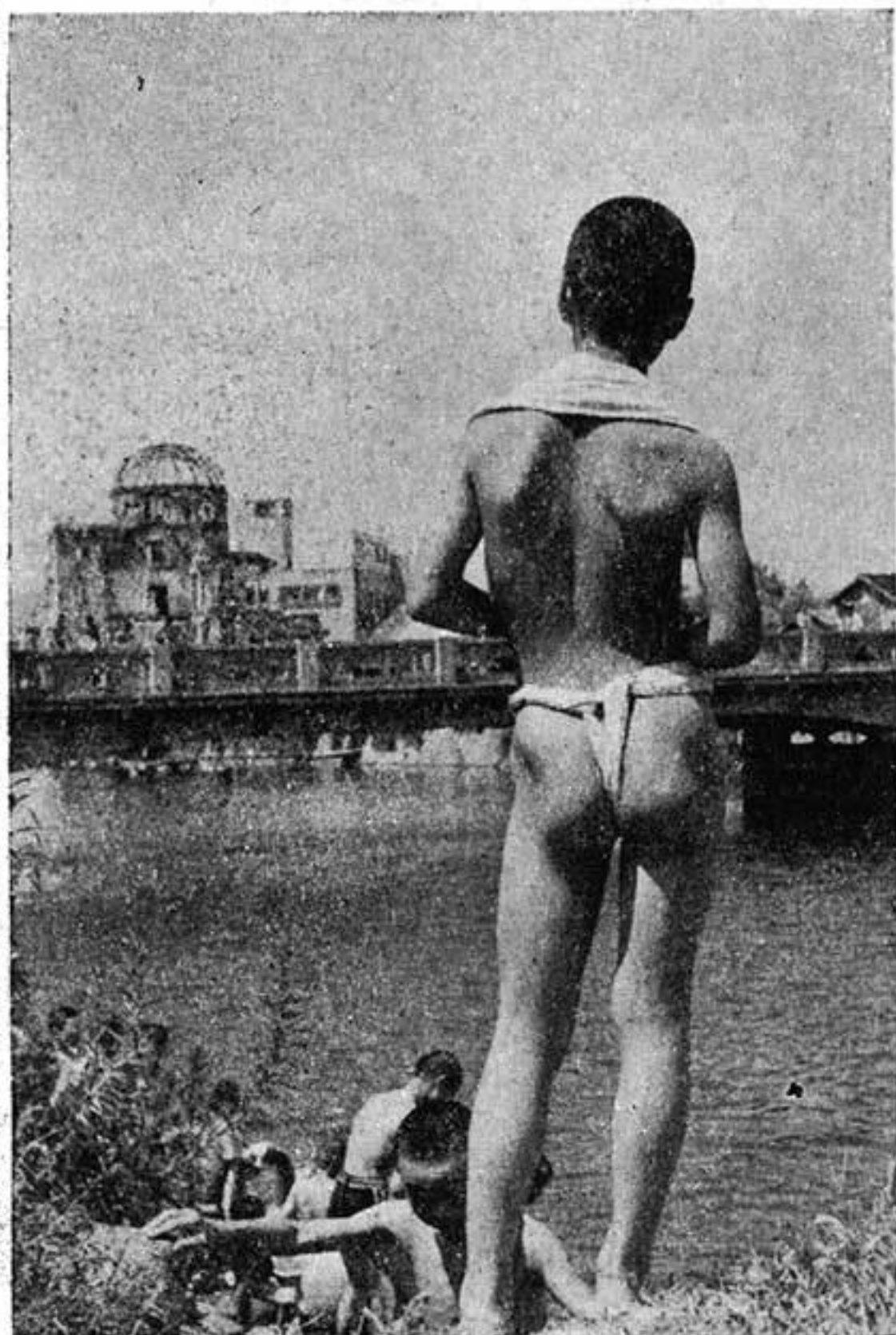


ワイヤー縛りローソク責め(シニール・レアリズム)
ピアノ椅子がこの絵の狙い、ワイヤーに縛られ。うごめく度に
喰い入る激痛と共に廻転する椅子、更に喰い込むワイヤー。

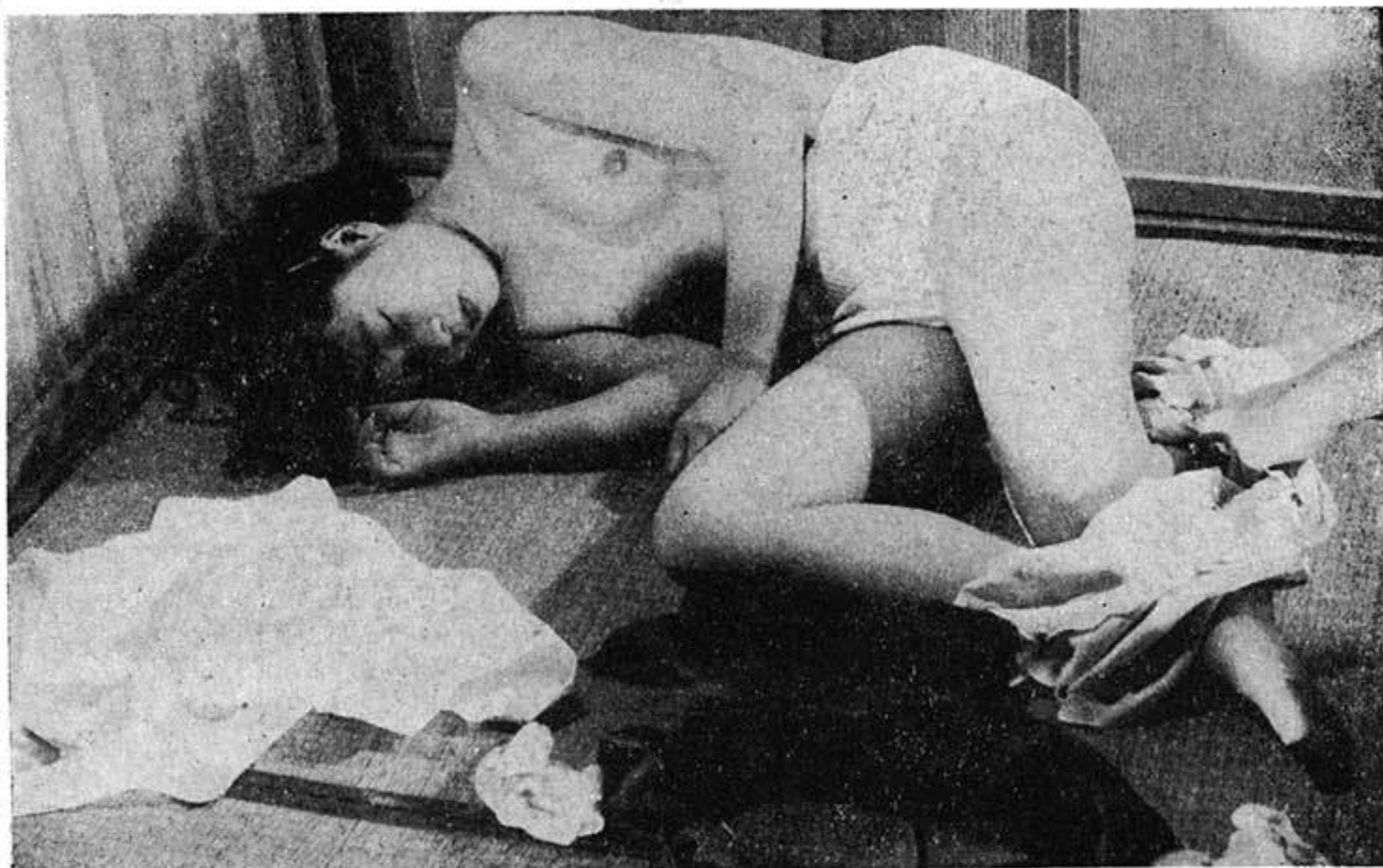


尾崎貫・画

少年をした^{フシ}禪



脱がされる (女性の下着フェチシストへ)



写真

ひき倒す



竿でこじる



打 擲
ちよう ちやく

春日
伊吹

二嬢名コンビ



(3) 松の樹の処まで追いたてる。



(1) 首繩をかけて、後手を縛る。



(4) 松の木に縛りつける。



(2) 胸へ二巻きして、後でとめる。

(7) ま、ざっと、こんなもの……。



(5) くあいはどうか、ゴムマリは？



(8) 出来上つてみると、大したこともない。



(6) 脚を、もう少しひらいてごらん。』

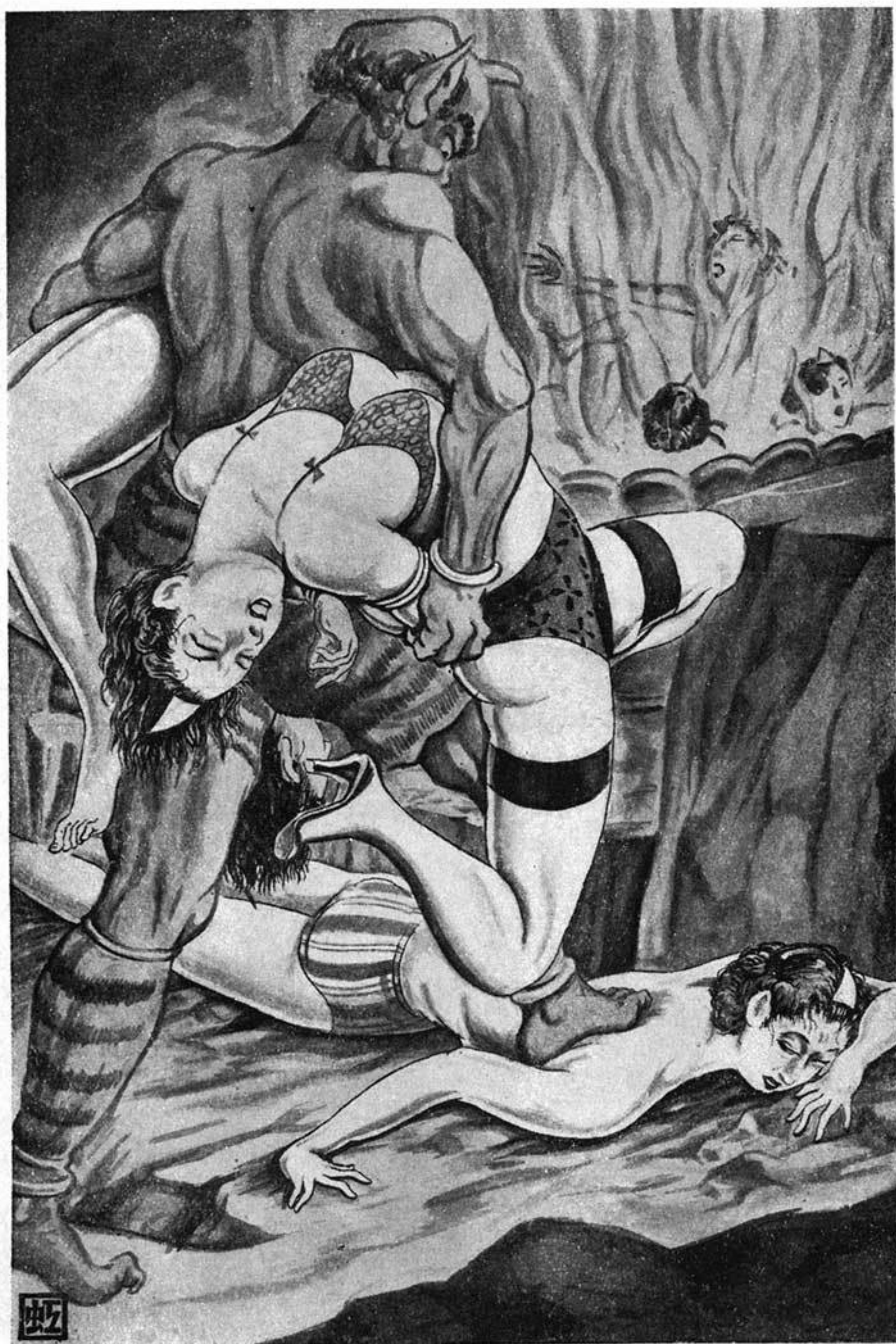
變相圖

玻璃鏡



地獄

焦熱地獄



くさををまとう

川端多奈子嬢



長
襦
袢



川端多奈子嬢

腰
卷



萩千恵子嬢



ジャンヌダークの処刑

フランス東北部の一僻村ドムレミ
ーに生れた農家の女ジャンヌダーク
(Jeanne D, Arc) は、少女時代か
ら宗教的幻想に把われ、夙に天啓を
聞くと信じ、たまたま百年戦後にフ
ランス軍の勢地に墜ち国運危殆に頻



村は免税の特典を受け、ジャンヌの
一家は貴族に列せられたが、九月パ
リ襲撃に失敗し、一四三〇年五月、
ためにコンピエーニュで敵手に落ち
翌年邪教徒として焚殺せられた。し
かし、火柱に緊縛の中から、かの女

するを怒り、一四二九年、救国の神
託を受けたと信じて、白馬に跨り、
陣頭に立って兵を指揮し、四月オル
レアンを奪還した。時にかの女十六
才。その天使の如き振舞に、全国民
の勇気を奮起せしめ、遂に敵軍を潰
走せしめた。功により、ジャンヌの

が「主よフランスを護りたまえ」と
絶叫して、遠くフランス軍を鼓舞し
たその意気は亡びず、フランス軍は
そのまた翌年パリを回復し、ジャン
ヌは愛国女丈夫として永く尊崇され
るに至った。

文化人の文献研究誌

奇

譚

ク

ラ

ブ

— 特別増大号 —

1954年 12月号

(第八巻 第十二号 通刊第七十五号)

連載絵物語 (第一回怪船の巻)

(1) 志摩の海岸に生れた百合子は水泳や潜水は巧みだった。高校時代は水泳の選手として名を謳われ、天性の美貌と豊かな肉体に在学中から映画界入りを噂された程であったが彼女には人に言われぬ悲しい悩みがあった。夢多い十九の春は訪れても、どうしたものかなめらかな雪の肌の若草の下崩えが、彼女には未だに見られなかったものである。

平凡な女事務員として某会社に勤めて間もない頃、母はかりそめの病に彼女を残して世を去った。天涯孤独となった百合子は、心の灯を失って悲嘆の余り母の跡を追おうとした。

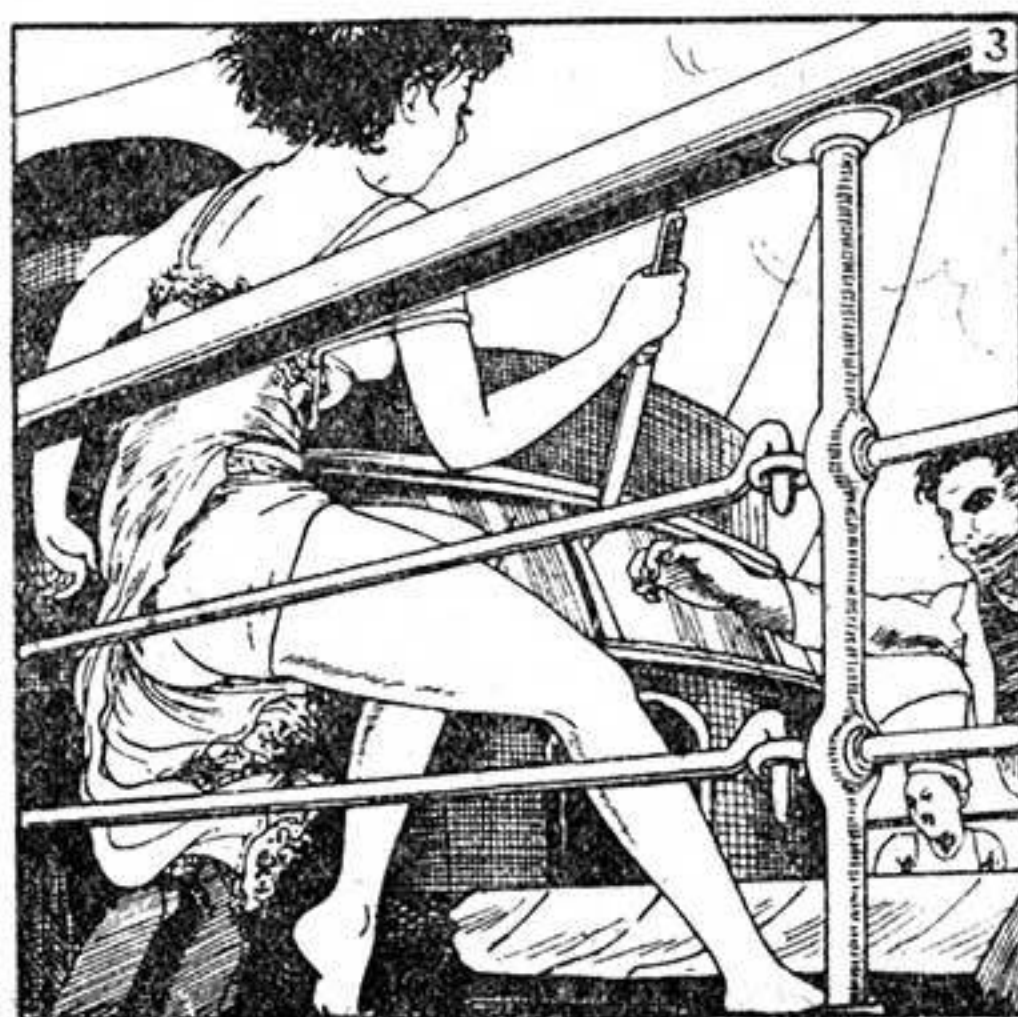


(2) それは全く魔がさしたというのである。彼女は自殺の方法について真剣に考えた。悲しい死後の肉体を人に調べられるのは生身に増して耐えがたい事だった。暮夜秘かに遠洋航路の船上から投身する、如何に水泳の達者でもこの大洋を泳ぎ切れるものではない。其上鱈も居るのだ。彼女は意を決して旅装を整えると自分の食糧を持ってある港から出帆しようとする貨物船の船艙に忍び込んだ。

それは怪しげな濠洲航路の外国船だった。これで誰にも知られずに自分を此世から抹殺することが出来るのだと百合子は考えた。併し船が出航すると共に彼女の胸には再び理性がよみがえって来た。



(3) 二日、三日と経つうちに彼女は迷いはじめた。あたしは間違っているのかしら。でも、もう取返しがつかないわ。この船の人々は、あたしが乗っていることに気付いていない。どんなに驚くだろう。そして怒るだろう。少しはあたし言葉が話せる頼んだら帰してくれらるうか...とつ追いつ心が定まらな。い。ままに船は赤道を越えた。そして或る日とうとう船員の一人が彼女を発見してしまった。忽ち船中は大騒ぎになった。男ばかりの船に降ってわいた天女のような百合子の出現に赤髯の水夫たちは目の色が変わった。事情を話すどころではなかった。



(4) 百合子は恐れて逃げた。男たちは兎を逐う勢子のように彼女を追って船中をさわぎ廻った。敏捷な百合子は巧みに身をかわした。腕を握られ、ば振り離し、脚を掴まれ、ば蹴り飛ばした。併し袖を引かれると袖がもげ、裾を取られると裾が破けた。遂に肌身離さず持った来た母のかたみの懐刀をふりかざして防いだ。衆寡敵せず、折り重って組み伏せられ、無残にも帆柱に縛りつけられた時には、彼女は辛うじて肌を護る一枚の布しか残っていなかった。

百合子は口惜し涙にむせんだ。死を以て守ろうとしたものを、こんなけだものどもの餌食として踏みじられねばならぬのか……



(5) 男たちは一かたまりになって何か相談していたが、やがて一人が皆からからかわれながら百合子の方へ近づいて来た。高級船員の服装はしているが卑しげな大男であった。彼は百合子の縄を解くと、恐ろしい力で彼女の腕をねじ上げ、物蔭へ引摺って行った。そして荒々しく蹴倒すと、逃げない様に大きな靴で白い衿首をギョツと踏みつけ乍らズボンの革帯を解いた。ピンで刺し止められた虫のように百合子はもがいた。けれども徒らに胸がつぶれ、肋骨が乳房を突破りそんな劇痛を覚えるだけだった。

男は手を伸ばして百合子の肌着を引きむしった。電撃を受けたように彼女は跳ねた。



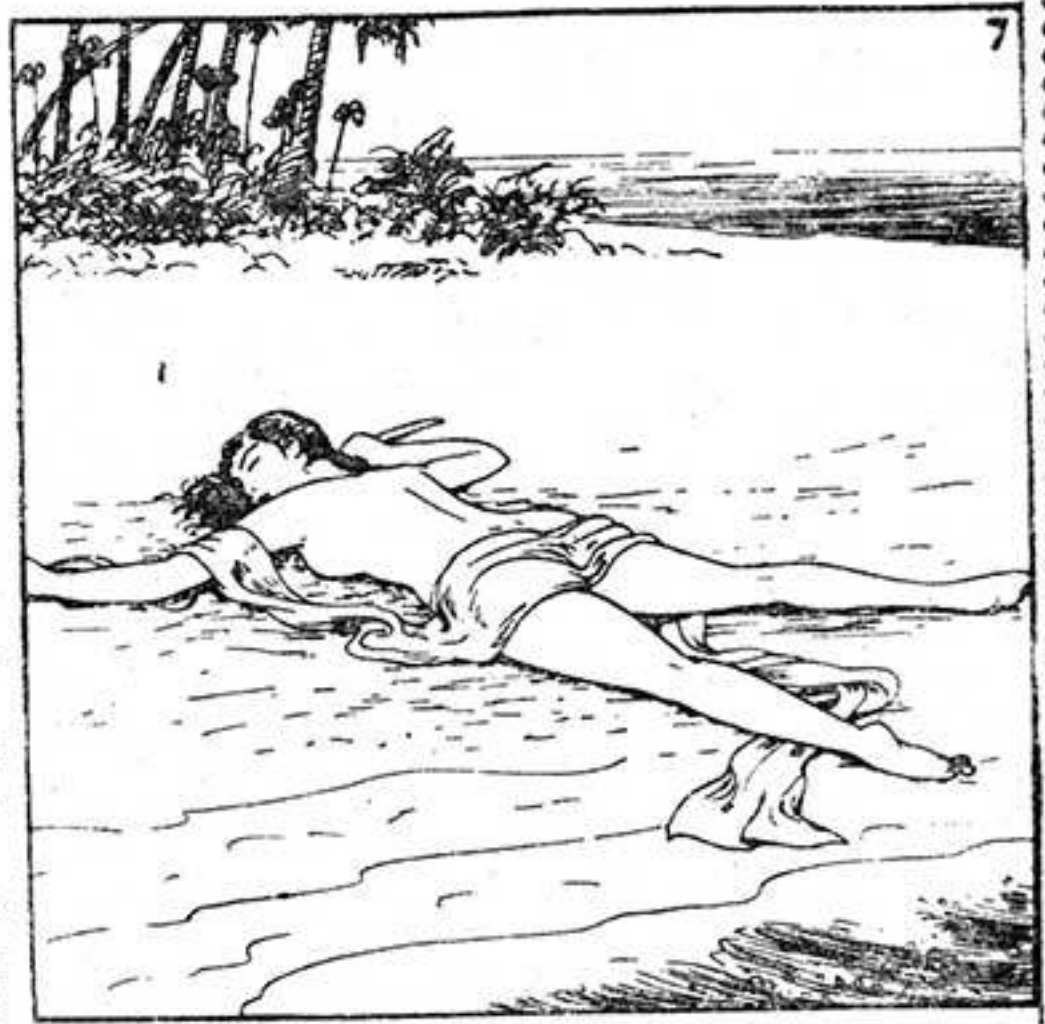
(6) さすがにその時は男の姿勢がくずれていたのである。アツと叫んで男は腹這いになった。瞬間蛙のように四肢で床を蹴って飛びのいた百合子は、丁度手近に落ちていた懐刀を拾うと転がるように五六歩走り、前後の考えもなくそこに干してあった長い白布を掴んで舷側にかけて寄った。起き上った大男がわめき乍ら追いつき、船員たちがかけ集って来る。絶対絶命だ。彼女はパツと手摺に跳び上って力をこめてそれを蹴った。底知れぬ紺碧の大洋に百合子は白波立て、姿を没した。ワアツと声が挙った。血迷った大男が彼女を追って海に飛込んでしまったのだ。

「アツ、饞だ！」



(7) 気がついた時、百合子は海岸の砂浜に倒れていた。すっかりと懐刀と白木綿を掴んでいる。そうだ、海へ飛び込んだあと、あの恐ろしい男は鱈に喰われてしまった。あたしは生きている。あたしは生きねばならない。今こそ生命の尊とさを知った。百合子はこの逆境にあつてなお新しい希望に燃えた。さあ食べものを探しに行こう……

幸い砂浜の向うには、たわわに房を垂れたバナナ林があった。パイナップルの群落があった。椰子もうちそうと茂っていた。無人島らしいのを幸い、彼女は懐刀を口にくわえて裸のまますると椰子によじ登った。幼い時からお転婆だった百合子は木登りは得意だった。



(8) バナナは内地で見るとような小さなものではなかった。おいしい。頬が落ちそうだ。まず食糧の心配はないようだ。次は住むところだが、この暑いところでは着るものゝ心配は余りないようだ。しかしこの白布は直ちに身につける気にはなれない。小川でもあれば洗いたいものだと思つて百合子はそれを抱えて次第に高い岩山へ登つて行つた。ところどころぼつんぼつんと喬木が立っているがあとは草ばかりで漸く高くなつた陽は焼けつくようだ。だが日蔭は風が涼しい。海から百米ばかりの高さに達したとき、そこで彼女は思いがけなく格好な温泉を発見した。



(9) 雀躍りして喜んだ百合子は早速その白木綿を洗濯した。懐刀も目釘を外して手入れした。そしてやっと安心した気持ちになつてゆつくりと湯にひたつた。何という長閑なことだろう。怖しい遭難のあとの気持は少しもなかった。ハイキングに來た様だった。全く誰も居ないという安心感で彼女は伸びのびとこの浴槽に身を横たえた。全く申分なかった。湯から上ると、もう布はきれいに乾いていた。彼女はそれを男のように腰にまとめた。長さは十分だった。懐刀の鞘は失ってしまったので布の余りで刀身を巻いて肌につけた。併しまだ全く安心は出来ない。温泉のすぐ傍に深い洞窟が口をあいていた。



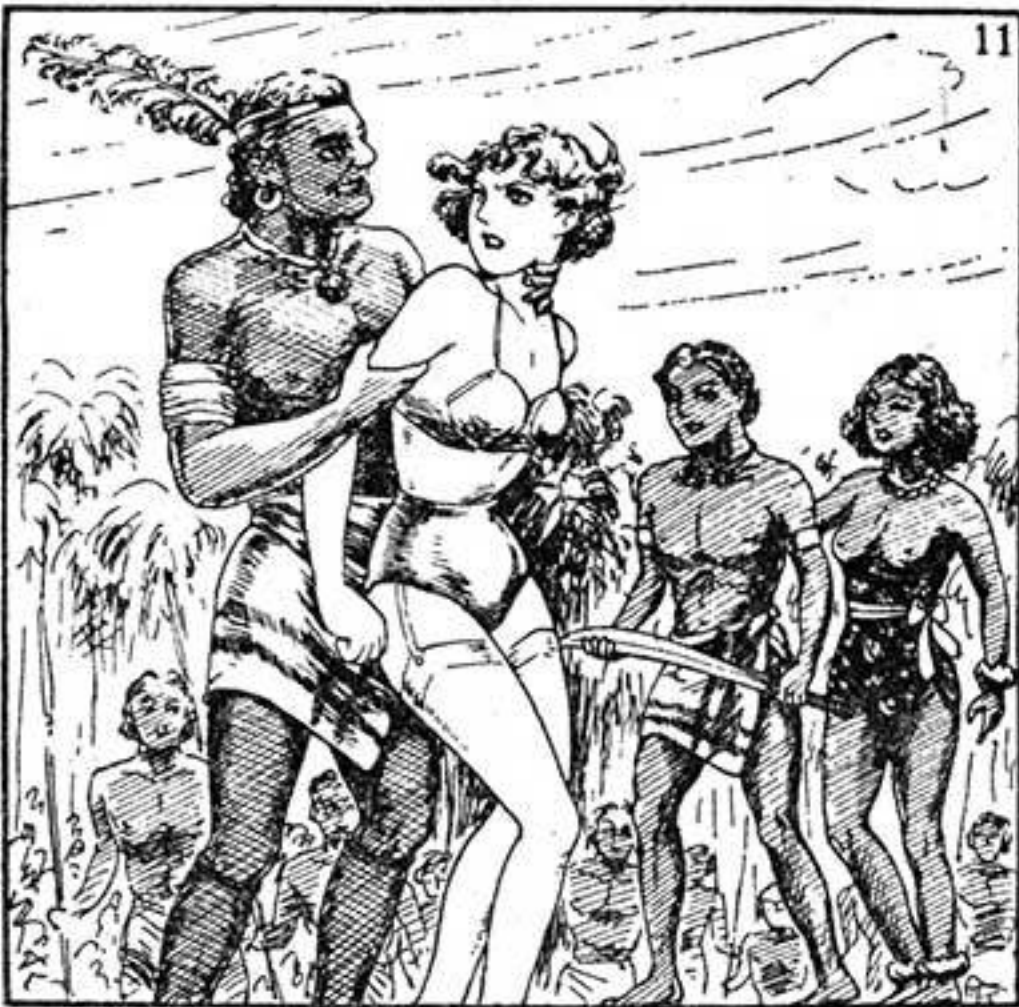
(10) この中に何が居るか判らないと思うと彼女は怖かった。しばらく様子を見て異常がなければこゝに住もうと考えた。そしてなほ探険して見る気で其あたりの崖を少しずつ用心しながら降りて行った。

三十米ばかりも降りたとき、小さな広場に出た。そして驚いたことに、今彼女が降りて来た崖が、そっくり一個の巨大な魔神像の浮彫になっていたことに気付いた。今にも咬みつきそうな牙をむき出した口、にらみすえた眼、その石像の両手は百合子を一掴みに握り潰せるほど大きかった。

百合子の驚き、だが恐怖はまだ始まったばかりであった。この島に人間が住んでいたのである。しかも人を喰う黒人が……



(11) 巨像に呆れていた百合子の耳にワツという大勢の音が聞えて来た。驚いた彼女が魔神の膝のあたりに姿をかくすかかくさぬに、一群の黒人が広場へかけ上って来た。そして像の前に一かたまりになって祈るかに見えたが、やがて一同は大きく輪を画いて坐った。巨像の前の壇上に残った人物を見て百合子は更に眼を瞠った。美しい白人の女がひとり、三人の黒人に捕えられているのである。その女は、『ポール、トムソンさーん。助けて、あたし殺されるわ。あたしよ。マリアンよ。あゝ、助けて……』と泣き叫んでいる。マリアンを抱えているのは六尺豊かなたくましい黒人だった。



(12) 驚に捕えられた小鳥のようにマリアンは腕の中でもだえた。まだ子供っぽい男女二人の黒人が、びかびか光る大刀を彼に渡すと逃れようとするマリアンの腕を二人で捕えた。『あゝ、助けて……』だが無残！ 少年がマリアンの髪を掴んで後へ引くと共にパツと飛びすさった一瞬、大刀がのけぞったマリアンの白い咽喉にサツと閃めいた。

『あッ！』百合子は思わずかくれている身をも忘れて叫び声を挙げると眼を覆った。立って居られなかった。へたへたとくずおれると恐る恐る岩蔭からのぞいて見た、血の滴る首を提げて立つ黒人の悪鬼のような姿を！

(以下次号)





『縄のプレイへの誘導』

辻村 隆

その縄のプレイに誘導する行為が、果して是か非かは、諸氏の良識ある判断に任ずとして、男性にとっては、頗る征服感とサジスチックな慾望を唆る、女性緊縛のあの手の誘導法を述べて見たいと思う。

——妻の場合——

夫唱婦随の昔に較べると、多分に夫唱婦唱の時代になったとは云え、嫁して夫に随うと云う封建的潜在意識は今も余り変りない様である。とは云え、夫としての暴力や威光で屈伏的に妻を頭ごなしに押えつけて、縛ったりするのは余りに智慧がないし、さりとて、妻を縛って見たいと云う慾望に悶え乍ら、躊躇している気の弱いハズ諸君も数多ある事であろう。諸君が縄のプレイを好む心の持主で

ある事を、妻に悟られ得ずして、然も徐々に妻を縄のプレイへと誘導するには如何にすべきか！ それには先ず次の様な方法で心当りに当って見るがよろしい。

夕食後の退屈なひとときでも、又就寝前の一寸した徒然にでも、何気なく機会を見て、フド思いついた様に、

「どうだい、面白そうじゃないか、この手品。一度やって見ないか——」

と、雑誌にでもものっている、手首から縄を抜く手品を、ごく自然に、さも偶然に見出した風に示すのだ。そして君は先ず自分から、妻に範を垂れる必要がある。予かじめその手品を熟知して、君はほどける自信だけはつけておかねばならない。

「遠慮しなくてもいいから、僕の両手を強く縛って御覧。構わない

から……」

君は些か改たまつた口振りで、有り合せの腰紐かネクタイの廃品でも持ち出して来て、妻に手渡すのだ。

「本当に解ける？……」

妻はそんな場合、夫との楽しいひとときを心弾ませて、確かにウキ／＼とこのプレイに乗ってくる。

「絶対に解いて見せるよ。さあ縛って御覧」

君は恬淡とした素振り、両手を前で重ねて妻の前に差し出す。

妻は多少は躊躇し乍らも、愛する君の両手を公然と縛り得る最大のチャンスに恵まれ、面白半分を越して、胸をドキ／＼させ乍ら、至極じんわりと君の両手を縛るだろう。

「どう、しっかり縛った？じゃあ一寸、向うをむいて御覧……」

君は妻に、その縛られた両手を高々とかざして見せてから、後ろを向かすと、素早く解いてしまえばよろしい。

「アラ、本当に……。どしてほどけたのかしら——」

その時、妻は多少は讃嘆じみた言葉を投げつけるだろう。

「なあに、わけないさ。これを読んで御覧、ホラ、こうすれば解けるだろう？」

と、君は雑誌の手品の説明を示し、徐々に

「じゃあ、今度は一度縛ってやるかな。どう自信ある？」

君は、優しく妻の手をとり乍ら云って見給え。こんな場合、妻はゼツタイに否とは云わない筈である。

「でも、なるべくゆるく縛ってね……」

「あゝ、いゝとも」

この時、君はしめたと許り、本性を発揮して強く縛ったり、変な

縛り方をしてはいけない。子供でも解けるような、やんわりとゆるく、真似事に近く縛ってやるのだ。

「さあどうだい縛ったよ。抜けるかな……」

君は手品の興味一辺倒の態で、わざと意地悪そうに云う。

「こんなの解けるわよ。じゃあ貴方も一寸向うむいてね——」

妻は君が行なった如く、君に背を向けて、逸早くほどくに違いない。

「どう抜けたでしょう」

と、君に得々と両手を差し出せば、君の願望は最早半ば充たされたも同然である。

「こんな紐じゃ滑るからすぐ解ける訳だよ。よし、じゃ、今度はこれでやって見るとしよう。どんなに強く縛っても、解いて見せるから、やって見給え」

君はそこで、予め準備しておいた荷造用の麻縄か、綿ロープか、

紐引の類いをごく自然に持ち出して来て、妻に手渡し、

「どうせ、君の力だから大した事はないだろう」

と妻の非力を笑う様に云えば、

「あら、いったわね。じゃあ強く／＼縛るから、痛くても怒らないでね」

「その代りうまく解けばキス一回だよ」

位を云って妻を喜ばせておけば、必らずや妻は半ば本気で可成り強く縛るだろう。

両手を合す前に、腕首に力を入れて両手首の間に多少の隙間をつくっておけば、大抵は解けるから心配は要らない。

君は暫くの時間をかけて、漸くにして解いた素振よろしく、縄を



手にして意気込んだ口調で

「どうだい、とけたらう。ようし、じゃあ僕の番だ。今度は手加減しないから、覚悟はいゝかい？」

と妻の両手をとる。行きがゝり上、妻は恐らくそれを拒まない。そこで君は妻の両手をかなり強く縛り、縄尻は口で解かれぬ様、さっと胴に廻して背中中で固く結んでおくのだ。先ずぐこれなら容易に前手縛りでも解けはしない。

妻は背をむけて、しきりに身をよじり、体をひねって、あわれな試みを続けるが、

「ねえ、解けないわ。ほどいてよ……」
と弱音を吐くに違いない。

「なーんだ。こんなのが解けないのかい」

君はそこですぐ解いては折角の苦心が水の泡である。縛った妻の姿を暫し眺め、やおらさもいとしくてたまらぬように、縛った儘の妻を優しく抱擁して熱い接吻の一つも行うのだ。解くのはそれからあとでいゝ。本格的な緊縛へ誘導する為、君は縛った妻に対しては、普段の場合には見られぬ、甘さと優しさをふんだんに発散すべきである。君の優しさを欲する妻は、いつしか縛られる事が愉しい恍惚境への前提条件である錯覚を起す様になるに違いない。とあれプレイへの道は拓かれたのであるから、後の誘導は諸君の腕次第であるというものである。

—— 恋人の場合 ——

恋人——と云っても、ピンからキリまでであるが、緊縛のプレイを愉しむ程度にしておかないと、往々にして掌中の小鳩が逃げてしまう場合もあるので君の本性の發揮は程々に止めるべきである。場所は恋人の家でも、又、君のアパートの一室でも、も一つ行きついた仲なら、温泉マークでもいゝだろう。

「僕はもう、片時も君を離しはしないよ。どんな事があっても……」
君は恐らく本心でそう囁くだろう。

「私も……」

と、彼女も亦、君の胸に頬を埋めて、先刻来の陶醉のさめやらぬ醍醐味に浸り乍ら、きっとそう訴えるに違いない。

「本当に離れないね。あゝ、二人の体が一つになりたいなあ……」
そうだ、一層の事、離れない様に、胴と胴を縛り合せておこうよ。
ね、そうしよう」

君はそれが、最も時宜を得た行為の様に、寝巻の紐を継ぎ合すなり、帯でもいいから、ピッタリと君の胴と彼女の胴を、密着させて結び合せてしまうのだ。

「私達、もう一身体なのね——」

彼女はおそらくは、飲ばしげに君の耳を擦ぐる様に囁くだろう。

「もともと完全にならう。手と手、足と足、ねえ手伝っておくれよ」

君は尚も上ずった熱い口調で告げるのだ。彼女は自分独り縛られたと云う被縛の観念を持たぬ為、喜んで同意する筈である。手許のベルトや、ネクタイや何でもいゝ。君の手と彼女の手。足と足。

そして自由のきかぬ体をぶっつけてあって七転八倒、大いに恋の欲びに浸るがよろしい。

この写真は珍らしい前手縛りであるが首にかけた縄が胸から二の腕に廻り両手首と脈絡しているの或る程度の自由はきくが、行動半径は乳房の前を中心とした紐の長さに過ぎない。真新しい手拭によって猿ぐつわをさしている歯によって喰い切られることも防いでいる。それよりも、この写真では猿ぐつわによって顔の半面を掩われることによつて、両方の眼に無限の美しさをたゞえていることである。そして菱型にきっちり縛り上げられた胸のふくらみにもなつかしい豊かさが見られる。



疲労を感じたところで、素早く解くと、戯れの後の解放感から、君達は暫らく虚脱状態を彷徨する。何とはなしに溜息の一つもついて天井を眺めていると、彼女は声をかけてくる。

「ねえ、どうしたの？。何、考えていらっしやるの……？」

「別に……。唯、君が僕の許を離れて、何処かへ行ってしまうのかと思つて……。君の体さえ縛っておけば、何処へも行かないだろうになあ、なんて考えていたのさ」

「貴男を離れてどこへ行くもんですか。でもそんなに心配なら私を縛って——。貴男の為なら縛られたっていいわ」

「本当にそう思つてゐるの？」

「嘘だと思ふのなら縛ったらいゝわ」

「ハハ、冗談だよ。そんなこと……」

「イヤ、何だか私を疑ぐつてゐる見たい。縛つてよ。さあ縛つてといつたら」

こと、こゝまでくれば占めたものである。形許りの縛り方でもよろしい。君は悠々として女体緊縛の第一歩を踏み出せばよろしい。

但し、縛った彼女を決して粗末に扱わぬこと。解いたり縛ったりして、激しい愛情をそゝげば、彼女は縛られることを決して厭わないに違いない。君達は逢えば徐々にこの手を強調し、程よい緊縛がいかに女体に、顕著な作用をもたらすかをよく研究の上、前戯の一過程とさ

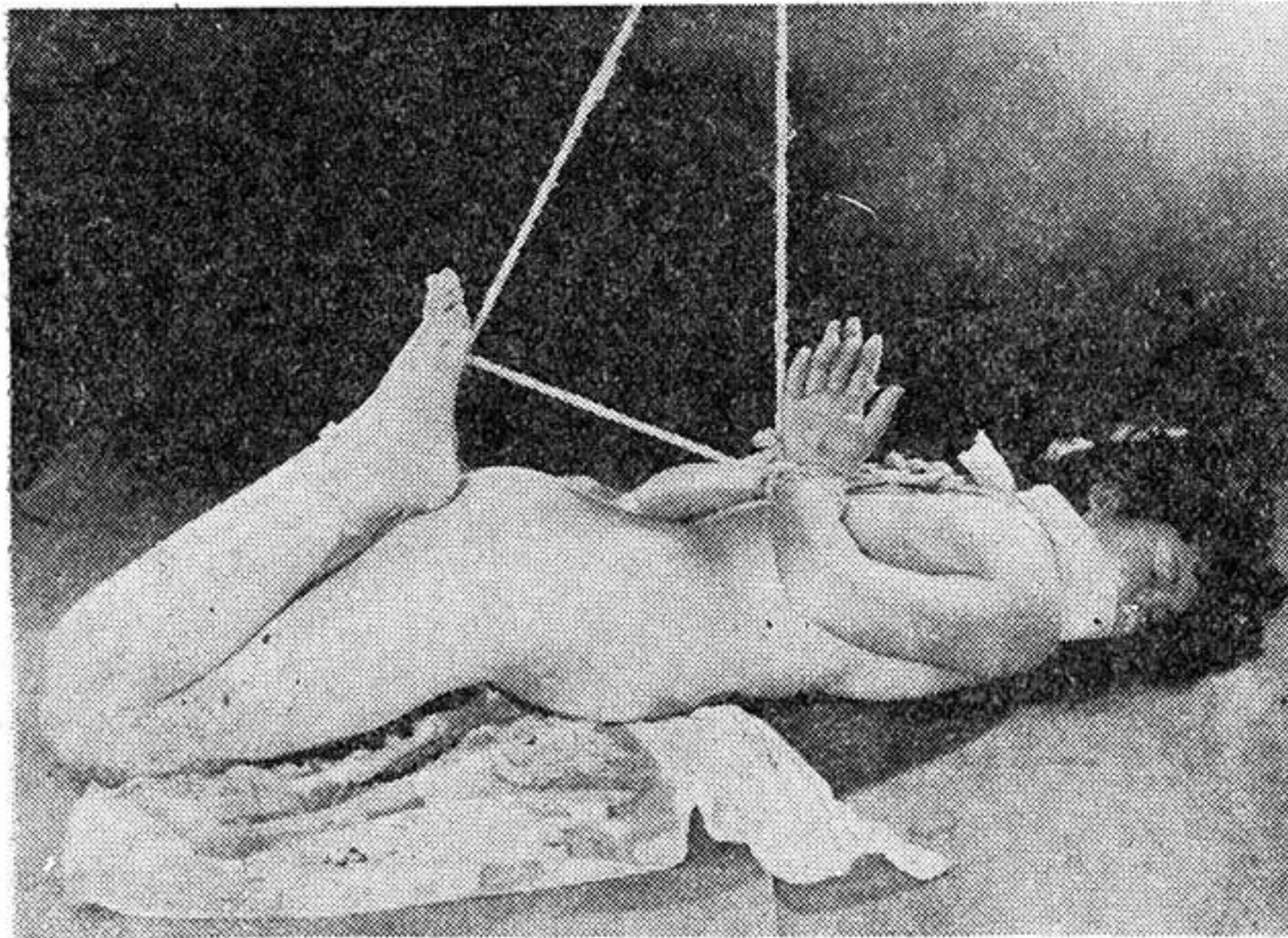
れるもよからう。

こうした仲でも、恋愛病は一旦さめると、いとも飽気なく、秋屋が立てば、素肌に犇々と縄を巻きつけた女でも、途中ですれ違い合いい乍ら、顔をそむけてしまう。えてして、恋とはこんなものであるから、心中などと思いつめる輩は、げにや愚の骨頂である。

——二号の場合——

君は彼女を世話しているのだから、当然大いに我意をふるっても差支えなからう。君が世に謂う恐妻家であればある程女房に果されぬサジスチックな慾望は、その吐け口を二号に於て充すべきである。君は奇クの一冊でも鞆の底に忍ばせて微醺のあと、風呂へでもトイレへでも立ったとする。彼女はその隙に、素早く鞆の中を点検するに違いない。得てして、二号女史は旦那の秘密を探ぐりたがるものだ。そこで彼女は、当然奇クを発見し何気なくパラ／＼と開いて見て、二号独得の感のよさから、逸早く旦那の趣味を或る程度察知してしまう。

頃を見計らって、旦那たる君は何気なく戻ってくる。君は慨嘆する如く、
「あゝ、つく／＼女房がいやになったよ昨夜も大喧嘩をやらかしてね」



「一体どうしたって云うの？」

「それがさ、俺もたまには羽目を外して呑んで見たい気になって、酔っ払っての帰り途、女の縛られた写真なんかのがのっている雑誌が目にとまって、フラ／＼と買って見たが、見ているうちに、俺も一度でいゝから女を縛って見たくなってきた。女房ならまあいゝだろうと考えて、当って見たところ、見事ボンと蹴られて、そんな事死んでもいやだとぬかす。貴方は変態だとまで毒づかれりや、俺も黙ってはおられない。変態の亭主じや気にもいるまいって、その挙句の大喧嘩さ。一度でいゝから縛らせてくれと頼んだのが、そんなにおかしいと思うかい——」

君は虚々実々を織り交せて、尚も女房をこきおろすのだ。勿論、その間彼女の顔色を読むのを忘れてはいけなない。

妾族は、誰しも、あわよくば本妻の地位をねらう願望を持ち合せているから、本妻と逆の立場になることで、旦那の意を迎合したつもりの浅はかな錯覚を起し易いものだ。

よろしい、奥さんがその気なら、この私が、旦那に一ぺん縛られて上げて満足させてあげようと云う気になってくる。「変なお話だけど、私が奥さんだったら

貴男の云われるまゝになつてあげられたと思うわ」

「だろう……。お前ならそう云つてくれると思つたよ。だから無理してやつて来たのさ。どうだい、縛らせてくれるかい」

「痛くない程度なら我慢するわ」

おかしい悪趣味だとは思ひ乍らも、先刻奇クを覗いていたから、さして驚きもしない。

君は徐ろに奇クをとり出すと、

「これなんだ、さっき云つてた雑誌は……。一つ簡単なのをやってみるかな……」

とでも云い乍ら、閨のつれぐに試みるとよい。一度縛られたら二度も、十度も同じ事と彼女は観念する。

あとは一瀉千里。本宅には置けぬ、責め道具や、君の好む緊縛用の材料を諸々に整えておくまいだろう。

変った責めや、緊縛をしたい時は、その夜は縛らずに黙っている事。

彼女は緊縛の習慣性からきつと不審に思つて訊ねるに違いない。

「ねえ、今夜はどうして縛らないの、変ネ」

君はそこであく迄黙っている。彼女は追々不安になってくる。

「本当にどうしたのよ。今夜に限って……。ね、そんな難かしい顔しないで、いつものように縛って……。ねーったら、さあ縄をもつて来たわ。どんな事してもいいわ。私、我慢するから……。ねえ、縛って、お願い……」

そこで君は淡々げに、

「一寸、面白くない事があつて、気が進まないのだが……。そんなに云うなら縛つてやる。だが、今夜はチト手荒いぞ。それでもいい」

かい？」

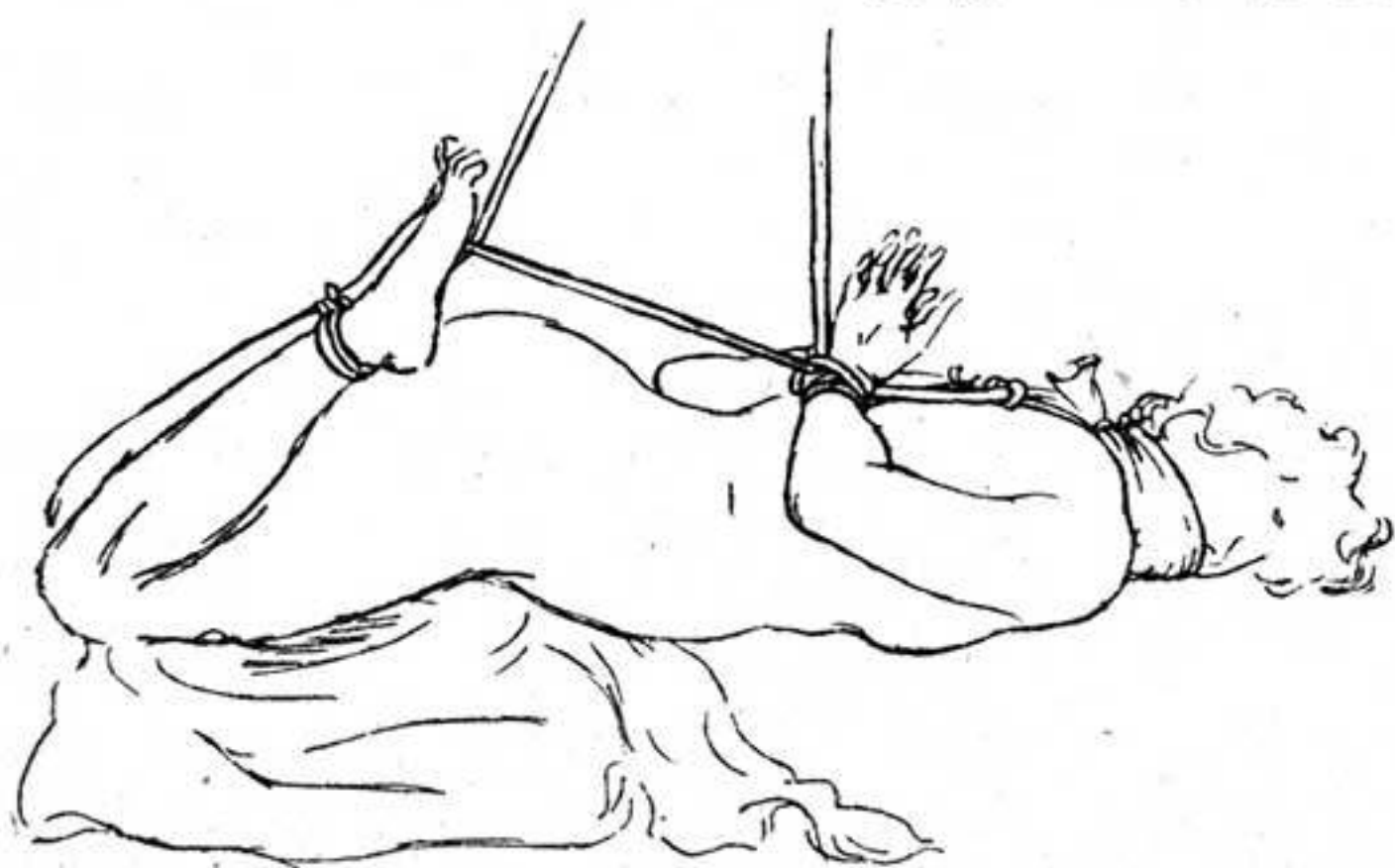
「ええ、どんな事されても……」

行きがより上、彼女は観念して君に体を投げ出すだろう。

しからば、そんな夜は、日頃の幻想、夢想、想念を実行に移すべき最良のチャンスでもあるから、君は遠慮会釈なく、逆吊り、海老責め、梯子責めなり、奇抜、卓絶した凡ゆる手段を構じて、鞭を使つてもいい様に、猿轡も忘れずにはめておいて、心行く迄堪能すべ

派手な模様の腰巻がぱらりとはずれて、茹玉子の薄皮をクルリとむいた時のような新鮮な感じ、料理台の上ののったイキのよい鯉、然し、足首と後手首を一緒に引き上げられては、得意の跳躍を試すすもなく大人しく観念したというところ。首縄が締ってくるのでどうかと思うが、このまゝじわじわと滑車で吊り上げていったらどうなるだろうかというサデイストの楽しい空想が湧いてくる。

腰を少し持ち上げるようにしているのは足首が痛いからだろうか。





きである。往々にして、この様な時にこそ、君の日頃のカメラ熱が思わぬ役に立つものであることも、チヨイト附言しておこう。

——未亡人の場合——

なるべくは引揚者の方がいい。何故かと云うと、彼女達は往々にして、満州、中国、ソ連辺りで、被虐の状況を具さに見聞し、或いは自ら体験したかも知れないからである。

未亡人の共通の不満は……。謂わずと知れている。君は彼女達その不満を解決してあげる事が、彼女達にとっても、生活をエンジヨイする事になるのだから、共存共栄でもあるわけだ。

引揚者の話には、必ずと云ってもよい程に、三国人の暴行、強姦

凌辱の事件が出てくる。それに伴う緊縛の話もチラ／＼顔を出す事必定である。仮に彼女が嘗って縛られた事があるとすれば、「そうですか、そりや随分ひどかったですね。で——、縛られた時はどんなお気持ちでした？」

「そりやもう、生きた心地しませんでしたわ。はたで皆さんが、順々に犯されて行くんでしょ。もう駄目だと思いましたわ」

「よく無事だったですね」

「ええ、まあお蔭さまで……」

「そう、本当によかったですね。でも皆なと同じように裸にはされたんでしょ」

「ええ、下着なんかすっかり剥がれて……」

未亡人はこゝでポツと頬を染める。大体こんな場合、恐らく無事にはすむ筈はないし、もし無事済んだとすれば、彼女の話は、つくり話か、人の噂に過ぎないと知るべしだ。

さり乍ら、こういう話になると、彼女はさながら、悲劇のヒロインの如き想定の際に、相当心臓強く、あからさまに喋りたくなるのが共通である。

「こんな姿じゃなかったですか……」

君は、そこで愛読の奇クをとり出すと、バラ／＼とめくって敗戦の悲劇を描いた、一連の被縛面を、さりげなく見せる。

彼女はチラリとそれを眺め、ハツとして、慌てゝ眼を反らすだろう。見たい気持と見たくない気持の、交錯する刹那だ。

だから、君がねんごろになって、閨のひとゝきなどに、思いがけなく、

「ねえ、以前見せて貰ったあの絵、もう一度ゆっくり見せて戴けな

い？」とくる。

「怖いけど、何だか見たい様な変な気持……」

「僕が今、貴女をあの様にして、縛ると云ったら……」

「……………」

「嘗って貴女が、あの様に縛られたのだと思うと、何だかそれに対して激しい慾望を感じるのです。あの太樹の根元の、二本の杭に、磔の様に、両脚を一杯に拡げられて縛られ、首に囚人の木札をぶら下げられて、両手は大枝に腕の附根も脱ける程に強く吊り上げられている。露わに覗く卑々な男、といった絵——」

「不潔と羞恥。屈辱に唯、死にたかっただけです。……と云えば、私も無事でなかったことの白状になりますわね。だけどそうね。今にして思えば、これも凌辱への期待と云えるのでしょうか——」

亀甲型に背中の中中で締めつけた菱型縄の縛り方、無表情な両手首に或る程度の縛られ馴れが見えている。右側と左側の二の腕を締める紐の色が違っているのは如何したものだろうか。後手首が水平より少し上に上っているのは高手小手としては緊縛感のある方である。左右の紐は巾広いのであるから、もう少し締めつけてもいゝだろう首に廻った扱帯は前の方で咽喉にかゝっていないとすれば十分その緊縛に耐えられる筈である。折角、こういうに堂入った縛り方をしたのであるから、そこ迄徹底してやってもらいたいものである。投げ出した足先には更に力を入れて表情があった方がいゝ。



「……その期待……それを今もう一度貴女に知らせて上げたいのですね。」

君はいきなり立上ると、暴力に近い荒々しさで、なるべく変った縛り方を試みるのだ。

「いけないわ。そんな乱暴なこと。だめ……だめ……」

と彼女は一応の抵抗は見せるだろう。然し、一旦凌辱の弱味を知られた彼女なら、凡そ弱々しく、只管哀願の眼で君を見つめるに違いない。

君はこゝで押しの一手で激しい緊縛を加えても差支えない。未亡人と名のつく限り、一度は君以外の男性を知った彼女だ。過去の男性がサドであれば易々として、よし、そうした行為を恨む未亡人であったとしても、有り余るホルモンの余剰に苦しむ彼女は、再び得たこの回春の機会を減多に捨てはしないだろうから。

娼婦の場合——

所謂、赤線区域などと云われる世界に棲息する女達を相手にする場合、彼女をプレイの対象にしようと思えば、須らく左の事を心得るべきだ。

この世界で仲居さんと呼ばれる、通称遺手婆さんに対しては値切りに値切るべきである。

泊る場合、君は千円札の一枚位はそつと別のポケットにかくし持っておいて、

予定の支払う金を、無雑作にポケットから掴み出して、これだけしか持たない事を強調する。粘れば大抵相手は折れてくる。仲居を通じて帳場に亘った金は、厳然として、例え十円たりとも判っきりした存在で、この金は君の相手たるべき女性には四割程度しか当らず、楼主が五割四分、仲居が六分（大阪松島新地の場合）と相場がきまっている。お茶代と称してとられる百円、二百円も右と同じ割合だから、これも出さぬ方が得である。

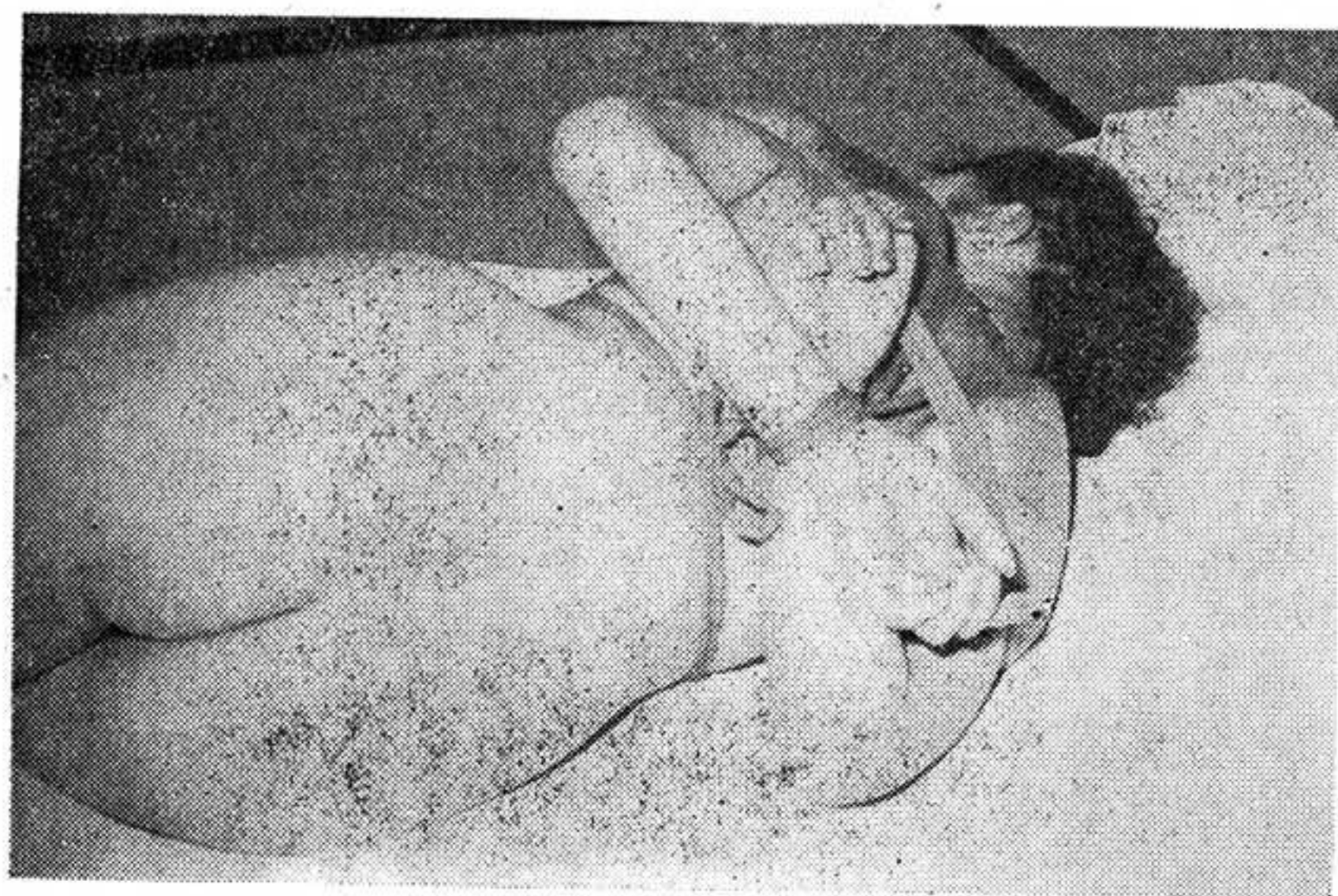
君は調子にのって、ビールや酒、寿司などを注文すれば、台物と称して、凡て倍勘定が不分律で、千円そこ／＼はすぐ飛ぶ仕掛になっているから、精々、水（おひや）で我慢すべきで、これだけは無料になっている。

閑話休題――

君の見定めた女性が部屋に落付いて、払うべきものは払い、いざ床をつける段になって、君は黙って、先刻穩し持った千円札を、ポンと彼女の前に投げ出す。

「どうだい、サービスしないか？」

君は目的を云わず、ニヤ／＼笑い乍ら、彼女の顔色を窺うべきである。彼女にとつて、この千円札一枚は、帳場を通る水揚料の二千五百円にも相当すべきものであるから、確かに触手が動く筈である。その態度



は忽ち豹変、話せる客と見て、少々無理はきいてもいゝ氣になってくる。だが、君が緊縛のプレイを目的とするのであれば、彼女本来の仕事の方の負担は軽くしてやるべきで、茲で二兎を追わんとするには、千円札一枚では、チト虫が好すぎるかも知れない。そこで君はズバリ打明けるのである。

「どうも妙な病氣があつてネ、その方はも一つ乗氣じやないんだが、芝居なんかの美しい（特にこゝに力を入れる）女の縛られるのを見てみると、無精にゾク／＼するんだ、それで女房を相手にしてよく縛ったものさ、おとなしいいゝ女房でね。僕の云う儘にいろ／＼に縛られてくれたよ。まるで二人が浦里、時次郎なんかの主人公のような氣持になって、形許りの折檻をしたり、遊女や腰元が責められるお芝居を二人で見れば、それを家に戻って、芝居氣にたっぷりにやったものさ。

その為、新建ちの家を引払って、昔風な天井に太い梁のある、大黒柱や床柱もある家をわざ／＼探して引越した程だ。勿論、はりに吊り下げたり、柱にはりつけの様に縛りつける目的の為だったのだ。僕にとつてはかけがえのないその女房も、肺炎がもとでとう／＼一年程前に亡くなっちまっかね。それからこうして、女房の面影に似た



美しくも立派なお尻をふんぽに拝ませ、貰えるポイズである。しかも、後手に白、シートの投げ、だ、れも、上にならば、何、時間眺めたい、お、御自由、素晴、あ、ある。全、水、密、桃、尻、に、ガ、ブ、リ、と、口、う、ば、甘、い、果、汁、が、進、り、出、る。う、い、な、魅、力、を、っ、り、て、い、る。カ、メ、ラ、ア、ン、グ、ル、が、よ、い、か、ら、肝、腎、の、お、尻、が、よ、く、リ、よ、く、強、調、さ、れ、て、い、る。紐、で、縛、つ、た、後、手、も、そ、つ、が、な、く、要、領、も、い、る。紐、を、上、げ、て、い、る。山、使、つ、た、も、の、り、も、この、縛、つ、た、方、の、よ、め、あ、げ、た、も、の、見、え、な、い、の、惜、し、い。

女を求めての遍歴さ。いつかは女房に似た、いや顔だけでなく、僕のこの気持を満足させてくれる女に巡り会えるだろうとそれを楽しみにしてね……。はかない話さ——」

君はしんみりと、半ば女房のよさを讃えて愚痴るのである。

馬鹿でない大概の女なら、そこで千円の意図が奈辺にあるか位ウスウス判る筈だ。女に多少ともマゾ的傾向あれば、体の切売よりも縛られた方がよさそうと打算的にとるだろう。唯、気心の知れ

ない初会の君に対して、一抹の不安を感じるかも知れないが。

若し、相手が、いさゝかでもいやな素振りを見せれば、君は電光石火、さっと千円札を引込めるがよろしい。

「なに、いやならいゝんだ。つまりぬ事を云って御免よ」

とでも云って見給え。

「構わないわ。でも余んまり変なコトしないでね」

ぐらいがオチで、千円のチラリ的魅力に惑わされて、女は素直に靡いてくるに違いない。

君は一応金を払った権利がある。まずはゆる／＼と携行した縄などチラツカせて、プレイにとり掛り給え。

生ぶな女はおとなしく声を殺し、すれた女は、痛いわとか、早くほめてよとか、往々に派手な声を立てがちだから、君は隣り座敷や、襖一重の廊下への気兼ねもあろうから、こんな女に対しては、逸早く猿轡をきつくかまして、専ら逆らえぬ様に手だてをしておき、股縛りなど用いて、凡ゆる角度から、緊縛の構成をつぶさに観察するのによからう。但し程々にしないと、何事によらず、最初から執拗くやると女に嫌われがちになる。この一回のみで捨てる気ならそれもよからうが、再び来る気なら、女の疲れた頃を見計らって、静かにいたわり乍ら、プレイを中止すべきである。

もう二度と懲々と云う態度で、碌々にもものも云わなければ、男らしくあっさり諦めること。

「本当にひどい事をして、いやあーね」

とか云い乍らも、艶な眼ざしの一つも送って来、床つけを拒まぬ女なれば、脉ありとして可なりである。

後朝の別れ、女は君を送り出す時、口癖の様に又来てねと囁き、

しようが、そこで一言、

「又、きつとくるけど、もっとひどく縛ってもいい？」

と聞いて、黙って女が眼を反らせば、それは社交辞令であるし、「だってあんな事されるの始めてよ。驚いたけれど、あんまりいじめないなら、又縛られてもかまわないけど……」

と言葉を濁せば、可なりと云うべきで、

「いゝわ、私貴男が好きになったの。だから、どんな恰好で縛られたって辛抱するわ」

とくれば、マゾ的傾向ありて、君のその行為を大いに飲んだ女性で、そんな女が見付かれれば、飽きる迄行くもよろしい。

実の処、そんな女性程、比較的早く飽きがくるのだが……。どうも男は勝手である。

——女学生の場合——

君が好顔の美青年であるとすれば、女学生の知己は、先ず君のシスターの友達とか、友人の妹が女学生だと云った場合が多い。

が、行きずりや、ハイキング、キャンプにも、近頃の女学生は仲々にどうして、勇敢であり、十代の性典や、十代の誘惑あれかしと心秘かに希っているものもあると云うから、君は比較的恵まれてもいるのだ。

彼女達の夢を壊さずして、君は思春期の彼女達を如何にすれば緊縛出来るか、任しておき給え。わけはない、こう云うのだ。

「僕等、演劇研究会のグループで今度演ず、スリラーものの稽古をやりたいんだけど、生憎な事に、ヒロインが病気で倒れちゃってね。君なら素質は充分だし、僕もグループに推薦しようと思ってい

る位だが、一日でいゝからお願い出来ないかしら、台詞のやりとりをうまくやつてくれる女の子は、君より外にないと思うんだ。助けると思つて頼むよ」

新劇なんか、特にロマンチックに憧れる娘なら、これで一コロだし、でなくとも、若し君に多少でも思召があれば、

「でも……うまく出来るかしら——」

と云い乍らも、ヒロインと云う言葉に、彼女は早くも乗氣になつてくる筈である。

「なに、わけはないさ。僕に台詞通りついて来てくれ、ばいいのさ。じゃ頼んだよ」

君はさつと言葉を投げ棄て、あつさりと立去り給え。君に芝居氣の必要な事は、この際当然であるが、うまくリードしていく為に、脚本に絶対緊縛の一コマを必要とするものを選び、縄や責道具は、目立たぬ様に程々に配置して、手ぐすね引いて待てばよろしい。

恐らく定刻きつかりに、彼女は姿を現わすだろう。期待に胸をふくらませてね。

君はごく自然に彼女を優しく迎え入れ、勿もらしく脚本を見せ、あゝしてこうしてこうなつてと説明し、あゝでもない、こうでもない、段々に彼女を劇中の人物へと融け込まして行くのだ。決して焦つてはならない。これが緊縛への導入の重要な一段階であるのだから——。なるべくは彼女に優越感を与えるのが尚よろしい。

いよいよ緊縛の場面へと来れば、君は絶対躊躇、尻込みしてはいけない。敢然と半ば命令する如く

「……そこで君は倒れる。そうそう……。出来るだけ虐げられた女の姿を現わすのだよ。そこへボスが乾分共と一緒に、ドヤドヤと侵

入してくる。君は恐怖の表情だ、冷酷なボスはいきなり震える君を押倒して、乾分共が君をがんじがらめに縛って、傍らの柱に括りつける。駄目だよ、縛られたポーズをしなくちや。うーん、どうも感じが出んね、丁度いゝや、幸いこゝに縄があるから一応縛るからねさあ、手を後ろに廻して。巻きつけといてもいゝけど、ゆるくなると後のお芝居で感じが出ないからきつく縛るよ。いゝかい……。

君はもがくのだ。そして絶叫するんだ。乾分は辺りに聞えるのを恐れて、君の靴下をむしりとつて猿轡をはめる。今日はまあこのタオルで代りにしておこう。これでじつと口を縛るからね……」

かくてこゝまでくれば、君は多少脚本を逸脱しても、もうすっかり君自身のものである。苦しみ、呻く姿を、君の脚本通り、さまざまに操るだけだ。如何ともすべては劇のストーリーリイと云う事に転嫁出来る。

挙句、君が好漢に紛して、このヒロインを助けに来る。君は素早く彼女の縛めを解き、相擁してのハッピーエンドと云う事になる。

「苦しかったろう、御免ね——」

とあやまり乍ら、飲物の一つも準備して、彼女に似合うアクセサリを快よくプレゼントして見給え。彼女はそれこそ、己れ自身にヒロインの幻を求めて、君の好意に感謝するに違いない。

「明日もう一度、稽古したいんだけど、来てくれる？」

と訊ねて、うなずけば、君は欲ぶべき果報者だ。

「こんな役目、もう二度とこりこりだわ」

とても云いたげに、仏頂面にふくれてきつと帰りかければ、残念乍ら君は諦めねばならない。

女学生の場合、君は最後まで、緊縛慾の本性を見抜かれぬ様にす

る事で、例え彼女が再三、君を訪れても、君は同巧異曲の緊縛のみの許り演ずると馬脚を露わしてしまうだろう。

柳の下にどじようはいないと云う諺を、よくよくかみしめて、時にはブラトニツク・ラブ・ロマンスをやり給え。緊縛のプレイが全部ではない。これも亦一服の清涼剤として、若い君の血に生きる飲びを与えてくれるだろう。

彼女さえしつかり掴んでおけば、あとはどうにでもなる。じやじや馬馴らしの名人は、古来余り急がぬものである。

× × × × × × × ×

あの手、この手を使つて見て、万が一その一つがうまく行けば、君は縄のプレイへの誘導者として、充分なる資格を備えている。

悪への愉しさと云おうか……

奇クの女性読者諸君よ。かくの如き手もあるから夢々油断召されるな。

(了)

新作マゾ・フォトについて

春日ルミ嬢構成にかゝるマゾ・フォトは、口絵に掲載したものの以外にも、各種の趣向のものを撮影してあります。すでに分譲広告した六種のフォト購入済の方は、代理部宛御照会次第、在庫品につきお返事いたします。尚、今後、いろいろのマゾ・フォトの撮影を企図しておりますので、御希望の詳細を御申越下されば、出来る限り皆さまからの趣向をとり入れて実施したく、春日ルミ嬢も、広範囲の読者の方々の希望を満たしたいといっておられますので、御遠慮なくお申出下さい。

女 楼 妓

助 之 純 杜



その女は奈々といふました。勿論、本名であるかどうかわかりませんでした。私はその日本人ばなれした名前がとても気に入りました。どこかに陰を持った、然し、その為にかえって、それが他の女にはない魅力として私は今でもその奈々という女を忘れることができません。本当のことを申し上げると、その外に奈々が私をひきつけた大きな原因がありました。それはあとで述べることにしましょう。

その頃、私はすでに結婚して一女の父でした。別に恋愛結婚というわけではなく、

只一度だけ見合をしただけで結婚したのでしたが、妻となつた女は、何一つ特徴のない平凡な人柄で、それだけに私のような地味な職業の者に適しているだろうと思つて、貰う決心をしたのでした。暫くは誰でもが経験するように、私も新婚の甘い夢にひたりましたが、間もなく、妻

の欠点が目についてくるようになりました。云い忘れましたが、私は老母と二人の中に妻を迎えたのでした。老母は、もうこれで、一切を嫁に任せられると喜んでいたのでしたが、勝気で男まさりの母とは正反對の妻は、いつも沈み勝ちの内気な性質で、時々、朝なども早く起きることが出来ない時がありました。そんな時、私は前の夜のことなどを考えて、疲れのためかと思つてみたりするのでしたが、そうばかりではなかつたようです。云い訳に妻は、頭が重いつか、腹が痛いとか申しておりましたが、何としても、私には妻の態度が解し難く、それが今になつて思い当たるふしがないでもありませんでした。

妻は初婚だと詐つて嫁いできましたが、本当は私の家へ来る前に、親戚の家の長男と夫婦になる約束で、その家に半年ばかり同棲していたこともわかりました。(つまり内縁といふのでしよう。戸籍には入っていませんでしたが)勿論、そのことは母には話していませんでしたが、私の胸の中ではいつもそのことがくすぶり、自分の所へ嫁いでくる迄の妻の想像が重苦しいわだかまりとなつて、私の心を蝕むのでした。そして妻の気鬱な性質が尚更私の疑惑を深めてゆきました。母は気の向く

ままに起きて炊事をし、表面は平凡で穏やかな家庭として、間もなく私達の間には一人の女の児も生まれました。

母には気にいらぬ嫁でした。すべてにくすぐずした緩慢な動作で、しかも、一寸も笑わない不明朗な妻に、私はだん／＼腹が立って、時には「どうして、そんな陰気な顔ばかりしているんだ」と、どなり散らしたくなる。ことが再三ありましたが、私の理性が僅かにそれを押えていました。時折、離婚という事も真剣に考えてみないではありませんでした。が、私が学校の教師として、この山村に赴任し、校長の仲人によって妻を買ったという因縁があったので、すぐと、そう離婚するとう訳にもゆかず、内心困ったことだと思ひながら、とうとう三年も経ってしまいました。

私が近くの街に教員講習会があつて行った時、奈々という女に逢つたのは、こんな頃でした。

初夏の快い風に吹かれながら街の中を散歩して、ふと私は目についた書店に入りました。山村では街に出るのも稀ですので、私は街に出た機会を見つけて雑誌を購入する事にしました。私が昨年の秋、奇譚クラブという雑誌をはじめて購入したのも、この街で

した。もう七月号が出ている頃だという期待と、最近、新聞で発刊広告を見た水原秋桜子の「十二橋の紫陽花」という随筆があるかもしれないと思つたからでした。

「水原秋桜子の十二橋の紫陽花ありますか」私はそう尋ねながらも、雑誌を並べてある売台に、すばやく目を走らせていました。特徴のある黒っぽい表紙に、なつかしいいつもの字体の題字がいろ／＼の雑誌の間に挟つて目につきました。早く手にとりたいものだと焦り乍ら、書棚を探している店員の返事を待っている、

「お気の毒ですが、売り切れてしまいました……」

揉手をしながら、背つきを降りて来た店員に、

「それでは、奇譚クラブの七月号を下さい」

私が思いきつてそう申しますと、別の店員が、

「あゝ、それでしたら、もうこちらさんに最後の一冊をお上げしたところですよ」

と云う声の方を見ますと、一人の若い女が代金を支払つて、風呂敷包の中にしまいこんでいるところなのです。私が残念そうにそれを見つめますと、女は一寸微笑み乍ら、御免

なさい——といった風に会釈したまゝすうっと出て行つてしまつたのでした。

私は、たゞぼんやりとそれを見送るより外に仕方がありませんでした。薄緑のボレロに同じスカートの、そしてピンクのブラウスに黒い紐ネクタイ、白い顔の微笑が私の胸に強く残りました。私は又、同じ街をあてもなく本屋はないかと歩き乍ら、何処かの道で今の人に再び逢うかもしれないという淡い期待を持ちました、とう／＼逢えませんでした。

そしてその夕刻、私は終の汽車に乗りおくれ、何処かの宿へと思つて出てゆくと、とある四辻の手前に三軒程の所謂、特殊喫茶と呼ばれる色街のあることを知りました。思えば、妻に対する私の疑惑と、妻の冷淡な態度で妻との間も、最近杜絶え勝ちでした。子供が居れば居るでその方への雑事に追われるらしく、むしろ私の方が遠慮しているような訳でした。私が臆病な歩き方で自分でもおかしく思い乍ら、その一番手前の家に近づいてゆくと、一人の女が門口から出てきて私の方へ声をかけました。

「どうです。遊んで下さいな」

フラ／＼と私はその声に引かれて夢中で靴をぬいで上りました。瞬間、妻と子供の事が

チラッと頭をかすめました。態と私はその

妻の顔に不貞腐れた表情を示し乍ら、階段を

昇る女の後について、四畳半の室に通されま

した。大柄な和服の女が障子を開けるヒマに

何気なく柱をみると、ナンバー六という数字

が見えました。そういえば、階下に二、三

の数字があったことを思い出しました。此処

は六号室という意味なんでしょう。私は何分

始めてのことであり、勝手もわからぬまゝに

その女の云うまゝに時間という事にして、

その金を払いました。その女は室の外へ出て

ゆき、間もなく又、障子が開いてはいって来

た女を何気なく見ると、あの昼間書店で雑誌

を買った女とそっくりではありませんか、

「あっ」

私は心の中で驚きながら、人違いかなと思

ってじっと見つめました。昼間の女とは変っ

た和服の女は、にこつと笑いました。

「やっぱり貴方でしたのネ」

「では、あの昼間本屋で？」

「そう、あの雑誌を買った女ですわ」

そして、お驚きになった——と私の前に坐

りながら云うのでした。

「どうして、あなたはこゝに？」

「あら、わたし、こゝに仿っている女ですの

よ」

「あなたが？」

私は信じられないまゝに、その人を見つめ

ました。もう三十を一つ位越しているでしよ

うか。むしろこの和服の方が似合つて、どこ

かの若奥様といつても人は肯く位、品のある

顔立です。

「わたし、この六号室の奈々。どうも、さつ

きの貴方だと思ひながらも、仲居さんの案内

するのを見ていましたのよ」

私達は同じ雑誌の愛読者というので、旧知

のような親しさで語り合いました。

品位のある女、教養を持つ女、問われるま

ゝに、私は自分をかくさず名乗りました。打

ちとけると、女は私のシャツや下着類の汚れ

などを、それはほんとに姉の様な調子で、

「今朝、出て来られたというのに、もうこん

なに汚れてしまったの？」

何気ない問いでしたが、私は今朝出かけに

妻がシャツにも気がけてくれなかつたことを

ふと思ひ出しました。私は何か云い訳しまし

た。それは、独り者は辛いという意味を云つ

たつもりでしたが、彼女は、

「誤魔化さないで、私はその人が独身か家庭

持ちか位直ぐわかるんだから」

瞬間、私は包みきれず一切を話してしま

ました。

「それは倦怠期というものよ」

私はそれには返事もせず、いきなり、女の

両腕をうしろにねじ上げていました。寝巻の

紐が恰好の緊縛具となりました。私は生れて

初めて女を縛つたのでした。初夏の夜のこと

とて、私達は互いに汗を覚えました。

「わたし、縛つてほしかつたの」

私が手首の結び目を解くと、女は目を見開

いて私の顔を仰ぎ、今まで巻きついていた両

手首の紐を整えながら

「でも、不思議、初めて逢つた同志なのに、

何んだかそんな気がしないわ」

「うん、僕も、貴女が忘れられない」

私は女の甘酸っぱい体臭にむせびながら、

こんな素晴らしい女を離すものかと思ひつゞけ

ていました。時間はとくに過ぎていまし

た。私は女に泊ると云い、金を渡しました。

女は（いや奈々は）一寸着物を引っかけると

それを持つて室を出て、暫くすると帰つてき

ました。

「ねえ、奈々さん、ぼく、僕と結婚して下さい、僕には奈々さんのような女性が理想的な

んです」

「……………」

「いゝえ、今の妻とは別れます。そして貴女を迎えます。ね、ね、奈々さん」

「私達はたつた今日始めて逢つた者同志よ、ね、杜さん、そしてわたしは商売女よ。誰にでも、この軀を売つたのよ」

「馬鹿、馬鹿」

私は、夢中で奈々を押し倒すと、今結んだばかりの紐を解いて、奈々の体を後手に縛り上げてしまいました。

「ねえ、わたしを縛つて貴方の気がすむのなら、いくらでも縛つて、わたしも縛られるのはいやじゃないのだから、ね、だから機嫌を直して帰つたらもつと奥様にやさしくしてやって頂戴」

夜明け、短い夜はすっかり明けて、七時頃、私は眼をさました。土曜日の会でしたので今日は日曜なのです。ふと傍を見ると奈々がいないのです。私は腕時計のネジを巻きながら、奈々が昨夜あてゝいた枕の方を見ると、私の枕の下に一寸のぞいてみえる白い紙片が目に入りました。はっと思つて急いで抜いてみました。

——昨夜のことは一夜の夢と諦めて、どうぞ奥様の許にお帰り下さい。女は所詮、男の



分の苦しみを人にさせたくない、特にあなたの奥様に。

私は一番で此処を経つて、坊やの処へゆきます。もう再びお目にかゝることはないでしょう。すべては一夜の夢でした。

かしこ

奈々

杜純之助さま

愛情を命とするものなのです。私は昨夜のお話をきいて数年前の倅せだつた人妻時代を久しぶりに、本当に久しぶりに思い出しました。私は夫を或る女にとられました。それからの苦勞が今でもつゞき、一人の坊やを生長させるために、夜のつとめさえする身となりました。偶然、夫の面影をあなたの上に見出して、私は弱い女になつてしまひそうで苦しみました。けれども、そうなつたらあなたの奥様から悪い女と怨まれるでしょう。私は自

達筆な鉛筆の走り書き、私には女の苦しみがかかるように思いました。不意に初めて逢つた男のシャツの汚れまで口にしたのは、そうだったのか、私は益々女の良い性格を知りました。

私は今でも、この奈々という女を忘れきれないのです。

(久巢村 秀画)

☆ ☆ ☆

続・浣腸マニヤの手記

——惠美子の日記より——

花村 惠美子

(1)

幼少の頃、トンボのお尻に麦稈むぎわらを挿込んでふらふら飛んで行くトンボの姿に興じたり、蛙のお尻に花火を入れて点火し、爆発と同時に白い腹を上にして惨殺されたグロテスクな死骸に、無意識的なサディズム感を味った記憶や、細長い金属やガラスの棒に、何故か羞恥の伴った愛着、興味の覚えた事、日常会話に出てくる官庁とか鑑長という言葉の語韻にすら浣腸を連想させてしまって、一人頬赭らめた事、病院で見たゴムや金属性の医療器具等を仲介として、肛門に一方ならぬ関心を抱いた事等、等、これらの事は、私一人の関心

事だったのでしようか。

路ですれ違う単なる行きずりの人にさえ、その人が美貌であればある程、浣腸と結合させ、その人のあられない姿態に胸はずませたり、集めた女優さんのプロマイドを見ながら、それら女優さん一人一人に浣腸されている姿を脳裡に想像して、言い知れぬ興奮と快感を味った女学生時代の秘密。

これらの事を一々数え上げたら際限がないでしょう。それに他の方にとってはさして興味ある事でもないと思いますので省略致しますが、恐らく浣腸器や浣腸されている場面を目撃したら、大部分の人も私と同じく、平然とした気持では居られないと思います。それ

は臀部（肛門）が性器と密着した位置にあるという条件が、私達に非常な羞恥心を感じさせるからなのでしょう。

「腔感覚は腸管に於ける排出時の快感の変形である」とフロイドは説明しておりますが、無条件でその説を私は肯定したいという気持ちを今迄の経験から抱きました。

ですから、肛門に異物を挿入したり、又は無理に排便を抑圧する事に依って、独得な快感を覚える事は、決して変態ではないのだ等と、自分流に勝手な解釈を施し、自分の性癖を強いて正常行為であると肯定しようと思っているのです。しかし私は、この性癖を若し他人に知られたとしたら、それこそ羞恥の為

抱く反面、私は大のはにかみ屋なのですから（嘘ではございません）浣腸される場合、実は浣腸される事を欲しているのだ等と思われたら、それこそ死を感じる位なのです。（そうしたスリルが、一層私を浣腸マニヤにさせたのかも知れませんが。）しかし、私の他人に浣腸してみたいという願望は日増しに強くなっていくばかり。正当な理由、目的の名に於いて浣腸の出来る機会の訪れます事をどんなに待った事でしようか。そのうち私は、或る事に着目したのでございます。それは、解熱剤があります様に発熱剤のあることです。甲状腺剤がそれで、中年婦人に見られます肥胖病の薬で、これを服用致しますと、かなりの高熱が出て、しかも体には別に副作用がないという便利な（私にとりましては）お薬。それを利用致す事にしたのです。先ず私は、自分の体に早速試してみました、少しの苦痛感をも伴わないで三十九度位の発熱現象が起ります。

お友達を招いた時、そっと甲状腺剤を服用させ、熱があるからと言って——。私はこの計画に、すっかり夢中になってしまいました。こゝで私は、その事より、甲状腺剤を飲んであたたかも病人を粧い、病院に行つて浣腸

された事を書きましょう。

家から遠く離れた小さな内科病院。その医師に、「朝方から熱が出て気分が悪いのですが」と、自分ながら感心する程の演技力で診察を受け「どこにも異常ないようですがね」と頭をかしげる医者に向つて、さも恥かしうに、

「実は昨日からお通じがないのですけど、お腹が張つて——」

「そうですか、それでは浣腸を——」

こんな具合で私は少しも怪しまれず浣腸を受けるのでした。浣腸器も浣腸薬も、そして浣腸受ける体位も、病院によって変化があり、その都度、私は妖しい愉楽に耽けるのです。と申しましても、決して私は露出症ではないのです。勿論、臀部を露出する時の体位に羞恥の混った興奮も覚えますが、私の性癖を完全に満足させるものは、何んと申しましても嘴管挿入時の直腸異物感と注腸される時の液体の温度と注腸感、それに排便を我慢する苦痛——肛門色情の刺激なのでございます。

浣腸器は大部分がイルリガートルで石ケン浣腸、体位は左側臥位で股関節を軽く曲げた位置。この場合最も厭な事は排便の時で

す。勿論トイレには行かせず、その場で仰臥位をとらせ、便器を当てるのですが、こればかりは羞恥の為に浣腸受けた事を後悔致します。股関節を開いた仰臥位というものが女性にとりましてどれ程屈辱的であるか——。この事は別に稿を改めて記す事に致しまして、お友達に浣腸した事を書きましょう。

(3)

A子さんは二級下のお友達ですが、A子さんに浣腸の対象を向けましたのは、私と大の仲良しだったばかりでなく、色白で可愛らしい容貌と育ちの佳さを表わした上品な態度、そう云う要素が、私の想像にマッチしまして、A子さんの恥かしがる様子や、あんなに可愛らしい人のアーマスをいじめたらどんなに——と考えたからでございます。

その日（夏休み中の）A子さんは、私の計画など知る筈もなく、デシンのサンドレスと云う少々大人びた服装で、私の招きに喜んで応じて呉れました。しばらくの間音楽を聴いたり、アルバムを見たりして騒いでおりましたが、我慢の出来なくなつた私は、ジュースのコップの中に甲状腺剤を入れたのを飲ませ、三十分位経つてA子さんの顔がホテッて

来た頃を見計って、さも驚いた風に、
「あら、A子さん、お気持ち悪いんじゃないかと一寸様子が変だわ。まあ貴女、お熱があるようだよ、どうしたのかしら。お熱計ってみようよ」

何んでもないというA子さんの腋下に無理に体温計をはさみました。三十八度五分。水銀柱が上昇すると流石に気になったらしく、「どうしたのかしら」と困ったような表情をする機会を逃さず、

「若し、悪い病気になったら大変よ。特に夏は注意しなければ。そうそう。衛生の教科書開いてみましょうよ」

こう言って私は、教科書の、原因不明の発熱症状の場合は、直ちに下剤か浣腸を行う、という部分を読ませ、

「若し赤痢になったら大変よ、A子さん。念の為に応急処置として——あら私、下剤なんてないわ、浣腸器ならあるけれど。学校で使用法教わったから私、出来てよ。さあ、ね。私と貴女ですもの。厭なこと、少しもないわよ」

そう言い終ると、私は鍵をかけ、厭がるA子さんを説得にかゝりました。どうしても恥かしいと言ってたA子さんも、心配になった

のかやっと承知しましたが、「私、一度もそんな事されたことないの。だから恐しいわ」と泣きそうになりました。それを聞いて私は、一度も浣腸の経験ないA子さんに浣腸出来るという欲びで、窒息しそうでした。と同時に、浣腸液を大量に注入しても別に怪しくないだろうと思い、50gのグリセリンを100

CCの冷水に混合しました。冷水の方が、催下作用が強いのです。30CCの硝子製浣腸器を机の秘密箱から出す私の手先を、A子さんは一寸見るとすぐ真赤になって下を向いてしまいました。私は、A子さんをベッドに連れて行くと仰臥に寝かせ、腰の下に枕を当て、臀部を高くさせ、スカートを引上げました。

A子さんは「アッ」という軽い悲鳴を上げましたけれど、私は強引に浣腸してしまい、「まあだ、駄目よ」と言って素早く亦30CCのグリセリンを吸引して——

「もう厭、お腹が痛いから止して」というのも意に介せず、とうとう150CCの液体を浣腸し終った私は汗びっしりでした。

脱脂綿を当てながら私は、願望の達せられた欲びと、A子さんの羞恥溢れる態度を凝視するサディズム的感じに、ボーとなっていました。

い私もA子さんから浣腸されたら——（流石にそんな事言えませんが）と、いろんな想像が一瞬、脳裡を走りました。

(4) イルリガートルプレイ

「もうお前の告白記など沢山だ。どれもこれも同じ事ばかりではないか、もういい加減にして止さないか」そう云う読者のお叱りの声が聞こえて来そうです。私も、書くのが疲れて参りました。でも、あと一つだけ、書く事をお許し下さいませ。

私に、（私の尊敬致しております）羽村さんの百分の一の才能が若しもありましたら、私の経験致しました事柄を、流麗な文章でもって表現し、少しは読者の方達に面白く読んでも戴けるのにとすると、文才のないことをつくづく残念に思います。でも、もう一つだけ書かせて下さいませ。私と岬冬彦との間に行われた、イルリガートルプレイの事を。

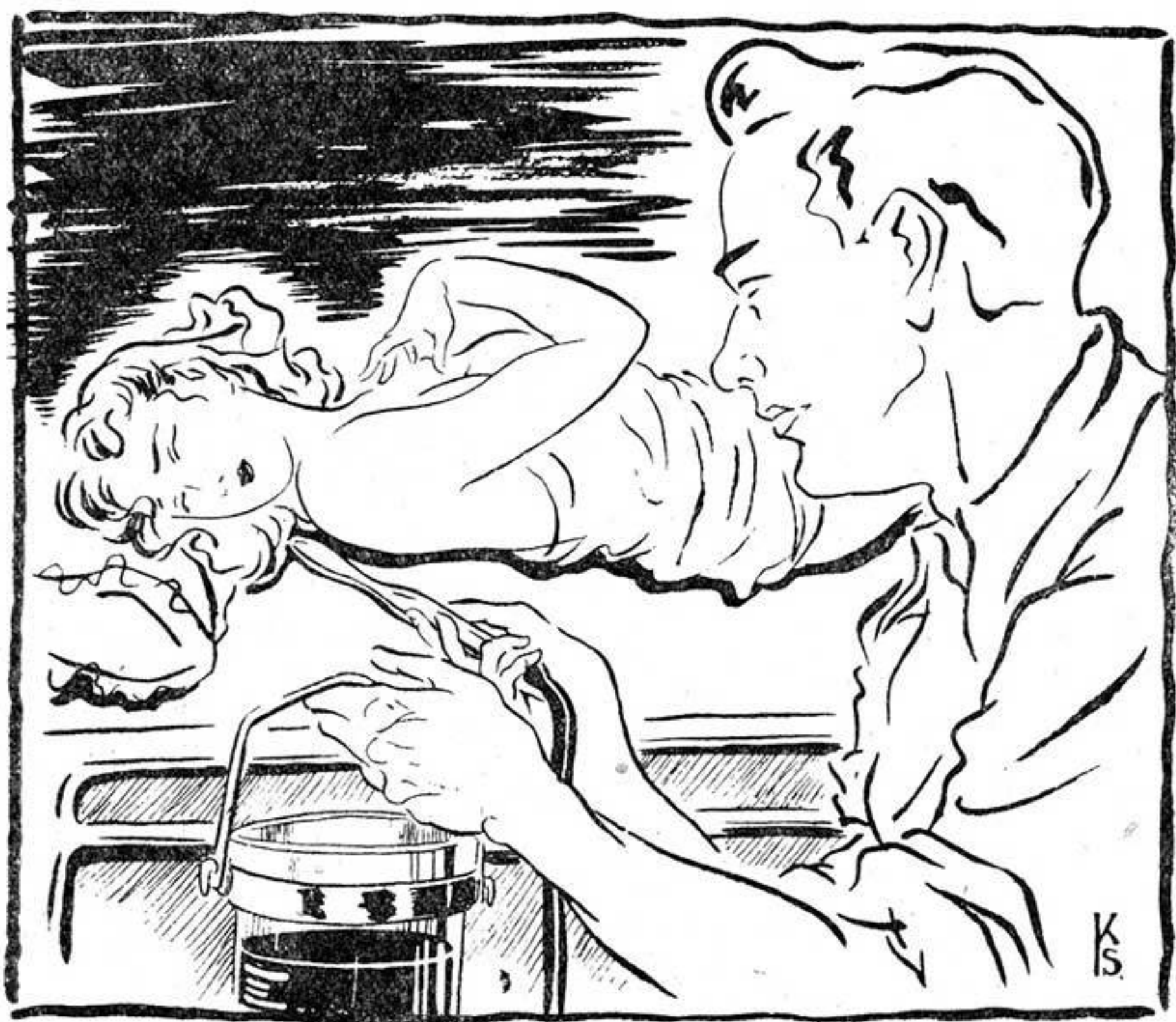
これからの事は、女学校を卒業致しまして洋裁学院に通っている頃の事でございます。

私の浣腸マニヤは益々強烈の度を加え、どうしても私と同じ浣腸マニヤの相手が欲しいと思っています時、私以上の浣腸マニヤで、私の性癖を徹底的に満して下さったのが岬冬彦

なのです。

「エネマシリンジ」という浣腸器を御存知でしょうか。嘴管と薬液注入口が両端についているゴム管の真中がゴム球となっていて、それを握縮したり手放したりする事に依って薬液が注腸されるゴム製の浣腸器で、比較的多量の浣腸に用いますが、私と岬とを結びつけた動機は、この「エネマシリンジ」だったのです。

家の人の手前、イルリガートルを買う訳にもいかず、硝子製の浣腸器では多量の浣腸には不向きなので、私は前々から「エネマシリンジ」を欲しい欲しいと思っていましたが、恥かしくてどうしても買う気になれず、かと云って欲しい気持はつのるばかりで、とうとう或る薬局にそれを見出した私はその前を素通りする事が出来ず、意を決して買い求め、薬局を出て少し行った処で会ったのが岬冬彦だったのです。彼は、私の友達、A子さんの遠縁の人でA子さんから紹介され、二、三度映画に誘わ



れた程度の交際でした。

北海道の大地主の次男で、こちらに家を建て、貰い、好きな絵の勉強をしている。とし

か素性は判かっていませんでしたが、A子さんの遠縁の人と云うこと、二十四才の好青年で気さくな人柄に、私はかなりの好意を抱いていました。その日、彼に誘われる儘、私は、秘密器具を持っている事を忘れ、郊外にある彼の家へ同行しました。洋式建築の、小じんまりとした彼の一室で、私達は絵や音楽の話に熱中しました。彼はその時、私の包装紙に包まれた四角な箱に目を止めると、中味を質問しましたが、どうして男の人の前で浣腸器などと言えるでしょうか。しかし彼は、私が薬局に入って浣腸器を買い求めるのを見たばかりか、A子さんに浣腸した事迄知っていたのでした。この事は後で知ったのですが、私がモジ／＼していると、彼はその箱を無理に奪い取るようにして、私の面前でひろげ始めました。私は逃げ帰る事も出来ず、中味の見られる事を齒を食いしばって見ているより他なかったのですがその時の私の気持と言ったら――。

「エネマシリンジ、浣腸器ですね。誰か病人でも——、僕は亦、オルゴールかとても思いましたよ」

平然と微笑をたゝえて言う彼の言葉にホッと致しましたものゝ、私はきつと真赤になっていたに違いありません。その日はそれで失礼したのですが、何故彼がその名前を知っているのか、別段気にもしませんでしたが、二、三度遊びに行き、急速に親しくなった頃彼もエネマシリンジを持っていたのには、非常に驚かされました。いや、二人の結びつきをグラフ／＼書いても面白くありません。途中の経過は省略し、私達のアブブレイに移りましょう。唯、その頃、私は洋裁学院に行くと言って、実は毎日の様に彼の家へ行っていたということだけ御承知下さい。

彼は、浣腸に関して、驚くべき程の知識を持っていました。浣腸は、排便作用促進の為の療法としか知らなかった私に、彼は色々な事を教えて呉れました。

「浣腸には、その目的によって、幾つにも分ける事が出来る。先ず最もなじみ深いのが、便秘の場合、或は誘導療法の一つとして人工的に排便を行わせる催下浣腸。これには、グリセリン浣腸と、石鹼浣腸、食塩水浣腸等に

よって方法がというより、使用浣腸器が異

る。これは、少量と多量の異いから、前者は普通硝子製浣腸器、後者二つはイルリガートル。これと反対なのが、下痢患者に収斂剤を注入して便通を止める止痢浣腸。方法は石鹼浣腸と同じだ。三番目には薬液浣腸。口から薬剤の取れない場合、肛門より注入するので誘導、鎮静、興奮、駆虫、止血等の目的。

恵美ちゃんが女学生時代、お母さんから食酢で浣腸されたのはこの部類だね。最後が滋養浣腸。これは、口から食物を摂取出来ない人の為に行うもので、牛乳、卵黄、食塩等を用い、イルリガートルかエネマシリンジを使用するね。この他、点滴浣腸とか、高圧浣腸とかあるけど、まあいいだろう。高圧浣腸と言えば、KKクラブという雑誌の三月号に、確か記事が載っていたと思うが、恵美ちゃん、KKクラブって読んだことある？」

知らないでどうしましょう。この時、私は彼も又KKクラブの熱心なる愛読者なる事を知り、飲んで胸がいっぱいになったのです。

(5) 催下浣腸

その日、彼は私にトイレに行く事を禁じました。最初の浣腸が彼によってなされるので

す。

私は初めて彼の秘密室に招じ入れられました。アトリエの一部で天井はガラス張りの採光の十分な室には、驚くことに、婦人科診察台とベッドが置かれ、イルリガートルが備えつけられてあるのです。それを見た瞬間、私は激しい羞恥心に襲われました。うつ伏せにして、顔をかくして浣腸されるのなら、多少なりとも羞恥感は和げられますが、婦人科診察台の上では——。やはり私も女なのです。しかし今更逃げるわけにも参りません。彼は私をシュミーズ一つにすると、台上に上がる事を命じました。更に私を羞恥のどん底におしやったのは、天井から垂れつるされた鏡。私の肢体は全部大鏡に写り、彼の行為が写し出される——。彼は500ccの目盛り迄イルリガートルに濃い石鹼液を入れると、ゴム管から流出させ、その先に、カテーテルを結合させたのです。それは、16号の軟性カテーテルで、直径9mm長さ20cmもあるのです。それを全部挿入されたら——。

私は直腸に暖い液体の流入を感じました。彼がゴム管のクレメントをはずしたのです。浣腸液が、漸次結腸を膨脹させてゆくのが感じられます。それは長い時間のように思われ

本誌と通信の旧号在庫

休刊又休刊で歯の抜けたような雑誌は集めていて嫌になります。奇譚クラブは一回も休刊していませんから皆様の本箱へきれいに揃います

本誌のバックナンバーはお買い洩れの方々の為に、左記の通り在庫致しておりますから、直接発行所宛御申込み下さい。尚旧号の総目次は十月特大号誌上に四頁に亘って掲載してあります

○奇譚クラブ○

昭和二十七年、十月号、十一月号（第十号より第二十三号まで各号在庫一部送共九十円）昭和二十八年新年号（一部送共二十円、六回分送共百円）

○KK通信○

ました。カテーテルを除く瞬間、何んともいえない灼熱感。注入液の流出が私の羞恥をかき立てます。こうなると、浣腸も立派な責めの一つです。しかも、恥辱を加味した。噫、でも私は、これを望んでいるのです。

も挿入し、数時間も放置するので、自然に抜け出る事を防ぐ為に、絆創膏で固定され、数時間もそうした姿の映る鏡を見ている事は、耐えられませんが、いつしかマゾヒズム的な快感が走ることにさえあるのです——。

(6) 薬物浣腸

催下浣腸の他に彼は、下剤を飲ませた上で止痢浣腸を行ったり、絶食させた上で滋養浣腸をも行うのです。しかし滋養浣腸にはほとんど苦痛は無く、唯恥かしさを我慢する程度催下浣腸に次いで厭なのは点滴浣腸でした。

これは、ゴム管の間に硝子製滴注球を連続させ、一秒一滴位の速度で、200—300ccの薬液を注腸するのですが、カテーテルを20cm

(7) 腸洗滌

しかし、それらのブレイにも刺戟が薄れてゆくと、彼は私を、結腸内の堆積便、瓦斯を除くという想定の下に腸洗滌を行ったのでした。これはイルリガートルのゴム管に硝子Y字管を接続し、送入管と排泄管とで、500cc程送入管で注腸すると、排泄管を開いて排泄させ、液がきれいになる迄（3000—6000cc）行うのです。腸洗滌の前には催下浣腸をせね

ばならないので、二重の楽しみになるわけですが、される私にとっては、二重の苦痛なのです。それに腸洗滌にはおそらく忘れ得ない事があるのです、それは、彼が私に無断で、刺戟を強める為にと称し、男の友達五、六人連れ、そうした私の姿態を見せたことです。診察台に私を定着させ身動き出来なくしてから、男の友達を連れこんだ時の驚ガク。まだ二十才になったばかりの処女（浣腸ブレイをしましても彼は決してそういった要求する事はせず、肉体的には完全なる処女だったのです）である私は、この時ばかりは恥かしさの為、狂気になるばかりでしたが、その反面かって経験したことのない——を覚えたことを告白します。あゝ、露出症ではないと言った口の下から、私は自分の心理をどう説明致したら良いのでしょうか。この他浣腸器を利用してのブレイはまだあるのですが、これ以上の事は、現在の私に書く勇気がございません。

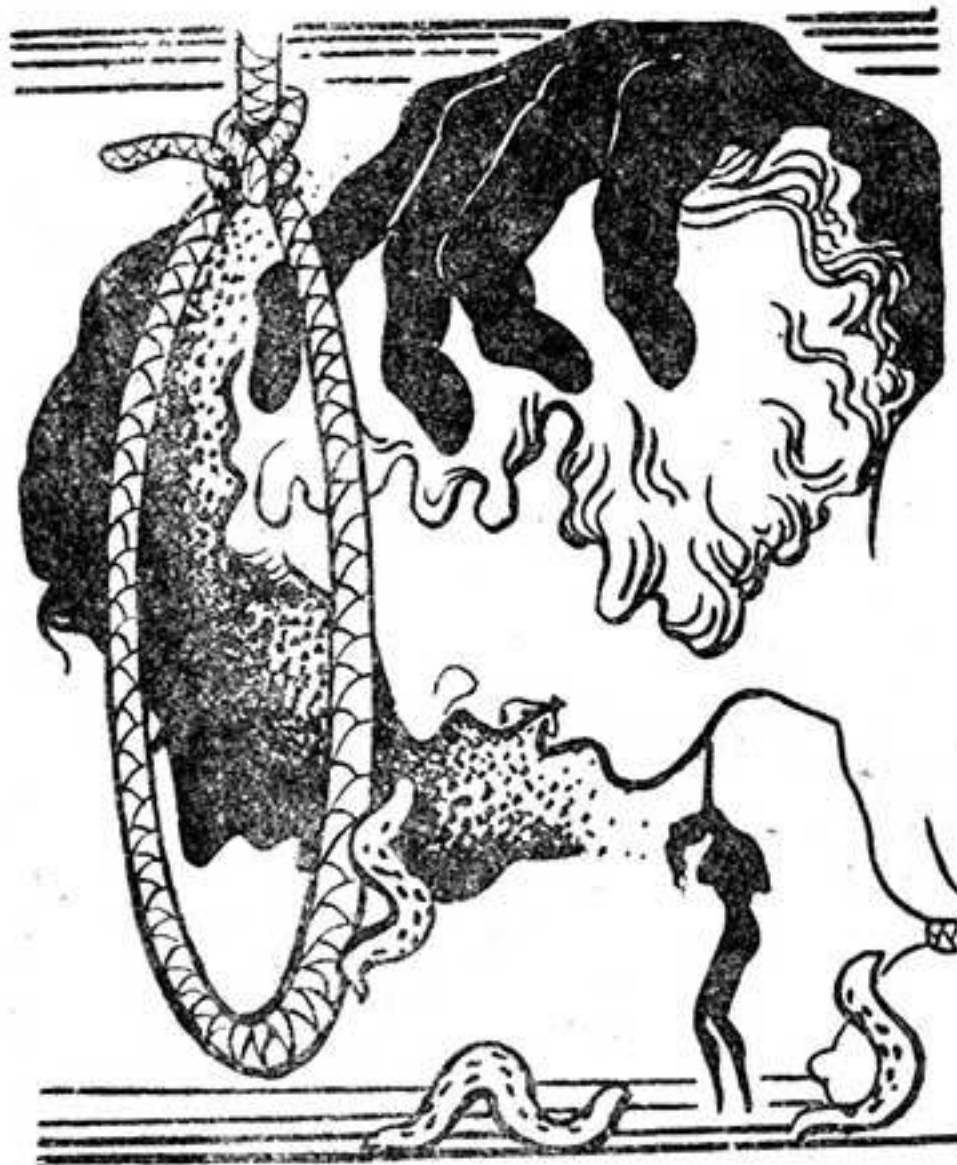
最後に、浣腸マニヤの方がおられましたらば、色々な体験を発表して下さいませ。

（杉原虹児画）

叢 虫 男 の 教 訓

中 谷 冷 一

西 満・画



(一)

最近「変質者」の件数も春、秋に比べてずっと少くなり、我々それに携わる者にとっ
ては、やっと一息というところ。この機会に

今迄私が体験して来た所謂「法医学―畑」に
起った事件の中から、私自身が「アブ」に属
すると考えるものの一つに就いて述べてみよ
うかと思ひます。

「法医学―畑」には皆様が想像してられる

以上に異常性慾に関すると思われる事件は
沢山あります。これは私が「マゾヒズム」(本誌五月号・M・Sブレイ参照)という色目
鏡をもって見るからそう見えるので、世間で
言うノーマル normal な人間から見れば何で
もない一小事件に過ぎないのかも知れませ
ん。これから述べる事柄も、その色目鏡を通
して書かれてあると考へていただく方がよい
でしょう。しかし、いずれにしても、私の体
験した三十幾つのアブノーマル・イベントツ
(abnormal events) の中の大部分が、当局
の手に依つてその余りの異常性の故にそれが
社会に与える悪影響を恐れて、新聞その他に
於ける発表を抑えられているという事から見
ても、やはり、私自身の色目鏡の為だけとは
言い切れない何物かがある様です。

尚、前記の理由に依つて、事件関係者の名
前、場所、その他、あまりにも詳細な内容ま
でを公表する事は私には出来ませんし、その
為記述が幾分表面的になり、又必要な時には
仮名を用うる事になりますが、その点、あら
かじめ皆様の御了承を得たいと思ひます。

(二)

一般に、法医学なるものが存在する意義

は、一にも二にも、そこに生じた「変死体」が、自殺に依るものか、他殺に依るものかを鑑別する事にあります。而して異常性慾に関する事件は勿論他殺も屢々ありますが、非常に特殊な場合を除いて始んどが自殺に帰せられています。しかし、この所謂アブニストの自殺というものは、その大部分が、始めてそれを見た人にとって、彼自身一人で遂行したと信ずるには余りにも困難な力、努力、信念の要る、又奇抜な方法に依って成されているのです。実際私達が見ても如何にして、その様なむずかしい方法を唯一人の力で、とる事が出来たのかと感心もし、又氣味悪くさせられる事が少くありません。

更に此処で一段と声を高めて置いて置き度い事があります。それは「アブの変死者には自殺に帰せられるものが多い」と前述しましたが、私の目から見て、どうも「過失死」が多いのではないかと疑惑をはさむ余地を持っている事です。即ちアブノーマル・プレイ abnormal play があまりにも「深み」へと進行しすぎた為に、自身では幻想の範囲で止めようと考えていたプレイ play がその成りゆきから、不本意にも事実上の死へ導びかれたのではないかと思わす事が多々あるのです。

私は未だ若くもありますし、此の道に於ける経験は「かけだし」に過ぎませんが、又、その未熟なるが故に、expert たる法医学部教授が「自殺」と断定しているものに対してつまらぬ疑惑をはさむのかも知れませんが、ノーマル normal な人間である当教授に対して、私がアブノーマル abnormal な人間であるという事が、私の考え方に対して確信を持たすのです。

いずれにしても此の道の所謂 expert と言われる人が何と言おうとも、私の目で見た限り「過失死」と考えられる場合が多いのです。此の点に関しては今後とも出来るだけ詳しく述べていきたいと思いますが、皆様にも是非一考を煩したいものです。

(三)

昭和二十八年、五月忘日早朝、警察からの連絡によって「変死体」発見場所たるK寺裏へと急行した私は、一目現場を眺めるなり、その凄さに全身の毛が逆立つのを覚えしました。何と昼なお薄暗い当現場の、数多い大木の中でも最も高いかと思われる十五米程の銀杏の木の下に頂に近い一本の枝に、真裸の男が首を吊っているのです。而もその死体を枝

からはずして降すに及んで、(十米程の高さに下っている死体を地上まで降すのには、大の男が三、四人も掛けて大仕事でした)これまでの驚きがほんのその一部であったことを悟りました。

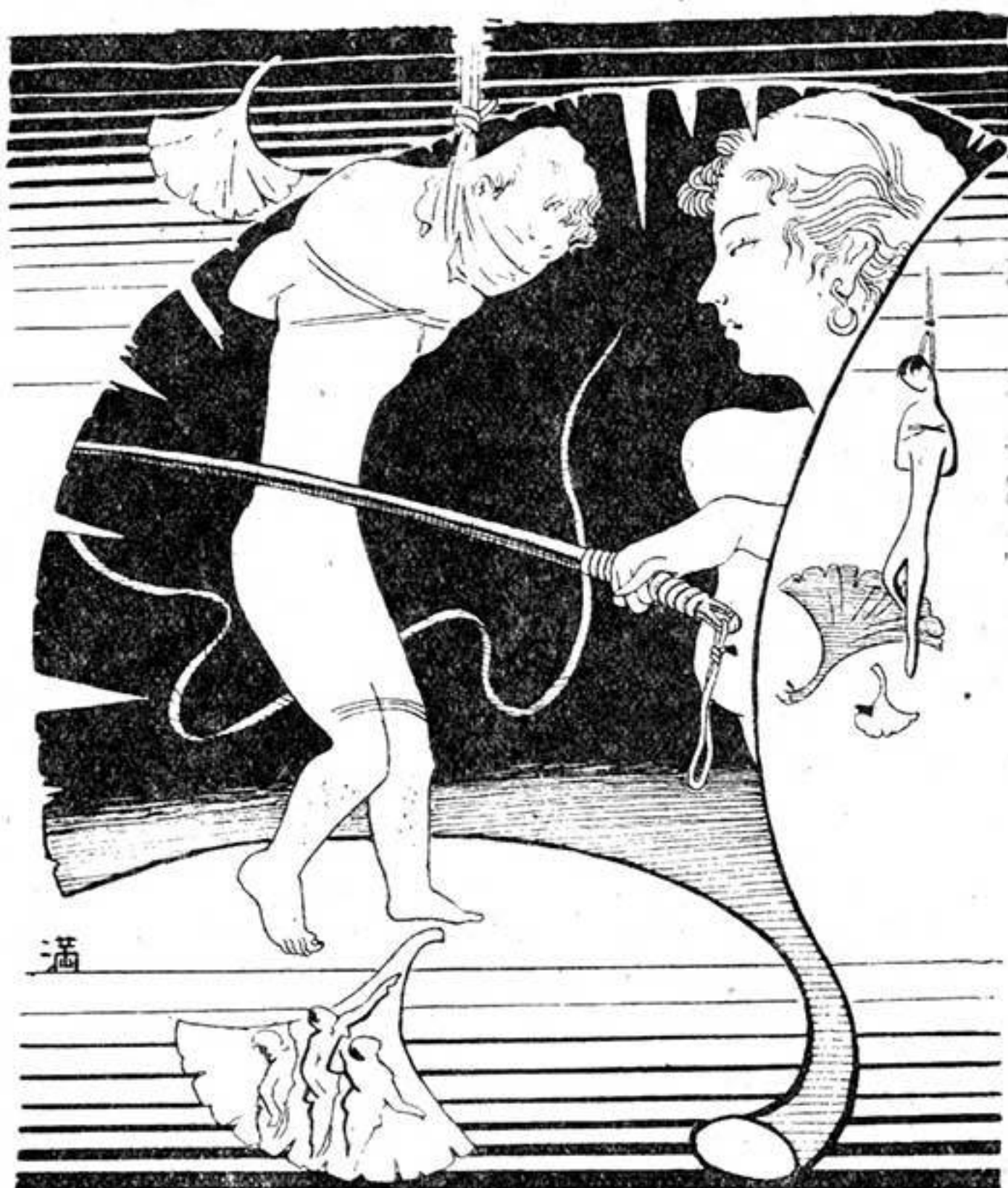
それまでは、死体のあった位置が余りにも高かった為に気が付かなかったのですが、いま地上に横たわるそれは、――

一糸まとわぬ真裸にひきむかれた四十代の男、中肉中背ではあるが四肢、肩、胸部等の筋肉は比較的よく発達している。が、しかし驚いた事には体中に全く毛がない。皮膚等あまり日に焼けていないせいか無氣味な程に青白く、その上毛がないときているので、まるで女の皮膚の様なのです。

不思議に思って、更に細く観察するとなる程毛が無い筈です。全身の毛をカミソリを用いたのでしよう。入念に剃っているのです。所々に剃り残された太い毛が「ポツポツ」と見られました。

しかし真に私に、驚愕とも恐怖ともつかぬ変動を与えたものは次に述べる事――これが亦、この「変死者」をしてアブニストと断定する主因となったのですが――に依ります。

まず、両手は後にまわして高手小手に首繩



をかけて縛りあげられ「二の腕」から胸にかけてぐっと喰い込んだ麻縄が三巻き、その先は後手の位置から下に垂して股間を「ぐっ」としぼりあげ、胸の縄に連結してある。同時に足も揃えて足首、膝関節、大腿の三部で固く結ばれている。芋虫ほどにも動くことの出来ない、完全に緊縛され自由を失われた男。

更に、口には頬をもくびれよとばかりに幅広の白布で猿ぐつわをはめられており、しかも、その白布は汗にまみれて臭くなった女のブラジャーなのです。口中には固く押しこまれた女のブロース全部がはいりきらず、その胴をしめるゴム輪の部分が、ブラジャーの猿ぐつわの下からはみ出している。

係官の手によって引きだされた、そのブロースは男の分泌物によって汚され、その悪臭には私達でさえも顔をそむけずにはいられませんでした。

この様な恰好で——まるで「みのむし」の様に——地上十米余で首に縄を巻いて吊り下っていたわけです。

早速開始された

教授等の綿密な調査によって結局「異常性慾者の精神錯乱の結果生じた自殺、その直接死因は窒息にして、前日午後十一時頃。彼の体に対してなされている緊縛は彼自身の手によってなされたもの」と推定されました。即ち

第一に、首に生じた索溝の状態から、それは首を吊った時に始めて生じたものと考えられ、この頸部以外に死因となるものが悉無のことから、殺してから担ぎ上げたとは考えられず自分で登ったものと思われる。

第二に、もし仮死の状態にして担ぎ上げたとしてもそれは非常に困難なことで殆ど不可能と思われる。(死体となると大層重く、老婆の死体を首吊り自殺に見せかけるべく梁に吊すとしても一人の若者の力では、到底不可能である)

第三に、——例の首を吊った木が割に枝の少い大木であったので容易にわかったのであるが、——最近では、唯一人の人間が、それも、登った痕跡しか認められない。

第四に、「変死者」の生前の状況から、人に恨みを受ける原因が見出せない。

第五に、「変死者」は最近、神経衰弱気味であった。等の理由からです。

なる程、「遺書」が無いという事も精神病

者の発作的自殺と考えれば説明はつきます。しかし私が前から主張している事はこのcaseに於てもそれが「過失による自殺死」と考えられないかというのです。

これに対して教授は「勿論、過失死と考えられない事はない。が、しかし、いくら abnormal な人間だとしても、あの様な高い危険なところで幻想の play を楽しむわけは無いではないか。」と説明されます。

しかし私は敢えて言いたい。私が同じアブニストであるが故にそれがわかるのだと。

又、アブニストもその度がひどくなると、その様な傍から見ると目をおおいたくなる様な危険な事も、彼自身の性癖を満足させる為には必要になるのではないのか、それは想像に難くないと。

そして私がこの「変死者」になったとして彼のその時の心理状態を、一、二想像してみました。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

まず、サチストである一人の美しい若い女性を想像する。彼女は手に太い皮鞭を持って体中の毛を剃る様に命令する。彼女にとって自分の奴隷であるこの男が力強さの一つの象徴である濃く太い毛を持っている事に対して

不満を抱くからである。彼女の奴隷が彼女より強そうに見えるなんて、おおよそナンセンスだ。彼は体中の毛を剃らされている間中、彼女の皮鞭を顔に、手足に、体軀に受け続けたことだろう。

やがて、やっとの思いで剃り終った彼は、男の肌とも思えぬその青白い皮膚を彼女のためにハイヒールで蹴られ踏みつけられる。皮鞭は彼の体にとこるかまわず炸裂する。力尽きた男は傷だらけにされた体を横えたまま、彼女の脚下に身動きも出来ない。

その様な彼をしばらく心地よさそうに、じっと見下していた彼女は、やおら男の頭髪をつかんでひき起し用意した麻縄で彼を後手にして高手小手に縛りあげる。胸に「二の腕」に、ぐっと喰いこんでくる縄目の痛さ。男は、じっとその苦痛をこらえる。しかし遂には耐えられなくなって思わずあげる呻き声、体をそらして、縛られることから逃れようとする。

「何よ、うるさいわねえ」彼女のハイヒールの一撃を「いや」という程、背中に知らされる。

益々加わってくる体の痛み。彼女がハイヒールの足を男の肩にかけて首縄をひきしぼっ

ているのだ。更にその先を股に通してしめあげる。

いまや、その苦しき、痛さの為に、恥も、外聞も忘れて呻き声をあげ叫び声をあげてあばれる。

「奴隷のくせに反抗するの。静かにしないとろされるのよ。」

冷やかに、のたうつ男を眺めていた彼女はやがて彼女のはいているズロースをぬぎ男の鼻をつまんで無理にその口に押し込む。そのズロースは彼女の分泌物によって非常に汚れている。特にその股にあたる最もよごれた部分を口の奥に入れられた男は唾と共に、彼女の分泌物を共に飲み込まなければならぬ。男は更に彼女の汗で臭くなったブラジャーによってその上をおおわれ、完全に猿ぐつわをされる。もう呻くことも出来ない。

「さあ、立って歩きなさい。」彼はそのあわれな姿のまま、彼女の持つ皮鞭におどかされて夜の闇へと追い立てられる。

彼は彼女の不機嫌を買ったためにその様な恰好で死刑場へ自ら歩を進めなければならぬのだ。刑場への間中彼は彼女の為に邪慳にこずかれ、蹴りとばされ、鞭打たれる。

間もなく刑場であるK寺裏に追いこまれた

彼は彼女から死刑の方法を教えられる。「その大木の頂きに登って首を吊れ」というのである。彼は「どうか命だけは」と彼女の前に跪き頭を地面にすりつけて命乞いをするが、彼女は聞き入れない。男の頭をハイヒールで蹴り上げ、残酷な笑みを浮べるだけである。

ニツと「への字」に曲げた彼女の真赤な唇、男は後手の縄だけを解かれると、皮鞭で大木の頂へと追い上げられる。彼女の手には、いつの間にか黒光りのする一挺のピストルがにぎられている。喘ぎ喘ぎ、最後の力をふりしぼって木をよじ登る男。その後から彼女は皮鞭とピストル、麻縄を手にして軽々と追いついていく。

やがて頂きの一枝に達した彼は枝にしがみつきのながら、彼女に最後の命乞いをする。その返答としては、彼女の手にする皮鞭が彼の体に、ひととき高く鳴っただけである。

彼女は麻縄をとりあげると、なおも必死に命乞いをする、すっかり反抗力も失った男の手を後にねじ上げ前よりも一層嚴重に縛り上げる。同時に足にも縄をからませる。

ゆっくりとブローズ・ブラジャーの猿ぐつわが、弛んでいないか調べ終った彼女は、遂に残りの麻縄をとり出し、その一端で輪を作

って彼の首にかけると、別の一端をそこに出ている大枝に結びつけた。

嚴重に緊縛され芋虫のようになった男は、今や手で枝をもつて体を支える事が出来ない。首には、自分を吊すための縄をかけられ大枝の又の上に立たされた彼は、体全体を動かして一生懸命に踏みはずすまいと重心をとっている。

「私の奴隷になった男は、皆な最後はこのようなよ。くやしいでしょう。」

彼女は冷く言い放つと愛用の皮鞭をにぎりなおし、「二つ」「二つ」と男を打ち始めた。歓喜に体を打ちふるわして、その衝動で男の重心が「ぐらっ」とゆらぐ。しかしなお彼は執念深く落ちまいと喘いでいる。

一瞬彼女のハイヒールが男の腰を思い切り蹴りあげた。男は声もなく落ちていった。そして、その首と枝とをつなぐ縄が「ぴん」と張り切った。

(四)

彼はこのような幻想を頭に浮べて、深夜に唯一人心ゆくまま自縛自虐のプレイを楽しんでいたのではないだろうか。

いや、実際、彼は教授の言う所謂精神錯乱

等に陥ってはいなかっただろうし、まして始めから自殺するなんてことは考えてもいなかっただろうと思うのです。

私達が軽いM・Sプレイをするのと同じ調子で、彼は一人で、そのアブニストとしてのこの恍惚感を味っていたのでしよう。

そしてその疲労から不幸にも足を踏みはずしたか、或は途中で急に甘美な陶醉からさめて平静な自分に帰った為に生じた脱力感或は恐怖から、足を踏みはずしたのでしよう。

又は我に帰った彼が、しかしその脱力感からどうしても自分で縛った後手が解けず、救いを求めるにも猿ぐつわのため声も出せず、その「あせり」が彼をその様な結果に導いたのかも知れません。

いずれにしても、一方彼の死を實際に「自殺」によると考えるにしても、他方「過失による死」という考えも同等に評価されねばならないと考えるのです。

又例え彼の死が、その恍惚とした夢心地の中で幻想と現実との一致を錯覚し、無意識のうち生じたとしても、それは所謂精神錯乱というものではなく、やはり過失死に属するものではないでしょうか。

女性美としての「腕」について

森 卓 志

山口二三夫・画



を通して下さった読者の中に、その幾人かは私と同じ事を考えて居る事であろうと独り想像する歓びでありました。

私は「奇ク」の編集部が、私の

拙文に相応しいカット入りで、しかも大きい見出しで世に紹介して下さいた御厚志に深尽なる敬意を表するものです。

私はあの時、「何れ長い告白を書きたい」と約束したものでした。しかし後から考えてみますと、告白なんて、そんな大それた程の発表力も内容も持ち合わせてない私である事に気が付き、おこがましく思つたものです。

しかし折角門戸を開いて下さった編集子に對しても、私はもう少し私の務めを果させて貰いたい慾望に駆られ、再び「腕」についての筆をとってみたのです。

凡そ世に、性感情程各人各様、複雑多彩なものはございません。これは人類の一大謎であります。「奇ク」を毎号拝見して居ましても、私には想像もつかない様な変型を常に見せられて居ります。恐らく読者皆んながそうでしょう。「私はこういう恰好に興奮する」とか、「こうしてこうする事が何ともいられない」とか、「こんな相手が欲しい」とか、それは／＼ほんとに、「何でそんなのがそん

本誌十月号に、私の拙文「女性の腕狂崇について」をお載せ下さいまして、私は夢かとおばかり感激致しました。唯に私の書いたものが活字となつて出たという事の歓びに止まらず、それよりも、もつと、私の拙文によつてあらゆる類誌にも従来見出し得なかつた新しい分野、「腕」の世界が拓かれ始めたと言ひしれぬ歓びであり、そして此の拙文に目

なに興奮するんだろう」と思われる様な記事が毎号々々掲載されて居るのだから、世にこれ程不思議はありません。しかし斯く申す私の「腕」についての讚美もやはり人は同様にアブと見做すでしょうか。

それは先ずそれとして、こゝで少しく私の打明話に筆を向けるとしましょう。

人間、恋の始まりは誰しも早いものと聞きます。私も淡き恋感情の芽生えを見たのは、やはり小学校の四年か五年頃だったと思います。クラスで一番だった私は、何時しか口の悪いクラスの者に一級下の女生徒のこれ亦首席だった一少女との良い仲を言いふらされたものです。子供心に見るこの少女は、色白の特にきれいな人でした。夏の夕方など上品なワンピースを着たこの少女は、よく私の家の裏道を散歩して通って行くのを、私は小さい胸をはずませながら他人に気付かれない様にしてその姿を追ったものです。ほんとに白いスナナリとした愛らしい「腕」をして居ました。今考えてみると、やはりあんなのが私の恋の芽生えだったのでしょう。強いてそれからと云う程でもありませんが、大体この頃から私は女性の「腕」に特別の関心を持ち始めて行った様です。

しかし私の家庭は士族のしつかりした家で両親も性方面の事は口に出しても言えない程の家風で、おまけに田舎でもありますので、私は極めてウブに育って行ったのです。然し私は私なりのこの性感情は、否応なく生長して行きました。小学六年頃は、同年の女生徒の級長をして居たやはり色白の手足のきれいな少女にあこがれを感じました。少女の美しい「腕」に対する恋慕の情は、私の慾情を制止するには余りにも弱きものでありました。

それは単なる視覚のみの領域にしか過ぎなかったからです。私の感情の勢いは、単に想い、視るだけの垣根は乗り越えつゝあつたのです。さういう美しい異性の「腕」を出来るなら手にとつて握つてみたい、思いきりさすつてやりたい、或はどうかしていじめてもやりたい、こういう軽いサシステイックな感情が芽生えても、それが実行出来ない場合、それは自分の「腕」に振りかゝつてくる事になったのです。こう云う事は性心理上当然なんだと思います。私は自分の「腕」を女性の「腕」と幻想し、可愛がる様になつて行きました。そして反面、いじめつけたりする様にもなつて行きました。この場合は、決して男性的な異常ではなく、男性対女性の感情は普通の

様に存在し、たゞ女性の「腕」に直接触れ得ないからその満たされない感情を我が身のもので代用して、幾分でも緩和しようという心理状態に過ぎない事を強調して置かねばなりません。

とにかくこんなわけで、私はその頃から独身である今日迄、女性の「腕」は飽くまでも手に触れ得ざる垣の外の思慕と視覚のみによるものであり、一方私の「腕」はこの他に更に触覚が自由になると云うわけなのです。少年時代の女性の「腕」に対するサド的感情の芽生えは、とりも直さず我が「腕」に対してさし向けられ、同時に私の「腕」はマゾ的な面を生じて行ったのです。人間は誰れでも、多少、この相反する両感情を有ってるものと云われますが、私は私の「腕」にこの両感情を賦課して行ったのです。この複雑な感情は独身時代には当然あらわれるものではないでしょうか。

とにかく、私は少年時代、私一人の書齋でシャツをまくっては「腕」を露出し、さすったり握ったり鏡に映しては自分の「腕」を色々動かして色々な方向から眺めたりしては、勉強の時間も忘れて夢中になったものです。こんな事は、日常のほんのありふれた事に

過ぎませんでした。時には寝床に縫針を持ちこんでは、一本一本ブスリブスリとぬくもりかけた自分の二の腕の奥深く刺し込んだりしました。十数本の針は頭だけ出して「腕」を動かす度に肉がつっぱる為針のところにたかまりと凹みを生じ、それを眺めては痛みと交錯した異様な興奮を覚えた事を記憶して居ります。そして針を抜くと、男ながらに白い私の「二の腕」には小さい血の点が出来てきて、うずく様な感覚でした。

女性の「腕」を恋慕する一方、こうした自虐の方面は思う通りの事が出来る利点を有って居たのです。或る時は炉ばたに行つて、まだ相当に熱い灰を「腕」一面にこすりつけたりもしました。灰を塗られた私の「腕」はスベスベと丸みを帯びて、一層女性の「腕」に似かよって見えてこれがうれしかったのです。又雨降りの後、庭のきたない泥を「腕」に塗りたくってよろこんだ事もあります。或る時は新しい石鹼に女性の「腕」を彫刻したものです。これは、私はもともと習字や図画手工等の手先が器用だったので、この真剣に組んだ「腕」の彫刻は見るも立派に出来て、私はそれを小箱に入れて机の抽出にしまい、時々とり出しては興奮の情を催さしめたもの

でした。私の「腕」に対する自虐は四季を問わずで、「腕」をまくるのも寒い雪国の冬でも、寧ろ私の慾情は高まる事さえありました。

或る冬の晩、勉強し終えた私の部屋は戸外とは反対に非常に暖かでした。私は窓越しに男性的な吹雪の光景を眺めて異様な興奮を覚え出し、そのまゝ着物をぬぎ、夏の半袖シヤツ一枚となり外へ飛び出したものです。

雪を混えた寒風は、遠慮なく私の覆いなき「腕」に突き当たりまとい狂いました。あの時の言い知れぬ快感、私は小躍りして雪中を駆け廻りました。私の「腕」は次第に感覚を失いかけて行きました。暖かい部屋に戻り、私は両手で「腕」をさすり、もんだ為漸く感覚と生色をとり戻してきてやがて私の「腕」はむしいものに赤くホテツてくるのを眺めて、私の心は天馬空を駆ける様なものだったのです。諸氏よ、まあ笑わずに読んで下さい。それからこんな事もありました。緊縛快感と云うものはこれは本誌にも度々出てる事です。が、私もやはり夙にこれを私の「腕」に試みて居ったのです。私は家人の留守をみては物置小屋に入って行き、荒縄で以て痕がつく程自分の「二の腕」を縛ったりした事が度々あ

ったのです。古臭い荒縄に緊縛された私の「二の腕」はコブの様にくびれて、脉搏がうずく様に肉を伝わって感じられました。机の中にも常に太いゴムの輪をしのばせて置き、時々これを「二の腕」に嵌めてはしびれる様なうずく様な快感にひたったものです。

私が自慰を覚えたのは、中学の卒業の頃です。前記した様にかたい家庭に育つたウブな私は、世の男性の平均よりはずっと遅かった様です。その時の色々んな空想事項、思慕事項や、姿態や、方法等これだけでもキンゼイ報告ならずとも相当な研究テーマとなりました。恋人のある男性なら或はその女性を臉にえがくでしょう。しかし全然異性の友達を持たない独身の男性が、健康な生理的欲求を果す場合は果して彼等は頭に何をえがき、何によって己れの性興奮を最も有効に發揮させる事でしょう。私自身の答は女性の「腕」であり、私の「腕」でありました。私はその時は非特定の女性の「腕」を私の「腕」に表現するのです。鏡の前に自分の「腕」を差し出し、或はさすり、或は握り、或はゴムバンドで緊縛したりして夢の世界に昇華して行くのを常として居るのです。

赤い光線のもとであると私の「腕」でも丸



味を増し、女性の「腕」に似てくるので興奮は余計たかまつて参ります。

以上くどくどと「腕」の自虐について書きましたが、これは先にも申しました通り飽く迄も女性の身代りとしての一人二役に過ぎない事です。その証拠に、私の目は絶えず世の

目は異様に輝きます。

御誌の緊縛写真も毎号固唾をのんで拝見します。こゝで一吋私見を申述べさして戴きますと、大抵の場合縄は「腕」と体を一緒にして縛ってありますが、こういう縄り方は「腕」に対する責め方としては弱いものとなり、ど

女性の「腕」に注がれて居るのです。又よく雑誌や本誌などの中でも、一寸でも「腕」についての箇所があつたら切抜いてとつて置く事にして居りますが、それがやはり男性の「腕」では興味が持てないのをみてもうなずかれると思います。やはり私も正常なる男性である以上、対象は飽く迄も清く美しいか弱き女性であり、そしてその「腕」なのです。

新聞写真でも婦人雑誌でも女性の「腕」の出て居る時には、私の

うしても一旦「腕」は「腕」だけを二巻き位強く縛り、それを軀幹の方に縛りつける方法をとるべきだと思います。でないと「腕」の外側は縄が当って居りますが、内側は縄の責めからのがれる事になります。「腕」は「腕」だけを十分に巻いてモデルにその責めを味わせるべきです。十月号の「変形後手縛り」は「腕」に対しては相当の責めの効果を果したものと、私は異常な興奮を覚えました。特にこれからは「二の腕」の緊縛は十分にやつて戴く事を望みます。

人類はもともと四足動物であつたものが、進化の途上に於て後足で立ち歩行する様になるに及んで、足は身体の支保として見るが如くにたくましく頑丈なものとなつたのです。

ところがこれに反し前肢つまり「腕」は、次第に高度なる人間文化生活に役立つ為、その筋肉は微妙な発達をたどり、見るが如くの曲線美優雅な芸術品に仕上つて参つたのであります。私は確かに人並以上に「腕」に対する魅力の持主なのでしょう。しかし人間は誰しもこの「腕」に対する審美感情というか、性感情というか、こういった気持を意識的か或は無意識的にか保持してゐるのではないでしようか。諸君、もし音楽会に於ける若い

女性の歌手が、肩から「腕」の露わなドレスを着て、深紅色のバックの前に浮彫りにされた事を想像されよ。この時の感情が果して長袖の衣裳の歌手を見た時と同一であると言ひ得られましようか。同一でないとするれば、やはりその違いの原因は露わにされた女性の肉体の一部「腕」を見せつけられたからと云う事にはならないでしようか

欧米の婦人は「腕」を露出する機会が極めて多く、夏は勿論、寒中と雖も夜会に出席する時等は惜しげもなく「腕」を露出してゐるではありませんか。長袖の女性と踊るのと、肩からきれいな「腕」の出で居る女性と踊るのと、あなたは同一の感情ですと言ひ得られましようか。長袖の季節から、急に「二の腕」から袖無し

の軽装の季節に変わったとしても、あなたは感情の動揺を少しも自覚されないとおっしゃるのでしようか。

私は、苦い女性が自分の



「腕」を惜しげもなく、そして誇らかに男性の目の前に露出したがる現実の様相は、男性心理の深奥には潜在意識的にも女性の「腕」を讃美し、そこに興奮の源泉を発見し、進んではサド的感情を喚起するものであり、女性の立場から観たら、自分の「腕」の露出心理と被虐願望の潜在意識的表現であるとみて居る

のです。女性がこの様に「腕」を露出したがるのは、明らかに自分の「腕」の美を誇って居る事であり、男性がそれを見て快よい感情をひき起す事を見抜いて居るからに外なりません。

だから、私はこゝで申したいのです。「腕」を讃美する私が、果してアブなのでしようかと。

「腕狂崇」とは云うものの、この性心理を精神分析学的にみると、実は人間誰れでも生れながらに具有する感情と見做すべく、寧ろ「腕郷愁」なのではないでしようか。

私はバレーを見てもレビユーを見ても夜会の饗宴を見ても、女性の美は「腕」に集約されると言つても過言ではありません。その曲線と動きの美は神の造物の最たるものでありましよう。しかし私の様な「腕」の讃美者でも、真に私の心を喚び起す様なすばらしい「腕」は仲々そうザラにあるもの

ではありません。或は、讚美者なるが故に、私の目はより以上に肥え、より以上に贅沢になつてゐるからでありましょうか。今は夏なので、何時何処でも女性の「腕」にお目にはかゝれますが、ほんとうに手にとってかぶりつきたい様な「腕」は少いものです。

私が「腕」を審査するとすれば、先ず皮膚が練絹の様に白く適当な光沢があり、そして見にくい毛のないこと、肉がだぶついたり無駄肉がなく、といって男性を思わせる様な皮下脂肪乏しく骨ばった感じがなく、適当な筋肉の上に適当な皮下脂肪が囲み、見るからに若々しい弾力性を備え、しかも柔か味とかなだらかなスナリとした曲線をなしてゐる様な「腕」、又長さはあまり長からず短かからずで更に女性らしいしとやかさとか弱さとはじらいを含む様な動き方をする「腕」、こういう「腕」が私の嗜好になつた「腕」であります、私は街頭を歩いて居って、仔細に女性の「腕」を観察し、理想的な「腕」の持主の何と少い事かとなげいて居ります。恰好は良いが色の黒い腕、或は剛い毛の生えてゐる腕、キメが荒かったり、ツヤがなく何となくタルンだ感じがしたり、赤い斑点があったり、吹出物が出て居たりする腕、静脈が青く透けた

り、或は皮膚上に現われて居る様な腕、関節の骨ばつてゐる腕、太過ぎたり肉のダブつてゐる腕、女らしい動き方をしない腕等々、全く興ざめる様な腕が氾濫してゐる事であります。

こういう人は何故、顔の化粧に気を配ると同じ気の配り方を自分の腕に対してもしないのでしょうか。腕を露出して歩くからには、幾分でも美しくする様な努力を払って欲しいのです。それから、私は女性の顔と肢体の美しさは必ずしも一致しない事を発見して居ります。天、二物を与えずと申しますが、寧ろ顔のきれいな女性は肢体の比較的美しくない人が多く、反対に肢体のすばらしく美しい女性で顔も同様にきれいな人が案外少ない。どうもこういう組合わせが多い様に思えて仕様がありません。私がもし結婚の相手を選ぶとするならば、精神上の事はさておき、肉体上の事について言うならば、顔が美人で肢体美の乏しい女性より顔は普通程度でも肢体美、特にその腕の美の備われる女性を選ぶのは勿論であります。その女性がはからずも、自分の腕についてのマゾの持主であつたとしたら私の歓喜は如何ばかりでありましょう。

筆おもむくまゝ、誠に雑然と書いて参りましたが、最後に編集部にお願いがございま

す。

女性緊縛写真の腕の縛りに対する配慮については、前に申述べました通りです。それから、性感情は各人各様であつて、従つて、本誌の内容も毎号共広く題材をとつて戴く事です。目次を開けてみて、自分の意に合った項目を遂に発見し得なかつた時の物足りなさほど到底編集部にはわかつて貰えないでしょう。例えば私なら、「腕」に関する記事が無かつたら「来月こそは」と云う一縷の希望でや々と長い一ヶ月を支える始末なんです。だからあらゆる読者の意同を、僅かなスペースでもよいから毎号取扱う様にして欲しいのです。それがとりも直さず「奇ク」から愛読者を散逸させない方法でもあるのです。それからこれは、これ迄の実績からみても失礼な言い草ですが、本誌を永く存続さす為には、類誌に見る様な、時にあまりにも極端な内容は寧ろ自らの寿命を縮める事になりますから、内容は飽く迄も性文献誌としての歩みを進められん事を望むものであります。

(完)

【註】身体各部の変つた狂崇をお寄せ下さるようお待ちします。

連載第三回

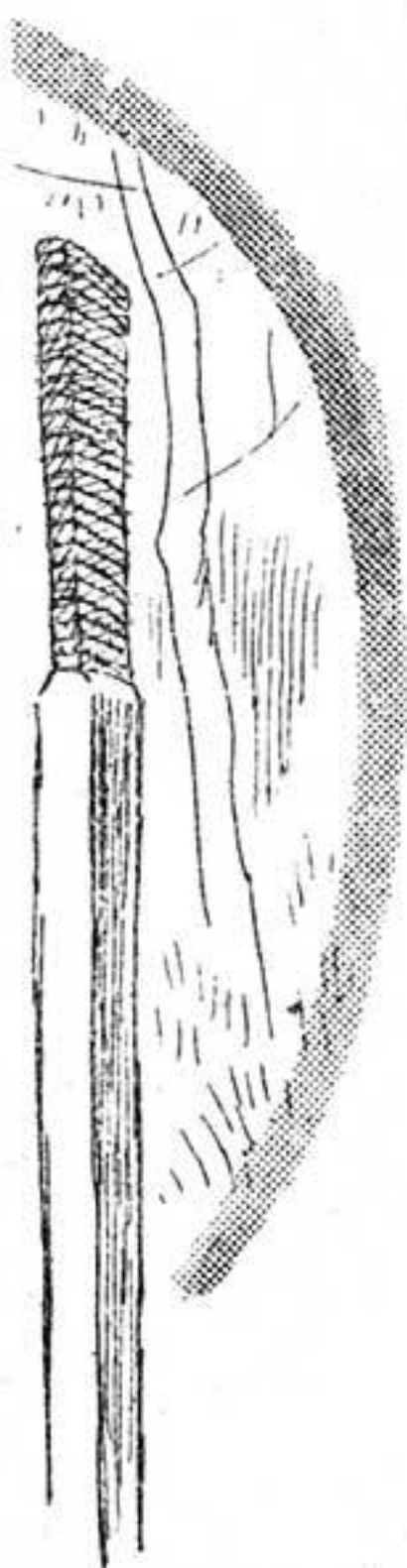
夜 光 島

吾 妻 新

栗 原 伸・画

い ざ な い

とっくに夜が明けていた。高窓からの光は仄白かったが、小鳥の
声は雨のように降っていた。登枝はみじろぎもせず、横むきに膝を
まげた姿勢で大きな眼をあけていた。あれからずっと眠っていない
のだ。だがなにも見ていない。背中の上しろにもう一つベッドがあ
り、そこに、八時間前までは無縁だった男が寝ていることを感ずる
だけだ。



動く気配と、マツチをする音がした。やがて、柔い、満ち足りた
声がひびいた。

「どう、眼がさめた？」

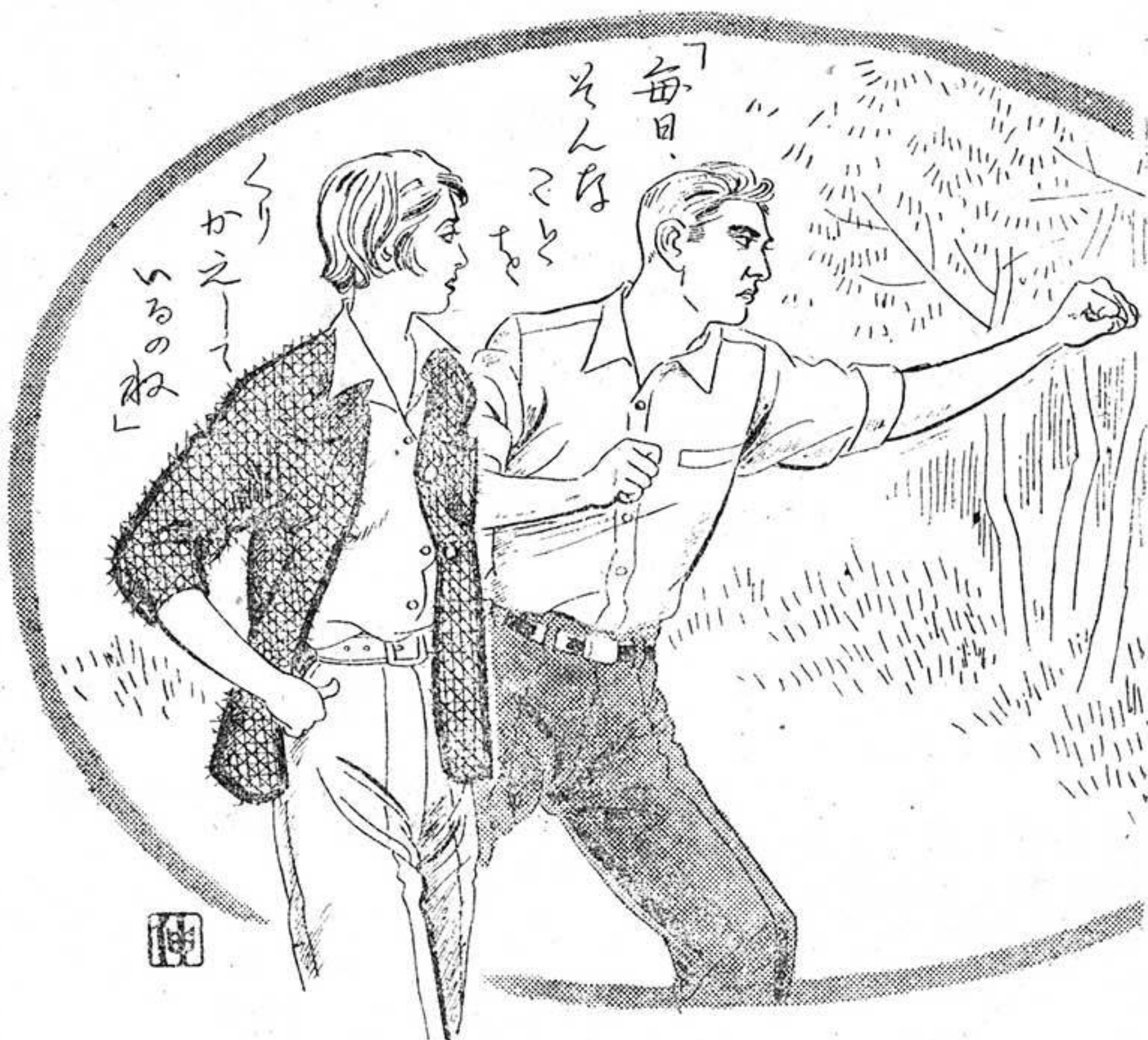
彼女は深い眠りから呼び醒まされたようにもそもそやり、布団の
襟をずらし、わざと物倦げに寝返りをうった。それから、一度閉じ
た眼をすこしずつ開けた。

健次郎は腹這いになったまゝ微笑を送った。

「なんだか眠そうだね。疲れてるんだろう？」

「べつに」

男の言葉から妙な連想をかんじて、登枝はかすかに紅
くなり、右手を腰にすべらせた。すると、つぎはぎの布
の感触と、すえた臭気がたちのぼった。彼女は口唇をひ
きしめた。



「食事は僕がつくってもいい。よかったら寝てたまえ。ここでは時間なんか用をなさないんだ」

「疲れてなんかないわ」と、反抗的に言った。「起きるわ。着換えてもいい？」

「どうぞ」

彼女は半身を起して、ベッドの裾にあるセーターと、ワイシャツとズボンをひきよせた。昨日着てきた服装だ。床のなかに其等をひっぱりこんで着換えはじめたが、ぴっちりしたパジャマを脱ぐのは腹が立つほど手間どった。健次郎は布団をはねのけて床に立つと、さっさと服を着こみながら、向うむきのまま言った。

「起きてやりたまえ。無精することないよ」

登枝はためらっていたが、思いきってベッドをおりた。朝の光りにみる、なんとという不潔なパジャマ！ じぶんはこれに夜どおし苛まれた——ただ、理性の最後まででけしとんでしまうあの最後の瞬間まで。予想はしていた。が、その予想は思いがけぬ形で裏切られた。万力のような男の腕のなかで高まる潮はふしぎな激しさで彼女をゆすぶった。はじめての経験だった。

彼女は子供のような叫び声をあげた。……やがて理性が戻ってきた。すると彼女はすすり哭いた。敗北をはっきり感じたのだ。

のろのろと服をつけて出ると、健次郎は押入から石油ストーヴをひっぱり出して埃をはらっているところだった。ふりかえって彼女を見ると、健次郎はすぐしやべり

出した。

「僕はカマドで火を焚くのが大好きなんだよ。枝はいくらでも拾えるし、焰を見ているのが楽しみなんですね。しかし君が来た以上は、そんな原始的快樂に時間をつかってるわけにいかない。文明の利器を利用するよ。……その戸棚をあけて、茶碗と罐詰を出してくれたまえ」

登枝は戸棚をあけた。砂糖だの醤油だの並んでいる奥に、さまざまな罐詰が甘筒以上あり、肉屋の店でみるような焼豚やベーコンまでぶらさがっている。成程、これなら炊事も楽だろう。

「お野菜などはどうしてるの？」

「ああ、あとでひとつ案内しよう。ホーレン草、コカブ、山東菜、なんでもある。ただし、目下は成長なんか待ってられないで、かたっぱしから摘んでゆくから、みんな、同じようなナッパだけれどね」と、笑いながら言った。「そうだ、こんどは畠を二倍拡張しなくっちゃ」

「あたしのためだったら、急がないほうがいいわよ。いつ消えてなくなるか、わからないから」

「どうやら、その心配はなさそうだ」

「なぜ？」

健次郎は返事のかわりに、するどい眼を細めて、じっと彼女の姿を見守った。登枝はまごついて、また頬を染めた。

——この男はゆうべのことを言っているのだ。たった一度の接触で自信を抱いている。それが腹立たしい。こんな筈ではなかった。もっとちがった形で、お互いの胸を開くつもりだったのに。

食事の間じゅう、登枝はほとんど口をきかなかった。だが健次郎

は氣にもとめない様子で、食事がすむとさっそく、彼女を戸外につれだした。

「ここが新鮮なるヴィタミン補給所さ。みたまえ、可愛いだろう？ たった十坪に種をまいただけで、毎日食べきれないんだぜ。だからもうすこし拡張したら、その分だけはそっとしておいて、山東菜や白菜の大きな結球をつくることもできる。なにしろ僕は三年間も百姓したことがあるんでね」

澄んだ大氣のなかに男の声がひびく。空は抜けるように青く、雲ひとつなかった。眩しいほどの朝の光りを浴びて、矩形に区切られた畠が青海苔をふりまいたような細かい葉で掩われていた。空地はひろく、畠の十倍もある。そのまわりをさらに雑木林がとりまいている。登枝は畠のふちに沿って歩きながら、ずっと前に見た「きけわだつみの声」という映画を思いだした。あのなかの、傷病兵が置きざりにされるニッパ小舎と周囲の風景がなんだか似ている。もちろんこゝは小さな島だし、原始林でもない。建物もニッパ小舎とはちがう。だが、文明から置き去りを食っている点ではおなじではないか。なんのためにこの男は住む氣になったのか？ そして自分もなんのために……？

健次郎は片隅に立っている奇妙な柱をさして言った。

「これ、なんだかわかる？」

登枝は首をふった。

「空手の拳を鍛える道具でね、突蕨っていうんだ。ホラ、上が八分の厚さで、下が四寸角になってる。七尺の角材をこんなふうに削って三尺埋め、四尺の高さにするのが標準なんだ。運動不足になっちやいけないから、毎日やってるんだが、ひとつ、見せようか」

その声には子供っぽい欲びがこもっていた。まるで変わったことさえすれば相手が満足すると信じているかのように、半身になって拳を構え、柱に巻いた縄にそれを当てはじめた。

登枝はぼんやりとその動作を眺めていたが、急にたまらない孤独感におそわれてきた。

「毎日、そんなことをくりかえしてるのね」

「ああ、どうして？」

「退屈しない？」

「そりやあ、すこしは退屈だが、都会生活よりずっと健康だぜ。午前中は本をよんだり、気がむいたら書いたりする。午後には畠をやりたり、散歩したりする。疲れたら昼寝してね。それで一日は豊かに暮れてゆくんだ」

「じゃ、あたしはどうなるの？」

「君かい？」と、健次郎はおどろいた顔をした。「僕はじぶんのことだけ言ってるんじゃないよ。君をふくめての生活を語ってるんだぜ」

「お相伴に、おなじことをしろと言うの？」

「バカだなあ。君はしたいことを、好きなようにすればいいんだ」

「あたし、べつにしたいこともないわ。そんなつもりで島へ来たんじゃないんですもの」

健次郎はちよっと戸惑った様子だった。それから、しずかに近寄って肩を抱きよせ、キスした。灼けつくような触感をおぼえながら登枝はむりに男の胸を押しつけた。

「じゃあ君は、ここへきて後悔してるんだね」

「後悔なんて、そんなこと言っちゃしないわ、あたし……」

いらいらしながら、彼女は言った。

「あなたは親切だし、それに……だいたい想像どおりのひとだったわ。ただひとつ、感心がいいことがあつたの」

「言ってみたまえ」

「なんていったらいいのか、とにかくあなたは、女が欲しかったんでしよう」

「……」

「それも、誰でもいいのよ。なにも私じゃなくても、ね。白状なさいよ。べつに怒りやしないから」

健次郎は眉をひそめた。なにか言いかけようとしたのを、登枝は押しかぶせるようにしやべった。

「でも、それはあなたが悪いのじゃないわ。だれだって奥さんを亡くして幾年もたてば、そしてこんな島に一人ぼっちでいれば、むりもないと思うわ。むしろ責任は私にあると思うの。私はこんな女だから、恥も外聞もなくじぶんを曝け出してしまったけど、あなたが作家だったことは忘れていたのよ。それで、うっかり書いたものを信じたばかりか、手紙まで真に受けちゃって、ふらふらと、くる気になったの。さだめし、あたしのような女が必要なんだろう、なんてね」

「君は誤解してる！」

「ええ、だから誤解したと言ってるじゃありませんか」

と彼女は声を高めた。相手の顔色の変ったのをするどく観察しながら、ふしぎに冷静になった。――あたしはこのひとを怒らせている。忍耐づよさを踏みにじろうとしている。かまうものか。それがお前の目的ではないか。もっと刺戟して、憤激させる。この生ぬる

い平和な空気をひっかきまわして、ヒューマニストの仮面を引っ剥ぐのだ。

（お前はゆうべの屈服にテレているのだという声をする。そうなんだ、私はテレてるんだ、とじぶんに言ってきた。——ポストンバッグの大道具小道具はなんの意味もなかった。この男は私がどんな人間で、どんな気持で来たかを知っている。それでいて、そしらぬげに私を抱き、敗北の声を上げさせたのだ。それは完全な無視、屈辱だ。もしエチケットのつもりなら一層鼻持ちがならない。彼自身、エチケットをやめようと提議したし、第一そのためのこの生活ではなかったのか。

「あなたが四十を越して、孤独で、欲望旺盛な男だってことはわかるわ」

挑むために、彼女はできるだけ汚ない言葉を探そうとあせった。

「だから、とてもひとりで島なんかに住む自信はないのよ。だれでもいいから異性が欲しかったのよ。あなたの欲しかったのは、ただ女、肉。ね、あたしなんかの出る幕じやなかったわ」

「僕は正直にいうが、君でなければならなかったんだ」

「うそおっしやい！ じゃあ、ゆうべはどうなの？ 私は信じないわ。そりやあ私は生れ損いで、みじめな人間よ。じぶんで娼婦だと言ったこともある。でも、娼婦だったら都会にもいっぱい居るじゃないの。なにも私なんかを、はるばるおびき出さなかったって、都会に住んでればよかったんじゃない？」

「登校！」

「そうよ、あなたみたいなノーマルなお上品なひとは、都会で何不自由なく暮してゆけるわ。それとも、そうじゃないっていうの？」

でもね、あなたのやったことは、つまり、………なにも無人島なんが必要としなかったことよ」

とうとう言ってしまった。彼女は胸のとどろくのを気付かれぬよ



君は

何もかも

経験

ずみのくさだ。

いまから

駆け

くろくは

たのいよ



うに抑えながら、長い睫毛の下から男の表情の変化をじっと観察した。

(どうするか?)

健次郎は畠の一角に視線を落したまま、しばらくそうしていた。やがて、くるりとふりむくと、腕をのばして登枝の手をつかんだ。眼は、怒りと軽蔑の色をうかべていた。

「よし、わかった。家へはいろいろ」

登枝は本能的にふりはなそうとしたが、強くひかれた。よろけ、ひきずられ、前のめりになった。男が容謝しないつもりなのがわかった。額越しに、戸口が近づくのを眺めながら、彼女はさっきの自分の言葉を嘔吐のごとく思いだした。汚ない、まったく汚ない、あたしは、娼婦だ……。

あらたな屈伏

「いや、それだけはいやよう」

「だまって、さっさと着換えたまえ」

「そんな趣味は私にないんだから。奥さんのお古なんていや！」

その言葉にうそはない、と感ずると、登枝は救われた気になった。これだけがこの男の強制する唯一のものだ。そして実際にじぶんはいやなのだ。この醜さ、汚辱、日頃ふれたことのない部分にびったり密着する気恥かしさは、はじめてのもので、それだけ新鮮な(いやらしさ)だった。だから私はお芝居していない——彼女の意識はそこにしがみつく。それで、思わず出る声も真剣だった。あたしは強制されて、このパジャマを着る……。



すっかり着かえるまで、健次郎は陰うつな眼つきで眺めていた。それから言った。

「手錠がいいのか、紐がいいのか、返事したらどうだ」

登枝はだまっていた。

「どっちでもいいんだな。じやあ紐で縛ってやろう。こっちへ来たまえ」

彼はパジャマを出した戸棚から長い腰紐をとりだした。登枝の想像とちがっていたのは、それが派出な腰紐でなく、ほとんど色の褪

せた淡緑色の古ぼけたものだったことだ。嗤嗟に彼女はこの男の小説の幾場面かを思いだした。なにもかもがああの一と妻のものだ。あたしはやっぱり代償なのだ。

近づく、右手首をねじあげたので、ベッドに俯伏せにころがった。両手首を重ねた上に紐が絡みつく。巾のひろい柔かい布の感触がぐつと締ったときは動かさなかったが、痛くはなかった。動作は適確だったが、あまり早くない。彼女は押しつぶされた顔をねじまげて、ちよつと笑った。

「首縄かけるんなら注意してよ」

返事のかわりに一回転されて、胸に巻きついた。背中中丹念に結んでいるのがはっきりわかる。どうせ逃げないと思っっているからだろうか、それとも器用でないのかもしれない。彼女はわずかに身をもがいた。すると、しなやかな布紐は二の腕に食いこんだ。

「これがあなたの流儀なのね。でも、なんだか……」

「だまってもらうよ」

言ったかと思うと、あつというまに布が口唇の間にはさまれ、二本の指でねじるように押しこまれた。かたく丸めたその布は咽喉を圧迫せず、上下の顎の間にひろがった。つづいてひろげた布が鼻と口にかかったが、その臭気で口を閉じたときに下顎から強く斜めうしろに絞られたので、口唇はもう開かなかった。そのために詰めた布は一杯になった感じだった。こうした手際のよさは、縛るときとは雲泥の差だった。登枝ははじめて胸をはずませ、真剣にもがきはじめた。

「君にはなにもかも経験ずみの筈だ。いまから騒ぐことはないよ。ただ、君は亡くなった妻を侮辱したね。それだけの償いはさせるつ

もりだ」

彼は立って行って、また戸棚をあけた。こんどは腰紐でなく、もっと黒い太いものだった。登枝は首をねじって、するどく眼を仿かした。おそらく、古くなった男帯をいくつかに裂いたものにちがいない。(ああ、あれだ!) と思った。健次郎は向いのベッドに腰をおろし、ゆっくりと結び目をつくった。それがすむと、パジャマの腰を締めている共布のバンドに紐の一端を縛って前へまわした。そのとき登枝のからだは仰向けになったが、男が紐を飴のようにねじって細く固くするのをながめた。猿轡の下で呻き声が洩れた。これが△敗北△のはじまりだった。

ふたたび俯向けにされ、健次郎の片腕が下腹を廻るまで捲きこんでからは、ひと動作ごとに呻きが高まった。押しひしがれた胸の鼓動は早くなり、口を掩う布の間に湿気がこもるのを避けようとして首を動かすたびに、刺すような臭気が鼻をおそった。

「望むように、と君は書いたね。これが僕の望むポーズなんだ。さあ、ここは島だぜ、無人島なんだぜ。いくらでも叫ぶがいい。猿轡が弛んだら、いくどでも締め直してやるからね」

男の言葉もしだいに破廉恥になった。それと共に、呼吸も荒くなった。

「奥さんのお古はいやだなんて、冗談じゃない。パジャマだって腰紐だって、みんな深い歴史があるんだ。ほかならぬ君だから、それを味わせてやろうというのに、不服なんてもってのほかだぜ。恩恵と思わなくっちゃいけない」

「うッ、うッ……」

と登枝はさげんだ。眼にみえぬ攻撃がはじまったからだ。平手打

は鈍い弾んだ音を立てた。その単調さをおそれるように、男はときどき抓った。だがもっと巧妙でしっこいのは rubbing だった。それは一本の指だったり、掌だったり、そして活動の範囲は腰から膝の裏までおよんだ。それを防げないというより知ることができないという点で、彼女はたえず緊張し、汗をしばった。

「どうやら君も観念したようだな。じゃあ、パジャマを着るのは恩恵だとみとめるね。どうだ？ みとめたら意志表示に白旗をかがげたまえ。腰を上げるんだよ」

登枝は一息ついたかった。腰をうかせた。すかさず健次郎は結び目を捕えてねじった。登枝は呻きとともに浪のように揺れた。

「よし、じゃあ恩恵を与えることにしよう。当分それを脱がさないよ。ただし、ことわくとくが、その歴史的使命は折檻服ということになっている。だから、着ている間は折檻されるものと覚悟するんだね」

その言葉はいやでも登枝の耳にながれこんだ。彼女はじぶんの仕掛けた罠に落ちこんだ心地がした。もうお芝居を演ずる余地はどこにもなかった。充血感は全身を刺戟して、相手が手を休めてもまがきつづけた。俯伏せの姿勢と結節のせいだ。その上、彼女はこの折檻が鞭打などよりもずっと時間的に長いことを学ばされた。犠牲者は間断なく動かねばならないが、執行者はほとんど疲れないからである。

登枝は自分のこの状態が、もとめて得たものだということを知っていた。挑発者はこのあたしなのだ。それは島へ渡るときから背負っていた、異様な意識の重荷のためだった。舞台の出番がきまっていた幕が上るまでの落着かない気持と似たものがそこにあった。ど

うせ幕があくのだ。どうせ私はじぶんの役をつとめなければならぬのだ。……パークマンが映画ばかりでなく演劇でも好んで火刑柱のジャンヌ・ダルクをやりたいがるように、ひそかな興奮にみちた秘密の欲望をかんずる。だが、そうした役割を知りぬいている女優が、早く幕をあけてくれと要求できるだろうか？ 公衆はごまかさるだろうが、この男をごまかすことはできない。といって、通常の女のように抱かれ、愛撫され、ついに感動させられてしまったことは、彼女を安心させるよりも不安にした。お互いが急激に近付けば近付くほど、最後の切札は隠しておけないという気がした。秘密を秘密のままにしておくのは苦痛だ。とりわけ苦痛だ。彼女は相手を裸にするために、じぶんも裸にしてみなければならなかった。しかし、この風変りな欲望をどう切り出してみたところで、お芝居じみた後ろめたさがつきまとうだろう。だから度を外し、いきりたち挑発する必要があった。男の眼がつめたい理性で光っている間は羞恥に打ち克つことができないのだ。

必死にもがきながら——寸時もそうせずにはいられないので——登枝はそんなことを考える。確実に幕は上ってしまった。もうそれまでのみにくい言葉や、かけひきや、仄めかしは忘れてもいいときだ。あたしは酔っている。この頬に食いこんだ臭気の一つい猿轡はやるせない夜更けにわれとわが手で嵌めたのとは異なり、他人の手で、まさしく男の手で無理無体にかませられたものだ。他動的な、どうにもならないこの事実が、客体として自己を投げだすあの陶醉に誘ってくれる。潮のような興奮は腰から胸につきあたり、思わず呻き、悶えるのである。

罪ふかい過去が肉体を通してよみがえった。それはどんなわずか

な刺戟にも反応して、すぐに共通の感覚を呼び起してくれた。さまざまな縄や鎖、嵌口具、つめたい金属や革の匂い。鞭やベルトのするどい響き、巻かれ、折り曲げられ、吊られたポーズ……。だがい

まは勝手がちがっていた。柔かく平たい巾のある腰紐は痛くなかった。それはたゞ「締りのよい」ものだった。この男は首縄もかけずたゞうしろ手に縛っただけだ。だから磨きすまされた感覚は猿ぐつ



「あ、願いだから
もうやめろー」

わと下半身に集中する。おお、そのときじっとりと汚れたパジャマはなんという悪魔のはたらしきをするのだらう！ 足首までまといっている布が、脚の動きを忘れさせないのだ。そのみぐるしい動きは、裸体だったら、姿見の扶けをかりなければわかりはしない。だが、へばりつき纏いつく感触はいま脚がどの位置にあるか、どの角度に開きまた閉じるかを教えてくれる。皮膚と布との無数の接触——張りつめ、ゆるみ、ひきつり摩擦する変化は、俯伏せにおしつぶされながら見るよりも確かに「みじめな斗い」を感知させる。そして、このポーズは——谷間をくぐる太からず細からぬ黒い紐に感覚のかなめを占領され、もがくたびに狂おしい充血状態を高めるのである。

ベルトや鞭で打たれたとき、彼女はいつも獣のようにのたうちまわり、激情のなかでわれを忘れた。こゝでは忘れることがなかった。なぜなら平手打や、指の付きは次の刺戟を消すよりも高めるやうにやられたからだ。この拷問でおそろしいのはただ持続だ。永ければ永いほど致命的だ。しかもそれはとてつもなく永かった。

ときどき休息が与えられた。だがそれは健次郎がタバコをすうためだったから、十分を越えることはなかった。ピースが短くなり、やがて灰皿を引寄せると、登枝の全身は痺れたようになる。(ああ、またはじまるんだわ)——そのとおりだった。確実にまたはじまるのだった。

三同めにやっと猿轡をはずされたとき、さすがに泣き声になった。

「おねがいだから、もうやめて！」

健次郎はかすかに笑った。

「君は名だたるヴェテランじゃないか。そんなことを言ったら滑稽だよ」

「ちがうわ。あたしヴェテランじゃない」と彼女は真剣に云った。

「あたしの言うことを信じて。これ以上されたら死んでしまいそうなのよ」

「安心したまえ。かすり傷ひとつ、つけやしないから」

「それがいやなのよ。ねえ、本当にがまんできないんだから……」

「がまんすることはないよ。思いきり叫んで、暴れたらいい。できればと仮定してね。それが君の目的じゃないか。君はそれで生き甲斐をかんずるんだらう」

登枝は口唇をかみしめた。この男の言うことは本当だ。しかし、耐えがたいことも事実なのだ。

「あなたは、あたしを特別扱いにする気ね。じぶんの奥さんだったわ、きつとこんなにしなかったわ。もっと優しくしたに相違ないわ」

「また暴言を吐いたね。じゃあ、こんどは足も縛って、昼まで休みなしでやろう」

「ああ、もう言わないから、……取り消すから、ゆるして！」

「時、すでにおそしき」

実際に足首を縛りだしたので、登枝はあわてた。昼までまだ二時間以上もある。それはまさに永遠に等しい。ほんとうにこの男はやる気なのだろうか？　そういう節度のない「遊戯」を試みたことがあるのだろうか？

「冗談はぬきにして、お願いだから」

「僕は冗談なんか言やしない」と相手はさえぎった。「君はとにかく一週間の長期刑の体験者じゃないか。半日や一日、どうってことはないだらう」

彼女はじぶんの耳を疑った。次に、この男の真意に気がついてぞっとした。彼はたいへんな誤解をしているのだ。長期刑は仮空の受刑期の全体の永さを言っているのにすぎない。たんに手錠のままの状態が大半をしめているので、その場その場の行為はけっしてそれほど永いものではなかった。それとこれとを比較されてはたまったものではない。

健次郎はタバコをすって近づいた。

「ちょっと待って、あたしに説明させて」と彼女はいそいで言った。

「あなたはまるで感ちがいしているのよ。長期刑というのはね……」

「ああ、それも考えている。とにかく今日は感ちがいの多い日だ」

よ」

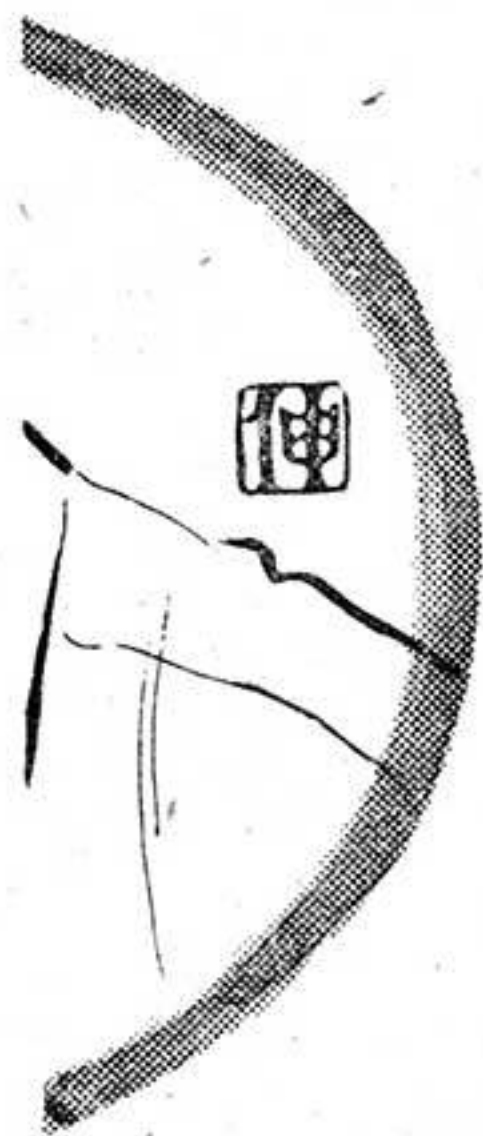
言いながら、彼はまた布を押しこみ、前よりも強く猿ぐつわをはめた。

登枝は胸を浪打たせ、絶望にあえいだ。もうだめだ。彼はあたしの疲労を計算に入れていないのだ。耐えられる限界を誤算しているのだ。にもかかわらず、私はその誤算にしたがうほかはないのだ。いかに悩乱し苦しもうと、永遠の二時間というものを、やはり呻き声を立て、悶えつづけるだろう。

この不幸は諦めきれない条件のもとで、あたらしい苦役がはじまった。そうだ、もう願望を通り越していた。肉体は疲れはてているのに刺戟はあまりにも新鮮なため、彼女は受難苦というあの虚脱の状態に達することができず、絶えず悲鳴をあげ、ゆたかな双丘を踊らせた。

健次郎はこのふしぎな饗宴に溺れこんだ。広い海にかこまれた方二十町の無人の土地。そのなかの一つの建物、一つの部屋。その意識がおそろしいほどの過度に駈り立てるのだ。(過度ってなんだ？ そんなものはないやしない。それは強制された観念の産物だ。現実だ、ほら、ここにあるんだ……) 彼はじぶんがまたがり両腕に抱きこんでいる、温度と湿度をもった丘をながめた。よごれたピンク色の台地に、白い木綿糸でぶつ縫いにした青い布がへばりついている。彼はそれをいじった。台地が揺れるので二つほど叩いた。

するとそれはいっそう盛り上り、黒い帯を引くとあわてて陥没した。はちきれんばかりの丘陵にはたちまち細かい浪が走



り、なめらかな手ざわりとともに暗い谷間にすべりこんだ。彼は手を休めて、背中の上しろで聞える押し殺された声に耳をかたむけた。(あの声を立てるためにあの女は生きている) と彼は思った。(それだったら、もっともっと呻くがいい!) 彼の仕草はしだいに狂暴となり、その声と競争した。もはやなにをしているのか吟味する余裕もなかった。ただ溺れた。溺れつづけた。

妻に似る

灰青色の海はひっそりとしていた。風もないのに沖ではときどき白浪を散らした。季節が深まるにつれて日本海は色と形を変ええるのである。やがて冬ともなれば、よほど快晴の日を選ばないかぎり、陸地との往来は危険を伴うことになるかもしれない。

林を駆け抜けてきた健次郎は、灌木地帯の斜面に立ちどまって一息いれた。もう昼ちかく、日は頭上にあつた。心臓の鼓動がまだ激しく打っているのがわかる。だが、眼の前に展けた水平線を見るとたまらなくなつて、また浪打際まで一気に駈けた。

ワイシャツ、ズボン、ズボン下……つぎつぎにぬいで全裸になった。水に足を入れると、ひやり、とした。彼は慎重に、一足ずつ進んだ。が、腰のあたりまでくると、思いきって頭からとびこんだ。

骨まで沁みる冷たさが、いまは快かった。彼は歯を食いしばって沖にむかった。泳ぎ疲れると仰向けになり、両手をひろげて潮の流れるにまかせた。

古式エトルリア人の想像では、空は張りつめた固い円蓋だった。なんという自

然な感覚だろう！ 叩けば音のしそうなその円蓋は眼のとどくかぎり青く、音もなく水平線に垂れていた。視野をさまたげるものはひとつもない。

彼は少年時代から空に惹かれた。無限の青さはとりとめのない空想の泉だった。淡い恋ごころを抱くようになると、それは甘いかなしみに浸らせ、センチメンタルな歌となった。この秋はわれの死にたき日もあり清き大空たそがれの雲。青春のころはもとより、世に出て雑事に追われていても、空をみれば心を奪われ、郷愁の想いを誘い、おろかしい衝動を忘れることができた。——いまもそうだ。

健次郎はたった数分前まで、四方を板で囲んだうすぐらい部屋で獣のように酔いしれたことを信じがたい気持ちだった。まるでとおい夢のようだ。だがそれが拭いきれぬ真実だということ、ここまで走りつづけてきたこと、わかる。感覚に溺れた彼は、急に、たまたま自然に溺れたくなったのだ。

ここには自然がある。あそこには不自然がある。



(いや、そうじゃない) といそいで彼は訂正した。(ここでも人間である俺は、あそこでも人間だったのだ。ただあの行為のなかに不必要なものがあつたにすぎない。)

その不必要なものは島のそばで起った。彼は登枝の会話と表情を思いだした。挑発にのつたことはもう疑う余地がなかった。もしあのとき俺が見ぬいたらどうだったろうか。彼女はもっと毒舌を吐き、もっと怒らせて、結果はおなじことになったにそういない。だが、一体どうしてあんなにくらみが必要だったのか？

あなたのやったことは無人島などを必要としないと言った。そうだ、もし昨夜のことだけを切り離せば、温泉マートの旅館でも片づく。しかし、共同生活は一日だけか、音楽に序奏部があつてはならないか。われわれは遊びに生活を賭けるのか、それとも生活のなかに遊戯を見出すのか？

われわれは会ったばかりだ。抱き合うことだけでも、ほんとうは早すぎたのだ。ただ、八冒険Ⅴではじまったこ

の奇妙な接触では、それまで避けたらかえって不自然だったろう。

その場合に、まず自分の示したかったことは、なんら技巧的な手段を用いずとも完全に相手を満足させられること、したがって究極の目的はそれであって、その他の一切はどんなに複雑でも遊びだということだった。またテクニクはしぜんに徐々に発展すべきで、それよりも人間的に語りあうことがさきだと信じていた。これはエチケツトではない。それ以上のものだ。興奮したときだけの道具になりたくないということだ。もしも愛しあう基礎をつくらなかったら、すべての状況が動物的な方向に先き走りしてしまうだろう。

（だがあの女はそれを理解せず、待とうとしなかった。そして俺は誘惑に負けたのだ。……）

岸に向って泳ぎながら、彼はじぶんに言ってきかせた。

（お互いに切札をみせてしまった。いまさら取り返しはつかない。前に進むしかない。ただ、それがせっかくの共同生活を破壊しなければいいが。……あの女はもっと無恥に、大胆になるだろう。俺もそうならすにはいないだろう）

海から上るとたちまち皮膚は粟立った。日光はすこしも暖めてくれなかった。彼は大急ぎでからだを拭き、全身をつよく摩擦した。

服を着こみ、林のなかを戻る足取りはのろのろしていた。

家へついたときはすっかり肚をきめていた。雄性と雌性の闘いだ。浪漫的なものは昨夜で終りをつげ、あとに残っているのは、機械的な取引しかない。縛ってくれ——血の出るほど縛ってやろう。打ってくれ——氣絶するほど叩きのめしてやろう。そして、おそろく散文的な刺戟は三日で終りを告げるだろう。そうしたら船に乗せて送り返し、真の孤独にかえるのだ。

ドアをあけると、眩しい外光に馴れた眼には、寝室は青白い洞窟だった。異端審問所の匂いがした。片隅のベッドから呻きが洩れた。彼はゆっくり近づいて、その姿をしばらく見おろしていた。

「そのまま夜まで置いといてやろうか」

登枝はいそいでかぶりをふった。

「じゃあ、猿ぐつわだけ取ろうか」

また強く首をふった。

健次郎は笑った。

「飽きたというのかね。ダアシイ・ダアシイなら逆にとるところだが、僕はそんなことはしないよ。さあ、もう一度、俯伏せになって！」

彼はまず足首を解き、両手をほどいた。そのまま二三歩さがって壁に倚りかかり、どうするかを観察した。登枝は夢中で猿ぐつわをはずし、帯紐をバンドから解こうとして懸命になった。それがやると終ると、いきなり彼にしがみついた。

「ひどいわ、あんまりだわ！」とさげんだ。

「私をおっぽりだして、いままでどこへ行っていたの？」

「ちよっと、海岸まで」

「なぜ出かけるまえに解いてくれなかったの？ その間じゆう、ひとり苦しんでいたのよ」

「昼までの約束だったぜ」

「そうじゃない。もしもこのまま置き去りにして、ボートにでも乗って行ってしまったら、どうしようかと思って」

「あ、それはまた名案だね。じゃあ、こんど買い出しにゆくときには君を……」



「女の首」

狂崇

加佐和天恩

私の好きな奇譚クラブには、種々のマニアがそれ／＼の関心嗜好を發表しておられるようであります。それに同調の人達も相当に多

「いや、いやよ。そんなバカなことを考えちゃあ、絶対にいやよ」
その真剣な声におどろいて、健次郎は顎に手をかけた。燃えてい
る眼に、涙が一滴光っていた。
(これはどうしたというのだ?)——突然の変化は信じられぬほど
だった。なぜだかわからない。しかし登枝は変っていた。少くとも
挑戦的な今朝とはまるで変っていた。その態度は子供っぽく、無邪
気で、訴える声はみずみずしく、甘くひびいた。長い睫毛の下から

うるんだ眼がじっと見上げていた。
健次郎は両腕に力をこめて抱きよせた。相手は素直にもたれかか
った。

「君は」

と、聞き取れぬように口の中でつぶやいた。

「なんだか、妻に似てきた……」

いております。単に「女の首」と言っても身
体の一部としてではなく、胴体から切り離さ
れた、講談物によくある首実験とか晒首とか
言われる、あの物品化した「女の首」であり
ます。これも数分前までは語り合った知人の
女であって、胴体から切り落して間もないも
ので、時間や日を経たものではなく、死相の
出て居らない話しかければ返事をしそうにも
見える。或は、静かに呼吸して居るのではな
いかと疑える程の生々とした「女の首」が、
私の好みの最上であります。そして、この生
首には苦痛や怨恨の表情が更になく、平安な
清浄さを示すルツクスマスクであらねばなり
ません。

く、盛んな共鳴が活潑に見受けられますが、
私の最も狂崇するところの「女の首」を対象
とするような愛好家には、未だ誌上では御見
受け致しません。これは私だけの一人の嗜好
なのでしようか。余程変った奇妙なアブマニ
アとでも言うべきだと思います。
兎に角、私は「女の首」に非常な憧憬を抱

この女は、首にならない以前はまことに幸
福そのもの／＼のような生立ちであったが、その
天性たる麗わしい美貌が禍いしてか、いたる

処で若人の青春の血をたぎらせ、いろ／＼の騒ぎを起し、多くの男性を悩ます妖艶さと変りゆき、遂には不図した事件の過誤から、進んで自分の首を衆人に晒す事を証契に、自他の釈明を立てねばならぬ破目となり最後に首を刎ねられることを望んだものである。

と云って経歴のある生首なれば、大きな衝動にかられ恍惚とした心境になります。

本誌は巻号が重なるにつれて奥行が深く、間口が広くなって、投稿家の多種多様をより一層深めてきていますが、私のこうした趣向を要望する同好者がいつ頃になったら出られるのでありましょうか。こんな事は空想上の憧れであるのは勿論であります、私は今日までに、ある機会に乗じて一人の娘を合意の上、縄で縛り、自由を奪っている／＼の拷問遊びを行い、折檻も何回となくしました。これ等は何れ告白文として投稿致したいと思つて居ります。



この生首礼讃からその娘を全裸にして手錠足枷をかけて鎖で繋ぎ、大いに責め苛んだあと、束縛した身体を箱枠型の仕置道具に入れて直立させ、その上部の厚板に首を挟みこませ、首枷板として足台を低くすると手足は縛ってあるので身体の安定が崩れ、咽喉に当たる首枷板で全身の重みを顎で支えて、吊られるように立つのであります。そうすると、顔面自然に上向きかげんとなり、鼻孔を正面には孔の奥まで見えるようにして、晒首の丁度理想的な恰好となります。娘はこうされると、

手錠、足枷に全裸で恥しうな姿態で、不自由そうにして居りますが、顔面の表情は平穩そのもので晒首になった事を歡喜するが如く瞑目し、安心しきって恍惚とした容貌を示し、
「私ほんとうに首を切って戴こうかしら」
と呟きながら、陶酔的な満足の意を表わしました。この時程、私としても絶頂感を生じた興奮はとても忘れられ得ぬものでした。

この仕置の型にして、全裸で両手首、両足首に鉄製の嚴重な環をはめ、鎖で締め、足の爪先でその立ちたる位置を辛うじて保たしめるようにすると、顔面下の下顎骨で全体の重心を吊るようになるので、いつもより咽喉の太さかげんが伸びて細長くなったように、首枷板の下から颯々と哀れ無残に痛々しく可憐な美しさが見えて来ます。豊満な柔肌の各肢体を鉄鎖で厳しく締めた身動きならぬ娘の姿態は実に惨めで苦しうにも見え、又、そのように思えるのですが、頑丈な部厚い杉板が

咽喉首をきっちりと一分の隙もなく挟み、完全に固定した板の上の晒首は、陶酔の微笑を浮べるように楽しそうに見えます。思わず、

「恰好のいい理想的生首だいなア」

この遊戯の実演中は晒首は絶対にものを言わぬルールにしてあるのですが、娘の生首もついうっかりと、

「お気に召して嬉しいわ、いつまでもこうしておいて頂戴」

と、口をほころばせましたが、言い終ってハッとしたのか、再び元の晒首に急いで戻るのでした。

こうした試みを数回経て、其の後は恒久的企図となり、私の書斎の机のそばにはいつも丸テーブルがあり、綺麗な刺繍のテーブル掛がかゝり、その上に錫製の銀盆が置かれ、この銀盆には若い女の化粧を適当に施した洗髪・の妖艶ともいえる生首が、装飾愛玩用の置物として供えられたのです。言うまでもなく娘の仕置装置を設備したテーブルであり、娘が毎日の仕事とし日課として勤務することになり、この行動を私への慰み品として総てを呈すると言って、一個の物質と化し奉仕品となったわけです。

首になった娘は静に瞑目して完全な晒首に

なりきることに努めて、観念の表情を面に現します。私はこの生きた置物の「女の生首」をあらゆる角度から眺め鑑賞して、時折りは指先で颯り弄ぶのですが、アクティヴとパッシヴの呵呷の呼吸とでも申しますか、ぴたりと相互に無限の恍惚境を耽溺するのでした。

女の頭髮は社会の動行に調和して社交性を有するものであり、その顔面は思想を表現して品性の高低を定め、特に人格を象徴して、身体中で最も誇とする個所ででもあります。そして又、本来、露出しているのを当然として居りながら、何かの事に遭遇すると羞恥の拠点の如く倉皇とこれを避け、コンシールする微妙な個所ででもあります。これを凝視するはゲットアングリカシエイムの感を与え、通念上失礼とされ、且つディスプレイされるものであります。私はこのような女の首を私なりに名づけて夢想内の満月と擬え呼称して、大なる魅力を有すると同時に占有所持して居る間には大いにいたぶり困惑の羞恥を盛に与えんと図っておるものであります。

然し、こうして私に提供された女の生首は恥辱の屈辱感に限りないエクスタシーを感じて居るようです。私は又、奇ク七月号北谷氏

所論の鋼鉄線で鼻輪を作り、自由を失った娘の鼻障子に挟み込み豆鎖を取りつけ、嗜虐的に家畜のように、繋いだり引いたりしましたが、娘はこの行い方を非常に興味あるものとして永久的に鼻障子に穴をあけ、この鉄輪を完通して実際に使用して本格的に行って欲しいと望むのです。これは身体を損傷することですから、そこまでは致しませんでした。このことはイヤリングを取り扱った場合も同様に行えると思います。

この娘とは本誌の投稿に依って種々の縛りや遊戯をも相当数多く行いましたが、何れも特徴とする快感を味いながらも、私の嗜好たる晒首を所持する程の緊迫した実感は得られぬものでした。晒首たるの生首を実的に与えてくれる娘も私と同感であることを、被虐の立場から遠慮がちに述べていました。

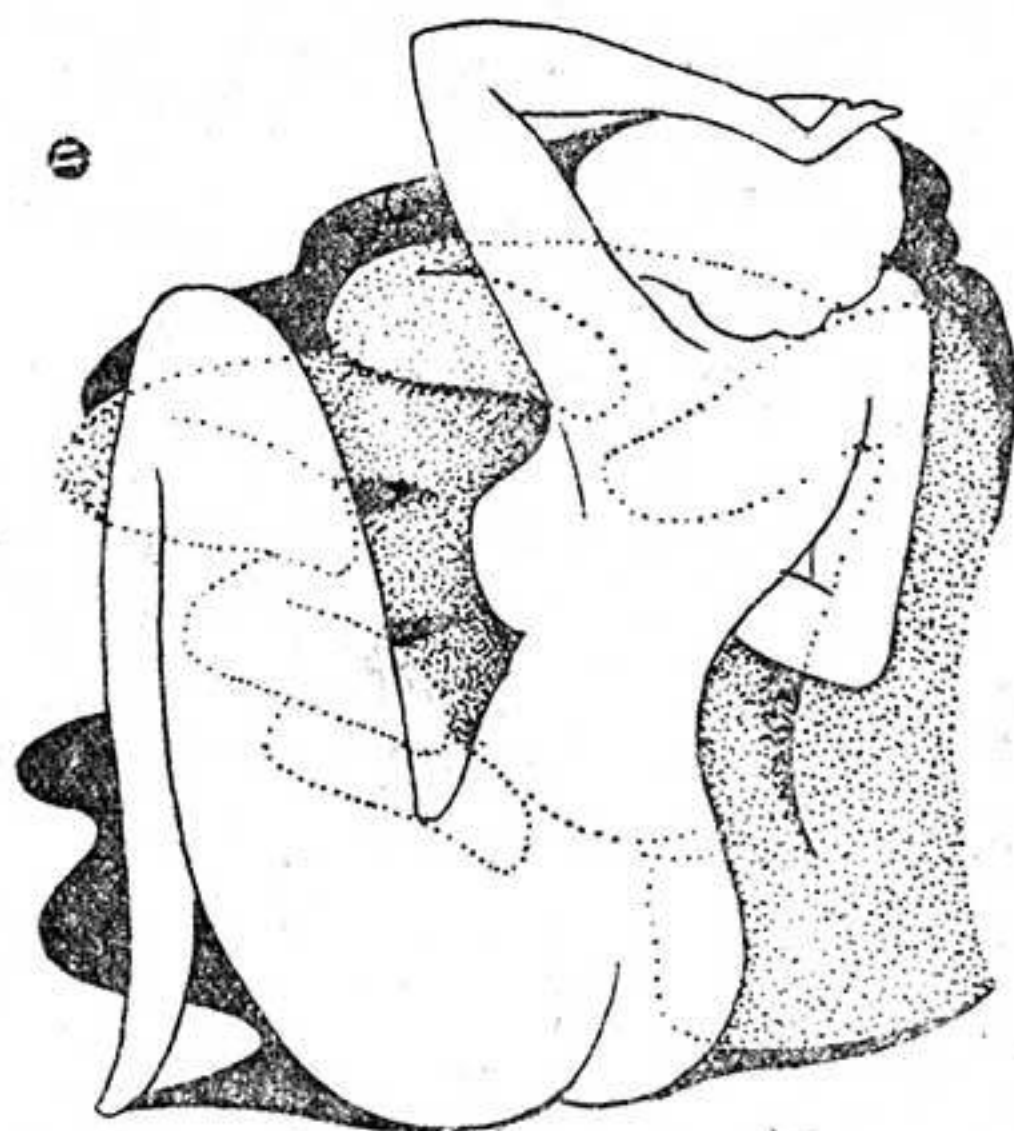
甚だ短文で纏りがありませんが、身体各部についての変わった狂崇とみられる私としての一面を、本誌読者の皆さんにお知らせし、若し同好共鳴の方でもありましたら幸甚と存じ稚拙の筆を取った次第であります。

(おわり)

告白・私の腋窩遍歴

赤い腋窩の女

佐次浩介



私が希子を知ったのは、昨年の夏、台風もすぎ去って、そろ／＼秋風のたちはじめる頃の事であった。

吉祥寺から国電に乗ると、ラッシュ・アワ

ーでない限り、大抵座席をとる事が出来る。

それが、中野をすぎる頃には、もうシートは勿論、吊り革も八分通りふさがっていた。

私は、眼の前に立っている、三十がらみの小肥りの女の腋窩を、ぼんやりと、見つめて

いた。黒く濃い腋毛の持主であったが、それが、あまりにも露骨にむき立され、また、それを気にかける様子もないその女の態度に、いさ／＼か興ざめ、というよりむしろ、全く無関心で、私はただ何となくそれを見上げていたのだった。

電車が新宿につくと、車内の半分以上の人が降り、それと同じ位の人が乗って来た。私の前の吊り革には、先程の女と入れ代って、流行のナイロンブラウスにアコーディオン・ブリーツという、最新型の女性が立った。その腋窩は、ナイロンのヴェールを通して、きれいに剃りあげられ、美しい白い肌をのぞかせていた。その隣りに並んで立った藤色のフレンチ・スリープの娘——それが、希子であった——と、何やかや、話題もつきない様子であったが、それよりも私にとっては、ふくらと白い腋窩に刻まれた二本の線の魅力が圧倒的で、しばらくの間、私はまぶしい視線をチラ／＼とその部分に走らせる事に夢中であつた。

そして、電車が四谷の駅をすぎる頃、私はふとその隣の娘の変な様子に気がついた。彼女は、表面さり気なく、友達と笑い語り合っていたが、どうした事か、電車が停ったり走

りだしたりする度に、危げな足つきでよろめきながらも、どうしても吊り革に手をのぼそうとはしないのである。私は、彼女の腕の奥にかくされた部分を一眼たしかめたいと思つて、その機会を待ったけれど、とうとうその娘は、神田駅に下車するまで、その腕を胸より上にあげようとはしなかった。私はものにつかれた様に、その娘の後を追つて電車を降りた。二人が、日本橋にほど近い「ルビー」というコーヒー店のウェイトレスである事を知つたのは、それから三十分位たった後の事である。

二

最初は、ただそれだけの事で、私は何という事もなくコーヒー一杯を飲んで店を出た。そしてそのまゝ、半年近くというものの「ルビー」の希子というウェイトレスの事は忘れていたのである。

冬が来て、暮が近づいてくる頃、私は改めて「ルビー」の客となった。別に取りたてゝ理由があるわけではないのだが、その間、私にはより以上の強い刺激があったし、未知の女性の腋窩を、苦勞して手に入れるよりは、もっと安易な方法で、私の性癖を満す事の出来る季節がすぎて、女性が皆オーバーを着て

しまったので、何となく想い出して「ルビー」に行つて見る氣になつたのだ。それでも、十日位たつと、一応常連扱いされる様になり、希子とも、直接親しい口をきく様になった。しかし、彼女の腋窩は、厚い毛糸の衣に包まれて、所詮うかゞい知る事も出来なかつた。その中で幸ひだつた事は、希子が、私に対して、相当な好意らしいものを示す様になつた事である。私は、或る日、思い切つて希子を誘つて見た。

「いゝわ、今度の月曜日——」

希子の眼が、キラリと濡れた様に思ったのは、私の思いすごしであつたかもしれぬ。

「神田の駅の、地下鉄の所で待っているからね」

「いゝの？ そんな誘惑にのつて——」

私はわざと冗談めかして、希子の氣持を引いて見る。

「いゝわ、貴方になら、誘惑されてあげる」

希子はそう言つて私のボックスを離れた。

この次の月曜日、そういう約束は、いつの場合でも楽しいものである。私は、いつも一杯だけのコーヒーを追加して、その時もう一度希子に念を押す事を忘れなかつた。

三

その日は、あいにく雨模様だつた。誰でもがする様に日劇を見て、地下で食事を終り、外に出ると、もうあたりは暗かつた。

「ねえ、これからどうする？」

「弱つたね、雨だし——」

「どこかで、休みたいわね」

「休むって？」

「お部屋で——」

私たちは、その実まだお互いに好きだとも嫌いだとも言い合つていない。私は、どうして希子がこんな事を言い出すのか、一寸迷つた。案外、ありきたりのセミプロかもしれない。私は、かすかな淡い幻滅を感じながら、黙っていた。

「ねえ、嫌？」

「そうじゃないけど、君は……」

「厚顔しいって言うんでしよう？ でも私、どうしても貴方に聞いていたゞきたい事があるの、ね、恥かしい思ひをさせないで——」

「お金か何かの事？」

「そんなんじゃないわ」

希子は怒つた様に言つた。

「知っているのよ、私——」

「え？ 何を」

「貴女が、あの方だつていう事」

「……………」

あの方、というのは、勿論私のサジを言っているのだ、と思うと、私は身内がカツと火照る様に思えた。私は、自分の奇妙な性癖を人に知られる事を、極度に恐れる。希子に対しても、単にその腋窩、電車の中で、どうしても腕を上げようとしなかった。あの腋窩の美に触れたいとは願っても、相手に私のその慾望を悟られる事は、絶対にしまいと思っていた。それなのに、今、希子のすべてを見通した様な言葉を聞いて、私は、おかしい程うろたえたらしい、希子は小声で笑って、

「そんな顔、しなくても好いわよ」

その声は、思いなしか沈んでいた。

「どうして、知っているの？」

「何故って、解るわ、半分はカマなんだけどお店で人の顔を見なれているから、貴方のその眼の色、口元、笑い方……」

あゝ、あの同志だけにしか解らないアブの者のみが持つ微妙な表情の影を、希子は読みとっていたのだ。しかし、私の様に、ひたかくしにかくしている心算でも、所詮かくし切れるものではないのだろうか、これは、この世界に住む人間達にのみ許された奇妙な触角である。そして、それは又、いまわしい看板

でもあるのだ、押さえに押さえて来た心算の私も、いつの間にか、一人前のアブの仲間入りをしていたのか、と、私はぐっと胸をつき上げる感情に襲われた。

「君も、そうかい！」

「聞かないで——」

「それじゃ、どうしようって言うんだ、これから部屋に行って」

「どうしても、欲しいものがあるの、貴方から……それだけ」

「何が欲しいの？」

「貴方の、おコーヒーが——」

私は、黙って歩いた。心の中で、ドギマギした気持ちを押えながら、自分に出来るだろうかと、私は、まずそれが心配であった。腋窩に関する、或は腋窩を中心とした責めについては、相当の自信も経験もあった。しかし、それ以上の事は——、でも、こうした見知らぬ女性からサジの折り紙をつけられて、逃げ出すわけにもゆくまいではないか。気の弱い奴、とある人は笑うかもしれない。そんなのは、本当のサジストではないよ、とある人は無視されるかもしれない。しかし、私のその時のいつわらぬ気持は、そうであった。

そうして、五分以上、二人は黙って相合傘

で歩いた。

「ねえ」

希子が、耐えかねた様に言った。そして、その時、彼女の手が、はじめて私の腕にからみついて来た。

「私を、やって——」

彼女の声は、かすれていた。

四

私が、希子に自分のコーヒーを与えた事については、省かなければならない。あまりにも、それはどぎつい体験であった。私は、ある意味での努力と、歓喜とを味って、私の足元に、放心した様に突っ伏している希子を見下していた。茶のオーバーを脱いだ後の彼女は、紺のワンピースに、巾の広いまっ白いナイロンのバンドが、印象的であった。これを脱がせなければならぬ。私は、希子の肩をつかんで、手荒くゴロリと引っくり返した。

「あゝ——」

口紅のあせた唇が、半開きになって、焦点のない眸が、私を見つめていた。

無言で、私はナイロンのバンドを引きむしった。ワンピースの前ボタンが外され、何枚かの白いメリヤスの下着が巻き上げられて、柔い双丘が露出すると、希子は、本能的に二

二三人

の腕で、顔を覆った。が、左手は私の動作に反対する様に、胸の上に置かれている。その



腕の奥に、謎を秘めた彼女の「腋窩」があるのだ。足首がバンドでギュッと締めつけられて、私の手が、再び希子の上着にかゝる。

「嫌、よして——」

希子の声は、テクニクめいた媚態とは思えぬ程真剣であった。でも、私にとって、その様な哀願など、到底ものゝ数ではない。

「ね、お願い、脱ぎます、脱ぎますから、向うをむいて——」

その声もいつわりではない、すべてを望んでいる希子の様子に、私は黙って後を向いた。かすかな物音、その物音が、私の情念と、妄想とを、如何にかきたてた事か。二、三分して、私が振りむいた時には、希子は頭から蒲団をかぶって、息を殺していた。枕からまっ白い敷布にこぼれている髪が、ゆら／＼と動いている

る様な印象を与える。

私はふくれ上った蒲団の上に馬のりになって、希子の腰とおぼしいあたりに股がった。蒲団ごしにもよくわかるドキツとする位のヴオリウムをもって、私に迫って来た。彼女の上半身を覆っている蒲団をはねのけると、希子は両手に胸を抱いて、じっと眼を閉じていた。

「何をしても好いね？」

「……………」

私は、希子の腋窩を、ぐいと開かせようとした。が、その時まで、期待にふるえていたらしい希子は、突然恐ろしい力で私をふりのけると、

「嫌、そこは、嫌！」

と叫んで蒲団を引きかぶろうとするのだ。

「馬鹿、お前は、お前は——」

私は立ち上ると、力一杯その夜具を持ち上げた。無残に露出した希子の下半身を、私はチラと眺めただけで、必死に夜具をかゝえている彼女の腋窩を、無理矢理に押しひろげようとした。

それから先の、二人の気違いじみた動作は記す必要もあるまいと思う。唯、私は、そんな感情の嵐の中で、ふと、馬鹿らしい程の虚

脱を感じたのも事実なのである。折角マゾとサジとが出合っているながら、——こんな事は小説にはともかく、実際には、そう何回もあり得る事ではないのだ——、彼女は私のコーヒーを好み、相当ドギツイプレイを望んでいる。私は、彼女の腋窩を求める。それが彼女には耐えられない事なのだ。こんな馬鹿な話があるか、と、私は、無二無三希子の腋窩をねじ上げた。

「あゝ、苦しい、痛い——」

希子の、叫びともうめきともつかない声の中に、私はその時、初めて彼女の秘密を知った。電車の中で吊り革に手をのばさない理由、私に対して、腋窩だけをこぼみ通した理由、それを、私はまぎ／＼と見た。希子の左右の

腋窩には、ギョツとする程赤い、血のにじむ様な色をしたあざがあった。そして、その上に生えている美しく香わしい筈の腋毛は、粗く、丁度男のひげの様にツン／＼と立ってまばらに生えているのだった。

「ひどい、ひどい——」

希子は、そんな事を口走りながら、ぐったりと力を脱いてしまった。

しかし、最も恥かしい立場にさらされてしまったという事が、彼女のマゾの火を、更に燃え上がらせたのだらうか、希子は、再びコーヒーを注文し、私は、彼女の腋窩に一層はずかしめを与えて、倦く事を知らなかった。

五

私はその日、希子と別れてから、泣き出し

たい様な淋しさに襲われた。あの美しい娘、あの娘に秘められた秘密は、私にとって、何と残酷なものであったらうか、もし希子に、クルビーの様な、そしてそれよりも、もっともっとみにくいものがなかったら、否、せめてそれが、彼女の腋窩以外の場所にあったなら、この告白記も、全然異ったものになった事であろう。

私は、その後一度もクルビーには行かない、そして、希子にも、二度と合うまいと思っている。しかし、私の頭の中からは、あの時に見た、焼けた／＼れた様な彼女のクルビーが、消え去る事は絶対にあるまいと思う。

(山口二三夫・画)



十月特大号の飛田良二氏の『縛り絵アイディア集』に、若い女性がオムツを当てられて居る絵を見た時、私の心は全く何とも表現出来ぬ興奮を押える事が出来ませんでした。

私はおしめに対して強く心を惹かれるのです。よく駅の待合室、映画館の休憩所でおしめを取りかえているのを屢々見かけます。これは当然幼児の生理現象ですが、色々変った

オムツに、その上に柄の違ったおしめカバー

を見ては、いろいろ空想にふけるのです。奇クでも白金氏の『デパート人形』で、最愛の妻におしめカバーをさせてマネキン人形にさせた話。妻木氏の『私の悦唐ノート』でも、隣りの家の女中が寝小便のためおしめをさせられて居たとの話。皆、私の心を煽る様な好きな記事です。今後ともこの様な記事を載せ

ていたゞき度いものです。

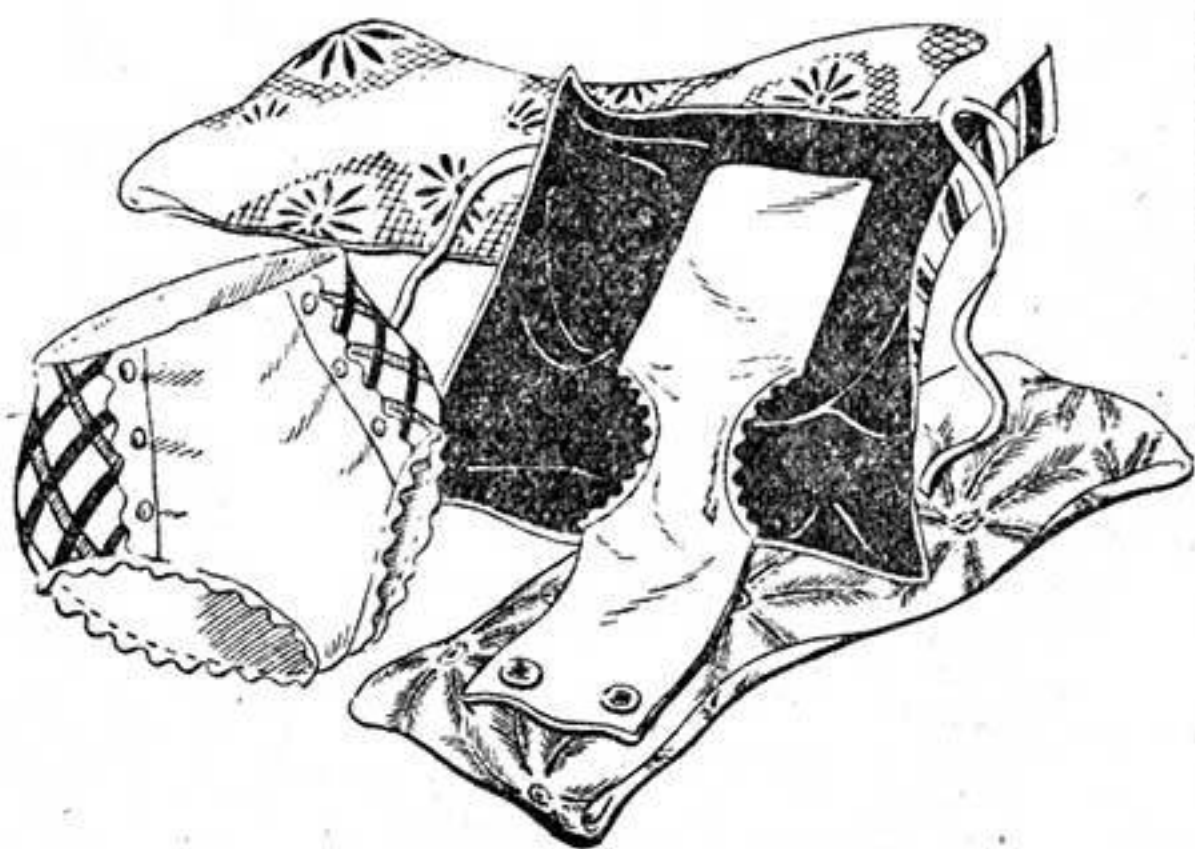
病院生活をしていた時に同室の女性がおしめをさせられていたと云う事は、八月号の澁陽通信で少々述べさせていたゞきました。この時以来、ましておしめへの愛執の念が強まったのです。十月号誌上からフェチシストの頁を設けられました事とて、おしめのフォトを載せていたゞき度いものです。

おしめは幼児の排泄
生理上必需物ですが、
これを若い女性に用い
たらと存じます。アイ
デアとして海水浴場で
女性の海水着姿の多い
渦中においておしめカ
バーを当てゝ行ったら
興味あるものです。某
新聞に千一夜という欄
でパットの代りにおわ
んをつけて、下穿はお
しめカバーでもさせて
やったら面白いだろう
なんて云う記事があり
ました。面白いアイデ
アだと思えます。

又おしめ責めも興味あるものと存じます。
豊満なヒップにゴム製のおしめカバーをあて
ゝやると羞恥に歪む美しい顔、動くヒップに
キュキュとなるゴムの感触音。考えても耐え
られなくなるものです。先日も隣りの中学校
一年生になる悠起ちゃんと云う女の子が、急
病で絶体安静で、排泄の世話に赤ちゃんの様
におしめをさせられて居るのを見ました。又

め責ツムオ

赤 井 茂



浣腸までされていたのです。

作成不能だとされていた浣腸フォトが作成
され、全く嬉しい限りです。おしめを当てら
れた女性のフォトも是非作成願ひ度いもので
す。フエチシストとして恥しき愚感を述べさ
せて戴きました。同好の諸兄弟姉の文通下さる
事をお待ち致しております。

十月号に飛田氏の「縛り絵アイデア集」で
若い女性がオムツをさせられて居る絵を拝見

し心強く思い、思いつ
くまゝに襦褌責めアイ
デアを記して見ました
絵がまずいので文にて
お許し下さい。

(一) 海のレクリエー
ション。海水浴にニュ
ールックとして若い女
性にゴム製の「おしめ
カバー」をさせて衆目
の前へ連れて行くとい
うアイデアいかゞでし
ようか。派手な色目の
流行の「おしめカバー
」をさせて行ったら効
果一〇〇%。

(二) 病院で見た時に若い娘がおしめをされ
て居たのにヒントを得て、都腰巻、又柄物の
内側にゴム布を張り(縫い付け)又、股に股
当をつけて着用させて責めてみる。又、ビニ
ール及びナイロン製の透明な「おしめカバー
」を当てゝ苦しめてみる。特に浣腸なんかを
して見たら最も効果あるものと存じます。

【註】八月号の浣腸通信は四六頁です。



私のマゾ

スクラップ帳より

春 木 俊 野

私がマゾ奇譚クラブを愛読してからもう二年を一寸越えている。一昨年の七月号、女天下時代特集号より一冊も欠かさず求めているが私が特に此の雑誌に執着を持つのは、日本には唯一と云っていい程、珍らしく豊富にマゾヒズムを取り上げているからである。無論

私はマゾヒズムの性癖を有しているが、生をうけて二十八年の今日迄、未だかつてこの性癖を享樂出来る程の満足を覚えた事はない。フランスの苛責の部屋のようにマゾヒストを手馴れた娼婦が扱ってくれる様な処は、まだ日本にはないし、親、兄弟姉妹、知人に

自分はマゾヒストだと公言する事は勿論出来ないのだから、勢い奇譚クラブは私にとっては人生の有意義的な一つの存在なのである。今、私の本箱に奇譚クラブ三十冊近くと一緒にある私のマゾヒズム関係のスクラップ帳から、奇譚クラブ誌上以外でのものを取り出し

てみようと思う。

先ず想出から（これは只記憶にあるだけ）

あげると私が小学校四年生？頃だから昭和十年か十一年と記憶するが、其の頃の講談倶楽部だったか富士だったか忘れたが、確か六、七月号のどれかに載っていた読切の時代小説で題名も作者も子供の頃の事で忘れたが、未だに脳裏に浮かぶ挿絵は富永謙太郎の描いたもの。

内容はマゾ的なものではないのだが其の挿絵に庄巻と云って、いゝ程の一場面があった。

事実、内容は人形の首を洗う男装の若衆、妖艶な女装の俠盜等が登場するもので怪異的なものだが、マゾ味は全然なし、只、其の挿絵に女装の俠盜が男装の若衆を組み敷き、胸へ馬乗りに跨って露わな両腿の間に若衆の顔があり、両膝で男の（絵では）腕をふみしめて片手で首をしめつけている図はマゾヒストでなくても凝視する程だった。絵だけの描写でゆけば、美貌の妖婦が前髪姿のお小姓を力づくで組みしき胸の上にどっかと馬のりに跨っ

ているもので、子供心に私は胸ときめかせてこっそり見ては楽しんでいたが、何時までも大事にして居るつもりだったのに、何時のまにか、失ってしまった。

これも想出だが、無声映画で原駒子主演の「奴の小万」もマゾヒストの必見のものである。私は三日間位、続けて観に行った事を覚えてる。

谷崎潤一郎の小説は余りにも有名で誰もが知っているので省略するが、戦後、六号か七号で廃刊になった雑誌で、福岡市内で発行になった「モダン読物」は珍らしくマゾを多く扱っていた。昭和二十三年頃で大判であったが頁数は三十頁位しかなく、猟奇とかオールモダン読物は、創刊号から三号までは本当にマゾ雑誌と云って過言でなく、殊に第二号は全篇オールマゾと云って、いゝ程だった。私はこの雑誌を手にした時、本当に躍りあがる程嬉しくて頁少い雑誌を何回もく読み返すので、しまいには暗誦してしまう程だった。

今も時々出して見ているが「暗黒の夫人」「女性恐怖症」「牛乳風呂の饗宴」「脚を抱かせて」等はマゾヒスト愛好のものである。只残念なのは、挿絵が皆ピントが外れてしまっ、挿絵だけでは其の内容は全然知る事は出来ないのも、エロ雑誌とは違うという編集者の狙いだったのかどうか……。

其の頃ふうびしたエロ雑誌の数多い中から切りとってはスクラップしたので、どの雑誌か思出せないが、こういう雑誌に書いたのにしては珍らしいのは、浜本浩の浅草もので「男を蹴とばす女」である。これは挿絵にも傑作が出ている。当時のものを二、三拾い出してみると、「お妾アパート」これは明朗な内容だが口絵に色刷が出ていて、お妾さん数人がテーブルを中に狂宴の最中、和服の中に只一人のショートスカートの若い女が、品のいゝ洋服姿のお爺さんを四ツ這いの馬に口で細紐で手綱をかけ馬のりになって部屋を這い廻らせているのだ。私が雑誌をパラ／＼とめくって此の絵だけで、これを買いたい求めた



事は云う迄もない。

「寝小便小町」はおてんばでチャッカリ屋の女学生を描いた明朗喜劇だが内容にも挿絵にも快よい微笑みをおこさせずにいないマゾ癖好みの読物で、他に「或るマゾヒストの告白」——これは痴人の愛の譲二とナオミの様な夫婦を、マゾヒズム小説と名づけるものがあればそのために書いた様な短篇、「怖るべき女」「月の夜の童貞」等、まだくあるが、高橋鉄の性科学小説「家鴨とR博士」はマゾ読物ではないけれど、美しい女体の肩、胸、そして腹、腰へと男が接吻してゆく情景を短い乍らシルエットにかこつけて心憎いまで描写しているのがあった。

猫奇の二号「愛液奇譚」はマゾヒスト特に女性の尿を好む方には「最高（性交）祭典と最敬礼（性器接吻）」と共に、欣喜雀躍せざるを得ない読物だった。

それから少し雑誌が厚くなりかけた昭和二十四年頃、大阪で発行されたもので、誌名は忘れたが「情痴の街」「魔窟館の妖女」は中

篇的の読的で共に一部ではあるが刺戟的な程マゾの男性とサジの女性を扱っている。

此の外、怪奇雑誌、奇抜雑誌中にあった、「妻の小便を飲む夫」それから女性の大便を食べる筋の「お尻の毛を抜く女」「男は何故下になりたがるか」等があるが、創刊号兼廃刊号になった「歓楽」には、下手な絵だが仰向いた男の顔に跨って、口の中に小便を注ぎこんでいる女のカットがあった。

これらの雑誌のハンランする前後に、タブロイド判程度のエロ新聞が可成り発行されたが、此の中にも見捨て難いマゾを扱ったものが大分あった。先ず大阪での発行もので「ハイレイト」に三回にわたって連載された「奴隸」これは或るお金持の邸に書生に雇われた男と其処の令嬢との女王と奴隸の物語、それから東京で出たもので主に幽霊を扱った「スリル」に、始めて私が投書したもので、又マゾ的なものを載せる嚆矢となったのだが、いずれもコント程度で「女に組みしかれた男」「男をもて遊ぶ謎の女」、「女の復讐」と、

私は自分をペンに託して性癖を満足させ乍らこれらのものを出したのである。

雑誌や新聞の話の序でだが昭和二十五年の五月号の「りべらる」の口絵にはオフセットで堂々と二頁に跨って、谷崎潤一郎の痴人の愛のクライマックスシーンを、岩田専太郎が流麗な筆致と色彩でもって描いている。四ツ這いになった譲二の背に水玉模様の着物を着たナオミが馬のりになっていて、場面が近代的に描かれているのが、男女同権の風潮と相まって、オフィスの女性間に評判のいいものだったとか、それに同誌には「女の変態、男の変態」と、題してサジの女性とマゾの男性の事を書いた性心理研究と風土記、女尊男卑部落と云う読物が掲載されていたことがある。

矢張り其の頃、発行されたもので怪奇探偵小説ばかりを集めた増刊号では、浜尾四郎のかつての小説徹底的なサジ女性とマゾの少年を描いた「マダム殺人」と、男の顔の上に馬のりに跨る玉乗り女の描写がある、江戸川乱歩の「踊る一寸法師」が載っていた。それ



と同じではないが、矢張り探偵小説の雑誌である「寶石」に木々高太郎が書いた推理もので、或る名門の老人の死が、看護婦？ だっと思うが、若い女を自分の腹の上に馬のりに跨らせて、首を揉ませている裡、お互いが……に達して殺人となると云ったものがあつたが、これは挿絵も、本文に忠実に書いてあつたが、私は此の本だけは入手しそこねてしまった。

此の外、こう云つた雑誌で集めたマゾの読物や絵画、カット等はまだく面白いいものがあるが大同小異なのでこれ位にするが、昭和二十一年の暮、九州の南端K市に私が在住当時、戦災で住む家なく海岸通りの或る倉庫を仕切つて、アパート風にした処に住んでいたが、夜でも仕切つた間数が二十位の駄々っ広い処へ、高い天井に吊下げられた電灯が僅かに二ツと云う新聞も読めない程の非道い処だった。海岸通りなので、アメリカのリバティ船とか云う軍艦が数隻横づけされ、その倉庫はアメリカ兵のパンく宿化していたが、二

十四日のクリスマスイヴの時、上陸したアメリカ水兵が此の夜は殊更、大目にみたM・PやS・Pの眼をかすめて、此の倉庫に入つて来た、その頃私と懇意にしていた東京から来たという大柄で豊満な肉体を持つ美人のマリというパン嬢の部屋で、水兵二人が御持参の

罐詰のビールや、その頃、食べたくても見たくてもなかった、あちらの素晴らしい食べ物を囲んで、お招伴にあづかった私が、片言まじりで日米親善の？ 気焰を他の部屋に負けずあげていたが、その裡に大いに酔っぱらつた此のマリが、矢庭にスカートをたくしあげて白いメリヤスのズロースを脱ぐとオウ、ワンダブル！ と叫んだ水兵の一人を仰向けにおし倒しその首の上に馬乗りに跨つてしまった。マリもそれからマリのお尻の下に顔を敷かれた水兵も他の水兵も、そして私も、そのままの姿で益々悦びはしやいだが、はからずも此の時私は此の情景を、フラッシュをたいて写真に収める事が出来た。ポーズは昨年度の奇譚クラブに連載された「ラブ・スレイブ」の

春美と主人公の好んでとつた姿態そのままに特にコップを片手にもって乾杯の恰好をし、もう一方の片手は腰にかけて水兵の顔を股の下に組みししているマリの姿態は、私のコレクションの中でも手離す事の出来ない貴重な写真の一枚となつた。

以上で、私はスクラップ帳を閉じる事にしたいが、秘密出版らしい外国の種々な写真や日本のその写真と共にある中に交つてマゾヒストの明るい人生を、かもし出すみたい感じられるものが二、三枚あるが、それは戦後封切りされた大映の密林の女豹の中の一駒、矢張りK市の或る映画館に映写技師として勤めていた友人に頼んで、やっとな手に入れたものだが、荒川さつきの扮する女ターザンが小林桂樹を密林の中で投げとばして胸の上に馬のりに跨り、やがてそのまま接吻する場面三葉である。

【註】「マダムの殺人」の挿絵は、本誌二十八号七月号の口絵に紹介してあります。



懸賞

告白と手記と体験

入選

〔続・半公刑〕

脱

走

囚

篠原 咲 恵

お姉様の脱走の決心は非常に固いものでした。私を信用して全てを打ち開けて下さるお姉様の気持をどんなに嬉しく思ったか知れませんでした。お姉様の何ものにも負けまいとする勝気な気性は自分をあざむいた経理部将校に向って火の様に燃え、呪いの言葉に自ら興奮してゆくのでした。無理ありません。つい数日前迄は総務部の女王様をもって自他共に許し、寄り集る不良青年将校を笑顔一つであしらって来たのですもの、今赤札の囚衣を身に付けても、やはり犯し難い程の気品もあり、女王としてのプライドも決して失われ

ては居りませんでした。

耐え難い屈辱に興奮の一時が過ぎると、やがて冷静に返ったお姉様と脱走計画を話し合いました。

「お姉様と御一緒に私も」

とお願いました所、お姉様はやさしく首を横に振るのでした。

「咲ちやんの気持本当に嬉しいの。しかし私は此処を逃げてからT市の警察署に自首するの。私には公金横領と言う立派な罪名があるんですもの、例え一生前科者と呼ばれたって此処に居るよりはましだわ。咲ちやんの場合

は此処から逃げても行く所がないでしょう。私の此れから行く所はやっぱり冷たい鉄の檻の中なのよ。しかし此処よりは少しはましだしそしてその時は計理部の将校達だってやはり軍法会議に廻されて鉄の檻の中で涙を流させてやるのよ」

お姉様に説き伏せられて、私はお姉様の膝にすがって泣きました。それからの数日、私達は看守の隙を見てはあれこれと脱走の打合せを致しました。急ごしらえの営倉の事とて、決心一つで脱け出す事はそんなに難しくありません。完全に逃げ切る事の不可能な事

は誰でも知って居りますし、捕った時のお仕置がどんなに恐ろしいか、それを思えば脱走防止など全くおろそかにされて居りました。唯一つどうしても困った問題は服装でした。赤札の囚衣は自分で脱ぐ事も出来ず、破るには余りにも丈夫だったのです。

やがて又、十日目毎のお仕置の日が参りました。脱走を決意して以来、お姉様は極力看守の意を迎える様に作業も一生懸命にして居たのですが、台車引きの事件の埋め合せはと

う／＼出来ず、お仕置を受けねばなりませんでした。お姉様を含めて四人の受刑者のむき出しのお尻が一行に並び、やがて女看守のお説教は鋭い針の様にお姉様に集中されたのでした。捕えた美しい女王様を身も心も全く奴隷に突き落す事に、彼女達の残酷な喜びがあったのでした。しかし、此の時の受刑者の一人、八十二号の美代子が近く元の職場に帰される事が判った事は大きな収穫でした。

私は美代子を口説き落とし泣き落してやっと

作業衣を一着とナイフを第一倉庫の裏にかくしておいてくれる事を承知させました。こうして全ての手筈が整い、お姉様はある夜とう／＼脱走を決行致しました。

皆の寝息をうかゞいながら、お姉様と私はそっと起き上り私の肩に上って天井からぶら下って居るチェインブロックに手を掛け様とするのですが、足元がふらついてどうしても立ち上がれないのです。必死の努力と焦りとで汗まみれになりながらも、焦れば焦る程う



まくゆかないのでした。此の時室の隅で寝て居た同室が、むっくり起き上って来て、物も言わずに私の前に立ち私の両腕を握りしめ、早く上れとお姉様のお尻を押し上げてくれるのでした。六十七号

の通称おぼちゃんという物品持出し組の赤札囚でした。お姉様はおぼちゃんを拝む様にして肩に上り、チエインブロックの引き鎖に手を掛け、静かに引き寄せると、鉄の爪に足を掛けてよじ昇り、アングル材を横に伝って隣室と界の板塀に達し、塀にぶら下る様にしてやがてどんと飛び下りました。お姉様の姿が見えなくなると私とおぼちゃんは静かに自分の床に入りましたが、とうとうまんじりとも出来ず、明け方とろとろとしたと思った途端激しく揺り起されました。朝の点呼が始まるうとして居り、室長の操が早くもお姉様の脱走を知ったのか、室内は大騒ぎになって居りました。

刑事上りらしい眼の鋭い守衛が二人、じっと睨み据えて居る中で私は一生懸命平静を保とうとするのですが、所詮驚に見込まれた小雀同然の小娘には老練な彼等の眼をあざむく事は出来ませんでした。挙動不審、脱走共犯の疑いで、守衛所地下の調査部屋に連れ込まれましたのは、それから一時間程後でした。係官の取調べに対して私は名前を告げただけで、徹頭徹尾泣きの一手で答えませんでした。

幾度か手を上げて叩こうとしながら、その

都度思い直した様に振り上げた手を引込める係官の態度に、私は自信と余裕を持つ事が出来ませんでした。

「大丈夫、もう二、三時間もすればお姉様はきつとT市の警察に着く、それ迄は何とかして時間を稼がなければ」

係官の同情を引く為に私はあくまでも可憐な娘を装い、さめざめと泣き続けたのでした。

「よし、何時迄も泣いて居なさい、今にどんなに痛い目に会っても知らないよ」

もて余し気味の老係官がいよいよ最後の手段、拷問を決意しようとした時でした。後の扉が開いて入って来たのは、あゝヒステリーと鬼婆の二人（共に女看守）だったのです。

老係官の前に直立不動の姿勢で立ったヒステリーが、



「係官殿、百二十七号の取調べは私共二人にお任せ願いたいと思います」

「わしは可いが、守衛長殿の御許しがなければ困るが」

「守衛長殿には、係官の許可さえ得ればお前達で責任を果す様にとの事でした」

女だてらにすっかり板に附いた軍隊調の彼女の言葉に老係官は、少しもつたいを附けて首をかしげて居りましたが、

「そうか、女は女同志、案外男には言い難い事も素直に話す様になるかも知れん。ではお前達でやって見なさい」

渡りに舟と係官はさささと地下室を出てしましました。

全身の血の凍る様な思いで、私は二人の睨む眼に射すくめられて何時の間にか泪も止って居りました。

「どう、あの声が聞える？」

言われて耳を澄すと、かすかではあります絶え入る様なうめき声が防音扉を通して聞えて来ました。

「あんな痛い目に会って泣き声を出す前に皆白状するね」

観念した私は静にうなずきました。脱走時間やその方法を事細かに話した私の態度

に、いさゝか拍子抜けした恰好でメモして居た彼女達は、脱走協力者の有無でハタと口をつぐんだ私を見ると、意地悪い笑を交換し合って眼で合図すると、隣室との重い防音扉を開けて、その中へ私を突き入れました。

あゝそこは、世にも恐しい拷問部屋だったのです。低い天井からぶら下って居るチェインブロック、壁に懸って居る幾筋もの鎖、血に染んだ皮鞭、鉄の輪の附いた木馬、三角の枕木を植え並べた拷問台、それから水責や烙の道具もあるのです。赤い電球に照らし出された此れ等の責道具の無気味な有様に私は一度に腰を抜してしまいました。

「本当に、本当に、あれ以上何も知らないのですから」

「タント強情お張り、何んな事があっても言わせる事だけは、全部言わせるんだから」

哀願する私の背に鬼婆の手から鞭が唸りました。

後手、首縄、十字に縛られた私の体は、手首に掛けられたチェインブロックに依って宙に浮き上りました。両膝、両足首もきっちり縛られモンペをはぎ取られた露き出しのお尻や、太も、に鬼婆の皮鞭が、そしてヒステリーの極の棒が交互に打ち下されました。

五分、十分、皮肉も破れん許りの鞭打ちが続きました。今にも折れん許りの両腕の激痛喰い込む麻縄の痛さに何を白状すべきかも忘れ、わめき、叫び、そして遂に「許して許して」と言いながら気が遠くなってゆきました。

やがて気の附いた私は、流し台を背にして縛り直されました。此れも拷問の一種なのでしょう。腰掛に縛られた恰好ですが、ぐっと胸をそらして仰向けに丁度顔の真上にシャワーが懸って居りました。

「もう強情張る気もなさそうだけど、嘘をつくと又苦しまなきゃならないよ」

私を完全に征服し得た喜びと優越感に酔いながら、身動き一つ出来ぬ私を痛ぶりの、次々と自白を強いるのでした。おぼちやんの名前を言い、美代子の協力を白状させられる迄に私の口と鼻からは拒み切れないシャワーの水が流れ込み、七転八倒の苦しみを味わいました。

暫く休息させられた私に、次に強いられました自白はお姉様の逃げ路でした。後で判ったのですが、此の頃もうお姉様はT市の警察からの連絡で、航空廠からは守衛が引き取りに出掛けた頃でした。一旦解かれた縄が体に

巻き付き、自由に動ける手足を縛められて、又あの苦しみを、味わねばならぬかと思うと意地も義理もなく、唯彼女達の許しを得る為に何んな事でも白状しようと言う気になってしまいました。三角の枕木の並べられた拷問台に縛りつけられただけで、私は昨夜お姉様が宿ったのは総務部の遠山重子さんの所ですと白状してしまいました。

「まだ手伝ったり、知っても黙って居たりした者が居るんだろう。此処迄白状したらきれいに皆白状してしまいなさい」

「もう本当に知りませんからお許し下さい」「ようし言わないんだね」

ヒステリーと鬼婆は硬く縛られた私の膝の上にコンクリートのドブ板を一枚二枚と乗せてゆきました

「もう知って居る事は、皆白状してしまいました。皆、皆白状してしまいました。許して許して下さい」

脂汗に全身まみれながら息も絶えだえに叫ぶ私の声に、彼女達もやっと許してくれました。勿論、此れ以上責められれば少くとも私は当分入院しなければならぬ程度だったのです。

それから一週間程私は守衛所の物置の中に

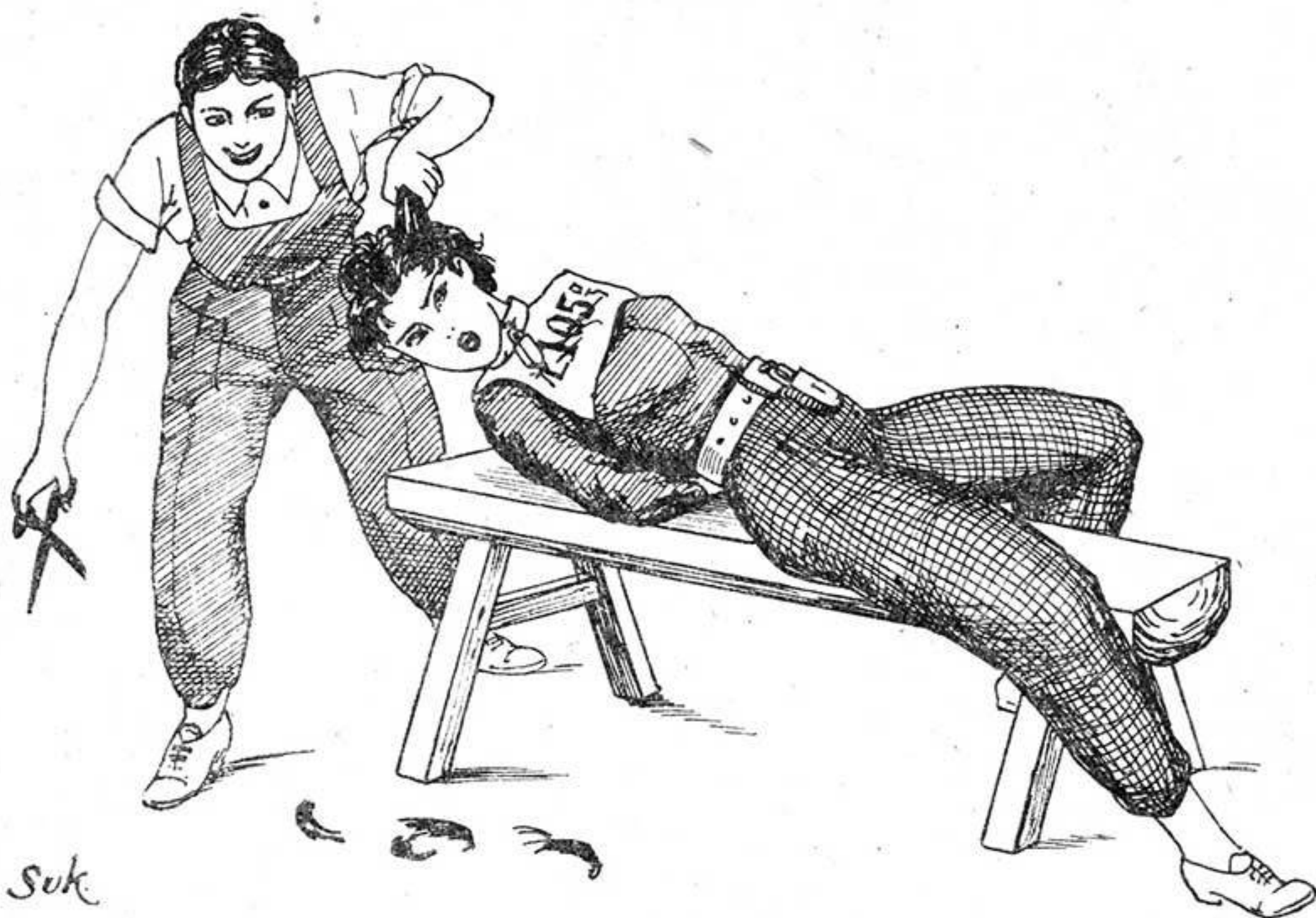
放り込まれたまま過しました。おぼちゃん、美代子、そして遠山重子さんとやらも、きつとお仕置を受けた事でしよう。お姉様に関しては何も判らないままに、身体の回復と共にその成功を祈って居りました。私が元の赤札の営倉に戻されましたのは、夕方七時頃でした。中に入った私はあっと驚きました。お姉様が居るのです。青白い全てをあきらめた眼射しで、じっと私を見て居りましたが、その眼からはやがてポロポロと涙がこぼれ落ちました。あゝ一国の法律よりも一兵器工場のリソチが優先して居たのでした。お姉様の自首は結局無意味だったのです。T市の警察署長は航空廠から脱出して来たと聞くや否や、直ちに電話連絡して、お姉様の話を聞こうとしなかったのだそうです。やがて駆けつけた迎えの守衛と女看守の二人に引き渡されたお姉様はその場で後手に縛られ、頭からすっぽりと雨合羽をかぶせられ、更にその上を麻縄で二巻きされ（古川裕子さんの真似ではありません、当時徴用者の脱走未遂は本当に此の恰好で連れ戻されたのです）衆人環視の中をその日の中に列車で連れ戻されたのでした。自分一人の考えで共犯は一人も無いと主張するお姉様も、美代子おぼちゃん、重子さん、

それに私と、四人の自白の前にはどうする事も出来ず、いたずらにヒステリー達の淫虐な喜びをかき立てただけでした。血に染んだ鞭の唸りに女王のブライドも消し飛び、彼女達の足下にひれ伏して許しを請い、全てを自白したとの事でした。そして私達の体の回復を待ち赤札囚全員の前に引き出し、今一責め責めて見せしめにしようというのが彼女達の魂胆だったのです。

私のすぐ後から、三人の赤札囚が連れ込まれました。美代子におぼちゃん、そして最後に入って来た美しい人は胸に「二十三号」の赤札番号を付けて泣き腫らした赤い眼、耐え難い羞恥に顔も挙げ得ない風情に何故か知らぬ嫉妬がむらむらと湧いて来ました。

「注目!! 先日脱走した百五号と、その脱走を手伝った百二十七号達が今此処に捕って来ました。悪い事をして罰せられるのは当然です。それを後悔もせず作業やお仕置の辛さに負けて逃げ出す者は全く非国民です。今からその非国民達がどんな目に合うか、良く見ておきなさい」

彼女達は私達を叩き懲す事を国家に対する最上の忠誠であるという信仰にも似た激しい感情だけに支配されて居るのです。



Suk

激しい彼女の口調に、私達は生きた心地もなく遠山さんなぞは唇を真青にしてぶるぶる震えて居りました。

「二十三号、前に出なさい、二十三号は脱走囚百五号を自宅に一泊させたのですね」

「はい」

「非常に重い罪ですが、百五号に脅迫された点もありますので、鞭二十で釈放してあげますから有難く思いなさい」

体を震わせて泣いて居る遠山さんの両腕は、後に廻されバンドの金具に固定されてしまいました。何時の間にか運び込まれてあった丈夫なベンチの様な尻打台を跨がされた遠山さんの腰からモンペが剥ぎ取られました。白磁の様な双臼にヒ

ステリー達の淫虐な眼が光りました。両足首をベンチの脚に縛り附けると赤い楥の棒が首筋に当てられ、左右から二人掛りで遠山さんの上体をベンチに押し付けてしまいました。

お仕置の終わった遠山さんは「お仕置有難うございました」と十回大声で叫ばされ、赤札の囚衣を脱がされ渡された事務服に着換える、その場で釈放されました。お尻の痛さによろめく様に出て行く遠山さんの後姿に、何故か私はほっとした様な気持が致しました。

次におぼちやんが打たれました。四十近い衰えを見せた肉体の一部を露出して衆視に晒す事がどんなに恥しかった事でしよう。鞭の数を増してモンペの上から打ってくれと手を合せて拝むおぼちやんの腰から容赦なくモンペが剥ぎ取られ痛々しいお灸の跡のあるお尻に鞭が鳴りました。泣きわめく美代子の鞭打が終ると、おぼちやんは百十一号に、美代子は百十二号に改められ、今後は「要監視囚」として取扱う旨宣告され、新しいお仕着せが渡されました。今迄の囚衣と異うのは縦に太い赤い縞が入って居る事でした。お姉様と私にもついでに新しい囚衣が渡されました。

「これから百五号と百二十七号のお仕置を行います、今後此の様な事件の絶対に起らな

い様、お前達全員に此の首輪を嵌める事になりました。今からお前達に此れを嵌めるからその積りで居なさい」

側の箱から取り出された厳丈なズック製の首輪にはピアノ線の筋金が入れてあり、腰のバンドと同じ様な錠が附いて居て小さい鉄の輪が三箇取り附けられてありました。わざわざわというざわめきが起りました。

五人の女看守は手分けして嫌がる赤札の首筋を押え、次々と首輪を嵌めて行きました。

「いゝかえ、皆に此んな恥しい首輪なんか嵌めさせたのも、皆此の二人が悪いからなのです。今から此の二人を犬の様に皆の前に引き摺って行くから、ツバを吐きかけて、思いきりお尻を打っておやりなさい」

お姉様は左から、私は右端から、此の屈辱に満ちたお仕置を受けて行きました。

手首と足首に附けられた二尺程の鎖をチャラチャラ鳴らしながら、四つん這いの私とお姉様は、首輪に附けられた犬鎖に引かれて、赤札囚の前に正座し、両手を着いて

「お仕置お願い致しますとございます」

と言いつつ持ち上げた顔に、ペツとツバが飛んで来ます。顔面に垂れ下る唾を拭く事も許されず、直ぐに、むき出しのお尻を差し

出さねばなりません。拷問の傷痕の残って居るお尻に平手打が鳴ります。「早くお礼を申し上げなさい」「ハ、ハイ」屈辱の泪に濡れながら、又向き直って正座し、両手を着いて「お仕置き……有難う……ございました」「次ぎ」声と同時に犬鎖が引かれ、女看守の周りをぐるりと一廻りさせられて次の赤札のお仕置をお願いし、お礼を申し上げねばなりませんでした。

右と左から次々とお仕置を受けて行った私とお姉様はやがてぼったり顔を合せ眼と眼が合った時、耐えに耐えた屈辱の泪が堤を切った様に流れ出し、わっと許りに泣き伏してしまいました。

私にさそわれたかの様に、さすが気丈なお姉様も喉を詰らせながら泣きむせぶのでした。

「泣いたって、わめいたって、お仕置は未だ済まないんだよ」

首輪の鎖に引き倒され、鞭が飛んで来ました。しかしあの屈辱のお仕置を思えば、私達はますます身を硬くする許りでした。

「ようし、じゃあ二人共、丸坊主にして明日一日総務部の入口に晒し者にしてやるから」威丈高になった彼女達は、寄ってたかつて

お姉様をさっきの尻打台迄引き摺って行き仰向きに押え附けると、錠を取り出しお姉様の頭髪を驚づかみにすると、「可い、かえ、丸坊主の晒者も良い見せしめになるよ」「それ丈は許して、大人しくお仕置を受けますから」「素直にお仕置を受けるんだね、そんなら丸坊主だけは許して上げるけど、お手数を掛けた罰にこれだけは切るわよ」さすが氣位の高いお姉様も見栄も外聞もなくおいおい声を立てゝ泣き出しました。バサリと音を立てゝ無惨にもお姉様自慢の黒髪は切り落とされました。少し刈り込み過ぎたヘップバーンスタイルで今なら通るでしょうか、起き上ったお姉様は決して醜いとは思いませんでした。「二百二十七号も判ったね、ではお仕置を続けます」

唾にまみれた顔に又唾を吐き掛けられ「お礼の申し上げ方が悪い、もう一度」「お尻の出し方をもう忘れたのかい」「犬なら、犬らしくトットと歩くんだよ」罵声の度に首輪を引張られ、棒で小突かれ、そして鞭が唸るのでした。漸く終った屈辱のお仕置の後で、私達は全く絶望的な刑罰の宣告を受けたのでした。

「復讐致します。百五号は今後立派な赤札囚となるべく努力すると共に大東亜戦に勝ち抜

澆 腸 窃 視

大 木 喬

く迄は自分の様な不心得者を二度と出さぬ様
工員その他の教化に挺身致します」「復誦致
します。百二十七号は……百二十七号は……」
泪にむせび詰った私の喉からも女看守の無情
の鞭はとうとう誘いの言葉を吐き出させてし
まいました。

こうして私とお姉様は戦争に勝つ迄、即ち
当時の国民常識から言えば終身刑を言い渡さ
れ、月に一、二度、衛門の前に、動員女学生
の前に、罪を犯した女の姿を晒す役目を仰せ
附けられてしまったのでした。

女王様、いやそれ所か、人間である自覚す

ら失ってしまったお姉様と私は、鞭打たれて
は泣き叫び、成績が良いと褒められては卑し
い笑顔を作って彼女達の機嫌を取り結ぶ、そ
れこそ彼女達の望む立派な赤札、服従にのみ
生きる大和撫子が出来上ったのでした。

(終)

私が澆腸というものに強い興味を抱く様にな
ったのは終戦後間もなくでした。と云うの
は、外地に居られた方ならよく御存知の方も
あると思いますが、終戦直後の外地の混乱期
には、相当刺戟的な場面をいやという程見せ
つけられて来たからでした。その中でも特に
澆腸というものに興味を持った人は少なくも
私だけではないと思って居ります。かって日
本の特高がやった様な事は勿論、女のスパイ
容疑者が澆腸責めにされている処等も、私は
よく見かけたものでした。

私の澆腸に対する興味と云いまして、他
の人が澆腸され、又、私自身が直接澆腸を他
の人に行い、その苦痛の姿、羞恥の姿を見て、
それに強く欲びを感じるのです。勿論、澆腸
される人が若い女性であればある程、私の欲
びは数倍です。それと云いますのは、私は縛
る事、打つ事等をあまり好みませんし、もし
縛るとしても、肉体に苦痛を与えるというの
でなく、最小限度に体の自由を拘束するとい
うのに過ぎないからです。肉体的な苦痛とい
うよりも、むしろ羞恥を利用した精神的な苦

痛を与える事に大きな興味を持って居ります
(露出願望の柴崎黎子さんが心から望んで居
られるものも、もし許されるならば、私は彼
女の欲するだけ与える事が出来るものと思ひ
ます。)

そうした私が内地に引揚げてからは、どう
しても私の求める澆腸をされる場面も、その
機会も、又、澆腸をする機会もなかったのだ
す。澆腸器(と云っても、いろいろ種類があ
り注射器を大きくした様なもの、ゴムのスポ
イト式のもの、又、特殊な場合のみに使用さ
れる様ですがイルリガートル)を集めては、
その澆腸をする時の模様をいろいろ空想して
楽しんで居ります。これらの澆腸器も後に使
用する機会はありませんでしたが。又、多くの雑
誌から澆腸に適するポーズなどあれば切り抜
いておりました。

たしか一昨年の暮の事でした。私は今まで

全然気がつかなかった事を発見したのです。

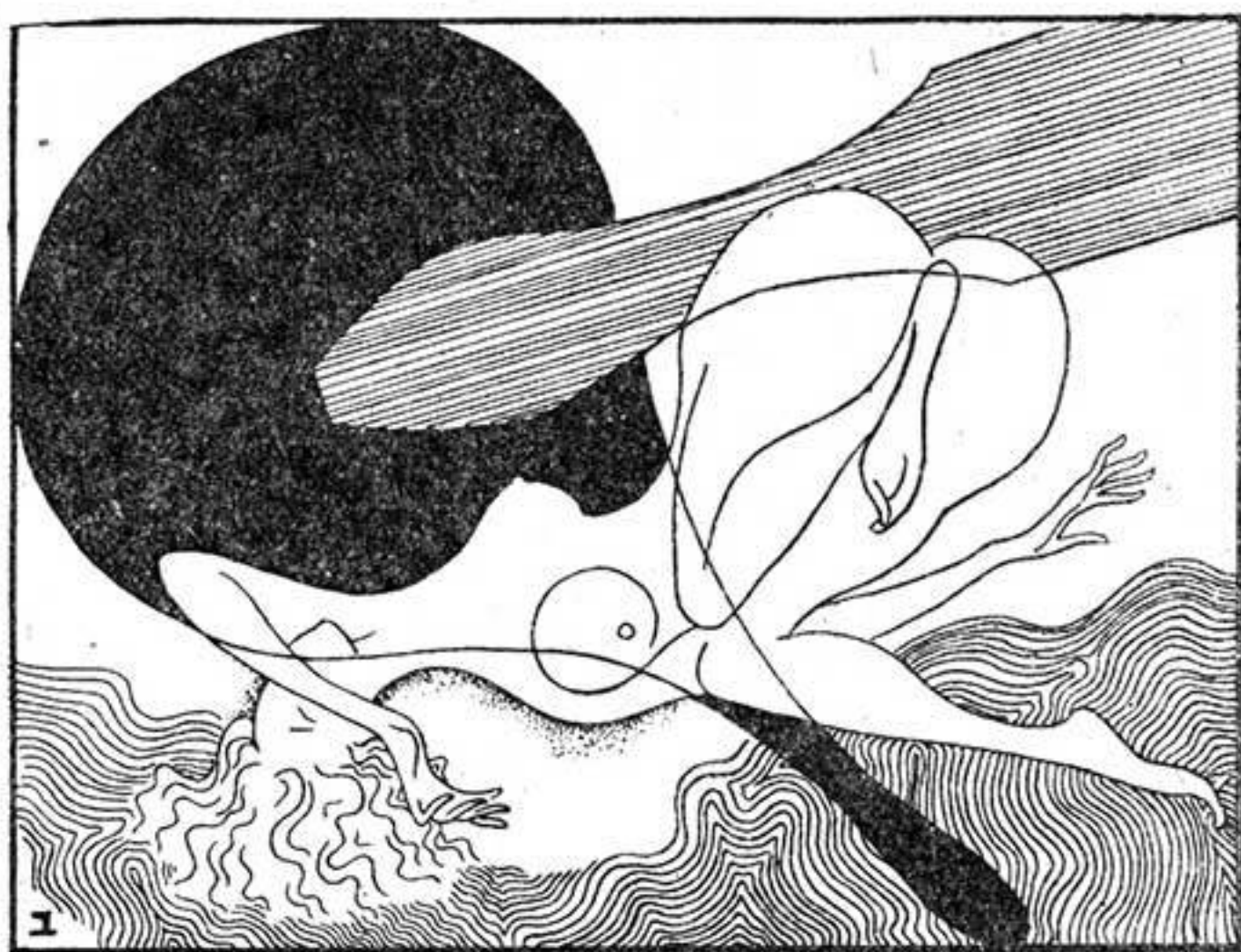
と云うのは、最近、今の所に引越したのですが、前に住んでいた家の狭い道をへだて、真向いの家が産婦人科の病院だったのです。

勿論、コンクリートの高い塀があったので中の様子等はどうてもいこうことの出来ないものと思つて居りました処が、その夏にすだれをつる為に窓の上へ上つてその病院の方へ見るとなしに視線をやると

何と診察室の内側がまる見えになるのです。

看護婦の何か片付けものをしてるのが手にとる様に見えるのですが、午後六時からの診察にはまだ相当間がある様です。窓の処から一旦部屋に下りた私は、期待に胸をふくらませ乍ら時の経つのを待ちました。

夕食もそこへ済ませた私が再び二階の窓の上に上って診察室の方を見ると、夏の事



とて、窓の白いカーテンも全部開け放してあります。黒いレザーに金具の足台のついた検査台があり、横には注射器や、ピカピカ光った子宮鏡等がずらりと置かれてあります。やがて一人の患者が診察室に入つて来ましたが、簡単な内科的な診察だけで帰って行きました。ちょっと期待がはずれた様で失望を感じておりますと、次に入つて来た患者が二十二、三才位の若い女の人でした。一通りの診察があつて医者とか何か話しておる様でしたが、やがて立上ると検査台の方へ近づいて行くのです。豊かな婦人の上半身を見た私は、これから行われようとする事を空想して、何か息苦しくなつて来るのでした。

和服を着て居るその婦人が帯を解き、下ばきも脱つて検査台の上に上りました。看護婦

がやって来て、着物と腰のものをグツとまくり上げました。婦人の顔はカーテンに仕切られて見る事が出来ませんが羞恥にもだえる表情が目の前に浮び上つて来る様な気がします。やがて医者が看護婦から手渡されたのは浣腸器でした。それを手にして医者は婦人に近づいて行きました。腰を浮かせる様にしながら排便を我慢している婦人の姿など、今も尚明瞭に思い浮べる事が出来ます。看護婦が白い便器で便を取り終えると、続いて今度は先よりも嘴の長い浣腸器を持って来ました。その婦人がどんな病気かは知りませんが、二度も続けて浣腸がされたという事に対して私は今までにない興奮を感じました。若い女性が浣腸されている姿は、私の心を本当に夢中にさせてしまいました。その無防備な姿でも羞恥心を最大に与える事の出来る浣腸の姿態に、私は何もかも忘れてうっとりしてしまふのです。

その日から私は、毎日夜が来れば診察室の見える窓に上りました。この最初の経験はいつまでも深く心の奥に残しております。そして、自分の手で直接この様な浣腸をしてみたいと思う念願は今も尚、強く心に持っております。



川柳に見る

お臍の功罪

須藤 律夫

江戸時代の俳人横井也右の句に

——見つけたり蛙に臍のなき事を——の一句があるが俳人でなくとも産婦人科の医者であるとか、ヌードフォートの芸術家、或る塑像、彫刻家でゝもない限りこの人体の功労者「お臍」に対して関心を持つ者は少いだろう。のみならず川柳子

は、
——いつ見てもひまそうなのは臍の穴——などと達観した諷刺詩を放っているが、何故か臍窩に偏執を持ち、その礼讃者でもある私にはこの事が一寸淋しくもあり、又淡い同情の念

も禁じ得ない。否そればかりではない、

——穴増や有りて甲斐なし臍の穴——などに到っては、私は寧ろ暴言ですらあると思う。凡そ生きとして生けるものが宿命の星の下に、揺籃の母体に宿って三ヶ月余り、新陳代謝の大任を担ってかぼそき生命を維持し、世に出てからも常に枢要の地位、中心を占めている。（この事は確かだ）のみならずヘルニアにでもならぬ限り、お臍は腹部中央のアクセントとして、重要な美的価値を持っているものなのである。そんな訳で今日は秋の徒然に想い出す儘の句を並べ、その功罪を



考察して見る事にした。然しその前に前記横井也有的の「臍の頌々なるものを先ず御披露して見度いと思う。」

臍を不用のものなりとは我も諷りし人の数なり。されば他の一寸は見えて、我が一尺は見えづとか、世に役なき物較べせんには、まづ我こそは先になるべけれ。抑々かの臍は物やは食ふ、素餐の謗もなし。さらば物やは言ふ、三緘の警めにも及ばず。我が世にありて物を費すには似る可らず。人の肢体に不用を論ぜば、男の乳ばかりこそ、如何なる益のあるとも見へねど今更これを取り払はゞ、腹は渾沌王の面影して、世にすぎなきものなるべし。いでかの臍は頓死急症のせん方なきにも、先づとてこれに災(災の誤りではないだろうか)する時は、泉下の首途を留むるためしも多し。扱てこそ腹のさしも草、只頼めともよみ給ひけん。たとへ項羽が山を抜く力も、この垢を取れば忽ちに落つとぞ。痛快臍を噛むとは漢文の古語にして、我が朝に人を嘲りては、臍が笑ふとも言へりけり。然るにつゝましき隠居ありて、臍金と言ふを溜められしより、天津空の鳴神も好もしがりて、いかでこれ抓まんとし給ふより、女小童の氣づかふ事は、麝香の狩人を恐るゝにもこえたり。昔祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に泣く年の暮と、懐旧の袖をぬらせしは、耳も及ばじ、鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば、今は我が身を何にたとへんされば臍は我が下に立たん事かたくとも、我も亦臍の下と言はんは、何とやらん場所よからずかれに倣はんとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、しかれば上下の

品定めはやめて、今日より只彼をそしるまじとぞ。

蓋し産婦人科医、産婆などは、臍の穴の深さによって妊娠の経過、胎児の發育状態などを考量し、ヌード写真家は臍窩の翳に採光を感じとる。又彫刻家などは軀幹の位置を定めたり、腹部の中心位置を割り出す事であろう。註(筆者の知る或るレントゲン技師は数千人のお臍を探ぐり、何時も腹部の中心位置を定めた由である)扱本論に戻し、——昔も今も川柳には仲々ユーモラスな諧謔味と、然しわさびの様にピリツと諷刺の利いたものが多い。

雷の内て仁王は臍を出し

云う迄もなくお臍は雷の嗜好品、然し浅草雷門から仲見世を通り観音様の入口に近く仁王門があり、掲げられた大きなわらじと同じ様に大きなお臍を出していた仁王様は、今も私の脳裡に刻まれている。然し惜しい事に、之も去る二十年三月の帝都大空襲で空しく鳥有に帰してしまった。

孝は金不孝は母の臍をほり

母の臍繰り金を狙う遊蕩の息子、之は今も昔も変りがないのかも知れぬ。只私には左の二句が連想されてならない。

孝不孝二つ並べる塗枕

孝行に売られ不孝に請け出され

よく語呂が似ている為であろうか。

母の臍持つて雷門を抜け

お臍と雷とを利かしてはいるが、雷門を抜けてからの行き先は、言わずと知れた花の吉原でどうもあったらうか。



乳の下か臍の下かと大臣き、

藤原の不比等公（鎌足の子）房前（ふささき）の大臣と契いた支度（しど）の浦の海女（あま）は、面向不背の珠を取り戻す可く、一口の鋭い剣を抜き放つと数十尋の海底へと潜って行く。首尾よく珠は奪い返したものの、龍宮の守護神八大龍王等の追跡を受けて進退谷まり、予ねて覚悟はしていたものの、手にした剣を以って自らの乳房の下を掻き切り、宝珠をその中に押し込めて浮び上ると言う、謡曲「海女」をテーマとしたもの、然し謡曲では神霊を主人公とする清く気高い五番目略協能であり、川柳の諧謔味とは凡そかけ離れたものを感じる。

白虎隊天主の方へ臍を向け

会津飯盛山に於ける白虎隊士の切腹、奥羽二十五藩と越後六藩との連合同盟である奥羽越前同盟は明治六年、事実上は会津藩主松平容保を中心として、会津追討を命令した官軍の参謀世良修蔵を福島で斬ってその結束を固めた。主として会津、庄内二藩を征討の爲め、白河は、平瀧口、越後口から官軍は進む。之に対して同盟側ではさきに東叡山を抜け出た輪王寺宮公現法親王を軍事総裁として、之を迎えた。然し夏に入ってから官軍の進撃は破竹の勢いであり、棚倉、二本松、三春の城は相次いで降った。越後口では長岡藩の河井継之助らが中心となって官軍に抵抗したが遂に敗れる。斯くて会津若松城包囲の態勢は整い、約一ヶ月の間会津藩は老幼男女を挙げて籠城し、悲壮な戦いを続けたのである。誠に歴史小説の好材料とも言う可きであろうか。白虎隊を初め、娘子軍の活躍、藩士家族の最期などは、人々の語り草として今に伝

えられているが松平容保は遂に、開城降伏して東京に移される事となった。又その頃唄われた

「会津宰相（肥後守容保）にあげたきものは白木の三宝に九寸五分」と言う童唄（わらうた）は人のよく知る処である。かくて幕府側の最後の拠点は遂に海を越えた北海道丈となってしまう（この事に就いては当時の史実をよく調べ機（おり）を見て纏めて見度いと思う）扱現代に移り

アロハシヤツお臍へ風を入れてやり

戦後頃に流行したアロハシヤツ、本場の布哇ではノーマルな服装だと言うが、我々日本人には何かピツタリしない点もうかがえる。電車の中などで窓からの風にシヤツがまくれ、お臍が顔を出す事なども無いとは言えない。（事実昨夜も所用の爲め銀座から地下鉄に乗った処、筋骨逞しい若い労務者がむし暑さに耐えかねてか丸首シヤツを脱ぎ去り、下腹部迄露出して冷たい地下の風を入れていた。運転台脇の窓辺に仁王立の青年、真黒な大きなお臍を見乍ら、私は髣髴としてこの句を想い出した事である。

へロインを時には臍にかくまわれ

麻薬密売団に躍る女性には意外に多く、何れもその隠匿場所に苦心するそうであるが、女の隠し場所は絶好の一部を除き、主に髪の毛の中、ブローズ、ブラジャー、肩のパットの中等などで、手の込んだのになるとお臍の穴へ薬を容れ、その上から絆創膏で押えているものもある——とは或る麻薬Gメソの話。

ビキニ型お臍の見える水着なり



上下セパレートになった所謂ビキニ型の水着は日本には少いが見られれば魅力的な、お色気満点のものである。先般英国の映画女優、ダイアナ・ドーエス主演の「ゴダイヴ夫人馬に乗る」と言う映画が、一時アメリカで上映禁止になった。その理由はビキニ型水着の同優がお臍を克明に覗かせていたからである。

結局イギリス側は約三分の一を撮り直し、可愛らしいお臍の窩も隠してやっと輸入が許可された由、因にビキニ型水着の名は、原爆の実験地ビキニがその威力によって、地上を蔽う一物もなくなったところから来たとの説が有力である。

レビユーで臍を出すのがスターなり

臍一つはらく／＼させて幕が下り

実際ストリップ程お臍の美しさを堪能させて呉れるものはないだろう。否お臍ばかりではない。豊満な乳房の美しさ、そして柔軟な肢態の躍動等、それ等のものは何れも世の男性達を魅了し去るに充分だが、然し最近相次ぐ当局の取締りに各劇場共風向きが変わったと言うか逐次趣向を変え出した模様である。就中新宿S座に於ける「公然ワイセツ審議会」全十四景等はストリップ取締り強化に対する業者の淡いレジスタンスと見られぬ事もない。何れにせよ、観客は面白く可笑しく、疲れを忘れて楽しめればそれで良いのではなからうか。

ヌードフォト陽がやわらかい臍の位置

スタジオと言う名の、六、七坪の部屋に全裸のイヴが横わる。——背景となる黒いビロードの幕は強烈なライトと共に暑さを誘い、夏季等は玉の汗が顔に、乳房に、お臍にと流れ

る。然し窓を開ければ之も公然ワイセツ物陳列罪となる由、ライカ、ニコン、マミヤレフ、コンタックス、キヤノン等々フアインダーを覗くキヤメラマンの眼が、光を追ひ女体の陰影を凝視める。

ぐつと凹む臍に恙がない今年

何年か前、或る医学雑誌の俳壇にこの一句が載っていたが、之こそまさしく健康の象徴であるかも知れぬ。それは曾って医学博士田村均氏も——概して出臍の子は一般に虚弱的な子が多く、健康な子供は腹部に適度の緊張を見せて、臍が奥深く入っているものですと述べている事でも解る。

おとなしい裸のぞけば臍のごま

何人でも或は一度位御覧になった光景であろう。悪戯の激しい坊やがふと静かになったので覗いて見ると、一心にお臍の胡麻をとっている。坊やにはお臍形成の所以も解らぬし、況んや胡麻の存在理由など解ろう筈もない。総ては不可思議の儘にまさぐっているのである。即ち第二次ナルシズムとでも言うのであろうか。

弄みて出臍泣かした二つ姉

泣かした丈で済んだのは未だいゝ方かも知れない、幼時誤って出臍を梳ぎ取られ、全治したあとに何の痕跡も止めず平坦となり、之が原因で結婚解消の実例すらあるのだから。扱、次の三句は系統が異り、何れも魚類(いな)の臍を読んだものである。

何やらの手ざはりに似たいなの臍

赤貝が呑み込んでいるいなな臍



えらを抜く手先に触るいなのお臍

いなは御存知の通り出世魚であり、ぼらの臍などとも屢々言われるがもとより臍はない。只、泥土中の有機物や、硅藻類を多く食べるので胃の幽門部が良く発達し、恰度ソロバン珠の様な固い筋肉があるが、俗に之をいなのお臍と呼んでいる。然し川柳子は専ら『与仁』の隠語として粹句に折々読み込んでいる事は前掲の通りである。扱、最後に私の記憶にある幾つかの句を書き出して、この稿を了る事とする。

鐘はあなを撞かず臍をつき

お透見のお臍方蔵痛がらせ

後悔は臍ご臍快はあなにあり

溜息は臍の辺から揺り出し

臍をほりからして臍を嚙り出し

恋しさは親父が臍に母の臍

父親の眼を抜き母の臍をくり

母おり／＼娘の臍を抜きにくる

臍ねらい雷及び息子なり

鳴り止んで臍繰金を女房出し

すねを嚙むのみならず臍をほり

故里や臍の緒に泣く年の暮

茄子売りお釣りを出すに臍を見せ

首吊りの財布は臍の下に落ち

鬚さしを臍へ入れてる蛸や烏賊

二箱は日に鼻の下臍の下

呉服屋の臍の緒は皆伊勢にあり

かんにんの袋は臍が緒締なり

丸づけは臍を抜かれて雷になり

雷を真似て腹掛やつとさせ

乳母や／＼俺は臍から生れたか

扱も大変日本に臍が出来

姫代国の出臍は一夜細工なり

咲耶姫臍のあたりでごろつかせ

自然派の雷臍は上過ぎる

咲耶姫お臍の下で雷が鳴り

北齊に富士は臍まで眺められ

日本の臍の大きさ四里四方

註(四里四方、江戸市街を謂う。実測は二里四方位しかないがそこは所謂江戸ッ児の吹き流しか。川柳江戸姿参照)

友とせむ臍物言はゞ秋の暮

—完—

【告知板】○本誌奇譚クラブのみ下さい。会費の残金はKK併読誌として発行を続けて参通信第二十三号に発表の要領りましたKK通信は、今回第にて御返金申し上げます。二十三号発刊をもつて廃刊することになりました。詳細については、KK通信第二十三号誌上に発表しました。KK通信の旧号については別項に記載しました通り第十一号から在庫いたしておりますから御入用の方は、此の際お申込す。

脱衣症患者

青葉 楨一

小田 潔・画

何年か前、小さな田舎町のゴチャ／＼と軒を並べた商店街を出外れて、樹立の多い寺の向側に、ポツンと忘れられたように建っている薄暗い古本屋で、私はその時、角田喜久雄の探偵小説を買求めたのでした。

帰りの夜汽車の中で、フト思いついて取出したその黄色い表紙の本を、懶く指先でパラ／＼と繰っていると、不意にドキリとする文章にぶつかって、私は妙に狼狽しました。そうして、恰で何か恥しい行為を人に見られる

のを惧れるように、四冊を見廻してから、再三その箇所視線を落すと、一字一句を貪るように読んでいきました。それは、その小説（題名は失念して今思い出せません）の冒頭で、女主人公の異常性格を克明に描写した部分なのですが、その女の世にも奇妙な性癖が私と余りにもよく似ているのです。

原文を要略しますと、凡そ次のようなものでした。

「――暴風雨の荒狂う夜更けの街を、やっ

と我が家近く迄辿りついたわたしは、アッと云うまに足を踏み滑らせて、川のように雨水の流れる舗道へ転倒した。一瞬燃え上った絶望と憤怒が、すぐに異様な快感の誘惑に変わると、みる／＼わたしの心を占有した。わたしはもう夢中だった。粘りつく濡れた衣服を次々と邪慳に引剥すと、反省も常識も思考力さえも失って了ったわたしは、一糸纏わぬ裸身を風雨に曝して立った。それから、アスファルトの上をゴロ／＼と転った。忘我――と云う言葉以外に、その時のわたしの氣持を説明する事は出来ない。――亦、わたしが或る小学校の教員だとする。真夏の土曜日の午後。わたしは、誰もいない教室の真中で、黒ずんだ机の上に腹這っているだろう。頭の辺に脱ぎ散らした衣服がかたまっている。わたしは全裸だ。わたしは机の冷たさに脅え乍ら、意識が快感の中に溶け込んでいくのを感じる。そういう変態的な感覚を持つわたしだったのだ」

読み了って、私は暫くは呆然としていました。それがたとえ作中の人物とはいえ、又性別の違いこそあれ、私ははからずも、自分と全く同じと思われる性癖の持主を発見したのです。



Kiyosi O.

市中の処々に、一かたまり二かたまりとなつて散在する低い小さな松山。そんなところを散歩しているときなど、フト周囲に人気のないのに気付くと、私はきまつて何時もの病

気(?)が起り、ムラ／＼と裸になりたくなって来るのです。するともう自分の意志では何うにも抑制出来ず、沸騰して来る感情のまゝに、次々と着ているものを脱ぎとりまわります。そうした瞬間から、私は完全に人間社会の常識を逸した、一匹の野獣と化して、松の樹蔭、躑躅の繁みへと駆廻り、幹を攀じ崖を跳下り叢にまろんで、陶醉にのたうち廻るのです。

海水浴は何時もわざとシーズンを外して行きます。九月の声を聞くと、不思議な程海岸は人気がなくなつて、ヒソソリとしてしまうものです。打寄せる波は既に高くなつてはいても、砂浜は未だ熱く灼けていて、その上を、海水パンツも何も着けない私は、もしかして誰かに見咎められやしないかと、微かな不安を抱き乍らも、日の暮れる迄、一人で飽きず遊び戯れるのです。

昼間の雑沓と喧噪が嘘のように消え去った深夜の街。其処は私は妖しい誘惑を囁きかけて来ます。ビルとビルの間の狭い隙間へ、吸い込まれるように這入っていく私は、もう、

ものに憑かれたように他の事は何も考えません。手早く衣服を脱ぎ捨て裸体になると、亢まる鼓動に息をはずませ乍ら、ソロソロと舗道へ出ていきます。外燈の影から影へ、ヒラヒラと蝙蝠の舞うような全裸の散歩は、何んなに胸をワクワクさせることでしょう。

それは淋しい神社の境内の事もあれば、郊外の雑木林だったりします。又、夜の湖上へ裸身に月影をはかり乍ら、秘かにボートを漕ぎ出した事もありました。

冬を除いた他の季節なら、多少の肌寒さなど亢奮の為に感じはしません。

記憶を辿ってみると、私に此の奇妙な性癖が現れ始めたのは、未だ中学に在学していた十六七の頃からでした。併し初めの間は、自分の部屋に錠を下して、その中で裸になつては悦んでいる位でした。

そうした或る日。梅雨もやがて明けようとする蒸暑い夜でした。家族が皆寝たあとで、遅くなつてから入浴した私は、浴槽にもたれてボンヤリ窓の方を見ていました。半分ばかり開いた窓からは、真暗な空が覗いているだけでした。その時、私はつと、裸のまゝ窓を越えて外へ出る自分を想像したのです。するとそれにダブって、全裸の逞しい青年(全

然姿私とは別人の）が裏口から空地へ出ていく姿が連想されました。

私は、ソツと音のしないように立上ると、恐る／＼窓から半身をのり出してみました。生微温い夜気が、擦るように濡れた肌へ絡り着きます。私はもう、激しい誘惑を斥ける事が出来ず、とう／＼裸のまゝ窓から忍び出し、フラフラと空地へ彷徨して行つたのです。が、脳の中では、絶えず誰か判らない全裸の青年の姿を描き続けていたようです。

終戦直後、市中の焼跡を歩いていた私は、水の出っ放しになつてゐる水道管の側で、一人の男が裸になつて身体を拭いてゐるのを見かけました。私は思わずドキツとして立止ると、靴の紐を結ぶ振りをしながら、ソツと男の様子を伺つてゐました。猿股まで脱り去つた男の肉体は、強い陽射を受けて鮮かに輝いてゐます。只灰色一色に塗潰された荒涼たる風景の中で、それは余りにも生々しい印象でした。男は私の存在などにはまるで無関心で腕を曲げたり、脚を上げたりして身体を拭くのに余念がありません。私は自分の亢奮を恥しく思うよりも、屋外で見る男性の全裸身の美しさに、恍惚として我を忘れてゐました。それから二年余り経つて、私はMと云う年

上の同性の恋人を持つようになりしました。夏の午後、遊びに来ていた彼に向つて、私は少し前から考へてゐた事をきりだしてみたのです。
「ネエ、僕お願いがあるんだけど……」

「お願いって、何だい」

「——兄さん。僕の云う事なら何でもきいてくれる？」

「オイ、俺は怒るゾ。今迄俺が一度だつてお前の云う事をきかなかつたことがあるか」

「ごめんなさい——」

「何も謝ることはないよ。何だい、頼みつてのは——？」

「うん——アノ、僕、兄さんの裸が見たいんだけど」

「エ、何だつて？ ハツハ、ハ、ハ、ハ、俺の裸なら何時だつて見てるじやアないか

現に今だつて——ア、此の猿股も脱れつて云うのか。いゝとも」

「ウ、ン、違ふんだよ。そうじゃないの。裏の山へいって裸になつてほしいんだ——」



「山へいって——？ 山へいって裸になるのかい……？」

わけが解らない、といった顔付きでボカンとしてゐるMを、私は引張るようにして裏山

へ連出しました。

「——へエ、お前にはそんな趣味があるのか——」

そう云い乍ら彼はシャツやズボンを脱って猿股一枚になりました。

「真っ裸になるんだろ」

「勿論——」

「誰か見ちやいないだろうな——」

「大丈夫」

スリと猿股を脱して、全裸になったMが、上背のある上体を反すように、股がやゝ開いてスツクと草の中に立った時、カツと燃え上る激情が、私の五官を包むと、私は思わず自分の手で自分の身体を押えました。

Mと映画を観ての帰り、銀行の横の通路へ引張り込んで、流石に少し躊躇するのを真っ裸にして、人の寝静まった夜の舗道を歩かせたりしました。又、全裸の彼と夏の早朝郊外へ自転車の遠乗りをした事もあります。その度毎に、私は殆どと云って位、……達するのです。勿論自分が裸になりたいなどとは思ってもみません。彼と一緒に居る間だけは、私の脱衣症もケロリと忘れたようになっていたのです。併し一人になると、忽ちその症状を呈して来ます。

此の奇妙な私の性癖を、私ははじめナルシシズムか露出症ではないかと考えてみました。でもそうで無い事はすぐに判りました。

私は自分自身に（殊に肉体には）、少しも愛着を感じてはいませんし、又人一倍羞恥心が強く、風呂屋などのような人前で裸になるのは、嫌だと云うより苦痛と云った方がいゝ位なのです。

Mと交渉を持つようになり、此の性癖に二重の症状が現れて来た事から、次のような事だけはハッキリ云えると思います。

それは、私が裸になるのは、私自身が裸になりたいと云う単純な欲望では無く、ソドミアである私が、自分の理想の男性の全裸体を野外屋外と云う条件のもとで見たい、の他に無いのです。ですから、私が裸になったのは、その甚だ実現困難な願望の、代償としての変形だとみるべきではないでしょうか。

度重なるにつれて、Mは自分から進んで裸体になるようになり、彼の肉体が明らかに亢奮を示すようになったのは、私の喜びを更に増すものでした。訊いてみると、初めの中こそ彼もわけが解らず、嫌々ながらであったのが、だんだんに面白くなって来たようです。

それは恐らく、裸になるべき場所でない処で裸になると云う謂わば常識を逸脱した行為の不安定さが、一種のスリルとなり、又私と云う対象の為に勃る亢奮が、彼の感覚に興味を呼醒させるようになったのでしよう。彼に私の病癖が感染したのでは決して無く、それは彼が対象へ（私）無しには絶対に脱衣願望が起らないのからみて確かです。

小説ではなく、現実に私のような性癖の持主が居るものでしょうか？ 私がこの告白を綴る気になったのも、実を云うとそれが知りたかったからなのです。

告知板

○代理部にて分譲
中でした吾妻新訳
クリスチーヌの受難全訳「被虐の家」は
皆さまの御支持により売切れとなりました
たのでこゝにお知らせいたします。売切
後御申込み頂きました方々には、いろ
ろと御迷惑をおかけしました事をお詫び
いたします。尚、吾妻新訳「アリスの人生
学校」定価百円、は在庫いたしておりま
すから、何卒御申込み下さるようお願い
いたします。
(代理部)

想断腹切女性續

田谷敬生
梅田淳二・画

中康氏の豊富な題材と流麗な筆致とが相俟らず本誌を飾っているところへ、再び筆者の愚見を公表するのはやゝ屋上屋を重ねる感がないではないが、先に公表した「女性切腹断想」以来の題材を別の見方からまとめてみるのも案外面白いのではないかと思ひ、こゝに続編を読者に提供することにした。

由来女性切腹の原因を考へてみると、平時には一般に家庭的な不和、愛恋関係が大多数を占め、戦時において生命や純潔の危機に直面し進退窮して行なう切腹とは環境、心理条件ともに著しい差異があると見られる。また同じく愛恋関係による切腹にも、自由主義の華かな遊惰の気の溢れた時代の切腹と、戦時中で切腹の崇高性が強調される時代のそれとは当然異なることが予想される。従つて逆に戦時と平時の切腹の様相に明かな差があれば以上の想定は正しいといえるわけである。

そこで筆者はこれまで得られた女性切腹例を戦時、平時に大別してその形式及び様相を相互に比較してみた。こゝで問題になるのは何時を戦時と平時の切目にするかということである。これはきわめて難かしい問題で、いろ／＼議論もあるが、こゝでは一応明治三十七―三十八年、昭和十五年以降二〇年までを戦

時とし他はすべて平時として取扱つてみた。

第一表の二五例は平時の切腹例である。新聞記事から引用したものが多いので切腹時の詳細は不明なものが多い。年令的にみると、二〇代十一名、三〇代七例、四〇代四例、五〇代三例で、二〇―三〇代が多く、十七例は既婚者である。これは原因のかなりの部分が生活苦、家庭不和にあることから見て充分首肯できることである。切腹はすべて一文字、五〇代の三例全部、三〇代の二例、二〇代の一例では腸管溢出が認められる。五〇代のすべての例に腸管溢出が認められたのは面白いことであるが、これは五〇代の人々が特に勇壮な切腹を行ったというわけではなく、五〇代になると多くは腹壁が弛緩して菲薄になり刀が容易に腹腔に達するためであろう。

第二表は戦時の例である。第一例を除きすべて終戦時に起つたものである。平時の例とは逆に十五例中十一例は未婚であり、年令的にも一〇代六例、二〇代七例、三〇―四〇代各一例で、若年者の多いのが目立つ。これは既婚者が係累の関係から一般に最後まで生命に執着をもつに對し、未婚の若年者はそれらの要素がなく、敗戦―純潔の危機をより大きく感ずるためではなからうか。四例は十文字

切腹、五例は立腹で、十五例中九例までも腸管が溢出し、平時例に比べて著しく惨烈さを増している。これは戦争のため残酷な痛苦に慣れたこと、切腹者が敗戦という衝動のため興奮状態となり、周到な準備もなく夢中で切腹を企てたことにもよるものである。前記のように立腹の例もあり、五例はほとんど全裸に近い状態で切腹していることも平時では想像も及ばぬことながら、切迫した状況を充分物語っている。

以上少数例の比較でも明かに戦時と平時の女性切腹に差のあることがわかる。

もちろん私はこゝでその本質的な原因なり心理分析に立入る意志はない。むしろこうした素材を提供することにより読者の自由な考察を喚起すれば幸いである。

さて数月前一読者から終戦時某外地におけ



る一少女の切腹例を寄せられた。死に到る経過が珍らしいので紹介しておこう。これは第二表(3)の例で十七才の女性である。切腹の情景を原文のまゝ記す。

「……腰巻を押下げてへその下二寸位まで出すと、用意した細い出刃をはんてんの袖

に包み眼を閉じて突立てようとしませんが、流石に手がふるえて二、三ヶ所突傷ができました。それでも四度目に両手に力を入れるとグサツと一寸足らず突込み、声も立てずゆっくり右へ一息に、へその一寸位下をグツと引廻しました。真一文字の見事な切腹です。血は少しとびましたが、大しで出ません。右脇腹に突立てたまゝ流石に顔をしかめて苦しそうに傷をながめると、まだ浅いとおぶやくようにはっきり云うと、刃をくると元に戻し五寸位の刃をグーッと全部斜めに突込みました。まだ声も立て

ずそのまゝ今の切口をへその下までギリギリと引戻します。へその下まで来た時はじめてウーッとうめくと両手をひざにパタツとついて苦しげに身体をねじるところらえていましたが、急に傷口から血がドーンと吹出すと腸の端らしいものがドロツと流れ出

し見る間に顔が土色になると、もう一度ウームとうめいてバタツと前に倒れました。出刃は柄まで腹中に入り、背骨のやゝ左に尖がつき抜け、二、三度コロ／＼と転がって手足をふるわせると絶命しました」あたかも堺事件を思わせるような凄惨な切腹である。この例の変った点は刀を引戻した

際急激に大出血を起して他の致命傷なしに早く絶命したことで、この点が知らせてくれた読者の疑問であった。読者と共に記述を細かく分析してみよう。

(1)この女性はきわめて気丈で浅いながら淀みなく真一文字に切腹し意識明瞭、氣力旺盛であった。

(2)右脇腹で刀を斜めに五寸近く突入れている。これは角度にもよるが普通は背部の筋層に達する位の深さである。

(3)右脇腹から左に引戻す時、もし切先が単に腹腔内に止っていたとすれば、最初の一文で腹皮の大部分は切れているのであるからほとんど抵抗なしに左脇腹まで戻せたはずである。最初の一文

字を呻き声も立てずに引廻せたこの女性が臍下まで引戻して力つきたのを見ると、切先は背部の筋層に刺っていたとみるべきである。

(4)この状態で刀を押戻せば筋層が切れ、脊柱の前で下行大動脈が切断または切損されるはずである。これによって大出血がまず骨盤腔に流れ、次で傷口から溢れ出るようになる。臍下に刀を引戻してしばらくこらえてから急に血がドツと溢れたのはこのためである。下行大動脈が切れれば、頸動脈切断、心臓刺突と同じ程度の効果があることはいうまでもあるまい。

つまりこの例の急速な死因は刀の引戻しによる偶然の大動脈切損とみるべきである。いづれにしても切腹死としては珍らしい型といえるであろう。

自殺の形式の中で切腹ほど方法論の形式の細かく決められたものは他にあまりない。その最終の武家時代の型は切腹の痛苦を極端に軽減し、その上介錯人を含む第三者の立会を意識した変ったものである。それらの原因の大部分が消失した現代の切腹と武家時代のそれを比べることは無理な点が多い。特に熱狂性の強い女性のそれは、単なる先入観を以て律することは危険である。何よりもまずできるだけ多くの実例を集めてよく分析してみることである。



(第一表)

平時切腹例

番号	年令	結婚	切腹	体位	致命傷	腸管溢出
1	36	既	一文字	座	頸部刺	(-)
2	24	未	"	"	"	(+)
3	21	既	"	"	"	(-)
4	22	"	"	"	?	(-)
5	45	"	"	"	頸部刺	(-)
6	24	"	"	"	殺鼠刺	(-)
7	54	"	"	"	?	(+)
8	43	"	"	"	?	(-)
9	53	"	"	"	?	(+)
10	20	未	"	"	未焼	(-)
11	30	既	"	"	遂死	(-)
12	41	"	"	"	頸部刺	(-)
13	28	"	"	"	縊死	(-)
14	55	"	"	"	?	(+)
15	30	"	"	"	?	(-)
16	32	"	"	"	?	(-)
17	24	未	"	"	遂	(-)
18	33	既	"	"	頸部刺	(+)
19	26	未	"	"	縊死	(-)
20	32	"	"	"	?	(+)
21	20	"	"	"	未	(-)
	20	"	"	"	"	(-)
22	40	既	"	"	なし	(-)
23	21	未	"	"	?	(-)
24	37	既	"	"	乳下刺	(-)

(第二表)

戦時切腹例

番号	年令	結婚	切腹	体位	致命傷	腸管溢出
1	19	未	一文字	座	左乳下刺傷	(+)
2	25	既	"	"	頸部刺傷	"
3	17	未	"	"	なし	"
4	19	"	十文字	"	なし	"
5	16	"	"	"	頸部刺傷	(-)
6	22	"	"	"	"	(+)
7	20	"	"	"	"	"
8	40代	既	一文字	立	なし	(-)
9	20代	未?	"	"	"	"
10	20代	未??	"	"	頸部刺傷	(+)
11	10代?	未?	"	"	なし	(+)
12	18	未	"	"	なし	(+)
13	31	既	"	座	なし	(-)
14	25	?	"	"	心窩部刺	(-)
15	26	既	"	"	"	(+)

きものシリーズ【第四話】

消えたホーゼ



白金紅次

会社の忘年会に勇敢に芝居をやったのが縁となって、社長は勿論特に奥さんと昵懇になったのは、或る意味では光栄でありまた、私の係長拔擢の素因ともなったが、大阪の親会社と商用の打合せをやるのに、家族の相手になって呉れと頼まれ、社長一家と伊豆のさる温泉に行を共にしたのは、全く突然でひどく面喰ったものである。

「時々お二人で出掛けられますの……」

「……………」

「お二人とも、よく気がお揃いのようで結構ですわ」

「いえ、まあ出掛けると云えば縁日位なもので……まだどうも、こんな汽車じやなかなか……」

「じゃ、お暇も出たようですし、ゆっくり旅行気分になってもお浸りになったら……」

「いや、どうも恐縮しています」

女房の敏江は、わらじを脱いで急に靴に履き換えたように、半ば落ちつかず専らうつむいてもじもじする許り……。

何しろ世帯を持って、一度位は羽根を伸ばして成田山か、穴守稲荷なども行こうじやないかが二年越しの念願だから、他は推して知る可しで、夫婦揃って汽車に乗って東海道を通ろうなどと、否二等車に坐って——あと万事お任せになって——となつては、男の私でさえ足が地につかない。まあ上層階級ともなればすべてがこんなものであろうなどと、すっ飛んで行く窓外の景色をチョコレートだのキャンデーなどをかしこまって頂戴しつつ、列車は三島の駅に滑り込んだ。奥さんの荷物と令嬢の晴雨傘は敏江が持ち、あとから来る社長のボストンバッグは私が片手に抱えて、旅館差し廻わしのハイヤーに打乗った。何処をどう通ったか、見るもの聞くものすべてが

珍しいから、奥さんが悠然と窓の紐ひもを握っているのに較らべて、一張羅のきものを張り込んだ敏江は、薄暗くなった車の中で帯揚げ許りが真赤に喰み出て野暮ったく、まるで売られて行く女か、周旋屋から出て来た女中・タイプのようだった……。

「お連れ様は……ハア左様でございますか、それでは後程お部屋の方は……どうぞ御ゆっくり……」

と女中がひき退ると、一時間許り遅れて到着する社長を抜きにして、お茶を飲んだり、部厚い羊羹を慣れない妻揚子で小刻みに喰べたり、建築の粋を傾けて造ったらしい廊下を隔て、向いの山々を眺めたりしてともかくお相手をする。

「じやお部屋の方がきまり次第、お風呂でも入って……お食事は御一緒に……ね」

と云う奥さんの言葉に黙礼して、女中に連れられ右に突当って左に折れ、トントんと階段を下って洗面所の前を通り、竹藪の茂った少々陰気臭い部屋に入る「梅の七」と書いてあった……。

「素晴らしいじゃないの……このお部屋」

「まあ……ね」

「これからどうするの……」

「どうするって、奥さんは風呂に入って一緒に食べましょうって言ってたね。何処へ行っていゝか判らんけど……」

「女中さんと呼んで見ましょうか……」

「よせよ、お里が知れるぞ……どうせ宿屋の中だよ、ゆっくり探そう……」

何んと哀れな山出しの夫婦であろうかなどと、下手に同情するのは同情する方が片手落ちで、泊る可からざる処に泊ったのがそもその間違いの基、たゞ気を安くしたことは公平な女中の態度であった。

「お風呂、お召しになりますか、どうぞ、御案内致します」

廊下に出ると、また左にトントんと下り、長いトンネルをくぐると湯気が濛々と煙っている風呂場に出た。

「御家族風呂はこの隣に五つ程ございますから、宜敷しかったですらへどうぞ……」

と女中は行って下り。

試みに、ガラス越しに家族風呂を窺ってみると、どうにも満員で割り込むすきも無いらしい。温泉はわれわれの行きつけの銭湯と違って、夜通し湧いているんだし、会社の慰安会で旅館の階級こそ差があれ、湯泉には多少慣れている私である。特級館だから恐縮する

必要は更にならない筈、まして本日は特例を以て女房持参でともかく出て来たんだから家族風呂には是が非でも入らなきや……と思つたが夕飯が控えているから、のんびりと待つのは先方様に失礼だ。

「敏江、お前はあっちだ、じゃえゝ加減で上れよ……」

週末に近いと来ているので客は頗る多い。あすの土曜は平常の倍位に混むと云う。いやはや金のある奴にはかなわんわいと、互いに湯ぶねに浸り乍ら四方山の話に花を咲かせている……。湯の滴しずく下窓越しに温泉地の灯が点々と映って、遠くの方から太鼓と三昧の音が聞えて来た……。

× × ×

「いやあ……御苦労々々、大分世話になったようだね、サアこちらへ来て、一杯、蘭そのッ、お酌して上げ……」

「この度は、飛んだ御相伴にあずかって……恐縮に……」

「いや遠慮せんでもえゝ、サア、腰元お菊さんもこゝちへ来て……」

「あらッ……」

といくら何んでも浴衣にどてらでは悪いわと、例の一張羅の晴着を着た敏江はパツと顔

を赤くする。

「あんた達は若いんだから……そうやってる
恰好は、新婚早々の似合いの夫婦のようだ、
いやこれからこゝで見合をする者同志かなあ
……アハッアハッ」

「サア、お二人ともくつろいで……如何です
私のお酌でよろしかったら」

「あら、奥様、私が……」

と敏江がお銚子を改める。まあこんな風景
はたゞなごやかで、特別取り立てゝ形容する



程もないことだが、これが工員を交えての温
泉場となると、俄然様相が変貌する。小便芸
者を相手に〇〇小唄を歌っている連中はまだ
いゝ方で、女中を押しつけて川中島合戦だの
逆立競争、さては狐拳と片やふんどし一枚、
片や肌襦袢にお腰しのなまめかしい恰好で、
流さないでもよいあせをふっ飛ばしての力演
いや早や壮観なものである。

それは扱て置き、もう一ぺん温泉に浸って
どてら姿で敏江と町に出掛ける。深川の縁日
と違って散歩する客は少いが、通りは賑やか
だ。裏町へ入ると、

「ちよいとお安くないよ、旦那！」

と黄色い声。妖しいまで脂粉を残してすれ
違う温泉芸者。どうして処と場所が違えばこ
うも女が綺麗で、男の心がわくわくするんだ
ろう……と、ふり返って見ていると、敏江が
つんと袖を荒っぽく引っぱった。

「駄目よ……フラフラしちや、深川芸者があ
んたのそばについてるのよ……」

「よせよ……」

「そろそろ危いのね、社長さんもお好きの様
だし、あんただって野放しは危いわ、ホ今晚
はあたしが芸者になってあげる……」

「……………」

「ちやんと一張羅着てるじやないの……下着も叔母さんの借りて来てんのよ……早く帰りますしようよ……」

こゝで、さしずめ映画ならオーバーラップでなまめかしい床行燈が写ってロングからアップに移るんだが、こん晩はいやあすの晩もそうはいかない、何しろ社長一家と三階と一階とで眼に見えぬ糸での紐付きだ、半分酔って半分覚めてると云うのと同じ訳である。

「お酔いになってよ……あんたが酔わなきゃ面白くないんですもの、そして酔っぱらってウンと苛めて……ね、奥さんだって、まさか夜中からお食事って来やしないわよ、あんたのいゝようになってあげる……こゝがいゝわ……」

女も徹底すると強気なものである。町の散歩がえらい処まで発展した……。したゝか酔って、女いや女房に肩を抱かれて宿の前の橋を渡って、広い廊下を歩いたことは覚えていたが、それから先は、どうなったか残念乍ら思い出せなかった。

「どう？　これ浦里の恰好よ、眼を覚ましてよ、ほら……見える？」

酔眼朦朧として、彼方に坐しおる女郎は……畜生よくもよくも、手前は……この野郎、

男をたぶらかそうと思って……ようしツとがばと起きた件の男は、矢庭にそこらに散らばっている紐類をたぐり寄せるが早い、ウムこれでもか、こん畜生ツ、ぎりぎり両腕をツ背中に……おっぱいもあるものかツえいッ、「痛いわ……」ツて、三助下郎の云う言葉だツ、どうだツ、これだけ縛ったら……お菊が泣く……そうか、お前か……、ウム……いや、こりや可哀そうな……ことをした。そうか本当だったのか……。

「いゝのよ、あなたの元気を試したの……この儘で抱いて……よ」

向島で待合をやっている叔母さんの長襦袢はおろか、近所の呉服屋から無理してせつせと縫いあげた腰の物——緋縮緬の蹴出しに無数の汚点をつけた。いなこの汚点つきのホーゼが飛んだことで、腰巻騒動をひき起す原因となったものである……。

翌朝は知らぬ顔の半兵衛で、

「お早うございます」

「いやお早う」

で型通りの挨拶のあと、例のように食卓を共にして

「お嬢さんも、この間折角の踊りを惜しゅうございましたね……」

「アハツハツ、まさか舞台から落ちようとは思わなかった。ねえエ房子ツ」

「だって、お着物とっても長いんですもの」「そうでしたね、あんなものは商売人だって裾を取られますよ、少々踊りが高尚過ぎたんですよ……」

なんてことで、朝の食事が終る。午前から午後にかけては、社長は商談だから我々の出る幕ではなく、奥さん達と近くの名所旧跡や墓所など神妙に参詣した。少し風が寒いなと思う頃旅館に帰えると、果たして週末土曜におまけに月曜祭日と来ているせいか、連休を樂しむお客がわーと許り押し寄せている。

「A団体さん……こちら、へいB団体さん、只今御案内……」

と玄関先は通ることも出来ない盛況振り。あとで聞くと、この温泉の今一つ奥の温泉へ行く只一つの橋が四、五日前の雨で落ちたため、その客までこの温泉で収容するんだそうだ。どんな団体か判らんが中にはお綺麗どこを多数召した連中がどんどん入っていく、今晩は相当覚悟をしなければ、夜通し眠られないかも知れない……その内雨が降り出した。われわれ風情が聞く雨の音は、トタン屋根に降る雨の如く至極かしましい音なんだが、こ

う豪壮なる浮夜城の中からは一幅の名画の如く音一つせず、只白い雨の糸が連々と軒を伝わるのみに、貧乏はほどほどにしたいもの……

「家族風呂は空いてたかい?……」

「それが駄目なのよ、どうして混むんでしよう、夫婦者同志ならまだいいのよ、芸者衆の声がしてたわ、嫌やあね……」

「いゝじゃないか、お目出度くて……」

「じゃあたし、一寸お湯に浸ってくる……待ってゐね」

折角来たんだから、精々一年分の風呂代をこゝらで稼いで置こうと云う魂胆なんだろう。

「ゆっくり行っておいで……」

私は二日酔いの体をゴロリと十畳の間にひっくり返って、煙草を吹かしていた……。処が仲々帰って来ない、足音がしてもう襖があきそうだと思うのに何をしてるんだらう、しようのない奴だと新聞広告まで読みつくして飽きくしてゐるうちにパタ／＼足音がして帰って来た……。が。

「いや、どうも、とんだ事で……早速お探し申上げます。ちよいちよいありますこと……しかし御物が御物だけにこりや、どうも恐れ入ります……」

「何んだいッ、どうかしたんか……」

「いえ、奥様の……なに……では早速、いや早やどうも……」

と番頭らしい男は三拝九拝して、そゝくさと部屋からひき下る。

「だって着物を脱ぐ籠が足りないのよ、だから板の間の隅の方に脱いで、そのまんま置いて……」

「目印し位は、何かあったんだらう?」

「それが、皆んな同んなじ浴衣にどてらでしょう、一ち一ち内をめぐって見る訳にはいかないわ、少しは悪いけど散々見たんだけど、無いの……」

「困るなあ、いくら混んだって、人のふんどしをそのまゝ嵌めて行く奴も奴だが……大抵判りそうなものだがなあ……」
「だって……今更、どうにも、困っちゃったわ……」

じやどうにもならない。兵隊時代はよくこんなことがあったが、奇妙にふんどし丈けは間違しなかったものである。男だってこれ位の思慮分別があるのに、まして女同志でよくもだらしない真似をしやがる、温泉ぼけは何も俺許りじやネエんだと、早速緊急帳場と連絡、打合せを

始めたんだが……。事の起りは腰の物と云ってたゞ騒げないから、社長奥さんにも伝える



し番頭——と云っても若い女中さんを総動員して腰巻やアールが各客室、風呂場、洗面所トイレット、階段の上り下りの挙動、つまり裾の乱れから中を窺うと云う寸法。

「奥様、その……お腰しの物の特徴、いや何か目印るし……と云ったものは……へい、一寸恐れ入りますが……」

「あの……」

「へいへい、寸法は普通で……は、はア関西風でなく……一尺五寸位の紐付……物は……へいへい縮緬、緋の無地、で何か目印るし、

お名前でも……へいへい左様ですとも、殿方でも一ちへいお名入りなんてございませんから……ハア？ 何んでございます？……一寸聞き取れませぬが……」

「少うし汚れてますの……」

と、蚊の鳴くような声で顔を赤らめ、答える敏江の姿に

「いえ、結構で……かまいませんとも……」

番頭よくぞ心得えたものである。先ず方が一不心得な女中でも居ってとはと、女中の持ち物に当ってみる。その頃は、特に都会と違っ
てまして温泉場と来ては、ズロースなんて堅固なものは多くの女性は薬にしたくとも穿いていないから、冬はネルか暑くともメリン



スカ木綿位なものである。間違つて男が嵌めたとしても、女形役者位なものだろう。変態者が盗んだとすれば敏江が可哀いそうだが……で結局、お客様——それも女の客のうちで、上方かまたは新婚早々か、さもなくば粹筋のあたりには焦点が向けられたんだが、まさかッ恐れ入りますが、あの……一寸拝見させて頂きますと何う訳けには物が物だけにいかにい。さりとて、一ちへい裾の乱れを注意深く観察しちや、おかした恰好だ。また幾ら腰巻が出ないからと云って、その為に旅館に讒詰されちや花の大江戸へ帰った時の評判になつて尚更風が悪るからう、妙なことをし出かし

たもんだ。

「どうも、いやはや、お恥かしい事許りで……どうも、心当りを当ってお探し致しましたんですが……仲々……それが……と申して警察の方へお願いする程の……と云っては甚だ失礼な云い分ではございますが……いえ、トランクだの懐中物でしたら、今までも出たんでございますよ……どうも御婦人物の……お下着とは……どうも飛んだ御災難で、何分重々お詫び申し上げます……次第で、へい……」
しかし、何んといつても人を馬鹿にした話で、癪に触った私は、斯うなったらたとい二三日の逗留であらうとも、草を分け野を分

けて探してやろうと決心した。今にして思えば随分変てこりんななまめかしい捕物ではある……が先ず正々堂々女風呂の入口に立って番頭のはっぱを借りて、或は温泉場に三助はおかしいかも知れないが、三助然として籠を揃えたり、板の間を掃除したりして、脱がれた籠の中をちよい／＼はぐって見た。或る意味においては、数多い女の秘密を嫌でもこの眼で見ることになるんだが、こんなことが板の間で行われていようとは露知らず、シャ／＼と吹き出る温泉の噴水塔の中は賑やかな笑い声がして……一通り調らべが終るとさつと次の間へ引き上げる。序でにその結果を表すると二十七枚位見たうちで、白いはたった一枚、あとは殆んど赤か桃色で模様物が四、五枚あったと思う。真新しい物ありまた旅のまんまで薄汚れたもの……その中でこれだッと思って小躍りしてパツと展げた。地も同じ緋縮緬物が一枚混じって見付ったが残念乍ら紐が付いてない、腰に折り込んで締める奴は、どうせ玄人筋だろうと思って触ると……湯気で薄暗くてよくは判らんが汚れも相当ひどい……とまあこんな調子、因に女中さんのは皆んながメリンスで、これは詮議外と決まった……。

斯くして、わが女房の尊いホーゼを遂に失い、社長御相手の伊豆の旅行は大笑いの巻で、帰りの汽車の中を賑わせたが……わけても敏江は恥ずかしいやら口惜しいやらで、御氣嫌いとも斜めの折も折、図らずも一通の封書が舞い込んだのである……。

謹啓

向暑の御愈々御多様の段奉賀候、扱て先般御来館、御宿泊の節は貴殿並に御奥様に対し意外の御迷惑をお掛け申し誠に申訳之無く平に御宥恕下され度及此段希奉候、爾来当方にて引続き捜査中の処……

別館の離れに夫婦で宿泊していたさる関西の貿易商の若奥さんが普断滅多にはずしたところのない強度の眼鏡を部屋に置いて風呂に浸りに行ったがあゝの混雑で、しかも近眼のため心覚えの処に置いてあった籠から無意識に、つまり敏江の籠から赤い腰巻をひっぱり出して……一寸変だとは思ったが大抵腰巻はこんな物で色も地もほとんど自分の物と変らないこゝで着物を着れば即座に間違いだと判るものをどてらと浴衣、おまけに締める帯まで全部同じと来ているからそのまゝすた／＼部屋に帰えた。そして第2回の風呂に入る時、前から酒でも一杯ひっかけたふざけ散らした

のだろう、例の2号さんか芸者の連中がワ／＼キヤ／＼風呂の中で騒いでいたのが、大挙して上って行った……その時腰巻は転んじて芸妓の一人の腰に巻かれ、そのまゝ再び華やかに飲めや歌えの大盛宴……それが旅館の外の料亭「喜よし」で行われ……客と共に枕を共にしたそうだが、その翌朝喜よしの客間の隅に夏密柑の皮や落花生の喰い皮と一緒に新聞紙にくるめられまるで汚物でもあるかのように棄てられてあった……と云う話。掃除に来た女中が丸められた新聞紙の包みの少し大きいのを怪しんであけてびっくり……芸妓の足取りから腰巻騒動の本来に知らせると云う、いとも御念のはいった腰巻道中と判ったのである。

実は早速御送り申すべき処、右の次第にて御腰の物可なり汚損致し、就ては今暫らく日数を頂き、洗濯調整上り次第御送付申可く、先は始末重々御詫び旁々御知らせ申上候。
早々頓首

と結んであった。

「今でもこれを見る度憶い出すわねエ、あの時のこと……」

と語る女房が悪いのか、将又辛らい浮世の定めに泣いて、枕に涙の芸妓に罪を、何んにかけらりよ緋縮緬！

腹部への加虐

大島

1

昭和二十八年四月号で信太蓉子さんの「開花の契機」という告白を読み、百万もの味方を得たような気持ちになった時の事は、未だに忘れることは出来ません。男の癖にと笑われるかも知じませんが、私は非常に内気で、その為内攻性でもあります。この事は殊に性に関する場合に顕著であります。酒席に臨んでも、人前では恥かしいようなことは絶対にいってよい程よう言いません。特に、次に述べます私の自虐に関する告白等は、人の居ない所で紙に書くことすら出来ませんでした。そんな私が、偶然店頭で奇譚クラブなる雑誌を繰っているうちに信太さんの告白を見て如何に勇気づけられたか……。

今迄、孤独で変態性と悲しんでおりました私は、信太さんの自虐の方法とか空想が、私



2

のそれ等に非常に似ていることに驚きもし、且つは奈落の底から救われた喜びに感謝しました。

私は小学校の二年生の頃迄非常に臆病で、よく猛獣に追われたり、悪漢にとらわれたりした夢を見たものです。これは一つには身体も弱かったせいもあると存じます。ところが中学校へ進学するようになってから、それ迄

3

はクラス中でも最も貧弱であった私の身体がだんだん一人前に近くなる傾向を生じ（これは、それ迄余りやらなかった色々の運動を進んでやるようになったからかも知れません）この頃から、私の心の中にはだんだん自虐性が育まれていきました。

或る時は針金を腹に巻きつけて締めつけたり、先のかけた切出しで太股を突いたり、太股や腹の皮を思いきり抓ってみたりしたものです。然し、何といっても刃物による腹部に対する刺戟に勝るものはありませんでした。

切腹の空想、その資材となるものは史実とか小説ですが、そこに出て来る切腹の描写は「腹一文字に掻き切って」等と、余りにも簡単過ぎるのが如何にも残念でした。

先ず、空想の中にクロージアップされてく

るのは、刃物として西洋剃刀、出刃庖丁、肉切庖丁、短刀、日本刀等ですが、腹を切る時として最も愛著のもてそうなのは、矢張り短刀とか肉切庖丁位だと思います。何故ならば、西洋剃刀や出刃庖丁は余りにもロマンチックな感じから離れているような気がしますし、日本刀は長過ぎて扱い難いように思われますから。

次に想像しますのは、愈々これから切腹するという時の心の静けさ、それにも増して自分で自分の腹を切り裂くという未知の世界へのあこがれ、腹を突き刺して一文字に切り、十文字に切り下げる時の痛み、その時に自分の腹から出てくるであろう鮮血や内臓等々、尽きるとも計り知れません。

4

この腹切りの空想は、私をして切腹の真似事をさせずにはおきません。何と楽しい一時でしょう。然し、私は腹を切る真似をする度毎に、「今、本当に自分が切腹を命ぜられて、愈々その場につくところであったならなあ」と、昔の人々がうらやましくなります。準備品として九寸五分に代るべきものは、肥後守等の両刃のナイフ、片刃の切出し、代用品のペン軸、箸、鉛筆等ですが、矢張り、

両刃のナイフの切尖及び刃先をすり減らしたものが最もよいようです。

真似事をしようという夜は、シャツを脱いでしまつて、素肌の上に寝巻を着ます。それは、シャツは前を開けるのに邪魔となるからです。時には鏡を準備して正面とか左右に据えて、我がしいたげられている腹を映すこともあります。

先ず短刀を前に置いて端座し、しばし黙考して、或る想定のもとに自分のおかれた運命を自分自身に認識させます。やがて胸元を左右に開き、次に右肩を脱ぎ、更に左肩を脱ぎます、それから帯紐を下の方へ押し下げて着物を左右及び下の方に押しひろげ、下腹部を充分に押し出します。暫く自分の腹を眺めていますと、私の下腹はこれから加えられるべき苦痛を欲喜して待つているようです。

さて、前なる短刀を両手で取り上げ、左手で下腹部を何度もさすつてから短刀の刃先を眺め、自分の心に最期の観念を集中せしめます。やがて右手に持った短刀を左下腹部に持つてゆき、こゝで左手を添えながら腹に切尖を当てがいます。徐々に力を加えてゆきますと、腹はナイフの刃が見えなくなる程凹んでしまい、最初の痛みによる緊縛感次第に痺

れてゆきます。そこで加えている力を少しゆるめ、ナイフをやゝ右に倒して右の方へすべらしてゆきます。最も脂肪の多いと思われる下腹に引廻されたナイフの条痕が赤くなつて今や、一文字に切られた切口として、その中から腸がはみ出してくるような空想を描きます。右腹で一応離れた切尖を今度は臍の上約一寸のところに押し込みます。前と同様にして真下へ切り下げますが、この時、臍自体はこれを避けて少し右寄りのところをすべらしていきます。十文字の交叉点で腹の皮が下方に押しやられて、切口がぼっかりと開いてぬるぬるとした生温い臓物が流れ出して来るような気がします。更に今度は右の脇腹、左の脇腹、臍下一寸の丹田等、腹部の所嫌わずナイフを突き立て、この加虐による刺戟が空想と恍惚境の中に痺れてゆくのであります。

5

以上のような私でありますから、万が一にも自殺するような羽目に立ち到つた時には、腹を切り開くという事に大変な魅力を感じますけれども、人一部恥かしがりやの私が、自分の腹を切り割いて、はらわたのはみ出た死体を人前にさらけ出すような事が出来るかどうかという事は疑問に思っております。



苦痛、それも腹部の肉体的な激痛には最も快美な感を伴いますが、然し、心臓を突き刺したり、頭を割られたり、ピストルで眉間を打ち抜いたりということは、考えただけでもぞっとします。

6

十五、六才の頃にはこんなことも考えたことがありません。

砂漠の中で虎に襲われ、絶体絶命となったという想定です。咄嗟に考えついて持っていた大きなトランクを開けて中の物を放り出し、その中へ入って、自分でトランクを閉めてしまいました。虎はトランクの上からひっかかり、踏んずけたりしておりましたが、遂に

ガバットその一端をかじって、あの牙で大きな穴をトランクにあけてしまいました。もうこうなつては致し方ありません。頭をガッブリやられるよりはと思つて腹を出し、そのトランクの穴に内側から当てがいました。すると虎は咽喉をごろごろいわせながら、棘のある舌で腹をなめてからその牙をブスッと豊満な腹に立てました。虎は飛び散った鮮血に刺戟されて猛り狂いながら、私の臓物に舌鼓みをうつのであります。

これは私の唯一の受動的な嗜虐想像ですがこれ迄私は受動的な解剖よりも、むしろサディストとして、若い女性、又は肥満型の男性の開腹手術等を手術する人、又は第三者として眺める空想をよくしたものです。然し、信太さんの空想が鈍刀で自分の腹部が切り割かれ料理されるところに及び、私の美に対する視野を拡げられたように感じました。

7

これ迄、私は死体としては病死人数人と、遠くから水死人を見たという事があるのみで交通事故にしても、工場での事故にしても、又犯罪写真の展覧にしても、その見る機会はありません。見る勇気がなくなる程嫌気がし

て、近寄ろうとはしませんでした。虫も殺さぬとはよく言つたもので、下等動物には手を触れることすら嫌います。況んや靴で踏みつぶすに於ておやです。

こんな私がどうして「腹への加虐」に嬉しさを感じ、その空想に酔うのでしょうか。その理由は自分でも全然わかりません。殺生の禁断が内攻して我が腹へグサリという説明は、どうも適していないようです。兎に角、これ迄、私は自分のこの変態性について色々心配し、結婚と結んで考えられるその先の人生には自信が持てず、何とか自分を矯正してしまおうと決心するのですが、半年はおろか一ヶ月ともたない意志薄弱さに愛想が尽きる思いがするのです。

然し、今やこゝに私は奇譚クラブという得難い雑誌を得、且つ信太さんの如き味方を得ました。この私の安心した気持を以前の悩みに比較してどう感謝申上げてよいかわからない程です。

(鞆和仁古・画)

○切腹画をお書きになっている方はお寄せ下さい。



女^{にょ}

人^{にん}

礎^{たふ}

零^{れい}

花^{くわ}

中
川
房

夫

画・孝 万 四

叛 乱

百十代後光明天皇の御代、慶安四年、將軍家光が薨じてその子家綱が職權を繼承した年浪士、由井正雪、丸橋忠弥が喪に乗じて叛乱惹起を企図し事が露見して誅せられた、所謂慶安の変の翌年のことである。

人心の穩らかならざるに乘じ、彼の殘党一味が再び叛乱を企図していた。

云うまでもなく生活の糧を得るためであるその頃、徒党を結ぶことは法度で厳しく禁ぜられていたが、幕府の忌避に触れ浪人となつた彼等は、生活に窮すれば秘かに徒党を組織して悪事を働き、生活の手段とするのであつた。

一か八か身体と命を張って、後は運を天にまかせるといふ、強いて云うなれば、明日という生活のない、その場限りの捨鉢な生活なのであつた。

ある晩、首領西田与五郎は、嫡男三郎や雲野文左衛門等と酒宴を開いている時、

「馬鹿者が、此の後に及んで十年、二十年先の暮しを夢みて何になる。そんな事が何になるぞ。われら浪士、もはや昔日の侍とは異なる。今となつては、如何ほどの職務勵んでみ



た処で何の効もない。われら只、空飛ぶ雲に似て天翔けるまでよ」

彼は嘲けるようにこう云った。その後も、

例によって首領西田与五郎を囲んで、彼の家で密会していた。

首領西田与五郎の他に、嫡男三郎、それに

しばしばこんな言葉
葉を吐いた。

戦国時代の殺伐とした激しい気風が、未だ彼等の体内に脈打ち、将来への光明の生活のために忍耐して苦に生き、恵まれぬ境遇におとなしく甘んじようとする気なぞには、とてもなれないのである。遺り場のない体当りの生活であった。

酒を飲み、女に明け暮れる毎日であった。

そうした九月上旬の或る日、彼等由井残党の一味は

一癖あるつわ者雲野文左衛門、その他いづれの馬の骨とも訳の判らぬ市中無頼のあぶれ者や、幕府の御家人くずれが加わっていた。居並ぶ諸浪士の眸という眸は、誰も彼も血走って、兇暴な光り方をしていた。

と云うのは、その数日後に、徳川二代将軍秀忠夫人、崇源院達子の方二十七回忌の法会が、芝増上寺で行われることになっていたからである。

達子の方は淀君の実妹で、時の第四代将軍家綱の祖母にあたり、その法会は九月五日から十五日まで十日間行われて、その結願を終ることになっていた。

その法会には、將軍家を始め全国の諸大名から、ありとあらゆる、それこそ山を成す供物、香華、布施、米等が仏前に捧げられるのである。これら金帛が莫大な額に達するであろうことは容易に想像された。

だから密会の諸浪士の眸が、平生以上にギラギラ輝いていたのは、無理からぬ話であった。この好期を逃がして、又いつの日にもこの獲物に有り附けよう。それにも増して第一に彼等の食餌にもこと缺くとあつては、彼等としても真剣であった。

そう云う次第であつたから法会の終る十五

日までには、何としてもその莫大な金帛を奪い去らねばならないのであった。

事計画は慎重に運ばれていった。

「烈風の夜をみ計って、火を放つのじゃ。いずれか附近の町家二、三ヶ所に火を放てばもうしめたもの、以後、その混乱にまぎれて寺に乱入し、金帛を奪う迄のこと。それがしに続いてなだれ込み、獲物を奪うのじゃ」

首領与五郎は盃を傾けながら一同を見廻すと、無気味な笑い方をした。

「さようにうまく運べるかな。見張りも相当厳しかろうに――」

「さよう、したが、うまくゆくもゆかぬもあるまい。只一氣にやってみるまでのこと。運は天にあり、よもや敗れることはあるまい。難儀はかねて覚悟の上、役人ども警固など、などと恐れる事があるう。それがしが斬りまくり、残らず追い帰してくりよう。案ずるな一同の者」

与五郎は文左衛門を睨みつけるようにして勇みたって云った。

火を放って、混乱に乗じ事を挙げようというのである。叛乱の戦法は、由井正雪の場合と同様であった。

然しその計画は、警固嚴重で好期至らず、

法会も速や終りに近づいていた。

結願日二日前の

九月十三日、昼間とは打つて変つて夜半に這入つてから、俄に風が嵐を思わせる如く強く吹き出してきた。

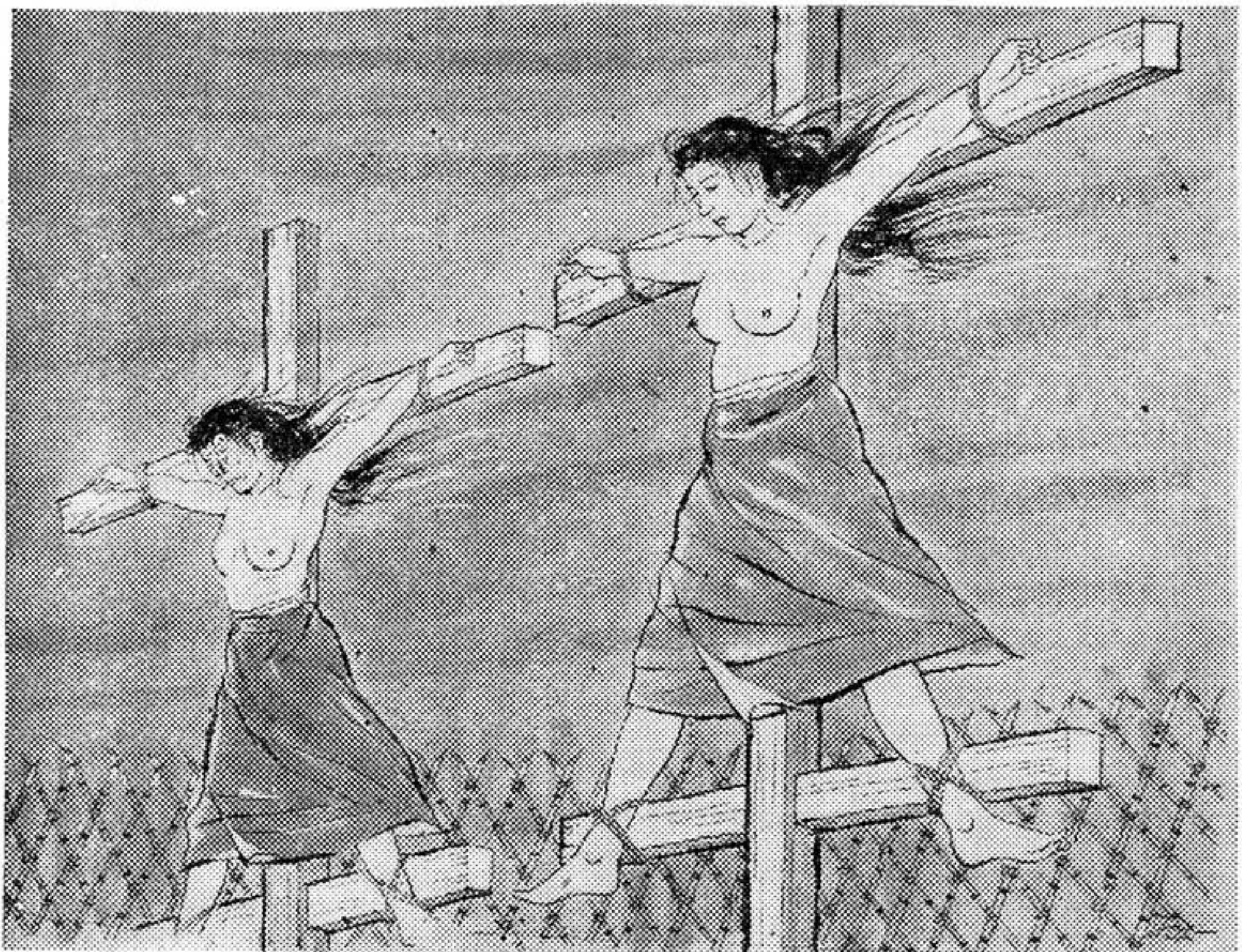
武蔵ヶ原の雑木の上を風が唸って渡り、砂塵が空をどす黒く染ていた。

「してやつたり」

与五郎は心の中で呟くと北叟笑んだ。

「今宵こそ」

彼等一味は、かねて計画通り勇みたと、三三五五と人目を忍んで、増上寺の廻りに出没し始めていた。その数三十人ばかり



り。案に反してその夜の警固は、さほどではなかった。嵐の夜のこと故、油断したものであろうか、併し彼等は迂濶にも伏兵のあることを気付かなかった。

いよいよ彼等が部署を定めて実行に移ろうとした時、彼等一味は不意に、役人捕吏の群にかこまれた。

老中松平信綱の許に、勘定奉行松方右衛門の家来雲野文左衛門が、出訴の恩賞に与かるべく同志を裏切つて密告したのであった。

正雪や忠弥の場合も、密訴人のために事が露見したのであったが、彼等の場合も同様であつた。よもや此の後に及んで同志が裏切るなどとは、与五郎は齒軋したがもう遅い。彼等一味は数百人を越える与力、役人捕吏を相手に、死物狂いの闘いを交えたが、多勢に無勢では詮方なく、遂に引つ捕えられてしまった。誰一人として脱出し得た者はなく、与五郎、三郎は斬られ、その半数が斬り捨てられた。

磔 刑

彼等徒党は云わずとも、その家族あわせて四十一名が、市中引廻しの上、鈴ヶ森の処刑場で磔刑にされ、槍突きの刑に処されること

になった。

その布令が知れ渡ると、処刑の日、刑場には物見高い見物人が多数、柵の外に押し寄せかたずを飲んでいた。

「可哀そうに」とか「むごいことよのー」とか情を呉れる者も居るには居たが、内心この惡逆無道、残酷野蛮な行為に対して、少なからず興味を抱く人達ばかりであつた。

処刑は高さ約一丈の、途中に横木が渡されている十字架の木柱に、処刑人をそれにしつかりと縛りつけると、下三尺余りを地中に埋めて真直ぐに突立てるのである。

処刑人は、腰のものを残して裸にされると木柱に縛りつけられるのである。いずれにしても腹部胸部を充分に露出させておいて、そこを槍持つ非人が二人、左右にわかれて交互に、急所を存分に突きまくるのである。先ず非人が、

「ありや、よう」

と、奇妙な威勢の声をかけると、処刑人の眼前で鋭い槍先を見せつける。俗にこれを見せ槍と称しているけれども、気の弱い処刑人はもうこれだけで失神してしまふ。女に限らず男の中にも、これだけで参ってしまう者が相当にいた。

処刑は二組ずつ行われるのが慣例であつたが、男よりも女の処刑の方が悲惨をきわめ、それにも増して妊婦の処刑の光景は、こと更に壯絶無類のものであつた。

八人目の処刑が済み、次いで、一見人品賤しからぬ、母娘とおぼしき二人の美わしき女が、今役人どもに引立てられて処刑場へ這入ってきた。今度は女であつた。それは与五郎の妻白縫と、その嫡男三郎の嫁珠であつた。

白縫は四十六才、そのやつれた蒼白な顔面の中にも、若き日の面影を充分にしのばせていた。珠の方は、やっと二十才に手の届いたばかりの末だ子供らしい初初いしさを湛えていたが、一見して判る懷妊は、六、七ヶ月にもなるのであろうか、その腹は見事に盛り上がっていた。

一瞬、非人はもとより、むらがる群衆の眸が、異様に二人に、分けても珠に注がれていた。

「何卒、御慈悲にお助け下さいませ」

顔面蒼白な白縫は、髪を振り乱しながら、必死になつて役人に嘆願するのであつたが、「え——ならぬ。ならぬ。往生際の悪い女子じゃ。見苦しいぞ」

役人共は一片の同情も示しはしなかつた。

それでも白縫は、尚も後手に縛られて自由のきかぬ緊縛の身体を、ゆすぶるようにして、「それなれば、せめて珠なりとも、お慈悲を思召されて下さりませ。珠に何の罪もござりませぬ。それでは余りにも珠が不憫でござります。お役人様、何卒珠にお慈悲を……」

白縫の眼には涙が光っていた。

「え——くどいと申すに。今更、いか程そのように申立てても同じこと。今となつては是非もない。おとなしく成仏するがよいぞ」役人は嘆願には耳をかさず、白縫の縄をとくと、乱暴に手をかけ、白縫の帯を解いていた。

「あゝッ、お役人様、何卒お慈悲を……」

呼ぶ白縫の声をよそに、着物や襦袢は一瞬のうちに、役人の手に依つて無慙にも剥ぎ取られると、悶える白縫を礫柱の前まで引立てゝ行つた。珠も同様であつた。

二人は湯巻（腰巻）一枚のあらぬない姿にされたという只それだけで、もう気が遠くなる思いで、恐怖と羞恥におのゝきの声もたてられなかった。

太い礫柱に白縫と珠は湯巻姿のまゝ、両手両足を身動きならぬように、大の字にがつしりと縛りつけられると、役人は、衆目に曝ら

すようにその柱を埋め宙に突立てた。

辺りは水を打つたように静寂を極めたが、

「ありや、よう」

と呼ぶ非人の声だけが、不気味に鋭く、それはまるで槍尖のように鋭く人々の胸に突き刺さつた。

二人は最早観念したのか、眼を閉じると首をうなだれていた。

懷妊した珠の大きな腹が苦しげに喘ぎ、吐息する悩ましくも異様なさまは、並居る群衆の眸を攫らわずには置かない。

そうして二人の高島田の鬘のほつれが風に靡き、一入、その場の哀愁をそゝつていたが非人はもとより群衆も、又と得がたきこの良き獲物に、北叟笑むと心弾ませているかに見受けられた。

「ありや、よう」

やがて非人が、二人の眼前で槍先をちらつかせたと見るや、役人の手を合図にもう一人の非人が、赤湯巻の鮮かな色とは対照的に、白く透き徹るような白縫と珠の脇腹を斜め上に、ずぶりと槍先を五寸程も突き立てると、一呼吸入れてからひとひねり捻って槍先を抜いた。二人同時であつた。

突き刺してから直ぐ抜かない処に、槍の術

が秘められている。

突かれる方はたまらないであろうが、突き刺す方にすれば、ひと突きしてから、ひと捻りして抜く瞬間までが、一番力のこもり、槍使いとしての生命の息吹きを感じる時なのである。

白縫と珠は非人に脇腹を突かれた瞬間、一声、突き徹るような甲高い悲鳴をあげると、眼をカッと引き釣らせて退け反るかに見えたが、槍を非人が抜き去る瞬間まで堪えていた緊張の表情が、槍を抜く瞬間にちよつとひるんだ。

白縫と珠の白く透き徹るような素肌に、電光のように鋭い槍尖が突き刺つた瞬間、珠の方がわずかに早く、あの女特有の甲高い中にも無残と悲愴さの籠った呻きともつかぬ悲鳴で絶叫していたが、この峻厳な叫びと同じ運命にある白縫は、束の間、腸を抉ぐられ、その声に圧し潰される思いで聴いていた。

役人、非人を始めとして群がる群衆も一刹那、手に冷汗すると、五体を突き破って碎かれるような異様な衝動の押し寄せてくる想念の中に、背柱の氷る思いでその絶叫をきいていた。この世のものとは思えなかった。

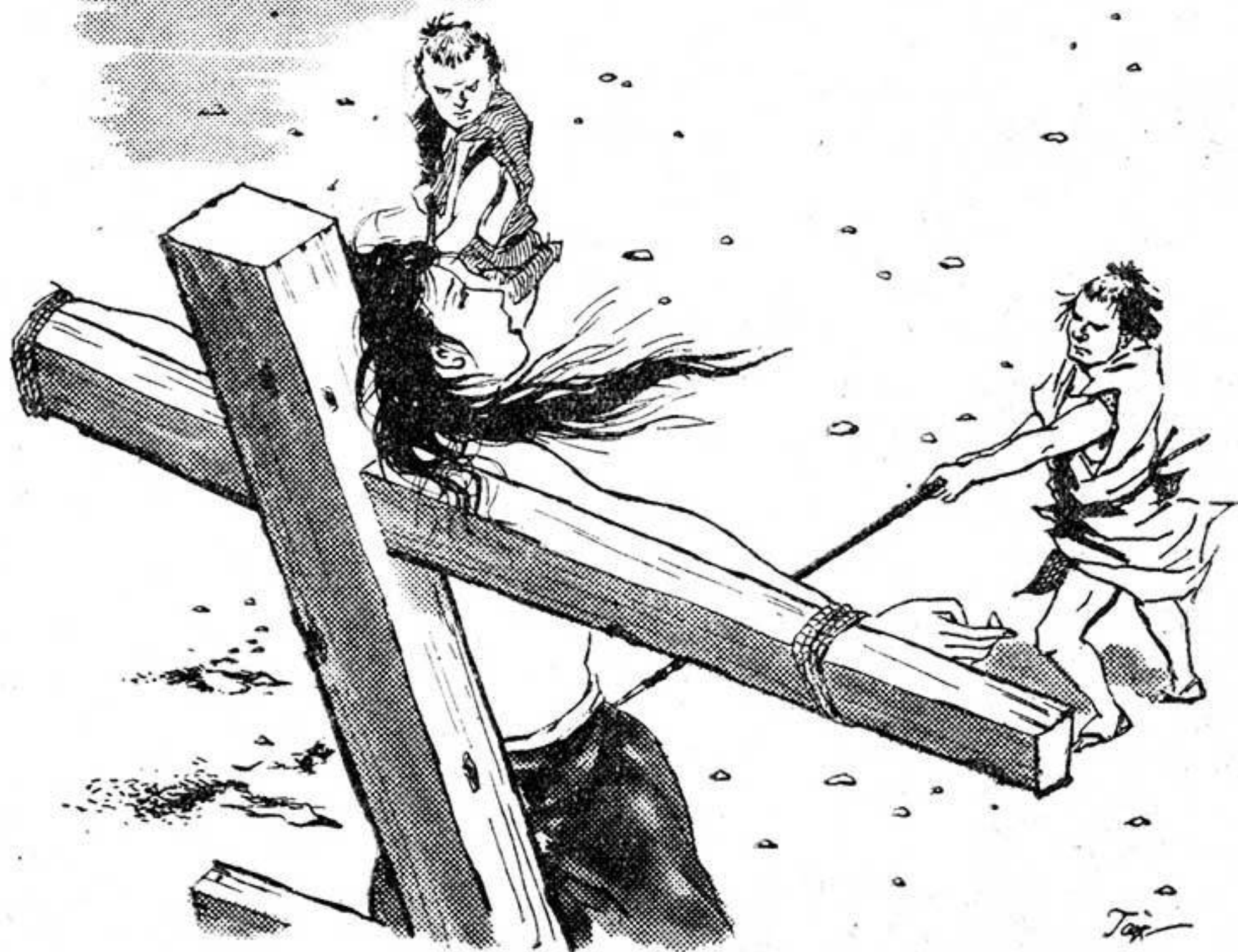
今、突き刺した一人の非人が槍を抜き去る

と同時に、間発を入れずに他のもう一人の非人が、白縫と珠の脇腹をまるで一つの物体でもあるかのように、満身に力を籠めてその鋭い切尖きを、反対側から斜め上に突き通した。瞬間、吸い込まれるように没した脇腹の箇所から真赤な血がしたゝり零れ落ちた。

一刺し一刺しを白縫と珠は只、無念の涙と苦痛の衝撃の中で歯を食いしばって一身に受け止めるばかりであった。

もうこの期に及んでは、せめての事、見苦しくない立派な最期を遂げたいと想う心で崩れかゝる気力の中で一身にそのみを念じ悶える二人なのであった。

緊縛の肉体をあえぎながら受け止める鋭い槍尖きは、秒速を刻んで白縫と珠の肉体に繰り注がれていったが、眼の前がスーッと薄暗く朦朧として意識の消えて



ゆく中で白縫と珠は、即、死に繋がるこの瞬間

も早や事きれたのである。

間を、死とはこのようなものなのか、これが死なのか、そうしてわたしは本当に今死ぬのだという複雑な感情の中で刻一刻と迫ってくる現実の死の瞬間を、己の姿に見出していた。

五つ突き目を非人が、珠の眼も絞な赤の湯巻で蔽われた隆起し肥満した腹部を、最下腹部のあたりから斜め上めがけて、その鋭い槍先を一刺し突きあげた。

「……」

珠は死の一瞬を苦悶の絶頂の中に、言葉とも声ともならない呻吟の容子をたゝえて、もんどり打つたように激しく退け反ったかと思うと一、二度全身をピクピクッと断末魔のせめてものあがきのように痙攣させて、首が前にがっくりとくびれて動かなくなつた。

然し、非人は死の現実の姿を前にして、何の感慨もないばかりか、尚も無情の槍尖きを珠の腹へ突き刺し続けていった。

そうして事切れたとは故、未だ温りのある妖しいまでにプツリと大きくあふれるように盛りあがっている、真白な光り輝くまでのふくよかな珠の乳房を、これも非人がその乳房の曲線を描いている下の付け根のあたりから斜め上にズブリ、ズブリと左右から交互に槍尖きを鋭く突き立て、いくのであった。

真赤な血重吹が、胸と云わず腹と云わず、非人の躰にまで四方にサット飛び散る。

突き刺された箇所から鮮血の糸の尾を引いて、真白で透き徹るような素肌を妖しく染め色どらせながら滴り落ちてゆく。

最後に非人は、珠の咽喉もとにとどめを刺して、この残酷な処刑を終った。

白縫も同じ悲愴な運命のもとに、その生涯を閉じ、寝むるが如く安らぎの中にそのか細

い首をうな垂れていた。

次ぎ次ぎと斯ように四十一名の者が処刑されていく光景は、世人の想像を絶する程の物凄くものであったが、生臭い血の香の漂う処刑場のもとでは、いくら非人といえども肌寒いことであつたろう。

検視役人の面上にも、この又となき凄惨とすべき光景を直視するに忍びず、その冷たい眼指しの中に、ある寒々とした悪感の表情をたゝえているのを読みとることが出来るのであった。

折しも品川の海を越えて吹き渡る一陣の風が潮騒と俱に不気味な余韻を漂わせていた。

附記 これら磔刑に関する話はよく人口に膾炙されておりますが、日本刑罰史上に名高い鈴ヶ森の刑場跡は現在東京都品川区と大田区との境い目、旧東海道が京浜国道になゝめに交る三角地帯、東京都品川区大井鈴ヶ森町

一九三五番地、鈴森山大経寺境内にその面影をとどめている。

題目塔、首洗い井戸、火あぶり台、槍洗い、川等昔のまゝに残っているけれど、大正十一年京浜国道建設の折、槍洗い川はアスファルト道路の下に隠れ、旧東海道に面して四十間奥行九間の鈴ヶ森刑場跡は、その半ばを破壊された。その時に相当のシャリコウベが発掘された由である。

現在都市計画に基づき京浜国道拡張工事が進められることになっているが、移転されるにしても、幡随院長兵衛と白井権八（本姓平井）との出合いの場「お若けえの、お待ちなせえ」その他、八百屋お七、天一坊などで名高い鈴ヶ森の刑場跡が、次第にその面影を失っていくのは返す返すも寂しいことである。

(完)

若い男性（勿論未婚でしかも童貞である）

の憧れの的である若く美しい女性が、髪は水々しい高島田に結上げ、顔は紅白粉で美しく化粧し、神々しい白無垢姿で、畳二帖敷の白

布の真中に端座し、両手を膝の上に揃えて、前に置かれた白木の三宝の上の九寸五分をジツと見つめている。やがて検視に一礼すると胸高に締めた白い帯を解いてうしろへ廻し、

その下に巻いた白い紐をゆるめて、下へずらして、腰の辺で、しっかり結び直すと、両手を襟元にかけて、静かに左右にくつろげる、そうすると、雪白の肌が露わになり、乙女ら

しくふつくら盛り上った乳房から、むっちり膨れた腹部が惜しげなく若者の眼を射る。乙女は右手で九寸五分を握ると左手で三宝を持てうしろへ廻し左手ですっと左下腹の方までくつろげて、真白な指先をあてがい、右手の九寸五分は逆手に持って、左手で二三回下腹を撫でまわしてから、そろそろ刀の切尖を左下腹へ近付け、しばし瞑目したのち、ふと眼を開けて左下腹をジッと見つめ乍、右手をグット動かすと、九寸五分の切尖を左手の指先で押えている左下腹へプスリと突刺す。この時、アット小さな悲鳴をあげかけてハット押えて声を洩らさず、激痛をこらえるべく口唇を噛みしめ、しばらく息をととのえてから

悲壯美女性切腹への幻想

兵 頭 庫 一



右手に力をこめてそろそろと右へ九寸五分を引廻して行く、雪白の下腹が少しずつ切割かれて紅の血潮がタラタラと糸を引きつゝ、白無垢を真赤に染めて行く、乙女は再び目をつむって激しい痛みをこらえる為、眉は引つ

り口はへんの字に曲げ、身体はやゝ前かゞみとなり、両膝はくずれ白い脛と赤い腰巻がその割れ目から覗き出している、九寸五分は臍の下一寸程の所を過ぎて右手にこもる力はいよいよ強くなつて深く切割かれて、鮮血淋漓として、白い膝や白布はもう真赤になつていゝる、やがて一文字に切終つた乙女は、再び目をカッと開くと、今更ほればれと我が腹の切口を見て心から満足を味うかの様な陶醉表情をしたかと思うと、フーと長大息をすると急に劇しく息使いをして、最後の力を右手にこめると、刀を引抜いて、左の乳房の下めがけて、左手を持ち添えて、グサッと突刺す。ウムと絶叫に近いうめき声を洩らして、突刺した刀を二、三度グリグリとえぐり廻すと見ると、急に中腰になりかけて、こらえ切れずそのままバツタリと斜左横へ倒れて、ピクピクと二、三回けいれんをしてからそのまゝ動かなくなつてしまふ、突刺した九寸五分は、力あまつて背へ突通つて切尖が少し出している。

と云つた様な、悲壯な女性の切腹情景が見たいものである。

(梅田淳二・画)

現代マゾヒズム芸術時評

音楽並に映画等に見るマゾヒズム

原 忠 正

(一) 歌劇「ティーフラント」
オイゲン・ダルベエル作
“Tiefland”-Eugen D'albert.

一九〇三年ブダペシュト市に於て、初演された此の作品を、実際に聴く機会を持つ者は甚だ少い。オイゲン・ダルベエル(Eugen d'Albert.)の名は、むしろ、ピアノリストとして、世界的に有名であるが、私達は、このティーフラント(Tiefland.)を知る事によって、ダルベエルの作曲家としての天賦を余す処なく知る事が出来る。其

の作風は、心理的伏線の有效果な使用をブツチイニに負い、劇的な音楽をワグネルとシユトラウスに負い、美しく、深遠な旋律をヴェルディとチオルダアノに負っている様である。従って、之等の要素が合致して其の全篇を貫く烈しい熱情と、絢爛、眼を奮うが如き管絃樂法は、曾って、此の時評に述べたりヒアルト、シユトラウス博士の「サローメ」と同じく、マゾヒトにとって理想的な豪華さを作り上げている。筋は、複雑なものではない。山に棲む純情な男、パドロと、麓の長者セバスティア

ーノ——この男は自分の邸の美人の女中マルタに懸想して、妾同様にしている。——それからマルタという、現実的な女、それに良識を代表する村の長老といった登場人物の間で起る事件である。セバスティアーノは自分の妾マルタをパドロに嫁がせるという長老の意見に抗し難く、承諾はしたがマルタに、パドロの妻となつてからも、今迄通り、自分との情交を続ける様に頼む。村の者は誰一人マルタとセバスティアーノの関係を知らないで、マルタはセバスティアーノの富に眩惑されてセバスティアー

ノの申出に同意する。ペドロは遂に其の結婚の不正と汚辱を知って、独り清浄な山へと帰ってゆく。

この様に一見簡単な構成を持っているが、その登場する人物の心理描写の難しさは、到底オテルロ（ヴェルディ後期の最高の傑作、最初の神聖な伊太利歌劇と云われ、其の心理描写と絡まってゆく劇的な心理の動き方は、近代歌劇の最も完璧な姿で完成されている）。の比ではない。オイゲン・ダルベールの異様な香りを伴った特殊な音楽は壮嚴な響きを以って、この複雑且、深刻な歌劇を説明してゆく。場面的に最も私達が興味を惹くのは、マルタの歡心を買おうとして、ペドロが身に傷手を受けてまで捕えて村から賞金を得たこと。それからその賞金をセバステアノの財力に対抗しようとして、そのまゝマルタに捧げる部分である。私達は、ダルベールの音楽が、情熱的な音調を以って、「其の銀貨には、まだペドロの暖かい血潮がついていた」事を語る部分について、マルタが其の金をも、勞せずしてセバステアノが献じた金と同様に扱ってしまう部分に至って、烈しい感

興を呼ぶのである。狩に用いる犬の様に、生命をも危険にさらし、彼女の美しさと其の奥に矢張り外面と同様の美しい心が秘んでいるという期待、この二つの眼に見えぬ鞭によって本能的に獲物に向ってゆき、その貴い獲物を、彼女に捧げて惜しまない單純な男の心、こうした幾つかの心理上のマゾヒスティックな場景は、繰返す様であるがダルベールの劇的な音楽によって益々高揚されている。

この歌劇は、独乙以外では余り上演されていないが、私達は幸にして、其の重要な幾つかの部分レコードによって聴く事が出来る。不明にして、只今手許に型録がないので、其の番号や枚数等を挙げ得ないが、少くとも大都市に住居を持って居る人達は外国盤、特にドイツグラモフォン（DEUTSCH-GRAMOPHON）エレクトローラ（ELEKTROLA）テレフンケン・デッカ（TELEFUNKEN-DECCA）等の諸社の発売盤によって、殆んど全部の重要な部分を聴く事が出来る。

(11) 歌劇「バラの騎士」リヒアルト・シュトラウス作

"Rosenkavalier.",—Richard Strauss.

世界の三大喜歌劇として、モーツァルトの「魔笛」(DIE ZAUBERFLÖTE=IL FLAUTO MAGICO.-W.A.MOZART.) ヴァクネルの「ニュールンベルグの名歌手」(DER MEISTERSINGER VON NÜRNBERG.-RICHARD WAGNER.) と共に最高の地位を占めているこの作品は十九世紀末葉から、二十世紀にかけての、爛熟した奥太利文化の高価な遺産である。台詞は有名な「エレクトラ」(ELEKTRA)の台本と共にウキーンの所有した最も頽廢的な財宝と呼ばれるホフマンシュタール(HOFMANSTÄHL.)の作であり、リヒアルト・シュトラウスと、彼の連携が、唯一の例外「アラベラ」(ARABELLA.)を除いて、常に傑作の基盤である事を考えると、当然、変態性慾の侵入は免れ難いと思われる。シュニッツレル(SCHNITZLER.)の「輪舞」に於ける如く、当時のウキーンが、歐洲の高踏的な頽廢を殆んど一手に集めていたと考えるのは、決して誤りではない。その一つの実例はこゝにある。「バラ

の騎士」には、男装の女性が、主人公として登場する。役柄は小姓であるから、これが、若し男であるならば、同性愛の対象と考えられようし、そうしたデリケートな考

え方をするならば、女の男装であるが為に反転に反転を重ねた面白い意図が察知出来ると思う。内容に別にサド・マゾヒスティックな場面として挙げるべき個所はないとしても一九〇〇年の初頭に独逸で流行した男装癖の美しい表現であるし、女の男装が如何にマゾヒストにとって刺激的であるかを考えて、特に、頁を割いた訳である。この場合は、単に一シーンとしての男装ではなく、一般に登場する主要人物の様に終始男装して、幾つかの美しい宮廷衣裳を見せて呉れる。この時評の第一回に述べた様にリヒアルト・シュトラウスという作曲家はこの他にも、数々の興味ある作品を書いているし、就中、家庭交響曲 (SINFONIA DOMESTICA.) に於ては、性交を綿密に音楽で説明しているの、後に機会を見て書いてみようと思っている。

バラの騎士は左の様に幾つもの全曲に近いレコードがあるが、これはむしろ、音楽

だけの問題でなく、舞台が主であることをお断りしておく。

①日本ビクター SP78 廻転十三枚

JAS541 (JD391~403)

Lotte Lehmann, Maria Olszewska,

Mayr, Elizabeth Schumann, mit

Choir; Wiener Philharmoniker

Orchester; dirigent: Robert Heger.

②ユラニア会社 (米国発売獨逸吹込)

LP4; URANIA. 12"×4.No.201.

Kempe, Lemnitz, Sächsische Staats

tsopern Orchester.

③ヴォックス会社 (米国発売獨逸吹込)

LP4; VOX. 12"×4 No. PL-7774.

Solisten, mit fu Klemens Krauss,

und Münich Staatsoper-Orchester.

三、その他、「手帖」との重複を避けて題名のみにしておく。

(1) 雑誌「文芸」八月号、第八

九頁、小説「馬」

(2) 米映画「Three Rings Ci-

rcus」来春封切予定

(パラマウント 天然色映画)

(3) 米小説「HILL MAN」前項

と共に次回に詳述する

〔臨時追補〕

◇仏蘭西映画「維納の別離」

テクニカラー

原名其の他次の通り

Un Film d'Ancre Hagnet.

〈Par Ordre du Tsar.〉

Colette Marchand.

Michel Simon.

Jacques François.

et Willy Fritsch.

dans Un film «Par Ordre du Tsar.»

réalisée par André Hagnet.

Couleur en «Technicouleur.»

配役は、仏映画界で現存する最も有名な俳優ミシェル・シモンがヴィクトゲンスタインという家老役を、妖婉コレット・マルシヤンがヒロインのカロリーヌを、更に作曲家フランツ・リスト (カロリーヌの恋人になっている。) をジャック・フランソワが太公の役を珍らしくもヴィリイ・フリッチ (獨逸ウファ映画等で戦前活躍した。) が

夫々演じている。このキャストは、正に一流と称さるべきもので、一寸この種の映画には勿体ない位のものである。色彩はテクニカラーとしてあるが、米国のテクニカラーと比べて癖が強い様である。

筋は、曾ての「未成交響楽」というラヴ・リイ・フォルストの名画の筋とよく似ている。王妃カリイヌは、音楽家リストと相愛の仲であるが、種々のいざこざの末に別れて領地へ戻ってゆき、リストはウィーナに留まって、大作曲家になるといふ、所謂音楽映画では最も有りふれた行き方で組立てられている。大体こうした映画は、細かい筋を知ってから見るとつまらないものであるから、こゝに詳述する事は割愛させて置く。

扱て、マゾヒスト好みの点についてであるが、最も簡単にこれを述べる為に、一九五四年五月廿一日号の仏映画誌「シネモンド」誌の紹介記事の冒頭を読んでみよう。猶この号（一〇三三号）は特輯としてこの映画を扱っているの、こゝに紹介する写

真等はすべてこの雑誌からのものである。

「彼女（カリイヌのこと。）は、シヨルジュ・サンド（仏女流作家、シヨパンとの倒錯的な同棲によっても有名である。男性的女性の代表的存在。）の様に葉巻を吸う。狼の毛皮で造った帽子をかぶり、脚にはいつも長靴をはき、コザック騎兵の様に鞭を鳴らし乍ら馬を飛ばせる。けれど、リストはこういうカリイヌの性格は、むしろ淋しさや悩みへの反撥である、という事を知っていた。カリイヌは十六の時に、放蕩者で野蛮な精神の持主であった或る老人と結婚させられるのだ。彼女はその後結婚生活の間、捨身になって反抗を繰返した。

——以下略

この映画の多くの場面で、ルパシユカ風の白い上衣と、毛皮の帽子、ピッチリと肢体を包んだ細いズボン、宮廷風の乗馬用の長靴、といった服装で、丁度男の様に振舞うカリイヌを見る事が出来る。要点は、画面の雰囲気と演技であって、筋とは余り関係はないわけである。それに、リストは

後半、カリイヌがそういった恰好をするのを止めさせてしまう。そうして、この荒々しい気性の女の中に潜在する女らしさをひき出すのであるから。

この映画は我国では、第一回には必らずロード・シヨウに出る筈である。而も其の予定は十月末頃である。配給が新外映であるので仲々試写は出来そうにないが、若し本誌を見て、試写希望を申出られる向が多ければ、何とかして、努力したいと思っている。映画に関する限り、私は東京に在住の方の為に出来るだけの方法を樹てる心算であるから、興味ある方は編集部を通じて私の方へ御一報願いたいと思う。

（本稿は前記シネモンド一〇三三号及一〇三七号——一九五四年六月十八日号——に拠る所が多い。）

【註】 本稿組版中に筆者より挿入写真二葉が送られてきましたが、こゝへ掲載出来ませんでしたので、三〇二頁に掲載しておきましたから御参照下さい。



創作

縛^{ばく}戀^{れん}

草薙久人

一

遅い昼食の箸を不気嫌に置くと、光久はつと立上った。

「支度は出来ているんだな？」

「はい。……あのうキャンプからお戻りになるのは何日ですか？」

「四・五日の予定だと云ってるじゃないか」

「ただ四・五日では困ります。あたしもお盆ですから里へ三日程帰らせて頂くかと考えているんです」

「それみる、お前だって三日程だなんて曖昧な事を言ってるじゃないか」

光久は底意地の悪い眼を光らせた。

「あなたさえ、はっきりおっしゃって下されば、あたしはそれで、

都合をつけるんですから……」

「都合とは何だ!! 生意気言うな。帰りたけりやア気のすむまで十日でも二十日でも勝手に行って来たらいいじゃないか。ふん、帰りがたくてうずうずしている癖に上品な口をきくのも、いゝ加減にしろ！」

この人は何もかも承知で駄々をこねている。(どうしてこうしょくく責めねば、気がすまないのだろうか。)

俊子は口惜しさに涙のこぼれそうになった唇をキューツと噛んだ。「何だ、そのふくれっ面は、また痛い目を見せて欲しいとでも云うのか？」

俊子は凝っと良人の顔を睨むように見た。光久は一瞬その強い視線に狼狽めいた色を示したが、いきなり平手で俊子の頬を打った。



「おい、その白い眼はどう言う意味なんだ。俺に未だ不服があるとしてもいうのか？……ふん、一皮むけば、お前の方が俺なんかより、ずっとずっと悪党じゃないか。俺をこんな人間に墮落させたのは誰なんだ。俺の静かだった心を荒ませたのはみんなお前じゃないか。お前は良人の苦しむ様を白い顔をして、あたしがどうか致しましたのって言いたげな面で、しやアしやアとしてやがるんだ……」

「……………」

「ふん、俺はな、お前が毎日何を考えて生きているかちやんと見抜いているんだぞ、俺の留守中にお前達がどんな事をしているかも調べ上げてあるんだ。お前体には俺達兄弟の血を吸い取ろうとする不貞の虫が巣を張って蠢めいているんだ。どうだ、凶星だろう」興奮した光久の手が、俊子の乳房のあたりをドンと突いた。

その拍子に彼女は嫌という程、柱の角で頭をうちつけた。

むっちりしたふくらはぎのあたりが、ちらっと覗いた。

光久の眼は凝結した。

すると、またもや自分自身でも理解出来ないあの不思議な衝動が、体の何処からか、奔ばしり出るのを意識した。

と、黄色く濁った彼の眼は異様な光りを持ち始め、

とうとうと音立て、体中の血が逆流するのだ。

「おい帯を解け、肌着も取るんだ。そして押入の中へ這入るんだ。さ、早くしろ」

「あなた、昨夜のような事をまたなさるおつもり？ 昼日中にあんな恰好をさせて、人が来たら一体、どうなさるんです」

「人が来たら見世物だと言って見せてやるよ、それとも兄さんに見られるのが厭なのか？」

「……………」

「良人の命令だ。厭だと言え、それだけ余計に痛い目を見るだけなんだぞ、さ、入るんだ」

彼女は素直に帯を解いた。良人のこの異常なまでに狂ほしい激情を、ひとときでも早く静めようと思えば、素直に言うなりになってやるのが一番よい療法だからだ。

「ふふ、お前近頃少し肥ったようだな」

妻の腹のあたりに目をやると、光久はにたりと唇をなめた。俊子は良人に秘密を嗅ぎつけられたのではないかと一瞬ギクツとした。押入の中には、夫婦の体温を思ふ存分吸っている夜具が、畳んでいれてある。

俊子の素肌のあちこちには、胸から背、腰へかけて紫色の痣が何かの染のように点々と残っている。

「ね、船に遅れるわ」

「キャンブなんかどうだっていいんだ。俺にはこうしている方が高校生なんかと遊んでいるよりずっと興味があるんだ」

「だって貴方が引率なんでしょう？」

「いやに追い出そうとするじゃないか、さてはやっぱり何か計画が

あったんだろう、どうだ言え！ 言わないか、売女！」

光久の手がまた鳴った。押入の中には徹の匂いが漂っている、鼠の引いて来たボロ布が散らばっているあたりから、隣家の明りが一筋壁を透して糸を引いたように見える。

腰をかがめて光久も中へ入ると、有無を言わず俊子の手と足ががんじがらめに縛りつけた。皮がむけそうな位強い縛り方だった。襖一重を隔てただけなのに押入の中には、妙に秘密めいた匂いが充滿している。

幼ない頃俊子は、しばく継母にこうして押入の中へ押し込められて折檻され、泣きながら何時の間にか眠ってしまった事を懐かしく思い起した。

「お前のような不貞な女には、この狭苦しい押入が身分相応というものだ。……そうだ、これはお前が刑を待つ独房だ」

光久は独房という言葉の発見に満足したのか、野良猫が餌を見つけた時を思わせるような声で卑しく笑った。

俊子はいっそのまゝ、何時迄も縛って放っておいて貰いたかった。

独房でも何でもかまわない。どのようにむごく責めさいなまれようとも、私の心はあの日からもう良人のもとを離れてしまっているのだ。

妻となった身では、もう良人以外の男を愛することは、かなわないのであろうか？

俊子は独り心に秘めたこの想いを、様々の角度から考えたり、批判してみたりしている。

が、いざとなると結局は、古めかしい道德感や色褪せた倫理の戒律が俊子の真実の愛を貫こうとする勇氣の鋒先を、微塵に打砕いてしまうのだ。

俊子は二十八才の、立派な云わば世間的には何不足のない人妻なのだ。

良人の光久は京阪沿線にあるR私立大学の附属商業高校の教諭を勤めている。担当課目は数学と物理である。

俊子にとっては年下の良人である。

彼等の結婚は表面的には全く理想的なもののように見えたかも知れないが、それは俊子の人一倍世間態を気に病む性格から割り出した合理的な世渡り法が、その裏面に包みかくされた醜い事件や感情を――巧妙に隠蔽しているからである。

光久は俊子を是非にと懇望し、凡ゆる手段を弄して妻とした位なのだから、無論彼女には現在でも首ったけなのである。

が、俊子は実は光久を愛してはいない。少くとも光久を良人の座に据えて眺めようとは想像だにできなかったし、今後もそれを不動のものとなす確心など金輪際持合わせてはいない。

いや、むしろ光久の表情の何処かに翳っている。ぬるぬるした闇の中で不気味に光るあの野良猫の眼のような暗い皮膚の感じには、今でもぞっとする肌寒さをおぼえることさえあるのだ。なのに彼女は光久を良人として、その座に据えてしまったのだ。

そして周囲の人々は誰も今日に至る迄、彼女の胸奥に秘められた愛情の記録には気づいてはいない。

六年の夫婦生活を送り迎えつゝも、俊子の心は光久の側には、少しも住んでいないのだ。

世の多くの人々もそうであるかも知れないように、俊子は人生のスタートをあやまってしまったのだ。

良人以外の男を心に描いて、そのこゝろ妻でありながら、愛する男とは唇さえも交えられず、離れ／＼に住んで、日毎心をこがして生きている女。

夜が訪れると、そのような心を殺し、魂の全く失われた屍を良人との褥に任して、声を殺して鳴咽する。

俊子はそのような世界に住む一人の女なのだ。

二

何時の間に降り出したのか、縁側をたゞくしぶきが聴えてくる。「おい、今日はな一寸変わったことを思いついたんだ。少し痛いかも知れんが、お前自身には嬉しいことなんだ、騒ぐんじゃないぞ」そう云い乍ら、俊子の口に手拭で猿轡をかませると、勢よく二階へ上って行った。

二階は夫婦の部屋ではない。

光久の実兄の良一が住んでいるのだ。

良一さえ家に居てくれたなら、このような破目に陥らずにすんだものを、今日に限って朝早くから、友人の家を訊ねると云って出かけたまゝ、未だ戻らないのだ。

俊子は良一の帰って来てくれるのを心で念じた。

良一こそ、俊子の心のすべてを捧げ尽している男なのだ。

× × ×

昨年暮に、中共地区から引揚げて来た時は、彼は残酷なまでの痩せようで、生きた亡霊という言葉がそのまゝそっくり当てはまる

ような姿であった。

その亡霊が、彼女の家の玄関に、薄暮を背にして姿を現した時、生憎、良人の光久は未だ学校に出かけて留守だった。いや、運悪く当直の日だったのだ。

俊子が学校へその旨を電話すると、光久は電話口で、//嬉しいだろう、二人きりにさせてやる//と怒鳴るように云い捨て、俊子の返答も待たず受話器を切ってしまった。

良一は中共軍の捕虜として終戦後ずっと強制労働に従事させられた揚句、肺を患って帰って来た。

何年目かの生死を超えて来た再会のその夜、良一と俊子は、さゝやかな膳をはさんで向い合ったまゝ、凝っとしていた。

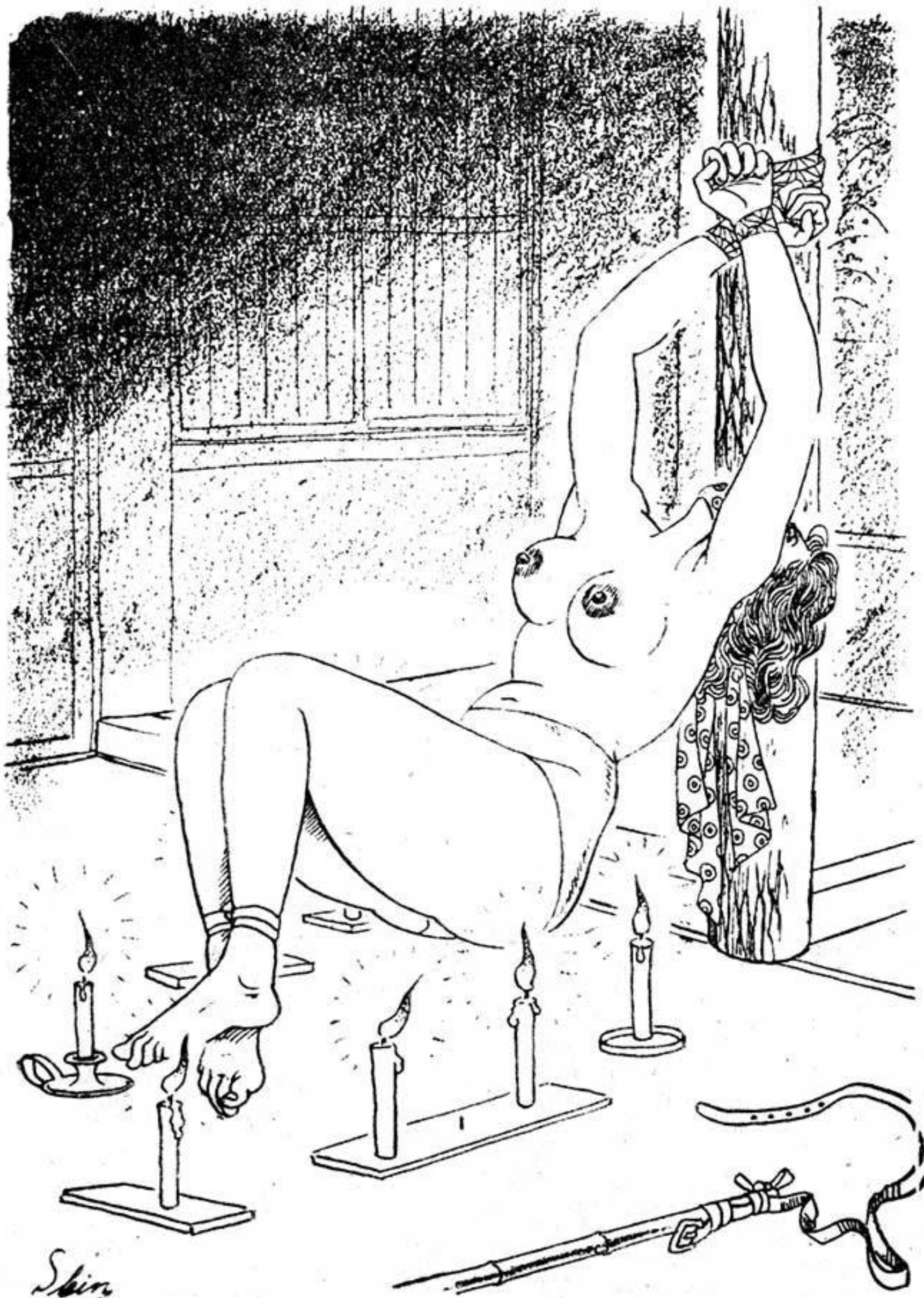
何から話し出してよいものか、その糸口が見つからないのだ。

まさか、将来を誓い合った愛人の俊子が、こともあろうに肉親の弟の妻になっていよ

うとは、良一には信じようとしても到底信じられない怖ろしく哀しい現実だった。

いや、信じられないのは俊子だって同様であった。

光久と結婚する時には、彼自身の口からも、そして周囲の人間か



Shin

らも、良一が南方で戦死を遂げたと聞かされていたからだ。

思えば光久は計画的な嘘をついたのだ。不倫な恋を遂げんが為に真実を欺むいたのだ。

あまりの憤りと後悔の念に、二人はただ対座し合ったまま、貴重な夜を無為に過ぎてしまったのである。

二人は手さえ取り合わなかったのだ。人妻の身だという倫理感に縛られて、俊子は愛する良一に自分の総てを与える勇気を失ってしまったのだ。

そのような二人の貞節も結局は、何の足しにもならなかったのだ。

昭和十五年と云えば、未だ良一が大学生で俊子は女学生だった。その頃二人は今日という自立劇団のような新劇の研究団体で知り合った。

丁度、築地小劇場や新協劇団等の進歩的な新劇団体が左翼のレツテルの下に、特高警察の手で解散させられた後だった。

良一は文芸部員のリーダー格で、劇作と演出を担当していた。

きわだった美貌の持主である俊子は、誰の目にもその華かさを公平に認めさせた。

無口だが、優しい物腰の内に激しい情熱を秘めて、真剣に彼女を導くその態度に、俊子もいつしか良一を愛し尊敬するようになっていた。

彼の自作自演出の作品の主人公に扮して、京都の師範学校の講堂で発表公演のさなかに、良一に赤紙が来た。

良一は九州のK連隊へ入隊する日、俊子を自分の家へ伴って両親に紹介した。

無論、それに、突然ではあったが、異議をはさむ者はなかった。

それ程俊子は誰の目にも一目で気にいられるくらい、優しく聡明な美しい娘だったのだ。

予備士官学校へ入隊した良一から秋立つ或る日、手紙が届けられた。

それには自分の留守中、年老いた両親の世話を頼むとあり、外地へ近いうちに立つと簡単に記されてあった。

継母との気まずい仲で、もと／＼家には居ずらかった彼女は、父の許しを得ると身一つで良一の家の人となった。

敗戦、彼女は義弟の光久や両親達の為に、やとなのような事までして懸命に家を支えた。

私立大学の理科の三年に未だ籍のあった光久は軍隊にもとられず家から通学の出来る結構な身分だった。

光久は良一とは兄弟と思えぬくらい性格が異なっていて、陰気で猜疑心が強く、虚無的な匂いの濃い人間だった。

三

疎開させてある品物を引取りに故郷である滋賀の山里、Mへ行く事になった。

沢山な荷物なので、光久も帰郷がてら同行するという。

M迄は当時の混雑した列車でたっぷり五、六時間はかかる。朝の一番列車で大阪を発っても、どうしても一泊はしなければならぬ。

俊子はふと心にかける不吉な予感をおぼえた。

荷物の整理を終えると既に夜になっていた。混雑した車中で立ちっぱなしだった故か彼女は全身が痺れるように疲労しているのを感じ

じた。

入浴後、離れの六畳に床を敷くともう欲得なく眠りたかった。

幸い光久は母屋で伯父達と寝むらしく、一人っきりになると、俊子はそっと胸元から良一の写真を取り出し目を閉じて接吻した。

り、しい軍服姿の良一が笑っている。一日中でこのひそかな時間が、何ものにもまして俊子には生甲斐をおぼえさせてくれるのだ。

それはもう永い間のひそかな習わしであった。

どのくらい時間が経ったであろうか、俊子は胸苦しさに呻めいて自分の声を遠くに聴き乍ら、どうにもならない焦ら立たしさの中にいた。手足を動かそうにも痺れてしまっていて、どのようにもがいても、夢魔から解放されないのだ。

臉を開けると、枕元にひきつゝたような醜い表情の光久が坐っていたのだ。

半歳後、俊子はあきらめて、光久の妻となった。

が、二人の夫婦生活は必らずしも幸福ではなかった。

疑い深い光久は、絶えず良一の肉体上の仲を疑って、火のような嫉妬に駆られ、その揚句は俊子を折檻するのである。

俊子はどのように烈しく折檻されようとも、事実そうでない肉体上のものを白状することは出来なかった。

そうする裡、光久は次第に俊子の肉体を責めることに依って或種の快感をおぼえ始めたようであった。

夫婦の交渉そのことよりも、むしろその方にしばし愛情めいたものを閃めかせるのだ。

さんざん俊子の肉体に加虐した後、光久は満足し、人間が変わったように彼女に詫びるのだ。二度とこのような非道い真似はしないか

ら許してくれ、俺から逃げ出さないでくれと、俊子の体を抱きしめて泣いて謝るのだ。

が、二、三日も経つと、そんな誓いなど忘れ果て、また狂ったような折檻を始めるのだ。

例えば竹に皮のベルトを縛りつけて鞭として打つかと思うと、腰紐で床柱に縛りつけ、ネツカチーフで猿轡をかませ、体の周囲に口ソクを立て一本火を点けてゆき、少しでも俊子が動くようななら、炎に肌を焼かねばならぬように工夫したり、浮世絵のポーズを真似させてその上から縄をかけたり、段々と責める方法が複雑を極めるようになって来ている。

しかし、数時間に亘ってそうした事を行った後では、光久は決して俊子の肉体には決して近寄らなかつた。安心して眠ってしまうのが通例なのだ。

光久の嫉妬も哀れなものには違いないのだ。愛する感情というものは、何時どのような場合に起って来るものかは、何人といえども計り知することは出来ないのだ。

肉親にゆかりのある者にでも、突如として生じることはあり有るのだ。

古代の人間関係に、しばしばそのような状態の残されているのをみても判る。

が、現代の道徳はそれを許容しない。光久自身決して無智蒙昧な男ではない、インテリの部類に入る人間だ。

兄の良一の愛人とはいえ、弟の光久にとっても忘れられない最初の女なのだ。

男と女の関係にはチャンスともいうべきものが非常に重要な位置

を占めているようだ。

兄の嫁として家に住んではいても、事実上俊子は未だ良一の妻ではなかったのだ。青春の欲情の息吹は狂的に激しいものだ。あの疎

開先での一夜は、光久にとってもそれは思い起すだけでも嫌な夜なのだ。

どうしてあのような暴力に訴えてまで、思いを遂げねばならな

ったのか、自分自身にでも訳の判らない悪魔的衝動だったのだ。たゞ光久が他人と違う所は悪魔に敗けたのである。理性が欲情に押しつぶされてしまったのだ。

兄が帰って来たらどうしよう、殺されるかも知れない。いや、もしかしたらあきらめて許してくれるかも知れない。が、俊子は俺を真実愛し続けてくれるだろうが、俊子は人一倍賢い女だ。あいつの正体は判らない。しかし事実上彼女は俺の妻なのだ。これは動かし難い事実なのだ。兄がどのように騒ごうとも、それはもう過去の事になっているのだ。

光久の心も転々と煩悶し続けて来ているのだ。



Shin

四

「おい縄を解いてやるからその上にこれを着るんだ」

二階から降りて来て光久が差し出したものは、良一のパンツと下着のランニングシャツである。

「嬉しいだろう。お前の肌に兄貴の肌が触れるんだ、未だ洗濯してないから、兄貴の匂いがむん／＼しているぞ、さ、着ろ」

俊子には良人のこの思い付きが哀れだった。何故このような惨めな事を考え出したのか、良人はいっそ、あたしと良一がどうにかなってしまうば反って落着くのではないだろうか？

「よく似合うぜ、どうだい、匂いがするだろう？ お前の大好きな人の……」

「……………」

「何とか言ったらどうだ、嬉しいとか、悲しいとか」

光久はまたその上から縄をかけ、押入の中の柱にその一端を縛りつけると、猿轡をかませた。

「じゃア出かけてくる、予定は四日間だ。せいぜい兄貴に可愛がって貰うんだな……」

「あなた……」

と声には出したが、それは呻きにしかない。光久は叩きつけるような勢で襖を閉めると玄関に鍵をおろして出かけてしまった。

何時間か経った。気がつくやう俊子は良一の腕の中にいた。

「気がつきましたか？ 光久の奴、非道いことをするもんだ！」

「どうして、あたし押しこめられているのが判りましたの？」

「あなたの呻き声ですよ、夢の中で随分うなされているらしかつた。帰って来ると、玄関には錠がかけてあるのだが、勝手口の扉が開けっ放しなので、変だなと思って入って来ると、押入の中からあなたの呻き声が聴えてきたんですよ、どうしたんです？ 一体、この有様は……」

俊子はいっそ良一に何もかも洗いざらいぶちまけてしまおうかと思つた。が、そのとき俊子はふと、胎内に蠢くものを感じた。

光久の子供を妊っているのだ。妊娠すまいと思つていたのに、皮肉にも結婚六年目に、それも良一が帰って来てから、俊子は身ごもってしまったのだ。

良人には内緒で葬ってしまうつもりで、光久にはそのことを告げてはいない。到底光久の子だと信じはしないからだ。が奇妙な感情に俊子は捉われはじめていたのだつた。

あれ程嫌っている光久の子なのに、産んでみようという気が起つて来ているのだ。女のそれは本能だろうか、それとも六年間の光久との夫婦生活で俊子の体は心とは逆に、どこかで光久に惹かれはじめているのだろうか？

俊子は背に廻ってきた良一の腕をそつと解いた。良一の眼は彼女を求めて燃えたぎって来ている。

「良一さん、あたし妊娠してるんです」

突然、あまりにも唐突な俊子のその言葉に、良一はそれがどういう意味を以て自分にぶつけられたものか咄嗟に判断出来なかった。

「あたし、今でもあなたを愛しています、信じて頂けないかも知りませんが、あたしの良一さんへの愛は、命を賭けたものです。でも、光久はあたしの良人です、憎い／＼仇のような良人です。あ

たしの生涯を狂わせ、あたし達の愛を盗んだ泥棒です。心では決して許してはいません。あたしがこうして色々な苦しみ耐え抜いてきたのも、みんな光久への復讐でもあるんです。夫婦でありながらあたし達は仇同志なんです。死ぬ迄仇同志なんです。でも光久とあたしは夫婦なのです、そしてあたしの胎内には光久の子供が一日一日その命をふくらませて来ているのです。

あたしは良一さんが帰っていらった日からずっとあなたを許しを待ちました。あたしを連れて何処かへ逃げようと言って下さるのをどんなにか待っていました。でもとうとうあなたはそれをおっしゃっては下さいませんでした。夜中に光久に打擲されてあたしが泣いているのを御存知の癖に、あなたはあたしを救けては下さらない。それがまるであたし達の愛情なんだと言わぬばかりに、あなたはよそ見をしていらした……」

「俊子さん、それは誤解だ。僕はあなたをこの檻の中から助け出そうとして、友人の間を渡り歩いて就職問題に奔走していたんです。それに永い間あちらに居たものだから、すぐとは内地のテンポに合わせられなかったのだ。でも今日とうとう就職が決まったんです。東京に今度出来る民間放送の文芸部へ採用されたんです。俊子さん一緒に東京へ行こう、東京へ行って何もかも始めからやり直すんだ」

「駄目、あたしはもう駄目……、あたしはあなたの妻にはもうなれないの、何故だかそれはあなただってよくお考えになればお解りになることよ、……」

「勇気を出すんだ、子供は僕が育てるよ」

良一の眼には涙が溢れていた。さっき縛られ呻いていた俊子を見

た時、良一はぐる／＼とかんじがらめに巻きついてゐる縄に、ふと自分達の運命を感じたのだ。

解いても／＼執拗にからみついて離れない十重二十重の縄、それは光久の心そのまゝなのだ。光久の愛に較べて良一は自分の愛がいさゝか弱いように思えた。

「あたくし今から一寸里へ帰って来ます、明後日の朝には戻ります……」

俊子はそう切り捨てるように言くと、良一の眼の届かぬ所で、彼のシャツとパンツを脱ぐと着物に着替えた。

「じゃア僕も明後日立ちます。」

良一はそう言うのと二階へ上って行った。

勝手口の扉に錠をかけようとして三和土へ降りると、扉の外で黒い影が動いた。

「俊子、俺だ……」

「まアあなた！ キャンプにはいらっしやらなかったの？」

「疑って済まなかった。キャンプへ行くと言うのは嘘なんだ、今の話をみんなこゝで聴いてしまったよ、お前妊娠しているんだって……」

「お信じになれます？」

「……信じる。信じるとも……」

二人の心に始めてほのぼのとした何かが通い合った。それは愛ではなかったかも知れないけれど、少なくとも憎しみではなかったようだ。

レスボスの記

花村 恵美子

竹井 清一・画

一、トリバジスムス

レスボス、何んと甘美で嘆息にも似た言葉でしようか。

歓楽と幻想と憂鬱と頹廃との四重奏――

私は紫の浪うつレスボス島のギリシャ詩人、サフォと、彼女に依って愛された美しき処女達の、甘くも妖しき同性愛の数々を真実感を伴いながら想像する事が出来ます。

レスボス。女性同志のみしか理解出来ない愛の交歓。夢見易き処女の胸を燃え湧きたた

せずには置かないレスボス。そして、過去に於いてサフォの愛に目醒めさせられた私の告白記を綴るに先立って、恋の追憶を恋する乙女の羞恥に似た胸の鼓動を覚えるのです。

レスボスって御存知でしょうか。

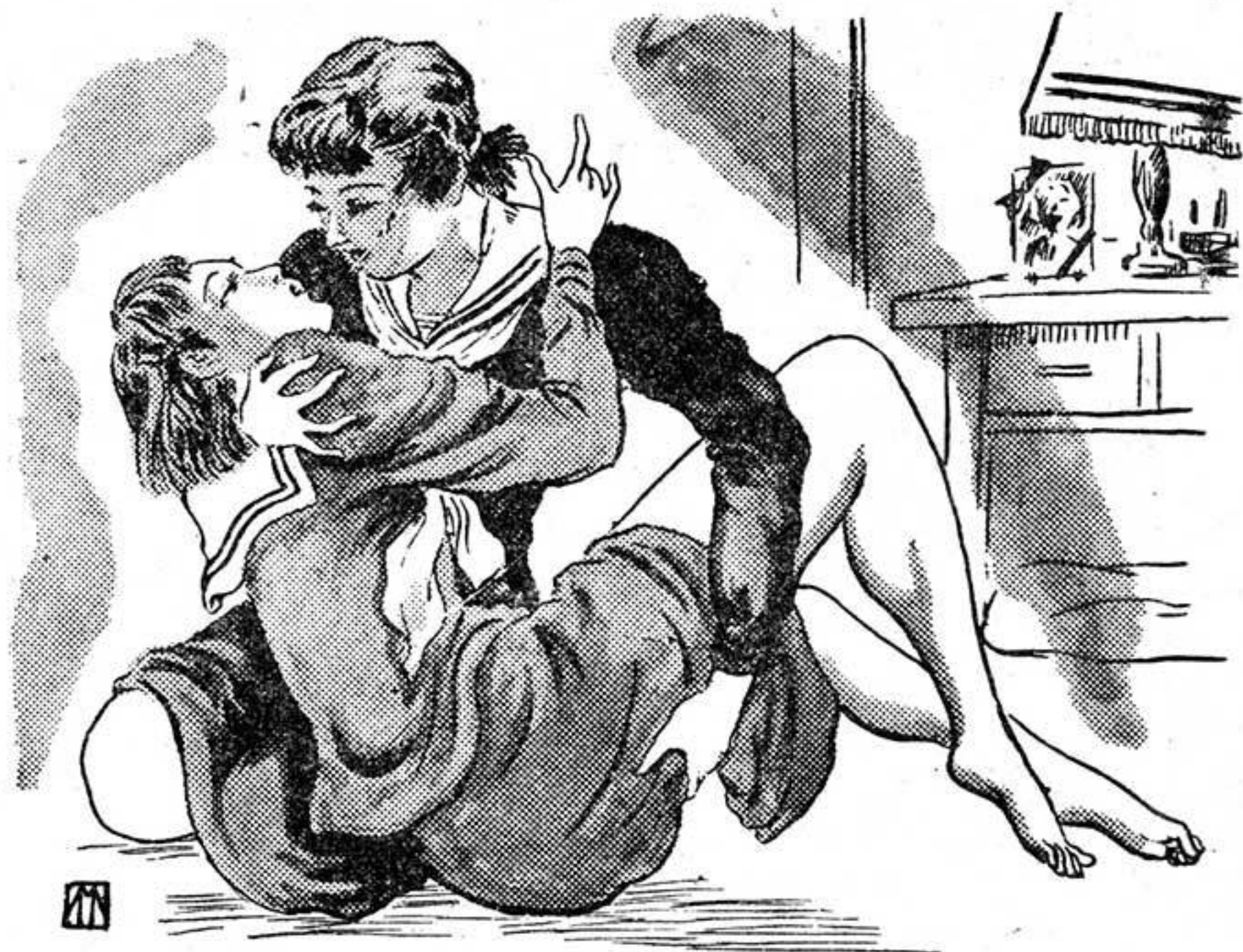
コンサイス英和辞典に依りますと「Lesbian (Sappho, Arion等の生地、レスボス島) Lesbian love (女性間の同性愛)」と書かれてあります様に、同性愛の事でございます。女学生の間ではレスボスと言うより「S」の方が一般的な言葉として用いられておりますが

又、Sapphism (サフォの愛) と呼ばれております様に、言葉の起源は BC612年、レスボス島エレスソスに生れたギリシャの女詩人サフォに由来しております。

私はここで、此の一代の艶情詩人、そしてトリバジスムスの創設者と言われますサフォの生涯について書こうと致すのではありませんし、又、語源についての解釈を述べようと致すのでもありませんが、副題としましたトリバジスムスの意味だけ簡単に説明致し度いと考えます。

厳密な意味ではトリバジスムス即ち同性愛という言葉と、サフォの愛との間には幾分違いがありまして、トリバーデはギリシャ語の刺戟する、という言葉から来ており、ローマ人は此の言葉を、両性間の性行為を行う女子という意味に用いまして、レスボスの愛とかサフォの愛とかの言葉の示す広い意味の同性愛と違って、トリバジスムスは性行動そのものに重きを置いた言葉という様に区別がされております。何故特別トリバジスムスという言葉の説明したのかと申しますと、私の綴る同性愛は、単なるサフォの愛、でなく、トリバジスムスに立脚したものだからでございます。

フォン、マシユカはこれについて三つの方法があると述べております。第一は相互自淫の形に依るもの、第二は肥大核の助けに依る



もの、第三は人工的の性具に依るもの。

勿論当時の私はこれらの知識や方法等全く無知であったのですが、現在考えてみますと私を愛して下さったお姉様も、この分顧に有ります様な方法で私を愛して下さったのでした。

二、結文

津夜子、これが私のお姉様のお名前。女学校三年の時でございます。三年と申しましても旧制の女学校時代の事ですので、小学校六年生から女学校に進学致しました私は数え年十六才、

銀行の支店長をしておりました父が東京に転勤しましたので、三年生の一学期に私も東京の或る女学校に転校しました。私立でしたけど、女学院は所謂ブルジョア学校として割合裕福な家庭の子が多いので有名だったようです。多かれ少くなく

かれ、何処の女学校でもありました如く、私の女学校でもS関係は大部有ったのですが、地方の女学校で二年間過した私には、当時Sという言葉すら知らなかったのです。津夜子様は一級上の四年生、演劇部の部長として、且つ又男役の適役者として、津夜子様の存在を知らない生徒は有りませんでした。実際津夜子様の舞台姿は素晴らしいものでした。当時宝塚の小夜福子の全盛時代で、容貌が小夜福子そっくりの津夜子様が人気の焦点であったのも無理ない事と思います。私も演劇は好きでしたので入部致し、その時、始めて津夜子様を知ったのですが、その時の、部長としてののはき／＼された男の子のような動作を、今でも想い出す事が容易です。その時、誰が私のお姉様に津夜子様が成るなんて知っていたでしょう。

忘れもしません。校庭の池にあやめの花が美しく咲いていた五月の第一土曜日、帰宅しようとして下駄箱の皮靴を取出した私の視線を射たものは、靴の中に見える一通の結文でした。そんな事は始めてでした私は、すっかり驚いてしまいましたが、真赤になって困ってしまったのですが、お友達の話声がしましたので、狼狽ながら大急ぎで胸のポケットに隠し

自分の勉強部屋で開いて見ました。それ迄私の動悸は打ち続けていた。

恵美子様、明日の日曜日、日比谷公園の音楽堂の前でお待ち致しております。

必ずお出で下さる事を信じます。津夜子

私はどうしようかと迷いました。何故ってそれ迄私は個人的に特別親しくはしていませんでしたので。それでも、何か演劇のお話でも有るのかと思い、翌日、指定の時刻に参りました。その日の津夜子様、黄色のスエーターに紺のスラックス、半袖から出ている腕の白さが目にしみる様でした。セーラ服の姿しか知らない私には、今日の津夜子様の、余りに大人びた姿に別人かと思った程でした。その日、私達は、お花畑を散歩したり、不忍池でボートを漕いだりして、楽しい一日を過ごしました。その日を境として、私達の友情は急速に深くなって行っただけです。

三、嫉 妬

校内で、私達のことをS関係だと誰言うもなく広まって行っただけのは、それから三週間も過ぎませんでした。本当に私達は、所謂同性愛と言われても仕方ない程、下校も一緒、持物も一緒、髪のリボンの色も同色、休み時間

私達が一緒に無い事は、ほとんどありませんでした。校内の憧憬の的である津夜子様が、転校生の私とS関係という事は、大分同級生に反感と嫉妬を与えたらしく、ずい分お友達から冷たく、そして白眼視されましたが、それだけに津夜子様と一緒にの時の楽しさは格別でした。津夜子様が居られればこそ、登校しているとおしても過言ではありません。

津夜子様との、楽しい思い出は数限り無く有りますが、そうした友情を記すのが目的ではありませんので、友情の期間に於ける事は省略致します。

夏の白いセーラ服を着ていた頃ですから、多分六月の中旬の頃だと思っています。お友達から耐え難い恥辱を受けたのは。というのも、嫉妬からなのです。お友達ばかりを恨むわけにもいかないのでしようけれども。

其の日、私はそろそろメンスの予定日が近づいていましたので、その用意をして学校に行っただけがそもそもの原因なのです。いつ、何処でメンスになるか判らないので、その時の用意にと、カバンの中に脱脂綿と月経帯を入れて登校したのですが、昼休み時間、トイレから出て教室に戻り入口の処迄参りますと、それ迄ガヤ／＼固まって騒いでいたお友

達が、急に黙ってしまつて、私の顔をじろじろ見るのです。

皆さんは私のお席の周囲に固まっておりますので、何か有ったのかと教室へ一歩足を踏み入れた私は、余りの恥かしさに、一瞬目まいがしたのです。何故って――

私のお机の上には、誰が一体出したのでしょうか、一包みの脱脂綿と、月経帯が箱から出されて広げられてあるではありませんか。

極く親しいお友達同志ですと、メンスの時等私今日Mだからお掃除休ませて、等と申します方も居りますが、私はどんな親しい方にもそんな事恥かしくて死んでも言えません。

それなのに、私の使用致している月経帯をお友達全部に見られるのなんて――。ズロースを見られる事より女性にとって（特に思春期の乙女に於いては）は恥かしい事なのです。

誰かがいたずらしたに違いありません。私はお席に着くなり、それを胸で蔽い隠しながら大声で泣いてしまいました。私をこれ程迄に恥かしめながら、それでも不足なのか、故意と私に聞こえる様な声で、

「恵美子さんたら、ズロース型の月経帯なさるのね」とか（お友達の月経帯は、主に学校から買ったもので、ズロース型では無く、キ

ヤラ二の普及型というのが大部分だったようです」。「ずい分脱脂綿使うのね」(この言葉を耳にした時、私は生理の秘密を知られた思いで二度とお友達の顔さえ見る事が出来ませんでした)とかずい分恥かしい事を言われたのでした。月経中でさえお友達に知られるの厭さに無理して迄体操をする様な私が、事もあろうに月経帯を広げられた上で数々の書けない様な事迄言われた時の恥かしさ、血が停滞するようだったとしか表現出来ません。

四、秘密の言葉

横道に逸れました事をお許し下さい。翌日、私はお姉様(これから津夜子様をそう呼びます)に誘われる儘に、お室を訪れました。洋館の立派な邸宅のお姉様のお部屋で



私は泣きながら昨日の出来事を一切お話しました。お姉様は私の髪を撫でながら、「可哀想に。そんなに恥かしかつたの。悪いお友達ですこと。でも、今日は昨日の分迄津夜子が可愛がってあげる」涙を拭いて下さいましたお姉様のハンケチの香水の甘いふくよ

かな香りが私の悲しみを和らげて下さいました。いいえ、そればかりではありません。その時、お姉様は最初のペーゼをなされたのでした。太陽の光のように熱く、若草のように水々しいペーゼを拒む暇さえありませんでした。余りにも以外な行為に、脳作用の働き、思考力が停止してしまったのです。文学作品で、異性間に於けるペーゼの事は知っておりましたが、同性間のペーゼなんて。あゝ、でもそのペーゼが私の体も心もすっかり――長いペーゼが終る

とお姉様は、「恵美子さん、貴女本当に私がお好き? 嘘でない証拠を見せて下さる? どんな事されてもお姉様の言う事きくわね」私は無言で頷きました。お姉様は、今度は私の耳にお口をお寄せになると小声で、

「貴女、今、アレなんでしょう？ お友達に見られたと云うアレ、お姉様にも見せて」

知らない、お姉様たら、こう言って真赤になつて下を向いてしまった私のスカートに手をお掛けになると――

恥かしいうちに、私はお姉様だと反面何かこう、思い切つていじめられたい様な欲望が五体を駆けめぐつて――何をされているのか夢中でしたが、

「あら、貴女の、私と同じだわ」そう言つてお姉様も月経帯を見せて下さいました。私が目も上げられないで、もじもじしていますと「本当に可愛い子ね」と仰言つて月経帯を交換してと言つてどうしても、きかないのです。そして、強制的にトイレに行かせ、とうとう私の幾分汚れた月経帯とお姉様の新しいのを取換えてしまいました。

それから私達、メンズの時はお互いに、「私今、貴女の着けているわ」、と言う事になつたのですが、人の前で話しても他人には判らないで、私達の秘密の言葉の一つになつたのでした。お姉様がメンズの時には私のをそして私の時にはお姉様のを、と思いますと厭だつたメンズも、何か待ち遠しいような変な気持になるのでした。

歡義先生性愛相談欄

◎御遠慮なく御相談下さい◎

一、相談文は出来るだけ詳細にデータ御記入の上御送り下さい。質問者の秘密は厳守します。

一、相談文及び回答は漸次本誌上に掲載いたします。御都合悪き時は住所や氏名を明記されなくとも構いません。

五、狂えるレスボス

夏休み、お姉様の軽井沢の別荘へ私も招かれて二十日間程一緒に過しました。此の期間中の出来事は私にとって一生忘れ得ぬ事です。お姉様は、私に花咲く処女の秘密をお唄わせになったのですから。しかも巧妙な方法で。第一夜、私達は同じベットの中で寝みましたが、その時、お姉様は、ボオドレエルの「悪の華」から、レスボスを歌った詩を読んでも下さいました。

レスボスよ、けだるく熱い夜の国よ、眼の窪んだ少女達が、実らぬ歡樂を求めて、恋に悶える肉体を鏡にうつしつゝ妙齡の爛熟し切った果実をひとり愛撫するところ、レスボ

スよ、けだるく熱い夜の国よ。〃

此の一節だけは今でも明確に覚えております。ミュッセの「ガミアニ」を読んで下さつたのも此の時でした。ガミアニは限定版とかで、仲々手に入らぬ本だそうですが、お姉様はお父様の書架から見出したと仰言っていました。

それは私の心にレスボスの愛を点火するに余りにも強烈でしたが、お姉様は何も知らない私の固い心を、一日とレスボスの方へお開きになつて行くのでした。そして私は遂に――。

【編集部註】（この次には、原稿用紙五枚位に亘つて、軽井沢の別荘での二十日間の生活の様子が書かれてありますが、公開を憚かる個所が多くありましたので――中略――いたしました事をお断りしておきます。）

休暇中、私達は毎日、レスボスの連続で、流石に私もお姉様もくたくたになつて東京に帰つて参りました。そして、私達は更に刺戟の強いプレイを考案するのでした。

私はこれで、此の稿は一応終りとして、これから後のことは改めて書かせて頂きたいと思ひます。書くに当り、当時の日記を参考にしました。

（おわり）

非 小 説

性

液

(十一)

伊 藤 晴 雨

「そやったらシヨ事が無いさかいにワテの車を使うたらえゝやないか」

「ソリヤアいゝんですが先生、楽屋の横からは窓が狭くて自動車が這入りませんよ」

「ほたらコーッと、大急ぎで大工を呼んで窓明けたらどや」

「でも先生大変ですぜ、大工の手間が」

「かまへんかまへん、シヨ事がおまへんやろう、元をかけな見物呼べへんさかいに今夜の中に窓を明けて車入れる様にしてや」

「へエ、では早速表へ一応話してから其通りに致します」

「第二景四馬路の裏街、人肉市場の一室」

と永井さんは叫んだ。扮装の出来た俳優はゾロゾロと楽屋から出て舞台へ集って来た。

背景は引き上げられ、上下の見切りは馬立に納まり、直径七間の廻り舞台は知らせ無しに廻れば第二景の人肉市場の一室は三方折り廻しの鼠色の壁、所々破れて練瓦が現れて正面に切り抜きの四角な窓が開いて居る。上下にドアがあつて、開閉が出来る様になって居る。天井からは女を縛って吊す鎖が太い梁から下って居る陰惨な道具が飾られて居た。

「売られた女全部出て下さい」

永井さんの声が高く響くと総出の女優がゾ

ロゾロと二階の女優部屋から降りて来た。まだ断髪の流行しなかつた頃で、束髪にした女が多かった。二、三の日本髪の女も其の中に交つて居た。何れも半裸体になって髪は乱れ着衣の裂けて居るもの、帯を締めないで細紐一本のものなど思い思いの工夫をこらして出て来た。

「女優さん達は全部鉄の鎖で縛られるんだからめいめい手足に疵をこしらえて下さい。皮の鞭で打たれて血がにじんだ心持ちで」

永井さんは一々女優を指揮して扮装を教えて居る。正面の窓がパクリと開いて奇怪な責められる女の絵が順々に現れた。

「どうも此絵は面白くないね」

竹波先生はそういつて大道具の絵を見た。

「此絵は女の責められる苦痛の表情がちつとも出て居ないじゃあないか、五九郎こりや駄目だナア」

「左様か、どうも大道具の絵やよつてな先生の下絵の様にようかきよりまへんやろな」

「コリヤいかん、女がいろいろな責めに遭つて段々責め殺される迄の経過を画で見物に示して縛られて居る女達に精神的な苦痛と恐怖の観念を与えるという点が此場のヤマなんだ此の絵を見る見物もハ、ア今に此女達も

「こういう責めに遇うんだな」という暗示を受けて、実際は女を責めない。ソコが此劇の逃げ場なんだから此絵がこう拙くつちやあ何ンにもならないじやないか、も一度描き直させろ」

「先生、そやったらとても大道具の仕事やおまへんよってな、先生のお弟子さんでよろしおますさかいに描いて頂けまへんやろか」

「己れの弟子にこんな仕事の出来る奴がいればいゝが生憎一人も居ないよ」

「そらどむならん……では長谷川一陽ちう看板屋がごわすで先生の下た絵を見せて描かせまほ、どうでおます」

「長谷川一陽か、あいつなら白馬会にいて黒田精輝の弟子だ、少しは描けるだろう、やって見たまえ」

「ならそういたしやしょう、永井はんあんたこれもっていつて長谷川にかゝせておくなはれ」



永井さんは竹波さんの責め絵を助手の遠藤という男に持たせて長谷川の根岸の家へ使にやつた。

「サア、女の人皆ンナ縛られるんだよ、手を後ろへ廻して、少し痛いのは我慢をして貰わなくちゃあ、藤井さん、佐藤さん近藤さん、石井さん、上条さん金井さん、水野さん、大塚さん全部肌をぬいで下さい。それから今日はいゝですが、明日からは身体全部に白粉をぬって下さい。成る可く濃くぬって下さらないと、舞台が暗いから損ですよ、いゝですか縛りますよ」

半裸体の女優を縛る永井さんはニコニコし乍ら細引や鉄の鎖で女優を縛って居る。

「痛いわ、そんなにキツク縛つちやあ悲になつちやうじやないの、シドイワ」

「贅沢を云うもんじやないよ、どうせ君達は月給で縛られつけて居るんだ」

一同は声を揃えて笑った。

初日が開くと「人肉市場」の評判は素晴らしいものであった。殊に第四景の地下室の場は舞台一面にシートを布きつめて正面の張り物の石壁になって居る壁面から本水を落して中央のタンクへ水を張り、此中へ縛られた女を投げ込んで水責にする件が十一月の薄ら寒い時である丈に猶実感が出て観客の好奇心をそゝった。水が次第に増して舞台一面になる頃、警察官が多勢飛び込んで来て、縛られた女共を助け、兇賊を捕縛する大立廻りは写実な本手の立廻りで毎日怪我人が出るという騒ぎ、如才ない五九郎はこれを誇大に吹聴して公園の人気を一手にさらってしまった。

女の責めは其筋のおもむきを憚つてさのみ残酷でなく、責める感じを背景の絵に依つて表現した意匠には当局も小言の云いようがなく、此程度なら差支えあるまいという事になつて其儘許可されたので連日満員で、責められる女優は毎晩閉場後の御座敷が続いた。まして毎日逆吊しにされて散髪を蛇の様にうねらせて苦しい実感味を出した石原の所へは男の客が多かった。新加入の石原は第一回の入座から忽ち公園の人気者になつて五九郎は鼻を高くして居た。第一回の興行成績は素晴

らしかつたので続いて第二回の「続人肉の市」を上演しようと五九郎が云い出したが永井さんは反対した。

「先生のお言葉でもそれはイケませんよ、私は反対です。こんな芝居は一度限りのものです。二度やったら来ませんよ、仮りに今度やるとすれば前回よりもっと大掛りにしてもっとひどく女を責めなければ見物は寄り付きませんぞ、そうなると警視庁がウルサクなつて来るんじゃないやしませんか、どうしてもおやりになるなら私は脚本は書きませんよ」

「左様か、あんたが書けんいうたかてやらにやあかへんで、折角此の人気やでもう一つやりますさ、あんた書けんいうのを無理いうたかていかんさかいわてが書きまほう、あんたは見て居てくれたらえゝわいな」

「先生が書いて下さるんなら世話が無くつていゝですよ、上演料の問題で飛び廻らないで済みますから助かりますよ」

三度諫めて退くといった様な形ちをして永井さんは五九郎の部屋を出ていった。

「機会は禿頭の如し、あとより摺む事能わずか、君の頭の禿頭は後ろからも摺まるが、芝居の人気は立ち始めた時には何をやつても当るといふから、第二編人肉の市をいよいよや

るかね」

竹波先生はそう云つて五九郎の顔を見た。

五九郎は笑い乍ら

「ワテもう初日から次のもの考えていましたもん、また此次も先生の智慧拝借せにやあかへん、何分よろしゅうお願い申します」

「越後から何とやらの形ちだね、今度は僕が脚本を書いてやろう」

「へエ、そら面白うござしょう、成る丈け奇抜な、人目を驚かす様な事をして見たいもんでござすな」

「僕も来年は衆議院議員に打つて出るつもりだよ、日本の画家で選挙に打つて出たものが一人位あつてもいい、日本画壇の為に万丈の氣を吐いて大いに美術奨励を國家がして呉れる様にならなければ駄目だからナア」

「左様でござすとも、ワテもそやったら大いに運動いたしますで」

「先生、お客さまで御座います、やまと新聞の市村先生で」

頭取りの竹さんは部屋のれんから首を出して云った。五九郎は一寸暗い顔をしたがまた元の顔に戻つた。

「たゝ武智、ウィーッ、市村だよ、有樂座以来久し振りに来たんだ、変な顔をするなよ、

不景氣な面アしやがって何でえ、人肉の市なんて変な芝居をして甘い汁を吸っていやがるな、ヤア尾竹先生、日の出に浪斗りで一日に二千円宛収入があるなんざあ凡人業じゃあ出来ませんねハ、、、ハ、、、ハ、、、

市村記者は崩れる様に二人の前に坐った。

竹波先生は風雲險惡なりと見て取って座を立てて何処かへ消えてしまった。

「武智（五九郎の本名）友江はどうしたい、此頃は何とも云って来ねえか。今度友江が一座をこしらえて東海道を巡業するってえ噂を聞いたが君ホントウに手を切ったのかい」

「友江だっかいナ、もう赤の他人やな」

「夢に三百か、それもよからうぜ、時に武智、今度這入ったあの石原ッてえ女形をおめえ、もうあれしたのか」

「あれとは何や」

「とぼけるねえ、何だって知ってるんだ。己れは新聞記者だよ、やまと新聞の演芸記者だよ、おめえがああ女形を何している事位い知らなくってどうするもんかね、ナア武智、一杯吞ませろよ、己れは一直へ行つて居るからハネたら直ぐ来てくれよ、お前に遇わせる人があるからな」

「よろしうおます、ハネたらスグに一直へ行

きますがな」

「キット来いよ、又此前見たいに素股を食わせる例の一件を書いてやるからな、いゝか吃度だぞ」

市村記者は部屋の壁に掛けてあつた蠟虎の襟の掛けて居る五九郎の外套をとって

「寒くなつて来た。君、一寸これを借りてくぜ」

アッと云う間に市村記者は五九郎の外套を引っかけて出ていってしまった。

市村記者が出ていくと入れ違ひに這入つて来たのは本郷座の高田実の用心棒をして居る垣田源吾という男で握り太のステッキをついて羽織袴という姿でヌーッと這入つて来た。此男は村上浪六の小説「馬鹿野郎」のモデルになつた昔の壮士上りで時々田舎芝居に手を出したり、新派の俳優から小遣いを貰つたりしている芝居道の油虫である。

「どうじゃね君。馬鹿景氣じゃないか、大分儲かつたかね」

二枚重ねて居る座布団の一枚をとつて五九郎は垣田に出した。男衆の汲んで出す茶を一ト口飲んで

「君、ビールはないかね、ナニある。早く出せばよか、コップはよう洗わんとイカン、コ

ップを洗わんとじゃ、ビールの味が悪くなつてイカン、ワッハッハッハッハ」

可笑しくも無いのに笑うのが此男の癖である。

「君、今忙しいかね、一時間半付き合つてくれんかね、外務省関係でナア最近に起つた露国のバルチザン事件に就いてじゃね日本の公使館員がバルチザンの為に虐殺されたという事を中外に公表するんじゃね、ロシヤ側から反対に各国に対して、イヤ日本人の方がロシヤの婦女を凌辱したり虐殺したりしとおるという宣伝をして居るんじゃ、ソコでじゃね、我が外務省として之を各国の公使に釈明せにやならん立場に追い込まれて、之を演劇にしたりパノラマ、或はジオラマ等に作つて一般の人に観せる。而してロシヤ側の宣伝の反対説明をしなければならぬという事に決つたのだ。これは勿論省内の秘密じゃがね、ソコでじゃ吾輩はじゃ。之れを中外に宣明するのはじゃね、芝居をするに限る、今迄の警視庁はじゃね、惨虐な芝居はやらせなかつたんだが此バルチザンを脚色したものに限つて外交手段として惨虐な脚本でも差支えないという方針がきまつたんだよ、ワッハッハッハ」

垣田はビールを飲み乍ら得意になつてシャ

ベツて居り、五九郎の隣りの窓から女優連は責められる仕度を仕乍ら垣田の話しを聞いている。

「ビールの肴に何か無いかね、何でもええ、ナニ鰻だ、ビールに鰻はイカンよ、刺身がエ、ワッハッハッハ」

便々たる垣田の腹の中にビールは順々に這入った。半ダース斗り空き瓶が並んだ。

【読者通信】

伊藤晴雨氏に。

ずっと前から投稿したいと思っていたのですがあなたの「性液」は毎号愛読しています。それも回を重ねる毎に興味ふかく、いまちようど十回ですが、あと何回つゞくことかと、期待よりも終結の早く来るのをおそれるほどの気持ちになっています。

私はあなたとは年令も趣味もちがうので、日本髪や長襦袢の魅力は、ほとんど理解できないのですが、それにも拘らず「性液」には惹かれています。というのも五九郎や尾竹画伯のように私の知っている人物が登場するせいもあります。すが、それだけではありません。

「ウィーッ、ドリヤまかろうか、じゃあ君、これから僕は一直へ行つとるから都合で来てくれ給え」

「ワテもう一幕出んなりまへんよってな、それ済まして行きますっさ」

「君に会わせる人はじゃだ、天皇陛下の伯父さんに当る男爵の西五辻さんじゃよ、ナニ男爵じゃといつても貧乏華族じゃで大した事は

せんでもええんじゃ、先達も芳町へ行つて待合へ泊ったんじゃが芸妓を抱きたい様子じゃったが大正芸妓というたらいかんで素人の娘じゃというを抱いてねよったよ、ワッハッハッハ、此頃の華族は人が悪くなりよったよ、ワッハッハッハ」

(以下次号)

あなたでなければ書けぬような話題や人物が、フィクションを伴わずに生き生きと描かれているからであつて、たとえば啄木の登場場面などは啄木研究の貴重な一つの資料となっています。非小説と銘打たれていますが、非小説であるところに「性液」の価値があるので、淡々たる文章もそれにふさわしく、一種の滋味すら感ぜられます。卒直に言つて、あなたが他の諸雑誌に発表された縛りや責めのどの文章よりも私はこの「性液」を高く評価しています。という

ことはあなたご自身、この一篇にいちばん力を入れられているのではないでしようか。そしてそのことは、「奇譚クラブ」が泡沫のよ

うに消えてゆく風俗誌でなく、現在では文献資料として残るただ一つの特異な雑誌になりつゝあることを反映しているようです。その意味であなたの豊富な経験や見聞を駆使して「性液」をあなたの代表作となさる意気込みで、今後もおかき下さい。あなたがなければかけないさまざまな裏面史を、惜しまず十分に描破して下さい。またこれは私一個の希望ですが、あなたの専門の演劇面で、「紅血

血」などが上演されたとすれば、いつ、どこで、どのように演ぜられたかなども織り込んで教えて頂きたく存じます。私は原本をよんだだけですが、あのまま果して公開できるものか、その限界などを

知りたく思っているのです。とりとめないことを書きましたが、一読者として、今後の御健筆を心から期待し祈っています。

(吾妻 新)

○ 最近の奇ク及びKK通信には被縛者のみでなく、縛る人の写真も多く出る様になり喜んで居ります床の置物でなくリアルな動きのあるものを好むのはアブとして小生一人ではありますまい。その点切腹ものは死を意味し可能性にとほしく好意が持てません。兎に角奇クは小生達にとってなくてはならぬ本ですから、編集者御一同の御奮斗を心よりお祈り致します。

(広島Y・K生)

女闘美考現

メトミ研究の第一人者がフアンに捧ぐ一篇

土俵四股平

美しい娘だナと思って見ても鎖骨の目立つ娘は顔をそむけたくなる。胸筋の発達した肉体なら、そうチカ／＼とソレが目につく筈がない、夏などワザ／＼開襟型のワンピースの窓から鎖骨をのぞかせている婦人を見ると、この婦人は顔だけしか鏡にうつさないのしら？など思う、先ず胸を語るに際して、その屋根である上胸部の美から筆をおろした訳である。

四股平がメトミ画を描くと、一人の女に乳房を三ツつけたりする。四ツつけることはマアないけれど、三ツはよく描く、女の胸に乳房が四ツあったなどという話や絵は、終戦後

に氾濫したエロ雑誌で見たことがある、グロもはなはだしい悪趣味である。かくいう四股平も又同断なのだろうか？ いやそうじゃない我輩が描く目的は、乳房の躍動美を表現するためにやるのだ、といつても四股を踏む娘の乳房がイカに躍動したからといって之を三ツや四ツに描く法はない、勿論漫画で走っている人の足を六本にも八本にも描く手もあるから、乳房にしても、ソノ手法で表現することも出来るであろうが、我輩はまだやったことがない、では四股平は如何なる場合にかかる描法を用いるかを語ろう。

乳房の小さい女や、またそれを除去した女

が如何にザンないものであるかは、今更申までもないことだが、相撲画メトミ画の上からこの乳房の存在価値を探究すると、四十八手中その存在を明確に表示する組方は実には少ないのに気付く、相撲は二人で取るものであるから、通念からいえば四ツ見えねばならぬ筈である、ところが完全に四ツ見えるのは、手四ツ（手車）の場合だけで、「投げ」の場合合は一方の双乳が見えれば、その相手の方は全々見えないか、片方がヤツトのぞく程度である、小手投はウマクいくと完全に四ツ見えるが、首投では双方のが片方ずつしか見えないう、腰投も同様である。二丁投も一本背負、櫓投、摺投も不完全である、「掛け手」になると腋下からのぞく程度が多く、掛投か小股掬（逆小股）に割合乳房が見られる。足取、蹴手繰は瞬間的に四ツが出現する、四ツが完全に並ぶものとしては、有名な河津掛がある、これは絵になりやすいポーズだが、どこことなく静的で迫力がないのが淋しい、「反り手」、では襷反、撞木反があるが、一方のみが完全に相手はかくれる場合が多い、「捻り手」では外無双か肩透、とったりと共によく乳房を表示する、合掌捻、網打、逆上手捻なども見られる方だが、切返が案外四ツを見せるし、

送出も叩込、引落としと共に技がかかったあたりで全露出となる。泉川は乳房の美しい姿が出現するが、どっちも腕が邪魔をするし、腕を外せば相撲にならない、ソコに痛しかゆしの盲点がある。

相撲の「手」のことをあまり御存じない方々に、専門的な取口をいって見たところで興



味が無いと思うので、クドクとは述べないが、三ツ乳房の必要は、腕を一線として、その上下又は左右へそれを描く、つまり乳房の出現を必要とする場所へのぞかせる、それを夢中でやると、つい二ツしかない乳房が三ツになる訳だ、さて描いてみると案外苦にならぬグロには見えないものだ。前述したが足や

手も同じ理窟で三本にする場合があってもいい訳だ、これも同じ効果がある、多少意味は違うが仏像の三面六臂など、多面多臂も扱いによっては動的美を増し、意志表示を完全にならしめている、そこに手法として共通点がある。

奇抜な話のついでに、モウ一つ申しておくが、我輩は乳房の乳首を鼻と見て、眉目口を描く場合がある、つまり乳房が個々の生物として、主君である人体の手足を助けながら、各自の部置に於て苦戦苦闘しているのを表現するための手法であって、腹は臍を鼻や口に見立て顔を描く、どの場合でもそうするのはないが、青ざめた腹の顔、怒って真赤になった乳房の表情など、面白いと思うことがある。古書にも向こう脛に眉と目口がある絵があった。

さていよいよ乳房の品評であるが、乳房界の女王オツパイ小僧のような袋に近い乳房は感心しない、しかしカタイ感じのものもよろしくない、弾力があって成熟の一步手前といった、発達の頂点に近いものが秀逸である、美術家風に位置やボリウムの寸度的標準もよいが、四股平は乳房の谷の深い半球形のやゝ高い、乳暈の美しいもので、乳首の苺のよう

にウレていない、突出しすぎていないものを優良とする。だから烈しい動作でブラン／＼するものはウレすぎであり、ブルン／＼とゆるるのも頂点に達し下り坂にかゝった姿である、全身の躍動によってプリン／＼と弾力に若さのあふれるものを最上の至宝としてとる。乳房の美は、腋から流れる大胸筋の根が丈夫でなくては不安定である。全形としてはヴィナス型が理想的であるが、根が完全でない乳房は、服飾の店で売っている乳房のイミテーション乳型のような醜悪感がある。つまり形の美しさはあっても、底力がない、勇力がない、土俵の上へ上った場合、リングに立った場合、闘志が乳首の先まで流れていく血管が細過ぎるのだ。乳房の基盤がしっかりしている娘の乳房は、土俵で仕切るやいなや、イヤそれまでも、ドクドクと音をたてて闘魂をうかべた血液が、全身は勿論、彼女の生命線である乳房へ乳首へ進軍進撃するのである。娘が土俵へ上った際、軽く揉むが如く、摩るが如くに我と、わが乳房をいつくしみ、愛撫し自慰するようなポーズをするのは、女性ならではの見られぬ美観の一つである。又娘によつては、己が乳房をグツと下から掬いあげ掲上げて、敵手に対して、わが乳房の雄大さを誇示するような所作をする。

我輩はよく小説に「サア来いといわぬばかりに乳房をゆすり……」と書くことがあるが、或日豊乳の持主々八重桜千珠子々が、相手の佐々木に対して「乳房でおいで！」と挑戦する声をきいて、自分の小説がまんざら空想でなかったことを知って安心した。勿論それ取材して「乳房でおいで！」では迫力がないので「乳房で来い！ どうだい？ 妾のこれに勝つ氣かい？」と改め、昔の女相撲の四股名々乳張山々の名を使って一筆かきおろしたことがある。

江戸時代に活躍していた乳張山々なる女力士は、如何なる肉体の所有者であったかは知るよしもないが、四股名にかく命名するくらいだから、想像するに当時のオツパイ娘かオツパイ夫人だったのであろうが、どうもプリン／＼とした乳房ではなく、売女あがりのブルン／＼型の徳利乳房の持主であったように考えられるのである。

女力士の首と手足をのぞいて、次ぎに一番よく動くのはやはり乳房である、腹も波を打つが、乳房の微妙な動きには及ばない、殊に女性の呼吸は腹式ではなく胸式だから、一層乳房が主役の立場にあるわけだ。

メトミ鑑賞の上に於て、顔について重視するのが乳房であることは、今さういうまでもないことだが、その鑑賞は、(一)仕切以前の所作、(二)仕切から立合までの所作、(三)立合から組合うまでの所作、(四)組合ってから勝負までの所作、(五)勝負から勝名乗をうけ退場するまでの所作、の五段階に分けることが出来る。レスリングとしてのメトミ鑑賞は、この稿の第二編といった部分で詳細に述べるつもりだから、第一編に相当するこの稿では、大半を日本国有の相撲技としての鑑賞範囲にとめることを諒とされたい。

さて(一)の場合は、相撲場へ入場して、力士溜に控える彼女達の乳房である。見方によつては、普通の裸身に見るソレと何等変ったところがないように思えるだろうが、実は決してさに非ずである。絵画彫塑のモデル女、又ヌード写真の彼女達が、たゞ裸形を金銭で展観せしめるのとは違い既に番附やその日の取組によつて、相手が何者であるかを知っているし、その相手も数メートルの前方に対峙しているのだから、如何に冷静をよそおつても駄目だ、故意に破顔一笑しても、ソレには無理がある、心臓の行動を自制することは出来ない、呼吸は調節できても、脈搏と胸の動

悸と顔色はつゝめない、娘によっては乳房がヒドク昂奮するものもある、乳房に対する静約鑑賞はこゝに集注される、やがて四股を踏めば、その躍動は我々にとって見あきない絶景だといえよう。

(二)の仕切は蔭影の美観である。茶室的な美である、頤や腕の影の中に、乳房自体は半球の影を投げて、見る者の心を其処へ引寄せ、ハツキリ見えないところに焦慮と魅力があるのだ、仕切直しなど絶讃に値する場面がある。メトマーズ相撲草泰子も「恐いけれど、また楽しいものです」と、仕切の妙味を語ったし「相手の人の乳房のユレを見ると、たまらなく昂奮することがあります、それがやがて敢闘精神へ移行するのです」ともいった。また「女同志でも、貧弱な乳房の人を相手にすると、何となく目をそらしたい淋しい感じと嫌悪感をもちます」と春日山千代美はいった。

(三)の立場は、電光であり流星である。乳房は無数の弧線となって前進し又後退する、ピントの外れたヌード写真のように、また二重写しのそれのように見える、四股平は「ソコに乳房の声をきく」というが、立合における突合いなどに於て、乳房の肌音は、他の

部分の肌音とは違って、声と表現したい感覚である。

(四)に進み組合えば、動作は一呼吸して一時安定したかに見えるが、四肢の筋肉は、血管が輸送する精兵によって充実され、闘のたけなわを思わせる。ドタリと一方の腰が寄ればその上の双乳はイヤでも正面衝突をする、乳首の相打である。//乳房の相打//それほど甘味な音は外にない筈だ、その音は鑑賞者には勿論のこと、時には本人同志の耳にすら聞えないであろうが、二つの柔軟無比の肉体がブツかって音の出ぬ筈もない、それこそメトミ鑑賞者が心眼で考察し、心の耳できく音であろう、曰く「乳房の声」である。

反、掛、捻、投の技によって、四ツの乳房はその高峯を競うかと思えば、腕に背に隠見して虚実を見せ、目前に迫りきたるかと思えば、土俵の彼方に逃れて、あたふさ砂面にその豊かな影を投げる、かくして第(五)の勝負後へ移行する。

軍配は片方にあがって「勝力士」矢筈山//となれば、脂汗にまみれた乳房は、凱旋女將軍の意気を示して、乳首も揚々の面持に見える。又負けた力士は股をすぼめ、肩をすぼめゆるんだ褌を気にしながらも、若干の虚勢を

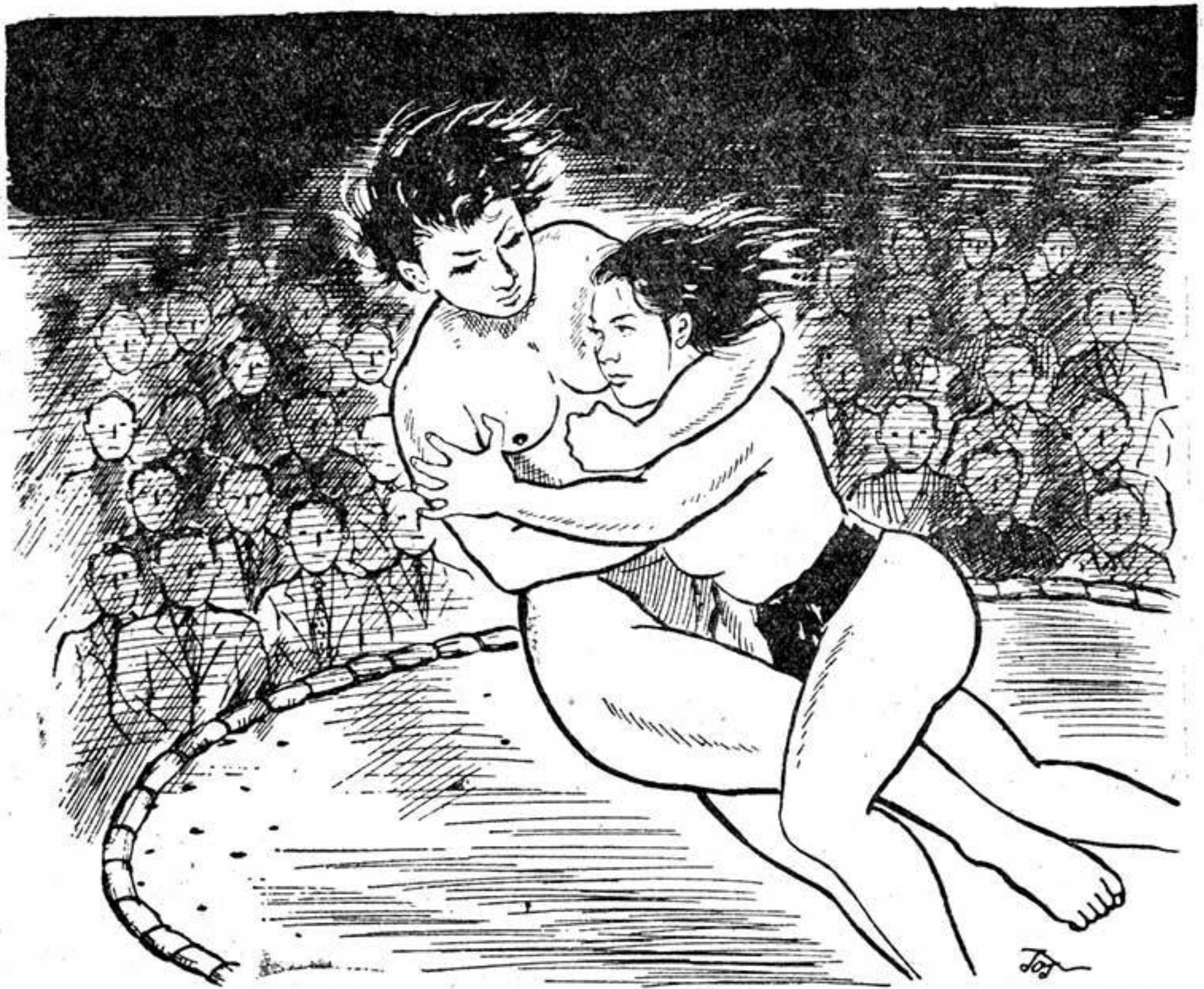
はって、苦笑に頬をいがめながら退場する。

心の中は口惜しさと恥しさで走っても去りた気持を抱くが、一方では「この次ぎ土俵であつたら……」といった反抗を背と腰にほめかしながらも、ソコは女性の悲しさで、自然と双の乳房を抱くようにして去るのが常態である。投げつけられた蛙のようにブツ倒された場合など、立上りざまマズ氣遣うのは股間と乳房である。股間は褌の外れを気にするのであろうし、乳房に対しては、砂による擦過傷の有無を思うのである。事実脂汗にまみれた肌、玄人力士のように太鼓腹の娘はメトマーズにはいないし、腰に砂がついたのはさまで醜くないが、双の乳房にベッタリ砂がつくと、腰高の嫁サン饅頭の上だけ皮をはいたようでおかしい、だから誰もいそいで其砂を落そうとするが、砂は汗にまみれて意地悪い存在となる。

//乳房を突く//それは実際土俵上の技としては容易な技ではない。第一女性は胸を狙われると、腋をしめる本能がある。これは大変尊いことで、一般護身の上に於ても必要だし相撲の上での脇の甘いのは禁物である。ソレは右や左を差されるからで、下手をすれば双差しになる。なれば門でしほる手もあるが、

どちらにしても差されて徳にはならない。突いて来る相手は、四指を揃え拇指をはなして突いて来る。〃突き〃の効果は、肩口と乳首の中間を、やや肩口に近く突くにあるのだが、何故か素人の娘は(メトマーズも同様)乳房を狙うようである。玄人の女力士(興業女相撲団の)は日々の商売である相撲を、楽に安全に取ろうとするから、教え込まれた通りに肩口を突くが、メトマーズは敵愾心が強いとでもいうのか、手先が下って乳房を突きたがる。突かれるのはその娘の未熟稽古不足にあるのだから、我々は何もいわないで見ている。受身の方も「ハネ上げ」や「つき上げ」の手で防ぐから、咽喉や水月を狙わない限り黙認である。

赤ん坊が乳房を掴んでいるのを見ると、いろいろな掴み方をする。上から握るかと思うと下から拘うように掴む、押込むかと思えば、左



右上下に引張る、乳首をつまみ出す手もあれ

れ寄出される。だから相手の氣勢をそぐため

ば、小山の底へ押込むこともする。玄人の女力士は、土俵で若い娘力士をからかって、乳房を平手で横なぐりしたり、擡上げることもするが、何にしても肉シヤツや肉襦袢をきているので乳首の存在も明確でなく、相互的に挑発をしない。下手に掴むと張手を喰ったり、シヤツのボタンが飛んだり襦袢の紐が切れる。その点メトマーズはブラジャーすらつけていない、美の女神だからだ。襦袢以外に余分のものをつけていて、どうして人体美の極致を発揮出来ようぞである。「乳房ほど挑戦的なものはありませんわ」とは〃矢筈山順子〃の告白である。しかし土俵で相手の乳房を掴むには、充分に組んで襦袢をひいていなければ出来ない。そんな余技に執着していようものなら、相手の憤激をかってたちまち土俵の砂へ投出されるか、シヤニムニ突出さ

に、相手をいやがらせたり、恐怖を与えるためにかくしようとすれば、掴んだ瞬間ただちに相手に苦痛を感じしめる程度のものでなくてはならない。それには掴むと同時にいずれかの方へ捻らねばダメである。とはいっても相手が経産婦のような鐘形の乳房の持主ならば、その通りに運ぶだろうが、娘の生気にみちた乳房はソナナに楽に掴めるものではないたとえ指がかゝっても、脂汗と肉の弾力によって、相手が一ゆりすれば七分は指が外れる相手が自分のフトコロへもぐり込んで足取りに出て、自分が相手の背から抱込み、下へもぐった相手が自分の両足を掴んでいる。自分は自分の体重と体力で押しつぶして、膝をつかせて勝とうとするような場合なら、上から両手を相手の胸へも腰へも自由に廻せるのでこの際に取りとうすれば、相手の双の乳房を思う存分に同時に掴むことが出来る。又土俵で飛違えて、相手の背後に廻って羽交絞に抱付いた場合も、〃乳取〃に出ようとすれば、組付いた自分の手をゆるめて、交叉のまゝ相手の双の乳房を同時に掴むことが可能となる。しかしこれは前者の場合ほど安定しないから危険である。それ以外では掴んでも片方のいずれかである。ところが此処に女性心理

として面白い面がある。というのは相手の女が乳取りに出ると、一旦はその手を防ぐが、相手が完全に掴んで来ると、その手を切る工夫をするより先に、我もと同じ戦法に出て、相手の乳房を攻めることである。ソコに乳房の〃相取〃が生ずるのである。乳房の相取りは、同性愛に根ざした性的遊戯だとする見方もあるが、ソレはうがったような考察で事実あたっていない、そんな不真面目なナマやさしいものではない、土俵で相手に性的興奮を誘発させた位で、相手の闘志闘魂がおとろえるものではない、遊び半分の私的な馴合い相撲ならソナ遊びや手もあるうが、メトマーズとして一旦土俵へ上った以上は、其処に桃色の風は吹かない、要は相手を怒らして焦らせ防禦に破綻をつくらせるためである。又反対に苦痛と恐怖を与えて、闘志や敢闘精神をくじく作戦でもある。爪は如何に円く切ってあっても、爪は肉ではない、やわらかい乳房の肌へは、鋭い痛みをあたえるし、指は乳首を泣かしめるものだ。

〃乳取〃に於けるメトマーズの感慨は「いゝですわ、時にまた掴合ってキイ／＼いゝ合／＼の、」である。其処にマソとサデイの交錯がほのかに見られる、いゝかえれば相手

の乳房を掴んで、我がものにした際の勝利感優越感の快感と、もう一つは反対に掴まれた際のマソ的な快感とがある訳で、それは決して病的な変態の線を越えるものではなく、人間として、若い女性としてはピチ／＼した健康に恵まれたエネルギーの溢流を、スポーツ女性として伸び／＼と取る〃相撲〃という甘美な行動の上に与えられた、精力最善活用無理にかなった生活の一つの〃場〃なのである。机上に置かれたリンゴも美しいが、美しい指に持たれたソレはまた一段と美しいものだ、反物として巻いて置かれた生地もいゝが、ヌードのマネキン人形にまきつかせたり大波小波のシワを与えて、何かにかけた生地に一層の美しさがある。そのように、豊に何の迫害もなくフツクラと盛上った半球形の乳房もいゝが、敵手の掌中におちいり、その指によってムゴクも掴まれ、ソコに自然に見られぬ曲線美をたゝえて苦闘するソレに層一層の動的美の光がある。勿論いつでも全部がソウだとはいえないが、四股平はその場に〃闘う女神〃勝利の女神〃ビクトリーの姿があるのではあるまいかと思うのだ。(以下次号)

幽 囚 十 ケ 月

これは冷徹な自己批判の眼を持つて、極めてリアルに描かれた受刑者の記録である。誇張もなく歪曲もなく担々として述べてゆく行文は、高く評価される何物かを保持しているに違いない。



春 田 一 郎
坪 内 篠・画

第 一 夜

食事が済んで暫く休憩していると、「二舎階下点検」と云う号令がかゝった。房の中の受刑者は扉を前にして席次順に正座する。廊下を遠くの方から、二三人の足音と、号令と、受刑者の番号を称える声と、扉を開け閉めする音とが聞えて、段々近付いてくる。やがて、七房の扉が開いた。看守の一人が先行して扉を開き、部長看守が点検簿を持って之に続き、最後に、も一人の看守が点検が済むと扉を閉めて行く。この夕方の点検に依って、受刑者は昼間の勤務者から夜間の勤務者に引継がれ、朝の点検に依って、夜間の勤務者から昼間の勤務者に引継がれるのである。夜間は受刑者が全部房に居ると云うのが建前で、夕方の点検が済んで、扉が閉じられると、翌朝受持ちの看守に引継がれるまでは、夜勤部長以外は扉を開くことが出来ないのだ。

ある。

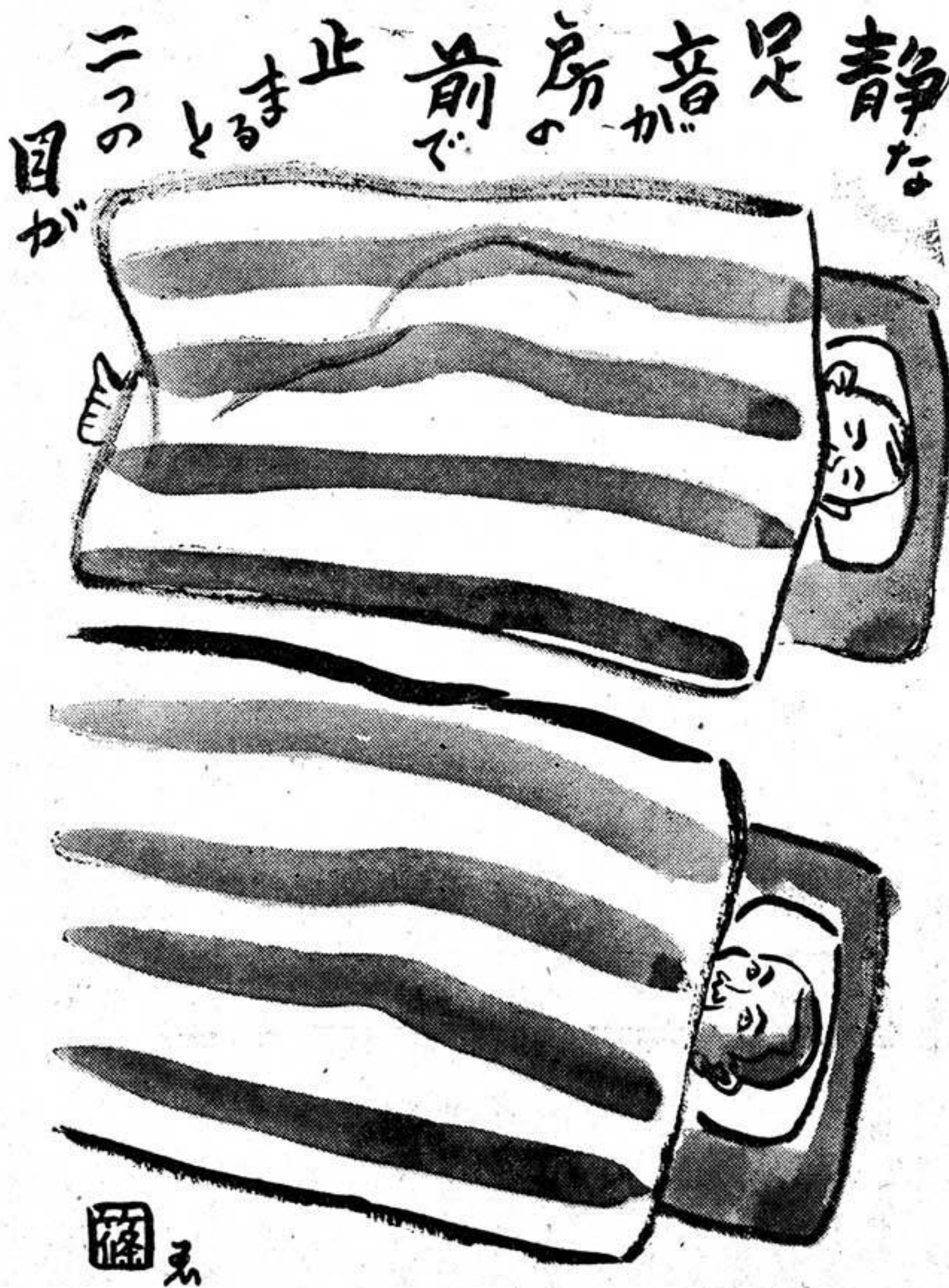
房の扉が先行の看守に依って開かれると、正座して並んでいる受刑者達は両手をついて頭を下げる。看守は「七房、十名」と部長に報告し、「点検、番号」と受刑者に号令をかける。之に依って、受刑者は上席の者から順次、自分の「称呼番号」を云って頭を上げる。



部長は番号を聞いて点検簿と照合する。之が終ると、一番うしろから来る看守がバタリと扉を閉じ、ガチャリと本錠をかける。扉の外側に付いているハンドルを持って扉を閉めると内部から開けることが出来ないが、外部からはハンドルを廻して簡単に開けることが出来る。之を仮錠と云い昼間は度々開ける必要があるので普通の仮錠のまゝにして置く。扉に沿う柱に、鋼鉄製の電車のコントローラーの様なものがぶら下っている。之を扉の方へ上げると、鍵がなくては開かなくなる、之が本錠である。本錠をかける時はガチャリと実に重々しい冷たい音がする。この本錠のガチャリと云う音程、受刑者の神経をビリリと刺戟するものはない。昼間は色々のことに取紛れて、監獄にいと云う。

意識は薄らいでいるのであるが、夕闇の迫る頃、このガチャリと云う音を聞くと、途端に幽囚意識が犇々と身に迫って来るものである。自分の房の点検が済んでも、正座を解くことは許されず、「二舎階下点検終了」の号令がかゝって始めて、くつろぐことが許され、それから七時の就寝（ジュシン）までの約二時間が一日の中での自由時間である。この二時間を受刑者達は読書をしたり、受信を読んだり、音信を書いたり、将棋をしたり、或は各自の趣味に従って、所内新聞である「あけぼの」誌の原稿を書いたり、詩歌俳句を作ったりして過すのである。「獄舎」と云う観念「鉄窓に呻吟する」と云う言葉から受ける連想よりして、「あゝ、世は夢か幻か獄舎に独り思い寝の」と云う歌のことも悲惨な哀愁を想像し、普通の人々は、哀れな囚衣をまとい、鉄鎖に繋がれ、襟には番号札をつけられた囚人達が、昼は看守の鞭に追われて血のにじむ様な苦役に従い、臭い飯を食い、夜は骨のずい迄凍る様な監房に鉄窓の月をながめて呻吟すると云う様な生活を考えているかも知れないが、現実の刑務所と云うものは決してこの様なものではない。成程、刑務所は規則づくめの世界であり、錠と鍵の世界で

あり、食べたい時に食べられる訳でもなく、寝たい時寝られる訳でもなく、許されずして針一本系一筋を持っていてさえ、反則として懲罰に附せられると云う様な、全く自由を奪われた世界ではあるが、而も其の中に尚、笑いもあれば愉しみもあり、又ムーモアもあるのである。受刑者は概して朗らかである。少くとも朗らかに見える。刑務所には浮世の自由はない代りに、浮世の荒波も押寄せることがない。隔離された世界は同時に温室の世界である。衣食住に心配のない世界である。周囲は全部自分と同じ境遇に置かれた受刑者のみであり（監督を行う職員は所長から看守に至るまで、すべて受刑者に対して温い心を持った、少くとも受刑者と云う者に理解を持った受刑者の味方ばかりである。）刑務所に居る限りは世の白眼に反撥する必要がなく、且つ受刑者には来るべき所に來たと云う諦観がある。食べたい時に食べられなくとも、食物が与えられた時が即ち自分の食べたい時であり、寝たい時に寝られなくとも、就寝の号令が掛った時を以て自分の寝たい時であると観ずれば食べたい寝たいの煩悩も消失する。あ



らゆる扉は錠があると思えば苦しいが、自分はその扉を通過する必要がないのだと考えれば、監房も亦、座敷に異ならない。受刑者は普通人に比較して我執が強いこと社会規範に対する適応性は乏しいこと、嘘言

に対する良心的反応の薄いことなどが特色であるが、同時に彼等は意思が弱く、お人好しであり、骨のずいからの悪人は先ずないと言っても過言ではない。私の同房の人達も私が入房した当初は力み

返って大変な勢であったが、之は所謂、ハツタリであって、暫く話をしていの中に、虚勢張る必要のないことが分ると、「おやじ」が「おやじさん」になり「おやじさん」が「春田さん」に変わって行った。彼等は正体の分らぬ物に先ず虚勢を張って見るのだ。云い換えれば、彼等は正直であると同時に、ひがんでいじけているのだ。敵意に対する反撥心は常人では考えられぬ程激しい代りに、善意に対しては猜疑する所なく善意を酬いるものである。成程、犯罪を犯した彼等は悪いに違いない。乍併、犯罪を犯す迄に、彼等が如何に社会から追い詰められ、社会から冷遇されたかを考えれば、彼等は悪い人間であると同時に不幸な人間であるとも云えるのである。稍々極言になるかも知れないが、彼等は社会に所謂被害者を作ったと同時に、彼等自身も一種の被害者なのである。

七房の人々も、結局は気の弱い人々であった。一番上席の権君は前年九月に入所した韓国人であった。権君は入所して、型通り二舎の新入時代を経て、三級に進み、営繕係へ編入されたのであるが、反則を二回も犯したため、四級に下げられ、再び二舎に戻されたものである、従って、他の者にくらべて問題な

く古く、皆は刑務所の風習を物珍らしそうに権君から教わるのであった。この権君は私が入ってから、私についてローマ字を習い、それから二ヶ月、私が訓練工場に行く頃にはすっかりローマ字を覚えて、自由に読み書きが出来る様になっていた程の熱心さであった。ローマ字の勉強に用いたノートは受刑者に支給されるちり紙を用い、鉛筆は何処からか工面して、やっと手に入れた代物であった。ちり紙は一日三枚の割で支給され、受刑生活に於ては相当な貴重品で心掛けのよい受刑者には之を多量に貯め込んでいるのもあった。崔君はスリの常習犯だが、愛嬌のある日本語を操る韓国人であった。島ヶ原君は静岡県のヤ

ーさん（香具師）で、津へ来て商売をしている中に窃盗をやったのだそうである。この房で唯一人の老人、太田さんは農業会へ勤めていて間違を起したのだそうであるが、温厚そのものの老人であった。二、三年前、執行停止で出所し、その残刑を勤めているのであった。

同房の人々は私の顔色が黒くて、煙草臭いと云う。受刑者、特に二舎の受刑者達は一日一時間の運動以外、太陽を浴びることがないので、みな青白い顔色をして居り、社会から

直入して来た者の顔色がとても黒く見えるらしいのである。煙草は刑務所に於ては絶対の禁制品である。と同時に、之程誘惑の強いものはないのである。煙草のすいがらを拾って吸ったのが見付かっただけでも、懲罰となり仮釈放は六ヶ月延びると云われる程の禁制品である。煙草から遠ざけられ、而も煙草に対する渴望が至大なだけに、受刑者の煙草の匂に対する嗅覚の鋭さは一寸常人には想像がつかぬ位である。私はその日、入所する直前まで喫煙していたのであるから、同房の人々が私を煙草臭いと云ったのは尤もである。

刑務所、特に二舎の生活は時計のない生活である。八角に時計はあるが、房からは見えない。空の白むことに依って暁を知り、「起床」の号令で六時を知り、そして「就寝」の号令で僅かに七時を知るに過ぎない。従って時計を見て正確な時間を知ることが二舎に長く居ると、とても珍らしく感じるのである。私達は「就寝」の号令のかゝる迄の二時間を読書や音信や雑談で過した。刑務所備付の書物は一ヶ月一冊の割合で貸与せられるのであるが、三級以下に貸与せられるのは殆ど宗教書や修養書で、「宮本武蔵」や「太閤記」のような小説は一、二級になって始めて貸して

貰えるのである。差入はリーダー・ス・ダイジエストやスポーツ関係の雑誌に限って一ヶ月二冊迄許される。

房の中で雑談することは公には勿論許されていない。併し、房の外へ聞えない程度でなら黙認の形になっている。但し、口笛はきつい法度である。

やがて七時になったのであろう。「就寝」の号令がかゝつた。房の者は皆立上って、床に薄べりを敷き、積んである布団を二列に敷いた。私も示された洗面台の傍に夜具をしいて、枕にタオルを被せ、ジャンパーだけを脱いで寝床にもぐり込んだ。春の宵の七時、窓の外はまだほの明るい。中にはズボンに寝押しをしている者もある。どうせ五十歩百歩の囚衣なのに。せめてもズボンに筋をつけて所謂「マブイ」（よいと云う意味）姿で、他人にハツタリをきかせ度いのである。チンピラ気質とでも云うか、彼等がズボンに筋を付け苦労して一寸でもよいジャンパーを手に入れようとするのは彼等が几帳面な故でなく、はかない虚栄に依るのである。「まぶい風さい」をしていることが、顔のよくなる一つの重要な要素なのである。

夜具を被って、同房の人々は雑談をしてい

る。私は上掛けにあごを埋め乍ら、じっと高い窓を見詰めていた。獄舎での第一夜。昨日までのことが、いや、妻と別れて刑務所へ入った数時間前迄のことが、何だか長い年月を隔てた遠い昔のことの様な気がする。一種のヴェーカントな気持。感傷でもなく、悲嘆でもない。獄舎の窓を眺め乍ら、こうして寝ているのが、過現未につながる当然の生活の一環の様な気がする。別世界へ入ったと云うような興奮した気持は全然ない。明朝、夜が明ければ、依然、そこは我家であり、妻の朝餉を作る姿が台所に見えるのだと云う気がする。不図、寝返りを打つ。昨夜までは枕許に、スタンドや灰皿や雑誌があったものが、今日は何もない。無暗に煙草がほしくなる。あゝ、こゝは刑務所であつたのだと云う実感が沁々と感じられる。窓の外はとつぷりと暗くなつた。八房と共通の薄暗い電灯がぼんやりと房を照し出している。皆は段々と寝入って行つたらしい。鼾や寝息が聞えて来る。廊下に静かな足音がして房の前で止まると、二つの目が監視口一杯に現れて、じっと房の中を見ている。暫くして、監視口から目が消えると、再び静かな足音が隣の房の方へ遠ざかつて行つた。「八房、八房、誰だ就寝後、本を読ん

でいるのは、早く寝よ」と看守の声がする。うとうとして三十分も経った頃、急に廊下が騒しくなった。棒で扉をガタ／＼叩く音がする。之は「特警」即ち特別警備隊の巡察である。「特警」は云わば、刑務所の中の警察の様なものである。受刑者の反則行為を取締るのが役目で、普通の看守と異なり、ゲートルを巻き、棍棒を腰に下げ、いかめしい腕章をつけている。常置の「特警」があるが、夜間は一般の部長や看守が交替で臨時特警となり、宿直をする。どんな兇悪な受刑者でも、特警は之をひどく恐れるのである。特警が棍棒で扉を叩いて、大きな声で叱責しているのが聞える。そのうち、ガチャンと扉の開く音がした。「早く出て来い」と云う怒声が聞える。誰か反則をやつていて、引ずり出されて、特警本部へ連行されて油を絞られるのであろう。目をさましている限りの受刑者は特警の巡視中、ふとんを深く被って息をこらしている。やがて、特警の嵐も過ぎ去って、二舎は元の静寂に帰った。

朝

何時の間に寝入ってしまったのが、誰かが便所の揚板をガタ／＼させた音に不図、目を

さますと、窓の外はもう白々と夜が明けていた。十人の夜具がざわ／＼と動き初める。私は昨夜教えられた通り、起き上って十ヶのコップとやかんに水を満した。「起床」後は方々の房で一時に洗面の水を使うため水圧の関係から水が出なくなることがあるので、この

様にして洗面の水を用意して置くのである。そのうちに「起床」の号令が掛った。皆は一せいにはね起きた。服を付けると、寝具を積む。二人が／＼で、敷布団はその儘、掛布団はたてに二つ折にして順次に重ねて行く。この様に積むと、布団の高さは殆ど人の背丈程

になる。私ともう一人の新入は床を掃き、扉や壁をふく。その間に上席順に一人ずつ顔を洗って行くのである。私が顔を洗い終って、コップややかんを片付けた頃、「二舎階下点検」の号令が掛った。朝の点検は夕方と略同じであるが、朝は受刑者が各自の称呼番号を云う代りに、普通の「一、二、三」の

田心くの



ことごと

え

一時間と

過す

のである。



番号をとなえるのである。点検が済むと朝食の用意をする。飯台をならべ、菜食器と飯皿とを扉に近い方に積んで置く。朝は味噌汁を桶に入れて、杓で配って歩くので、前以て菜食器を集めることはしない。扉が開いて、飯の車が止り、銘々の前へ四等飯が並ぶ。それに次で雑役が味噌汁を配って歩く。三合入りの菜食器になみなみと注がれ濃くて熱い。だしもよく効いている。味噌汁は人数に応じて、各舎房や工場に配られるのであるが、若干宛余分に来るので、余った分を順番に大抵一日に三、四房ずつ増配が行われる。之を「増汁」(マシジル)と云うのであるが、受刑者、特に二舎の受刑者は之を待つこと甚だ切なるものがあるのである。今日は確実に増汁の当る番だと云

う朝はさっさと「本汁」(ホンシル)(増汁)に対してこう云う)を飲んでしまおうか、コップに取って置くかする。

房の者がお互に飯や菜のやりとりをするとは反則である。併し、「飯上げ」と云って勢力のある受刑者が弱い者の飯やお菜を全部又は一部取上げてしまうこともあるそうである。免に角、受刑者は相当な食事を支給されているのに、絶えず腹を空かしている者であり、単調極まる生活の中に何か変化の起ることを望んでいる者である。飯の賭けなどもこの現れである。数人が組んで、飯の賭けをするのであって、その中の一人は食い役、他は提供役になるのである。例えば、四人が「四等飯四本」と云う賭をすると、三人は自分の飯を夫々食い役に提供する。食い役は自分の分も合せて四個の四等飯を一度に食べるのである。若し完全に四個を食べて終わることが出来た場合は、食い役の勝で、三人の相手方は一食抜いたことになる訳である。若し完全に食えることが出来なかったり、食べた直後、吐いたりすれば、食い役の負けで、食い役は三回飯を抜いて相手方に一個宛返さねばならないのである。この賭は食い役の方が悪いと考えられるのであるが、食い役の志願者

の絶えないのは、眼前に四個の飯を並べてそれを食べると云う魅力は非常に大きいものらしいからである。

私達は朝食を食べ始めた。誰か汁をすゝり乍ら、

「起床、点検、シャリ三本、明けりや満期が近くなる」

と詠嘆調で云った。「朝起きて、朝夕二度の点検を受けて、三度食事をすると一日が経つ。一日が経てば、一日だけ確実に満期が近付くのである」と云う意味のこの言葉は受刑者が好んで口にする言葉であって、受刑者の単調極まる生活、一定の年月が経たなければ何としても自由の身にはなれないことに対する悲しい諦観、そして、ひたすらに釈放を待つやるせない気持が如何にもよく表現されているのである。

一日

朝食が済んで食詰を洗ってしまうと、すぐに「作業始め」の号令が掛った。あん巻で床板こすりを始める訳である。床板こすりは一生懸命に力を入れてやると、三〇分とはどうしても続かない苦しい労働であるし、片手ではよい加減にあん巻の先を動かしている程度で

は、これ亦三十分も続かない退屈な仕事である。「作業」を始めて、三十分程すると「運動準備」の号令が掛った。二舎の受刑者にとって、一日の中一番待ち兼ねる時間である。三百名足らずの二舎の人員を四組に分ち、順次に一時間宛、外へ出し、運動をさせるのである。房の内部は相当清潔に保たれているのであるが、何と云っても十人もの男の体臭が混じ合って、一種異様な臭いがする上に、揚板一枚で蔽っただけの便所が囲いもなく、部屋の隅にあるのだから。その臭気も発散して慣れない中は一寸耐え切れない苦痛を感じるのである。特に雨模様様の湿気の多い日や、副食物にねぎがあった日は一層たまらない臭さになる。この房からたとえ一時間でも解放され、明るい陽光を浴びて大気を呼吸することは気持のよいことであるし、その上、何物にも増してつらい生活の単調さを救うものとして、運動は受刑者に喜ばれるのである。

やがて順番が廻って来て、扉が開くと、私達は草履を持って廊下へ出る。六、七十人程の一群が廊下に整列して、人数の点呼をしてから運動係の部長と二、三人の看守に引率されて外に出る。運動場は当時は一舎と二舎の間の扇形の空地が利用されていた。この中庭

告白と手記と体験

懸賞募集

★賞金★

優秀佳作

作作作

規定

一篇に付き	三千円	若干篇
一篇に付き	二千円	若干篇
一篇に付き	一千円	若干篇

- 一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は定めませんが入選作品は最近号に発表します
- 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

◇告白記の募集◇

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます。
- 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便(百瓦迄八円)にて御願います。

(編集部)

へ出て、十分程軽い体操をした後、自由行動が許される。積んである建築用材に腰を下して雑談する者、上半身を日光の直射にさらす者、みぞのふちに膝をかゝえて坐り込んで黙然としている老囚達、三々伍々思ひ／＼のことで一時間を過すのである。同じ房の者は免も角として、他の房の者と話し合う機会はこの運動時間が唯一のものである。

運動時間が過ぎると、再び整列して二舎に帰り、廊下に整列して人員点呼と検身とが行われるのである。検身と云うのは服装検査をして、許されていない物を持っていないかと云うことを調べるものであって、一級を除いては、刑務所に居る限り検身がつきまとうのである。

検身が終って、房へ帰ると、すぐあん卷の床板こすりである。十時に十分の休憩、中食事に四十分の休憩、午後は三時に再び十分の休憩があって、四時半に罷業となる。全く「起床、点検、シャリ三本、明けりや満期が近くなる」と云う通りの単調極まる生活が眠て

(以下次号)

浣腸遊戯について

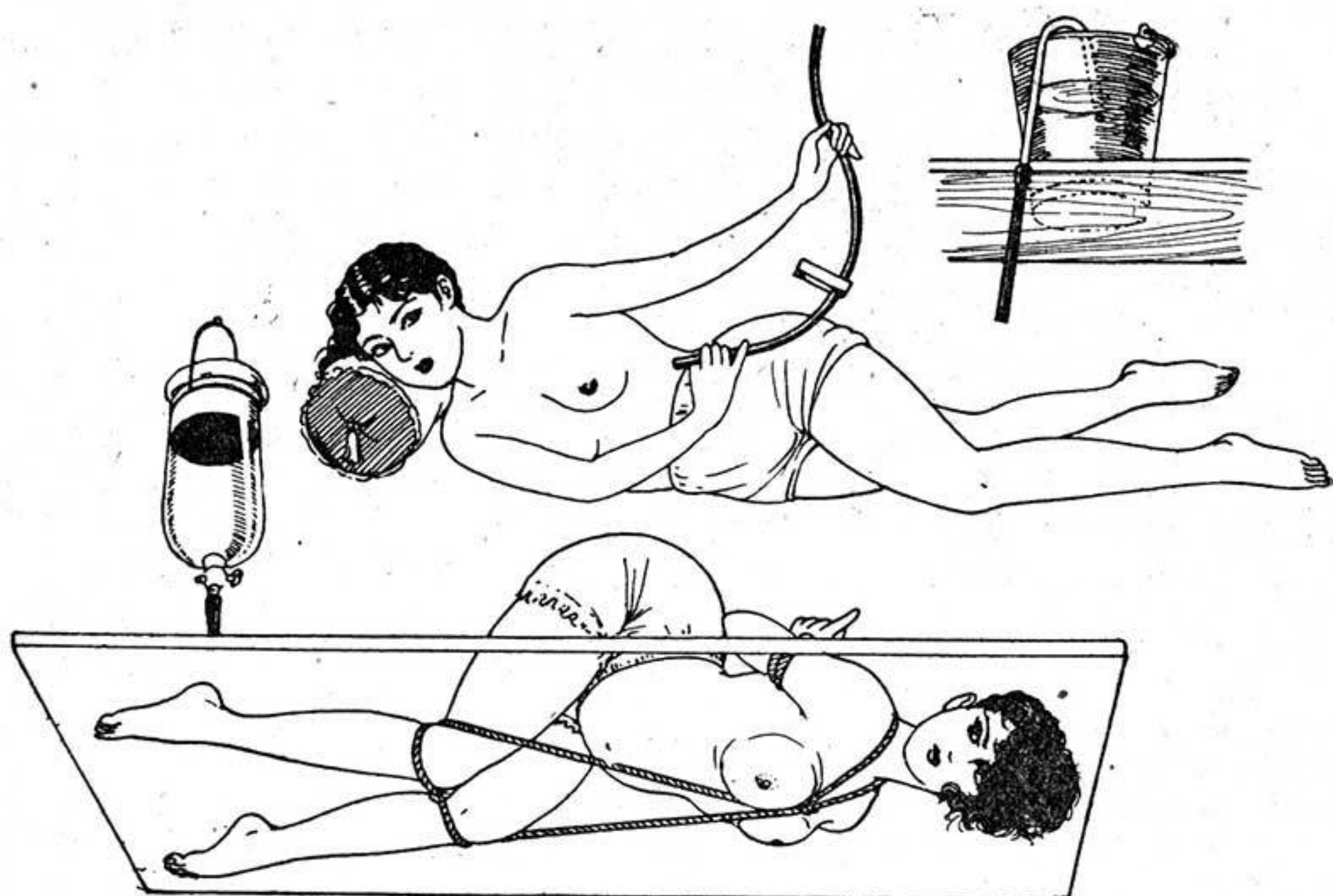
羽村京子

今月は一つ浣腸マニアの皆様のために、私の浣腸の方法をくわしく、誰でもがすぐにも実行出来るように具体的な書き方で書いてみようと思います。私は補助者のない場合に重点をおいて説明して行きますが、それは浣腸が補助者なしでも出来るということを示そうとしたからなのと、補助者のある場合はずっと容易であるからです。私は「浣腸モルモット」として、即ち、私の体が世の浣腸マニアの方々の実験材料として役立つことに喜びを感じています。モルモットですから、思う存分にどん／＼液体を注入してもらいます。どんなに苦しくても我儘を云うことは許されません。私の体の器官が示す悲しい動物の反応は、実験者にとってそれ／＼意味のあるものであるからです。そして、私は私の体がこのように取扱われることに満足しているのですから。

私は、高圧浣腸式に大量に注入されることを好みますから、排泄を促進するような薬液は用いません。ただの水、それも冷たいものは腸壁を刺戟するので、体温よりほんの少しあたたかいめ位のお湯を入れるのです。少しぬるいめ位のお風呂の湯をそのまま使えば丁度適当です。

初めから多量に入れようとしても入りませんし、また我慢も出来ません。先ず、三〇〇—四〇〇CC（約二合）の湯を直腸内に注入し、しばらく我慢してから、腸内の汚ないものを一通り出してしまいます。次に、すぐ続けて八〇〇—一〇〇〇CC（約五合）を入れてみます。多少は我慢をしなければなりませんが、無理に我慢する必要はなく、耐えられなくなったら排出してしまえばよいのです。こうして二、三回繰返すうちに、大腸内的一种異様な臭いのする汚物も出てしまつて、腸壁が刺戟に対して鈍感になつて来るのでしようか、排出を我慢するのが以前より楽になつて、だん／＼多量に入るようになるのです。

沢山入れるためには、水圧を高くすることと、腹圧を低くすることが必要です。腹圧を低くするには、例えば四つん這いになつた時のように、お尻が高くなつて、腸が下にさがるようにすればいいのです。このような姿勢では内側からの圧力が弱くなり、そこが中の方へ吸引せられて凹んでしまいます。この時細い管をさしこんで括約筋を開放すると、外の空気が直腸内に流れこんで、内外の圧力が等しくなり、凹んだのがもとに戻ります。直腸壁が広がって中が広がらんとするの



です。また、殊に経産婦などでは、この姿勢で膈内に空気が流入し易いことはヴァン・デ・ヴェルデも述べていますが、これも同じ原理に基づくもので、とにかく、このような腹圧のない姿勢は浣腸には特に有利です。注入する時だけでなく排出を我慢する時にこの姿勢は随分楽です。

水圧を高くするには、ポンプを用いるか、イルリガートルなら高くすればいいのですがその時、括約筋を努力してきつく締めなければなりません。着衣で、または畳の上でやる時はこぼさないように注意しますがどうしても少しはこぼれ勝ちですから、手拭などを用意しておきます。この点から云ってもお風呂場は適当です。

沢山入れることは苦しい

のを別にすれば危険なことはありません。私などは、妊娠する前の体で最高四二〇〇CC（約二升三合）まで入れた経験があります。勿論、空腹時、（朝）でしたが、この時は流石に息も出来ない位苦しい思いをしました。しかし、不思議なもので、苦しいことが分っています。またすぐ誘惑にかられてしまうのです。注入しはじめると欲が出て、つい沢山入れてしまいますが、普通はせいど二〇〇〇—三〇〇〇CC（二升一合—二升七合）で、うんと多く入れる時は、私たちは「ガロンにしましょう」などと言います。一ガロンは約三八〇〇CCに当り、目方にすれば一貫目を超える分量です。

大腸内に多量に湯を入れたまゝで我慢していられる時間は、そんなに長くありません。苦しいのと、膨れた腹がつゝぱるのとで、姿勢を変えることは楽ではありませんが、立ち上ったり、殊にしゃがんだりすれば、腹圧がかゝって、すぐにもお尻から噴き出して来そうになります。楽な姿勢で、先ず十五分位というところでしょうか。

出る時は、一気にかんりの分量が、まるで水道の栓をねじったみたいに、シャーンと出て行きます。あとはそう一気に行かず、間歇

的に出て行きますが、この最初のシャーツでうんと楽になり、やっと人心地がついた感じでした。十分位もすると大部分出てしまうのであとはお腹をこわした時のように時々出るだけです。三、四時間もすると、それも止って残った湯も大方吸収されてしまうらしく、腸内にガスが発生して来ます。すっかり大掃除をしたあのような、空になってさっぱりした感じ、すっかりはらわたを抜きとられてしまったみたい、くたくたに疲れて、力がちっとも入らないような感じが残ります。その後、一日位このさっぱりした感じが続いて、翌日はさくさくした気持ちのよい排便があります。その次の日位から、だん／＼平常に復して行きますが、普段使わない筋肉を使った痛みや、お尻の穴の熱ぽったい腫れたような（充血した）感覚は、二、三日はとれないかもしれません。しかし、病気ではないのですから差支えることはありません。お尻の方はメンソレタムを何回も中の方まで充分に塗りこんでおけば、かなり效目があるようです。いつの場合にも乱暴に扱ってお尻に傷をこしらえないように注意します。

最後に、一つ二つシナリオ式に書いてみましょう。読者の皆様は、どうか料理の講座で

もお聞きになるつもりでお読み下さいませ。では、いよいよ羽村京子の「浣腸料理」を始めることになりました。

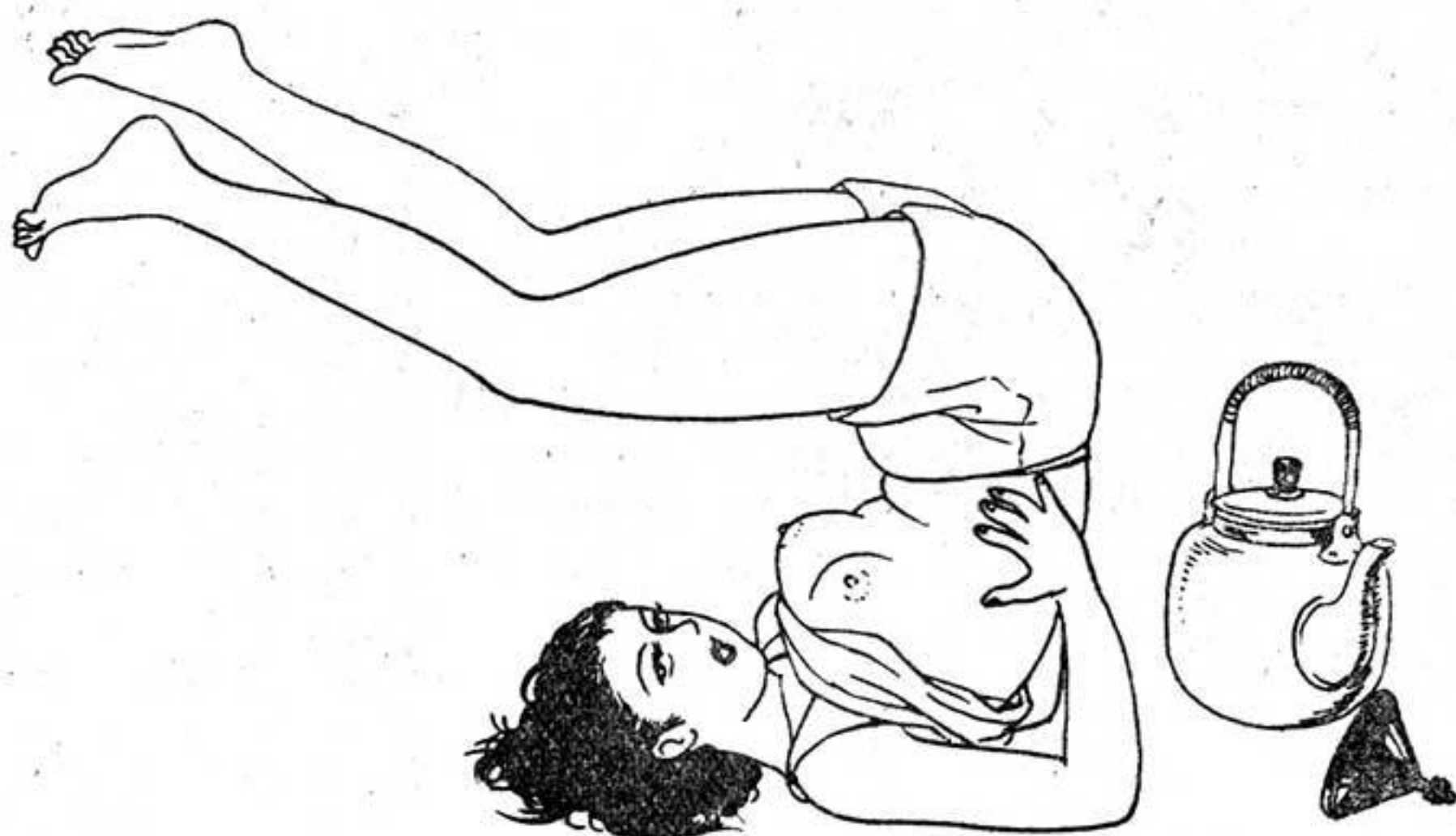
A、ピーチ・スタッフィング（桃の詰物）

先ず、五〇〇CC位の容量のイルリガートル。ゴム管は長い程よく、途中で挟んでとめる器具（洗濯バサミでも結構です）、ゴム管が抜けないように止める絆創膏、それに大量のお湯を用意します。イルリガートルの代りにバケツでもよく、その時は、ゴム管に湯を一杯にしてから、その一端をバケツの湯の中に浸けておきます。イルリガートルまたはバケツを高く吊し（バケツは棚の上にも置けますが）左脇腹を下にして、やや腹面が下を向くように横たわり、頭には枕をして（枕をしないと右手がお尻にとどきにくい）右手でゴム管を挟んでいる器具を弛めると、腸内のガスがポコポコと管を上って行きますが、間もなく生湯かい湯が入って来ます。バケツの場合は、サイフォンの原理で、一旦水面より高く昇ってから降りて来るので、ガスが管に入ると湯が下りて来ませんから、時々なおさなければならず厄介ですが、その代り、イルリガートルと違って、五〇〇CC毎に立って注ぎ入れなくてもよいので助かります。補助



者のない場合は、どうしても途中で立つことが多く、従って長く持ちこたえられないのは止むを得ません。二、三回湯を替えて腸内のものが出てしまったら、いよいよゴム管を絆創膏で止め、挟んでいる器具も外してしまっ

両膝と両肘を床についてお尻を高くし、括約筋が弛まぬように注意しながら、お腹の力を抜いていくらでも入るに任せます。この姿勢は楽な姿勢なので我慢し易く、催して来た時



は逆にうんとお腹に力を入れて逆流させてみたりし乍ら、気ながに入れれば誰でも二―三リットルは入れることが出来る筈です。

縛られるのがいゝ方は（勿論、補助者が要りますが）後手に縛られて胸を床につけ、膝を肩につなぎ、両膝もつなぎ合せて紐をぴんと張れば、お尻を高くして突っぷした姿勢になりますから、この姿勢のまま浣腸を受ければよいのです。

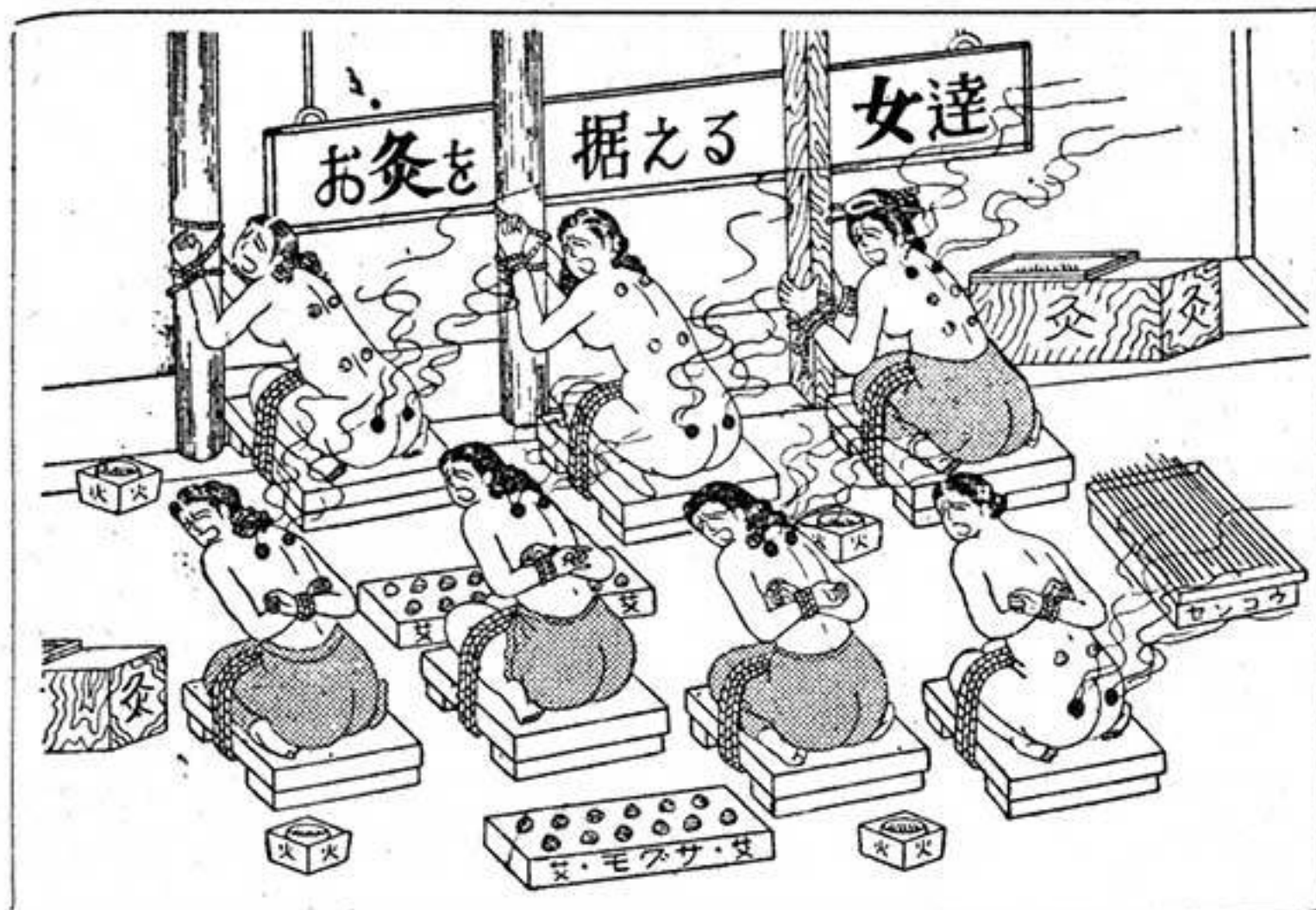
B、ロブスター・ソーセージ（蝦の腸詰）

これは漏斗じょうごを用いる方法です。漏斗といってもガラス製、金属製等いろいろありますが大きい目のもので、傷をつけないもの。自然に滑り出るのを防ぐため、口の先に輪ゴムを捲きつけます。それから、湯がこぼれないようにするためにビール瓶数本（補助者のある時はヤカンでよい）。高さ一尺位の机を柱又は壁から一尺あまり離して置き、その間に入って仰向けに寝て、脚をうんと頭の方に折り返しながら体の向を変え、背中を柱に寄りかけ、足を机の上にのせます。股を開くと頭の上の方の、丁度見えるところにお尻が来ます。左手で、湯の詰ったビール瓶の口を漏斗の縁に当てがって支え、右手で瓶の底をおし上げて傾けます。漏斗に注がれた湯は、中の空気

と入れ替りながら、クーツ、クーツと吸いこまれて来ます。

どん／＼注いでいくうちに吸い込みがだんだん悪くなって来ます。二、三回湯を替えて根気よく入れますと、ビール瓶三本分位はわけなく入ってしましますが、姿勢も多少無理なので、補助者なしでは骨が折れ、せいぜい一〇〇〇―二〇〇〇CC（約六合―一升一合）ビール瓶で二―三本）位のところが手頃だろうと思います。

補助者のある場合は、全然柱や机を使わずに、ただ肘を床に立てて自分の手で腰骨を支え、ちやうど美容体操のような恰好で、腰から先は力を抜きますと、両脚が宙ぶらりんで頭の上に垂れて来ます。補助者はその背中の方にひざまずいて漏斗の浣腸をします。又、縛りたい時は、椅子を後に倒して、その椅子の前脚に両足を一本ずつ縛りつけ、その上に補助者がまたがって浣腸するのです。勿論両手は後手に縛ります。Aの姿勢が楽なのに對して、Bの姿勢はかなり苦しいのですが、その代り、浣腸の動作を下から自分で眺められる点が魅力です。尤も、鏡を用いなければいろいろ見られますが、自分でする時には左右を間違えてよく失敗しますから御注意下さいま



せ。

モルモットの報告はこれで終りです。やはりモルモットはモルモットですから、何時かは解剖されてしまいます。私は、浣腸マニアの皆様がぐるっと取り囲んで見ていらっしゃ

る中で、ぐったりと解剖台の上に仰向いて横たわり、腹を割かれて腸を引きずり出され、皆様が手に手に私の腸をとり上げて、裏をかえしたり表をかえしたりしながら吟味していらっしゃる。そのような私の姿を想像して見

お灸を据える女達（絵の解説）

彼女達は、治療の為に熱い／＼お灸を我慢して据えております。でも、その辛い熱さの中にも、熱刺激を悦楽する被虐快感に、どの女達も酔っているのです。

「あちちちちちちち」と悲鳴を上げる婀娜な年増のお姐さんや、泣くにも泣けぬ泣きベソの可憐な娘さん。

この光景は実に何んとも言えない、極めて魅惑的な悩殺させる美しさでありましょう。女達がお灸を据えられている時、婦人の魅力は最大限に発揮されるものです。

就寝前の灸療（絵の解説）

就寝前の五分間を灸療に費している婦人は少くありません。灸は素人療法の随一のものであり、日本女性は、忍耐の婦徳を誇りともしていますし、それに、熱さ厭さも最初のう

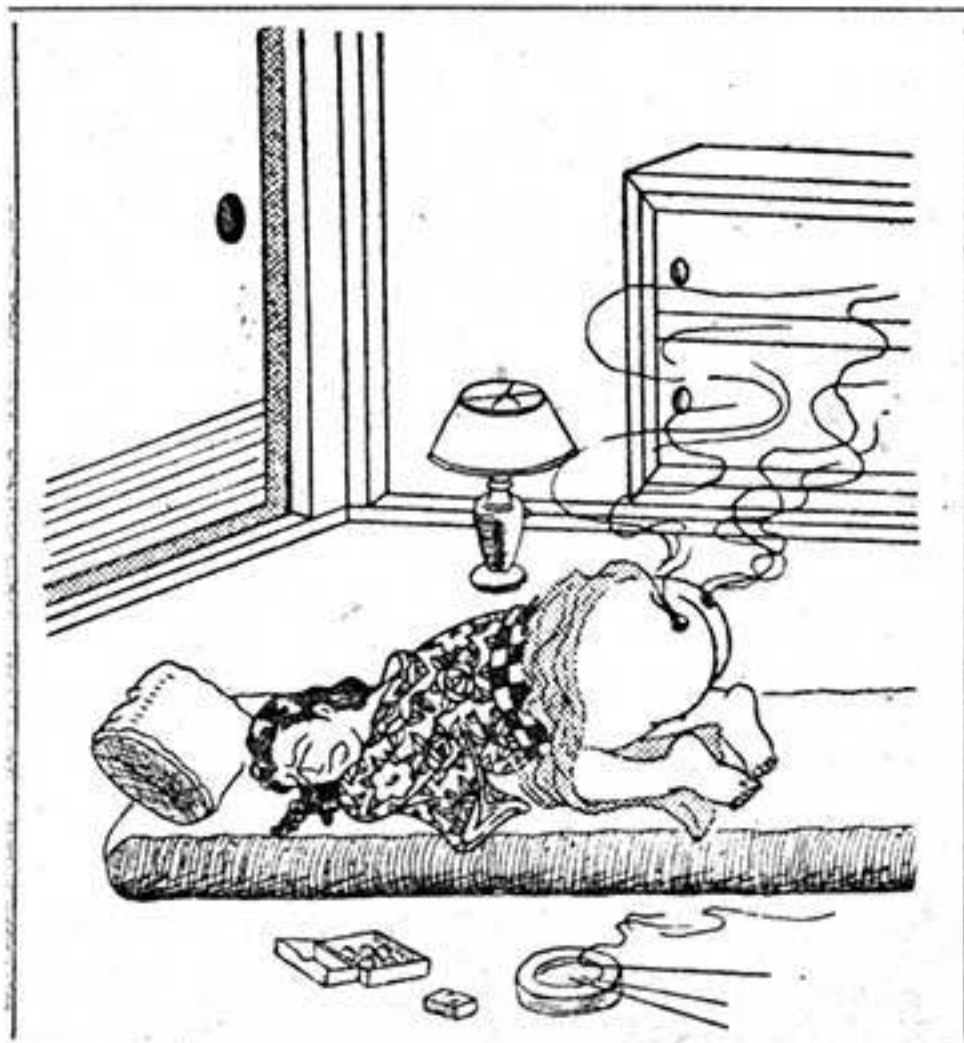
たりいたします。体の中で散々おもちゃにされていた腸が、白日の下に曝され、拡げられて弄ばれるという、妙に楽しい幻想です。

（畔亭数久・画）

ちで、マゾヒズム的な喜悅となって耽溺できるからでしょう。

この絵の女性も、持病のこしけを治す為に灸を据えているのです。若い女性の方も大いに灸を試みて下さい。

（岩瀬祥一・画）





私が中学校に入学してからすぐの頃で、入学試験の無理がたゝつて病氣になり、約半月程学校を休んだ時の事です。病氣といつても胃腸病ですから、気分の良い時はブラ／＼していました。

或る日、何気なく一軒おいて隣りの家に遊びに行きました。「今日は」と、心安いのですぐ座敷に上つて行くと、その家のおばさんが縁側で女中に背中へお灸をすえてもらつて居るのです。その主人というのは汽船の船長で、たまにしか帰つて来ないのでした。

「あら、徹ちゃん、いやあネ」

と言つて、続けてすえさせています。時々

灸マニア回想

保田 徹

顔をしかめて、

「アツツ……、駄目ね、しつかりすえてくれなくちゃあ……」

と、女中を叱りつけている姿を見て、私は何という理由もわからないまゝ、身体中がぞく／＼するような氣持になりました。その後、その時の悦樂が忘れられず、遂に自分の体にもすえて楽しむ様になりました。この氣持は灸マニアの人でなければ判つていたゞけないと思います。

白い背中に黒い灸の跡、そして紫色の煙、苦痛に歪む女の顔、思わずその場に座してすえてもらつているのを一心に眺めて居りま

した。やがてすえ終つて着物を着たおばさんが、

「徹ちゃんは、胃腸が悪いのですってね」

「もう、大分いゝんです」

「胃腸病ならお灸をすえなさい、とても後が良い氣持ですよ、おばさんがお母さんに話をしてあげますから……」

おばさんはお灸が胃腸によく効くということを説明し、是非とすゝめるので、自分でもすえてもらつたらどんな氣持だろうと、好奇心も湧いて来て、

「でも、熱いでしよう」と聞くと、

「熱いのは最初の三火位いよ、それに丁度い

「わ、三日したらこの子も脚気で、すえに行くから一緒に連れて行つてあげるわ」

と、一人で決めてしまいました。私も女中の時ちやんと一緒にならすえて貰っているのが見れると思つたので、

「じやあ、お願いします。でも、おばさん、お母さんに言わなくてもいいよ」

と口止めしました。もし家で弟に知れて、兄ちゃん悪い事をしたからお灸をすえられたとからかわれるのが嫌で、家には黙つて行く事に決めました。

当日、家には医者に行くと言つて、灸院に三人で出かけました。待合室に入ると二人の女の人が待つて居りました。しばらく待つて居ると順番が来て、おばさんは「徹ちやんも一緒に来なさい」と言うので、私は内心待つていたとばかり、女中の時ちやんの後からついて治療室に入りました。

その室には寝台が二つ並んで置いてあり、壁には灸点の位置を示した人体図がはつてありました。寝台の一つでは若い婦人が下腹部に、白衣の若い女の助手にすえてもらつて居り、両手を顔の上で組んで、時々「アツツ……」と言う声をもらします。すると助手がすぐにそのところを指で押して居ました。それ

を見た時、私は言うに言われぬ興奮におそわれ、その処置に困つてしまいました。

おばさんはよくなつたお礼を先生に述べ、時ちやんと私を見ながら、

「うちの女中とお隣りの子供さんですが、うちの子は脚気で、この坊ちやんは胃腸が悪いのです。どうぞよろしくお願いします」

先生に頼むと、おばさんは治療室から出て行きました。

その先生というのは六十才位の白髪の老人でした。

時ちやんは着物を脱いでそばの乱れ籠に入ると、先生の前の丸椅子に腰を下しました。名前、年令、病気の容態をきくつゝ先生は指で胸などを押していました、そのうちくると先生に背を向けましたので、時ちやんの半裸身がいやでも私の視線に入るのです。初めて見る若い女の裸身に私は思わず赤面してうつむいてしまいました。時ちや

深画



んも真赤になり顔を上ることも出来ずにじつとうつむいております。それでも、私はそつと盗視しますと胸のところに三ヶ所、手で隠されておりますのではつきり見えませんが、

腰のあたりに印をつけられているようでした。背中と膝のところに印をつけてもらい寝台の方に行きました。

いよいよ私の番です。みぞおちのところに四ヶ所、お臍の両側に二つ、その下に三ヶ所と印をつけられました。そして同じように三里と背中六ヶ所、腰に三ヶ所（これは後で家に帰って風呂場の鏡で見たのです）突然、時ちやんの呻き声があるので見ると、うつ伏せとなり、枕をしっかりとかみえ歯を喰いしぼっているのです。そのふくらと丸味を帯びた腰からは薄紫色の煙が上つていきます。

先生に促されて、私も寝台にうつ伏しました。心の中ではあの若い女の助手にすえてもらいたいのだと思いましたが、助手の女の人時は時ちやんをすえ、私は先生にすえられました。何かしら背中がポカ／＼と暖くなつた様に思うと、急に熱くなり、ジリッとして皮膚の焼ける音までするのです。思わず「アツ…」と枕にしがみつくと、「最初は熱いですが、じきにいい気持ちになりますよ」と先生は、次から次へと火を点じて行くのです。何分初めてのことですし、お臍の附近にすえられた時は、あまり熱いので身をよじったら、先生に押えつけられてしまいました。然し、全部す

え終った時は体中がカッ／＼して何とも言えないよい気持ちでした。

そしてその後は、時ちやんと一緒におばさんにすえてもらいましたが、学校の身体検査の時にはさすがに恥しく、学友達から灸跡を指でつまかれたりした事は、今もって忘れることの出来ない恥しさでした。然し、その後灸につかれた様になつてからは、恥しいとも何んとも思わなくなりました。

それからしばらく経った或る日のこと、又胃が痛み出して来たので、お灸をすえてもらえばよくなると思い、おばさんの家に行きますと生憎、おばさんは親類の法事とかで出掛けて留守だったので、時ちやんに頼んで胸とお腹にすえてもらいました。その頃はお灸も大分馴れて、大して熱く感じぬようになっていましたので、黙ってすえてもらっていると、「徹ちやん、大分強くなって来たのね。私はまだ熱いわ」と、時ちやんが側で眺めながら言います。

「熱くない時は身体が悪いんだって、おばさんが言ってたよ」
「そうかしら」

書き忘れましたが、時ちやんは本名吉田時江と言つて、その当時十八才で静岡県の生れ

だと記憶しています。

私のをすえ終ると、

「私もすえてもらうわ、こゝ三日ばかり忙しくてすえないのよ」と言うので私は喜んで、「うん、すえてやるよ」と答えると、

「じゃ、こっちですえて、人が来るといやだから」と言つて、私を女中部屋に連れて行きました。時々、私の目前ですえてもらうので、恥しがらずに着物を脱ぐとズロース一枚の裸体となり、押入から布団を出して敷くとその上にうつ伏せになりました。そして両手を頭の上で組むと、

「徹ちやん、私とても熱つがりだから手を縛って頂戴」

と、下紐を出すので、私は恐る／＼紐をとって、彼女の両手、両足を縛ると、腰の上に艾をのせて火を点じて行きました。

「アツ…」と、呻き声が時ちやんの口から洩れると、無理矢理に押えつけて、まるで彼女を責めて居るような錯覚におそわれて全身が電気にかゝったようで、遂には時ちやんが「アツ…ねえ、もうかんにんして」

と、言い出した時は、私の興奮も最高潮に達しました。

こういう風にして、私は灸マニアになつて

女装マニアの告白！

変装写真マニア

鈴木二三夫

今まで誰にも話した事ありませんし、親

下さい。

兄弟も知らなかったはずかしい私の性癖ですが他ならない貴方にだけは一度折があったら聞いて頂き度いと思っていました。どうかあまり変なので、おいやにならないで、お聞き

あたしも今では長唄の師匠をしていて、普段から、ずっと和服姿をしています。元からこんな芸人稼業じやありませんでした。生家はむかしは一寸した財産もあり、別にこれと

しまつたのです。それから時ちゃんとの間にはいろ／＼な事がありました。約半年位すると、お嫁に行くとのことで田舎に帰つてしまいました。その後、思い出しては淋しさのあまり、時々自分で夜が更けてから部屋で足を縛っては腹部に灸をすえて楽しんで居りました。

又、灸に関する本や、たまには灸をすえられている写真等が載っていると切り抜いて蒐集し、それを眺めては楽しんでいました。近郊の名灸と言われるところに行つてすえてもらったりしました。多くの人中ですえられるのも又面白いものです。

復員後は久しく忘れて居りましたが、貴誌

を拝読致してより、又昔が思い出されて灸マニアの心が燃え立って来ました。

春と秋になりますと、横浜のヶ峯の灸々という、艾の大きさは中指の頭位のものをすえに行きます。その為、背中、腰、胸、腹は恥しい位の多くの跡が残って居ります。

(小田 潔・画)

云つて決まった職業を持っていませんでしたが、持家の家賃等の上りで其の日其の日の暮しに事欠くような事はありませんでした。あたしは幼い頃、父母に死に別れ祖父母の手一つで甘やかせられながら育ってききましたが、その頃から内気で女性的な子供だったらしくよその子供の様に外で飛び廻ったりせず、いつも家でおはじきやまゝごと遊びをして、

「この子は女の子が間違つて出て来たんだらう」とか「女の子だったら年頃になると、お嫁の口が降る程来るだらう」と云うのがあたしの器量自慢と共に祖母の口ぐせになっていました。

そう言われるのが又、幼いあたしにとって何だか嬉しく感じ、ほんとうに自分が女の化身である様な気がして、ますます女性化してゆきました。

或る日、何かの用事

で祖父母共外出して、

あたしはいつもの通り

女中のしげやを相手に

おはじきやまゝごとを

してお留守番をしてい

ましたが、その遊びに

もいゝかげんに退屈し

て来ると、しげやは

「坊ちゃん、もっと何

か変った事をして遊び

ましようよ、しげやが

いいことをして上げま

すから、おとなにして

いらっしやるんですよ

そしてお祖父ちゃん

やお祖母ちゃんに言っ

たりしちや駄目ですよ

それをしげやとお約束

して下さるんならこれ

からしげやと坊ちゃんだけで面白いこととして

遊びましょう」

と、云いますので子供心にも、何かそんな

秘密な遊びは、きつと、まゝごとや、おはじ

き等よりずっと面白いものに違いないと思っ



て、「うん、誰にも言わない、どんなことして遊ぶの？」

「えゝ、それじゃ、しげやがこれからどんな

事をして驚いたり、泣いたりしちや駄目で

すよ」

と云いながら、押入の中から、自分の行李の荷造り用の細引を取り出して

「さあ坊ちゃん、しげやがこれから坊ちゃん

を縛りますから、おてゝを後へ廻してごらん

なさい。」

あたしは何だか、主従の関係が逆転して、

しげやに圧倒された様な気がして、おとなし

く観念して手を背へ組みました。

するとしげやは、両手を縛り上げ余った縄

で胸許を二三回ぐるぐると縛り、縄尻を取っ

て「さあ、坊ちゃん、どんな気持？おいや？

痛い？」

と聞きました。あたしは、よく祖母に連れ

られて観に行つた芝居の、中将姫や雪姫や浦

里のあの美しい姿で後手にくゝられ責められ

ている舞台にあこがれを持っていましたが、

自分がその主人公にでもなった様な気持がし

て、うれしく、それに身体がきゅっと引きし

められたようで子供心にも、縛られるという

ことが不快でなかったのです。

「いゝや痛くない、もっときつくしめて」

今迄かつて味つた事のない、被縛の快感を

始めて知りました。

それから、家人の留守中はもうまゝごと、

遊びはやめにして、あたしの方から

「しげや、くゝって」

と、せがんで、或る時は後手に縛られて庭中を引廻されたり、又、菱縄を掛けられて引据えられたりしました。

やがて、祖父母達も感づき、女中のしげやは国許へ帰されましたが、もうあたしの体に植え付けられた被縛の喜びは消えません。

学校へ行くようになって、その頃はやった探偵ごっこ遊びには、皆のいやがって誰もなり手のない泥棒の役目を必ず買って出て、探偵や、刑事に扮した悪童連に追いまわされて逃げ廻った挙句の果てには捕まって皆によってたかって荒縄で高小手に引っ括られ、牢屋へつながれたり、拷問に遇わされたりしてなぶりものになることに依って満足していました。

上の学校へ通うようになりましてからは、もう探偵ごっこ遊びも出来ませんし、相手もなくなつたので、こっそり女装の楽しみに耽けるようになりまし



た。はじめのうちは妹のワンピースや着物をこっそり身につけて、鏡に姿を写して楽しんでいましたが、まさかそれで人前に出たり、外出する訳にもゆきませんので、婦人雑誌の通信販売等で、女の下着類のズロースやコル

セット、メンスバンド迄注文して取りよせて身につけその上から服を着て、何喰わぬ顔をして外へ出あるいた事もあります。

或る日、盛り場のS通りを通りますと、写真館の前に「変装写真」と云う看板が出ていました。

一体どんな写真だろうと、陳列窓をのぞきますと、三枚続きや五枚続きの名刺型の色々な写真が飾りつけてあって、女装して片肌ぬぎになった弁天小僧や、百日髪五右エ門が定九郎の様なや、前髪姿の若衆の写真が、何れも中身は素人でも一っぱしの役者気取りで撮ってあるではありませんか、中でも一番あたしの気を引いたのは、当時流行った耳かくしの洋髪に結った娘さん風の姿でした。

それを見ると、自分もそんな恰好で撮ってもらいたくてたまらず参考書を買うお金や、お小遣を節約して、早速その写真館へ飛んでゆきました。

二階へ案内されると、そこは丁度芝の居座屋の様な化粧場がしつ

らえてあって、色々の化粧道具やさまざまの髪や衣装類が置かれてあります。私の注文を聞くと着付け兼床山と云う様な掛りの人が、上衣からシャツ迄脱がせて、水に解いた白粉を板刷毛にたっぷりふくませて顔から胸もと迄つけ、牡丹刷毛や眉墨で仕上げてゆくあたしの upper body はすっかり女のかたちになりました。それから衣装をつけ、最後に洋髪の髪をつける、もう完全な娘さんの姿になりました。自分でこう申すのも変ですが、あたしはその時はほんとうの女より、綺麗だと思いました。歌舞伎や新派の芝居で今でも女形を使うのは、勿論、芸が第一義でございますが、ほんとうの女より男の化身である女の方が美しく見えるからではありませんでしょうか。

もうその時は、あたしは永年の望みが叶った嬉しさで一ぱいでした。わくわくする胸をおさえ乍ら写場へ行って撮ってもらいましたが、出来上った写真は、写真屋さんも感心した程、綺麗によく撮れていて永い間大切に保存しておりましたが、戦災で焼いてしまい、見て頂けなくて残念です。今では年もとりてしまいましたので、もう一度写しても、あの時の様な美しさや色気は出ないだろうと思います。

それからというものは勉強もロクに手につかず、読む本は、谷崎さんの「秘密」や「少年」江戸川乱歩さんの探偵小説等と、女装する楽しみで一ぱいです。

N町という古着屋町へ行っては、女の着物長襦袢、果てははすかしさをしのんで真っ赤な顔をしなから腰巻迄買い求め、女一通りの服装を手に入れて夜な／＼身につけて楽しんだものでした。

あたしの部屋は離れになっていて母屋とは遠ざかっていますので、一人住いと同様なものですから、誰はばかりとくなく裸になつて、芝居の女形か芸者衆の様に、白粉をコツテリと塗って厚化粧をはじめます。お化粧が仕上ると、赤の衿の掛った肌着を付け腰巻をまとして、胸にはふくらみを付ける為手拭を畳んで入れまして、それから緋鹿子の長襦袢伊達、紅絹裏の付いた黒地錦紗の着物をつけるともうだんだん男のあたしは消え去って女の血が流れてきます、そして固い帯で胸許をキュッと締めつけ帯で止めますともう身も心も完全に女性になって、姿見に美しく着飾った自分の姿を写して、いつまでもあかずに眺め、鏡に写った自分の姿に接吻したり、時には女装したまま、菱縄を掛けたり、色々工

夫して後手に縛ったりして、さまざまな想像を逞ましくして一人秘密の楽しみにふけていました。

そんな快楽に浸っているうちに、だんだん学業の方はお留守になり、又、家の方も左前になってきましたので、学校をやめて、そんな中年からは役者の弟子入りも出来ず、好きなこの道に入りましたが、今では芸が身を助ける何とやら、でどうにか其の日を過させて頂いております。

今でもこの通り下には長襦袢やお腰を身につけておりますが、あたしにはこの紅絹の感触や、やわらかい縮緬がすそへまといつく感じが、胸を締め付けられる伊達巻の感じと共にたまりません。どんな感じかって、と、申されましても、どうもあたし様の様な学問のない人間は、うまく表現する事が出来ませんが、谷崎先生の「秘密」と云う小説をお読みになれば、あたしの気持も判って頂けることゝ存じます。

どうも永い間つまらない話をくどくどとお聞かせ致しました。どうかあたしに愛想をつかさず、以前同様、御付合をお願い申し上げます。

(終)

マゾヒスチック・ストーリー

榮^{えい}吉^{きち}の半^{はん}生^{せい}

日 文 卅 古 六

三 条 春 彦・画

1

榮吉はクラスで一番脊が低かった。其頃の小学校六年生は、殊に田舎町のことゝて、一クラス三十人位より男生徒がいず、従って女生徒二十五人と一教室で授業を受ける男女共学なのであった。此頃のように全国的に共学でなく、人数の関係からの共学なのであった。その中で一番小さい榮吉は体操の時間等脊の高い順に並ばされて一番殿りであり、その榮吉の後ろは女の子の一番脊の高いのが並んで女の子も脊の順に男の子の列に続くので、その脊の高い女の子に榮吉は頭をつゝかれたりしたものである。榮吉は坂上榮吉というのだが、クラスの誰もが坂上君といつてはくれず、榮公々々と呼び捨てにし女の子たちも榮ちゃんとは呼ばずチビちゃんと呼ぶのであ

った。だから榮吉も威張ったり反り返ったりしてみても相手にからかわれるのがオチなので、一そと、おどけてクラスの道化者になり、小さないたずらもちよこ／＼やるのであった。

三時間目、習字の時間、その日のその時間は先生の都合で自習ということになったので教室は騒がしかった。教室の東側の窓外は教員室へ続く板敷廊下で、西側の窓外は運動場であり、その室内は西側の方へ女生徒の机が二列に東側の方へ二列に男生徒の机が並べられてある。

机の手本を出して、紙をのべて男女の当番が硯の水を配って廻って皆が墨を磨る。

「あたしのお手本が無い。こゝへ入れといたのに、誰か知らない」

女の子の方の級長の習字手本が紛失した。
「僕等知らんで、知らんで」
男の子達は皆笑っている。



「どうしたんやろ。誰か、かくしたな。先生に云うたる」
女の子の級長は西川みよ子と云って、脊も女の子の中で一番高く
身体も従って大きくどっしりよく肥えていて、栄吉などその前に
行くと、相手は女の子でも、その体格に押さ
れて何か威圧を感じるのであった。

「誰や、誰や、うちのお手本かくしたのは」
男の子にもあるが、女の子は女の子で三人
五人とかたまる仲好しグループがあって、級
長の西川を取巻く四五人の女の子たちがあっ
た。その中の一人である竹田いく子が西川の
耳へ何か囁やいた。と、西川は知らぬ顔して
墨をすっている栄吉の傍へツカ／＼と来て、
「チビちゃん、お前、あたしのお手本をかく
したやろ。早よ出して」とえらい権幕であっ
た。栄吉はきよんととして、

「えっ、僕知らんで、知るもんか」

「うそ云い、竹田さんが見てた云うてるやな
いか、はよ出し」

「知らん云うたら」

栄吉は全く知らんのであった。しかし、二
三日前に、栄吉は朝、遅刻しそうに駆け込ん
で来て廊下で転んだ竹田いく子を教室の窓か
ら見ていて笑った事から、竹田と口喧嘩した
事があって、その恨みで竹田が西川をつゝい
たのであったが、栄吉はそんな事はもうとう

の昔、忘れていたのであった。

「知らん、どうしても知らんな。白状したる、こっちへお出で。」
西川みよ子は栄吉の手首を掴んだ。

「知らん、知らん、えゝい知らん云うたら」

栄吉は掴まれた手首を振り放そうとしたが、ギョツと掴まれていて自由にならず、反対に力で引張られて、掛けていた机から引ずり出され、硯と手本が床に落ちた。

「栄公、しっかりやれ、お前は男やないか女に負けるな」

野次馬の男の子たちは面白がって栄吉に声援すると云うより、もっと大いにやれとケシかけた。

「チビちゃん悪いよ。チビくくく」

女の子たちもだまっていたいなかった。

ワイ／＼と云う騒ぎ、その騒ぎの中で西川は振払って逃げようとして尻込みする栄吉を力にまかせにずると教壇のところ迄引ずって行った。

「くそっ、放せ、放せ云うたら」

栄吉は皆に男のくせに女にこんななされてるのを見ていられるのが口惜しく、死にもの狂いに反抗したが、力及ばず、教壇のところ迄引ずられて来るとどんと突放されてよろよろめいて教壇につきまづき、仰向けに倒れた。小学校の六年生位の男女は色気がないから、女の子だが西川は、栄吉が仰向けに倒れると起上る隙を与えずのしかゝって馬乗りになった。

「やーい、栄公、弱いぞ、弱いぞ、相手は女やないか、ひっくり返してやれ」

皆は二人を取巻いておもしろがる。

栄吉は顔を真っ赤にして、足をピン／＼振り、身をものがきにもがいて、ひっくり返えそうとしたが、みよ子はどつしりと石臼のように馬乗りになっていてビクともせぬばかりか、みよ子の胸のあたりや馬乗りになっている膝のあたりを搔きむしりにゆこうとする栄吉の両手も、その手首を掴んでパンザイをさす様に膝頭で押えつけてしまった。

「さアどうや、これでも降参せんのか」

栄吉は根かぎり反抗して、もう力尽きた。しかし、こゝで、かんにんしてくれと云ったり、泣いたりしたら皆に今後いつ迄も笑われると思うので、降参もせねば泣出しもせぬ。弱い栄吉でもやっぱり男の子である。

「西川さん、もっとやったり、いじめたり」

竹田をはじめ女の子たちは勝誇っている。みよ子と栄吉の組打だけでなく日頃から女の子たちは男の子たちに圧迫を受けている、その鬱憤もあるのであった。

「どうや、これでもか／＼。まだ白状せんのか」

みよ子はグイ／＼押えつける。そのかぶさってくる胸の香、ビクともせぬが男の子と違う柔かさの馬乗の腹部の重圧、栄吉は口惜しさ一杯の中のどこかに、此の儘押つぶされてもかまわないというような心地があった。

「西川さん、もう泣顔してるから許してやりなさい」

気の弱そうな女の子がこういゝ出すと、竹田いく子は尚も引かずに

「かまへん／＼。もっと西川さん、やったりやったり」

西川は一寸責め疲れて来たのと、怒りの昂奮がやゝ静まってきて

女だてらにと恥しくなつて来ていたが、今更引込みがつかずにいた廊下の踏敷板に先生の足音がした。

「先生が来た、先生が来たぞ」と皆があわてゝ席についたので、西川もフラ／＼になつてゐる栄吉の首筋をつかんで引起しといつて自分の席についた。

2

栄吉の起居している家はその町の遊廓の貸座敷。栄吉の母という人はその貸座敷即ちお女郎屋の長女、今栄吉が通つてゐる小学校で代用教員をしていた坂上先生が好きで先生の宿直の夜など学校に行つて坂上先生に逢つていたが、二人の仲を店のお女郎さんたちはじめ誰一人知らぬ者のない様に噂が高くなつてきたのでお女郎屋の主人、栄吉の母の父になる人が二人を一しよにした。坂上先生も安月給取りより貸座敷の入婿になる方が生活が楽になるので喜んで一しよになった。当座はそれでよかったが、坂上先生が米相場に手を出して一べん少しばかり儲けた味が忘れられなくなり深入し出して、栄吉の母、ふさ子も二度三度は都合して渡したりしていたが、皆損ばかりするので遂にふさ子の父の貸座敷の主人にももうそれ以上借りられぬ様になり、果ては坂上先生、学校も辞めて一旗上げてくると云い出して妻のふさ子とその間に出来た栄吉を妻の実家のお女郎屋へ預けたまゝ、成功したら迎いに来ると上京をしたきり音沙汰もない。ふさ子は親の家とは云い乍ら勝気女の肩身狭く、でも仕方がないので、夫に子連れでついて行って手足まといになつてもと思ひ、あてがわれたお女郎屋の裏の部屋で、もう小学校へ上る様になつてゐた栄吉を育て乍ら、夜は店へ出て客引きをしてチツプでその日の小遣い銭取り等しながら月日は早く、その後五年余、夫から

は何の便りもなく、今ではもう栄吉も小学校の六年生。毎晩十二時一時迄店に出て遊客の客引をしているふさ子は、店の遊女たちのみだらな会話や振舞いがどうしても子供の眼に耳にはいるこんな家で子供を育てたら子供は早熟になり、末が心配だと思ひ乍らも如何にもならない生活をつゞけてゐるのであった。

遊女の一人に、本名、宮崎せん、店の名前が小松という妓がいて、その妓は同じ他の妓の皆がそれぞれその家庭が貧しくて借金のために身を沈めているのに、その妓は生来の男好きで実家のM市の旅館でその旅館の娘として育つてゐた十六才の頃からもう男狂いして泊り客の田舎廻りの役者と逃げたりして、実家は立派な旅館で娘を売つたりする家でないのに親の家へ寄りつかず、渡り歩いて来た女だった。取立てゝ云う程の顔立ちではないが、色白で大柄な肉体美の女で、一度その小松と遊んだ客は何処かに魅かれて離れられなくなるという。それで店ではよく流行る妓の中に入れられている妓なのであった。

うどん屋の出前持に十六才になる小僧がいて、庄やん庄やんと、その少年は一寸愛くるしいので遊女たちの人気者にされているのだが、小松がその庄やんによく冗談を云つてからかうものだから、庄やんも小松がうっかりしている背中を突飛ばして逃げたりよくするのであった。

台所と店との間の三疊の通り部屋のところが裏梯子の降り口になつていて、そこへ出前の空鉢などが下げられてきてゐる。その空鉢を今日も取りに来た庄やんが傍に寝そべつてゐた小松の足を帰りがけにギョツと踏んで行ったのである。帰つて行った庄やんがそれで二日程ももう来なければ小松の怒りも少し静まつてゐたのかも知れ

なかったが、空き鉢の数が足りなかったので直ぐに折返して不足の鉢を取りに来た。

「こんちわ。まいど」と店の入口から上って来て先刻の裏梯子の三畳へやって来た。

夜の商売の遊女屋の午後一時二時という時間は遊女たちも幾部屋



かあるそれぞれの小部屋で客への手紙を書いて居たり、昨夜の疲れで寝そべって居たりして、店の間や台所や階下にはあんまり誰も居ない。

庄やんが上って来るのを見ると、寝そべっていた小松はガバと起きて裏梯子の蔭にかくれた。庄やんはそんな事には一向気づかなかった。庄やんが、

「鉢足りまへんね。残ってまへんか」と裏梯子のところ迄来ると不意に

「こら、さっき何して行った。もうかんにせんぞ」と小松が庄やんに組みついた。

後から急に組付かれた庄やんはびっくりして、のがれようとしたが、しっかり羽交じめに組付いた小松は逃がさない。もがき暴れるのをしっかり締めて押上げるように裏梯子から二階へ。二階の上ったところも三畳。

「さア、もう逃げて帰らさんから。今日こそは、今日こそはこの間うちから、私にいたずらばかりしくさって」と小松は庄やんをその三畳へ突飛ばすと、何と云っても相手は十六才の子供、突飛ばさ

れて仰向けにひっくり返る。小松は飛びかゝって苦もなく太い太股の下へ敷いてしまった。

「かんにんしてく。小松姐さん、かんにんして」と庄やんはバタ／＼もがく。

「なんぼ泣いたって、今日はかんにんしたるもんか。リンチやった」と小松は跨りかえて逆馬乗になり、庄やんのズボンをぬがしにかゝる。

「かん……にん……。かん……にん……。」

と、庄やんはもう死にもの狂い。足をバタバタ。しかし、大柄の小松に馬乗りになられてはいくら足で蹴り上げようとしてドタバタしても及ばず、筆の鞘を抜かれる様にズボンをとられ、パンツもむしりぬがされてしまう。

その日は日曜日だったので、遊び飽いた榮吉が店へ母の隙を見て出て来ていたので、裏二階のそのドタンボタンを知って裏梯子からソツと梯子の上段迄上ってきて、梯子の上り口から首を出して庄やんが小松にやられているのを見ていた。小松はそんな事はちっとも知らぬ。

「いやッ、いやッ、かんにん」

庄やんは大暴れ。

「なんぼでもシタバタしい」

逆馬乗の小松の大きなお尻が、どっしりと庄やんの胸に跨がっていてビクともしない。

その三畳の隣の三畳で寝そべって、蓆をふかしていた遊女の君香が、あんまりの騒ぎに襖を開けてそのさまを見て、

「小松さん、子供をそんなひどい目に合わさんと、かんにんしてや

りいな」と止める。

「いや、こいつ、此の頃、色気つきよって、相手になって来て仕方ないんや」

「いたい。いやッ、いやだッ」

庄やんが小松にギユツと押えつけられて、足をバタつかせているのが覗いている榮吉にはまともに見えている。

「これ、榮吉、又そんなところへ上って行って、早く下りて来なさい」とその時、榮吉の母の声。じっと見せつけられていて足がブルブルふるえて来ていた榮吉は、母の声にびっくりして裏梯子から飛んで下りた。

その事があってから庄やんは小松姐さん、姐さんと、家僕のようになり、やれハガキを入れて来い、蓆を買って来いと小松にこき使われる様になってしまった。

3

上京しているとばかりふさ子が思っていた坂上先生、榮吉の父から、K市の米穀取引所員平野の店に帳場として勤めている。やっと落ついたから榮吉も連れてやって来いと、便りがあつて、間もなく榮吉は母のふさ子に連れられてK市に出た、K市に来てからの坂上一家は又不幸にも、父が勤務店で主人との商策意見の衝突から失職するという様な破目になり母のふさ子は近所の針仕事などとして暮さねばならなくなった。

榮吉は隣家の人の世話でA造船所の会計課の給仕になった。処々摺り切れて白い芯の出た部分を墨で染めたりした詰襟の服を着て日給三十銭をもらって出勤した。勤務先の造船所には会計課の外に庶務課、購買課、造船課、設計課、等に受付、秘書室などがあり、そ

の各課、各室に一人二人ずつ給仕が居た。皆男給仕で十五六才から十八九才の少年たちであった。そして、古い年上の給仕が皆の上に威張っていた。

「今日は今度受付へ来た大田をやっつけるんだから手を貸せよ」

その古い給仕が二三人電話室の横で立話のさゝやき。栄吉にはそれが何の事かわからなかった。それは栄吉が勤務しはじめてから三ヶ月位経った或る日曜日の午後のことであった。

給仕連は日曜日に出勤すると日給外に一日分の出勤手当金が出るようになっていたので、皆日曜でも休まずに出勤するのであった。それに日曜出勤は五時間勤務してタイムレコードカードに出勤時間を刻しておけばあとは自由だったし、日曜のことゝて、たゞ当直の社員が来ているだけで、課長や主任等のにらみ級の人々は一人も出勤していないので給仕連は廊下を走り廻って遊んでいれば、五時間位直ぐに経ってしまつて勤務が楽だった。

「やっつけるって、何をするのか」と栄吉は一人の古い給仕でないのに聞いてみたが、その給仕は、

「ふん、今にわかるよ。君もやられそうさぞ」と笑うばかりで詳しい事は云ってくれなかった。

受付の大田という給仕は新任で十六才のくりくりとした可愛い少年である。その日、その給仕は年上の古い給仕三人に地下室へ引っぱられて行った。栄吉はソツとそのあとからついて見に行ってみた。

地下室、そこは、所員の食堂になっていて、六七人ずつが向い合つて食事（弁当箱）の出来る木製の長卓が三四十も並べられてあつてそのどの卓に向つても腰掛られる様に椅子の様に凭れなどの無い

六七人の並び掛けの腰掛が置かれてある。そして、所々に地下室の太い柱が立っている広々とした場所だった。

その並び腰掛の上へ仰向けに、両手は一人に、両足も他の一人に押えつけられて、恰も手術台上に乗せられた様に大田少年は押えられていた。

「かんにんして、かんにん」と大田は泣叫ぶのだが、日曜日のこととしてその広い地下の食堂は大田の悲鳴がひびくばかりで、誰一人叱りつけるような社員もいなかった。

あとからついて行って栄吉の見た光景はそれであった。可哀そうな事をすると思つたが、年上の給仕が三人もいては栄吉はどうしてやる事も出来ない。可哀そうと思う氣と、最後迄見とゞけたい好奇心とで栄吉は猶立去らずにいると、遂に一人の給仕に見つけられ、「こらッ、お前はあっちへ早く行け、ぐずぐずしているととお前もやっつけるぞ」とどなられたので、栄吉はびっくりして地下から走り上つて来て、会計課の自分の机にもどりどかんと尻を落したが、心臓はドキンドキンと打ちやまなかった。

美少年、よか稚児の給仕は皆こうして、その年上の給仕たちにやられ、その弱点を握られて隷属させられるのであった。

「君もやられそうさぞ。」と云われたゞけに栄吉はそれを見てからもう今日は、もう今日はとそればかりを怖れていたもので、古参給仕連に対して警戒を怠らなかつたが、栄吉は古参連にそれをやられずに、意外にも電話交換手の不良という噂の女たちによってやられる破目になったのであった。

それは、この造船所には構内及各課用私設電話交換台があつて、そこに女の交換手が二人詰めていたが午後五時には所がひけるので

その五時から七時迄二時間は残業者の残業時間になり、残業をすれば各自日給者はそれ〴〵の日給額の一割の残業手当金にありつけるので残業者もかなり有り、その残業時間の電話の交換は女の子では風紀上も問題が生じ易いとかで、五時になると帰宅せねばならぬ女交換手と、その交替に男給仕が交換室へ行って電話交換を引づく事になっており、男給仕がその交換時間を務めると、又交換手当がもらえらる。それで家の貧しい栄吉は、自分の小遣取にもなるのでそれを引受けることになった。

その交換を引受けた第一日。栄吉は交換室に行った。交換室は地下室の食堂の隣の五坪程の小部屋で、そこには二台の交換台と、その隅に町の家が夏夕涼みに表や裏へ出す涼台位の縁台が置いてあって、そこが女交換手の更衣に使われているのであった。

その日、五時になって社のサイレンが鳴ったので栄吉がそこへ顔を出すと、女交換手は待っていた様に交換台を離れ、

「あんた坂上さんと云うの。これから毎晩お願いするわ。」と、交換台を栄吉にゆずって更衣の方に行く。

二台の交換台に一人ずつ昼は女交換手が居るのだが、残業時間になると昼程忙しくなくなるので、二台を替った男給仕が一人で受持つのである。女交換手二人の中一人は藤田恒子といって、もう二十七才にもなっていてオールドミス、男関係はもう誰知らぬ位の噂の主で男など何とも思っていないという強か者、他の一人、これもその藤田の感化を受けて、まだ十八才の娘だが、映画でも何でも社内の男たち誰とでも一しよに行くという不良型。

更衣がすんだら直ぐに帰るものと栄吉は思って交換台に向っていたのに、彼女ら二人は交換台の側に来て栄吉の慣れぬ電話交換ぶり

を笑ったりして見ていてなかく帰らない。

「坂上さん。この前々の日曜日に受付の大田さんがやられたんだってね。」と藤井は栄吉をからかう様に云い出して、

「坂上さんもあたしたちでやってやろうか。」と栄吉の肩をつゝくも一人の不良型、寺内みさ子もそれについて、

「そうだ。ねえ、藤井さん、坂上さんをやつつけようよ。おもしろいわ。」と、けしかける。

「いやだよ。僕は。」と、栄吉は顔を赤くしたが、それでも弱味を見せまいとする。

「おもしろいわね。やってやろうか。」

「えゝ、交換はあたしが見たげるから藤井さん、こゝで坂上さんをキヤツ／＼云わせて、おもしろいわ。」

本当にそうしうになったので栄吉は、

「よしてくれよ。」と、腰を上げかけると、藤井は栄吉の後ろに廻って羽交締めを抱きすくめた。

「いやだったら、いや、いや。」と栄吉は必死に反抗したが、力及ばず、遂に部屋隅の更衣台の所まで引摺られて行って、台の上へ仰向けに押倒されてしまった。

「やアいゝゝ、坂上さん男のくせに女にやられる。やられる。おもしろいなア。」と、寺内みさ子は面白がってはやし立てる。

「坂上さん、いくらもがいても駄目でしょう。あたしがやつつけるといったら本当にやつつけるんだから。」と、藤井は直ぐ栄吉の腹の上に跨がってしまう。

逆馬乗になった年上女の体重に組敷かれてどうにもならぬ乍ら栄吉は、足をバタバタ暴れられる限り暴れたが、藤井は暴れさせ乍ら

泣叫ぶ子供を押えつけて、お灸を据える様にビクともせず、その手はもう栄吉のズボンの前釦をはずしにかゝった。

「いやアッ。藤井さん。かんにんして。」

蟒に上半身吞まれて両足だけバタつかせている様なその恰好を、交換台から掛ってくる電話の交換をし乍ら、寺内は振り向いては眺めて笑う。

ズボンを膝迄引下げられパンツの紐もほどかれた。



哀れ栄吉。古参給仕連に大田給仕が地下室でやられたのと同じ様な事を今藤井にやられる。もう仕方がないと諦めたのではなく、暴れ疲れてもう栄吉の両足はダラリ。

嫌悪、羞恥、口惜しさ、反抗、それが服従に、甘えになって、身も心も捧げた様な、吸取られてゆく様な、遂には儚ない諦めになってぐったりとなる。

「とうとう料理してやった。」と藤井恒子はひとり言して、伸びてしまっている栄吉の身体の上でくると向きを替えて、胸の方へまたがり替ると栄吉の両手首を押えつけ乍ら栄吉の顔にかぶさる様にして、

「どう。坂上さん。降参したわねえ。」と栄吉に勝誇った征服の笑顔を見せる。

栄吉は下からその笑顔がとてもまぶしく、気まり悪くて見られない。

こうして栄吉は、藤井恒子に全く弱点を握られてしまったのであった。

4

その栄吉が二十才になった。

別に栄吉は変態者ではなかったのだが、この様に小学生時代から次々と、女たちに征服される様な彼の体力からと、出来事のために栄吉自身、知らず知らずにマゾ的性感者となつてしまったのである。

「こんなものは若い者が見たら毒や。」等とチラと見せ乍らかくされたりしたエロ絵画や、裸体写真には栄吉は少しも魅かれなかった。それよりもその頃栄吉は映画館でふと見たゞ深川ひさしゝ監



督のもので、柳さく子という女優が水車小舎の周りを男を追いまわして殺す、その最後にはじめ横腹を出刃でえぐられた痛手のために尻餅をつく男の上にのしかゝって、男を仰向けに押えつけて馬乗になり、その口に咬えた出刃庖丁でとめを刺すシーンや、洋画では「女ターザン」というのが野性の娘の女ターザンを手込めにせんとて入口のドアの鍵を閉めて一人の男が挑みかゝるのを女ターザンが勇猛に闘って遂にその男をソファアの上へ組敷くという様なシーンが眼に焼きついて、そうした映画を二回も三回も同じシーンを見たさに見て、まだ外にそんな映画はないかとあさり歩いたりしたのであった。

又は電車内などで、自分の掛けている座席の前の吊皮などへ体格の立派なスポーツ選手の様な逞ましい女性が立つと、何か威圧に押

される栄吉なのでもあった。

雑誌、単行本も、女が男をやっつけている様な写真や文章の掲載されているものばかりを漁りはじめていた。

しかし、栄吉は自分が直接女性にやられるのは、あくまでも自分が男だという気持を失いたくないので嫌であり、たゞ、やられている男たちの姿を見ることにのみ興味を持っていた。

自分はある男のくせに女にやられているようなみじめなさまを人に見られたくないと思っている栄吉だったのだが、ところが、一杯のんだ或る日曜の昼、(栄吉もいつしか酒の味をもう其頃は覚えていた。)フラリと廓に足が向いて昼遊びをした時、それはN市の遊廓のはじめて登楼した家での事であったが、相手の女が馴染客でない栄吉にツンとしていてサービスが悪かったので酔っていた勢いもあつて口論の上、栄吉は女の頬を一つ打った。女はつかみかゝって来て組打になった。その結果、栄吉は女に組敷かれて散々に殴りつけられた。

「どう、あんた、あたしを女と侮って、えらそうなことを云ったりしたりしても、あたしやあんたになんかに、やられはしないんだから。」と、もう全く抵抗力を失つてしまつている栄吉をまだ許そうとせず、

「さア、どう、まだ降参しないのなら、もっともっとひどい目に会わして半殺しにしてやるよ、どう。」とギョウ／＼押えつける。

「うむ、降参、降参するよ。かんにんしてくれ、酔っていて手出ししてすまなかった。」

「本当に降参するんなら許したげる。本当に降参するね。おとなしくするね。」

「うん。降参する。」

「降参するとは何です。降参します。どうぞ許して下さい、と云いなさい。」

「降参します。どうぞ許して下さい。」

「よし。」

かくて床入りになつてから、女は、

「あんた男のくせに弱いね。わたしはこんなつとめをしているといつも男たちから勝手な真似をされて男たちのおもちやにばかりさわれているの。口惜しくて……。けれど、あんたの様な弱い男って珍しいわ。わたし、あんたには自由にされずにすむわ。」

「……………」

女はそう云って並んで枕に頭をつけ

ている栄吉の横顔を一寸見ていたが、むっくり身体を起すと、

「男たちにやられてばかりいる口惜しさを今日はあんたをいじめて腹癒してみたいわ、わたし。あんただったら、あんたがいくら暴れても自由に出来る。」

「よしてくれよ。そんな事。」

「ふふふ。あんたがなんぼいやがっても、やろうと思えばわたしはやるよ。ふふふ。や



ってやろうかな。そうだ。やってやろう。」

「よしてくれよ。よしてくれよ。」

かくて女は栄吉の拒むのにもおかまいなく栄吉の上へのしかゝって来た。そして栄吉がそれを押しのけて身体を起そうとするのへ馬乗になつて

「さア、もがけ……。あんたの力限りもがいてごらん。」と、遂に男の誇を力づくで奪ってしまった上、まだ倦き足らずに馬乗の身のり上げてきて栄吉の咽喉首に跨がつて大きなお尻の重味で押えつけてしまった。

栄吉は女にそんなにされて口惜しく、情けなく、死んでもそんな事はいやだともがくのだが、両の手首を八の字に拡げて踏ばっている女の両膝でギユッと踏つけられているので如何にもならぬ。

女は栄吉の鼻をつまむ。栄

吉は息が出来ないので固くふさいでいた口を開けて、ハアハアと息をせねばならなくなる。その開けた口へ女は自分の足の拇指を押しつける。

栄吉は両手さえ自由だつたら力及ばずともひっ搔いて、もやりたく思い、自由な両足をバタつかせる。その暴れの最中へ、廊下からやり手の老婆が

「ちよいと鈴子さん、開けて

「もいゝ」と声をかけて来た。

「えゝ、おばさんかまわないわ。はいって頂戴。」栄吉はびっくりして、「駄目だ。駄目だ。」と云おうとしたが足の拇指が入っているので口が思う様にきけぬ。

襖をあけて顔を出したやり手の老婆。

栄吉が組敷かれて足を口へ押し込まれている有様を見て「まア、まア、あんたお客さん、男のくせに女になんてひどい目に会わされているんです。相手が女の子じゃありませんか、力を出してひっくり返えしてしまいなさいな。」と笑う。鈴子と云われた女はそれでも栄吉の上から退かずに

「お婆さん、この男ったら、ほんとに弱い。見てごらん。さっきから死にもの狂いにもがいているんだけどこのありさまなのよ。アお婆さんに見られて恥しいか。男のくせに口惜しいだろうね。」「ほんとうに弱い男ね。鈴子さん存分におもちやにしておやり。わたしは見せてもらうから、一ぶくし乍ら、鈴子さん貰一本頂戴ね」とやり手の老婆は立膝になる。



5

栄吉は二十六才で結婚した。今迄の女性との接触によって散々いためつけられて来た栄吉は、一方に於て、そうしたマゾ的結果に魅かれつゝ、やっぱり古い考えかも知れぬが現代に於ては、頭も身体も女性より男性の方が勝れていることを認めていて自分も男である以上女には負けたくなく、一生自分の妻とする女は自分の自由になる様な女性をと求めていたのだが、栄吉の母は、栄吉が一人息子だから、一生の相談相手になる様な頭のしっかりした、その上に体格も弱々しいのは孫を見られないという気がよりもあつて身体も立派なのをを探していて結局栄吉の妻となった女性は百姓の出で力も強く栄吉より勝れた体格の娘をもらってしまった。其頃栄吉は古本屋でクラフトエビングの変態者を書いた一本を入手した。それによって世の中には自分の様な男も居るに居るという事を知って少しは慰められたのであった。

又栄吉の性感も彼が気づかぬまゝ、世の普通の男たちのそれとは

異ってしまったていて、栄吉はその顔の美醜よりも女性の太股に魅力を感じはじめ、電車内で腰掛けている女性の衣服を通して、その太腿、又は座敷に坐っている女性の太腿、殊にセルを着る頃の膝のむつちりとした女性の太腿には強く魅かれた。それと、女性のあごか

欽義先生性愛相談欄



—質問 歡迎—

(回答者)

欽 義 先 生

小生の一風変わった性癖について
欽義先生に御伺い致します。本年
三十八才の男性、幼時浣腸を始終
されていたかどうか、現在、記憶
にありません。十二、三才の頃よ
り、自分で浣腸する事に快感を覚
えました。他人の手で初めて浣腸
されたのは十年程前、腸チフスで
入院した時、一日おき位に看護婦
にされました。熱の高い間は苦痛
だけでしたが、次第に軽快してか

らは、看護婦の手で太いカテー
テルを挿入され、石鹼水を注入され
ることは堪らない快感でした。成
長するに従って種々の浣腸器を買
い求め、現在、七種類のものを持
っております。新しい浣腸器を見
ると興奮しやたらに買いたくなり
ます。
Onanie は二十才頃より昨年結
婚するまで、週四、五回続けて来
ました。夫婦生活は普通と全く変

らのどにかけての白い肉づきにも眼が焼きつくのであつた。
さて、栄吉夫婦の生活についても書きたい事は沢山あるのだが大
分長くなつたので、次の機会に改めて書きたいと思う。

りありません。フラウは別に浣腸
自体に興味を持っている風はあり
ません。

両親、兄弟等は普通です。私は
アームスに………、或
はされることに快感を覚えますが
グリセリンに依る直腸の刺激感が
直腸に通過する時のやるせないよ
うな圧迫感がたまらなく好きです
又、羽村京子さんのように、大
量の液体(空気は好みません)を
注入すること、それによって苦し
くなることも好きです。牛乳、卵
黄、等種々の液体を入れてみまし
た。現在、殆ど毎日のように、自
分で浣腸しております。グリセリ
ン、石鹼水、大量の微温湯(約二
リットル位まで)の順で四、五回
します。グリセリンの後で時々出
血しますが、翌日には止まります。
週一回位注入しながら………し
ます。現在小生が空想に描いてお
りますことは、
①、美しい女性を縛って抗むのを
無理に浣腸したい。

②、医療として、若い女が浣腸さ
れているところを見たい。

③、或は、自分も縛られて女性か
ら無理に浣腸されてみたい。

④、医療として看護婦から浣腸さ
れてみたい。

以上のような欲望が非常に強く
あります。最近、本誌によく出て
いる浣腸の記事を読んだり、写真
を見たいという気持もきわめて強
くあります。

美しい女性を見れば普通の人と
同様に専有したいという欲望と、
浣腸したいという欲望と両方感じ
ます。男性に対しては手をさわ
ことも不愉快です。若し、小生が
女性だったら、羽村京子さんのよ
うにアームス・コイツスを望むで
しょう。現在は小生の嗜好に理解
を持って相手になってくれる女性
がほしいです。

① 幼時浣腸されなくとも、先天
的に肛門性感の強い人が男性にも
女性にもあるのでしょうか。

㊦ 毎日浣腸しても害はないでしょう。薬物の刺激によって直腸癌になるようなことはないでしょう。小生、現在のところ身体は丈夫です。

㊧ 直腸がグリセリンの刺激によって出血することはありますか。

㊨ 滋養浣腸が大腸から吸収される理由から毎日浣腸して、大腸内に便を溜めておかないことが健康長寿の因になるだろうと、小生の独り合点で考えておりますが、実際上如何でしょうか。

㊩ 以上述べました程度の小生の浣腸に対する嗜好は異常と申されましようか。

右についてお答え下さるようお願いいたします。

(東京、ラヴ・マン生)

(註) 夫婦生活の項で、コイトスは週に一回位。

回答

浣腸愛好者へ

一口に陰部、肛門と申しますが、肛門が生殖器に近い場所にある事及び動物の進化の過程に於いて肛門も生殖器と共通の器管であった事等によって肛門に対して性的感

覚の錯誤が起って来る場合があります。あなたの場合は看護婦と云う女性に浣腸された事が性的興奮の精神作用に影響したのであるかと考えますが、十二、三才の頃に自分で浣腸する事に興味を覚えたのは一寸普通ではあり得ない事です。肛門内に指を挿入して医師が病気の診断を下す場合に生殖器の一部に触れる事が出来るのですが、確かに肛門内に或物を挿入する事によって性的快感を覚える事は考えられます。

又肛門括約筋は相当に力が強くて或る意味に於いては「アームス愛好者」の嗜好をそめる事も考えられます。所で御質問に就いてお答え致します。

㊦、先天的に肛門性感の強い人があるとは一寸考えられませんが「習性となる」

絵と写真のアイデアを募る

本誌に発表する口絵やサジマゾ切腹等や代理部の分譲写真、或はアルバム、画帖等について、こういった構図やポーズ又は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申越し下さい。貴方の考案されたアイデアによって、誌上を飾り、又は分譲品中に加えたいと思います。採用の分、並に優秀なる企画に對しましては写真又は画稿を差し上げます。詳細なる説明の外、必ず略画若しくは説明図を添えて下さるよう御願ひ致します。(企画係)

㊦、毎日浣腸する事は害がありま。腸粘膜に對して毎日一定の刺激を与え、事は直腸癌の発生を促す事は考えられます。癌は平均年令四十五才以後の人に発生し易いものであります。特

に直腸癌は大変悲惨な

病氣でありますから御注意下さい。㊧、直腸が屢々の浣腸によって出血する事があります。あなたの行われて居るのは浣腸と云うよりむしろ洗腸と云う方でして、物理的化學的的刺激によって腸粘膜に創が出来てそれより出血するものと思われま。之を屢々繰り返して居りますと浣腸によらなければ大便が出ないと言う結果を招来する恐れもあります。

㊨、滋養浣腸は現在では万止むを得ない場合の外行われぬ手段でありまして、主として大腸から吸収されるものは水分のみで滋養の意味は殆んどないのであります。徒らに腸を刺激して良くない結果となる事が多いのです。従って大腸内の便を毎日浣腸したからと言って健康長寿の因にはなりません。

㊩、浣腸に對する嗜好は勿論異常であります。他人を害さないと云う意味に於いて勝手に自身の肉体に注射するのと同じです。だが余り過度に刺激する事は禁物です。空気が大して害がないと思ひますが、挿入するゴム管が物理的創をつける事を忘れない様にして下さい。又回数も一週一回位に止めて置かれる様におすめします。

懸賞【告白と手記と体験】入選

極端と矛盾への倒錯

北島利根吉

小田潔・画



この前の時からどの位経ったろう。最近また例の病が頭をもたげて来た。ひと度病が擡頭してくると、いかなる抑制も利かない。気をまぎらわせようと野球や映画を見に出かけるのであるが、気抜けして興がのらないのだ。こうなると積極的に病に屈服するよりほかない。双手を差しのべて病を迎い入れる。そして変態情痴の淵に身をゆだねるのだ。

しかし病といってもけっして他の者に迷惑を及ぼすものでない。それどころか一部の女性にとっては生活の糧ともなることだった。

さてそうと決ると私の心は掌を返すように明るくなった。軽るやかな口笛さえ出た。私はいつもの如く押入の隅から小箱と一つの風呂敷包を取り出した。次に柱に掛っている鏡をとって机の上に置く。そうして私はドッカとそこに腰を下す。しばらくの間、私は鏡に写った自分の顔を眺めていた。私は美男子と云う程ではないが、さりとて醜男と云う程でもない。いわゆる十人並の顔立だ。強いて美点を求めるとすれば二十六才という若さの溢れた顔をしていた。

とった獲物でも楽しむようにしばらく鏡の中の自分の顔を楽しんでいた私は、ニヤッと笑って鏡から目をはなした。そして側の小箱

を引寄せ中から品物を取り出して机の上に並べた。

並べられた品物は他の者が見たら男の私にとっては意外なものであった。顔料絵具、ご粉、白粉刷毛などであった。私は役者が扮装する時する鉢巻の様に手拭いを頭に巻いた。そして再び鏡に向う。一時間経った。もし初めてこの光景を眺めたものだたら胆を潰すに違いない。鏡には何処からやって来たのか六十ぐらいの老人の顔が写っているのだ。さっきまでの私はどこかへ消えてしまった。た。若い私に代って皺だらけの老人がそこにあるのであった。

かように述べればすでにおわりの事と思うが私が老人に化けたのである。つまり変装したのだ。私は変装を一層効果あらしめるため、昔風の玉の小さい眼鏡をかけた。ますます老人ぶりが板についた。誰が見ても完全な老人だった。すでに幾十回となくかようなことをして来た私の変装のお手並は、ちよつとやそつとでは見破れない程巧みだった。

顔の造作がおわると風呂敷包をといて羊羹色の二重巻しと着物を取り出した。そしておもむろにそれを着はじめ。着終って私は快心の笑をもらす。顔ばかりが装までさっきの

若々しい私は消滅しそこには一人のよぼ／＼の老人がいるのだった。

一体何故こんなまねをするのか、私は告白する、私の変態性を。私は生れながら極端な性格を持って育ってきた。玩具などでも好きなものだったら他のものには手をつけず壊れるまでそれを愛玩する。長じて友達をもっても好きな友達だったら家へ引っぱって来て昼食を御馳走してまでも歓待するが、嫌いな友達だったら話しかけられても返事も無いといったあんばいだった。大人になって勤めをするようになって、休まないとなると二年でも三年でも休まないが、一たん休み出したとなると半月一ヶ月とぶつ／＼で休むのだった。こうした極端なる性格は当然性慾の上にも現われて来た。私は男女の交際などの場合でも二人が意気投合してとか、美男美女などということにはいさゝかの興味もない。私の性癖からすればこの場合いや／＼乍ら、或は醜男と美女の出合でなければならなかった。この意味で私は西洋のある種の彫刻に興味をもった。それは裸身の美女が半獣身や見たこともない怪奇な動物に犯かされているところのものだった。雪の如き白い肌に針のような毛の生えた皮膚が密着している有

様、そしておそろく嫌って嫌って嫌らしいぬき死に優る羞恥を意識しているであらう。美女の心底を思うとき、その極端なるものゝ二つのとり合せに身内がゾク／＼するほどの快感をおぼえるのであった。一言に述べれば、私の変態性慾はかくの如くであるが、これから私の奇怪な行動を語ろう。

すっかり変装の終わった私は廊下をうかゞった。ほかの場所だったとしてもかくアパートの中ではこんな装をしていては詮索される恐れがあった。夕方なので住人の往き来は多かったがようやく機会をみつけ廊下にとび出した。そして一気に管理人室のところまで走った。だが、この管理人室が第二の難関だった。そこにはうるさい管理人のおやじが終日、人の出入りに目を光らせているのだった。しかしまご／＼していられないので私はとっさに四ツンばいになって管理人室の前を通りぬけた。そして玄関を出ると両手に下駄をも



って一目散にかけ出した。しばらくして振り返えると物音に気が付いたおやじが受付の窓から首を出しけ／＼そうに辺りを見まわしていた。こうしてうまくアパートを脱出した私は前途に待ちうける悦楽に心浮き浮き都電の停留場へ急ぐのであった。歩き乍ら腰を折曲げ手を後にまわし老人の風を装った。我乍らうまい老人ぶりであった。

しかし喜ぶのはまだ早かった。前方を見て思わずドキンとした。同じアパートの私のごく親しい男がやって来るではないか、変装に自信あるとは云うものゝ知合に会うのは初めてだ。いさゝかあわてた私は、とっさに引返えそうかと思つた。しかしそれも遅かった。友人はすでに私を見とめ目をはなさない。こゝで変に引返したりしては却って見破られる恐れがあった。私は勇を起してそのまゝ歩いていった。老人のこなしであることは云うまでもない。近づくにつ

れ私はいつ爆笑が頭の上で破裂するか生きた心地もなかった。緊張の一瞬である。しかし幸なことに二人は何事もなくすれ違っていた。すれ違いざま私はチョットいたずら気を出しチロツと相手の顔をのぞいた。それは私の前では一度だって見せたこともない。いやな侮蔑に満ちた顔であった。汚ない老人とおもってこんな顔をしたのだ。私は人の心の醜い反面を見せられたような気がした。

電車はあまり混んではいなかった。座席は空いていたが、私は掛ける気にはなれなかった。明るい電燈の下で前の者とにら目っこをするのには忍びなかった。私は運転台の後に立った。そして窓から相馬燈の如く過ぎて行くネオン輝く街を見乍ら考えた。この電車で行ける遊び場所は二ヶ所あった。Y町とH町である。しかし私はH町をきめた。Y町は昔から有名な遊場所でこの方面では日本の代表的存在だった。しかし私はその名の古さを好まない。私は名からして近代的なのを好む。H町は私の好みにピッタリ合っていた。H町は戦後出来たものであり、その女といえばモダンな洋装姿の女を連想することが出来た。

電車を終点の三ツ目手前で降りると私はす

ぐそばの横丁に消えていった。私はH町の地理にはくわしい。遊びは同じ店の前を二度通るようではまず落第である。二度目では呼び止める女の方も熱が入らないし、ひやかしの思われがちである。遊では一度で登る呼吸が肝要なのだ。そんなわけで頭の中で道順をさっとまとめた私は、おもむろにH町に足を踏入れた。

街はまだ宵の口だった。客足はちらほらだ。もっとも私が宵の口を選んだのも口開けのきれいなのを登りたかったからだ。左手に隣りのお屋敷の垣根を望んだ店の前までくると私はいきなりむんずとばかり手をとられた。反射的に老人ということも忘れて二十代の力で振り放そうと思って引張ったが万力にでもはさまれたようにはなれない。見ると赤いネオンの光を半面に受けて一人の女がほゝえんでいる。珍らしく和服姿である。「ねえお寄りになつてよ」と女はきまり文句だ。私はソツと女を眺めた。何というがっちりした女だろう。女が肥っていることには不思議はないが、その女の肥りかたは少々異っている。相撲取りの肥りかたといったどこか力のひそむのが感じられた。それは男の精を受け肥ったからであろう。

「あんた、おじいちゃんに割合に腕が太いのね。頼もしいわ」と何も知らない女は意外の面持でいう。私はちよつとからかってみたくなった。

「だがあの方は年で駄目さ、お前にはとても太刀討はできないよ」というと

「そんなことはないでしょう。ね、面白いこととして遊びましょうよ」と体をすり寄せ盛んに煽情させようと努める。私には真剣な女の気持がよくわかった。こう云う女には客はたいてい男は勿論あがらない。客といえど年輩の、それも余程さうかしい者でなければあがらないものだ。したがって老人姿の私など彼女にとってはまことにいゝ鴨なのだ。しかし私の求めている女はこんな女ではない。私の欲する女性は、その老人姿には対照的なモダンな女でなければならぬ。極端と極端のとり合せでなくてはならぬ。かの怪奇彫刻の如く獣が美女を犯す境地にしたりたいがためこんな老人姿に身をやつしているのだ。少くとも相手の女性をして老人と思ひ込ませんがための変装なのだ。私は一刻も早くこの女から逃れようと焦った。しかし女はなか／＼手を放さない。それどころか奥の手を使ってきた。

真に直截な誘いの手段だ。どうだとばかり彼女が凄く笑みを浮べる。だがそんな真似をすればする程私の心は反対の方へ飛んでゆくばかりだ。仕方なく私も最後の手をうった。「実は金が無いんだ」といった。色街では金のことを口にするのは一切御法度だ。たとえ無くっても、なんとか他のことでごまかすのがならわしである。私のこの御法度破りは、てき面だった。「チエツ」と舌づゝを打ったかと思うと、さしもの執拗な手がするりととけた。女はいま／＼しように私を見ている。多分いま／＼のサービスを損したとでも思っているのだろう。「いゝ齡をしてッ」と捨ぜりふを浴びて私はようやくのことで放免されたのである。

次の通りは両側に店が立並ぶ賑かな通りだった。店先にちらりほらり女が見える。彼女達は足音に敏感だった。どんなに熱心に仲間と話をしているも足音をすぐ聞きつけた。しかしどの女にも引張れるというのでもなかった。さっきの女のように手をとるのもいたが、一瞥をくれただけですぐ脇を向いてしまふ女もいた。こういうのは老人の皺だらけの肌と肌を接するのは真平だというのだろう。ある曲り角までくると例のとおり声をかけ

られた。私は思わず足を止めた。それ程今までの言葉つきとちがっていた物静かな親しいものにも云う様な口調だった。見るとすりりとした女がカーテンを両手で分けてほ／＼笑みかけていた。さっきの年増とはまるっきり反対の淑やかさだった。面長の美人である。もし私以外の者だったら無条件であがったろうが、私には何故か躊躇させるものがあった。近づく、

「お願いしますわ」という。

「わしのようないさんでいゝかい」

「えゝ、若い人より年とった方のほうがいいの」「どうして」女は笑ってすぐに答えなかったが「さっぱりしているからよ」といった。私はそれを本当だと思った。こういうおとなしい女には年寄の方が楽なのだろう。だが私の心はそれで決った。やはりこの女も私の求めている女ではなかった。私の求めている女は老人でいやではあるが、金のため一緒に寝るといふ女でなければならなかった。そう云えば最初見た時、何か躊躇させるものがあったのも日本風の美人であったからである。

いつの間にか予定のコースを半分以上まわってしまった。今夜は思う女に巡り会えない

のだろうか、暗がりへくると私は思わず腰を伸ばした。老人の真似もなか／＼楽ではなかった。一息入れてまた歩き出した。そして、ある店先までくるとフト足をとめた。呼びとめられたのではない。私の方から停ったのだ。

店のホールに一人の女が腰を下していた。向うを向いているのだが、その洋服の着こなしは実に見事だった。その後姿はどうしてもパンパンには見えない。良家のお嬢さんか大会社のタイピストと思わせるのに十分だった。私はなにか心のたかまるのをおぼえた。幸いに他の女は客があるのだろう一人もいない。だが私は何と切出してよいのか迷ったので入口にたゝずんだ。女はその気配でこっちを向いた。でも、それきりだった。しかしそれで引き下ってしまったのは、それで終りだった。私はしわがれ声を造って「忙しいかね」と言葉をかけてみた。こう言葉をかけるようでは完全にこちらの負である。「駄目だわ」と女は御義理のように小声で返事した。そしてようやくこっち向いた。私は急ぎ女の顔を見た。それは素晴らしい後姿を裏切らせないのであった。長い顔ではないが、さりとて丸顔でもない輪廓のはっきりした理智的な容貌

だった。私はついにてそっと四肢を盗み見た。日本人放れのした發育ぶりだ。こんな商売をしているのにめずらしく緊った肉付、とりわけくびれた腹部と大きな腰から太股への曲線は見事だった。この女から見れば、この前の女などほんとに古めかしいものである。



しかし女はこっちを向いてもまだ「あがってよ」とはいわない。私など眼中にない態度だった。だが私にはこうした態度も妙に気に入った。私は気げんをとるように、「景気はどうかね」ときいてみた。女はフンと鼻で笑って「駄目だわ、ね、そこどいて下さらない」と

いった。「どうしてだね」「だって商売のじやまになるからよ」こんなに冷淡にあっかわれたのは初めてだ。「わしではいけないかね」と云って、私は眼鏡越しにじっと反応いかんと見る。ちらっと女の顔に冷笑が浮ぶ。「だってあんたいくつ」と呆れたように叫ぶ。

「六十とちよっとだよ」と云うと女は何を云っているの、と云った様子で爪をこすり始める。

「年寄りではいやかね」私はいつものセリフを云ってみた。

「えゝいやだわ」女はきっぱりといった。

私はこの言葉でこの女だと決めた。装^なり許りか心までも注文通りである。久しく探し求めていた女性だ。冷淡にされゝばされる程私の心は燃え盛った。しかし、いやだわ、と云われてそのまゝ引退ってしまったのではそれきりだ。「どうしても君と寝てみたいのだね」とわざと下品に云う。彼女は怒っているのか、無言で私を見つめる。私はかまわずつづける。「いまいくらなの、千円？」と本当の料金は知っているのであるが、わざと高いことをいう。フト彼女の表情が動いた。その頭の中で嫌悪とビジネスが見事に整理されてゆ

くのが手にとるようにわかった。返事が出かゝった。言葉が口辺まで上ってきた。その時フト彼女は言葉を呑み込んだ。その眼は精彩を帯びて表を見ている。私は急いで振り返った。そこには若い男が立っていた。私はとっさにその男が彼女の恋人であることがわかった。それ程彼女には似合の男だった。逢いに来たのであるが、私がいるので遠慮しているのだ。二人に口を聞かせてしまつてはおしまひである。私はすかさず「千円でいゝね」といった。彼女は私のこの言葉で氣を戻された。「えゝ」と反射的に返事をしてしまった。私は早速下駄をぬいで上り込んだ。こうしてしまえばいゝや応はない。一瞬彼氏と彼女

の無言劇がつゞく、彼女は若い恋人の代りに老ぼれを抱かなくてはならぬ悲哀を感じていることであろう。また彼は愛する女を汚い老人に供さねばならぬ焦慮を味っていることだろう。

これはまったく拾いものだった。こうして愛する者同志を割くというのも私の趣味のうちなのだ。部屋へ通され金を渡した。電燈はわざと暗いのを点ける。変装を見破られる恐れがあったからだ。私はシュミーズ一枚になった彼女を抱く前に素晴らしい洋服姿の彼女を抱いていたかった。私はこっちへおいでといつて、両手を出した。成功と失敗を半々にかけて。意外にも彼女は素直に私の腕に抱かれ

た。彼女はあきらめている。そのあきらめも私は玩味した。彼女を抱いている私はフト幻想に引き込まれていった。

彼女は怪奇像の裸女だ。悩みをひめてシトネに身を横えている。近づく影は老人姿の私だ。驚ろいて逃げる彼女、まなじりをすり上げて追う黒い影、遂に彼女は力尽きて倒れる、得たりとおそいかゝる影。次にくるものゝために彼女の心はおのゝく。やがてそれは現実の旋律となつて震えくる。しかも彼女の心は他を念じ、他を思う。

これこそ徹底せる極端、矛盾の集成、芸術の極地、変態性慾の陶醉境。

(了)

私の雜感より

中 川 房 夫

貴誌十一月号有難く拝受。今日は一寸私の思い付いた儘を記してみましよう。三十米の風速に立っている云々は、正に掛値なしの実感でしようが、この種の貴重な雑誌として一

種類位は今後とも存続させる理解と寛容を当局に望みたい。先ず表紙は何処の編集者でも苦心される処でしょうが、今月の表紙は素晴しく、葡萄を一粒口に含んだ乙女の図等、一

寸ロマンチックだし私はこの表紙を見乍ら妹を思い出してしまった。今後共貴誌に相応しいこれ等表紙を継続される事を希望すると共に目次に一寸画家名を記して頂ければ幸いです。口絵、写真も大変充実していて嬉しい限りですが、只男の責め写真だけは目障り、でも大方の雑誌として我慢しましょう。もう少し外国フォトが増えたら。川端嬢の床柱、腋窩の修正はもう少しうまくやって欲しかったと思います。それから田代光画伯の筆を思わ

せる四万孝氏、畔亭数久氏の画に期待したい。

沼正三、吾妻新、両氏のものは興味深く拝見して居ますが、ネクターの下り等皓子の事と
思い合せて興味を惹かれました。編集者にお
約束し乍ら未だ送付していない写真等沼氏に
お見せしたら、屹度喜ばれるに違いないと思
うのですが。夜光島も唐沢登枝なる人物も判
ったように思うし、私は私なりに先が愉しみ
です。次に簡単に申上げると、倒錯の考察、
愛は被虐と共に、一揆の花、病める花びら、
残虐なる女性達、織田信長、性愛相談、裏返
しのA感覚、気違いにされた令嬢等は愉しく
拝見しました。次に皓子の事に関連して興味
を惹いたものに浣腸マニアの手記、ブロー
スマニアの手記、クリスターフエティシズム等
がある。ブロースマニアの吉次氏と七月号読
者通信とは同人だと思いが、それに対して皓
子が八月号読者通信で応えているのは一寸面
白い。そうしてそれは未だ繋りを持続してい
るようです。いずれ発表される皓子のものを
御覧になれば判る事です、又これは「愛は
被虐と共に」の中の男が愛人の下穿を抱擁す
る処にも聊か関係があるのですが、最も美貴
子は「覗いているのね、いやらしい」と言っ
て相手を殴る程の女ですから、男にブロー

等覗かれるのは性に合わない質でしょうが、
皓子は違う。その男の行為の様に自ら進んで
そうされたいのである。侮辱される事に被虐
を感じているのである。吉次氏はブロー
スに流れるものは二本の線ではなくマゾに繋る
一本の線なのである。即ちそれはパシイブと
アクティブと言うポジションを置換してのマ
ゾ被虐感享受であり、私はこの対象を面白い
と思った。それから浣腸ですが、花村さんの
願望があまりにも皓子に酷似しているので妹
のような錯覚に陥った程です。それに又レス
ボスの記を書かれるなんて罪な話です。あん
まり皓子を思い出させないで欲しい。気違い
にされた令嬢の中には、勿論これはフィクシ
ョンでしょうが医師にアームスで検温される
場面があり、これは又「フレンチカンカン」
この名前はタバランやロートレックの通った
フランスのムーラン・ド・ラ・ギャレットで
有名なので一寸面白い。日本ではこれに関す
る野口弥太郎画伯の油絵がある）の一節にも
有るように、皓子の硝子棒と関連性があるよ
うに思う。と言うのは体温計、硝子棒、そう

して浣腸器の嘴管にしる、最もこれだけは液
を注入されるという違いはあるけれど、ア
ームスに挿入されると言う行為の点では一致し
ているからである。そうしてそれはソドム族
のそれに、又羽村京子さんの願望へとも繋る
のでしようが……。それにしても羽村さんや
まして此処で新たに花村さんが彗星の様に登
場されて浣腸、浣腸と見せ付けられたのでは
それでなくても傷心未だ醒めやらぬ私の頭は
皓子の幻想で混乱する。何卒お手柔かにと今
からお願ひする次第です。若し機会があれば
でも羽村さんには優しい御主人がいらっしゃ
るそうですからどうかとも思いますが、花村
さんには論じたい事もあるように思考します
ので、いずれお便りしたいと思っています。
それから久里須照男氏と長崎赤坊氏へ、皓子
から直接御返事出来ないのが残念ですが、浣
腸の様子、おしめの遺稿等いずれ整理の上、
編集部へ送付する所存ですから、それ迄お待
ち下さい。コプロラグニア、ソドミー、その
他色々今まで述べ度い事もあるが、誌面も尽
きたので今日はこの辺で筆を擱き度いと思
う。

最後に編集子各位の御健斗を祈ります。

「氣違いにされた令嬢」

(二)

飛田良二

私立探偵が蛭川病院を訪ねて来た日。そう

です、愛子が救い出されるチャンスが無惨にも奪われてしまった日以来、愛子の毎日は一層みじめな、お話しにもならないものになってしまったのです。今度の事件が明るみに出れば、愛子を誘拐した犯人よりも、それを預って、こんな悪魔も及ばぬ虐待の限りを重ねる蛭川院長の方が余程重い罪に問われる事は明らかです。そうなれば、今迄のようにこの精神病院という特殊の舞台、その院長という実に都合のよい職業を悪用して、不幸な患者達を思うがままに弄びながら、たんまり儲けるという勝手な真似は出来なくなるばかりか、今度の氣違いでなんでもない令嬢の一件では、それこそ、どんな刑事上の責任を負わなければならぬか、そんな分りきった事も、

おそまきながら気がついた院長の焦躁は、そのことごとくがあらわれぬ處である、愛子に向けられたからたまりません。

一方愛子をたくみに誘拐した直接の犯人は何処へ潜伏したのか、この病院へも一度も顔を見せないのでした。しかし、突然の私立探偵の来訪などですっかりおびえてしまった院長は、身代金の分け前が入ったらこの病院を売り払って、自分も何処かへ高飛びでもしようと思つたのです。そしてそれ迄は、人目を恐れて、可哀想な愛子をこの殺風景な精神病院の中でも、一番陰気な、無気味で不潔な死体収容室に付属した、コンクリート作りの物置へ押し込めてしまったのでした。

其処で愛子に与えられたものは、一枚のパジャマと一枚の毛布だけなのです、窓もなけ

れば電燈もつかない物置部屋は、鉄製の扉がガラガラと閉じられると、真暗となり、手足も満足に伸ばせない程の狭さです。そして、その物置部屋から外へ出るにはどうしても通らねばならぬ死体収容室には、鉄製の冷たい死体用のベッドと、洗浄用の水道の蛇口と、電気で死人を焼く火葬炉の黒い鉄扉が用意されているのです、

しかし、それだけではありません。看護婦達のいたずらが、思わぬ院長の命びろいになつてしまった、あの日以来、愛子という絶好の玩弄物は、院長の一人占めにならなくなつてしまったのでした。今や禁断の木の実を味って、看護婦達は大財閥の令嬢という思いもよらなかった獲物を暇さえあれば、その無気味な死体室へ引きずり出して、なぶりものに

することが出来るのでした。

もう最初の頃のような「貴方は氣違いだから」というまどろこしい仮定も、口実も、今や不必要とばかり、お話しにもならない非常識で残酷な折檻が用意され、押しつけられるのでした。例えば衛生上、健康の為に称して、必死に抵抗する愛子を手取り足取りして、その死体用のベットへはりつけに縛りつけ、死体洗浄用の水道ホースを利用して、入浴がわりに、冷水を浴せかけるのです。「垢をおとしてやろう」と誰かゝ発案すれば、洗濯用のタワシや、廊下のロップで、泣き叫ぶ愛子に冷水をそそぎながら、こすり上げるのでした。

又、手足も自由に伸せない物置部屋に閉じ込めたままでは、

健康によろしくないと言う口実で、奇妙な散歩が採り上げられたのです。それは、狭い死体室での弄みだけで飽きたらなくなった看護婦達は、とうとう西日もすっかり傾く頃とな



るのを待ちわびて、無力な膚を引きずり出しては、人目にふれぬようにと正門も裏門もかたく閉ざして、可成り宏いこの病院の庭を犬のように追い廻すことを考え出したのです。

常の病院とは異い、夕刻ともなれば不意の急患が来るでなし又数少い他の室の患者への面会人も、たとえ珍しく来ていたとしても、もう帰ってしまう時刻ですから、一応、その名目がなりたつのでした。

先ず、逃げ出さない要心の為にと、与えられているパジャマは腰だけ丁度ギリギリという男物の薄いセーターたった一枚と取替えさせられます。そろそろ肌寒い黄昏の外気の中で、身を隠すのは上にも下にもそれが唯一枚だけにされるのです。

次に、左右の足首にロープががっちり結びつけられ、その二本のロープの端を一尺程の棒切れの両端に、その棒切れの中心から別のロープが一本、追いついて役の看護婦の手に持たれるという妙な仕組です。両手だけは自由にされていますが、この散歩という快的？な時間を心から感謝するという意味で、常に両手を目より高くさし上げて合掌していなければな

らないという、屈辱的なスタイルを婦長が考
え出して強制するのでした。それでも、閉じ
込められたまゝでいるよりは万一救いの手で
も、という僅い希望を抱く愛子は、命ぜられ
るまゝ、そんな姿でよろめきながら歩くので
した。

「もつと、さつさと歩いたらどうなの！」

忽ち罵声を浴せられて、竹箒で愛子のむき
出しのお尻はいやという程叩き上げられるの
です。そして、尖った砂利や石炭がらを敷き
つめた処を選んで追い立てられ、素足の愛子
は痛さから逃れようとつま先立てゝは一層よ
ろめき続け、足首のロープでつまづき転がっ
てしまうのでした。

最早、外からの救いのない限り、如何よう
にも逃れる事の出来ない事を思い知らされて
いる愛子は、従順に院長や看護婦達の思いの
まゝに弄ばれるよりすべがなかったのです。
逆らえば、もつともつと非道い目に合わされ
るばかりです。高い石塀をめぐらした建物の
まわりを、やつとの思いで三回追い廻され
ると、この屈辱的な散歩から開放されます。た
まらない羞しめと寒気、それに疲労でフラフ
ラになった愛子は、再び元通り狭い物置部室
に押し込められ、衰弱を恐れる院長の指図で

多量の睡眠剤が注射されるのです。あとは一
枚の毛布にくるまって泥のような眠り、やっ
と愛子の休息の時間になるのでした。

一方、検温、検便で始まる院長の診察時間
は、決してなくなった訳ではありません。未
だ誘拐事件が新聞沙汰にならないのに気をよ
くした院長は、死体室を利用して、益々入念
に実行するのでした。

又、愛子とその冷い真暗な物置で睡眠薬か
ら叩き起される毎日になってからは、これも
婦長の発案で、物置が狭いという理由で、例
の羞しい小箱（便器）も取り上げられている
のでした。我慢出来なくなった愛子が哀願す
れば、日に三回だけ貸与されるのです。従っ
て例の毎朝行われる検便も直接という事にな
り、検温の時の姿勢がそのまゝ延長させられ
る訳です。死体用のベッドにのぼらせられる
愛子は、パジャマの裾をまくり上げられ四ッ
這いになる時間が、一層長くなった訳なので
す。

又、愛子が上下座までしてやつと許される
生理的な要求も、そのベッドの上で、院長や
看護婦達の看視の中で行わされるに至っては
もはや、文字通り汚辱に明け、汚辱に暮れる
毎日、しかも、仮借なき折檻は絶えず躊躇す

る愛子に加えられ、強制される。強壮剤も栄
養剤の補給も、又、睡眠薬による休息もその
効なく、加えて凌辱のためにやたらに飲まざ
れる下剤、下痢止め、興奮剤、鎮静剤、はて
は塩水の注入注射などの濫用等で、哀れな愛
子は日一日と衰弱して行くのでした。

「娘の生命にかゝわる」という脅迫状におび
えきった愛子の両親は、秘かに敏腕の私立探
偵を手配したものの、犯人はすぐに娘を引替
えに戻そうとはせず、充分に高飛の準備に日
をかけ、愛子は旧悪の友人蛭川院長に預けつ
ぱなしにしようと企んでいたのです。その方
が万事好都合に行くと考えたからです。彼等
は蛭川院長の悪癖を充分承知しているからで
す。一旦、古傷の露見を恐れる院長に娘を押
しつけてしまえば、涎の出るような獲物を抱
え込んだ院長の方が、事件の発覚を恐れるよ
うな罪深い事を仕出かしてしまうに違いない
と踏んでいたのです。

正に、犯人の計画通りに行ったかの如くみ
えました。犯人は愛子の両親に直接娘を引取
りに来るようにと、京浜国道は六号の橋まで
おびき出したのです。そして、大型のトラシ
クには裸のマネキン人形をバラバラにしてつ
め込むという、たちの悪いいたずらをして、

身代金を車の窓から窓へと受取ると、その大型のトランクを路上に投げ出して、一目散に国道を横浜へと飛んだのです。

しかしながら、必死に追跡する私立探偵の車をまぎれず、彼等はその翌日、今一足で羽田空港から香港へ飛ぶ寸前を動き出した警察の手でおさえられてしまったのでした。彼等の自由によって忽ち蛭川病院は包囲されました。警官隊が殺到して来た病院の正門は、臨時休業の札が出され、病院内では、今や院長と看護婦達が、朝から休息も与えずに愛子をなぶりものにしていく最中でした。

数日前、病院をうまく売却出来たので院長はすっかり安心しきっていたのです、あとは明日にでも分け前をとけると云う犯人からの出鱈目の手紙を信じ、金さえ入れば高飛びしようと計画していたのです。朝から仕事も投げ出して、看護婦の愚智恵の出しくらべ、淫虐なお仕置と折檻の総ざらえでした。

先ず鉄扉がガラガラと引き開けられ引きずり出された愛子は、形通り院長の検診です。看護婦全員が早や興奮しながら目じろ押しに並んでいる死体室は、手術用の大きな照明燈に付け替えられています。もはや観念している愛子は、恐怖と屈辱に震える体で中央の死

体用のベッドへ這い上ります。院長の咳払いが合図で、婦長がおもむろに検温の姿勢をうながします。「もつと両膝を拡げて！」「顎を上げる！」それから、御丁寧にパジャマの裾をからげ上げられ、大きな体温計が愛子を串さしにするのです。

しかし恐いものです。例えば大手術をされる患者が、最初からその大きなショックにはとても堪え得られない場合でも、あらかじめその手術を暗示させながらの徐々な進行、軽い小手術を重ねて行くうちに遂に観念した患者は、比較的その打撃にも堪えられるようになるものです。又、どんな激しい刺戟でも度重なれば、或る程度馴れてしまうのです。さて愛子の場合も、不幸にして同じような事が言えるのでした。最初はだまされて、そしてだんだんと強制されて行くうちに院長の望む恰好なモルモットの生贄にと、或る程度飼育馴らされてしまった観がありました。

やっと検温が済み、引続いて検便という関門を通過した愛子は、待ちかまえていた看護婦の命令により朝の食事になります。

「今朝はスープだから、そのまゝの姿勢で飲ませておやり」

婦長が提案します。忽ち両膝を拡げて立て

ゝ、かゝげられたるパジャマの裾もそのまゝ四つ這いの恰好を続けさせながら、一人の看護婦がその愛子の顎に支え、もう一人の手でドロドロのスープがスプーンで口へ運ばれます。ところが、その嘔吐を催しそうな気味の悪いスープには、実は何処迄も計り知れない企みが加えられているのです。その罪深い秘密を知っている看護婦達はこみ上げて来る歓喜を押えるのに苦心しています。しかしながら、例えそんないたずらを愛子が知ったとてどうなりましょう。強制される三度の食事は絶対に拒むことは不可能に近いのです。

そして、近々とそのベッドの端に腰をかけ晒し物になりつぱなしの愛子の円い可愛いお尻を院長になぶられながらの食事がやっと終ると、ベッドの室内散歩の番です。邪慳な看護婦の手で、忽ちパジャマを剥ぎ取られ、用意された首輪がはめられると、素裸にされた愛子は鎖に引かれてベッドから降されました。

息もつまりそうになる恐い折檻におびえて、ゼンマイ仕掛の人形のように操られている愛子でしたが、看護婦の全員が院長と一緒に、この狭い死体室に集って来ている今朝の様子で、本能的に、これから加えられるであ



ろう想像もつかない羞しめを予期せずにはいられなかったのです。無力な生贄の最後の抵抗になりました。忽ち、四方からもだえにもがく愛子の裸身は押えつけられ、最初の折檻が平手打ちの競争で始ったのです。——誰が一番いゝ音を立てられるか——凡そ馬鹿々々しい名目で、みるみるその小箱（便器）を下

に差し込まれた為ぼっくりとより上ってしまつた愛子のお尻は、赤く腫れ上ってしまいました。悲鳴はコンクリートの壁にはね返り、いたずらに院長の耳を愉しませる快よい音楽となるばかりです。「もうよかろう」院長の合図です。しかし愛子は動こうとしません。動けないのです。

「打っても駄目だ！ 皆んなでうんと可愛いがってやれ」

操り責めが一番こたえるのでした。再び手足を押えつけられて、全身へ無遠慮な看護婦達の指が這い廻ると、身動き出来ぬまゝに愛子は死の苦しみを味わされ、「シッシッ」面白がって追い立てられるまゝ鎖でずるずると引きずられる愛子は、コンクリートの床で膝がすりむけるまで犬のように這い廻らされるのでした。へたばってしまった哀れなペットは土下座をします。朝からこらえているものが押えきれなくなったからです。土下座をして哀願しなければ、生理的な要求も聞き入れずには貰えないからです。小箱（便器）がうやうやしく捧げられて中央のベッドの上へ置かれました。「さあ！ 御ゆっくりと」看護婦の一人がおどけた調子で言うと、どっと嘲笑が浴せられます。

しかし、愛子は命ぜられるまゝそのベッドへ、痛む裸身のまゝ這い上りました。その瞬間、愛子はそのいまわしい小箱を院長めがけて投げつけてしまったのです。可弱い小鳩の最後の抵抗だったのです。

真先にロープで作った鞭を取り上げた婦長に負けずと、夫々ロープを手にした看護婦達

が、院長の言葉も待たずに四方から躍りかゝりました。巾の狭い死体用のベッドへ横向に押えつけられ、仰向にされたまゝ、愛子の手も足もひきちぎれるばかりに引張られて、弓のようにのけぞった恰好で縛り上げられたのです。

「性根をたゞきなおしてやれ！」

院長の怒声で、鞭がわりのロープの雨が無惨にも柔肌に重ねられ、皮膚は破れ、血の叫声をあげる愛子は、とうとう失心してしまつたのです。すると、例の死体洗浄用のゴムホースから冷水を浴せられ、愛子は再び生地獄に引き戻されるのです。ついにこらえきれず弓なりの姿勢のまま、愛子は床を汚してしまつたのです。愛子は今や発狂寸前です。しかし、看護婦達はそんな事は委細かまわず、一旦縄を解くと犬のようにして汚れを清めろと言つて、寄つてたかつて押えつけるのです。

愛子の最後の絶叫がコンクリートの壁を震わせた時です。折から踏み込んで来た刑事の耳にも達したのでしょう。忽ち、死体室の扉が外から激しく鳴りました。驚き慌てた院長は、竦み上つてしまつた看護婦達を督励して愛子をぐるぐる巻きにし、猿轡をかますと、壁に用意されてある死体焼却用の窯の扉を開

き、パジャマや残りのロープもろ共、身動きならず、声も出せなくなった愛子を押し込んで、電気スイッチに手をかけました。

これが、悪魔もあざむく院長の最後の手段だったのです。しかし、その時早く扉は破られ刑事がなだれ込んで来たのでした。

正に危機一発！ しかしながら、間にあつた事が果して愛子のために幸いであつたでしょうか？ 何故ならば、救い出された可哀想な愛子は、再び近くの国立精神病院へ運ばれる事になったのです。

例えようのない汚辱と、死にまさるいまわしい折檻に打ちひしがれた可弱い処女の心身は、その恐しく深刻な打撃の前に、ついに本当に発狂させられてしまつたのでした。

M財閥の運動と当局の思いやりで、事件はついに明るみに出されず終つた事はまだしもとしても、その限りなき幸福と希望に満ちた祝福さるべき輝しい愛子の青春の一頁は、今や真黒く塗りつぶされてしまつたのでした。

一気に語り終つて、私は咽喉がからからに乾いてしまつた。

「はいお水」

「やれやれ、気違いにされた令嬢」の一卷の

読切りだ！」

「どうも有難う、面白かつたわ」

「最初は、秘密映画という事になつてたんだが、何んだか物語りになつちやつたね」

私はもう一杯お水のおかわりをした。

「でもいゝわ、本当に面白かつた！」

妻の純子はいそいそと起き上る。

「おい、未だ早いよ」

「でも、今夜は貴方がお疲れになるといけなから……」

あとはニッと笑つて、妻はパジャマの上へガウンを羽おると、お茶の用意に立つて行った。

私は今夜の夜行で旅に出る予定であつた。そこで留守になる前に是非とせがまれて「気違いにされた令嬢」の一席に及んだ次第だった。妻の差し出す熱いお茶を飲んでいると、外へ車の止る音がした。

車の中からもう一度振返つて見ると、そこだけ明るい玄關にたゞずむ妻の純子はまた手を振っていた。これで私は、二、三日旅の宿屋でおとなしく一人で寝る。

又、たわいのない夜ばなしでも聞かせてやるネタを考え出しながら……。

(夜ばなし第二話終り)

〔遺稿〕

——若き女性の手記——
(一)

悪の広場

角 皓子
西 条 武・画

——おのれをあばくことも、所詮は自己弁護の一手段であるかも知れない——。

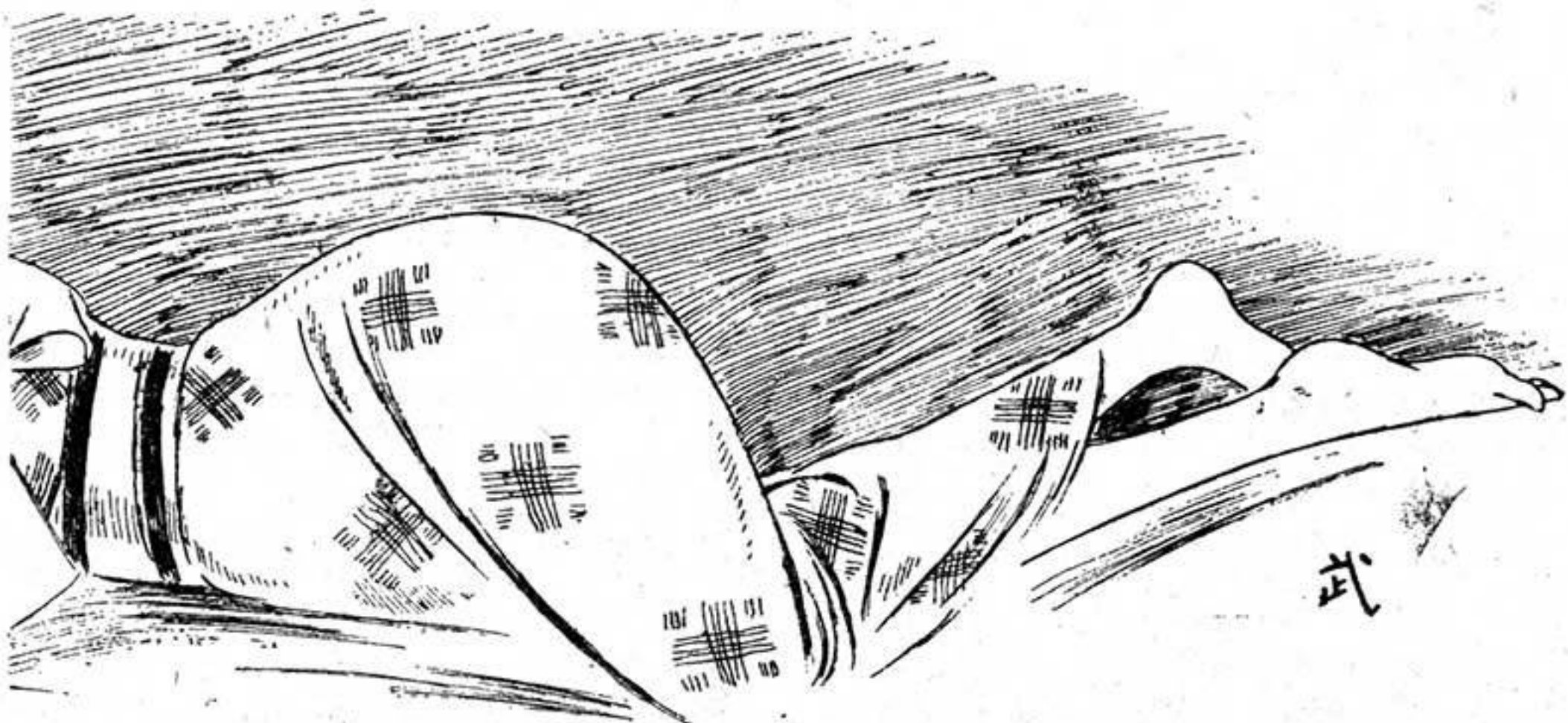
誰の言葉でしたか忘れてしまいましたが、皓子は又ペンを執っていました。

秋もゆき、冬も去り、やがて又、流れくる陽射しが総てを生き生きと色彩らせる。ある明るい春の陽射しの午後でございました。

男も、女も、小鳥も、花も、草木も、みんな潑潑として、その若き青春の息吹きに燃えています。それなのに皓子は、どうしてこう

も懶うく、いゝよ
うのない懶惰の気
分を感じるのでご
ざいましょう。

結核という、呪
われた病気のせい
ででしょうか。それ
とも娘心の儚ない
孤独の感傷のせい
でしょうか。皓子



はこんな虫ばまれた躰が、無性に哀しく寂しくてやりきれない。でも今更こんなことを歎いてみた処で、何になりましょう。今となつては何もかも手遅れなのです。そうです、何もかも——。

皓子は又しても、何かに憑かれたように、まるで操り人形のように幻想の世界に踊らされているのでした。然しそれが何であるのか皓子にもはっきり判らないのでございます。

不思議な糸、衝動の糸、誘惑の糸、戦慄の糸、汚辱の糸、圧制の糸、歓喜の糸、悦楽の糸、被虐の糸等が絡みあつて、皓子の心を激しく責め苛め、押し崩そうとするのでございます。

病気のためにいけないことだとは知りながら、そうしてそれが、どれ程皓子の命を縮めることなのか自分で最もよく承知しながら、私はどうしてもそれを振り切れないのです。

私はペンを執ってしまうのです。定められた大切な安静時間中でも、ふと知らず知らずのうちに枕もとへ手が伸びると、ペンを執って書いているのです。

こんなことではいけない、いけないと思ひながらも、自制心弱い皓子の手はそれを許さないのです。一層のこと、この皓子の両手がなかったら——、そうすれば色んな浅ましい性癖や、こうした恥しい告白手記など書かなくても済むものを。私は幾度心の中でそう呟いたことでしよう。

あゝ……でも皓子は書きたい。人が何と云って批判し嘲笑しようとも、皓子は自分の洗ひざらいを体当りで告白し書いてゆきたい。

皓子は今そんな氣持でいっぱいなのです。皓子の恥しい告白記が活字となって巷に流れてゆく。あゝ、なんと云う侮辱、汚辱でしよう。その嘲笑の顔という顔が、眼の前に泛んでは走馬燈のように消

えて行きます。あゝ皓子はその限りない嘲笑と侮辱に無上の被虐の悦びを感じるのです。何という浅ましいことでしょう。

若し皓子の身に万一のことがあつたとしても、いえ私の躰はもう本当は治らないかも知れないのですが——、時々そんな不安な予感に襲われることもある私

なのですが、そうであれば一層のこと、私の今迄誰にも云えなかった秘密を書き残こして置きたい。何かそう云う激しい意欲に皓子の胸は、騒ぎたてられて行くのでした。

他の人には莫迦にして相手にして貰えないことでも、「奇ク」の編集子様や愛読者の方なら、きっとこの皓子の氣持を判って貰えるに違いない。何かそう云った漠然とした期待もあるのです。

皓子の望みは只一つだけ、皓子自らの肉体を体当りで甘美な狂おしいばかりの被虐の中に晒すこと。手も足も心も総ての自由を奪われ、或るいはそのまゝ悶絶したとしても、そういう苛酷な被虐の陶



酔であればある程、皓子の限らないマゾヒズムの充実感を存分に味あわせて呉れることでしよう。

そんな素晴らしい身も心も溶かすような被虐の陶醉に浸たれたら、何の未練や悔がございましょう。

——淀みなく流れる宿命の被虐。皓子はこの幻想に身を灼き悶えるのでございます。

療養生活に這入ってから、私の「奇ク」に対する執着は募るばかりで、不自由なベッドで幾度びその頁を一枚一枚めくり、写真や挿絵に喰入るように眺め入ったことでしよう。

病床に臥してから皓子の生活は、絶対安静の時は、明けても暮れても食ふることと、空想に遊ぶことだけ、大分よくなつてからはそれにラジオを聴くこと、読書をする事、それに内緒で書くことが加わりました。

社会の生活から絶縁され閉じ込められた侘しい生活ではあつても病氣という心の痛手を除けば、それ程淋しく詰らないと感じたことはございせん。結構愉しいものでした。

愉しい？ えゝそうなのでございます。

母や兄の心配をよそに何という云い草でしょう。何という親不幸な皓子でしょう。

皓子は告白致します。罪深い皓子でございます。皓子はお母様を欺きました。本当に申訳ございません。でも皓子はそうするより仕方がなかったのでございます。

皓子は「カテーテル」で御小水を採って呉れるように、母に駄々を捏ねたのでした。母は私が羞恥のあまりそう云つたのであろうと誤解して素直に私の願いを訊いて下さつたのです。皓子はそれをい

ふことに、それを弄びました。カテーテルの歓喜にうち震えたのでございます。皓子は母の忙しい手を煩わして、幾度も幾度も、うるさくせがみました。

皓子はそればかりか、自分自身でも度々、カテーテルを挿入しました。云い知れぬ情感の嵐に私は身悶えたのでございます。

皓子は病氣をよいことに、自分自身の欲望を満たしていったのです。何という破廉恥な行為でございましょう。私はこんな自分を浅ましいと思ひながらも、それからというものも次ぎから次ぎへと、いろんな刺戟と快楽を求めていったのでございます。

その狂おしいばかりの悶えは、いつ果てるともなく続いてゆくのが、それは本当に自分でも怖い程の、理性ではどう処置の施しようもない程、強いものだったのでございます。

そうして色々な妄想に頭を巡らしては、被虐のマゾ感の広場の中に自分を晒して、その悦虐に浸る私なのでございました。

二

私達一家の生活は、私が病氣になつてからというもの、総てが皓子の病氣の快方への努力のためにと切替えられてゆきました。

父亡きあと、それ程裕福でなかつた生活に更に私のために出費の嵩み始めた頃、母が遊んでいては勿体ないから、知人の料理屋にお手伝にでも行かうかと、仰有られるのでございました。然しそれでは充分な看護が出来なくなると云われて、皓子のために兄が反対されました。「そんなことは何とでもなるから」と兄が極力母に思い留るよう説得されたので、それはそれなりに済んでしまいました。兄は性格的には、温和なおとなしい人でしたが、一旦云い出した

ことは最後まで手を引かない厳しい処がございました。ちよつと皓子に似た処もございますが、これは一貫して父の血を引いている宿命的なものでございましょう。父の家は大変貧乏だったとかで学歴も中学までしかございせんでしたが、父の姉達が私の家に遊びに来ては——父はいつも首席で表彰されていたとか、大学までいっていらきつと、大物になれたとか、そんな自慢とも不平とも付かぬことをみんなによく話して聞かせていたのを今でも、はっきりと憶えております。

きつと、大変な努力型だったのでございましょう。兄がそれによく似ています。そればかりではございせん。容貌が父にそっくりなのです。私はよく父の亡霊が現われたのではないかと、ハツと胸を衝かれることがございます。

そんな兄が大学を出て、会社勤めの傍ら株を始め出したのは二十七年の一月でございました。兄は生来があまり勝負事の好きなたちではなかったと思うのですが、何故か株にだけは異常な執着と興味を抱いているようでございました。ダイヤモンド、東洋経済新報やその他の経済誌をよく読んでおりました。罫線を引きながら、此処を突っ切れば噴きあげると云って、その山を指示しながら眸を輝かせていることも度々でございました。

私がいつでしたか株は賭博ではないの、とその危険さを指摘しますと、兄は私の智識や認識不足を笑いながら反駁し、果ては理論的に経済原理などを説いて要領よく私にその否を呑み込ませようとするのでした。

そうして又、稀代の相場師山崎種二や鈴木久五郎の話を興味深く語って呉れ、更に山種、鈴久と相場師からは呼ばれているのだよと

いって、最後に榎本健一を引張り出し、みんながエノケンと愛称するのと同じだよ、と云って笑わせたりするのでございました。

私が田村淑子さん（女優の）が鈴久の愛娘であるのを知ったのはその時でございました。

そんな訳で、不安ながらも母までが今では株に興味を持ち出し、ラジオの経済市況はかゝさず聴きますし、新聞も今では真先に経済欄を見るようになったのでございます。

昨年三月、スターリンの重態説が伝えられた時、私達一家は分けても兄の顔は蒼白で心なし慄えているかに見えました。

「暴落だ！」

兄は一言そう呟くと、その日は朝早く証券会社へ出かけて行きました。帰宅してから黙っていて、母が心配そうに訊きますと、「三、四万すったよ」だけだ、大丈夫だよ、心配しなくても……逆に安いから又買ったよ」

兄はそれだけをポツリと吐き出すように云うと、諦めたように自分の部屋に行ってしまうました。私が倒れるちよつと前の事でございます。母も私も只呆然とするだけでした。

「失敗は成功のもとさ」

兄はそう云って、未だ性懲りもなく勤めの傍ら株をやっているました。

皓子が寝込んでからも、儲かったからと云っては、お菓子や果物を買ってきて呉れたりしました。損をした時は、決まって黙っていました。すまして何も云わないのです。相場だから仕方がないと諦めていらっしやるのでしよう。そうして現代と云う瞬間の中で、兄は兄なりのスリルと冒険を試みているのだらうと竊かに私は想像し



武

てみたりするのでございました。

そうなのです。でも皓子の恥しい冒険等とは全々性質が違うものですし、私の忌わしい遊戯とは全くかけ離れたものなのでございます。

皓子は幾度、自分の心を浅ましく恥しいと思ったことでもございました。幾度心の中で泣いたことでしょうか。でもどうにもなりはしないのでございます。

皓子の部屋は、五間あるうちの一番奥まった、静かな三帖の部屋が当てがわれておりました。小さいとは申せ、この部屋が私の一日の狂おしい生活の場所なのでございます。

この部屋からは、窓の前に吊るされた白いレースのカーテンを通して、青く澄みきった広々とした窓が見えます。星のまたゝきが展望されます。小鳥が見えます。虫の声が訊かれるのでございます。窓は換気のために、一日中昼も夜も開け放たれてございますが、そこからはいつも新鮮な空気が、部屋いっぱいカーテンを靡びかせながら、軀を撫ぜるように、それはまるで皓子の肉体を包むかのように吹き込んで参るのでございます。

この穢れのない新鮮な空気に引替えて、私の澁んだ浅ましい心の汚れは、一体どうでございましょう。あゝ、神様、この罪深き皓子を、お救い下さいませ。お許し下さいませ。

三

皓子の主治医は三十七、八才位の、どちらかと申せばわりと色黒の、そうして普通の男の人よりも大変髯の濃い、体軀のがっちりとした骨太の逞しいお医者様でございました。慶応出のお医者

様とかで、わりと評判のよい先生でいらっしやいました。

その先生は、それから週二回ストマイの注射のために、私の家に往診されるようになりましたが、私は胸も露らわに聴診器を胸といわず背中に押しあてられることに、云い知れる興奮を感じて胸を躍らせるのでございました。ズロースの中に大きな手を入れられて、静かにじわじわと私のお腹を圧えられました。何という衝動に痺れる瞬間でございましょう。ズロースをもっと下げて呉れたら。でも先生は、ストマイの注射をされると、さっさと帰ってしまわれるのでございました。何の感動もなかったように、それはまるで無表情に……私はこの態度に少なからぬ失望を感じると、物足りなく思うのでございました。私はそんな先生に苛立ちさを、ひしひしと胸に感じると、又しても私の妖しい妄想が頭を占め、牙を剥き出しにして私の心を責め苛むのでございました。被虐の糸が私を操るのでございます。

私はもうたまらなくなり、そうした妄想の冒険が一層私の心を苦しめ粗暴にした、或る日、私は大胆にもその欲求を満す為、私の肉体を先生の前に投げ出したのでした。只私の浅ましいマゾ的被虐願望のために、玩具のように皓子の軀を放り出したのでした。

いつしかもう一と月以上が経過していました。始めて先生が往診をなさるようになってから、私の軀も注射のためか心持快方に向って行くように思われるのでした。

始めのうちは、先生が来られると帰られるまで私の部屋に母は付きっきりでしたが、それでも月日が経つうちに、先生が来られると母はすぐに私の部屋を出てゆかれるようになりました。

そうした或る日、私の冒険の口火は遂に切られたのでございま

した。

胸を躍らせ待ち恋がれる私の部屋に、母に案内された色黒の先生が無表情に這入ってこられると、母はドアを閉めて出てゆかれまして。

「如何です。変わりありませんか？」

腰先生は這入ってこられるなりそう仰有られると、椅子にどかどかとおろされながら私の脈搏を取るために、そっと私の手首を握られました。又しても何の感動もないかのよう——。先生が手を離されたので私は期待に慄えながら、乳房も露らわに胸を押し拡げたのでしたが、次の瞬間、私の期待は見事に裏切られてしまったのでした。

「もう診なくても分っていますから……」

何という疎っけない言葉でしょう。私は一時に力が抜けてしまったように、がっかりして眼を閉じると、静かに胸をかき合わせるのでした。

その瞬間、私の胸には何か先生に反抗してみたいような、うんと逆らってみみたいような不思議な気持が、むらむらと燃える焰のように拡がってくるのでした。私はそんな不思議な気持で、蒸溜水のアンプルを切る音や、薬液を容器の中でゆすぶる音や、注射器にチュツチュツと吸い取られていく音を聴いていました。

「さあ、腕を出して……」

先生がそう仰有られた時、私は必然的にその先生の声に合わせて、自分に、自分の左腕を右手で確りと抑えていました。と、同時に、「そのお注射痛いから腕にするの厭。痛いから腕にしちや厭——」私はまるで駄々っ子のように、もうポーズと訳の分からぬ興奮に

全身を上気させながら夢中でそう口走ると、潤んだ眸で先生の無表情な顔を上眼使いに、じっと見上げていました。私は務めて成るべく大げさに、しかも手の付けられぬ駄々子のように振舞ったのでございました。

そうしてその動作の裏には、ちやんとその反応を期待するもう一つの眸を大きくじっと見開きながら、……それは人間の躰の中で一番鈍感な臀部への期待を込めながら、私は自分の間に対する先生の答えに、じっと耳を傾けるのでした。しかも私は瞬間、チラッと先生の黒光りする顔の中に、当惑の表情の横切るのを見逃しはしなかったのでございます。

先生は明らかに宥める^{なだ}るように、しかも本当に当惑されたような顔付きで私を見返して、「困りましたねエ、そんなに駄々をこねては……、貴女はもう大人なんだから、少し位、痛いのは我慢しなくては……それにみんな貴女のためなんだから、そこをよく呑み込まなくっちゃ……いいですね」

と、諄々として先生は仰有るのですが、更に言葉を次がれて、「でも、どうしても痛くて我慢出来ないようでしたら、ヒップにするより仕方ありませんが……此処では厭でしょう」

先生はじっと私を見詰められておられました、私の胸はその期待通りの反応にもう躍り出さんまでに、その次の瞬間への期待へと燃えていました。私は只一言、

「お願いします」

と、蚊の鳴くような声で囁くと、くるっと躰を横向きに振って寝巻を捲りズロースをずり下げるのでした。何て浅ましい行為でございましょう。何も自ら好んで臀部なんか注射をして貰わなくとも

よいものを、後から考えますと、こんな自分が本当にやりきれなくなるのでございますが、その時の私の好奇心はそれを許しはしなかったのでございます。

私はとうとう先生の好意まで蹴ってしまったのでございます。あゝ何と云う女でしょう。先生は一体どんな気持でこの私を眺められたこととございましょう。罪深い女です。

瞬間、ツンと鼻を刺戟するアルコールの匂いに酔いながら、私は興奮と歓喜に我身を灼かれる思いで、ヒップへ注射を受けたのでした。注射は簡単に終わってしまいました。注射はそれ程痛くもありませんのに、只自分を露出してその侮辱的悦虐感に浸りたいという浅ましい願望のために悶える私なのでございました。その恍惚感、私を一日中愉しませてくれたばかりではなく、それ以来というものの、私の日々は、週二回の先生の往診を待ち恋がれるようになったのでございます。

併しやがて、この冒険にも飽きてしまうと、私は次の新しい冒険へと駒を進め、胸を躍らせるのでございました。

ストマイのクール、四十本のなかば以上を注射し終った或る雨の日、私は先生の往診を待ち詫びるのも、もどかしく、やがて先生が部屋に這入ってこられて、

「何か変わったことはありませんか？」と仰有られて型通りの問診を始められました時、

「先生、お腹が脹って気持が悪いんです」

私は又しても大胆な計画のために、齒の浮くような事を口走っているのとございました。

「お通じは？」

「この処五日程ないのです」
 昨日、ちやんとあったばかり
 ですのに、私は又しても、こん
 な出まかせを云って、浣腸願望
 のために胸をときめかせるので
 した。

「五日ね?」と、先生は首をか
 上げておられました、やがて
 「それでは注射の後で浣腸しま
 しょう」

と、仰有るのです。

浣腸——。私は一時に頭に血
 の上ったようになり、カッ頬
 がほ照ってくるのが自分でもは
 っきりと分るのでした。手応え
 は充分あったのでございます。

奇妙なことには、ストマイの
 ための注射器が、まるで浣腸器
 のように私には見え始めたので
 した。注射が終って浣腸に移った時、私は進んで自分のヒップをベ
 ッドの縁の方へ突き出すようにして膝を折り、次の瞬間への期待に
 燃えたのでございます。

ゆっくり薬液が注入され始めた時、それはまるで私の軀を溶解し
 てゆくかのように、ひしひしと腸に滲透してくるのでした。

あゝその時の感激を、何と云い現わしたらよいのでございませう



武

う。私は両手で顔を蔽いながら、その燃える歓喜とエクスタシーの
 陶酔の中に浸っているのでございました。

この皓子の気持を判って下さる方があられるでしょうか。恐らく一般
 の方には想像もつかない心理でございませう。

でも大変失礼でございしますが、森野茂様、山田芳枝様、羽村京子
 様のような浣腸マニアの方々ならば、きっとこの狂おしい私の気持

を分けて頂けることゝ竊かに念じております。

それにしましても、皓子も一度でいいからイルリガートルで思う存分に、お腹いっぱい流暢されてみたいと、この頃では思っているのです。それ私も私自身からではなく、皓子の氣持をよく理解された方に、無理矢理に流暢されてみたいと思っているのです。

四

例年のように今年も、町内の華々しくも賑やかなお祭りが御輿の掛声と共に終り、又レコードの音頭に載せて踊る老若男女の楽しい盆踊りのひとときも、どうやら終わったようでございます。そうして残暑厳しい一日一日が、秋の訪れと共にやがてその熱気を、次第次第に失っていくのでございます。

今日も又、競輪を知らせる花火が、パンパンと耳をつん裂き聾をゆすぶるように聴えてまいります。みんなその音に憑かれたように一本の糸に操られて競輪場へ集って行くのです。

殆どの方が損をするのでしように、みんな一攫千金を夢みて、その瞬間の儚ないスリルを愉しんでいるのです。その貧しい人々から搾りあげたお金で学校が建ち、貧しい者の犠牲で道路が出来るのです。

又、憲法を改正して再軍備をするとお豪方は云います。鉄砲を造ってどうするのでしょうか。再び悲惨な戦争のスリルを愉しもうとするのでしょうか。そんなお金があったら、日本中に溢れている不幸な人達を救うためにそれを使って頂きたい。その方がどれ程、氣がきいていることでしょうか。

平和を口にしながら、軍需株で兄は儲けている。何という矛盾でございましょう。

何かが大きく狂っている時代なのです。それだからこそ、希望が持てないのかも知れません。だから競輪狂は競輪狂なりに、役人は役人なりに、代議士は代議士なりに、ジャーナリストはジャーナリストなりに、兄は兄なりに、サジストはサジストなりに、そうして皓子は皓子なりに、それぞれのスリルと冒険とを求めて、その瞬間を愉しんでいるのかも知れません。

その夜、私は母の心配のうちにも、ちよっとだけという約束で、もう虫の声も哀れにきかれる夜道へ久し振りに散歩に出ました。

私の足は魅せられたようにある方向に向うともう本屋の前に立っていました。病氣のために久しく手に出来なかった「奇ク」を、私は胸を躍らせながら求めると、ある木影に這入りその本をズロースの中にそっと忍ばせて家路に着くのでした。

迎えに出た母に散歩の氣分を伝えると、「お休みなさい」と云って私は自分の部屋に這入りましたが、目的は充分に達せられたのでした。そうして私は、久しく味えなかった「奇ク」の一頁一頁を、喰入るように歓喜に打ち震えながら見入ったのでございました。

皓子にも、充分に思いあたるふしはあるのですけれども、近頃また、おりものが多くなり始めました。

病氣の躰ゆえ入浴も出来ませんので清拭だけで我慢しておりますが、それで一層不潔になりやすいのでございました。

黙っておりましたが、或る日、母が目聴く嗅ぎ付けて婦人科医へ一度行って診て貰うように奨められ、私が躊躇していますと、羞しがっているとでも思われたのでございましょう。母はお母さんも

娘の頃よく婦人科医へ通ったことを私に話されて、なるべく私がその気になるようにと、その必要性をくどくどと申されるのでした。母は、そうです。純粹で人を余り疑がわぬ母は私のことを何も知らないのです。

私が三ヶ月のメイドの生活で、いやという程味わされた侮辱も、そうしてそれから始めの羞恥心は何処へやら、その後、その時の刺激とスリルが忘れられずに、思い出したようにしては「生理不順」と偽り三度程、産婦人科医に訪れたことも、母は知らないのです。

います。

皓子は、いつしかそんな雰囲気で味わされる刺激的な行為に、云い知れぬ悦びを感じるようになったのでございました。女にのみ許された特権を弄ぶことを覚えたのでした。

乱暴で残酷で羞恥の度合が大きければ大きい程、私の楽しみも深まり、強烈な興奮と陶酔の渦の中に浸たれるのでございました。

こんなマゾ的気持わかって頂けるでしょうか。

武

私は母にそう促がされた時、胸の鼓動を抑えながら、それでは大変いやなのだけれどもお母様のたつの希望ですから、親孝行のつもりで皓子は思い切って行きますというような意味のことを、娘としてのひとりの慎ましやかな態度で母に申上げたので



した。

申すまでもなく母はよろこびました。その心の過程はどうでありましょうとも、結果においては母をよろこばせることになったのでございます。

その翌日、私は十時頃家を出ました。なるべく遠くのお医者へ行きたかったのですが、体力が許しませんので一番近くのS産婦人科医の門を押じたのでした。

一人患者があつて三十分程待たされましたが、やがて二十七、八才位の女の人が心持ち震れた表情で着崩れした軀を引ずるようにして診察室から出てくると、大儀そうに私の側に座りました。

私はこの女の人が、今、掻爬手術を受けてきたのであろうと想像しました。そうしてその女の人の御主人？なる人を想像し、その残酷な手術過程を頭に思い巡らせている時、私は「お待ち遠さま」といって看護婦に招じ入れられました。私の胸はもう苦しいばかりに動悸しているのです。

診察室の中で、私は四十五、六才位の瘦型の先生の前に立つと、型通り住所、氏名、年令を訊かれた上、結婚は？とか、月経は順調ですか？とか、以前病気をしたことがありますか？とかを手短かに要領よく問診されてから、私を検診台へと促すのでした。

先生は私の軀を丁寧に診察されてから「膣炎」の初期と診断され一週間も通えば治ると仰有るのでした。

私は不安と悦び？との入り混った不思議な気持ちで帰宅しますと、早速その旨を母に伝えるのでした。母はそれと驚と云わんばかりの表情で私をごろんになりながら、それでも行ってよかったという顔付きで、

「膣炎は早いうちなら直ぐ治りますよ」

と仰有って私を安堵させようとなさるのでございました。

あゝ、何ていゝお母様なのだろう。それなのに皓子は、こんないゝお母様を裏切るなんて……。ママ母なのに、なんてやさしくいゝお母様なのだろう。（大きくなってから知ったことなのですが、実は私が子供の頃自殺しました）あんまりいゝお母様なので皓子には物足りないのです。何故もって叱って呉れないのか知ら……。

それから五日目、私がいつものように検診台にのぼりますと、その日はカーテンも引かずに先生は治療を始められたのです。故意になのか忘れたのかは知りませんが、とにかくそのまゝ始められたのです。私は患者が、カーテンも何も引かずに検診台の上からお医者さんの顔をじっくりと見られるようになれば、その女も一人前だ、といういつか聴いた話をその時思い出していました。私には未だくともそんな勇氣はございませんでした。

それでも好奇心から、顔を蔽っているハンケチの隙間から、わずかに覗見するように窺う私なのでした。

私の治療は、洗滌が主なものでございました。先ずカテーテルで採尿されてから、イルリガートルで充分に患部を洗滌され、塗薬されて治療を終るのでございましたが、それにしても、カーテンを引いていないと云うことで、どれ程私のマゾ悦虐感が増され、その陶醉に浸られたことでもございました。

カテーテルは、前に申上げましたように、私は家で公然と使用しておりましたが、それでも家庭での雰囲気と病院でのそれとは、気分的に可成り違ったものなのでございました。本当に不思議な位でございます。

それよりもイルリガートルを見る時の皓子は、もう何か訳のわからぬ興奮に身を灼かれる思いなのでございました。私はまた洗滌に洗滌とは違った刺激と喜悦を覚えるのでございました。

そうして私は洗滌の最中に、若し先生が間違えて嘴先を肛門に挿入して下さったら、こんな愚かな願望まで想像してみるのでもございました。

私は治療という女にのみ与えられたノーマルな広場を、しかも神聖な広場を、自分の都合のいゝ享楽とスリルのために活用し、酷使していたのでございます。

治療に対して先生は、私に一片の慈悲はおろか、同情のかけらもお示しにはならなかったばかりではなく、ひどく威圧的な態度で振舞われるのでございます。

お医者様の立場から見れば、こんな一片の感傷は禁物なのでしようけれども――。

お医者様が急立てるような高圧的な態度で、患者の躊躇を無視されていくことは、ある意味では羞恥心に富む女性にとって、そうして少くとも私のような強度のマゾ感の持主にとっては、それだけでも充分にある一種の満足感に浸たれるわけで、倖せなことなのでございます。

私達女性が婦人科医にお世話になる機会は可成り多い訳ですが、それにしましても女性にのみ許された特権をマゾ心理の満足のために利用出来るということは、この頃では神様に感謝したい気持ちでいっぱいでございます。

五

皓子は近頃よく思うのでございますが、「処女」とは一体何なのでございましょう。

どうして、女だけが問題になり、そのことで苦しまなければならないのでございましょう。キンゼイ報告書の中には、「女性の五十分は結婚前に処女を失っている」という項目が挙げられてありますが、私はこの事に非常な興味を惹かれたのでございました。

申すまでもなく、これはアメリカ婦人を対象としたもので、一つの調査資料にすぎないのですから、日本の女性の実態では決してないのですけれども、しかしこれは一体、何を意味するのでございましょうか。

ある人々は、十四年もの歳月と莫大な費用の浪費であると極めつけ、激しく非難しました。でもキンゼイ博士は、これによって道徳ですとか反道徳ですとか、正常ですとか異常ですとかを判断しようとしたのではなかったと私は思うのでございます。

ですから科学的な価値を高めるために、過去の経験とか、環境、遺伝などを学問的に分析されたのです。私達はその資料の示す数字が、どのようなものでありましようとも、それに就いて文句のいゝようはありませんが、要するに、女性を社会が、また個人が、これをどう受取るかということに意味があるのではないかと思うのでございます。

しかしこれで、「女性とはこんなものだったのか」と、世の男性がサジを投げるのは早すぎると思ひますし、一方また、女性自らがこのように思い込むのも早計に過ぎると思うのでございます。人間が性慾の対象にあります以上、女性だけがこの圏外にあるはずがありませんし、これに執着するのは当然でしようけれども、こゝでは

その是非を申上げるのが本筋ではございませんから、その詮索は置きますとして、私のように自らの行為によりますものは、一体どうなるのでございましょう。

婦人科の先生は、「貴女は処女ではない」と、皓子に仰有いましたが、若し私が結婚した時（今の処そんなあてなんてございませぬけれども）良人たるべき人に、初夜の出血や疼痛の有無に処女を疑われるのではないでしようか。こんな場合の弁解に、おそらく男は耳を傾けはしないでしょう。

その後何があるかは、分り切ったこととてでございます。ですからそこには少くとも皓子にとりましては、より以上に総ての点において深い理解と愛情に満ちた方なくてはならないのでございます。

皓子のお友達に、婦人科医の方と結婚された方がいらっしやいます。私は近頃よく、このK子さんを羨ましく思うことがございます。何故ですか自分でもその理由は、はっきりと判らないのでございますけれども、何となくそういう方でしたらきっと、深い愛情と暖かい理解の眸を持って、皓子のような女を暖かく抱擁して下さるのではないかと知ら、と云うような一つの希望的観測をしてみるのでもございます。

でも却って、そういう立場にいない人の方が、案外皓子の好奇心

君の試論を読んで、二三の誤りを指摘する。第一は、現代人の倒錯心理や、倒錯愛好の傾向は、個人の病的傾向のなせる業ではなく、原、水爆による人類破滅の恐怖と絶望が拭ききれない限り、なお夥しく激増して行くに違いない、「病める世界」の免れざる現象である。と判断し、又、倒錯心理を発生せしめる原因を、政治の貧困と不

を満足させて下さるかも知れませんが、まだ今の処、皓子にもよく分かりません。

そうしてこれは、女性特有の本能でしようけれども、あるいは私が成長したせいでしょうか、私は近頃よく子供のことを考えます。可愛い子供を見ると無性にたまらなくなるのでございます。最近また、大変よく効く婦人科用の麻酔剤が出現したそうでございますが、その注射をし終るか終らぬ中に、もう知覚を失ってしまう程よく効くのだそうでございます。

婦人科の手術や無痛分娩に使う麻酔は、アメリカ式なのだそうですけれども、それはそれとしまして、数時間も仮死状態にさせられてゐるなんて、ちよつと考えると薄気味悪くも感じられます。手術など痛くないことは勿論望ましいのですが、でも私は出来ることなら成るべく麻酔は使用したくないと思うのでございます。と、申しますのは、私のようにマゾ感の強い女には、知覚を失っていると、いうことそれ自体に一つの大きな不満が感じられますし、その刺戟によります興奮と熱い衝動が享受できないからでございます。

皓子が将来、もし子供を産むことがありましても麻酔を使わないで、いとし子のため、夫のために産みの苦しみを、精いっぱいひしひしと味わいたいと思っております。（おわり）

信、社会の不条理と不合理であるとも、判断されている。従ってそれ等の発生を、個人の素質や性格には重点を置かず、社会に基盤をおいている。

この様な見解は、独断と、偏見と、誤りが内在している。即ち、倒錯愛好の激増を社会的現象や、政治的影響によるものと断言しているが、之は少し言い過ぎではある

まいか。君の文章を読んでいると、倒錯者が増えたのは、政治や社会環境が悪い為のように受取れる。なる程、敗戦後は、我が国の政治や、社会は混乱し不合理を極めて多くの犯罪者を出し、倒錯者も増加したことは事実である。しかし戦時中やその以前に於いて、夫等の倒錯者が少なかったかと言うと、そうではなかった。可なり多くの

者がいたが、政治的の
圧力で社会に報道され
なかっただけである。

敗戦後、新聞報道の自
由が叫ばれて、それ等
の記事が誇大に社会面
のトップ記事として、

報道される為に、戦前
に比較して著しく増加

したかの様な錯覚を起

している為である。君の論法で言う、政
治や社会が健全であると、かゝる倒錯者は
減少することになる。我が国より政治や社
会状態が優れていると見られる欧米諸国に
男色を禁止する法律があったり、公認され
たソドミアの政党が存在したり、占領軍 G
I に多数の倒錯者が見られるのを、君はど
う説明するか。

第二に、君は倒錯心理に、十分同情しな
がら、根本的に共鳴し得ない根拠に、ヒュ
ーマニターをあげ、人間はあくまで、眼ざ
めていなければならぬと主張している。そ
して理性的な希望を以って、社会の不安や
危機を阻止して、平和と幸福な社会を作れ
ば倒錯者が無くなる様な主張もしている。
又君は倒錯者の心理を、モルヒネ患者に比
較して、病的現象の如く取扱っている。又

集團心理に現れる「倒錯」の

考察に反駁する

滋賀雄二

君は、この問題の昇華の方法や解決の緒を
倒錯本能の解剖や解説に見えそうだと
言っている。

君に反対質問をしたい。君の主張するヒ
ューマニターに基いて、あくまでも眼ざめ
ていなければならぬ、と言うことはどんな
状態の倒錯者を指しているのか。君は口で
こそ、同情的と言っているが、倒錯者に対
して倫理的に批判してはいないのか。又君
は、倒錯者や倒錯愛好者を病的とそうでな
い者との、区別しているが、その限界線を
何処に引き、その発生をどのように観察し
ているのか。又平和と幸福な社会とはどん
な政治形体をさすのか。

兎に角、君の論法でいくと、資本家や経
営者は総べて、嗜虐の満足を味っている連
中であり、社員や工員や患者は総べて、被

虐本能を満足している
ことになる。したがっ
て、資本主義社会や専
制主義社会の続く限り
永久に倒錯者は増加し
てゆくことになる。

君は、この問題の昇
華や解決の緒を、社会
事象の中に起る、人間
の倒錯本能の解剖や解
説の中にあると言われるが、大切なことは
解剖や解説でなくて、それ等の組立てであ
り結合であり、解剖や解説する態度であ
る。

換言すれば、倒錯性という性本能を、如
何なる立場で解釈し、社会事象の諸々の因
子と、どのような関係で結びつけるか、重
要な問題になってくる。倒錯性が社会問題
だけで解決されるならば、君の主張するよ
うに、最後に書かれた遊戯と趣味は、影を
没するであろうし、本誌も購読者が減少し
てゆくであろう。ところが実際はそうでは
ない。

最後に一、二の集團心理に現れた倒錯性
心理を以って、あらゆる社会現象を類推す
ることは、非常に独断であり、偏見と言わ
ざるを得ない。

草双紙に見る

女 腹 切

川合伊都子

逸と進妻ちさい



楠正儀の遺子由利多聞介朝雪は後醍醐帝の御陵を吉野の奥に探ね、我が父祖や南朝の忠臣の夢の後を弔わばやとやって来ます。山路不案内のため路に踏み迷いますが、二人の樵夫に出会い、彼等に教えられて御陵とおぼしき玉垣を廻らした奥津城を発見します。多聞介は御陵の前に額づき、己れの志をのべてそのまゝそこに仮睡しますと、菖蒲の内侍の霊が現われて帝も彼の忠心を嘉納される由を告げ、又災いあれば疾く目覚めよと言われ驚き覚めると、先刻の樵夫が鉞をふり上げ將に打

下さん風情にぱっと身をかわし、とど二人を取って押さえ、究命すると彼等は盗賊の首領茨木童女の手下とわかり、多聞介はその棲家へ乗込みます。

首領茨木童女実は吉田辰丸という南朝の遺臣で、足利を討たん軍用金を集めるため、女装して賊をはたらいていたのでした。多聞介は再会を約して吉野を立ち出で、奈良の旧都に向い、ここで木辻の廊の遊女浮寝屋の綾琴の春日詣でに出会ったのが縁となり、女の方から打ち込んでしまします。

一方、無頼の徒から頭領と持上げられている鳴橋周弥は、綾琴の色香に迷って通い続けますが、綾琴がつれなくするので、これは多聞介があるからとこれを殺そうと窺います。周弥は廊帰りの多聞介を待ちうけ、用意の槍で突刺し、してやったりと走り寄って月明りに見ると、思いがけず手負いは綾琴だったのだ、これはとばかり仰天します。綾琴は苦痛を呟いて語るところは

「あなたは新田義興様のわすれがたみの新千代様、妾の父御は譜代の家来、その名を亘小新吾と呼ばれしもの」

義興討死の後、新千代は小新吾夫婦に育てられ娘あやめと乳兄妹というわけでしたが、小新吾が大病の時、悪医者のために薬代を騙られてあやめは遊女の境涯になったのです。

「されば今よりみ心改められ、よからぬものと交わり給わず、妾がたのみし御方と結び給わば新田、楠両家の若君一味合体遊ばして義兵を挙げさせたまえかし」

という折から多聞介もこの場へ来合わせます。こゝで多聞介と周弥とは互に足利討伐の誓いを固めますが、綾琴はそれを見てにっこりと笑い、己れが人手にかゝって果てたことあつては二人に疑いがかゝることを思い、「自害のていにもてなさば他に詮議はかゝるまじ、とくとくこゝを立ち去りたまえ」と言いつゝもかねて用意のひと振りを抜く

より早くわれとわが腹一文字に搔切ってかえす刃にのど筋刺し通して果てます。

この草紙は為永春水作、梅蝶桜国貞画。初篇は安政五年初春に出版され、嘉永五年に第十六篇が出ていますが、その後完結されていません。

遊女綾琴の切腹は第九篇の下にあります。画は「少年及び女性の切腹」(奇ク、昭、二八、五)のカットに出て居ります。尚この双紙には女の腹切がもう一人ありますが、それは多聞介がまだ田鶴若丸といった時代に養母である由利の後室南木で、これは南木の所持する軍学奥義の一卷を奪わんとする領主の弟常闇蔵人に一太刀刺された後、蔵人を追いその家来を刺し、死骸に腰打ちかけて、切腹する場面です。

邯鄲諸国物語

一名種彦諸国物語とも題しています。第六篇以上播磨の巻上下三編は「附たり、鎗の権三が石突擲んでずんとのぼした昔の小唄、並びに奴遊女三笠が振り出した六方は丹前風呂の今様姿」とあります。この巻に遊女三笠、後に逸之進の妻おさいの切腹の場面が出て来ます。作者は言うまでもなく柳亭種彦、画は歌川国貞、第六篇は天保十一年、第七、八篇は同十二年初板。

浮島大江之介の家臣浅香逸之進宗味は、逆臣青淵帯左エ門一味を討った後、殿の御前で室の津の遊女三笠を老臣岩本源次兵エの娘分として祝言させられます。逸之進は、青淵と結んでお家を乱す主君の愛妾さうがにという遊女上りの女を斬って証拠を集め、室の津へ逃避してこゝで謀反人討伐の手筈を指図したのでした。

大江之介が室町殿の御機嫌伺いに上洛することになり、逸之進も従って行きます。その不在中、逸之進の茶道の弟子である笹野権三という小姓と、逸之進の妻おさい(三笠)が家中の川連伴作のために不義の汚名を着せようとする奸計にはめられます。伴作は、逸之進には自分の推挙したさうがにを殺された怨があり、又権三には槍の仕合で負けた遺恨があったのです。

間もなく逸之進が歴国します。どうしたとか、鬚を切って総髪にし、武士を捨て、丸腰のまゝです。皆が出迎える中に妻のおさいが居ないので仔細を尋ねると今朝から不快とのこと、逸之進は何か思い当ることがあるような風情で、人々を遠ざけ、おさいに茶を所望します。おさいは茶を立て、逸之進の前へ出ますが、彼の変った姿にはと驚き、どうしたとか茶碗をはたと落します。

——逸之進はほんと吐息をつき、「今日も

亦霜月酉の日、廻る因果は是非もなし、これおさい、父の譲りし差添にてそちや腹切ってしようがの」といわれてはと顔を上げ「御推量に違いなくこれ御覧遊ばせ」と双肌脱げば、

一文字に搔切った腹に巻いた白布が紅に染まっていた。

おさいは権三との不義の濡衣を乾さんがため、の自害だったのですが、逸之進にはそれとすべて因縁づくに思われたのです。彼はおさいの素性を知って見ると、彼女の父は逸之進の母を殺した男で、その日が霜月酉の日、おさいが自害に用いた刃物は、その忌わした刀だったのです。又おさいの前夫小丹次は青淵帯左エ門の息子で、父の悪心に似ず、忠義の心厚く、父が主君調伏の祈りに用いた刀を盗んで出奔し、おさいがまだ遊女にならない前夫婦となったが、僅かの間に刀の祟りで病氣したのでした。

逸之進はこれらの事情を知って、因果のおそろしさに浮世を厭い、大小すてゝ帰って来たわけだったのです。

この長物語の間、おさいは白布を引き締め苦痛を承えて聞いていますが、逸之進が「必ず青淵の跡目を立ててやる」という言葉を聞いて腹の布を解くとそのまゝ倒れてしまします。

——私の少年時代の告白——

脱腸帶の回想

森

太

一



前
書

全くよく似ているものだ。世の中に私と同じような体験者が居ようなどとは夢にも思わなかった。私が今まで何十冊となく買い求め

る雪夫少年こそ年来の憧憬だった。私がある小説を読み始めた時、余りにも私の少年時代と全く同一だったので、「おや、これは自分が書いたものではなからうか」と疑った位だった。読めば読む程、私の少年時代が生き写

た雑誌類に、ひよつとしたらあるかも知れぬと云う淡い期待を持っていた。私には、残酷な場面には何の興味もなく、山口幸一氏の「美少年の秘密」に於け

しのように描かれ、どんなに心を弾ませたことであろう。相撲禪に異常な興味を持ち憧れる雪夫少年こそ、私の少年時代その儘の姿だった。殊に、雪夫少年が兵児帯の禪を締めて蒲団に横たわっている光景は今でもはつきり私の経験として記憶している。禪に対する憧憬にもかゝらず、意思表示出来ない雪夫少年の気持は私にもよく解る、私が全くそうであつたからだ。「美少年の秘密」三ヶ月を通してどんなに胸をワクワクさせて読み返したことであろう。文章は勿論の事、挿絵に至つては倦かず眺めた場面であり、今まで今日

あるを期待して求め続けた甲斐のあつた事を喜び、生活する明かるい灯を発見したような気持ちであつた。

実は、私は前々から自分の秘めた少年時代の体験を告白しようと思つて何度となく筆を執つた。そして何百枚となく告白を書き続けたが、自分の告白など万に一つ採り入れられることもなからうと思つて中止した。しかし毎月々々の内容が私の好みとは相当ズレがあつて興味なく、ひよつとすると、自分の告白が新しい材料を提供するのではあるまいかと自惚れて再びペンを走らせるのであつたが、生来の不器用か文才がない為か、自分の感情を充分發揮できず、せつかく相当な分量にまでまとめ上げ乍らも、読み返えしてその稚拙さに業をにやしてその都度焼き捨てていた。書いては焼き、書いては破りする事何度か知れない。又、その告白をもし私の少年時代の環境を知つたり、文中の人物が万一読むような事があつたらという心配で私をして発表する勇氣をくじかせてしまつた。今度も、「美少年の秘密」を見て先を越されたような気がしている上に、最早私の告白など類似、模倣文などと思われるような気がして一度はためらつた。しかし、私の告白が雪夫少年と似

ているとは言え、或る面では少し異つていいると思ひ、どうしても発表せずには居れない気持ちになつて採擇如何は別問題として告白文を綴つてみようと考えた。私は雑誌に自分の文章を提出するのは始めてだ、自信は勿論ないたとえ一笑に附されようとも、とにかく、悶々として今日まで抱いていた意欲がこれで満たされれば目的が達せられるのだ。仮りに活字となつて私の眼に映ずる奇蹟があれば望外の喜びはこれにすぐるものはない。

小学六年生の時、学期初めの定例身体検査が午後の授業時間を割いて行われた。猿又一つになつた太一達が医務室の入口に並んで十名位ずつが順々に内科の検診を受けていた。済んだ者は何やらペチャクチャしやべり乍ら出て行つた。その時、Kがこんな事を言つてさも、さげすむような笑い声を残して出て来たので太一はドキンとした。

「脱腸の者は残されるのや」

太一が首を曲げて中をうかがうと、その為かSとOが、きまり悪そうに列から放れて変な顔で突立っていた。脱腸の症状のあつた太一は、自分もその仲間に入らねばならないかと思うと情無かつた。彼が殊に心配したのは

人前で辱しい部分を見られるであらうと云うことも勿論であつたが、それよりも尚困つたのは、小学三年の夏から覚えた習慣が見破れられはしないかと云う事であつた。その当時少しの想像で直ぐ体の一部に著しい変化を来たすようになっていたので、唯「脱腸の者は残される」と云う言葉を聞いただけで、むらむらと変な気が起こるのではなからうかと思つたのである。やがて太一達の順番になつて最後の一群が部屋の中に入り、ひげの生えたはげ頭の老校医の前に並んだ。太一は、今にも下腹がむずむずして来るようで、心の中で懸命になつて何事もないうちに祈り続けた。その間、太一は自分は陰で何の秘密も持たない子供であると他に思わせるように、平氣を粧い、わざと前の者に話しかけてまぎらせようと努めた。SやOばかりではなく、何か特別に身体に故障のある者は皆残されているのか、他に四五人がSとOの後に居た。校医が太一の胸に聴診器を当て始めると、机に向つて白い用紙に何かしら書き込んでいた受持の先生が

「森も脱腸だつたね」

と言つた。太一は急に顔が真赤になつて「ハイ」

と返事をした。それで案の定、残される組となった。太一の後には三人程で、全員が検査が終わったが、入口では、次のクラスの一団の裸が待って居た。最後の一人が出てしまうと、その一団の名ばかりがドヤドヤと入って来た。

「では脱腸の者からここへ来なさい」

校医の言葉で、太一とSとOが一行に並んだ。Oが最初猿又の紐をほどかれて診て貰った。太一は愈々駄目だと観念した。へはSだ。Sは誰一人として知らぬ者が無い偉大な持主、であだ名となる位有名であった。太一も実物をそれ迄何回となく見て居た。家が近所でありよく銭湯へ行っていたからだ。

「こんなに大きくては君も困るだろう。早く手術して貰いなさい」

校医がSに注意を与えた。



Sはさもてれ臭そうに少し顔を赤くした。とうとう太一の番に来た。太一はOやSのよう

に他人の手で猿又の紐をほどかれるより、自分から進んで見せた方が、心が変な方向に移らないと思い、先に紐をほどきさっと前を見せられるようにして置いた。校医が自分の方に体を向けたので、そうしようとした所、どうしたはず

か不覚にも、手はずれて落してしまった。ハッとしたが後の祭り、背後の一群でドツと笑聲が上った。太一は穴が有れば入りたい気持ちで、あわてて引きずり上げようとしたが、校医が、

「あゝよろし、よろし、その儘で、何も恥ずかしがらなくてもよい」と言っ太一の体を起こした。先生が見るに見兼ねたのか、

「お前達、済む迄外で待って居れ」

と、一喝した。それでぞろぞろと後すざりをしたが、衝立の横から首を出してまだ笑っている者も居た。先生は

ってドアを荒々しく閉めた。こんな一瞬があつて太一は、とんでもない恰好を多勢の眼に曝らしたが、心配した体の変化は全く起つてはいなかった。ほつと安堵の胸を撫で下ろしたが、それでも数名の者の視線が自分に集注しているの、何か今自分がとてつもない目に遇わされているような気持で、校医や先生の顔が別人のように見えて来た。校医から「こんなのは、治り易いが、……脱腸帯した事があるの」

と聞かれたので、したりしなかったり、……と答える

「面倒でも続けてする方がよいな」

医師はそう注意した。実はつい二三日前迄は脱腸帯を掛けていたのだが、運動の時に變に邪魔になり、又ゴム製である為に皮膚がかぶれてかゆくてたまらないので、ついはずしてしまったのだった。それで母がゴムの帯に白い木綿を巻いて呉れたりして、皮膚のかゆみだけから逃れていたが、腕白ざかりの少年にとつてはいやな道具であつた。太一は、して居ないでよかつたと思つた。若し脱腸帯などして居れば、恥ずかしさは倍加しただろうと考へた。校医は、何故か、太一に対する触診は丁寧で手を放さず、

「脱腸の人は、その儘ほつて置くと益々腸が下つて危険な事があるのだよ。君達、今日帰つたら、脱腸帯を掛けるなり、手術をするなりして早く治療するように。脱腸は、腸が下へ下がつて運動もやり難いし、第一銭湯へ行つてもみともないし……、若しその儘にして置くと、小さな穴から出て居るのだから、腸がきつく締められて、血が通わなくなり、大変な事になるんだよ。早い目に治しておけば心配しなくとも良いからね」

と三人にくどくどとその害を説き、治療を奨めた。太一は自分達にとって直接関係の深い話も、比較的軽症である為、深刻な気持ちになれなかつた。それよりも、校医の手の方に神経が集注し、努めて平然さを保とうとして、一度呼び起こされた気持は、どんなに冷静にしようと頑張つても頑張れ切れなくなりせつかくのそれ迄の努力も遂に水泡に帰してしまつた。太一は絶対絶命の立場に迫込まれやがて早熟な子供の例として其処に居並ぶ者にあわれな姿を認めさせるに違いないと半ば観念していた。顔から火の出るように紅潮し未だ肌寒い四月の気温が全く解らない位だつた。此の時位、脱腸である自分をうらめしく思つた事はなかつた。この為、今迄自分が卑

下し続けて来た事、脱腸帯と云う厄介な道具を絶えず体にまとい付かせねばならぬ事、特別な病的故障を持つてゐるが為に習慣があらわれる事、これから又、いつ治るとも知れない体の為、それが男として最も関心を持つべき場所であるだけに、太一の心は重かつた。幸いにも校医は其れを知つてか、太一の体に自分の白い上っ張りを押付けるようにして、誰からも気付かれぬように覆つて呉れた。太一が最も嬉しかつたのは、受持の先生から全く見られない事だつた。校医の白い上っ張り、普通の服のように、きちんとボタンを掛けたものではなく、下が開いて、小さい太一の身体を充分包んでいたのだった。校医は、更に続けて……若し手術をするお金に困る人が有つたら、学校の証明さえ持つて来れば、特別安く私が手術をして上げるから……等と言つたが、太一の家はそんなに貧乏でもなく、又手術を要する症状でもないと思つて居たし、まるで上の空で聞いて居た。やがて校医は、もう太一の症状など診る風ではなかつた。始めの羞恥心は次第に薄れ始め、更にもっと違つた行動を期待するようになって、我乍ら、子供としてはどうかしていると反省をしたが、一旦それ迄昂つた気持は、制し切れなくなり

こんな人の見て居る所ではなく、誰も居ない場所、校医にゆっくり診て欲しいとさえ思った。しかし、そんな大胆な気持が頭をかすめ乍らも、一刻も早く開放され度かった。校医は最後迄太一をかばって呉れ、自分で無残に落ちた猿又を取り上げて、紐を結んでくれた。太一は、それで誰にも気付かれずに済んだとホッとしたが、教室へ帰っても、猿又を落して全裸の姿をさらしたあわれな恰好が、いつまでも目にちらついてその日の授業は、まるっきり頭に入らなかった。太一はなるべく先生の目からそらすように心掛けた。が、先生は、太一の内心を知ってか、気持を紛らわしてやろうと云う思いやりか、読本を読むように名指されたが、その為かえって、クラスの間心を昂めるような結果になり、読む間皆が、自分のあの無ざまな恰好を笑っているように居ても立っても居られない切ない気持であった。

六時間の午後の終りの授業が済み、帰る太一の心は暗く、あっちこちから嘲笑の音が背中を差すようで、いっも連れ立って帰る友達も誘わず黙々として家に帰った。

机に向って宿題の理科をひろげても、鉛筆はてんで運ばず、何度もし医務室での光景

を反芻した。繰返し／＼臉に再現すればする程、何かしら、これからの一生が、今までとは一種違った世界に飛び込んで行ってしまいうような気がしてならなかった。

……昨日の森太一は明日から変わるぞ…

はっきり偶像化したわけではなかったが、莫然とそう思った。昨日まで経験しなかった喜びが明日からやって来るようでもあり、今までの堅く閉ざして決して人に知られまいと努めた緊張が緩くなり、又、未知の世界の扉が開かれて行くような気がしたのであった。

……あの時は、どんなにきまり悪かったか。

しかし、全然不快でもなかった…

奇快な勇気が湧いた。それは、困難を乗り越えたり、友達と争って勝とうと云うような勇気ではなく、もっと／＼秘密をさぐろうと云う気持であり、自分には、腕力はないけれど誰も知らない世界があるんだと云う、孤独な喜びであった。

太一にとっては、身体検査の最中、行われたと云うのが、残念で、若しあれが、校医独りの診察室であり、いやがる自分を無理矢理に裸にし、押さえ付けられて、長時間されたら、どんなに素晴らしかったか知れなかったもとより、自分から進んで診察して欲しい

等とはとても言える勇氣はなく、彼は、独り幼い心を悶えさせるばかりであった。

宿題の途中、ふと、脱腸帶を思い出し、久し振りに掛けて見ようと思い、タンスの抽出しから出し机の前に坐った。幸い誰も勉強部屋に居ないので、ズボンでそれを掛けた。太一の脱腸に合うように、左そけい部に当てる卵型のゴムの固い部分が付いて居り、その卵型の両端には金具が付いて、腰に廻わしたゴムの帯に連結するように装置してあった。太一は久し振りに、腰、臀部、そけい部に圧迫を感じ、快い気持になる事を覚えた。不思議であった。且ってこれを掛けた時は、別に特別な衝動はなかったのに、この時は、確かに太一を少し喜ばせた。脱腸帶を掛ける事は、今日校医も言っただし、平常から母や父がやかましく注意してきた事であるので、ずっと掛けて置こうと決心した。正に一石二鳥である。

身体検査の一件があってから、太一の秘密の習慣は、益々烈しくなっていた。

太一は余り友達はなかった。強いて言えば近所の者に限られていた。よくクラスの者が放課後、野球等に打ち興じたが、高嶺の花で仲間入りをしようとも思わなかったし、又交



じって運動出来る技術もなかった。

そう言うものの、運動に秀いでた者や、それによって鍛えられた逞ましい体に対しては非常に憧れを持って居た。彼は、いつか自分も何か強烈な運動によって誰にも負けない逞

ましい体格を備えている未来の姿を夢に抱い

て居た。所が、つきつめて行くと、決まってい体全体ではなく、身体の或る部分の逞ましい恰好に対して絶えず想像して居るので、そうなれば、更に喜びは大きいに違いないと思う

ようになった。

この望みは、中学一年二年と進み行くにつれて益々根強く心中深くはびこった。太一がそれについて、はっきりと形を捉える事が出来たのは、いつか銭湯で見た、太一の家の近所の長屋に住んで居た下駄の台の職人であった。ちやうどその日は夕方まで大分間がある明かるい時で、銭湯は、その職人とその五つ位の男の子と太一の三人きりであった。後から親友のMがきたので四人になったが、広々とした湯ぶねで、太一とMにとっては此の上もないよき遊び場所であった。二人は、プールよろしく盛んに茶目振りを發揮していると職人が湯に入ってきた。

彼はタイルの上にどかりと足を投げ出し、股をひろげて、人前もはばからず露骨な事をして見せるので、頭がどうかしていると思った。と、同時、余計にその勇敢？ さにすっかり感心してしまった。

湯に体を沈めて暖まっていると、仁王立になった職人は、自慢するかのように石鹸を泡立たせて体を洗いまくった。

あれこそ、僕が常々望んでいたものだ……と、気付いた。太一の目には、人間の体の一部とは到底思えない形体になって映じた。

不思議な現象であった。

太一とMが体をふいて脱衣場に出て、ガラス戸を通して中を伺った時には、もう何も注目すべき状態ではなかった。

その夜、寝床に入った太一は、職人の体がまぎ／＼と浮かび上がり、妄想は次から次へと湧き上って止まるところを知らなかった。それから、誰彼となく、大人を見ると、着物を通して体を必ず想像して、様々の型を勝手に描いていた。

東京から転宅したと言うので「江戸っ子」「江戸っ子」とあだ名された散髪屋の子供が居た。彼は、明かるい少年で誰彼からも好かれたが又、他所者として悪童連からよくいじめられた。面白がってからかうのだ。太一達の遊び仲間の最年長のBは高等二年生であったが、此のBがいつも先鞭をつけて「江戸っ子」をいじめた。或る時などは、「解剖だ」と称して、材木置場の囲いの中で板の上に押し転がして、バンドをはずし掛けたが、あまり大声でわめくので途中で止めた。その時、太一は、そんな目に遇う事を欲した。目的を達せられなかったBは、尚も襲いかゝったが彼は頑強に抵抗して決してズボンまで脱がされはしなかった。一度あわやと言う寸前まで

うまく行ったが、とう／＼泣き出してしまったので、期待していた解剖の実演を見られずがっかりした。太一はこうしたみじめな目に遇わされる少年がたまらない憧れであった。白昼、多勢に、しかも戸外で解剖されるなんて素晴らしい光景であった。それ迄、解剖と言う言葉と意味を聞いては居たが、実際見たわけでもなく経験もなかったので「江戸っ子」の時は、胸をときめかせて居たのに、遂に希望が果されず残念であった。太一が苦し仮りに、解剖されかけたら、「江戸っ子」のように泣くであろう。しかし、一度、全然見ず知らずの悪童連であれば構わないという気がした。それも、自分から言い出すのではなく、通りかゝって矢庭に、連れ込まれ、押さえ付けられて無理矢理にされるのでなければいであつた。自分からの一言で、チャンスは幾らでも転がっているのにとってもそんな勇氣はなく、唯偶然を期待するばかりの意気地のない少年であつた。

若し、襲われる事が予知出来たら、脱腸帶を掛けて置こう。

「僕がブラ／＼と何処か解らないが歩いてみると、不意に五六人の悪童が僕の体をつかまえて、囲いの中は連れ込んだ。僕は驚いて

思い切りの泣声を挙げたが、誰も助けに来て呉れない。むしろの上に寝かされた僕は、寄ってたかって、手や足を押さえ付けられて動かれぬようにされた。口もきけぬようにタオルでしばられた。（解剖してしまえ）と言う声が聞える。僕は、必死になって逃げようとするけれど、四人も五人もで寄ってたかって押さえられては、どうする事も出来ない。涙が頬に伝って流れる。やがて誰かが、ズボンを脱がす。（あ、こいつの猿又の紐真結びでほどかれないぞ）と云う。（ちぎってしまった）とけしかける。ブツンと紐が切られた。もう駄目だ。（なんだこれ、けったいなものしとおるで）（それ脱腸帶言うもんや、お前知らんのか。こいつ脱腸や）解放された僕はどんな顔をして家に帰るのである。その時は、どんな気持であろうか。きっと不快なものではあるまい。僕は、未だ小学校の六年生だけれど、これを非常に望んで居る。かくして太一の小学校時代は過ぎた。思えば早熟な小学校時代であつた。（未完）

私の少年時代の告白

- 一、脱腸帶の回想
- 二、幼稚小僧の幻想
- 三、少年の体臭
- 四、巨根崇拝
- 五、昆布と少年

Das Grausame Weib
Dr. Yohannes R. Birlinger

△ 残虐なる女性達 △

—— 1901年刊行の独文絵入単行本より ——

森 本 愛 造・訳

(教育者としての女性の残忍性)

(一)

冷血にして残忍な典型的な母親の一例を挙げよう。

〃或る温泉場のホテルの話、優雅でハイカラな女性が一人、テラスに出て一人朝食を摂っていた。すると、一人の青年が卓子に近づいて朝の挨拶をした。何の変哲もない光景であるが、その女性の最初の言葉は私達を呆然とさせるに足るものだった。つまり、婦人はこういったのである。

「お前。今朝はまだ、オスカル(OSKAR)を打たないのじゃないの？」而も、青年はすぐさま答えたのだった。「いいえ、打ちましたよ。オスカルの叫び声がお耳に入らなかったのですか？」

此の奇妙な二人連れは、八才になるひよわな子供の母とその執事であった。可哀想な子供、オスカルはこうして、毎日打たれねばならなかった。彼の教育者達は、毎朝の鞭打を、教育上有効で且つ不可欠なものだと決めているのだった。

一般的に母親達について執行が教育上の目

的に対して妥当であるとされているこうした行為や、其に伴う心理は同時に遠い親類の子供達が、此等女性の下で養育されたり、仿かされたりする時にも同様に適応するのである之等の〃女性対子供〃の関係には、例えば、継母、養母、女教師、女家庭教師、子守、及女中、等である。

然も、之等の場合は、母親の場合と異り、一切の同情や批判の観念は起らないのであるから、児童虐待の性的な昂奮は猶更に、露骨な形で、最も数多く見受けられるのである。殊に継母については、特に息子に対して肉体上の懲戒を加える時に純然たる鞭打愛好者の傾向を帯びてくる。

フルストラ(Frustra)は其の一例を挙げている。

(訳者註)此の引用文献の著者名について一時申添えておく。Frustra という文字から私という伊太利語である。即ち「鞭答」の意である。右の作者は正にこれから連想されたものに違いない。此の程度の連想は Kidrodstock キドロドシュトックなる作者名が Kid-rodstock (羊、笞、杖) という複合語である事などについて理解されたいのである。)

「多くの継母が、自分自身の権力の下に委ねられた児童を鞭で打つ現象も亦、ある特別な心理学上の傾向と見做される。継父及継母の概念は多くの国で、打擲を屢々与える者と同義に解されている。独断主義と愛情の缺除、残酷性と肉感性とが融合した形で突如現われるのである。此の場合にも、これまで幾多の例を挙げて来た様に、女性は常に優位を占めて居る。著者はこの点に関して数多くの実例や物語を知っている。此の様な実況は正に人間の潜在した一つの形を、風変りな偏執の姿で映し出すのである。勿論これは過去のある時代の事ではあるが、屢々鞭打は成年を超えた青年達に対しても容赦なく与えられたのである。」

著者は、以前一人の有名な士官を知っていたが、彼は十二才、十四才等の時と同じく、二〇才を過ぎて、肩章をつけてからも、鞭による懲戒に異常に興味をもつ彼の継母によって始終棒や鞭によって懲戒をうけなければならなかった。同時に、彼は年頃に達した彼の妹達や、従弟達が、舞踏会での小事件や恋愛問題の故に懲戒されるのを見た。

更に他の一人の青年は、之等と同じ様な鞭打による懲戒を見て、極度の性慾の昂奮を感じ

じ、部屋付の女中や、料理女から始めて、遂には自分の手中にある凡ての者達に狂暴な鞭を揮ふった。(訳者註「マゾヒズムのサディスムへの転換は心理的に有り得る事である」)

二、三年前、十六才の一人の青年が首を吊って自殺した事件があった。この自殺の原因は、彼の継母が、父が留守になると必らず、彼を素っ裸にし、馬を打つ鞭で所嫌わず打ち据える習慣があったので、彼は鞭打の苦痛と精神的な絶望から逃れようとした為であった。(訳者註「訳者の友人で非常にハンサムな青年が居る。彼は又同様に美しい妻を娶っているが、彼から私は次の様な思い出を聞いた事がある。彼の母はよく馬に乗っていた。少くとも少年の頃まで、母の彼に対する懲戒はすべて乗馬用の革鞭による尻打ちであった。彼は其の時の母を憎んでいるが然し後に彼が犬を打ったため、その革鞭が折れた時、彼は非常に悲しんだ。彼は決してマゾヒストではなくむしろ動物加虐愛好者であり、サディズム的な一つのジャンルである処の操りに対して愛好を感じている。社会生活に於て彼は屢々奇矯な行いが多いと噂されているが、訳者の知る限りでは、円満な常識人であり、子供に対しても限らない素直な愛情を持って

いる。特に訳者がここにこの話を引例したのは我国に於ても、継母でなく、実母ですら、この原本に引用された例に匹敵する残忍な鞭打ちに対して愛好の念を持っているという現代の一実例を紹介して、我々の身近に、本書の実例や心理が実在するのを記しておきたいが為である。猶、右に使用した革鞭は折れて猶現存するが、上品な婦人用の革鞭である。)

多くの女性が、彼女達の担当する女生徒達に、他人が鞭を揮るうのをみるだけで快感を感じる事は一七九七年にロンドンで刊行された「the Memoir of John Bell a Domestic Servant, (「家付の召使ジョン・ベルの回想録」)の一部が証明して居る。その一部を引用しよう。

著者註「本引用は次の文献より、Englisch belitten-Geschichte; Berlin; 1912 Bd. I P. 4 Of「英国風俗史」伯林、一九一二年刊第一卷四百四頁より」

「次に私が職を得たのは或る金持の寡婦の邸だった。此の家庭に住んで居たのは女主人とその二人のヤンチャな姪と十二才になる甥との四人だった。女主人は美しい女性で、相当な年にも拘らず、大変に若く美しく見えるのだった。私の雇傭契約が出来たとき、主人は

「主人である私の希むすべての事を貴方が全力を振るってやりとげてくれる事を希望しています」と云ったのだったが、私が快く応諾したこの希望は直ちに実現した。つまり、翌朝、私が朝食を女主人の許へ届けたとき、彼女は私に、学校で小使をやった事があるかと訊ねた。又、子供を鞭打つ手伝をした事があるかを訊ねたので、私はそんな経験はないと答えた。けれども、私は自分自身、弟を読み方の学習の途中で鞭で打った事があったので、正直にその事も返事した。半時間程経つと、女主人の甥が走ってきて、私にぶつかった。丁度手にしていた皿を床に落して割ってしまった。女主人はすぐに現われて「さアジヨン！ 私がいい答を探してくるまでこの子をしっかり押えつけていて頂戴！」と云って奥へ姿を消した。まもなく私に、弟を打った様に甥を罰する様に命じた。私はすぐに、一応の懲戒を少年に与えた。答打の間、女主人の表情は全く満足そのものであった。一通りの罰がすむと早速彼女は誇らしげに私に云うのだった。

「これであの子達には何が一番必要か判ったでしょう。是からいつでも、甥が悪い事をした時は直ちに棒杖や答で罰する様に」而も、

彼女は叮嚀に付け加えた。「但し私の見ている前でだけ打つのですよ！」ここで、私は女主人が児童に対する鞭打を見る事を楽しんでゐる事を知った。併し、流石の私も、その日彼女がお茶の時に同じ懲戒を二人の姪に対して実施する様に命じた時には驚かざるを待なかつた。この娘達にとって、召使から罰せられるという事はたしかに目新しい恥かしい事であつた。女主人は、私の一瞬の躊躇を見つけて、大声で厳しく叫んだ「早くしなさい。此のソファの上で、二人を打ち据えるのです！ 出来ないのなら、家を出ていっておくれ！」私は命令に従い、命令通りに娘達を懲戒した。同一の著者は他の部分で、更に報告している。

「私は、私の新らしい義務の様々なやり方について述べる事を要しないと思う。毎朝、女主人は刺繍の仕度をして、その前で姪達や甥を打たせ、鞭数と針の数とを数えるのであつた。晩にはお茶の時間に同じ様にして楽しんだ。彼女はお茶をすすり乍ら「そうよ、それでいいのよ」等と指図するのであつた。

こうした教育方法が特殊な例ではないという事を、読者に更によく説明する為に、もう少し引例しよう。

英国の継母達が息子をどんな具合に罰するのを常としていたか、について画家シレエ(Gillray)の画から引証しよう。(本誌二十年九月号二十一頁の挿画参照)

こゝにシレエは継母が、息子を食事の後で正に懲戒せんとしている処を描いている。抵抗する少年は一人の部屋付の女中によって夫人の部屋に引きずり込まれようとして露わにされたお尻に懲戒が加えられるだろうという事は、全く手慣れた様子で少年のズボンが脱がせはじめている、女中の仕草によって表現されている。この画には画詞が付いている。

「テルマガント・フレイバム夫人 (Lady Thelma Gant Flaybum) は將に息子に彼女のデザートの一菓子を与えようとしている。

これはグロスヴェナール広場の近くの (Mrs. von Grossvenar) 人々に毎日迷惑をかけるが、つけられた光景である。」

フランスのルイ十三世 (Louis XIII) の若い頃の女教師、モンセラ夫人 (Madame Montglat) は真の鞭打愛好者であつたに相違ない。この情熱はアンリ四世 (Henrich4. = Henri4e) の命令 (皇太子を事ある毎に十分鞭打つ様にといい命令。) によって保護されていたために全く、天下御免で

展開したのであった。彼女は王のあらゆる嫡

子と庶子とを教育する責任を持ち、同時に多くの小姓をも支配していたので、この女が生徒達に如何に棒や笞を揮るったかについての想像は容易である。皇后も又子供達や小姓の厳格な躰けに賛同して居たので、モンセラ夫人が鞭打教徒になって行ったのは環境から考えても無理ではない。夫人は嫌味のある背が高く、恐しく瘡せこけた女であると叙べられてゐる。彼女は皇太子を刺激して成るべく其の刺激によって不始末を起させ、その不始末を矯正するという口実の下に鞭打つのであった。夫人の家政について信すべき文献が残っているが、中でも、皇太子の健康を監視する役目にあつた医師エルワール (Jeah. Herard) の日記が多く引用される。

著書註—此の引用は次の文献による。

Journal de Jean Herard; sur l'enceinte et la jeunesse de Louis X III: 601—1628, extraits de manuscrites originaux at publiés par M.M. soulié et Barthelemy, Paris 1868—ジャンエルワールの日記、一六〇一年より一六二八年までのルイ十三世の幼年期少年期及青年期について—スウリエ氏及バルテルミイ氏共著により一八六八年巴里に

て刊行)

〇一六〇四年二月二十二日、彼(即ち皇太子)は王の部屋に連れて行かれた。王が彼を笞で嚇したので彼は強情に彼の部屋に帰ろうとした。その為、皇后の部屋に連れて行かれたが、相変らず強情を張った。そこで王が懲戒を命じたので、別室でモンセラ夫人によって鞭をうけた。

〇同年三月十九日

彼は十二時頃、サン・ジェルメヌ (Saint germain) に到着、泣き叫び乍ら彼の部屋に連れ込まれ長い間鞭打たれた。

〇一六〇五年九月五日、彼は陛下の処へひどく不気嫌でやってきたので笞で打たれた。彼がその時抵抗して王の手を引っかき、髭を引張ったので、モンセラ夫人は更に鞭で五、六回余計に打ち懲しめた。

此の日記のどの頁にも記入してある笞刑はそれだけで子供の神経系に悪い影響を与えるに相応わしいものであったが、更にモンセラ夫人が刑を其の場で行わず、翌朝皇太子の寝床の中で課す事が多かったという事は、子供の肉体の健康に対して甚だしく悪影響を与えた。少年が、確かに眠れずに夜をすごし、不安を持って朝を待った事は間違のない事で

ある。エルワールの日記をつゞけよう。

〇一六〇六年八月三日。彼(皇太子)が寝にゆくとき、モンセラ夫人にママンガ(Mamanga=madame de montplat.)「どうぞ明日の朝は打たないでね」と頼んだところ、「え、お約束しますよ」と答えた。すると皇太子は「判ってるよ。貴女は私の学課の事を訊ねて、それから、さあお尻! っていうんだね」。といふ返すのだった。

エルワールは更に子供が夫人の約束を信用しないのは、彼女が今まで二度程「明日の朝は罰しませんよ」と云っておき乍ら、翌朝起きたばかりの子供を鞭打ったという前例の爲だろうと述べてゐる。エルワールの記述はこゝまでにしておこう。之等は、彼の記述の中の数限りない笞打の記録からのほんの僅かな一部分である。

現代ではコーレル (Korell) が丁度廿三才の女教師の笞刑実施について報告をしている。こゝに於ては、鞭打の快感が明かに表面化している。

〇十四才と十五才の二人の娘が彼女の手に委ねられていた。この子供達は皆定規や棒杖及スリッパで打たれた。但し之等の打ち方は余りひどくはなかった。二人の娘はいつもべ

ドの上に斜に寝かされ、上衣と下衣を注意深く留針で肩の辺りに留められ、下ばきの釦を外され罰をうけた。男の子はそれに反して何時も女教師の膝の上に寝かされた。その時彼女は、子供が足を暴れさせない為という口実で、自分の右足で、子供の足を押さえつけるのだった。その様な行為の間、自分自身の着物が多少ずれおちる事については一切関心を示されなかった。むしろ反対に、態々、男の子の糸も纏わない素肌が、彼女の黒い靴下と股との間の素肌にふれる様な位置を取る事に興味を持っていたのだった。

こうした行為によって、殊に女教師の男の子に対する懲戒によって、多くの後天的なマゾヒストを養成する事になる。此の点については女性の鞭を欲しがる一人の紳士が一娼婦に対して送った書状によって特別に明白である。

(著者注||以下の部分は次の文献より引用)

Georg Merz Saeh; Die Krankhaften

Ersehnungen des Geschlechtstriebs,

1909)

この手紙は性心理学者メルツバッハ(Merzbach)の手許にあり、専門の学者達が皆認めている様に、信頼性のある回想を取めてい

るのだが前述の紳士は、少年時代、父の友達の或る地方貴族の領土で休暇を過した時の嫌な体験について述べているのである。領主の息子である殆ど同年の友人は彼の学友であった。友人の家には二人の姉妹、(二人とも美しい十四才と十六才の娘)が居たが、彼女等は母親が病身である為、廿八才の巨きな身体をした精力的な女家庭教師によって教育されていた。子供達の休暇中の課題を見る任務を持っていた。子供達は本館の最上階に住んでいたが、そこは娘達の勉強部屋でもあった。二人の少年は屢々そこで手淫をした。さて、ここから手紙を引用してみよう。

「或る朝、私は着物を汚してしまったのでいつもより早く帰ってきて、着物を着換える際に階上へ上って行った。寝室では娘達が授業をうけて居た。私は着物を着換える間に、突然、声高い泣き声、嘆願、叫喚をきいた。

而も、はっきりと打擲の音をきいたのだ。十四才の娘エルナの声だった。エルナは嘆願した。『あゝ、もうしません、止めて下さい。どうか止めて下さい、とても痛いですが、もうしませんから許して下さい。』私はそっと扉の所へ忍んで行った。どうも判らない。有り得る筈がない。十四にもなって、あんなに何

時も氣位の高いエルナが打たれるなんて、私は全くそんな事は考えられなかった。私自身は子供の時以来もう打たれたことはないし、勿論今、誰かが打ったら我慢できないだろうに。——併し、私は鍵穴から覗いた。その中の光景は矢張り私が考えた通りだった。鍵穴から見つめながら私は考えた。『そう、それでいゝんだ!』エルナは大きな机の上に横たえられ、女教師は彼女のペティコートをまくり上げ、藤の笥で、裸のお尻を打ち据えていた。私はいつも高慢なエルナのこんな姿を見たのは始めてだったので、笑いがこみ上げてくるのをやっとの事で我慢した。今後、若しエルナが偉そうな事を云ったら、この事を一寸ほのめかしてやろう。と考え乍ら息を殺している、やがて、打擲の音は段々に小さくなってゆき、叫び声も止った。私以外の誰もこの音は聞えないのだった。こゝから下へは何一つ物音はきこえないのだから。

(以下次号)

【前号のE.H.】十一月号一五三頁上段終りから四行目の(写真参照)の四字は削る、尚鞭の種類については別に述べる心算である。◎欧文綴中のBはSZの独乙字Bの誤りである。

愛^{あい}

恋^{れん}

の

日^ひ

に

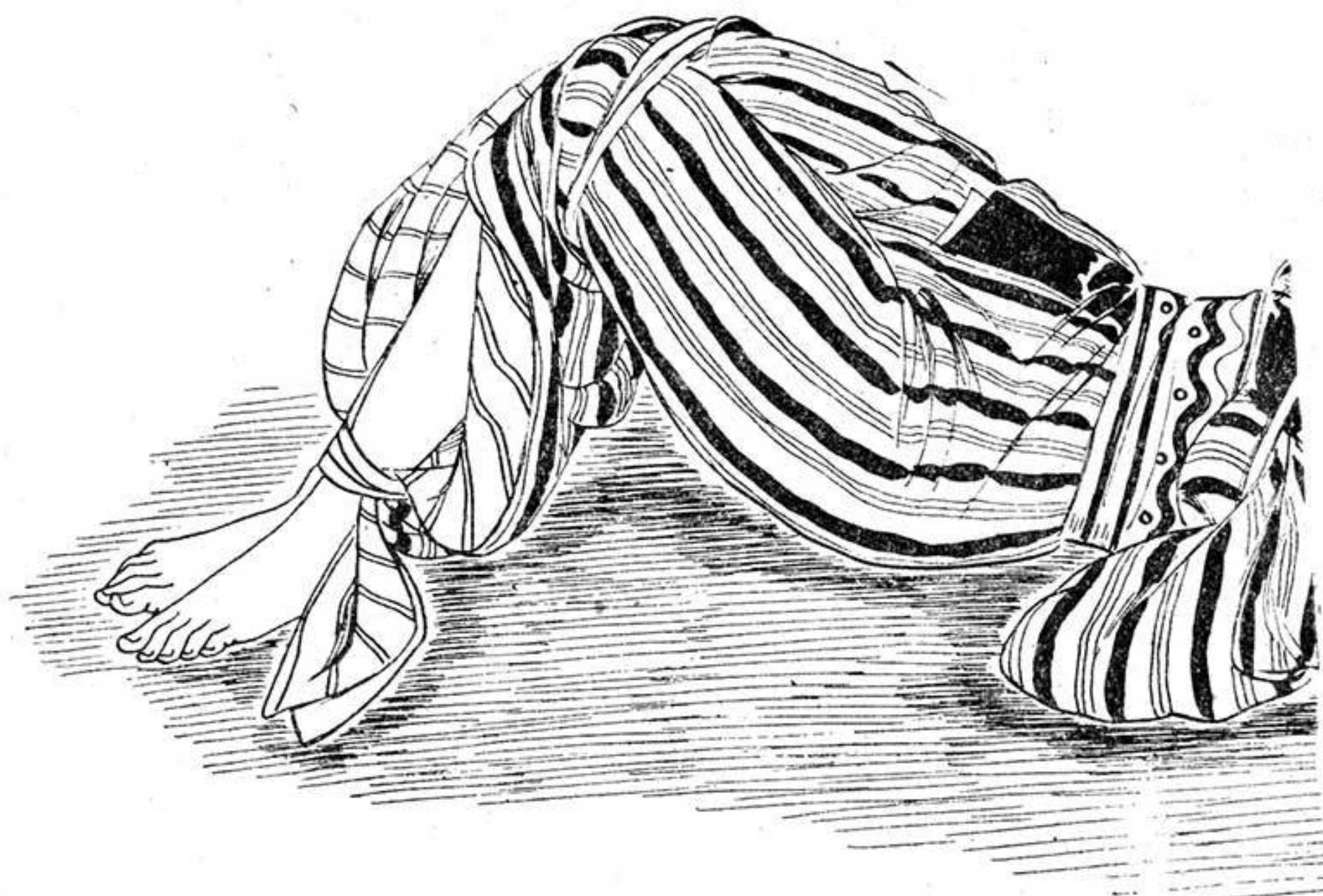
古 川 裕 子

滝 麗 子・画

れ
い
子
え



気の遠くなるように澄み切った青い空。遠い山脈は細く美しく、声はつぶらに澄んで大気の中に響いて来ます。日は白々としろく、秋は漸く深くなってきました。隣りは何をする人ぞ——何か人懐しいのもこの深みゆく秋のためでしょうか。それにしても、今の私にとって、今日は、雲一つない愛恋の日。悲しみがこの白い日の光とともに、静かに私の皮膚に沁みこんできます。私はたゞ呆然と心を空に放って草の上に臥ています。悲しいというには余りに寂しく、苦しいと云うには余りに人懐しく——たゞ心を秋空に吸いとらせて瞳を大きくして、はてしない碧さをみつめているばかりなのです。思えば生れて三十三年——私は何一つ、人間にとって有用な存在ではありませんでした。私は自らに早くから絶望していたのです。私が今迄本当に真面目に生きたことが一度でもあったのでしょうか。私が、本当に力の限り、自分の能力のぎりぎりの線まで努力したことがあったのでしょうか。いいえ、のらくらな私は、思い出す限り一



度だってそのようなことはなかったのです。私は生れてこのかた、心にこびりついてはなれないのは、あの不思議な宿命感でした。人間というものは、何にも出来ないのだ、運命の前には私がいったい何が出来るのだろう。いつ生れて、いつどのようにして死ぬか——それは人間の考えることではないのだ。人間に出来ることがあるとしたら——それはあのはかない「祈り」だけ。でも「祈り」とは永遠に無償の行為なのだ。人間は「かくあれかし」と願望し祈ることは出来る。しかしその「祈り」が何者かにきかれ、その願望が達せられると考える程私は無邪気ではないのです。私は決して「慧きもの」ではありません。「愚かなもの、幼きもののみ」真の神の道を識ることが出来ると申します。私はまことに「おろかなもの」です。けれど、私の心を支配しているものは、暗い暗い宿命感ばかりだったのです。いいえ今でもその心は少しも変わっていません。「宿命」に対して人間の出来ることは、たゞかくあれかしと「祈る」ことだけです。それが達せられるとは少しも考えず期待せず、しかも「祈る」こと、これが現代の「心弱き女」である私の考えるたゞ一つの人間の「自由」なのです。この気持が心を離れないばかりに私の今まで人生はすべて、お先まかせの、のらくらなものでした。亡夫との出会いに於ても、運命が私たちを人生のふとした四辻で出会せたにすぎません。私は亡夫を獲得するために何一つ積極的に努力などしなかったのです。強いて云えば、夫と同じような大きなマスクをかけた——たゞそれだけでした。運命が二人を一緒にしました。そして偶然二人は奇異な性向を同じくする者同志だったのです。そこには「幸福」がありました。「変態性欲者の幸福」世の中の人々は眉をひそめて私たちの生活をかく云うでしょう。その通りで

す。それはたしかに「変態性欲者の幸福」でした。

然し私にとっては、まさしく「幸福」と名付け得べき一連の時間でした。やがてその終局が来ました。自動車事故——京浜国道で偶然二つの自動車が触れあった——そしてそこに乗っていた一人の人間があっけなく死んだ。これが運命が私に与えた「私の幸福の結末」でした。それから私は恥多き女でした。これは皆様の御承知の通りです。「宿命」が与えた、強い異常な、ゆがんだ本能が私を駆り立てるままに、犬のようにうろつきまわりました。白い肉体を動物のように人々の面前にさらしました。秘すべき恥を憶面もなく誌上に書きたてて、自らの中に燃えさかる業火を鎮めました。そして私の遍歴の最後があつた弁天島の一晩だったのです。あの夜の事については、月号で申しのべました。しかし私は、あれを書く時の気持は特別のものでした。すくなくとも札幌のS氏や大阪の宿の件を書き流した程、心安くはなかったのです。私は混乱していました。あの夜の私は、私らしくもなく何か母性的な感情にとらわれていました。こんなことはめったに、いえいえ今まで一度も感じたことがなかったのです。私はいつも受け身、私はいつも支配される側だったのです。あの夜も成程TN氏との夜の交渉はいつもと同じでした。しかしその前後には、私はまるで母のように姉のようにふるまっていたのです。これは自分でも理解出来ない感情でした。どうしてそうなのか、自分でも解らなかつたのです。初対面のTN氏に一目お会いしてから、不知不識に私はそのようにふるまっていたのです。おそらく、「夕暮の窓辺にて」をお読みになった皆様は、これはいつもの裕子とは調子が違うとお感じになったのではないでしょうか。描写や敘述が混乱し、時には感情が支離滅裂な部分があります。實際夜明け

に浜名湖畔の暗い水辺でのあのひたひたと打ちよせる小波を夜明けの光にわずかに見つめながら感じた絶望感、悲哀感——もっと正確に云えば、自分で自分をなげうち泥の中に捨て、しまいたくなくなったあの気持が、わずか数十分後には何か満ちたりた、幾年にも感じたことのない充足感に変わっていったその間の自分の心理は、私には何とも説明しようもないのです。私はT氏についても、又T氏の間の悦虐の行為についても、詳しく申しあげる気にならなくなったのです。こんなことは珍らしいことです。札幌の時も、自分を虐むように。私に加えられた加虐の数々を冷酷に微に入り細にうがって、むしろ必要以上に書きたてました。S氏の風貌についてもその加虐についても、私の筆は遠慮など致しませんでした。大阪のことだって、私はまじろぎもせず私自身の行為と心理とを見つめ、長々と敘述しました。今度に限って私の筆はいつものように、動かなくなつたのです。殊にT氏自身と彼と私の悦虐の行為の詳細については、全く何にも云いたくなくなつたのです。と云うのは、私一人で勝手にしまっておきたかつたのだと申しても嘘にはなりません。私は狡猾に筆を端折りました。読者の皆様はさぞ失望し、お怒りになったこととでございましょう。「なんだ、そこが肝腎なところじゃないか」と。

お赦してください。あれは裕子の我儘でした。しかしこの我儘を皆様は裕子にお与え下さるでしょうか。

あの夜、数々の悦虐があつた後、後ろ手に括られ、足首も膝も括られて身うごきも出来ない私に、T氏は上からかぶさるようになして、暫く私の顔を見つめておられました。私の口には勿論ゴム布の猿ぐつわが喰まされてあつたのです。おそらくそれは私の頬に喰い

こんで、私の顔は見にくく、ゆがんでいた筈です。やがてT氏は静かに、私の頬の猿ぐつわは手をおかけになりました。轡がとりさられました。咽喉を見せて畳の上に転がっている私を彼はいきなり熱情的に抱きしめました。そして息も出来ない程かたく唇をおしつけて来たのです。長い長い接吻でした。

私は目をとじて「男の唇」の味を味わっていました。裕子らしくもない甘美な陶醉でした。被虐の陶醉というにはもっと人間臭い喜びでした。私の手首の縄はかたく、乳房に食いこんだ細引は私の胸のあえぎに、やわらかい乳房の肉の中に見えかくれしていました。

私は安らかな気持でこの接吻を受けました。私はこの瞬間何の抵抗も感じませんでした。たゞ来るべきものが来た——それだけの気持だったのです。T氏に対して私は負うべき負債の何ものも感じなかったのです。私の中にあるものをこの若い彼に惜しみなく与えた——そう申すよりほかこの夜の私の心を書き表わすすべはありません。

これが女の愛情というものでしょうか。これが恋情というもののなかでしょうか。私がTの負担になっている——そんなことはこの瞬間には、私の頭にはなかったのです。私がこの世にあることはTにとっては喜びでない筈はない。怖れも憂いも悲しみも苦しみもそこにはありませんでした。全裸で括られた私は、身体のすみずみまでTの前に晒して、私の全てを彼に捧げたのでした。まことに男女の愛は不思議なものです。相手のどこが好きか——そんなことを指摘出来るわけはないのです。たゞ何となく「全体」が好きなのです。それが男女の愛の真の姿ではないでしょうか。私はこんな甘いことを考えるようになったのです。

あの夜から私の生活が変りました。私は何とかしたT氏のおそば

にゆきたいと思いました。三十三才の私はまるで小娘のようにそう思ったのでした。私はT氏に手紙を書きました。T氏からもお手紙をいたゞきました。幸いにしてT氏も私を憎からず思ってたゞさるようでした。哀れにも私はいつもの小賢しい自分を失っていました。恋は——何んと人を素直にし、無邪気にするものでしょうか。小憎らしい理屈ばかりのべたてる古川裕子は、今は何もかも忘れて一図に自分の感情に打ちこんだのです。私は心をこめて——しかし、おらずとT氏に書きおくりしました。

「裕子は御承知のような女です。清純な女ではありません。裕子は汚れた女です。娼婦と云われても仕方がありません。私は胸に「M」という緋文字を、永久につけさせられている女囚です。こんな女、——しかも貴方よりも歳上の女を貴方のおそばにおいて下さいとお願ひすることは、どんなに厚かましい、どんなに図々しいことか、よく知っています。でも私はあなたのおそばに居たい。あなたのお仕事に、あなたの御生涯に私がプラスになるなどとは決してうぬぼれては居りません。でもマイナスにはならぬよう一生懸命努めます。私に出来ることは何にもありません。未婚のあなたには、もはや許婚のかたがいらいらしやるかも知れない。又意中のかたがいらいしやるかも知れない。もしそうであっても私はあなたを愛しています。そのかたたちを押しつけて、あなたを独占しようとしても私には出来ることではないのです。私の卑怯さ。私の弱さをあなたは叱って下さるでしょうか。俺に対する愛情は、それほど弱いものなのかと。でも、もしあなたがまだ本当にお一人なら、又あなたが本当に私を求めて下さるなら、私をおそばにおいて下さい」と。

それは哀れにも滑稽な恋文でした。まるで十八歳の小娘のような

この手紙。私は自分が可愛そうになっただけでした。

T氏からはその都度御返事をいただきました。けれどもその御返事には、くりかえし弁天島の一夜のたのしさをお述べになるばかりで、私の知りたいもろの事項については筆がにごしてありました。許婚のことも、意中のひとのことも、まして私に対する彼の真の気持ちも——具体的に私をどうこうすることなど、全くお触れになっでは来なかったのです。私はいらだちました。私はあせりました。女というものは何と馬鹿なものなのでしょう。考えてもごらんない。一生の伴侶を定めるのに、たった一度の交渉で、しかく簡単にきめられるものではないのです。又若いあのかたには将来があります。今の世では、その未来の望みが、如何にはかないものであるにしろ、人々には一人一人それなりに未来への夢を持っているのです。サディズムやマソヒズムに耽溺することが（私をそばにあれば、日常の生活はそれ以外ではあり得ないのです）未来の夢を実現するについても良いことか、不利なことなのか、——冷静なかならば誰だって一度はよく考えてみるでしょう。まして私は歳上です。美貌でもありません。「みえうるわしく才たけて」と申しますが、その「才」などますます私にはないのです。私の持っている特技は（あゝ……）マソヒズムだけ。マソヒズムだけが、たった一つ私の才能だとは、何と嗤うべきことというより何と云い得ましょう。T氏が軽々しく態度を決定されないのは、当然も当然、ごく当り前のことなのです。

しかし当時の裕子は必しもそう考えませんでした。普段の分別など消えていました。T氏に嵌められたマスクのあの男臭い匂が私をもだえさせました。私は私の全身を捧げてT氏に奉仕したい——こ

れ以外の観念は頭に入る余裕はなかったのです。「私の存在はT氏にとってきつとプラスになる。私の誠意と愛情とで彼の人生をより良きものにしてみせる」こんな気負った身の程を知らぬ感情が心の中に渦まきました。これが女の愛情というものです。幾度かお手紙を交しているうちに私の情熱が次第にT氏を一つの方向に引きずってゆくことに成功する気配を見せ始めました。私は彼のために必要ならば私の本能の満足を——即ち私のマソヒズムさえ捨て、いゝと思ひ始めたのです。あゝこれが私の哀れにも滑稽な恋物語のユーモラスなシンボルでした。

すこしずつ、すこしずつTは私に彼の家庭の内情を洩らし始めました。私は一つ一つ獲物を獲得する猟師のような気持で、それを読みました。だんだんとTとその環境が明瞭になって来ました。それによると彼は名古屋の旧家の——それも母一人子一人の身分だったのです。彼はつい最近まで——いや私に出会った日にも、自分に妻が欲しいとは思わなかったらしいのです。彼にとっては尊敬すべき敬愛すべき「女性」は、彼の母親以外にはなかったのです。しかし（私にとって、また彼にとって）幸か不幸か彼には幼少の頃からサディズムという性癖がありました。彼の母親は一人息子の彼を溺愛しました。殊に彼が十一歳の時、父親が死んで母一人子一人となつてからは、彼はこの母の独占物であり、二十九歳の今日に於てもその間の事情はあまりにも変わっていませんでした。彼は自分のサディズムを勿論母には隠していました。母親自身にそのような性癖は、なかったようです。ある日、ふと母親が彼に洩らした片言雙句から、彼は彼の父親にそのような性癖があり、クリスチャンの母親は、それを身ぶるいする程嫌っていたことを知ったのです。それ以

米彼は自分の性癖を怖れ、そして忌み嫌っていきました。しかし（裕子と同様に）彼は時に「女を縛って虐めてみたい」というサディズムの衝動に堪え兼ねました。彼の青春はその罪の意識のために暗い暗いものになりました。でもある日（幾日かの懊悩のあったのち）彼は奇譚クラブ誌上で識った古川裕子に手紙を書きました。

これが裕子が多くのお手紙のうち不思議に心ひかれた彼の手紙だったのです。

これだけのことを識るのに、私は何通手紙を出したことでしよう。私と彼は特別な連絡場所を定め、私の手紙が母親の目にふれないような手段が必要でした。思えば何と最初から「陽のあたぬ場所」の恋だったことでしよう。

でもこの彼の環境を知ったとき、私は愕然としました。

これは最悪の条件です。母一人子一人の中から息子を「奪取」することは、それだけでも母親と敵になることです。その上念の入ったことに、母親は、はっきりとサディズム即ち異常な性癖について、強い嫌悪感を持っている——これでは私の「侵入」しようがありません。

私は考えました。私は苦しみました。持

ち前の弱気は、持ち前の宿命観は、私に何度も「あきらめ」を強いました。私は幾度Tのことを思い切ってしまうとしたことでしよう。「お前はかくも夢中になっているが、彼はそれ程にも思ってい



れい子

ないことが解らない程お前は愚かなのか」と。

でも、どうしてもあきらめきれなかったのです。私はかつて、公刊の誌上にこんなことを書きました。「私の出現が、そのかたの不幸になるならば、私はおそばから逃げ出すよりほかはありません」と。あの言葉は嘘だったのでしょうか。この立派に見える言葉は、

単に私というものを売りこむプロパガンダの文句にすぎなかったのでしょうか。それ程私は悪者だったのでしょうか、今の場合私の出現が彼の母親を「不幸」にすることは殆ど間違いありません。たとえ将来に於て私の努力が母親の心を私に向け得たとしても、その間の年月、この母親は疑いもなく「不幸」なのです。そして将来に於てもこの母親の不幸をとりのぞく自信は、私には無いというより何を云えましょう。さすれば何を考えることがある。自分の言葉に責任を持つならば直ちに「あきらめよ」。如何に苦しくても、如何に悲しくとも、古川裕子の人間性の価値にかけてこの恋を捨てよ。それだけがお前の道徳性を救う道なのだと、私の胸の中で声がします、でもでも私の中に根をはった思慕は磐のように動かないのです。寝られぬ晩がつづきました。そしてある夜明けがた、とろとろとしていた私は急に目をひらきました。真暗な中で、私は一本の七首のよう

うに目をひらかせていました。一時間も二時間も。その時私は生れて初めて自らの運命と闘う決心がついたのです。

自分の運命は自分で切りひらこう。出来なければ傷つき倒れるだろう。それも良いではないか。一切の道徳が何であらう。私は悪魔となっても私自身に従う。私はやって見よ



れい子

う！私はやる！私は真暗闇の中で爛々と目をひからせて叫びました。何でこのような気持になったのか、今でも私には解りません。はっきり解っていることは、その日から奇怪なマソヒスムの女の恋が真の意味で始ったことだけなのです。

「苦しいかい、苦しむのだよ。僕の妻になるためには苦行が必要なのだ。この苦しみが必要なのだ」

私の裸の尻はTの視線の下でひくひくと動いています。後ろ手に縛られ、両足を思いきり左右にひろげられて括られ、うっ伏せに畳の上に投げだされているのです。

私の白くやわらかくあたたかい二つの丘陵の間に秋の冷い風が必みます。百ワットの電燈の下で、もう二時間もTからの「試練」を受けつづけていた私だったのです。

あの日から間もなく私は彼に会いました。そして痔癖の強そうな白い顔と黒い眉と、長いまつげと大きい茶色の瞳をまっすぐ見つめて私は出来るだけ無表情にこう申しました。

「裕子を、あなたのおそばにおいて下さい。何でもいたします。妻にしていたけなくても、私をおそばにおいて下さるだけで結構です。あなたのお母様からあなたをおとりするという意味ではありません。私はただあなたのおそばに居たいのです。それ以上どうなさ



ろうと、それはあなたの御自由です」

低い声でしかしはっきりと、本を読むような調子で私は云いました。彼の濃い眉がピクリと痙攣しました。私をにらむように強い目の光でごらんになりました。それは私に対する愛情というよりは、一匹の獲物を見つけた猛獣の目のようでした。

「あなたが僕のそばにいてくれることはすばらしい。でも、母が――母が承知しないでしょう。僕はあなたが忘れられない。いや君は僕のものだ。」そして彼は叫ぶように、自分自身に云いきかせるように、こうつけ加えました。

「君は僕だけのものだ。誰にも君を渡してたまるものか」と。

そして又私の無表情の顔を、じっとにらみました。再びあの強い猛々しい目の光がらんらんと輝きました。私はその男の顔を美しいと思いました。

「お母様が御承知にならなくても、私はあなたのおそばに住みます。あなたは私のところにいらっしやればいいのです。そのために

は、どんな辛いことでも辛抱します。あなたが時々私のところにいらっしゃるならば……」

「どんなに辛いことでも？ 僕の妻になるのは苦しいことですよ。あなたに我慢が出来るかな。今迄あなたに遠慮していたんだ。僕を見損っては困りますよ。いいですか」

冷たい目の光がキラリと光って、こめかみに青く血管が浮びました。私はそれでも無表情にこう申しました。

「私はマソヒストです。裕子はあなたのおそばにいたいといっているのです」

「よし！ まずあなたが僕の妻になれるかどうか試験してあげる。君はマソヒスムの修道女だ。僕という天国に入るには――教いを受けるには苦行が必要なんだ。マソヒスト古川裕子が勝つか、サディストの僕が勝つか。これからやって見よう」

T氏の表情は、あの育ちの良いお坊っちゃんらしい甘さがいつか消えて、そこにはまごうかたなき舌なめずりをせんばかりのサディストの顔がありました。私は静かにくりかえしました。

「裕子はマソヒストです。あなたの御自由になりたいと云っているのです」

「それなら、それなら裸になれ！ 早く、何をぐずぐずしている」彼の肩が荒い呼吸とともにせわしく上下して、唾液が乾ききったようにとがれとぎれにこう叫びました。

私は帯をとりました。待ち切れぬように、彼は私の着物に手をかけて容赦なく裸に剥き始めました。荒く熱い呼吸が頸すじからあらわになった背中のあたりに惱しく感じられます。

「何もかも！ それも！」彼は何一つのこしてくれません。

「さあこれで」Tは細い犬鎖をもって私の手首を背中で括り二の腕から、胸、そして又手首、最後の頸にかけて思いきりひきしぼります。手首の鎖が喰いこみ、肉体に沁みる鈍痛が感じられます。

「猿ぐつわはこれ」

彼は私のカバンの中を探していましたが、革製の嵌口具をとり出すと私の口鼻に嵌め革バンドで、うなじ、頭の上、あごの下と三ヶ所でしっかり締めあげてしまいました。口の中には彼の分泌物に汚れた例のマスクがつめられたのです。

両足をひらかされて棒の両端に括られました。

「さあ、はっきり言ってごらん。古川彼子はTN様のドレイです。何とも思うようになさって下さい。あなたの苦行を喜んで受けます。――と。さあ早く云え！ 云わないか！」

彼は私のももを鎖の端でピシリと打ちます。みるみる赤くあざがついて百ワットの電燈の下に鮮やかに生きもののようになごめくのです。

「早く云え！」

私はもがきました。あごを押え、口と鼻とに袋のようにびったりとすきまもなく押えているこの猿ぐつわで、云えと云われたとて、どうして云えましょう。ただ口の中のマスクが今日はガーゼなので、すので、いくらかうめき声が出せるのです。

「ううう、あああ、うゆゆうわわ」古川裕子はいったつもりが、奇妙な地の底からのうなりのように自分の耳にひびいてきます。

「何？ もっとはっきり！」支那竹の細い乗馬用の鞭が私の背で鳴ります。

あゝ久し振りのこの鞭の味！ 私は命令されたことも忘れて猿ぐ

つわの下でうめきました。

「あゝこの味、この気持！」

「早く云え！ 命令されたことを守れないのか！」

「うわうわわくわ、うううわ」

「もっとはっきり」

「うわうわうむ、うわ」

「仕様のない女だ。命令を守らないお仕置は、それ！」

畳の上にうっ伏せに突き倒された私の背に、肩に、尻に、もゝに細い竹鞭の雨がふります。鋭い痛み、しかし云いようのない甘美な竹鞭――男の手でふるわれるこの鞭、男の体臭とともに私の肉体に躍るこの鞭！

「もっと、もっと、もっと打って打って、打って、あああ、ああああゝ」

両足を思い切ってひろげられているので、うつぶせになったまま、仰向けに寝返えることも出来ません。容赦ない竹鞭をさけるためには、尺取虫のように、たてにもがくほかないのです。空間に高く低くもがき廻る自分のお尻が目に見えるようでした。

「これでもか！ これでもか！ 早く云え、云わないか」

「うわう、うわう、うわう」

背中が、お尻が、ももが桜色に染め上って、両足首をくゝった竹棒がせわしく上下し、時には畳の上に音たてゝ落ちます。

「うわう、うわう、うわう」もう云わされる言葉ではありません。

「もっともっとと打って！ あゝ！ あゝ！ たまらない。も

っと、もっと、もっとと打って、あゝたまらない」

意識が次第にぼんやりして鞭の音と痛みとが何か別世界のように

感じられてくると、今まで夢中で髪をふりみだし、真黒い嵌口具をはめられた顔を打ち振り打ち振り、もがいていた私は、ぐったりと畳の上にのびて、何とも云えない恍惚境に入ってゆきました。嬉しいのでもなく、悲しいのでもなくぼんやりとした、しかし云いようもない甘美な陶酔の一時でした。涙がほろほろと頬をつたい、黒いいかめしい嵌口具の革を濡らしました。

T氏はさすがに鞭をやめて、そうした私の全身を――明るい電燈の真下に転っている鎖でくゝられた大きな女体を、まじろぎもせず凝視していました。もがく力もなくなった私は、たゞその視線を全身に意識して、時々ヒクヒクと背中や腕の筋肉を痙攣さすばかりでした。

――何分か、静かに二人の間を通りすぎてゆきました。彼は私の足を縛った棒をとり去りました。私を仰向けにむけました。そして黒革の嵌口具の帯革を一つ一つはずしました。その代り目の下から顎までかくれる大きなマスクを私にかけさせました。マスクだけでガーゼなしにです。そして私の上にかぶさり顔を両手ではさんでマスクの上から熱烈な接吻をしました。あたゝかい湿った呼吸がマスクを通して感じられました。おそらく火のように熱い私の呼吸も彼の唇に鼻に悩しくかゝっていったでしょう。私は幸福でした。亡夫との接吻を思い出しました。浅間しい姿で私は何年にも感じたことのないやすらぎを感じていました。母の膝を離れてから、亡夫とのあの生活が消えさっていつてからもう遠い思い出のようになってしまっていたこの安らぎが、今私の全身を包んでいるからです。

私はマスクの下で溜息をつくような深い呼吸でこう申しました。

れい子



「私はあなたを愛しているわ」と。

彼もすこし落ちついてきました。私のこの言葉をきくと一層熱情的に私を抱きしめました。そして、低くつぶやきました。男の重い暗い声で。

「君はもう僕のものだ。誰にも渡しはしない」

それから一夜、彼は私のために奉仕してくれました。つまり一晩中、私に赤いゴムレインコートを着せ、ゴムのマスクをかけさせ、手足を麻縄で括って転しておいて下さったのです。

これが東京渋谷、某旅館の松林の中の一棟立ての離れ座敷におけるTと私の第二回目の会合だったのです。

この一夜以来私とTとは離れられない間柄になりました。第三回目は、また十幾通かの手紙の交換ののち、彼のお宅を、よそ目ながら訪問かたがた、名古屋市高辻の某旅館に於て行われました。

名古屋に古くから住んでおられる彼と名古屋で会うのは危険な仕事でした。そのため思い切って目立たない——というのは「立派でない」という意味ですが——場末の旅館を選んだのです。でもでも、これは失敗でした。私たちの短い恋はこの高辻の某ホテルの一夜で永遠に終りをつけてしまったのです。今更悔いても何になりましょう。TNと私の恋はかくあることは、すでに前からきまっていたことと云うよりほかはありません。人間の「運命」は人間にはどうすることも出来ないのだ、と私は再び申します。いやむしろ私の邪悪な恋にはこれが最もふさわしい結末だったのかも知れません。

市内電車がやっと動き始めた朝まだき、私は夢遊病者のように市街にさまよい出ました。身体中に痛苦の鞭がうずいていました。あのすさまじい形相の五十女。私には悪鬼に見えた憎悪と軽蔑とに満ちあふれたあの顔、あの顔が今でも私を追って来ます。どこまでもどこまでも——、あの日から、もう十数日たった今日でさえ、私の部屋の灰色の壁に、まぼろしのように浮びあがって、炎のような全身の憎悪を私にむけて歯をむいてるのは、あの顔なのです。

その夜六時頃に私はやっと〇〇ホテルにたどりつきました。TN氏は待ちこがれておられました。外はとっぷりと暮れて遠いネオンが、部屋のガラス戸を赤く青く染めてゆきます。たてつけの悪い、畳が足に吸いつくような気味の悪い一室でした。安物の掛軸と、ひびかれた机——、でも私たちはドアを締め切り二人で向い合いました。そしてニツコリと笑い合ったのです。

「あゝまた二人になれましたのね」

私は姉のようないつくしきをもったこういゝました。そして彼の胸に顔をおしつけたのです。

彼は黙って私を抱きしめました。男の臭いが私の身体に泌み入りました。東京での出会いから約一ヶ月、私は胸の奥までその臭いを吸いこみました。何度も、何度も、

「マスクをしてごらん。君は目が奇麗だからマスクをすると可愛くなる。僕は女のマスクが好きだ」

「あら、マスクをかけなくては可愛いくないの」

こんな他愛もない問答が二人の間で交されました。

「さあお手々をお出し、今日はこれだよ」

彼の手には手錠が光っていました。私は大人しく後をむいて後手

錠を受けました。

「はい、それからあんよ」

足首にも足枷がつけられました。この頃になるとT氏自身いろいろな器具を考案し、それを私の身体に加える楽しさを手紙に書いてきていたのです。

考えて見れば私たちの間を往復した恋文は——恋文というに余りに奇妙なものでしたが、知らぬ人が見たら何というでしょう。私たち二人はどんなに甘美な愛の言葉にもまして、それはお互いの心をそそったのでした。幾十通の手紙が往復したことでしょう。その一つにはサディストとしての彼の幻想が、マゾヒストとしての私の願望が赤裸々に書かれてありました。

実際それは余りに赤裸々すぎたのです。私から彼への手紙は名古屋市の特定の連絡場所へ出されました。直接彼の自宅へ出すような危険は用心深く避けていた筈ものでした。それで私はこの点については安心していました。

それですから思い切った凌辱への幻想と期待を書き送りました。それを書くこと自身私のなぐさめであり、且つ彼へのこよなき贈りものだと思っていたのです。それがそもそも間違いのもとだった——あとで後悔のほそを噛みました。キヤタストロフは疑いもなくこの私の手紙——偶然、彼の母親の手に入ったあの惨らしい恋文からこったのです。

その夜も、さまざまな遊戯がくりかえされました。最後に——といってもまだ十一時頃のことでしたが、私は裸で部屋の中央の粗末な机の上に仰向けに括りつけられていました。

「手術だよ」

彼は外科医のように大きなマスクをかけてゴム手袋をはめて、私の身体を見おろしていました。

「さあ麻酔だ」

私の口にぴったりと口と鼻とをふさいでしまうゴムマスクが嵌められました。中のガーゼには、まぎれもない男性特有の臭いが鼻をつき、じっとりと湿っています。

「痔の手術だ」

彼がこう云った時に突然ドアが開かれました。彼は呆然と立ちすくみ私は足もとの方で起った変事を身体全体で感じました。首をおこそうにも首は麻縄でしっかり机にむすびつけられています。手は後手、足首はそれぞれ机の足に、私に持ち得た自由は一つもなかったのです。身をかくす一枚の布も私の身体にはありませんでした。

「N! やっぱりこゝだったのだね。何をしてるの! さあ、かえりましょう。おいで!」

これだけの意味の言葉が早口のつよい名古屋なまりで呼ばれたのです。母親の手には見覚えある私の手紙の封筒が握られています。

私ははっきり了解しました。そして思わず全裸の身体で縄もちぎれよともがきました。私のこのうめき、この身悶えは、母親の注意を私に向けました。

「この女! この女! 悪魔! 私のNをとったのは、私のNを横取りしようとした奴は! この女だったんだね。悪魔! 畜生!」

私は今まで、母親のこの叫び程人間の憎悪に満ちた言葉を聞いたことはありません。それは完全に純粹な憎悪でした。一点の同情も一片の思いやりもこゝにはありませんでした。

「この女かえ! この女かえ!」老婆はあえぐように云いつけるとき、「ちくしょう!」と叫びざま、そばにあったゴム管を手にとると、盲滅法私の身体を乱打しました。それは辛い辛い鞭でした。マソヒスムの甘美さなどあったものではありません。一打ち一打ち私は泣きながら悶え廻りました。もの音をきゝつけて宿の主人や女中たち数少ない泊り客など、皆開け放しのドアの外にひしめいて、のぞきこんでいます。

母親は息を切らし。齒を噛みたらしてゴム管を振ります。N氏は夢中で母親にすがって鞭の手をとどめようとしています。合間合間に私の上にゴム管が降ってきて、皮膚にまつわりつき、にぶい音をたてるのです。私の下半身はドアからのぞいている宿の人たちの真正面なのです。私はもがきました。私はうめきました。私は泣き叫びました。ゴムのマスクの猿ぐつわの下から

「あなた、あなた、ほどうて、ほどうて頂戴、あゝあゝ痛い痛い痛い痛いわ!」この声は不明瞭なうめきに似た音声となってほとばしります。

私は思わず叫びます。

「ゆるして。お母様ゆるして。ゆるして! ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい!」

私は恥も外聞もなく嘆願しました。

「ええい、悪魔! こうしてやる! こうしてやる!」

母親は猶も荒れくるいします。Tは私の縄をとうとうと一生懸命努めています。母親の鞭が彼にも及ぶので、いたずらに指を縄にかけるばかりで、一向解けそうにもありません。私は大声でゴムマスクの下で泣き出しました。猿ぐつわのくぐも

り声は奇妙でした。

そこに赤ら顔の、でっぷり太った、どこか女郎屋の亭主を思わせる、このホテルの主人が母親をだきとめました。

「まあ、まあ、まあ、お母さんも憎いだろうが、この場は私にまかせて下さい。事情は大抵察するよってに。この女の人も縛られて動けないのだから、もうかんべんしてやってや」これは強い大阪なまりでした。

「警察に渡してやる！　こんな女、こんな女、悪魔！　警察へ渡して刑務所に入れてやる」

母親はなお猛り狂っています。真蒼な顔をして怒りにぶるぶる身をふるわせています。

「まあ、まあ、お母さん、こゝはわたしにまかせて息子さんをつれて一応ひきとってもらいまひよ。悪いようにはせんさかいに」

六十才に近い頭のはげた、しかし精力的そうな宿の主人は母親とTNとを一まとめにして部屋の外に押し出しました。

「さあさあ、お前たちも、もう下に行け、見世物やおまへんで」

彼女は女中たちを追いやりまします。Tは主人の手を振りはらって部屋にかけこみ私の縄を解こうとしました。母親がまた、いきり立って主人をおしのけて入ってくる気配がしました。

「さあさあ、ごけはんだか、奥さんだかはわしにまかせなさい、あなたの大事なものをわしは何もしやしませんで」

再びTと母親は外へ押し出された模様です。私は仰向けに机の上に縛りつけられたまゝ今は声をひそめてしくしく泣いていました。冷たい涙が目じりから頬に流れて耳朶にたまりまします。縛られた身を悶えて猿ぐつわの下で私はむせび泣いていたのです。

宿の主人は私の縄を解き丹前をかけてくれました。「妙なものをこしらえたもんやな」と云いながらゴムマスクをとってくれました。身体の不ふしが痛みます。すぐ起き上るには私は精神的にも肉体的にも余りにもうちひしがれていました。おずおずと机の上に海老のようにまるくなり、足をちぢめ、なお、しくしくと泣いていました。腰や背やもゝの母親の鞭のあとが痛みます。でもそれよりももっと私の心が痛みました。

失われた恋——それが悲しかったのではありません。衆人の前に晒された恥——それが心を痛ましめたのでもありません。いいえそれらもたしかに私をうちひしがりました。でもそれよりも何よりも、私を再び起き上げないように叩き伏せたのは、あの母親の激しい激しい私への「憎悪」でした。あれは人間が人間に対して持ち得る最高の憎悪でした。純粹無垢の「悪意」でした。心弱い私はあれ程激しい憎悪には、抵抗する術がなかつたのです。人々の環視の中における母親の鞭打ちは、神の赦し給わぬ邪悪な楽しみに身をまかせていた私への刑罰だったのでしようか。私にはあの母親の気持が解ります。私があの母親の立場だったら、果してあの行為とどれ程違つたことをしたでしょう。私はTの母親を恨むまいと努力しました。でも修養のたりない私は、部屋の灰色の壁にあの悪鬼のような形相が浮ぶたびに厭悪と屈辱といくらかの悪意を、彼女に感ぜずにはいられないのです。それと同時に骨も凍るような恐怖を感じざるを得ないのです。

あの夜、宿の主人は私の縄を解いてくれました。泣いている私を助けおこして着物をきせかけてくれました。身体中にみみず腫れはおろか、ところどころ血がにじんでいました。女中を呼んで創の手

当もしてくれました。

そして私の顔をじっと見つめぼつりと云いました。

私は身体中に恥をしのんでマキユクロームを塗られていました。その手当をことわる気さえもその時の私にはなかったのです。

「もうやめたがよろし。あんたは悪いことをしているんやぞ。わたしは苦勞人だから深い事情などきかんでもわかつとる。うちへ帰りなさい。もうこんなことは忘れるこつちや」

主人の口からはかすかに酒の匂いがしていました。でもこの言葉は私に對する好意がありました。

「うちで妙な遊びをされては迷惑や。あんたもいい歳してるんやさかいくどく云わんでもわかつとると思うが、今晚はこゝでゆっくり寝て、あした早く家へ帰りなさい。大丈夫、大丈夫、あの婆さんはもうきやへん。きたらわしが、あんたもういんだ云うときますわ。ただあの若僧が来ても同じこつちや」



翌日朝まだき、私はこのホテルを出ました。自分自身に対する絶望が、重く重く全身の枷となっていきました。

冬の真近い冷い朝でした。私はマスクの中に身をひそめて見知らぬ街の曇天の朝を歩きました。身に沁みる風が吹くと、ホコリがもうまとい上って、落ちつかない、落莫とした街の有様でした。いやそれは私の心の中の風景だったかも知れません。T氏に対する感情は、今や不思議にも醒めはてていました。あの母親に対する彼の

態度は、厳しい母に頭のあがらぬ小さい息子そのままでした。もう再び母親の意に反して私を求めにくることもありません。今頃、母親は身震いする程きらいな変態性欲への憎悪を含めて、私を「悪魔」と罵っていることでしょう。大切な最愛の息子を「悪魔」の手から奪い返したという母親の誇りも同時に感じながら。

その日、私は名古屋から奈良へゆきました。たゞふらふらと、以前から憧れていた奈良へ行ったのです。もしかしたら今の私を救ってくれるものがそこにあるかも知れない——それは淡い淡い期待でした。

奈良では私は皇室博物館に入りこみました。貞観時代の作と云う安養寺蔵勢至菩薩は殊に私の心を惹きました。

藤原後期特有の線の細い、むしろなまめかしい程端麗な仏様でした。外には静かに秋の雨がふっていました。誰もいない博物館の中で私はこのみ仏を一時間もみつめていました。蓮華の台座の上にキチンと膝を折って座っているこのみ仏は少年のように清純でした。心がしずまってきた私の心が、漸くやわらかくなごんできました。世の中には、こんなに美しいものがある。人間が祈り、人間が求めた願いが、こんなに「美しいもの」をこの世に残している、こんなものがある間は、私はやっぱり生きていよう。

いつか、私は勢至菩薩像の前に膝をついて首をたれ、心から祈っていたのです。秋雨の音がかすかにひびいてきます。

「勢至菩薩よ。外は秋の雨です。そうやってもう何年掌を合わせ膝も崩さず座っておられるのです。あなたがまだこんな留置場めいたガラス箱にお入りにならない前、たとえば、安養寺の本堂で、日夜香の煙と誦經の声、時には髪長き女人の祈りも聴かれて、勢至菩薩よ

あなたはもしやひそかにも煩惱を燃しはなさいませんでしたか。あなたは私ども人間の世界では余りに美しすぎる。あなたのその柔かい頬の線、肩から腰に流れるそのうるわしい変転。勢至菩薩よ。人の気絶えたこの一刻、あなたの心を薄衣のようにゆるがせていったむかしの、むかしの、悩み深い煩惱の数々をどうぞ私にだけ、ひそかにお洩らし下さい、あなたのその夢みる唇で……。これが今日、この秋雨に訪れた私の、あなたへの心からなる祈りです」

私の頬にはいつか静かなほゝえみが浮びました。あの時以来始めての微笑です。そして手を合せ、更に深く首をたれて祈りつゞけました。博物館の人が怪んで「気分が悪いのか」と聞きにきた程ななく。

ともあれ、私は奈良の仏たちによっていくらかの安らぎを得て、又蒼黒い海のほとりの、暗いみちのくの義兄の家に帰っていったのです。

あれからもう十数日がたちます。TN氏からは何のお手紙もありません。いいえ、別にお恨みしているわけではないのです。今となっては、T氏及びその息子に対して愛情深いお母様の御幸福を祈っています。でも私は怖い、今でも時折り私の部屋の壁にあの日の母親の形相が浮びあがって夜更けの私をおびやかすのです。しかし「時」が私に何もかも忘れさせてくれるでしょう。時が！。

私はやはり一人ぼっち。「孤独」は私の運命なのです。一人で生きて一人で死んでゆく——それが私に与えられた宿命のような気がします。思い切り、私は罰せられました。再び立ち上れない程のお仕置を運命から受けました。今度こそ——私は運命に挑戦した筈

だったのです。自分の運命は自分で切り開くのだと。ところが今の私はどうでしょう。身の程も知らぬ私でした。もう再び私は積極的に人々に呼びかけることもありません。夜毎、私は又自分の性癖に悶えることはあるかも知れない。しかしその時はその時のこと、私は秋の虫のようにではなく「祈り」ひとりでもだえるだけでしよう。

読者の皆様はこの「告白」をお読みになって、さぞお嗤いになるでしょう。「馬鹿な話だ」と。

三十三歳の女は、もう生きていたくはありません。三十三年の人生経験は私に「人生」というものに、いや自分自身というものに愛想をつかせました。死ぬことは「罪悪」でしょうか。いや死ぬことも出来ないことは先刻証明済みだった筈です。運命の自動車が私をのせてつれてゆくところに私は行きます。いつものようにマスクをして、ゴムレインコート後手錠の女囚の姿で。

私をなくさめてくれるものは「美しいもの」だけ。音楽などという、はかない芸術だけ。これを聞くとときだけ、私はまだせめて人に対して親切でありたいと思う。私はものうげに立ち上ってターンテーブルにレコードをのせる。LPレコードはゆっくり廻って静かに歌声が流れ出て来ます。

三十三歳で癌のために世界中から惜しまれてこの世を去った、敬慕すべきアルト歌手の声です。

ブライムス「四つの荘厳な歌」

——おゝ死よ おゝ死よ

汝は辛きかな 辛きかな
かかる人の思いには

よき日を送り、もちもの足りて
憂なく暮す人

すべてのこと思うにまかせ

しかもなお よきもの食い得る人の思いには

おゝ死よ 死よ

汝は辛きかな 辛きかな——

ホ短調の厭世的な死の歌から、曲は静かにホ長調コラール風のピアノのパートにすべりこんでゆきます。私は涙をいっぱいためで、この心に沁みる歌声を聴いているのです。

——おゝ死よ

汝は快きかな

困窮せるものには

弱きもの、老いたるもの

諸々の憂いに沈めるもの

よりよきことの望みも

期待もなき者には

おゝ死よ 汝は快きかな

汝は快きかな 快きかな

——終——

□直接購読者の方へお願い□ 十月号以降引続き特大号を発行しておりますので、当分の間、特大号の定価にて御送金願います。継続の方には、予約金明細書を同封いたします。

その後の緊縛女優列傳

縛られた女優達

升岡金吉

嵯峨美智子。"八百八町罷り通る"で、恋

人に秘図を渡した為に庭に引出されて折檻の鞭に悶える彼女の迫真の表情は哀艶切々の美を見せてくれた。入社早々、中々の好演と感ず。

ンバー・ワンである。

高千穂ひずる。"江戸いろは祭り"浩吉共

々黒紐の後手縛りにされて納屋へ入れられる姿は美しいが故の惨たらしさを感じた。"若君逆襲す"でお姫様に扮して人質に捕えられ後手に縛られて木から宙吊り。"風雲八万騎"切支丹として捕われ後手、その他にも女が六、七人縛られていた。"霧の小次郎"でも綱で縛られるところあり。正に緊縛女優ナ

宇治みさ子。"朝焼け富士"盗賊に襲われ

て後手に縛り上げられる。"鬼伏せ街道"売春をきらった為に正にグルグル巻の七重八重で、鼻迄隠す猿ぐつわをされて物置へ投げ込まれた必死の眼が美しかった。

浅茅しのぶ。"悲剣乙女楼"仇討本懐を遂

げて唐丸籠で捕えられて行くシーンは悲哀あるシーン。"素浪人日和"悪人に人質として捕われてカゴで運ばれ、浩吉が現れるや猿ぐつわのみ首へ巻いて悲痛な声をあげ、縛りの幻想をさせ、一室に閉じ込められて後手姿を見せる。邪恋の男が入って来て「お前の好き

な男を料理してから、たつぷりと可愛がってやるぞ」と顎をグイと仰向ける。閉じた眼、観念しきった表情。男が去ると何とか縄を抜けんとして身悶える。横倒しになっても起上れぬ身をもがく姿、背面のクローズアップ。ひしひしと両手首にからんだ縄目、指が必死にもがく、実に美事に写っていた。大曾根辰夫の演出は非常にいい。

乙羽信子。"縮図"百万弗のエクボと言われた彼女が好色菅井一郎の疾痴故に半裸の蒲団巻にされ、叫び、転がり狂うのへ猿ぐつわの手拭をかけんとす、帯で後手に縛られた身を逃げ廻るシーン。肩へ近く縛られた背面をくつきりと浮彫に見せた。

月丘千秋。"暁の市街戦"人質に捕われ車に連れ込まれて細綱で後手、足まで縛られ、頬をぶたれて責められる。逃れんとして立上れば両手足の不自由さでどうと倒れて後手縛りを見せ、にじり寄る姿は名演？ やつと縄目を抜けるや宮城千賀子に見つけられて鞭の洗礼を受ける。再び捕えられた時は後手に縛られ猿ぐつわまではめられて、流れる涙もぬぐいもならぬ顔、大きな瞳が魅力的である。淡島千景。"花の生涯"女丈夫たる女隠密に扮して自から捕われて本縄縛りで唐丸籠の

中の囚人となり、原作通りなら責め場もあらんと期待したがない。ラストシーンで立木へ縛られ嵐の中の女丈夫の最期の哀姿切々。

宮城千賀子。『花の生涯』の淡島の仇役。

女隠密は本縄で凄まじい形相を見せて縄目の恥に反抗するこれまた女丈夫。近頃スクリーンを遠ざかって仇っぽい姿の見られないのは淋しい。

尾上さくら。彼女も宝塚の美人だ。『恋風街道』着飾った振袖姿のお嬢様が後手に縛られて短銃の前に観念の眼を閉じた姿は美しかった。

喜多川千鶴。『追撃三十騎』原健作共々捕われて後手縛り、恋しい人の居所を白状せよと責められて鞭打たれる。「女を責める方が効き目がある」とばかりピシリ、呻く顔のけぞる体、中々の責め場だ。後手首が縛られてあった。

山根寿子。『鬼伏せ街道』やくざ共に寄つてたかつて後手の猿ぐつわ、カゴに乗せられて行く表情はよかった。

草間百合子。『とのさま街道』黒い紐で縛られてもがく姿は平凡な演技、もっと勉強すべきだと思う。

南寿美子。『アチャコ青春手帖』後手の猿

ぐつわ、車中の誘拐、悪人は何とトニー谷、巻頭

からの縛りは珍らしい。

伏見和子。『死美人屋敷』

太綱の三四巻、天井からブラリ宙吊りにはいさゝか驚いた。あの豊満なる肉体でよく吊れるもの。

若杉曜子。『地獄太鼓』悪人に後手に縛り上げられて引き立てられんとする。肥えているから食い入る縄目が印象的だった。

南田洋子。『十代の性典』ラストシーンでデヤンヌ・ダークの火刑になる役、鉄鎖の縛りのまゝ失神するところがある。

三浦光子。『朝焼け富士』後手縛りに迫る三島雅夫の色狼、恐怖に震う人妻の表情美はさすがである。

森 啓子。『素っ飛び男』「お光ちゃん

危いころぞ」と田崎の手真似、後手の猿ぐつわの意味だ、場面が変わると悪侍の魔手の前におのゝく乙女は正に風前の灯、縛られた身を逃れんとして右に左にさける姿、中々の好演である。

長谷川裕見子。『影法師一番手柄』拐かされて後手の猿ぐつわ、眼だけがもたえる。何

時も
ながらに
美しい眼であ
る。

上野綾子。『恐怖のカービン銃』大津一味に襲われて夫と共に太綱の後手、叫ぶ口へ無理矢理の猿ぐつわ、中々の迫力であった。

桂 通子。『太陽のない街』軍国時代の警察にむごい捕縄で前手に縛られ、指責めという拷問を受ける。放火犯人の恋人というだけで、外国映画での縛りにいゝのがあったがあまり多く見なかったので二、三記すと、マリヤモンテスが『スーダンの砦』で石柱を背に抱いて縛られた姿は美しいと思った。





「ジャバへの順風」では土人娘がグルグル巻にされて鞭打たれた。「ポーリンの冒険」では昔なつかしいサイレント映画の中で、ベティ・ハットンが後手、或は両手足、鉄路上、ノコギリ台の上へ縛りつけられて断片的なシーンを見せてくれた。

「平原児」では若かりしゲリー・クーパーとジーン・アーサーが頭上に縛られてのハラハラシーン。「荒野の襲撃」ではタイ

ロン・パワーの相手女優がインデアンに捕われて、後手縛りの口に木片をかまされた珍しい猿ぐつわをされた。

又、「果しな

き蒼空」では土人の娘だが中々の美人が後手に縛られて高原を引立てられて行く処があった。「海賊黒ひげ」ではリンダ・ダーネルが帆柱に縛りつけられた。「肉の蠟人形」人間の形がグルグル巻にされていたり、後手に縛られた女が断頭台に首を入れて切られたり、怪奇的な幾シーンがあった。「クオバデイス」この中のクライマックスは何といてもデボラ・カーが薄もの、衣粧に後手に縛られて刑場へ引出されるシーンだ、ラッパの音と共に扉が開いて兵士に守られた彼女の美しい姿は後手故に倍加されて、柱に縛られて猛牛の前に恐怖する表情は実に迫真の演技だった。

「七つの海の狼」はドナ・リードの気位高い娘が前手だが固く括られたところは美しい。更に鉄鎖で足までつながれた時は美の虐待に快感をおぼえる。「私刑される女」でオウドリー・トウターが首吊りの刑になる

ところがあるが、後手のまゝ荒くれ男女に私刑される美女、あらではこんな非道いことをするのかと感心した。

「魔術の恋」
ジャネット

・リーが男装の後手錠をはめられてもがくシーン、縛り目が取れないために美しい洋服を引裂いて緊縛を誇張していた。「ノーマンのデパート騒動」中々可憐な女が悪人の為に柱へグルグル巻の猿ぐつわ、あちら流で鼻までは隠さない形であるが美形であった。「上級生の寝室」で女生徒が椅子へ縛られたまゝ殺されるところがある。変態遊戯の果の事件である。

【註】升岡金告氏の寄橋の中、嵯峨美智子の「赤穂浪士」「すっ飛び千両旅」千原しのぶの「片目の魔王」「青空大名」花柳小菊の「片目の魔王」「夕立勘五郎」宮城千賀子の「危し鞍馬天狗」木暮実千代の「疾風愛憎峠」新珠三千代の「鞍馬天狗斬り込む」日高澄子の「男の血祭」尾上さくららの「怪盗火の玉小僧」久慈あさみの「殴り込み甲州路」以上は十月号の「たのしきかな時代劇」と重複、
又、高千穂ひづるの「笛吹童子」月丘夢路の「人肌千両」藤乃高子の「美男天狗党」鳳八千代の「疾風八百八町」以上は十一月号の「女優の縛られ映画速報」と重複しますので省略致します。

四つの美しい女性の鼻について

北 谷 英 二

七月号に載せてもらった「鼻は花なり」という僕の文が、意外な反響のあったことを知って非常にうれしく思いました。僕と同じ鼻フアンの真鍋、江藤両氏に全面的に賛同されたのはともかく、青山氏にさえ傑作との御感想を得ましたことは、あの文を書いた僕の希望が達せられたわけであつたのです。

尤も、青山氏の御言葉は反語というものであつて、実際は正反対の御考えなのでしようが、鼻についての世論を喚起したい(?)というのが僕のかねてからの望みだったので、僕の目的の大半が達せられたわけなのです。

僕がおそましくも再び、このように拙い筆を執りますのも、女性の鼻についてKK読者の中から、より以上多くの御批評なり御感想なりを頂きたいのは勿論、より多くの方々に鼻ファンになつて頂きたいからなのです。

さて鼻の情態は千差万別です。

そして僕達女性の鼻讚美者は、あつかましいことですが、鼻の美感を云々する以前に、姿態、顔形、眼、口などのすべてが、理想に近い美しさを具備していることを前提条件として当然のものと考えているのです。

このことは、鼻ファンでない方々の想像もされないのではないかと思います。鼻の型だ

けでも無数に近いのに、目や口の形の変化を合せ考えるために、データとなる女性の顔たちが全く無数に多いのです。だから、僕たちの理想とする女なんてなかなか見つからないのが現状であつて、十人並の容貌などではおいそれと承知できません。真鍋氏がモデル獲得に御苦労されているのはこのためだろうと思います。そして考え合せねばならぬことは、鼻だけがいくら立派な形をしていても、目が狐のように釣上つて、細かったりなどするのは、お世辞にも美しいとは言えないことです。そんな女性は自己の美貌を過剰意識している場合が多くて、全く傲慢です。そんな「美貌





を鼻にかけて「いる女性の鼻を責めつけない」といった僕の気持を理解されなかった（？）青山氏の気持の方が僕には不可解な程です。否、むしろ例えば末摘花のような、鼻だけが身体の他の部分と全然調和のとれていない感じの女性は、鼻いじめを加えるのに絶好の場合が多い位です。

それはそうとして、実際問題としましては姿体が普通並であり、目、口その他の顔の部分が調和を保っていれば、その女性の鼻は僕の対象になるのです。その女の鼻が如何に団子であつてもよいのです。鼻責めの対象になるのは、だから、十人並以上の容貌の女である

れば、夫々僕の方法を適当に用いられるといえましょう。

たぐい稀な美しい鼻は次のように感じる時の鼻です。

それは、一見してその女性の顔形、両眼、唇などが「美しいなあ」と思わせ、一瞬後には、それら両眼、頬、口等の各部分の美しさが、顔の中央の鼻へ見る者の視線を自然と移させる——と言った女性の鼻は立派だと言えると思います。それは完全な調和感を感じることです。単に目や歯などが美しいなあと思わせるのは、第二級の美人であり、鼻であるのです。僕は、この右に述べたような美しい鼻の随一として、エリザベス・テイラーの鼻を挙げます。

○

現在では、反動というのでしょうか、顔の美しいことよりも、四肢や姿態の美しいのが美人だと、強調されすぎる傾向にあるようです。ミス〇〇とかいうのがその例ですが、あの白痴的な容貌を見ると、僕たちはゾーとさせられます。四肢の調和というのが、美人の第一条件であることは黙認すると致しまして、それが唯一最高ということはないと思うのです。

古来から顔の美醜によって女性の美しさを判断されて来たのは、故ないことではないと僕は思うのです。顔の美しい女性に、ぶざまな身体つきをしている例が少いのは、僕たちすべての再認識せねばならぬ事実ではないでしょうか。

人の官能、その五つの中の四つまでが完全に集結しているのは顔面です。他の一つ、感覚でさええないとは言えないのです——否、ないどころか、顔面（頬、鼻、唇、舌等）に於ける触感程人の心を動かす処はありません。僕は機能と美醜とを混同しはしませんが、官能が美醜に重大な関係を持っていることを強調したいのです。

人間が四肢を衣服で掩いかくすのは、美しいものをかくすためではないとはよく言われています。僕は風呂屋に生れ育って、女の裸体を見せつけられて来たせいか、他の人がひかれる程には、女の裸体にひきつけられはしません。裸体になった女性が如何に貪婪なのか如何に醜悪なものか、それは興ざめする以外はないと言えます。殊に、身体だけ立派な白痴容貌の女性なんて、醜悪な性慾そのものといった感じなのです。そしてこの顔の中で鼻の格好が美醜に最も影響する割合が大き

いのです。

僕は女性の鼻の美しさを言いたいために、容貌の価値を誇張し、ヌードの美しさを自分勝手に否定したとお思ひになるかも知れませんが、単なる全裸の女性の醜いことは、美術家にさえ認められていることなのです。

○

さて、いよいよこの文の本論ですが、前置きの方が本論よりも丁寧に述べましたのは、唯、鼻だけについて述べることは出来ないからです。大体、鼻に偏執する者は真面目に人間の美というものについて考えた者が最後に鼻に到達するものですから、女体の凡ゆる部分に言及せざるを得なかったのです。

僕の最も好む鼻の型は、前述の如くエリザベス・テラーの鼻です。これは偶然、真鍋氏と意見が一致しています。この型は「つまんだような」鼻ということが出来ましよう。すっきり通って来たのが鼻先に至ってつまみ上げたように小じんまりと、少々もり上っている鼻です。スーザン・ヘイワードの鼻も、少し調和がくずれていますが、この最も魅力ある型に入ります。

真鍋氏や升岡氏のように、鼻孔の美しさを求められるのは、専ら、官能的な感じの鼻の

類に入るでしょう。この第二の肉感的な鼻孔型の特徴は、鼻の頭が、丁度下から棒か何かで突き上げたような処にあります。鼻の孔が適度に拡がっており、女の顔を真正面から見ると二つの鼻の孔が大体見えるので、全く官能的な鼻です。(例、京マチ子、山田五十鈴)

次に第三の鼻型として、丁度前者と正反対のもので、所謂、ギリシャ鼻と言われている鼻を挙げることが出来ましよう。適例としては、プラクシテレスのヘルメス像のあの高貴な端整感のある鼻で、知的な精神の美しさを求める人の最上のものでしょう。このギリシャ的なクラシックな鼻の美しさは、主に鼻筋の秀れているせいであって、鼻のつけ根である両眼の前の鼻根部の高くて太い長鼻型であるためです。

鼻孔型の官能的な鼻は、その突き上げられたような特異な型のため、鼻筋は極めて短かく感ぜられる場合が多いのです。この型は日本女性の中にも多く見出せるものです。(例、京マチ子) ところが、第三のギリシャ鼻は西欧に於てもそうですが、日本人、殊にその女性の間では極めて稀で、その上悪いことには、大抵は鉤鼻気味に段鼻になっていたりして、純粹のギリシャ鼻は極めて稀で、世



間でよくいわれるものは余り見よいものではないのが多いのです。(例、高峰三枝子) 第一の型である「つまみ上げられ型」は、この鼻柱の美しさ(知的なもの)と、鼻の頭や孔の美しさ(官能的なもの)とが、渾然と融合し合っている故に僕の最も好む鼻であるわけだと言え、皆様もわかって下さるに違いないありません。この型はあまり理想を目指したりしなければ、日本女性の中には少なくないので、この意味からも、僕はこの鼻型が好きなのです。(例、久我美子) エヴァ・ガードナーが何だか近づき難く思われるのも、彼女の鼻があまりに力強い鼻筋から出来上っているために外ならぬので、このために同様なグリア・ガースンの知的な鼻を好まれる山



田氏が、マゾヒストである理由も理解出来るわけなのです。

女性の鼻の今一つの変った型として、僕が是非共挙げたいのに、バージニャ・メーヨ一式な小鼻の運動の素晴らしい鼻があります、この鼻は一目見ただけでは大したものと思いませんが、ものを言う度に不思議なフクラミ方をする鼻や、興奮した時に、男を魅了せずにはおかぬといった素晴らしい小鼻の運動（勿論唇や目の動きも含めて）をする鼻で、この型の鼻を御存知の方なら、僕のこの意見に賛成して下さると思うのですが……

女性の鼻の中から、以上四つの型を美しい型として列挙しましたが、この僕の考えについて存分な批判をして下さることを期待して

います。誤りがあれば、改めるに躊躇しません。

○

鼻責め、鼻いじめの面白さは、これらの美しい鼻の女性を知ることが出来ぬと、とても理解出来ぬと思われます。鼻つまみ——唯単に女の鼻を手指でつまむ事——だけについて、この面白さは実行された方でなければ、とても味うことは出来ぬでしょう。

あの小ッポケな女性の鼻の変につまみごたえのあることや、言うに言われぬ触感、美しい女の顔を思うまゝにゆがめられることの喜び、高慢な女性の美事な屈辱感の表現——等それは鼻フアンのみ知る悦びなのです。最後に、八月号の春山唯一氏の御意見を僕は次のように修正しました。読者の皆様は如何お考えになるでしょうか？ 春山さんはどうです？

——北谷氏隆鼻術（二枚の組写真）——

一、華やかなドレスや指輪やネックレス等を外された某家の令嬢風の女性が、下着の姿で後手に縛られたその鼻先へ、奇怪な釘抜様の責め道具をつきつけられた光景——。脱がされた衣服等は女の側に散らかしてある——等々……、手を加えぬ女の鼻の美し

いことを示すため。若しモデルが美貌ならば、顔面だけの写真の方がよい。真正面の少し下方から上向けの角度で写す。——でなかったら前記のような、全身写真で、なるべく女の顔が美しく写るアングルからして下さい。例えば八月号の巻頭グラビヤの中では、乳枷や鞭撻のように、モデルとなった女性の鼻が最も魅力あるように撮って下さい。

二、その女性の鼻いじめの写真。

眉毛から下唇までの部分の完全な全く極端なクローズ・アップ。僕はなるべくならこの二番目のを二つに分けて、一つは女の目から鼻までの範囲。他方は鼻から口までの写真とし、前者は鼻の下方から細い棒で鼻を上へ突き上げたもの（即ち鼻孔型で）、後者のサジスチンの手指が女の鼻を軽くつまんで、僕の最も好きな「つまみ上げられ型」の鼻になったものにしたいのを望みます。口はなるべく開けぬ様に。

以上一、二、と分けた二つの写真を並べてKKの巻頭グラビヤに載せて頂きたいというのが、僕の希望です。二枚必要なのは、女性の鼻の原型がこんなに変形されたということが鼻責めの効果を知る上に必要なからです。

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第七十六 日本 の 女王

昭和二十二年の秋、大学生だった私は、水害のことで進駐軍と折衝中の某氏の鞆持ちをしていて、そんな関係から、ある日、東京で一番高級と定評のある乗馬クラブの専用馬場を参観する機会を持った。占領下のインフレで配給辞退者が続出していた頃だが、ここは別世界で支配者たる白い神々と庶民の悩みを知らぬ満ち足りた植民地貴族達が肥馬を走らせていた。マゾヒストの私が奴隷的な憧憬を感じつつ、その光景を眺めていたことは想像して貰えるだろう。

日本人の数は少く、白人に比べて見劣りする人ばかりの中で、一人だけ私を夢中にさせた女騎手があつた。灰色ギヤバジンの遊歩用乗馬服装が良く似合つた、どちらかといえば小柄な、二十五六の貴婦人、遠くから一見して貴族的な風貌姿勢で、近くに來た時良く見ると帽子の下に広い額や大きな眼は男性的な理智と勝気を示し、それが卵をさかさにしたように頬から額にかけて細る顔の線やうすい

唇の女性的な優雅と奇妙に調和して豊かな表情を与えている個性的な目鼻立ちであつた。

そして、他の人のように障害の練習などはしていなかったが、はやり立つ逸物を手綱捌き丈で自在に抑えて扱っているところは、並々ならぬ技倆をしのばせた。その頃メリメの「チユルヂス伯爵夫人」(シヤルル九世年代記)の訳本が出ていて、私は読んだばかりだったが、この馬上の貴婦人を見て、作中のヒロインの狩猟の朝の姿を描写した。「馬は張り切つて前脚で地を蹴り、轡を噛んだりしていたが、大概の騎士だつたら余程気を付けねばならないこの悍馬に、夫人はまるで自分の部屋の肘掛椅子にでも坐っている様に平気で乗っていた。」という一節を不図思い出したことだつた。

名は知らぬまゝ、この貴婦人の印象的な美貌は、馬上の雄姿と結び付いて、私の脳裡に強烈に焼き付けられた。

片山、芦田の短い政権が去つて、空前の吉田長期政権時代が訪れ

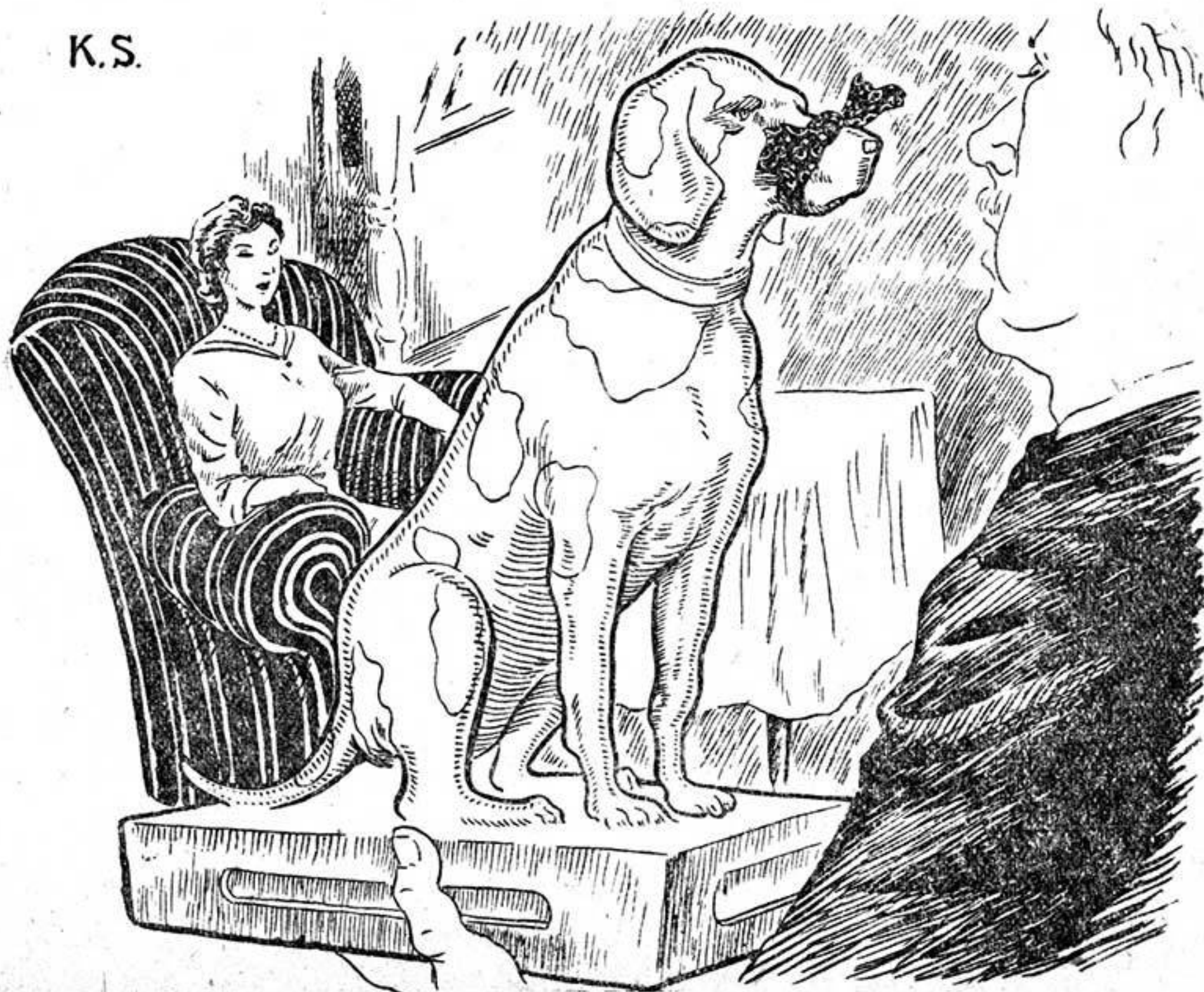
た。首相令嬢和子即ち麻生太賀吉夫人が最大の側近として威権を揮っているとの噂も次第に耳に入るようになって来た。

然し私の関心をその名前に決定的に惹きつけたのは、広川幹事長——後に彼女の機嫌を損じて側近の地位を転落したことは人の知るところだ——のいわゆる広川朗報が度が過ぎるというので、吉田首相が口を縛った犬の置物を広川氏に贈ったという話を聞いた時からだ。この贈物を選び贈ることをすすめたのは麻生夫人だと報ぜられていた。私は昂奮した。犬に対してマゾヒストの持つ特有の敏感さが、私に普通人以上の感銘をもたらしたのだ。

高貴性の微塵もない広川氏の顔を、狎に例えた漫画家はあった。吉田一門への茶坊主的御奉公振りを番犬と罵った評論家はあった。然し誰も面と向って「お前は犬見たいだ」といった者はなかった。所が彼女はそれをやったのだ。丁度飼主が飼犬に向って「余り吠えるんじゃないよ」という様に、彼女はこの贈物をした。単に犬の置物という丈では、贈られた者と犬との間係はごまかす事もできようが、「放言を慎しめ。」という代りに口を縛った犬を贈ったのだから、贈られた放言者が犬に見立てられたことは三才の童子にも分ることだ、それを承知で贈るのは「私の犬よ……」という呼掛けではないか。何という傍若無人な驕慢さであろう。何という侮辱であろう——私は広川氏がこの侮辱的な警告に対して示す反応に注意したが氏は頭をかいた丈でこの贈物を拝領したと聞いて、蹴飛ばされても平気でその足を舐める飼犬的根性を氏に見出し、彼にふさわしいものとしてこれを贈った彼女の方に何等侮辱の意志はなかったことを知った。相手を飼犬と承知してる限り、犬を叱ることけあつても、犬を侮辱することはあり得ない

K.S.

からだ。



だが侮辱でない丈に驕慢の度が高い。彼女は成り上りの広川弘禪に自分と対等の人格を認めていないのだ。名門の貴婦人特有の特権階級的人間差別観に首相令嬢としての恐いものなしの権力の自覚が結び付いて初めて、こういう贈物ができる、マゾヒストとして私はこの驕慢な貴婦人麻生和子の名を崇拜に値する女性として記憶せざるを得なかった。

× × ×

その中に講和条約の日が来て、吉田首相は渡米したが、滞米中の日本首相のホステスとして麻生夫人の清楚な美貌と才気煥発の応接とが非常な成功をもたらしたと伝えられ、ジャーナリストは争って彼女のことを報道した。そして麻生夫人の顔を新聞雑誌の写真で知った私は、それがあの忘れ難い馬上の貴婦人の顔であることを発見して、驚愕し、狂喜した。彼女は突如私の偶像となり、私は彼女に関する記事を読み、そして彼女についての知識を深めれば深めるほど、私は彼女がマゾヒストの崇拜に値する理想的貴婦人としての資質を豊富に備えていることを知った。(その詳細は次項に説明する。)だが、彼女は単に貴婦人というばかりではない。

現行の日本憲法は総理大臣に空前の権力を集中させ、昔の国王が気に入らぬ宰相をすぐ取り代えたように、恣いままに閣僚の首のすげ代えをする力を与えた。しかも警察を握り、三軍を握る。首相は実質上日本の主権者であり、天皇には象徴の虚名しかない。憲法学者の中には、元首の名は今の憲法では天皇を意味せず、首相を意味すると説く人が多い。この空前の権力の座にある老元首の無二の側近として、これを左右する力を持つ元首令嬢が、明治以来国家権力の行使に最大の影響を持った女性と評せられるのも無理はない。東

美齡こと東条首相夫人など政治客の度においても実効力においても到底比べものにならぬ。

エリザベス女王のような美しい主権者を戴く英国民を羨み、日本の皇室から女系相統者が出ないのを淋しく思っているマゾヒストは私の外にも多いことと思う。皇后陛下はあまりに蔭の人であつて、マゾヒストの要求する積極的な性質が見られない。その私の物足らなさは今や麻生夫人によつて満されるに至つた。

中国で元首令嬢を公主という、昔唐の中宗の御代、安樂公主が威権を揮い、気に入りの男を勝手に任官させて辞令を出し、正式文書にするようにと斜めに封をして中書に付した^{だいじん}ので、時の人がこれを「斜封官」^{かたがせ}といったというが、側近政治といわれる吉田内閣に在つて、公主麻生夫人の持つ権勢は、大橋武夫の法務総裁、福永健司の副幹事長など麻雀相手に対する寵愛のおしるしの証拠明らかなものを初め、吉田首相の作った七十幾人の閣僚の何割かは実は彼女の選だというし、大臣ばかりか最高裁判所長官に初め有力だった真野毅を抑えて田中耕太郎を持って来たのも、田中夫人と親しい麻生夫人の一決によるといわれる位、まさに「斜封官」の政事を思い出させる。

いや、恐らく人事ばかりではない。彼女が終始側近の座に在るのは、自身権力に参与し、国家の複雑な支配機構を理解し、支配し、玩弄することに興味を覚えているからに違いないのだ。政治の能力というものは各人の天賦だが、彼女の身体には大久保利通や三島通庸の血が流れていることを思えば、非凡な政治能力を遺伝的に具えていると見て少しも不思議でない。聡明な彼女は名よりも実をとつて父の蔭にかくれ、彼女自身の能力を少しも明示しようとしなが

彼女がこの老元首の身边を終始離れないで来たことを思えば、彼女の助力助言なしに、今日の吉田政権があったとも思えない。勿論彼女一人で吉田内閣を支えたなどというのではないが、少くとも彼女がなければ吉田首相もなからう。つまり彼女は父吉田首相と一身体になることによって、その政治能力を父のそれとすっかり融け合わせさせてしまったのだ。そして父を動かすことによって政治という面白い遊びをしているのだ。私達は、恐らく私達の想像以上に大きな度合において、吉田首相を通じて彼女によって支配されているのである。吉田首相の暴君的政治の何割かは彼女の暴君的素質に基くのだろう。——彼女こそ日本を支配する女性ではないか。元首を天皇と思えばこそ、皇后陛下が物足らずエリザベス女王を戴く英国民が羨ましい。学者に従って元首とは首相なのだと考えれば、私達も公主麻生夫人を戴いている。彼女こそ日本の女王である。私はそう思っている、マゾヒストとして皇后陛下によりも麻生夫人の方に遙かに崇愛の情を捧げて来た。

然し余り勝手に自分だけで理想化してはいはしないかという躊躇があった、現存の人物でもあり、この手帖にかくのを遠慮して来たのだが、この頃キング十月号に貴司山治氏が「日本の女王」を発表され、そのヒロイン牛田首相令嬢たか子が誰を指すかは、誰れでも一読して明らかである。中で彼女は「エリザベス女王より美しい日本の女王様！」と讃えられている。ああ、麻生夫人を日本の女王と考えた人は自分丈ではなかったかという安心が、私にこの現存女性のために手帖の項を捧げることを敢てせしめたのである。

右の貴司氏の小説は、私のように女性主権者を憧憬する型のマゾヒストには恰好の読物であるから、一読をおすすめる。組閣本部

で閣僚のメンバーを考えている彼女の前に、党の幹部雨宮甚五郎が現れ、平蜘蛛のように両手をついて頭を床にすりつけながら「入閣させて下さい」と懇願する。それを冷やかに眺めて彼女が卓上の外国煙草を一本くわえると、男は気がついて早速ライターを取出し、両膝を床につけたまま膝行して進んで、女王に仕える奴隷のようにライターを差出す。彼女は彼のさもしい根性からの阿諛的態度を蔑すむが、さればとてその奉仕を断りはしない。奴隷の奉仕をいくら受けたって、女主人としての自覚さえあれば何の義理も感じはしないのだ。黙って火をつけさせると、一服吸って、肘をつき、煙を吐いて、なまめかしい風情を示しながら、彼女は嘲笑的に彼の申出を断る。

「雨宮さん、女の煙草の火をつけて大臣にして貰ったなんてひとに言われちゃ、あんたの男がすたるわよ。尤も昔は主人の草履をふところにあたためて天下を取った男もいたけど。ま、今度はあんたにはお願いしません、あしからずね」
この場面など実に良いではないか。

追記 週刊タイムズ誌十月十日号は「人造米騒動記」と題して、特許権さえ良い加減だった人造米が保利農相の下で政府増産計画の御膳立てを備え、正式に閣議決定を得るに至ったのは、女実業家竹内寿恵女史が麻雀友達の麻生夫人に頼んだからであったという経緯を明らかにし、この閣議決定を信じて転業した結果倒産した一業者の次のようなことばを紹介している。「こんなイッツプの話を知りですか。子供が池のまわりで石を投げて遊んでいると蛙がでて来て子供に叫ぶんです。ク坊ちゃん、かんべんして下さ



い。あなたがたにとっては一寸したお遊びなんでしょうけど、私たちににとっては生きるか死ぬかの問題なんですからね」という話です。良いですか、吉田さんや麻生和子さんにとっちや、人造米は、面白い思いつきだったかも知れない。しかし私たちにとっ

ては、これは生きか死ぬかの問題だったんです」
「政治を弄ぶ」彼女を寓し得て妙であるので、併せ録しておく。

第七十七 バギストより見たる麻生夫人

前項で私は公主として、日本の女王としての麻生夫人について述べた。多少の理想化は止むを得ない。女性主権者に対する私の要求は無理にもこういうイメージを作り上げずにいないのだ。

しかし私が見た馬上の貴婦人、広川弘禪に犬の置物を贈った女性、これは彼女が首相令嬢であるということと直接の関係はない。もし彼女が権力の座に君臨していなかったとしても、私は彼女を崇拜するだろう。彼女が完全な貴婦人だというだけで。

マゾヒストの一種にバギスト Pagist というのがある。Page (侍童、小姓) という語から来たもので、お裾持ちその他貴婦人の身辺にあって奉仕する役をしたいという願望を有する者をいう、意味を取って訳すなら、貴婦人崇拜症患者とすれば当ろうか。バギストの求める女主人は、サディスティンである必要はない。夫に貞淑に友達に優しい女性でも結構、ただ召使に対して厳しい真の貴婦人でさえあれば良い。マゾヒズム的要求は、女性自

身の性格よりも地位の上下によって満される。これがパギスムスの特色である。(奇巧の誌面で、貴婦人よりも賤しい女性の手によって苛められたい、という読者の声があったが、このようにマゾヒストといわれる者必ずしもパギストでない。然しパギストの方がマゾヒズムの正統とはいえる天泥氏、馬族氏などはパギストであろう。鬼山氏、河真田氏、真砂氏などはパギストでない。)

麻生夫人を私は一箇のパギストとして崇拜する。エビングの一患者はパギストの求める女主人の要件を「高貴、財産、驕慢」の三つに要約しているが、彼女はその三要件のみならず、もっと他の色々な注文にもすべてパスする完全な貴婦人なのである。項を分けて説明しよう。

パギストの崇拜する貴婦人は先ず名門の出でなければならない。パギストは吉田首相以上に毛並を尊重する。華族の出身が喜ばれる。戦後の日本には爵位はないが、吉田内閣の政治的生命の長さからすれば、今頃は昔流に言えば、吉田侯爵令嬢で麻生伯爵夫人になっていたことは間違いない。そういったとて、成り上りを意味しない。父に吉田首相を持ち、母方の祖父に牧野伯爵を、曾祖父に大久保侯爵や三島子爵を持つ彼女は生れながらの貴婦人で、体内には特権階級の血しか流れていない。

そして彼女の父は外交官であった。彼女は伊国大使、英国大使の令嬢として少女時代を育ったのだ。パギストが求める女主人は多く西欧風の貴婦人であり、ここに日本人のパギストの悩みがあるのだが、その点で、麻生夫人は日本で求めらる最上の一人といえよう。私が見た彼女の馬術——英国仕込みだということだ——だけ見てもそれは分る。渡米するにも多くの日本女性のように和服を持参

せず、洋装で通した。洋服の着こなしの自信の程が窺われるが、それは同時に彼女の特種な特権的環境を雄弁に物語る。〃西洋に出して恥しくない日本貴婦人〃このパギストの夢に彼女は答えてくれる。また彼女は、現に九州の炭鉱主たる富豪の令夫人である。その私生活の贅沢はいうまでもない。パギストは有閑夫人の豪華な私生活に仕えたがるのだが、彼女はこの点でも申し分がない。大井広介によると九州の麻生本邸は端から端まで一町以上の大邸宅だという。私などには想像もつかないことだ。東京渋谷の麻生邸は自分で見に行ったこともあるが。……そして大切なことは彼女がいわゆる玉の輿に乗った成り上り夫人と異なり、夫の財産にいじけず逆にこれを征服し、その大邸宅を自分の享楽の殿堂とするだけの身についた格式を備えていることだ。パギストにとっては現世を享楽することは貴族の特権であり、平民は彼等の享楽に奉仕する機関である。快楽を愛せぬ貴婦人はあじきない。一日の競馬、一夕の麻雀に数万金を賭するといふ彼女の私生活はこの点でもパギストを満足させる。否彼女の享楽性は屢々スキヤンダルさえ生んでおり、そういう自由な解放された私生活はまるで仏王朝のサロンの女性達を偲ばせる。彼女等が快楽の前に夫を恐れなかったように、彼女は夫を恐れない。却って麻生氏の恐妻ぶりは、政変の時に刻々彼女に電話で情勢を報告し判断と指示を仰いだという政界雀のゴシップでもうかがわれる。貴司氏の作品にも彼女の夫は彼女の従者グループに属する第一の従者として描かれている。夫と夫の財産を支配し贅沢に暮す富豪の夫人は、パギストの理想である。

然しいくら環境に恵まれても、個人としての美質に恵まれなければ、真の貴婦人とはいえない。彼女はその点でどうだろうか。

パギストの女主人は美しくなければならない。醜い貴婦人は幻滅でしかない。彼女は美しい。女学生の場合はミス日本のコンクールで優勝したという。もう四十才近いが、インタヴィューの記事は皆三十才そこそこしか見えぬと書いている。数年前に馬上の姿を仰ぎ見た私が、二十台にしか見なかったのも無理はない。近代的な個性の強い顔立ちにいうにいわれぬ気品があり、外交官の娘らしい洗練された優雅を伴っている。調印式に父と共にサンフランシスコ空港に降り立った時の彼女の顔を、向うの新聞は「日本の最高貴婦人のミリアン・ダラス・スマイル」^{ミリアン・ダラス・スマイル}と書いたそうだ。スターなみにフアン・レターが殺倒したという。

彼女は聰明である。彼女を快よく思わぬひとびとも、彼女が聰明な女性であることは争わないようだ。しかし私がここで言いたいのは、単にピアノがうまい、英語がうまいといった一芸一能や、座談会に人をそらさぬとか、一度で新聞記者の名前を憶えてしまうと*いわれている頭のよさとか*、そんなことではない。彼女が最大の側近といわれ、影響力の大を評判されながら、その実体を見るに輻晦してしまっている巧妙さである。彼女が単に老父の身の廻りの世話をしているだけだとは誰一人信じていないに拘らず、では何をしたかとなれば、人事の一部を除いてはその影響力は確証されていない。前項でも述べたように、実質上日本の女性主権者ともいうべき実権を握りながら、自分のしっぽは人に握らせない。私はここに彼女の最大の聰明さを見出す。そして勿論パギストは自分よりもずっと聰明な女主人を要求するものである。

彼女はまた勇氣がある。男勝りである。これは既に広く知られるように二・二六事件の朝の牧野伸顕伯救出の主役となった一事で明

らかであろう。パギストがこういう女主人を喜ぶことはここにいうまでもない。

然し以上の全部が揃っていても、尚一つのが欠けていては、パギストの崇拜に値する貴婦人とはいえない。それは、エビングの患者のあげた三要件の第三番目のもの、驕慢^{シユトルツ}である。これは大切だから少し詳しく書こう。原語は Stolz である。小文字で形容詞にすれば英語の proud にあたる。普通「矜持^{ほしり}高き」とか「氣位高き」と訳されるが、日本語には適訳がない。「尊大な」「高慢な」「横柄な」「驕傲な」といった、要するに謙遜さを全然欠いた対人的態度を指す。これは特権階級の血の優秀さに自信を持っている者が特権階級に属せぬ者に対する場合の精神的態度である。貴族が貴族たる所以はこの態度を失わぬ時に示される。貴婦人としてその例外でない。ただ、貴婦人に対しては、別に「女らしさ」の要求がある。淑女の字の如き「淑やかさ」や「慎ましき」「優しさ」などといった性質が要求される。この要求は驕慢ということとどのようにして調和するのだろうか。

何でもない。彼女は「殿方」の前では「女」として淑やかになり「下司」の前では「貴族」として驕慢になる。彼女は「殿方」以外に「男」を認めない。「下司」の男性は彼女にとっては「男」ではなく、その前では「女」になる必要がない。淑やかさも、慎ましきも、優しさも、一切を捨てて、驕慢な女主人として勝手に振舞って良いのだ。そしてこういう驕慢さこそが、「下司」であるパギストの求めるところなのだ。更に云えば驕慢な貴婦人、驕慢でない貴婦人の別があるのでなく、真の貴婦人である以上、「下司」に対しては必ず驕慢なのであって、パギストは「下司」として彼女からこ

の驕慢さを引き出そうと求めるのだ。

では、この大切な要件において、私達のヒロイン麻生夫人はどうであるか？ 満点である。

父と共に、英国大使館にあった頃の彼女の驕慢さが伝えられている。彼女は大使令嬢として館員一同に女王の様に君臨し、若い外交官達の名前を呼び捨てにして私用に使ったという。大使に対してこそ上官下僚の関係であれ、その令嬢から使用人扱いされるわけはないのだが、皆それに甘んじていた。ここが面白い、成り上りが威張るのと違って、人の上に立つように生れた者には自ら威厳があるから呼び捨てにされても反抗できないのだ。それにしてもこの驕慢な少女の我儘な気まぐれは可成り激しかったらしい。好悪が強くて、彼女に嫌われたら大使館では勤まらなかつたといわれる。ある書記生は彼女の怒りを积くことが出来ず、神経衰弱になって自殺してしまつたとか。

貴婦人の驕慢は人間差別観から来るので、それは冷酷に通ずる。

フォンヴィーシンの喜劇「親がかり」の中に地主のプロスタコヴァ夫人が、女中が熱を出して横になっていると聞いて腹を立て、女中頭に「横になってます？ あゝ、悪党めが！ 横になってるって！ まるであいつが身分の高いお方だともいってたようだよ！……うわごとをいってます？ 悪党めが！ まるで身分の高いお方だともいってたようだよ！」と罵るところがある。この地主夫人には、犬ころ同然の農奴達——事実彼女は彼等に「犬の子奴」と呼びかける——が自分達主人と同じように熱を出したり、うわごとをいったりするのが気に入らないのだ。「手当てねば死んでしまいます」といわれても、彼女は「農奴の一人や二人死んだって何だね、私の財産が

そんなことでぐらつくともいふのかい」とやり返しただろう。これが貴族というものだ。貴婦人が女性として持つ優しさは下司に対しては発動しない。特権階級が非特権階級に対してもつ冷酷さがむき出しに出てくる。そしてパギストはその故に貴婦人を尊ぶのである。

麻生夫人はこの点でもパギストを満足させる。ある左翼雑誌に出ていた記事だが、例の第五福竜丸の乗組員二十三名がビキニの水爆実験に被災したため、静岡県下が大騒ぎだと聞いた時、彼女は「たかが漁師の十人や二十人怪我したからって、何も大騒ぎすることは無いわよ」といったそうだ。「貧乏人は麦を食え」だの「黄変米を食え」だのという放言を池田、保利といった成り上り者がすると、ひどく腹の立つ点は、私も一般人と同じであるが、右の麻生夫人の放言に対しては私は不思議に腹が立たない。私自身は勿論彼女のようには考えない。庶民の一人として乗組員諸氏に深い同情を寄せるものだ。然しその故に麻生夫人が私と同じように考えるべきだとは思えないのだ。真の特権階級ならそのようにいう筈なのだから、彼女にその言あつたことによって、パギストとしての私は、むしろ嬉しいことである。「ここにこそ真の貴婦人がある！」といえるのだから。乗組員中に不幸な犠牲者が出たとしても、彼女は恐らく（政治的考慮から人前では云わずとも、内心では）いうであろう「たかが漁師の一人や二人死んだって、大騒ぎすることないわよ」と。「不逞の輩」という吉田首相の表現を思えば、この父にしてこの娘あり、私達パギストはこの吉田一門の特権意識に恭しく叩頭する。彼女の召使に対する態度がどのようなものであるかは残念ながら知らない。然し長さ一町もある大邸宅の女主人は非常に多数の使

用人を使役し慣れた人であり、従って他人の勞務というものを何でもないものと考える傾向があるとうことは容易に想像できるところだ。そして、麻生邸の召使の待遇を推測するに大磯の吉田邸のそれを以て来ても、この父とこの娘との相似性から云って、大して的外れではあるまい。週刊雑誌を賑わした庭師の逃歸り事件はその重要なデータになるものだ。首相の特別な注文で山形県に注文され、県庁で醇朴な百姓夫婦を選び出した。村の名譽だとして盛大な見送りを受け、吉田邸で死ぬつもりで庭師に住込んだ夫婦は、僅々数ヶ月で堪えられずに逃げ歸った。召使になることを名譽と感ずる位の下司だから、普通の差別待遇なら我慢ができない筈がない。それが堪え切れなかったというのは、最下等の召使に対して、どのように非人間的な冷遇が加えられてるのか、想像して余りある。この吉田家の家風、つまりは封建的な貴族の家風に育った麻生夫人が主婦として支配する麻生家の家風も思い半ばに過ぎるといふものだ。

驕慢シユトルツの点の考察が意外に長くなってしまったが、とにかく、以上項目を分けて述べて来たように、彼女は文字通り真に「貴婦人」の名に値する女性であり、パギストとしてその前に拝跪するに足る存在である。元首令嬢として日本の最高貴婦人フエースト・レディである彼女は、その地位を離れて「貴婦人コンクール」に出たとしても、矢張り第一人物として優勝するに違いない。

パギストにとって、女主人たる貴婦人は所詮生涯の夢に止まる。どれほど理解ある妻を得ても、庶民の女性である限り、それは一代用品に過ぎない。然し同じく夢を持つといつても、単に脳中に抽象的な「貴婦人」を設定して見たり、銀幕の上に空しい幻を追求めたりするのに比べれば、具体性のある生身の個人をば「この貴婦

人こそ」と思い定めうるのは、なんぼうか幸福なことである。かつてその馬上の雄々しい姿を一目見たおかげで、この元首令嬢を心の女主人となし得た私は、その意味では幸福な貴婦人崇拜症患者といえるかも知れない。

終りに一つザンゲをする。私が本誌にデビューした時の「神の酒」(昨年四月号)の一文は、具体的事実については殆んど何の虚構もないが、一つだけ、末尾の方に、「A・K夫人の……」と書いたのはウソである。S子の所に来た高名の貴婦人のを頂戴した事は事実であるが、A・K夫人即ち麻生夫人のではなかった。これを書いた時にはまだ「手帖」による継続執筆も考えていなかったもので、彼女のネクターネクタールがもし口に出来たら……という内心の強い願望のまゝ、平生の夢を実現したものののように書いてしまったわけであって、この点謹んで取消しておく。もっとも彼女の名譽のため——こんな崇拜者をもつことを名譽と考えてくれるかどうかは疑問だが——附言するが、もしこの夢を実現する機会を与えられたら、私は少しの躊躇も示さないことは神かけて誓言してもよいのである。

第七十八 男ではない、奴隷ですわ

前項で、貴婦人は「殿方」の前でだけ「女」になる、と書いた時思い出した文献をここであげておこう。シドロヴィツの「庶民風俗史」に引用されているマッソン・ド・ブラモンの「ロシア秘密メモ」という十八世紀ロシアの見聞記の一節である。多少文飾する。あるフランス人の貴婦人マダムがロシア旅行中、ある公爵家を訪れた。若く美しい公爵令嬢が父公爵と並んで応接した。純潔そのもののような処女で、

「御婚約なさった方がありまして？」と問うただけでもう真赤になって、羞らはづかしいながら

「いえ、まだ」と答える有様は、いかにも未熟うぶで優しかった。宴が終り、「少し散歩したら」という父公爵の提案で、令嬢がこの夫人を案内することになった。

令嬢に従って外に出て歩き出すと間もなく、夫人は後からお仕着せを着た男が二人離れてつけてくるのを認めて、令嬢に尋ねた。

「あゝ、あれは、あたし付きの下僕しもべでございますわ。外に出ます時は、いつも連れてきますの。邪魔にならないようにわざと離れてついて参りますんですわ」という答えであった。

可成り歩いた頃、令嬢は急に夫人に向って、モジ／＼と赤くなりながら、

「一寸、お一人で先にいらっしてて下さいませんか？　すぐ追附きますから」と云った。

夫人は自分もそろ／＼尿意を催していたので令嬢のも大方その用件だろうと察し、先に歩きかけた。すると、令嬢は声をあげて二人の下僕を呼んだ。

「男を呼んだ所をみると、おしっこではなかったのだわ」と思っ
て離れた所から見ていると、令嬢は何かきび／＼した声で命令して
から、道の脇へ繁みの中に入っていく。二人の男も続く。そして驚い
たことに、一人は令嬢の長いスカートの裾をもって引き上げた。そ



K.S.

して捧げたまゝ暫くその姿勢を続けている……と見る、何かまた彼
女の声が聞えて、もう一人の男がポケットから紙を出して近寄って
いった。……

暫らくして令嬢は道に出て来た。男達を又後ろに追返すと、夫人
の所へ急いでやって来て、

「お待ちせしましたわ」

「あなたね、今何なさってたの？」と夫人はたまらなくなつて云つた。男のいる傍で用便するなど彼女には到底考えられぬことだった。

「え、一寸」と答えぬので、

「おしっこをなさったんでしよう？」とずばりと云つた。

「あら。え、そうですわ」

「男達をお呼びになつたわね」

「え、スカートを持たせますの。外でする時は、いつもそうですわ」

令嬢は平然たるものだ。

「驚きましたわ。男の人のそばでよく出来ますわね。それもわざわざ呼びよせるなんて。」

「まあ、奥様」令嬢はびっくりしたような声で云つた。「あいつらは男なんてもんじやありません。奴隷なんですわ」

× × ×

貴族社会の内部にあっては最も女らしいと評せられるだろうこの公爵令嬢は、婚約の男の有無を聞かれた丈で真赤になるほどの羞恥心を示しながら、立派な男性である二人の下僕の面前で裾をまぐって用便して、何等羞恥を感じるところがない。男が彼女にとつ

突然、初めての貴女にこのようなお便り致

しますことをお許し下さい。

私は奇クの愛読者です。それ故に誌上の写真では貴女に毎月お会いしております。貴女のこれまでの写真を挙げると「後手足吊り」「一本の縄」「後手首縄」「床柱」「ストッ

キング」「縄の四十八手」「乳枷」「くさり」

や、サジスト春日さんとの写真等数多くあり

ますね。この間、被虐モデルとしての貴女の地位が築かれて、今では幾多の同僚を凌ぎ第一人者であることは疑う余地のないことで、奇クの読者を初め編集部の方々もすでに認

めていることでしょう。

この地位を得られた第一の理由は、貴女の仕事熱心と数多くの経験、それに苦痛に対する辛抱強さが三者一体となったからだと思います。しかし私は、八月号の「乳枷」や春日さんに責められている写真を見ると、貴女が

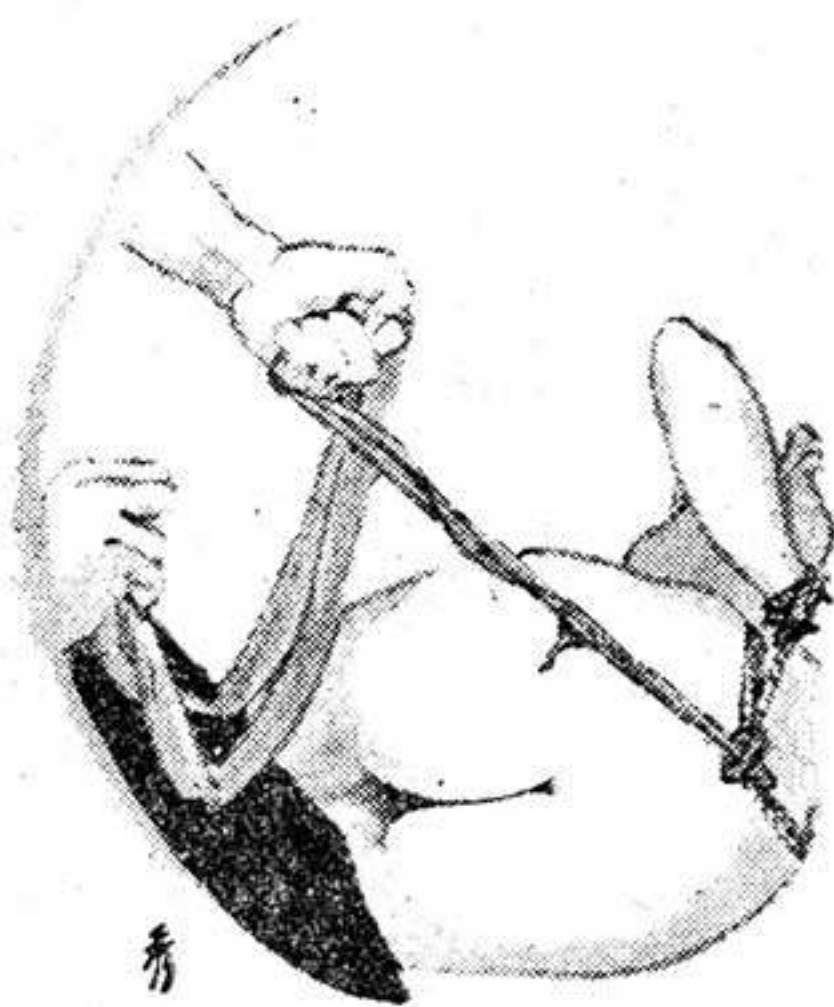
ては存在していないからである。いや同性であるフランス婦人の前を外し、彼女に対しては何をするかさえ云うのを恥じたことを思えば、この下僕達は彼女にとって人間でさえもなかったわけだ。

手帖第二十七項（昨年八月号）で紹介した「手紙」の前半の部分を、ここでは是非もう一度読み返していただきたい。そこには女主人達が奴隷が男性であることを少しも気にかけず、理性を具えた家畜として扱ったことが概括的に敍べられている。本項の引用は、その中でのロシア貴婦人と体僕との実例となしうるであろう。

この際承知しておいてほしいのは、米国の黒人奴隷などと違ってロシアの農奴、奴僕が貴族と同じ人種に属したということである。私達白人崇拜症患者が奴隷として仕えたいのは本来は勿論金髪碧眼白哲の人々なのであり、又その場合皮膚の違いは、丁度黒人奴隷におけると同様、人格の違い、人権の違いに容易に転化しうることは確実であるが、さればとて、こういう奴隷状態は白人種との間にか設定し得ない、と考へてはならない。同じ日本人の間でも、黒人奴隷制におけるような徹底した人権収奪は可能である。その可能性を示す実例がロシアの農奴制なのである。然しその詳細は別項にしよう。

伊吹真佐子様へ

佐田生より



た。決して御世辞やなんかではありません。後手にされ、両乳房にキツチリと嵌められた乳枷の貴女の表情には恍惚感が満ちているようです。又、貴女の写真にしては猿ぐつわが噛まされていないのも珍しいですね。

この「乳枷」に対して「アクティヴとパッシヴの美しいポーズ」では、歯の間にかました猿ぐつわが頬に喰い入り顔が變形していますが、かなりの苦痛だったでしょうね。それだけに実感が十二分に発揮されていますが一寸残酷すぎますね。しかし、貴女と春日さんが組んだ写真は何かしら迫力、実感が出てくることは確かですね。これは春日さんがサジストの為でしょうか。最後に貴女のフアンとして、貴女がより完璧の被虐モデルとなることを念願しつつ、ぶしつけ乍ら一言述べるところをお許し下さい。

貴女は自分自身の肉体を美しく見せようとする研究をしておりますか。貴女はもっと贅

肉を少なくして、美しくなるよう努力する必要がありますね。美容体操をするなり、マッサージをするなりして贅肉を出来るだけ取りのぞき、コルセットをつけて姿勢を正すべきです。頸ももっと細い方がいいですね。頸から縋帯を何回もきつく巻いておくとかなり効果があるそうですが（すぐにはいかないうちが）、こういうことは男の私よりも、女の貴女の方が百も御承知のことでしょう。

又、貴女の写真は全裸が多いですが、どうして自分の身体を美しくみせようとはなさらず、贅肉の多い全裸をさらけ出すのか、私は不思議でなりません。多分、読者の声に全裸の支持が多いからなのでしょうが、そうだからと言ってわざ／＼全裸になるとは、余りにも意志が薄弱すぎはしませんか。

貴女は自分勝手に美しくなるなんてことは不可能だなんて決めたりしているのではないのですか。これからは濫りに全裸にならぬようお願い致します。そして、責めの撮影にはコルセット等をつけて美しい線を出してくれよう希望します。又、貴女の手記や体験等を奇ク誌上に発表してくれるようにお願いします。責めモデルの関係上特にお身体を大切に。

マゾヒストではないのかと感じられます。あ
る人がこう言ったのを記憶しています。

「被虐のモデルは次第にマゾの傾向になる」
失礼ですが貴女の場合もこれと同様なの
はないでしょうか、初めはヌードモデルであ
ったのが緊縛モデルとなり、やがて縛られ猿
ぐつわを噛まされる事に快感を持つようにな
ったのではないかと、もしそうでなかったに
しても、多少は快感を覚えることでしょう。
「乳枷」の貴女は、非常に美しく思われまし

倒錯の英雄・織田信長を完膚なきまでに揅挾した新研究

倒錯の英雄、織田信長

笠置俊郎・作

第一章

揺 籃

信長伝に

信長公天主坊云寺へ毎日登山（当時は寺に行くことを登山すると云った）シテ手習ヲシ玉フ。其頃ヨリ氣象異相ニシテ尋常ノ人ニ替リケル

とあって、信長が生得的に特異児童であったことを書いているが、むしろ精神分析の方法を知らなかった当時としては異相であっただけで、甚だ漠然たるものである。

信長が幼少時に好んで浮浪人のような風態をしたことは、どの古

書にも見えていることであるが、それによると、いつも着物の袖をぬぎ、肌を露わに出し、三五縄で大刀をくっつけてぶらさげ、家臣の肩車に乗って町中を平気で果実や生餅や、にぎりめしを食いながら歩いたと云うことである。では、このような信長の異形な風態は、信長自身の独創によるものであろうか、というに決してそうではなかっただろう。

何か、そこにはこの時代に相似た一種の風俗があったに違いない、信長はそれをみてあの奇妙な風態を発想したものと思われる。信長の異風態は即ち信長の特異な精神を具現する一つ方法であった、だから、その乱暴狼藉な風態をした所以が明らかにされたら、ある程度は信長の異常な精神を説明する手がかりにはなる。

当時、信長は決して大名の子に生れたわけではなく、下賤ではないが、下級の武家の家に生れたのだから、育ちが高貴とはいえないが、それでも町人百姓とは違うのだから無頼放らつゝの風態は許されなかった。

云うまでもなく窮屈な武家らしい躰の中で育ったのだが、信長の眼にはその頃、志を得ずして野に在った、野伏や乱波の自由奔放な姿が強く童心を惹きつけてしまった。

野伏というのは山賊のことだが、これには觀念的な先入観をすてて理解せねばならない、当時の山賊とは単なる盜賊のことではない。ちやうど乱国の満洲平原に出没した往年の馬賊を想えばよいだろう。

馬賊は義によって盟約した一種の祕密政治結社で彼らには彼らの道徳や戒律や掟があつて、義によつては難民を救い、場合によつては主権者との交戦も辞せないと云う氣骨ある浪人の集団であつたが、日本の戦国時代の野伏もそれに似たものだ。

この野伏の後裔が、徳川の初期から中期に現われた旗本奴であり、町やっこである。記録によると慶長十四年頃に荊組、皮袴組と称する徒党が跋扈したとあるから、それらは戦国時代の、特に信長出現の前後には、そろそろ胎動をはじめていたと見るべきだろう。

旗本奴や町奴が、人を驚かすような街った風を

したのは誰も知るところ、「彼らは冬に紺綿入一つ、袖口を白で太く括つて丈は三里の下へ下る程に短かく、鉛を三匁ずつ紵け込んで



妻の跳ね返るをよしとし、大小柄色いずれも白く。」これは白柄組一名吉称組の旗本奴の風俗だが、恰度、戦国時代の無法浪人の野伏の風俗と本質には一つである、想えばこれ太平の御世における大不平児の集団であると同時に彼らはある意味では現状を破壊せんとする革命児的性格の持主でもあったのだ。

遡って、戦国の世に野伏がまずこの風潮の魁をしたといつてよからう、しかも、信長は身は斯波氏の莊官の子であつて、敢て野伏の風を装い、しかも、彼独創の癡児ぶりを發揮したのだから近隣四方から織田の大癡児と評判をとつたのも無理はない。

癡児狂童の信長こそ、日本不良少年の嚆矢であり、先覚者であり草分けであつたといつてよい。

信長の破壊性は革命児的性格によるものであるというのは史家の定説であるが、彼は単なる革命家でなく、むしろ生れつきのサディスティクな人間性によるもので、倒錯した嗜虐の情感を傍若無人に露出する精悍にして非凡な力をもっていた。この力こそ彼に恵まれた英雄的素質であつたのだ。

たいていのサディストは、社会的制約の下で、幻想を描いて偷しむのがせいぜいであるが、信長は何者も怖れずに実行してみせたのである。当然彼にも当時の社会的制約がきびしくその放恣さを制肘したのであるが、彼にはそれを力で撥ね返す英雄としての天性の智と暴力があつた。

もし世のサディストにして信長を真似んとするならば、忽ちに社会から葬り去られるであろうことは自明で、長い人類史にも彼の如きサディストは空前絶後の存在であると知っておかねばならぬ。

今少し、信長の幼少時をみると、いかに英雄とは言え、八つや十の児童にはまだ政治力も武力もない、その信長がどうしてあの我儘無礼な癡児ぶりを發揮することができたであろうか、という疑問である。

信長の父、織田信秀の老臣に平手中務大夫政秀があつた。資性温厚にして智略に長じた重臣で、信秀とは主従であつても、実は盟友の如き関係にあつた。信秀は吉法師（信長の幼名）の薫育を平手政秀に委ねた。

吉法師の師輔役となつた平手政秀は、自分の輩下で、田島伝五という当年二十四歳の侍を吉法師の相手役に選んだ。この伝五というのが、身の丈六尺余り、筋骨あくまで逞しく見惚れるばかりの偉丈夫で胆力も人一倍、数度の合戦にも拔群の功を樹てていた。

ところが伝五は至つての醜男である、その醜男も余程の念入りな醜男で、眼が三角、鼻が団子、唇はどす赤くむくれ返つて部厚く、全体の構造は横皺のつくりからいって、猿そっくりであつた。

こういう伝五だから性は重厚至誠である、そこを見込んで政秀が吉法師の輔役につけたのであるが、普通の子供なら、この伝五の顔を見ただけでワツと泣き出そうというものだが吉法師は泣くどころか喜んだ。

一にも伝五、二にも伝五と寸時も離さない氣の入りで、伝五もこう慕われると、君臣の義を超えた愛情の湧くのも道理であつた。

吉法師は、なぜか自分の生母の土田御前をあまり慕わなかつた。その理由ははっきりしないが、土田御前もまた吉法師よりは、次男の方を愛しんだ。冷淡な母子であつたことは事実であるが、それに吉法師は邸の中の侍女の手を煩すことを極度に嫌つたので、しまい

には伝五が吉法師の身の廻りまで世話を焼かねばならなかった。

その頃吉法師は母と共に那古野の城——と云っても館のようなものだが——にあって、父の信秀は本拠である古渡の城に在った。

那古野の城は、現在の名古屋城のあたり二の丸附近ではなかったかと云われているが、ここは織田信秀の勢力の中心地でなかったから極めて寂しい土地であった。

古渡の方はお膝元だけに町家や農家が軒を列ねて町の姿を形造っていたが、概してこの地方は、交通の要衝に当たっていたのだ。

近江路に通うにも、伊勢大和路に抜けるにもここを通らねばならなかった、つまり重要なクロスであったわけだ。

古渡という所は、往時は一女子村という妙な名の村であった。いつの頃から、この地方に七人の女子をもつ有福の人が住んでいて、この七人の女子をそれぞれの村に嫁せしめて長女の嫁した村を一女子村（古渡村）と名づけ順次、第二、第三女子村とその名を冠したと伝えられている。後に古渡村と呼ばれるようになったが古歌にも、

都人袖をつらねてふるわたり

世恥てかけやととめむ

と見えていて、尾張平野の要の土地であって東下りの都人の訪れも風雅に偲ばれる。

信秀の政治力もまだ伸びきっていないから、村邑の発展は未しであつただろうが、往還は賑わっていた。

その頃は猿樂や田楽の芸人や、連歌師や、都から地方へ、地方から都へと売られていく遊女の群や、中にはその頃流行の娼童なども打ち交り、それに油断のならぬ他国の諜者が姿を変えて混り込み、或は世を捨てた一杖一笠の旅僧など、色とりどりに織りなして雁の

渡るように行き交うた。

吉法師は、この他国の風趣の匂いがたまらなく好きで、変った風俗や、訛のちがう他国の言葉や、奇恥な話などに興を唆られ、伝五の肩車に乗っては在所に出てこれを眺めていた。いつの間にやら珍らしい他国の歌や踊りも覚えるようになっていた。

秋の陽が静かにさんさんと注いで、風が爽涼と野面を渡り、群れた赤蜻蛉が咲き揃った菊の花の下を流れるように翔んでは宙に止ってまた翔んでいた。

世は乱世だが、自然の秋は和んだ景色をみせていた。ここは古渡と那古野の街道で、吉法師は伝五の肩車にのったまま実った稲田を松並木の間から眺めていた。

ふとした白昼の静寂で、あたりが妙に森閑としていたが、不意に「卒爾ながら」と声をかけた者があって伝五がくるり振り返ると、汚い乞食のような浪人が立って、にこりと笑っていた。

吉法師の眼がこの汚い浪人の姿を捉えてキラキラと煌めいた。おん襦袢の着物、云うよりは破けた布片を引っかけた恰好で、それがひどく垢と埃にまみれてしまって、ぶんと厭な臭気が鼻をうってくるのだ。

顔は瓦を焼いたばかりのような色合いで、眼玉だけがぎょろりと不屈に光っている。だがその眼の底には純真さが泉のように湧いていた。

それにまた腰の大刀が、驚くばかりの長刀で地を引摺るような塩梅に見える、帯がないのか荒縄でぐるぐる巻いているのだ。

年の頃は伝五とそう変わるまい、尾羽打ち枯らした零落ぶりも徹底しているが、どこからか磅礴として人を撃つ軒昂の気魄があつて、

犯し難いものを匂わせている、妙な浪人である。

「美濃に行く道がお尋ね申したい」

と、その浪人が言った。美濃と聞いただけでぴんと緊張する尾張領内である、呑気に聞く浪人の顔を伝五が不審そうに見たが謀者の類ではないらしい。

「教えてやれ」

肩の上から吉法師が云ったので伝五は、指さしながら道をこまかに教えた。「忝けない」と浪人はていねいに辞儀すると、ふと吉法師を見上げて微笑を含みつつ問いかけた。

「若は何処のお方であられますか」

「おれか、聞きたくばおのれから名乗れ」

吉法師が、子供と思えぬ語勢で切り返したのではッとしたその浪人は、まじまじと吉法師を仰いで秀でた眉や美しい眸、あどけない頬に散る紅葉の色、ぽっと染めた



ような赤い唇から匂う美童の面影の、どこにこの凜乎としたものが潜んでいるのだろうかと探し求める顔付きになりながら

「ナル程、これは参り申した。申遅れましたが拙者は中国の浪人で轟弥平次と申します。目下は天下無宿の風来坊でござる」

「中国の浪人であるか………天下無宿とは何のことじや」

「ハハハ、天下無宿とはつまり宿無しということでござる」

「ふん、野良犬か」

「ヤッこれはきつい、して若は」

「おれは織田の吉法師じや、見知りおけ」

「おー、これはこれは、織田信秀殿が御嫡男にて在したか、お父君にはえらい御評判で、ずーと遠い他国までその名が聞えておられます、今に尾張を統一なさるのは信秀殿を措いてはないと世間では申していますが、その信秀殿の世嗣である若は、良い世代に生れるなされたもの、若は幸なお方じや」

しきりに弥平次が喋るのを吉法師は聞いていたのか聞かぬのか

「弥平次、宿が無いならおれの館へこい」

とずばりと天真の一言を浴せかけたので、弥平次はぎくんとして吉法師を見廻したが、忽ち感動の色をありありと頬に見せて

「おー何たる有難き言葉か、弥平次にとって生涯の感激でございます、ああ、せめて若が元服をすまされた御大将なら、直ぐにも喜んでお仕え申しましょうに、お会いできたのがちと早過ぎたようでございます、とは申せ、この弥平次生きてさえあれば、必ず若の御出陣と聞かば馳せ参じましょうぞ、若その時までお覚え下されば冥至伽極でございます」

「覚えておこう、弥平次、おのれの刀は長いが何故じや」

「ハッ、あ、この刀でござるか、実戦には長い刀で敵を刺すのが早くて拙者の得意でござる」

「長い刀よりも長い槍の方がよいな」

「えッ左様、それはそうでございますが」

「弥平次、乱波や野伏はおのれのような姿をしているか」

「いや、いや、あれらはすべて拙者の如きむさい姿はいたしません、斬り取り強盗を仿きますれば、却って贅沢なものを身につけております」

「斬り取り強盗をなぜ咎めぬ」

「若、乱世でございます、領主も守護も、我身一つが保てかねております、乱世では下々の諸人は難儀するばかりでございます」

「弥平次、吉法師が大きくなったら天下は治めてやるぞ」

「えッ若が若が天下を治めると………若、そのお心をいつまでもお忘れあるな」

愕いて凝視する弥平次の視線をまじともせずに見返した吉法師が、おうよと云わんばかりに大きく頷いた。

弥平次も昂奮したが、聞いた伝五はいっそう心が躍った。その時まで吉法師に天下を望む心があるうとは夢にも思わなかった。

そのとき街道の向うより大男が砂けむりを上げてきた、兇悪な風貌の、見るからに悪党ぶった浪人だった。その男は弥平次を見つけると、タタタと走り寄って

「弥平次、見つけた、そこ動くな」

と喚いた。弥平次はじろりと大男を見て、

「お主、おれを斬りにきたのか、やむを得ん、相手しよう、留めても留まるまいからな」

そう言々と弥平次は吉法師に

「余儀なきことでこの男と決斗せねばなりませぬ故、これにて御免蒙ります」

落ち着いて挨拶をすると、件の大男の方にくるりと振り返って

「権作、あちらで勝負を致そう、参れ」

と、歩き出した。

「伝五、行け」

肩の上の吉法師が弥平次の立去った方とは反対の方を指した。

「あの男いかでしよう」

歩き出しながら伝五が案じ顔で云うと、

「負けんな、あの弥平次は強いぞ」

そう云って

「それ、青蜻蛉と駆け競べじや」

と肩の上で腰を浮せた。そのあとに、弥平次にただ一突きに屠ら

れた権作という大男の死骸があったそうだが、弥平次は東国の野伏の集団荊組に入っているうち、その悪鬼のような殺戮と極悪な兇悪さに呆れて脱走し、荊組の追求をうけていたのであった。

狂童痴態

吉法師と伝五の間には、徐々に怪しい人間関係が蕩醸して行つた。吉法師の我儘と短気は宥めようのないもので、伝五はそれを我事としてまめまめしく仕えたので、吉法師は頗る満足の態であつた。

ある時、吉法師が伝五の肩車の上で知って小便をたれたことがある。吉法師は「小便をたれるということは快いもンじや」と洒々と言っていたが災難なのは伝五であつた。

頸から肩へ、胸から腹の内へ、吉法師の小便がたらたらと、浸み通ってきたときは、さすがに吉法師の思い切った悪戯に呆れ果てたが、妙なことにその幼い主人の小便の甘酸臭いが、変に擦ったく伝五の官能を刺激したのには伝五自身がどきッとした。

その小便にはじツと鼻を押しつけていたような乳臭さが匂つていて、伝五はぞくぞくするものを感じたが、そのときはもう、伝五が妖しい同性愛的な感情を吉法師に抱きはじめていたのである。伝五は醜男でかつて女の肌を知らなかった、美童の吉法師に心を魅せられたのも無理はない。

吉法師は、あの中国の浪人で山賊の群から脱け出した弥平次に会うてから、がらりと変った童になった。

着物もまともに着ていることがなかった。いつも袖を外して諸肌脱ぎの不行儀さで、それにわざわざ縄の帯をしめる朱鞘の長力をぶ

らんと腰にさして引摺っている。そんな奇ッ怪な恰好で、伝五の肩に乗って近隣の在所を走り廻り、道々大口をあいて生餅をかじったり、握り飯を頬張ったりする。いかに乱世とは云え、これには家臣も町人も心の底から呆れてしまった。

驚いたのは師輔役の平手政秀だ。

「若、これは何の真似でござる、下は領民の軽侮を招き、外は隣国の嘲りを受けましょう、早々におやめなされ」と、きびしく意見してみるが、

「構うな」と吉法師は馬耳東風、改める気配は微塵もない。

癡児よ、狂童よと噂は四隣に拡った。こうして吉法師もいつしか十歳になった。風雲児の胸中には時代の潮流がとうとうと高鳴っていた。狂童吉法師は何を望み、何を夢幻するのか、伝五だけが、「天下を治めるぞ」のひと言を烙きつけて大切にしまっていた。吉法師は自由の天地が欲しかった。束縛のない広々とした天地、我儘自由が思う存分振舞える世界を求めている。

足枷のように面倒に絡みつく、因習、礼儀、義理、道德、そんなわずらわしいものが、すべて魂の抜けた大人たちの虚偽の道具であることを吉法師の叡智がすっかり見破っていた。

主君の前で恭々しく臣礼をとりながら、心の底では機会さえあれば主君を弑逆して、その権を奪わんとする不逞を隠しもつ武士道の正体を、早や吉法師は明察していた。

何が家門か、何が武士道か、武士の虚飾に過ぎぬ無価値なものに欺かれる馬鹿らしき。それを思うと、心の赴くまゝになる世界が、どんなに尊かろう。無礙の世界よ、吉法師はそれを望んでいる。

嘘の世の中と戦う、吉法師の型破りな癡態は童心を衝いて出る本

性のままの、反抗と破壊の姿であったのだ。
吉法師は自分の心を人に告げるような、小人輩の臆病さを持ち合せなかった。ただ放らつの如く、傍若無人に振舞って見せて、アハ



アハと笑っていた。

ある日―だしぬけに吉法師が伝五に轡をつくれと命じた。それが普通の馬の轡ではない、伝五自身がその口に咍える轡である。

着想の奇も、ここに至っては絶後というの外はない。新に作った革鞭を手に、異形の吉法師が、六尺豊かな醜男の伝五の口に轡をはめ、手綱を握り、肩馬に跨って横行濶歩する有様は、唐天竺はおろか、どこの世界にもない大癡児の奇観であった。

度胆を抜かれた人々はその姿に後指をさして「あれ、酷い狂童もあったものだ。いくら家臣だとは言え、馬の真似をさせた上に、革鞭で尻を引っぱたくとは、伝五の武士もすたったものよ」

と眉を顰めて囁き合った。が、不思議なことに、その伝五が少しもうとましい風がなく、嬉々とした様子で、尻を叩かれながら、吉法師を肩に走っていた。

人馬遊び。それは誰にも解らない吉法師と伝五の秘められた遊戯であった。

人に言えばコケと嘲笑されよう、伝五は独り心の中で、あの鞭うたれたときの、ぞくツとする快感を、そっと人知れずに心の底で温めていた。

伝五にはこの自らの異常心理の説明がつかなかったが、何がなし

に大きな罪障のような気がしていた。

吉法師は伝五の尻に鞭をあてる度に、血をかき立てる昂ぶりがあった。ぴしりと撃ち下した響の快さ。それに伝五がぶるツと身慄いて疾った。ぴしり、ぴしり、鞭は風を截って伝五を撃った。

ある時などは、顔を真ッ赤にした吉法師が人眼のつかぬ森の中で伝五に臀部を露出させて、蚯蚓膨れになるまで、鞭をふるった。興が昂じてくると、いきなり伝五の肩先きに、がぶりと喰いついた。

血がたらたと流れた、皮を喰い破って、肉の中へ歯が食い入った。肉の碎けていく痛さを、きりきりと錐を揉み込むように感じて、伝五は思わず吉法師を抱いてしまった。

あッ、撓うように柔い吉法師の肉感がふんわりと伝五の腕の中に沈んできて、伝五の魂を妖しく宙に掠ってしまった。

伝五は、甘い吉法師のむせ返るような肌の臭いの中でこの「君」の為ならば、生も死もいらぬという恍惚没我の喜悦に浸っていた。

しばらくの間、吉法師は伝五の抱擁の中に身を委せたままだったが、つと醒めたように立ち上ると

「無礼者ッ」

と大喝して、ぴしりと伝五の真向から鞭をふり下した。が、その顔には少しの怒りの色も浮んでいなかった。

そんな仲の、吉法師と伝五の人馬遊びが、愚劣な狂童よと謗られていたとき、吉法師の父の信秀は――。

隣国美濃の斎藤道三と戦い、敵地深く乱入していたのである。斎藤道三は昔聞えた梟雄で、この男はもと山城の下民の子だった。はじめ妙覚寺に入り僧侶となったが、のち還俗して西岡に住みつき、

山崎屋と号して油を鬻いでいた。道三は野心の強い男で、ひそかに美濃の守護職土岐家の執事、長井長春にとり入って機会を狙っていた。

遂に機をみて長井長春の推挙で土岐政房の子頼芸に仕えたが、奸智佞邪なる道三（その頃は西村勘九郎と名乗っていた）は頼芸を教唆して頼芸の兄頼盛を革手城に攻めさせ、これを逐った。頼芸という男はその性暴勇であったと伝っているから、智脳の方は少し足りなかったらしい。道三の不逞な逆心を見抜く明がなく、山県郡の大桑の城を築いて悦に入っているところを今度は道三に攻められて命辛々逃げ出して尾張の織田信秀の袖に縋ったのである。道三は、西村勘九郎では美濃の太守に相応しからずというので、ひそかに刺客を放って出世の手引きをしてくれた恩人の長井長春夫妻を暗殺して、表面は白っぽくして長井の家系を盗み、長井姓を名乗り、後斎藤道三と改めて薙髪した。

これが天正十一年八月のことで、頼芸の救援を快諾した織田信秀は、主家に謀反した逆臣道三を膺懲するとの明分で、断固道三に戦を宣した。

むろん信秀が世道正義のために軍を進めたのではない、その下心は美濃を併呑せんとする侵略戦争であったのは言うまでもない。

信秀にも道三と戦って十分の勝算はあったのだが、道三また一筋縄でいかぬ曲者であるから、信秀の軍を迎えてよく戦った。信秀は予期に反して頑強なる反撃をうけ、麾下の織田与次郎、因幡守、水正などの重臣が、ばだばたと戦死して、思わぬ苦戦に陥った。

一方信秀外征のあとの尾張では、清州にある同族の織田広信（この織田家は信秀の宗家にあたり、信秀は宗家の三家老職の一人であ

った)とやはり同族の岩倉にある織田伊勢守の二家が虎視眈々と古渡城の虚を狙っていた。

織田の同族は、いずれも宗家を凌ぐ信秀の旭日の勢威を嫉んで、いつかの機会に信秀を失脚させようと謀っていたのである。

信秀とて油断のあらう筈もなく、留守部隊の堅陣は揺ぎもなかった。古渡城では柵も立て直し、濠も浚え、砦も防備を厳にし、城下の要所要所には、毎夜、篝火が凄惨な焰の色を夜空に映していた。

全留守部隊が戦時下の緊張に包まれているときに、吉法師ばかりは伝五の人間馬に乗って遊びに夢中であつた。

信秀の外征軍が美濃で苦戦し、いったん国境まで退却して兵力の再編成と、武器兵糧の補充をしているとの報導が入ってくると、この機を外すなど、清州と岩倉が妙な動きを見せはじめた。

家臣も時が時だけに、吉法師に遊びもほどほどにお慎しみあるようにと諫めてみたが、吉法師はふふんと鼻の先で笑っただけである。外征軍が我に不利なる戦況のまゝ膠着状態に入つたある日、九月とは言え暑さは衰えを見せなかった。

吉法師は例の如く、両肌を脱いで荒縄で腰を巻き、朱鞘の大刀をぶらんと下げ、ばさばさの髪を茶筌にくくって、伝五の馬にのって在所を駆けめぐっていた。

「伝五」

いつにない吉法師の小さな声がして、思わず伝五が立止りかけるのを

「歩け、そのままで聞け、うしろから怪しき奴が二人くる、このままあの小径を真っすぐに行つて合図をするから、一気に森の中へ駆け込め、分ったな」

と言いつると、吉法師はさあらぬ態で歌を口ずさんでいた。なる程、吉法師の言う如く背後の彼方から、二人の壮士が見え隠れにいつてくる。尾行しているのだ。

林が眼の前に迫った。そこは深い雑木林だった。

「走れ」

と吉法師が鞭を上げた。伝五がぱつと土を蹴って偉駄天に駆け出した。

覚つたか、とあわてた尾行の二人が、つゞいて林の中へ駆け込んだ時は、掻き消すように吉法師主従の姿は無かつた。

頭上は巨木と巨木が重なり合つて、枝を絡ませていた。わずかにその葉の間から、銀の斑点のように空が鈍く光って見えるだけで、あたりはいやに薄暗い。

道を拒むように倒れている巨木を跨ぎ、垂れ下る葛の輪索を掻い潜り、二人の壮士は血眼になつて吉法師を探して林の奥に進んだ。

「居らぬ」

「素早い奴」

「生捕れば――恩賞は望みのまゝなるに」

「あの大癡兒、逃がしてなろうか」

と口々に云いながらあたりを探し廻った。いずれは美濃斎藤方の放った謀者であろう。その時、ずしんと地鳴りを立てて傍からの大木の枝から降るように下り立ったのは伝五だった。

「えい」と間髪を容れぬ裂帛の気合で、六尺有余の伝五が壮漢の一人にぶち当たった。はじかれたようにその漢は、よろよろとする、そこを抜く手も見せず肩先から斜めにぐわつと一太刀浴せた。

これを見て狼狽した今一人の漢が刀を抜いて伝五に斬つてかゝる

うとしたが、枝が絡んで足場が悪い、その背後へいつの間
に下り立ったのか吉法師が

「下郎」

と叫んだ。

「何ッ」

不意に驚いて漢が振り向くとそこには吉法師がぴったりと佩刀を構えていた。大胆不敵な振舞に「小癪な」と侮って刀を振り上げたが、錯綜した枝に邪魔されて身を引こうとした刹那、吉法師が身体のままその腹の真ん中へ飛び込んで刺し貫いた。

突いた。これが人間の胴と

いうものか、じーと手応えがあった一瞬の快感が走った。漢はそれに屈せず躰を立て直して吉法師に襲いかかるうとしたが、いち早く背後の伝五が首の根に斧でもぶち込むように一撃した。血がパツと花瓣のように鮮かにあたりに散った。

「虫けら共、蹴転しておけ」

事もなげに初めての殺人の動悸の騒ぎも見せず、吉法師の笑い声が森の中にこだました。

そんなことがあって、しばらくすると、父の信秀が兵力の再編成を完了の上、再び乾坤一擲の決戦を道三に挑んで進撃したとの情報

マゾヒズム芸術時評、補遺

(本誌一五〇頁ヨリ)



「維納の別離」向って右が主演女優コレット・マルシヤン、ワカロリーヌはヴォロナンスにリストを訪ねたリ

が入った。

道三の方にも六角氏から援兵が送られ、勢いに乗って濃州大垣の織田の属城を攻めているとも伝った。

尾張では清州、岩倉の両織田軍が遂に古渡城に兵を興して挑んできた、腹背に敵を受けた信秀の運命は今や累卵のあやふきに立っていた。

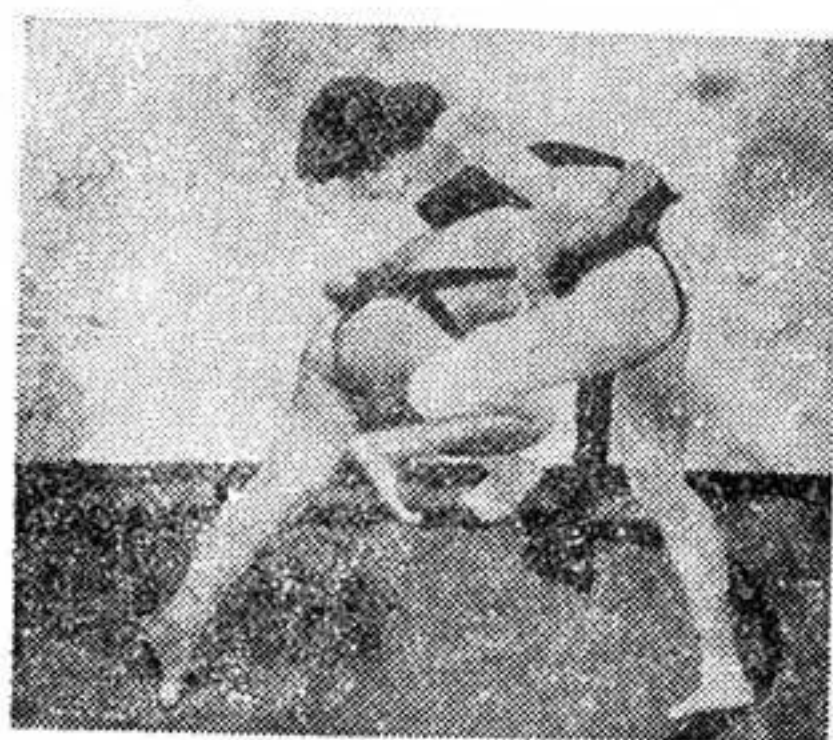
(この項終り)



「維納の別離」右上ミシエル・シモン、左下、左側からワカロリーヌとリスト右下宮廷内のワカロリーヌ



前略、奇譚クラブ毎号面白く拝見致しております。最近、どの種の雑誌を見ましても責め一点張りで、少々鼻にかゝって来たようです。浣腸とか切腹とか輝美とか、変った形式のものも出て来ましたが、小生、このところ責めにもあきて来て、輝美の方へ興味を持ち始めました。奇ク八月号の「サド女性の覆面」(山田正美氏作)は一寸変った面白い読物でした。文中、女性が角力用の輝を締めるところがありましたが、これは他の雑誌の扱ってない珍しいものでした。貴誌にも少年の輝美は発表されておりましたが、これを男性でなく女性の輝美として研究したら如何でしょうか? 輝を締めるといふ事は一種の股間責めだと思えます。これが山田氏の方法で締める一層効果があると思えますが、女性に輝をさせて固く締め上げると、股部は相当刺激されるものと推察します。又土俵四股平氏の「女闘美考現」(十一月号)中の影絵がありました、これをグラ



ビア写真にしたなら美しいだろうと思います。この処野球、レスリングにも劣らぬ角力の人気、これに美しい女性の輝美を楽しみながら土俵際で踏みこらえる断末魔の形相、投げ倒された無念の形相、又勝ち誇った顔等、興味深いと思います。角力四十八手の中の吊出し等は、女性の場合輝が股間に相当強く喰込む筈です。事情が許しましたら貴誌写真部発行の傑作写真集の中か、グラビアへでも女相撲(女性輝美)を入れて下さい。又本文中にも掲載して下さい。様お願

い致します。同封の写真は小生作製のもので、意の如く出来ませんでした。まだいろいろありますが一枚お送り致します。

(I・K生)

○ 私は貴誌愛読者です。九月号に「アクロバットに憧れる」を書かれました王子氏に、又アクロバットに関するものをお書き下さるようお願いして下さい。私は年少の頃よりアクロバットに大変興味を持っております。初めてアクロバットを見ましたのは小学校の三年生の時、少女曲馬団で高い積木の上で十二、三の少女がやつておるのを見た時です。どうしてあんなに自由自在に体が動くのか不思議でなりません。翌日、近所の子供達と相談して、その練習している処を見ようという事になりました。朝早く曲馬団のテントに行きました。シャツやズボン等の洗濯物の雑然と干してあるテントの裏口から三人でそっと入りました。舞台では丁度ブランクの練習をしており、その下ではアクロバットの練習をしていました。前日舞台で見た十二、三の少女の外に十才位の少女二人と、八才位の少女と四人で練習しておりました。

そばに皮鞭を持ったデブブリ肥えた色の浅黒い男が、大きな声で怒鳴りつけているのを聞いて、思わず私達は客席の下へかくれました。ソツと覗いて見ると、少女は四人揃って背をそらせ頭を股の間から出しており、その男は鞭でビシリビシリと打ちながら「笑って笑って」と云って居りました。少女達は笑うどころではなく、歯を喰いしばり「ムーン」と苦しそうにうめき、鞭が鳴る度に「ヒー」と泣き声をあげていました。それが済むと、今度は大きく股を開いて坐る練習をやりました。一番年の小さな少女はうまく足が開かないので、男は靴で股の付け根の所をドンと踏みつけました。少女は苦しそうな顔をして、それでもや々と股を開きました。それが済みますと、逆立で歩いたり、体をコマのように廻したりしました。その度に男は鞭で叩きます。私達は恐しくなり、それからテント小屋へは近づきませんでした。それから何ということなくアクロバットに興味を持つようになりました。最近の実演、映画等にアクロバットとがあると必ず見なければ気が済みません。今月O・Sミュージックホールへ若山昌子のアクロバット

トを五回見に行きました。又、北野劇場のトニー・谷ショウ(葉山仁智子のアクロバット)を六回見に行きました。是非アクロバットの記事又は訓練所の写真、或はアクロバットを利用した責め絵を載せて下さるようお願い致します。若し責め絵をお載せ下さるのなら、三月号の「鞭撻」六月号の「響をかまされる恐怖」のような、皮ベルトをきつく締めつけられてアクロバットの責めにあってゐる絵がよいと思います。乱筆おゆるし下さい。(H・S生)

○

拝啓、貴社益々御発展御慶び申し上げます。小生相当古くからの愛読者の一人でありましたが、実は貴誌代理部のアルバム分譲写真に就てその製作が裸体或は半裸に重点をおいて居られる為、其の点非常に残念に思つて居る一人であります。小生の好みは完全な洋装をした女の縛られた姿ですが、近頃此の様な写真は全然作つて居られなないのでしようか。以前ありました写真集の七十三集にありました洋装高手小手の洋装フットンがこれ迄一番私の気に入った作品でした(特に後者のポーズが)、其のモデルの着用して居たブカブ

カのブローース、綿のストッキング・スカートの下から見えて居るシヤツ等、大変野暮くさい洋装に見えたのが残念でした。大阪の心斎橋筋等歩いて居りますと、時々ハッ!として振り返らずには居られぬ様な美しい洋装の女性を見る事がありますが、何としてあの様な女性をモデルにした写真を手に入れたいというのが私の念願です。服装という点は裸体と異り、色々制約等があるのではないかとも思いますが、多い読者の中には私の様な方々も多い事と存じます故、是非これを実現して分譲写真の中に加えて戴きます様御願ひ致します。左に私の好みを一応申上げてみますと、(一)モデル——お嬢さんタイプの純情型又は利かぬ気型。(二)、完全な洋装——必ずナイロンのストッキングを着け、ガーターで吊す事、バンド型の靴下止は不可。裾にレース等配した短いパンティを着用、ブローースの類は不可。イヤリング、ネックレス等も必要、洋装はなるべくフレンチ・スカートの軽快なもの、靴は必ずパンプスのハイヒール。(三)縄のかけ方——縛り方写真集の文字縛りの高手小手が最も理想的縄は細い目、なるべく簡単に完全

な方法にする事、脚は可能性を示す為縛り合さぬ事。(四)、姿勢——なるべくスカートを乱し、太腿の素肌迄又はパンティの一部を見せ、苦痛と恥しさを表現した姿又は身もたえしながら縛られつゝある姿。その他の例、①柱の根に両脚を投出して縛られ縄からぬけようともがく姿、②転がされて起き上ろうともがく姿等々。(五)、猿轡——モデル嬢の表情美をそれによって強調される場合にのみ使用顔半分も掩う様なものは不可。大體右の様なものですか。要はこれから「何」かが行われようとする一歩前の姿を望むとでも申しましようか、又はチャリズム愛好というべきでしょうか、先にも述べましたが、どんな完全な服装をして居ても縛つてさえしまえば、其処から全裸でも半裸でも、或はその他の事でも色々想像の領域が広がらゆる可能性が生れて来ると思ひます。これに近い同好の人々の意見とも宜しく御懸案の上、なるべく右に近い作品を發表下さいませ様お願い致します。

(和歌山I・T生)

私は縛りマニアであると共にブローース、腰巻のマニアでもありま

す。私の好みを順に並べてみますと、(一)、赤い腰巻一つで後手に縛られてゐる女の色付の絵、又は着色写真。(二)、右の普通写真及びブローース一つで縛られた写真。(三)、ブローース又は腰巻一つで縛られた女の絵、及び全裸で縛られた写真。(四)、着衣で縛られた絵。及び全裸で縛られた絵。となつて居ります縛り方は必ず後手に縛り上げたものでなければ興味がありません。縛られた手首の高さは高手小手も好きですが、少し低い目のものが最も好きであります。手首を縛る縄は二巻、胸は二巻から四巻程度で細引が最適です。腰巻は赤が一番好きですが、桃色も悪くありません。しかし模様入りは歓迎致しません。ブローースはパンティ型のものよりブルマー型のものがよいのです。この点は十一月特大号に「ブローース・マニアの手記」を發表されました吉次氏の好みと全く一致しております。何れ機会がありましたら私の手記も發表させて頂きたいと考えて居ります。最後に編集部の方々に希望を申し上げます。先ず第一に是非共色刷り頁を設けて頂きたいのです。一、二頁で結構ですから、それが無理なら分譲写真に天然色写真を作成し

て下さい。この願いは私一人だけの希望でなく、大部分の読者の方の希望であろうと存じます。次に最近の本誌の縛られた写真は殆んどがパンティを着けて居りますが腰巻やズロース（ブルマー型）を



着けて縛られた写真も載せて下さい。女学生の体操服姿で縛られた写真等は大きいと喜ばれると思います。では又後便まで。

（福岡 S・Y 生）

最近号には春日さんの出現で男性マゾが誌面を賑わして大変喜んで居る次第ですが、もう一つ何か工夫される必要があるように思います。例えば、ストッキングを色々なに使うのも新鮮な感じを与えるように思います。連続フォトで、（一）男にストッキングの脚に接吻させる。（二）ストッキングを脱がせる。（三）片足脱がした時に男の口に押し込める。（四）更に残りの片方を脱がす。と言った風に、ストッキングを用いたマゾを求めています。貴房に若しこのような写真がありましたら御案内下さい。（滋賀 T・K 生）

いつもながら貴誌の編集には敬服の他ありません。誌上に御活躍の諸兄弟の熱意は美しい限りです

嘗てこの欄に恥しい小生の告白を寄せさせて頂きましたが、その後皆さま方の通信を拝見していますと、小生の異常さに似た方は少いように思えます。女装マニヤの文章、告白、写真も拝見しています。が、も一つピンときません。この為、深夜一人ブラジャーに月経帯だけをつけた上化粧して、恥しい姿で自ら縛っては、サドの春日ルミさんにいじめられているような想像をしては、慰めています。このような姿を自動シャッターを利用してフィルムに撮影しています。が、やはり自演だけに不自然さが隠せません。同封の写真をご覧になれば成程と了解して頂けると思っています。このような小生を理解してプレイをして下さる女性があれば本当にうれしいのですが。美し

い女性の為に裸にされ、その方のブラジャーや月経帯をつけさせられ、十字架に縛りつけられたり、後手に縛られてくすぐり責めにされたり、その方の好きなポーズの責めや凌辱を加えられれば、どんなに楽しいだろうと思っています

（大阪 伊豆操）

九月号では久しぶりに岸本氏の「女装して責めの実験」に接し早天に慈雨の気持です。写真もよく出来ていますね、モデルの心境や如何、美望に堪えませんが、惜しくは今は今少し鮮明であればと、今後二、三頁で結構ですからこの種の記事を御掲載下さい。我々同好の者は書店の店頭で奇巧を手にとり、パラ／＼と頁を繰るのです。が不思議にこの二、三頁が目につき、鬼の首でもとった気持で持帰るのです。この種の記事がないときはガッカリします。アート口絵にも二、三枚で結構ですから、長襦袢（柄ものの方がいいですね）や着物（これもなるべく昔風な派手な柄物）の分をのせて下さい。マード、洋装には興味がないのです。こんな勝手なことを書いていますときりがありませんし、記者の方から叱られそうですからやめ

ます「デパートの人形」「性液」もすきな読物です。夏よ、早く行ってくれ、そして涼しい秋がやって来て、街に奇麗な和服姿をハンランさせておくれ、こんなに暑くは好きな女装も出来やしない。

（重田生）

昨年末、ふと本屋の店頭で奇巧を買って読んだ時の嬉しさ、四十の声を聞く迄自分がアブであるため友人にも話が出来ないと卑下していた気持を開放され、友は沢山あると知りました。小さな会社専務として常識も人並に発達している云われて、少しは政治教育にも関係ある私がアブである為如何に苦しんだことか、しかし今の私は朗らかな気持です。結婚して子供が一人出来た折可哀想？ 娘の苦境を救ってやりましたが、これがくせ者で鬼山さんの「らぶ・すれいぶ」の下条君の立場になったのです。しかし、私は生れつきマゾヒストなのかその立場に甘んじて喜んで隷属して来ました。学生時代に知った下宿のマダム、ぐれていた時代に遊んだ喫茶店の年上の娘、会社でのタイピストとの交際、皆年長の女に命令されることを喜んだ私が、今度は若い女

です。しかしにまで征服されることを望んだの今は孝子(女の名前)とも、会うことはない。私は鞭打たれることは好まない、だが女の奴隷として、犬として奔弄されることを望んでいる。足なめ、人間椅子、誰か僕を救ってくれる人はいないだろうか。

(大阪、渉香生)

○ 拝啓、愈々秋も一しお深まって参りました。貴社益々御発展の程心よりお慶び申し上げます。私一昨年七月号より毎号かゝらず愛読しております。奇巧は現在の私には唯一の楽しみであり、毎号が待遠しくてなりません。殊に春日ルミ嬢出現以来のマゾフオトなど実に素晴しく私の心を魅了します。伊吹嬢を私におきかえ、或は「愛は被虐と共に」「変態艶書」「MとS」等、外にも色々被虐の記事を記憶しておりますが、何れも私を被虐の立場におきかえ、もしこれが実現出来ればとそればかり願ひながらも出来ぬ事とあきらめてあらぬ空想に浸っております。このように申し上げれば私の傾向が強く、春日嬢のような美しい女性の方の手によって、直接肉体的苦痛を与えて頂きたいのです。例

えばその方の日常使用しております。スリッパ、ハンカチ、マフラー、扱帯等の絹物で息もつけぬ位嚴重にさるぐつわをはめられ、胴締め、押え込み、首絞め等存分に苦しめられたい、これが私の切ない願ひであります。どうか私のこの願ひをお察しの上、サデ傾向の美しい女性の方を御紹介願えないでしょうか、私は如何なる苦痛にも堪え、絶体的にその方の御命令に従順致します。尙十一月号誌上で拝見しました女性の下着類幹旋の件につきまして私は非常に嬉しく早速「ブラジャー」「ストッキング」是非お譲り願いたいと思ひます。萩千恵子嬢の日常御使用になっておりますスリッパ及びシュミーズ(上下レース付で出来れば絹物)ハンカチ(絹物か木綿物で二枚でも三枚でも結構です)デシマフラー等、何れも新品でなく絶体千恵子嬢の御使用になったそのまゝのもの(千恵子嬢の汗と脂の泌みこんだもの)を是非お譲り願ひたいと思ひます。羞恥もかえりみず思い切ってお願ひ申し上げます私の胸中お察しの上、是非お聞入れ下さるよう切にお願ひ致します

(京都 M・A)



毎月貴誌を拝読しています。十月号にフエチシストのページとして腰巻を持ってゐる女の写真がありました。今後ともいろんな角度からの腰巻に対する作品を是非お願ひします。出来れば萩千恵子さんのモデルで、彼女が赤や桃色のおこしをびったり肌につけて立っているのを座っているのを。今月号の「初見世バイト」の鏡の前での絵の様にしている処なんかたまりません。希望として申し上げます私は腰巻に対する狂崇的なフエチシストです。縛られたポーズより何もしたくないでおこしを巻いている姿態の作品が、今後とも一部に加えて誌上に出る事を切にお願ひします。他にも私と同じ希望の方が多くあると思われれます。萩さんが年増の様なつくりで桃色のおこしをつけている写真が出来ればすばらしいでしょう。そして、私も告白文を書いて送らして貰います昭和二十八年十月号の「奇妙な告白」を誌上で拝見して嬉しく読みました。時々おこしに関するフエ

チシズムの記事がありますのでとてもうれしいですが、もっと多くの人がどしどしあの様な記事を書かれる様希望します。古いので多分ないと思いますが、昭和二十七年八月号の在庫はありますか？小生「奇妙な告白」の筆者が言われている様に八月号の中にもそんな記事がある様ですので、本屋等で探していますが未だ見つかりません。ではその中告白でも書いてお送りします。それから、この返事を出来ましたら次号の読者通信にでもお返事下さい。スペースがありませんでしたら。我々の様なフエチシストは人には言えない事やよるこびがあります、貴誌には安心して告白出来るのはうれしく思ひています。今後とも秘密だけは是非お守り下さい、お願ひします。

(大阪、福本時三)

(二十七年八月号は残念ながら売切で一冊も手持がありません、悪しからず)

○ 十一月特大号入手、先ず口絵写

真ッさるぐつわをかけられるまで
 ヲは例によって春日、伊吹両コン
 ビによるグラフ、楽しく拝見いた
 しました。特に第三景「鼻をつま
 んで、苦悶の口を開ける」伊吹
 嬢の表情、何度も繰り返して見て
 は昂奮しています。あゝした鼻責
 めの場面で、次回は是非大写しで
 願いたいものです。吾々鼻マニア
 の夢が少しでも誌上に実現された
 ことを厚く御礼申し上げます。春
 山氏の科学的所論「一フエチシス
 トの見た鼻」は大変参考になりま
 した。今後続々御投稿あらんこと
 を切望いたします。鼻前庭の表面
 は常に分泌物で濡れていて……云
 々は、私の異常な希望そのものを
 ズバリと書いて頂き意を強くしま
 した。「マゾヒズム通信」の桜田
 幸昭さん、貴君のような好みの人
 が私以外にも居られるということ
 はホントに嬉しい。十四、五才の
 美少女が鼻を垂れる場面、引揚婦
 人が縛られたまゝはなを出したで
 あるという想像私も同感です。
 私はバス、電車の中で前に立つ若
 い女性の鼻腔を先ず覗きます。水
 鼻で、もいゝ濡れていたら昂奮し
 ます。それが色のついた濃いのだ
 つたら、尙、一層昂奮の度を増し
 ます。映画の情婦マノンを御

覧になりましたか？ ラストで主
 演女優セシル・オブライが泣いて
 鼻水をタラ／＼と流す場面を……
 私はそのシーンを見る為に何回も
 映画館へ足を運びました。桜田さ
 ん、一度ゆっくりとお話しがした
 いものですネ。十二月号北谷氏の
 「四つの美しい女性の鼻」を期待
 しています。(江藤恵夢)

伊藤晴雨氏のク性液々岸本青柳
 氏のク縛られた八人の女々浮家鷹
 三氏のク変の字夜ばなしなど、
 女装に関する記事は大変面白く拝
 見しました。吉次一平氏のクズロ
 ースマニアの手記は、初期の蒐
 集マニアの心理状態がよく表現で
 きていて興味深く読みました。代
 理部では今回より女性の下着類の
 幹旋をされる由、先号にて小生の
 希望を直ぐ採用されたものと解し
 感謝しています。尙慾を申すなら
 ば、地方在住の女装マニアの為に、
 かづらを幹旋して戴ければ幸甚と
 存じます。最近新聞面を賑わした
 人工女性(所謂、性転換によるも
 の)の某氏と、都内の或る酒場で
 会見しました。人間の倒錯性の解
 釈に大変参考になりました。編集
 部の健斗を祈ります。

(滋賀雄二)

○ 十一月号の連続写真で、伊吹真
 佐子嬢が後手に縛り上げられ鼻を
 つまみれ苦し気に口を開けている
 構図は素晴らしいと思います。たゞ
 残念なことは顔全体が、薄暗くつ
 められた鼻の孔が良く見えないこ
 とです。今後はもっと大きく明瞭
 をお願いします。女性の高い鼻を
 針金などでつるし上げ大きく広げ



たりした写真をぜひ毎号載せて下
 さい。春山氏の「鼻」に関する細
 かい研究、唯々感心するばかりで
 す。外鼻より孔を重視する点、西
 欧人の如く高く細長い孔、鼻前庭
 の露出などみな同感します。次号
 の北谷氏の原稿たのしみに待つて
 居ります。鼻の記事の無い誌は全
 く失望しますから毎号缺かさずに
 お願いいたします。(M・N生)

前略 僕は古くからの「奇ク」、
 愛読者ですが、毎月々々大変興味
 深く拝見しています。特に七、八
 九月号に連載した山口氏の「美少
 年の秘密」ならびに十月号の「少
 年の輝美に就いて」は、大いに
 共感すると共に、僕自身の心の秘
 密をあばかれた様な思いをしまし
 た。と同時に、又この広い世の中
 で僕のような性的倒錯者も僕以外
 にも何人かいるのだなあとという事
 を知った、何か諦めにも似た安心
 感を抱きました。僕は現在二十六
 才の独身の男子、輝に興味を持ち
 始めたのははつきりと記憶にあり
 ませんが小学校の頃からでした。

唯、あの「美少年の秘密」の雪夫
 と一寸異なるのは、優男の美少年で
 はなくて、野性的で筋骨隆々たる
 逞ましい体軀の男性で、特に色浅
 黒く、体一面に黒々と毛が密生し
 又腕には「ほりもの」の一つもあ
 り、白の晒木綿の六尺褌できりき
 りと締め上げたような、そういう
 男性を見ると非常に興奮してしま
 います。残念な事には最近、パン
 ツや猿又ばかり流行して六尺褌が
 すたれてしまい、六尺褌をしめて
 いる男が極く限られた職業(トビ
 職か与太者)の人しか見られな
 いのは本当に淋しいです。僕は自
 分でも晒の六尺褌をぎゅっと締め

ていますが、出来るだけ本を漁って六尺褌を締めた若い男の写真などをコレクションしています。(その点、十月号のグラビアの男の褌姿はありがたいです)どうか今後もしどしど六尺褌の男の褌体の絵や写真や小説を載せて下さい。又男性ヌードや責めの写真等もパンツ等を着用せず、六尺褌にして下さい。(吉本一郎)

「奇ク」十月特大号のすばらしき貴誌ならではの感多かったです。私の常日頃望んでいた数々の夢がこの一冊にすべて現実として現れたのです。口絵から写真アルバム、男性被縛、絵物語等。又読物では山口氏の「少年の褌美に就いて」真金氏の「続被虐哀欲」青葉氏の「体操教師」三根氏の「愛と憎しみの彷徨」が最も私の好みに合いました。褌に非常な興味を持ち、男性肉体美にあこがれる今二十五才の私は、同年前後の同性により良き友を得ることを望んでやみません。同好の友あらば飲んで文通いたしたいと思っています。絵と写真のアイデアについて私の希望を述べさせて戴きます。美少年による褌の締め方連続写真、又は絵。褌をキリリッと締めた上、後手に縛

った処等もソドミアンの好むポーズではないでしょうか。男性ヌードによる鞭打ちの形等も如何ですか。今後共に貴誌の一大飛躍を望んで止みません。(K・Y生)

奇ク十月号興味深く拝見しました。私は今年の正月より体が悪くて病院に入院してから八ヶ月、その間本等見る事が一切出来ず、この頃ようやく恢復に向いましたので早速十月号入手致しました。私は子供の頃から少し変わっておりまして、女の人より男の裸体に興味が強く、二十五才の今日迄、風呂に行きましても同年位の男性の裸体美を見て一時間も一時間半もお湯に入っておる事がありません。映画でもやくざ物が好きで、剣劇もよく見に行きました。白いパッチをきりりと穿いた男が、親分にさいなまれる図等はゾクゾクいたします。歌舞伎芝居も大阪に行っ居が好です。奇クも男の責めをどしどし出して下さい。にがみ走った男らしいよい男子の縛り図の写真をお願いします。十月号の「ある被虐マニアのポーズ」は本当に魅力的です。男性の写真にも体にピッタリ合う、芝居で着る入墨の

入った薄いメリヤスを着た縛り図はどうでしょう。そうすると全身撮れますし、正面からでも、大の字の縛りも出来ます。ピッタリとしていれば魅力的で、愛読者のソドミアンもよろこぶと思います。何とぞ前記のメリヤスを着た全身の縛り写真をどしどしお載せ下さる事をお願いします。私が病気でなくばメリヤスを着てモデルになりたいと思います。(I生)

十一月特大号を手にして喜びの余り拙いペンを執りました。誰にも打開けられぬ心の秘密、肉体的悶えを何時も貴誌がそっといやしてくれるたった一つの友なのです。三十二才で平凡な、いや十人並以下な容貌の小生は独りの夜を慰めるものもなく、唯一人敷布の上で転々としているのです。「雄花の微笑」「被虐少年期」を読んで年甲斐もなく胸を躍らせ、そして十月号の「続、被虐哀欲」は私の哀れみも喜びも余す処なく描きつくしてくれました。真金様、小生も貴君と同じように満されぬ全てを夜毎自縛で過しておりますから、貴君の欲びも哀しみもよくわかるような気が致します。小生は男性に魅力を感じずるソドミアであり、

サチでありマゾです。それだけに十月号の「被虐マニアのポーズ」の写真はたまらない魅力でした。然し、十一月号の「ネクタイ」や「人間馬」等は實際感にとぼしく頂けません。せめて「叩かれ易い姿勢をとるのよ」位ですが、あれも是非全裸で写してほしかったのです。小生は何も写真に写す時にメイキャップをする必要はないと存じます。何日も貴誌の男性モデル(ネクタイの人)でメイキャップをして居る人が居りますが、何か厭味を感じます。色々と当局の圧迫もある事と存じますが、是非ポートに半裸(パンツ位)の男が全裸の男を本格的に責めているポーズを掲載して下さいお願い致します。この願いは小生が自分で求める姿であり、責めて見たい気持ちからなのです。読者の方の中で若し小生のような男でよかったです。是非文通をお願いしたいと存じます。同性を求め共にサチ、マゾの悩みを少しでも慰めましょう。静岡の曾根洋様、是非貴君のマゾ・フォトを見せて戴きたいのです。そして貴君のマゾ手記を知りたいものです。東京に居られるソドミアのサチ・マゾの方々のお便りを心からお待ちして筆をおきます。(仙台T・U)



私は大正十四年に東京の一隅に生れた者です。今年の五月に何気なしに本屋で「奇ク」を買求めた処、偶然にも日頃興味を持っていた浣腸の記事が掲載されておりましたので、其の後引続いて買っておりまます。私が浣腸に興味を持ち始めたのは十二、三の頃の夏、どうしたわけか便秘したのでグリセリン浣腸されたのです。始めの日はさほど感じませんでした。翌日もう一度念のために浣腸され、その時、肛門に熱い様な軽い刺戟と共に、何ともいえない快感を味いました。それから、浣腸される事が非常に楽しく感じる様になりました。それはたしか中学二年生の時だと思ひます。或る日のこと、家人が全部出払って私一人が留守居をしていた時に、退屈なものですから何か本を見ようと思つて洋ダンスの上を探しました。処偶然にも薬箱があり、何気なく開けてみると中にグリセリン二〇cc浣腸器と、グリセリンの浣腸液の小瓶が入っておりまました。私は思

わす胸のときめきを感じ、早速浣腸器を取り出してグリセリンを微温湯で半々にうすめて浣腸器に吸い上げ、自分で静かに注入いたしました。その時は比較的刺戟が少なかったものですから、一度便所へ立ち、もう一度温湯を幾分熱くして二〇ccを二回浣腸いたしました。それから、家人の留守には幾分熱目の湯でグリセリンをうすめては浣腸して、一人で楽しんでおります。私は何故かイチヂク浣腸の様に冷液より、幾分温めたものの方が心持よく感ぜられます。今後共、貴誌におかれては出来るだけ浣腸通信を掲載して下さい。

(東京都、山本一)

○ 今年の春頃よりKKクラブを讀まして戴いておりますが、読者と共に読者と歩み、行き届いた編集態度には、いさゝか敬服致しております。ことに最近、十、十一月特大号の出来は格別にて、尙一層の御発展を祈つております。特に読者通信欄の拡張、充実をお願い

致します。私は少年の頃から浣腸に對して特異な性癖とでもいふまじょうか、興味を抱くようになり看護の本や婦人雑誌の記事など、浣腸にふれた記事を読むと胸が高鳴り、人知れず興奮を覚え、又その反面悩んでいました。ところがKKクラブを通して私のような同好の方が世間には多くいる事がわかり、いさゝか気強く、又日々も明るく過せるようになり、精神的に暗いところから救われたように思います。私は純医療面の上からこれを眺めていましただけに、もう一つKKクラブの浣腸に對する取り扱い方を、この方面に専門的に解説して頂きたいと存じます。たとえば、各種浣腸器の正しい使い方、又、その体位などについて或は實際に医療面から浣腸をされた看護婦さんの体験談、そしてそれを施行された患者の方のお話など、空想や小説などではなく、学問的に要約して戴きたいものです。又、読者通信などでマニアの方がたびたび述べられているのに、貴誌では実行されないのが写真と絵画の類です。もし、具体的にそういうものが許されませんのでしたら、単に白衣の看護婦が浣腸器を手にしているところとか、又、

その準備の順序などを絵画で示していくとか、処置するベッドの上にゴム布や便器を用意している横で、患者が下衣を脱いでいる図とか、いろいろ考えられる筈です。是非共、これらの事を誌面に再現して戴きたいものです。又、これを解剖学的に、肛門にさし込まれて液を注入する事を断面的に図示し、患者が羞恥によって肛門の括約筋の運動の有様など、生理的にも着想される事と存じます。出来れば編集部の方に努力願つて各種浣腸器の商品名、そしてその特徴価格など調査発表の機会を得たいものと考えます。(兵庫、田中明)

○ 僕は二十一才の浣腸に興味ある浣腸マゾヒストです。日夜きれいな女の人に一度でもいいから浣腸されてみたいという気持ちで胸が一杯になっていきます。女の人から浣腸されることが僕の最大の希望でもあり喜びです。浣腸フオトの二集二集大変興味深く拝見しました。浣腸写真はやはりイルリガートルよりも、ガラス製の浣腸器の方が写真で拝見しても迫力があり見えていても退屈しません。是非浣腸器を使用して下さい。又、イチヂク浣腸を使用するのもはるかに

面白いと思います。浣腸も魅力があります。浣腸される方の人にも、やはり一つの体の動きとか、顔の表情を工夫すると確実に効果がでるだろうと思います。私の希望としては、春日ルミさんが浣腸器を手にながら煙草を口にくわえて真剣な顔付きをしていたらどんなに素晴らしい事かと思えます。春日ルミさんをお願いして是非このようなポーズを写真にしてください。今度写真を作成します時は、ビニールの敷物とか、クスリビン新聞紙等を写真の中の調和のとれる画面上に置いて下さい。

(浣腸マニア)

○ 待たれるのは十一月号と浣腸三態の第三集の刊行がマニアたる私の押えきれない希望です。第三集第四集と作成下さる事と存じますが、私の思いつくまゝのアイデアポーズを書いてみました、何卒このようなフォトを作成下さるようお願い致します。①、セーラー服の乙女への浣腸。スカートと脱ぎ取られてズロースは膝まで下されてうつ伏せにされ、後手に縛られているポーズで硝子の浣腸器で浣腸されている。②、①と同じ服装で仰臥させられて膝は腰に紐で縛

られ手は後手で仰臥させられて浣腸をしているフォト。飛田氏のアイデア縛り絵々妻木氏の私の悦虐ノート々白金氏のクデパート人形々又新年号では桜井氏のク罪ある女々等と、女性がオムツをさされて責められている記事がありました。が、今後もオムツを扱った記事が発表される事と思えますが、女性のオムツをまとったフォト等はたまらないものと存じます。又海水着にオシメカバーをあててみたら面白いと存じます。お仕置にも恥しがる乙女にオシメをさせオシメカバーをあてゝ縛り責めるのも、又一しお趣きあるフォトになると存じます。よく小さい子供が浣腸されてオシメをあてられていのを見掛けます。若い女性を浣腸してオシメを当ててみたらマニアには垂涎の的になる事と存じます。浣腸フォトには便器なりオシメ等を側へ置いてあるフォトだったら効果一〇〇%になることと存じます。何卒この様な私の意図を斟酌願えれば幸甚と存じます。

(岐阜、新井茂)

○ 十一月を興味深く拝見いたしました。美しい表紙で、これまでのどの号よりもたく山の浣腸の記事

がのっているのは、本当にうれしいことでした。何てすばらしい内容でしょう。私にあてて吾妻先生の「裏返し」のA感覚、先生、本当にありがとうございます。私は、先生が私のものを注意して読んで下さっているなんて、とっても知りませんでした、また、人工的手段によって膨満した腹部が実は自分のお尻だなどと、考えてみたこともありませんでした。でもよくよく考えてみると、何だか思いつくこともあったような気がします。妊婦のせり出したお腹に対する私の興味もまた、同じように形を変えた「裏返し」のA感覚だとすれば、私が妊娠していた時、自分の大きなお腹を股間縛りの要領で縛り上げて、真中から左右に二つに割れたようにしてみたり、双胎児の場合は真中に縦に溝が出来るといふことを本で読んで興味を覚えたりしたのは、水や空気で腸を膨らますのよりも、もっと決定的な証拠になるかも知れません。でも、「臓腑への郷愁」の方は、正直に申し上げて、まだ何かしら先生のご説明で、私の気持がびったり割り切れないように思います。私もこれからいろいろ勉強して、先生のお教え下さったことをもう

一度よく考えてみてから、また次の機会に質問させていただきたいと思えます。花村さんの「浣腸マニアの手記」、江沼さんの「クリスター・フェチズムに就いて」も面白く拝見しました。殊に花村さんは、私にとっても近い傾向の方のようで、大変親しい感じがします。「KKサロン」の中の久里須さん、「浣腸通信」の大阪X・O生さん、島さん、と今月は本当に浣腸マニアの天国です。「奇譚クラブ」が私たちにどんなによろこびを与えてくれるか、はかり知れないものがあります。(羽村京子)

○ 最近の御誌に浣腸に関する記事が、だんだん多くなりましたことは、マニアの一人として誠に喜ばしいことと思えます。殊に十一月号の花村さんの「浣腸マニアの手記」は素晴らしいものでした。御自身の体験と心理をわいて実に名文であったと思います。その続きが待たれてなりません。又江沼氏の「クリスター・フェチイズム」も浣腸に対する心理を分析して興味深いものでした。文中にあったフランスの面も誌上に発表されるとか、代理部より発売して戴きたいと思えます。又それらの面や文

の内容をもっと詳しく発表して下さいませんか。今後この種の研究を載せて下さい。又角皓子さんの兄さんが、妹さんについて書かれた「皓子抄」も角さんの心持がよくわかれて興味ありました。その他、読者通信等にも同傾向の方が大勢いられるのは喜ばしい事と思います。でも他のアブ・セックスに比べて画が少く写真が載っていないのは本当に残念です。私は今迄に見たものでは「あまとりあ」誌、第一巻、第三号の口絵に若い婦人がベットの頭に四つん這いになり、侍女から浣腸を受けている画、「人間探究」誌、第二十四号の口絵に婦人が自分自身に浣腸を行っている画、又或る艶笑面集の中で、ベッドの上の婦人に侍女が浣腸器を手にして将にこれを行わんとしている画等です。もともと他のアブ・セックスの縛ったり叩いたりする等の原始的なサド・マゾに比べて浣腸願望は、もっと文明的なものであると思えましょう。この意味でもより多く扱われてもよいと思います私の好みとしては、いやがる者に無理に浣腸するよりも、それに大きな喜びを抱いている方の告白文や、互に喜びと楽しみを持ち合っ

た同志の体験談や創作等を読みたいと思います。私が子供の頃、友達とやったそうした遊びは、大人になってからは、相手もなく出来ませんので不満ながら自分の身体によってわざかにみたくしてありますが、やはり若い婦人を相手にそうした遊びをしたいと思うのが本当の気持です。又医者になればよかったと後悔しています。でも奇クを読み多くのマニヤの文章からいろいろ空想を發展させることは大きな楽しみとなっております。今後関係記事の発表を望みます

(山田悠介)

○ 暦の上では秋立てでも残暑未だ厳しき今日此頃、十月号を入手致し全く嬉しく拝見致しました。次回も又絢爛たるプランで今から待ち遠しき次第です。浣腸フォト第二集も垂涎の的とも云うべく、嬉しく拝見致しております。第三集第四集と続けて作成下さる様お願い致します。裸体の女への浣腸法も結構ですが、今度は女学生のポーズは如何でしょうか、制服を着て浣腸をする方法で羞恥と苦痛に歪むポーズは、マニアには垂涎のNO1のフォトになる事と存じます。またオムツをさせて責めるの

本誌

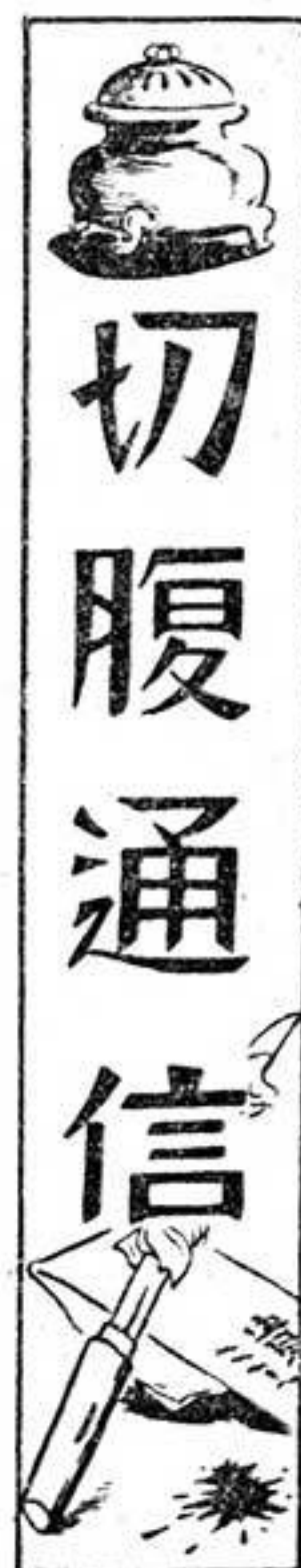
七十号突破記念原稿、予選通過作品発表
(九月十日現在まで)

破戒の楽しみ	妻木 進(兵庫)	地下室の怪	人見 忍(京都)
万葉殺人	佐藤袈裟人(青森)	落しとり	岩 山影遊士(鹿児島)
悪 人 教 師	榎本利子(和歌山)	むすみれ	伊藤早苗(埼玉)
舌 人 形	淡美一郎(広島)	ヴィナス	真砂十四郎(大阪)
姉とその弟	春木俊野(東京)	あゝこの重石	小村二郎(東京)
女性志願者	真崎伸一(滋賀)	恍惚境	杉 朱実(奈良)
美千枝の夢	久留木 栄(宮崎)	復讐 鬼	李 窮民(兵庫)
完全なる隷属	坂田信治(福岡)	食 人 種	村瀬雷三(埼玉)
耽美の果て	中谷冷一(京都)	男 体 頌	渡辺 保(大阪)
牛乳風呂	佐々京介(大阪)	馬鹿げた告白	角 等(大阪)
鞭の下から	馬 族 保(福岡)	マゾならぬ	足 宇津木 武(岡山)
腎部哀欲	狩井麗作(福岡)	紅 蓮	青葉 樹一(静岡)
小さな紙切れ	村田恒夫(大阪)	教師の記録	摩耶 馨(茨城)
サディズム	石丸草一郎(群馬)	練 修 士	巽 鷹夫(三重)
あわれ誠一郎	日文世古六(兵庫)	弾 痕	淡 美一郎(広島)
田舎教師	菅 文一(奈良)	禁男の家の虜	三根耕二(京都)
好色女の告白	原 笑子(大阪)	享楽を求めて	永井信行(大阪)
懺悔性書	熊野三郎(和歌山)	不倫なる恋	山口 艶子(東京)
素足恋慕	高原淳三(大阪)	美しき青春	葉川 明(東京)
私の告白	森 茂子(兵庫)	昔 の 人	真 毅 操(横浜)
特等席の人形	坂 みのる(東京)	白鬼の虜	弓削悦二(大阪)
		むく犬の手触	花井時代(福島)

順序不同(此の外にも注目すべき作品はありました)

も一興と存じます。豊満なヒップにぬめぬめしたおしめカバー//豊満な大腿に喰い込む様なおしめカバーのゴム、考えるだけでも耐

えられないものです。是非おしめをまとう女々という様な画を作成して下さい。(岐阜S・A生)



私当年二十一才の貴誌愛読の一女性です。号を重ねるに従いまして益々内容充実せる御誌の発展振りに心から嬉しく存じます。毎月御誌が店頭に出る日を心はずませて待つて居る私なのです。昨日御誌十一月特大号入手致しました。早速拝見させて頂きまして、その内容の素晴らしさに感激致しました。殊に盛沢山のグラビヤ写真は全く素敵です。特に「女性切腹のページ」を拝見致しました時は、思わず興奮して手がブルブルと震えました。全く私の好みにあったそのポーズ、写真の美しさ、全く感心致しました。今後共どんなこのような美しい「女性切腹」の写真掲載して頂きますよう心からお願ひ申し上げます。かく申します私は何をかくしましように、御誌の特色と申せる女性の切腹の記事に

深い興味と楽しみを持ちます切腹マニアの一女性です。ある商社会社に勤めておりますが、何時の頃からか切腹に深い興味を持ち、いろいろ資料を集めたり、実際に自分で切腹の真似事をしては、秘かに、私のアブノーマルな切腹願望の何分の一かを、充たして居ります。十一月号の御誌の原桐咲代様の切腹写真を見て、とかく批評したりするのは潜越至極でございませうが、同じ「切腹マニア」の私見として私の希望を述べさせて頂きます。実際に自分で研究し、自分でもやってきまして、私として一番好ましい切腹の方法は矢張り貴誌昨年の四月号に載って居りました信太蓉子様の切腹の方法です。私の切腹の真似事も信太様のような方法でやって居ります。腹切刀は真刀を用いまして、刃はすっか

り落しますが、切先は鋭く尖らせておきます。そうしませぬと刀を突立てた時苦痛が弱く実感が思うように出ません。そして着衣はやはりヌードやパンティより、昔のように白装束にして双肌を十二分に寛げての方がよいでしょう。腰の下、下腹部まで十分に寛げます。さて愈々切り方ですが、前述致しましたように信太様の切腹を参考ににして先ず短刀の切先をびったりとお臍の上に当てがい、やゝ前かがみの姿勢でゆるやかに突込んでゆくのです。切先は刃こそ落してありますが、鋭く尖って居りますので相当苦痛ですが、我慢して出来るだけ深く突刺します。十分に刺込んでから今度は短刀を抜き取り左腹へ突立てギリギリ右へ、返す刀で刃を下向けて鳩尾から臍下迄十文字に夫々臍を通して切先を走らせるのです。これが私の切腹の方法ですが、どうかこの方法に依る美人の切腹写真を掲載して下さいませ。切に「切腹マニア」としてお願い申し上げます。尚、私もこの切腹のポーズを写真に撮って御誌へお送りしたいのですが、残念乍らカメラを持ちませぬので、何れカメラを買いましたら御誌の編集部宛送付させて頂きます。突

然かゝる御無理なお願いを申し上げて誠に相済みませぬ、何卒お許しの程。出来得ればこのような写真の一日も早く掲載されん事を何よりの楽しみにお待ち致して居ります。(切腹マニアの一女性N子)

前略、小生貴誌の愛読者ですが最近女性の切腹について種々の御意見があります。男性のものは他誌にも時折散見しますが女性切腹は本誌の特色です。どしどし傑作を発表して下さい。十月号グラビヤの美しい切腹画につづいて十一月号の原桐さんの写真は今までにない美しいものでした。単なるモデルと違って表情といい、角度姿勢といい、長襦袢と白衣のものは申し分なく、今までになかった傑作でした。切先と下腹部の切創と臍のコントラスト! 小生も異常な興奮をおぼえました。是非十二月号も傑作を期待して居ります。(K・S生)

○ 瀬川泰子様——と申上げるよりお姉さまと申上げたい気持ちでございます、十一月号の通信欄で私へのお呼びかけを拝見してそうした気持ちになったのでございますが、不躰なことを申してお宿し下さい

☆奇譚クラブ新年特大号豫告☆

定価 140円

新年号は更に増頁の上、奇クならではの特集を試みます。斬新なる企画に御期待下さい

特集

懸賞(告白・手記) 入選作

サド、マゾ、フェチ、切腹、浣腸、ソドミーとあらゆる倒錯の生々しき告白を網羅しました。一カ年に亘って寄せられた読者の叫びの集大成です

綿ネルの妄想……福本時三
色惚けのページ……魔像 保
縄と足の遍歴……幾山 凝迷
秘……青葉 楓一
寄宿舎での体験……緑川 純子
夫婦の倒錯遊戯……山田美知子
私の記録……諏訪俊昭
不貞妻の告白……鳥津輝子
動物嗜好者……摩耶 馨
眼帯マニアの妻……菅野房江
集まる人々……鷺尾千芳
浣腸……矢崎 龍一
切腹願望……沢清 克
ソドミーの祭壇……三根耕二
「子供山笠」……山口幸一
丁稚小僧の幻想……森 太一
A感覚の秘密……羽村京子
破壊本能の理由……林 弓志雄

緊縛に関する十二章

辻村 隆

黄 昏……中川房夫

無惨絵地獄……長岡変一郎

女 灸 点 師……長谷川 清

号 泣……佐次浩介

アート頁(口絵写真)

血染の毛綱……伊藤晴雨

新撮影のマゾ・フオート、責め写真、各面伯競艶の口絵集等多数

(絵物語) 百合子の冒険

— 姐上の巻 —

縛られた女優……井上一雄

草双紙に見る女腹切……川合伊都子

残酷なる女性達……森本愛造

告白文、体験談の編集部

大好評、連載小説と読物

夜 光 島……吾妻 新

幽 囚 十 月……春田一郎

性 液……伊藤晴雨

織 田 信 長……笠置俊郎

手 帳……沼 正三

悪の広場(二)……角 皓子

ませ、私、国文もなにも一向知らない者ですのに御教示などとおっしゃられると恥かしくて何も書けなくなってしまうますわ、私、お姉さまの見ていらっしやる前で切腹してみたい——お姉さまにお別れの御挨拶をしてから徐ろに帯を解き緩めた扱帯をおし下げて肌を寛ろげます。いゝえ思い切って双肌を脱ぎ捨てます。お姉さまはやさしい目なでさしてじっと私の仕草を見守って下さるでしょう。私が左手で脇腹からお臍の下までゆっくゆっく撫で廻し、右手の刃を左の下腹へ擬したとき、お姉さまのお目はその一ヶ所に凝って極度に緊張して輝きをお見せになるでしょう。私は「お姉さま」とお呼びすると同時に切先をぶすっと突き立てます。「見ていて下さる」と思う心強さから、そのまゝきりりとお臍の下まで一気に引廻します。激痛に思わず前屈みになって左手を膝頭の前についてしまします。お姉さまはきつと「伊都子、いま一息よ、さ、しっかりと、美事に切り終えるのよ」と励まして下さいます。私はそのまゝの姿勢で一息一息抉るように、ぐいぐいと右へ刃を引きます。お姉さまは私を後からしっかりと抱きしめて下さるで

しょう。そして、私に手を持ち添えて斜に鳩尾のあたりまで思い切り深く切り下げて下さるでしょう——こんな我偽勝手な妄想を申し上げてお宥し下さいませ。それから私の写真の件、これだけは今のところおゆるし下さい、実は撮影致しますとその都度ネガを焼き捨てしましますので焼増しが出来ないのでです。その上嘗て編集部へお送りした他のはあまりにもあられもない姿のものばかりで、断然人様にお目につけられないものなのですから、どうぞその気持をお扱み取りの上いづれ体がすっかり恢復した上撮りますまで御ゆるし下さいませ。(川合伊都子)

告知板

○先月号、「ズロースマニアの手記」の末尾(一五七頁)にて萩千恵子嬢作成のモデル嬢着用の下着類を御希望の方々へ分譲する旨書き添えましたが、其の後春日ルミ嬢も着用の下着類を提供して下さいましたので、御所望の方は、返券同封の上編集部宛、御希望の種類を御記入の上御照会下さい。詳細について御返事いたします。

★代理部月報★

◎悦虐遊戯三態◎

キヤビネ判 三枚 一組三百円

モデル

(杉芙美嬢、坂口利子嬢)

アクタイプ、パシイブ共オール、ヌード

一、後手に縛られ、両膝を括られた哀れなけいけいが棒でお尻を叩かれて追い立てられる

二、馬にされた奴隷が、お尻を叩かれて無理矢理にはわされる

三、首輪をはめられたワン公が、ハイヒールでお尻を蹴られて歩かせられる

◎水辺水責め三態◎

キヤビネ判 三枚 一組三百円

萩千恵子嬢の水辺での緊縛の中で後手高小手に縛り上げたまま、水中に浸した所謂、水責めのフオト三態をお目にかけます

◎三人のモデルの得意のポーズ◎

キヤビネ判 三枚 一組 三百円

代表的な三人の肉体美モデルの競艶三態

◎伊吹真佐子嬢悦虐集◎

手札型 五枚一組 二百円
豊麗な肉体に盛り上げたマゾヒス

チツクな雰囲気悦虐の姿態の中から特に強烈なものを選んだ

◎杉芙美嬢股間縛り三態◎

キヤビネ判 三枚 一組 特価三百円

御注文により焼増した昨年十二月号の口絵に掲載した杉嬢の柔肌に喰い込む緊縛感

◎萩千恵子嬢股間縛り三態◎

キヤビネ判 三枚 一組 三百円

乳房を出すのさえ恥しがする淑やかなお嬢さん、千恵子嬢を特に観念させた股しぼり

◎伊吹真佐子嬢股間縛り三態◎

キヤビネ判 三枚 一組 三百円

口絵とは別に分譲品として撮影した他のモデル嬢とは一風変わった素晴らしい作品

▼切腹写真 立腹▼

微粒面厚手印画紙焼付

キヤビネ判 三枚 一組 三百円

光沢面薄手印画紙焼付

手札型 三枚 一組 二百円

○浣腸責め、第三集、出来ました

○御注文は、確実と迅速と鮮明、豊富を誇る曙書房代理部へ

○代理部扱品の詳細説明はKK通信第二十三号にあります

編集手帖

これから毎月号、女優の縛られると思われる映画を紹介することと致します。そして全国の読者の皆様のうちに御覧になった方は、その場面についての御批評をお寄せ下さい。この方法によれば同好の方々の参考にもなり又、見落した方は二番館以下での再映を見る機会もあるかと思ひますが、如何でしょうか。

題名 (製作会社) 女優名
テオドラ (仏伊合作作品) G・M・カナル
タンガニイカ (アメリカ・ユニバーサル) R ローマン

★十月特大号、十一月特大号の大好評に力を得て、引続いて勇躍努力を重ねて完成した十二月特大号をお届けします。

★何れも力作揃いの盛沢山、奇々ならではの記事が顔を並べました。きつと読者諸氏も堪能されることと存じます。お座なりのものを排して、繰り返えし読んでも味のあるもの、保存しておく意欲の湧くものに狙いをつけました。一見して駄菓子子の甘さはなくとも、よく読めばスルメの味を持したいものです。

★本号を以て第八巻も終りをつけます。本年も一回の遅休刊欠号もなく、十二冊

炎と剣 (アメリカ・フォックス)

天狗出現 (東宝) 岡田茉莉子

快傑まぼろし頭巾 (東映) 千原しのぶ

たん子たん吉珍道中 (新東宝) 築紫あけみ

幽霊大名 (大映) 井川邦子

(白石稔)

【読者係より】ぎりぎり一杯、印刷に間にあう限りつとめて新しい通信を掲載しましたが、其の後も印刷に間にあわなかったものが沢山ありますので次号誌上に廻すことにします。毎月五日頃まででしたらその月に発売の号に間にあいます。(但し通信に限り)

の旧号を書棚に並べることが出来ますのも、偏見に皆さまの御後援の賜です。類誌が惨めな野郎死をしている際だけに一カ年を顧つてみて全く感慨無量です。

★今や、編集部の机上には、レギュラーの傑作は勿論のこと、全国の有志の方々の御投稿、懸賞作品等が山積しました。これを如何に御膳立して皆さまのお目にかけるか、私達は、前途の大きな希望に胸をふくらませて、楽しい夢をやがてめぐりくる第九巻の誌上と皆さまの上に描いておきます。

★読者に直結した雑誌として異彩のある本誌を益々成果あらしめるため、何卒御協力と御鞭撻を御願います次第です。

新人挿絵画家を求む

雑誌の挿絵につき自信

のある方、若しくは野心を持たれる方を求めます。作品、略歴、お送り下さい。見込みのある方々を誌上で紹介したいと思ひます。口絵に新人の頁を設ける考えです。

最寄有名書店へ御予約下さい

直接購読の御申込みをされない方々で、毎月継続的に御購読なさる愛読者の方は是非、最寄りの書店へ御予約下さい。本誌は毎月定日発売を厳守しておりますから、迅速確実にお手元へ届きます。

御願ひ

理由の如何を問わず直接発行所や編集部を御訪問下さるこ

とは固くお断りいたします。用件は書面にてお願いいたします。編集者或は編集部員に面談要求の方は、必ず事前に書面にて打合せ諒解の上、御訪問下さい。

編集方針について

読者の皆さまの御意向を最も迅速に誌面に反映させ、読者がつくる雑誌という本誌の真価を発揮させるため、皆さまの真面目な編集内容、編集方針一般に亘つての御意見を求めます。編集者は誌上又は直接の回答を行う外、本誌の編集に關して、皆さまの御意向を活かしてゆきたいと思ひます。

原稿募集

一、創作、告白を問わず生きた人間像を描いたものであれば、如何なる内容形式にても可、世の所謂、アブノーマルと称するものも右の主旨を体したものであれば大いに歓迎する。

一、必ず未発表の作品に限る

一、締切日は特に定めませんが、優秀作は即刻発表掲載する

一、枚数は三十枚迄、但し内容によつては五十枚迄可。

一、投稿作品の返却の求めに

は応じられないが、努めて採否、批評等の連絡は出すようにする。

一、誌上の匿名は可、筆者の個人的秘密については厳守を誓う。

一、掲載篇は作品に応じ相当の謝礼を差し上げる外、優秀作者は本誌の寄稿家として優遇する。

一、特異な題材を以つて立つ新人の野心ある作品に期待するや切。

◎直接購読者募集◎

一月分一冊(送料共) 百四十円
三月分三冊(送料共) 四百二十円
半年分六冊(送料共) 八百四十円
一年分三冊(送料共) 千六百八十円

毎月売切れにて御迷惑をかけておりますが、御買洩れのないよう是非直接購読を御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可
昭和二十六年一月廿四日 日本国有鉄道特別扱雑誌承認

奇譚クラブ

第八卷第十二号 毎月一回一日発行 定価百四十円

昭和二十九年十一月二十五日印刷
昭和二十九年十二月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷人 上田 庄之助
発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。